
地味な青年の異世界転生記

鵜 一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味な青年の異世界転生記

【Nコード】

N8322Q

【作者名】

鵜 一文字

【あらすじ】

子供のころから一緒に過ごしてきた幼馴染を真面目に一途に想っていた主人公は大学生の時あっさりと振られてしまう。失恋から立ち直り、新しい恋を見つけたその年のクリスマスに捨てられた筈の幼馴染に心中させられてしまった。

次に彼が気がついたとき、ファンタジーな異世界で子供になっていた……そこそ役立つ特殊能力付きで。

特に目的のない青年が異世界で頑張るお話です。

<http://ncode.syosetu.com/n6474s/> 閑話

『フェザー文庫』（発行：林檎プロモーション）で書籍化します。
今後ともよろしく願います。

ブログ 転生

大学四年のクリスマス、俺は幼馴染に刺殺された。

「ごめん、一緒に死んで！！！」

というのが相手の言い分だ。

随分ふざけた話である。彼女の主観的にはどうか知らないが、客観的に考えれば裏切られて捨てられたのは自分の方なのに。

刺された胸から血が流れて徐々に服が赤色に染まっていき、全身から少しずつ力が抜けていく。

真冬の駅前でいきなり起こった惨劇に一瞬辺りが静まり返る。一瞬後それを見ていた人達から悲鳴が上がった。

子供の頃からずっと一緒だった。

中学生のときに異性としてみるように。

高校生のときに告白して恋人に。

大学生のときには結婚を見据えて努力した。

そして、二年前の今日。彼女は俺以外の男とクリスマスを過ごしていた。

二年生の夏に、好きな人ができたからと捨てられたからだ。相手は俺の親友だった。

わけがわからなかった。

急にこんなことになるまでは一切そんな気配もなく、お互いがお互いのことを思い合っていると思っていたからだ。

俺は鈍かったのだろうか。

「嘘だといってくれ！」

「俺に悪いところがあつたな直すから！」

「考え直してくれ！何かの間違いだろ！」

みつともなく泣いてすがりついたように思う。あまり思い出したくはないが。彼女はそんな俺を蔑むように見て、

「さよなら」

と、一言で去っていった。

大学では自分が悪いことになっていた。特に否定もしなかった。長年の友人も半身のように生きてきた彼女も失い、目の前で恋人となった二人の仲睦まじさを見せつけられ、後悔と絶望という名の地獄の日々が始まる。

おかげで溜息と自嘲と苦笑がクセになった。

夜眠ると悪夢にうなされ、目が覚めるとそれが現実だと思い知らされ、情性で大学に通っているような灰色の世界で生きていた俺に救いをくれたのはサークルの後輩だった。

「酷いです。誰も先輩の話も聞かないで一方的に……」

「まあしゃあないさ。きつと俺が悪かったんだ」

「もう、先輩までそんな」

背が低くてどちらかといえば可愛らしいその後輩は幼馴染ほど美人でもなく、基本的には物静かで無口で会話も弾まなかったが、悪い噂が流れたときもずっと前と変わらずに味方でいてくれた。

誰かが側にいるということがどれほど安心できるのかを初めて教えられた気がする。孤独は辛いもんだ。

照れてはにかむ彼女。

敬語はいらなくていいっても中々敬語が取れずによく噛むどじな彼女。

他の人間が自分に近づかなくなっても普段通りに話しかけてくれた彼女。

ゲーム好きでゲームのことになるとそのときだけは無駄に熱く語っていた彼女。

そんな後輩に一年かけて癒され、どんどん惹かれて好きになって告白し、交際するようになった。

幼馴染は元親友と別れていたがもうどうでもよかった。ただただ、自分の人を見る目の無さに自嘲し、落ち込んだだけである。

遠回しに復縁を迫られた気もする。たちの悪い冗談と思って話も聞かずに無視したが。

過去の出来事がぐるぐると回る。

走馬灯って本当だったのか…と、他人事のように思う。

長く綺麗な黒髪、すらつとしていて顔立ちも整っていて目の前のかつては愛した幼馴染は嫌悪感しかわかないが今でも美人に見える。

しかし、かつてはいたずらっぽく光を放っていた瞳は焦点が合っていない、何かに追い詰められた表情でどこを見ているのかもわからない。

彼女に何があったのだろう。今となっては知ることできない。別に知りたくもなかった。

俺は冷たい人間だろうか？

振られてそれでも忘れられず未練たらしく想い続けた一年で摩耗したのかもしれない。

「ごめん…ごめんなさい…ごめんなさい…でもあいつにだけは…！！ごめんなさい…私もすぐに逝くから…！」

意味のわからないことをいいながら幼馴染が刺したナイフを捻ってから引き抜く。

助からないと自分でも分かる。痛みも限界をすぎると感じなくなるのか、感覚はなかった。それとも、痛みを感じ過ぎて狂ってしま

ったのか。

意識を失い、目を閉じる前に最後に見たのは自分の喉にナイフを突き刺して俺にもたれ掛かってくる幼馴染だった。

だが、俺が最期に考えたのは幼なじみのことではなく――

――大事な家族や優しい後輩がどうか幸せでいるように。

そして……俺は困惑することになる。

確実に死んだはずだったのにと。

輪廻転生。信じてはいなかったが本当にあるらしい。

魂は輪廻し、生まれ変わるもののようなのだ。まさか自分で体験するとは。どうせなら記憶も無くなってくれていればよかったが、神様というのはどうにも意地が悪いらしい。

気がついたとき、俺はケイト・アルティアという名のとある辺境の村長の三男になっていた。記憶を取り戻した切っ掛けは走ってこけて頭を打った衝撃のようだ。

神様には手抜きせず、もうちょっとしっかり記憶を消してほしかったと心底思う。

「まさかこんなことになるとは。俺にどうしろと」

こうして、前世の記憶を思い出した俺は、過去と現在の記憶の混在に頭を文字通りの意味で物理的にも精神的にも痛めつつ、家に戻って姿見を見ながら左手でくすんだ小麦色の髪の手をわしゃわしゃと弄り、三歳児らしくないため息をつくのだった。

第一話 現状把握

様子がおかしい俺を訝しげに見る両親や兄弟達に愛想笑いで誤魔化しつつも、考えても仕方ないとぐっすり一晩寝た所、混乱は収まったようだ。

「ゆ、夢じゃなかったか……」

六畳ほどのベッドと小さな机と映りの悪い姿見だけが置かれている自分用の部屋で目が覚めた俺は改めて不条理な現実を認識していた。

「んゝっ！空気は前より美味しいな」

考えても解決しないと気分を切り替えて体をぐつと伸ばして窓を開ける。都会より冷たい田舎の風が部屋の中に吹き込んだ。

「俺の名前はケイト・アルティアか。クルト村の村長の三男。三歳。瞳が青いけどヨーロッパか？」

古い姿見を見ながら考える。

両親や兄姉と言葉は通じた。俺は外国語は勿論話せない。元々の身体が話せたという可能性もあるがどうだろう。一応元の身体の情報俺にもあるようではある。

「三歳じゃ記憶に知識がなさすぎて判断できないか」

そうして、悩みながらわしゃわしゃと左手でくすんだ小麦色の頭をかきベッドに座っていると、ノックもなしにがちゃっ！と扉が開けて満面の笑みを浮かべた自分と同じ髪色の少女が部屋の中へと入ってきた。

「おっはよー！！！！……って珍しいわね。ケイトが起きてるなんて」

「おはよう。エリー姉さん。早くに目がさめちゃったんだ」

記憶の中から名前を思い出し、頭を下げる。満開のひまわりのような彼女の笑顔に釣られてしまったのか笑顔は自然に出すことができた。

記憶の中の自分は毎朝彼女に起こしてもらっていたようだ。

「なんだかそれも寂しいわねー。ほっぺぎゅーできないじゃない。ま、いつか。兄貴達起こしてくるねっ！」
「いつてらっしい」

ぶんぶんと大きく手を振って俺の部屋から去っていった活力が溢れる少女は4歳上の姉。

特別美人というわけではないが、他人を巻き込むくらいの元気が魅力的な人だ。後7、8年してもあの性格だったらさぞかしもてるに違いない。

前世では姉がいなかったので新鮮だが、精神年齢的には年上なのでなんだかむずがゆい。今の自分には他にも二人の兄がいる。

長男のトマスは16歳。がっちりとした青年で俺の記憶では真面目で融通の利かない怖いお兄さんといった風を感じている。

次期村長として期待に応えようと学んでいるようだ。必死に背伸びしてるようで微笑ましい。今度本を分けてもらおう。

次男のカイルは10歳。姉のように底抜けに明るくて身軽そうなやんちゃな少年だ。

手伝いは真面目にやるが、それ以外はいたずら三昧でよく両親にしかられている。

自分にとってはよく遊んでくれる兄といった感じが。正義感が強く、弱いものいじめは大嫌い。子供たちの人望は厚い。

兄弟は二人とも自分と同じ髪の色で瞳の色も同じ。自分の将来の姿はこんな感じなんだろう。

記憶にある限り兄弟仲はいいと思う。俺は仲良くできるのか不安ではあるけど、仲良くしたい。

「うちそうさまでした」

ばさばさの小さいパンとスープだけの朝食を終えて手を合わせる。ちなみに食事前の挨拶は普通に頂きますだった。兄弟だけでなく両親も一緒だ。宗教はないんだろうか。

両親を見てみると父親は上の兄をおっさんにした感じが。

なんとなくヨーロッパ風頑固親父という言葉が思い浮かんだ。ちなみに親馬鹿である。主に姉に対して。

母親は姉と似ている。元気と言うよりおっとりとして優しそうな雰囲気…だが、俺は知っている。この家で一番恐ろしい存在だと。

食後の挨拶を済ませると父親は兄二人に今日の仕事を言い渡し、外へと出て行った。畑に行くのだろう。

貧しいとは言わないがそこまで裕福でもないこの村では村長も何もせずに喰えるわけではない。農具は……青銅。

「機械どころか鉄器も少ないか」

俺は昨日の時点ではヨーロッパと考えていた。が、どうにも怪しい。

食器は木製、農具は青銅。記憶の知識だと鉄は本当に少ない。現代でないのは間違いない。なんせ領主なんてものがあるらしい。

家から出て村をよく見る。

東には豊かな森が広がっており、北には村に実りをもたらしてくれている小さな川が流れている。

川は東から西に流れており、東の森をぬけると丘になっている。住人たちのすむ家は村長の家を中心にそこそこ密集して建てられ、柵で……特に森の方は厳重に柵が張り巡らされている。

平地の多い西側の柵の外に畑は作られているようだ。柵の外にもぼつぽつと民家が見えるが倉庫のような役割のものも多いのか、ぼろぼろの家が多かった。

「牧歌的…というべきか。ど田舎というべきか…」

気持ちのいい春の暖かな風を感じながら、目を閉じる。

問題は山積みだ。わからないことがたくさんある。安心して生きるには情報が足りなすぎる。

ここはどこでどんな時代なのか。

文化と風土はどうなのか。

戦争、病気などの危険はないのか。

そしてそれよりなにより、

「暇だ」

娯楽はないのだろうか。現代人としては非常に辛いところである。元々多趣味というわけでもないが、大学時代は勉強にサークルに

バイトと暇は少なかった。

「目的もないしなあ。静かに生きるのもいいのかね……」

現代ではない以上、日本に留学して恋人に謝る……ということも望みは薄い。絶望的だ。

後輩に二度と会えないと思うと胸が張り裂けそうなくらい痛かった。

手に入れた幸せはさらさらと零れていく……。どうすれば掴んで離さずにいられるのだろう。ただ会いたい……。だがそれもどうしようもないことだ。

自分はもうここで生きていくしかないのだから。

「……がんばろう」

好きな人を失ったのは二度目だ。

同じように落ち込んでうじうじしてたら立ち直らせてくれた後輩に申し訳が立たないし胸を張って会えない。

前と違って楽しかった思い出はそのままの形であるのだから。

「情けないことはいってられんな」

わしゃわしゃと昔より遥かに小さくなった手でくすんだ小麦色の頭を少し掻いて、よしっと気合を入れるとぐっと拳を握り締め現状

をさらに把握するべく家の中に戻ることにした。

第二話 方針決定？

この村に来てから2年が過ぎ、5歳になった。

俺は子供らしくない子供、と村中で呼ばれるようになってしまっていた。

難しい本は読むわ、質問しまくったりしてたのである意味仕方ないかもしれない。

家族も友人がいなさそうなことを心配しているようで本当に申し訳なく思う。

まあ、友人はいないわけだが……しかし、同じくらいの歳の子供と遊ぶのもどうなんだろう。

姉が強引に腕を引っ張っていく時くらいしか子供同士で遊ぶことはなかった。

姉の友人たちとは仲がいいのでよしとしておいて欲しい。

彼女たちには前世の色々な遊びを提供しているので可愛がられている。

遊びの楽しさはどんな世界でも、子供にとっては共通言語みたいなものなのかもしれない。

「外国と思ったら異世界だもんな」

この2年でわかったことはこれだ。

行商人を捕まえて話を聞いたり、その護衛の冒険者から武勇譚（レベルが低かったのでまゆつばだった）を聞いたり、領主が税の徴収で派遣してくる役人などに面倒そうな顔をされながらも聞いた話を総合した上での判断だ。

曰く、冒険者ギルドがあり様々な依頼をこなしている。

曰く、魔法がある。魔法は魔力があるものだけが使える。

曰く、村から三日ほどのところに領主が住む城塞都市があり、そこにはダンジョンがある。

曰く、異種族がいる。

曰く、この世界には神やドラゴンがいる。

無茶苦茶だよな。ほんと。

そして他にも頭を悩ませられるモノが。

「これは、皆使えるのかなあ。言わないほうがいいか」

何故か意識すると他人や物のステータスが見れるようになっていた。その能力に気づいたきっかけはなんのことはない。

こちらの世界に来て何日目かの朝、挨拶をしてきた村の人の名前を思い出そうと必死に顔を見ていたら、浮かんできたのだ。はじめは目の錯覚か、自分の頭がおかしくなったのかとおもったがそうでもないらしい。

初めは使い方がさっぱりわからなかったが、どうやら見たいとか知りたいとか意識しつつ対象を見ると、数字や名前が視覚的に見えるらしい。

条件はいろいろあって名称不明のものは????と表示されたりする。

何の役に立つのか、何故そんなものがあるのかは本当に謎ではある……が転生(?)したこと恩恵なのかもしれない。

それはさておき、未来の事を考える。

今後どう生きていくのか考えなければならぬ。どんなリスクがあるか予測できない以上ある程度の方針は必要である。

家は兄が継ぐだろうし、次男はまあなんとかするんだろう。姉の友人にも肉食獣のように狙っている子がいる。

俺はというと村長の息子とはいえ三男。優良物件ではないし村で友人もいなければ作る予定もあんまりない。

土地や畑は無限ではない。こんな状態では将来は下手をすると邪魔ものだ。

それにこの新しい世界を知りたいという好奇心を覚えていた。

前世では目的のために堅実に生きようとしていた。けれども、今はその目的もない。

ならば拾ったような二度目の人生、大事にしてくれる優しい両親には本当に申し訳ないが後悔のないように自由に生きたいのである。冒険、魔法、ドラゴン……そんな話を聞くとわくわくする。いい歳なのに恥ずかしいが。

そういうわけで、友人を作るよりも将来使いそうな技能を今は鍛えている。

「おう！来たか。いくぞケイト！」

「よろしくお願いします」

「あつはつは、ほんとガキらしくないな。手伝い頼むぞ」

ちよこんと頭を下げる俺を見て豪快に大声で笑う熊のような髭もじやの大男は猟師のガイさん。

今は彼に生きるために必要なことを教わっていた。

一年前、村に十数体ほどのゴブリンの襲撃があつた。ゴブリンは小さい人のような醜い怪物だ。

慌てる村人を父親である村長は手早くまとめ、戦える人で迎撃した。そのとき活躍したのがこの人だ。

村人の平均が大人でも2〜3レベルの中、この人はなんと17レベル。村の中で二番目にレベルが高い。

比較対象として、行商人の護衛をしていた冒険者が7レベルだったことを考えるとかなりの実力者な気がする。

なんでも昔、若い頃はこの村の薬師の人と冒険者をしていたらしい。

そんなこともあつて村にいない時期が長かったせいもまだ独身。同じようにゴブリン相手に活躍した薬師の人は女性からもてるようになったのに、全くもてないのはやはりむさいからだろうか。

本人はとにかく陽気で豪快であり気にしている様子ではないが。

俺はこの人から二日に一度、森での狩りや弓の使い方や体術、罠の張り方、野営の仕方を手伝いながら教わって俺はかわりに、

「あつちにおっきいイノシシがいるよ。距離は大分あるけど」

「……お前の目はどうなつてんだ？」

と、苦虫を嚙んだ様な顔をしているガイさんの一日の仕事が早く終わるように協力していた。

木とか草の障害物があつてもステータスは見えるらしい。

範囲は100mが限界だが。動植物で切替もできるので非常に便利と思えるようになっていた。

こうして、あまつた時間で技術を教えてもらう。

弓は体が小さいので子供用に小さい弓を作ってもらっている。

色々と練習して家に帰って姿見をみると、スキルが少しずつ上がっているのが俺の最近の楽しみだ。

ちなみに自分のステータスは鏡がないと見れない。後、比較対象が少なすぎて数値の意味はまだわからない。

レベルと違って個別のスキルは使っただけ上がっていく。レベルは上げることが難しいがスキルは今の自分でもあげることができる。未来に向けて着々と準備出来ているようでちょっと嬉しい。

「あーそうだ。お前に頼みたいことがあんだわ」

猪狩りも終わり、それを解体する隣で黙々と兎を捕まえるための罠を作成していた俺にガイさんは声をかけた。珍しく齒切れが悪い。

「僕に出来ることなら」

にっと子供っぽい笑顔を意識して、ガイさんに振り向く。

「メリーの所の子供は知ってるか？」

「確か……クルスだっけ？」

メリーさんというのは村のはずれの方に住んでいる美人な未亡人だ。

旦那さんは二年前に病気で亡くなっている。子供の方は村でもあまりみかけたことがない。

自分が子供が集まる場所にいていないから知らないだけかもしれないけれど。

ガイさんは丸太のように太い腕を組んで続ける。

「そうだ。どうも父親が亡くなってから……ちょっと心配だな。生活が苦しいのもあるんだろうが……。様子を見てやってほしいんだ。同じ歳だしな。」

「うーん。気をつけてみる。でもなんでガイさんがそんなこと知ってるの？」

メリーさんとガイさんはあんまり接点がなさそうに思えるのだ。住んでいる場所も離れているし。

「ん！ああ。そのなんだ。俺とあいつとその旦那、薬師のジンは幼なじみだからな。気になって当たり前だろう。決して外にた、他意はないぞ！」

少し慌てながら説明してくれた。まあ、この人は気のいい人なのでなんだかなだ理由を付けて様子を見に入ってるんだろう。

関係ないが幼馴染と聞くだけで鳥肌がたった。もう主観的に二年も経つの……。

「でもメリーさんって25歳じゃなかったっけ」

「俺も25だ」

どう鼻屑目に見てもおっさんな髭もじやの大男が真顔でいった。

世の中は不思議でいっぱいである。

その日の夜、少しだけもらって持ち帰った肉はもつ鍋にしてみんなで食べた。

育ちざかりの兄妹達が食べまくって自分はあまり食べられないけど、みんなが喜んでるからよしとしておこう。

第三話 出会い

翌日、俺は悩んでいた。昨日の話だ。

お世話になってるガイさんの頼みだし、なんとか叶えたいががいくつか不審な点が残る。

そもそも他に友人はいないのか……子供同士の友達付き合いなど、ガイさんが知っているわけないだろう。もしそうだった場合、彼余計な思い過ごしではないだろうか。

様子を見るのも他に友人がいるならその子に聞いてみればいい話である。

あの人子供とかできたら親馬鹿になりそうだから余計な心配って可能性もある。

まあもしもないとするならば、ガイさんが間違いなく友達がいないと判断するような状態なのだろうか。父親が死んでいるらしいしそのことでなにかあった可能性もある。

その場合俺でなんとかできるのか？って疑問が残る。

会ってから考えればいいか。

いくら自給自足の辺鄙な村とはいえ仕事は5歳ということもあり、自発的にやっているもの以外に仕事はない。

ガイさんの手伝いも二日に一回しか彼は許してくれないので（子供は遊べということらしい）時間はある……子供と仲良くするのは

苦手だが時間をかければ仲良くなれる……はず！

ほんと、子供はいつも何をしているんだろうか。遊んでるらしいってのはわかるんだが、具体的にどんなことをして過ごしているのかはわからない。

自分が子供のころはヒーローごっこをしたりままごとにつき合ったり……こっちもそんな感じなんだろうか。

こちらだと勇者ごっこ、魔王ごっこか。いるのかはわからないが。

俺自身はいつも木の棒の先に青銅のナイフを二股に加工してからくり付けた銚のようなもので魚を取ったり、釣りをしたり、村の物知りの所を訊ねたりして過ごしているということもあり、子供と接している時間はない。

自分自身もある意味子供として問題があるのではないかと思う。

もう一つ問題があった。件の相手であるクルスの顔を知らないという問題だ。

誰かクルスのことを知らないかと姉に聞いてみたが、顔が広いはずの快活な姉は知らなかった。

子供たちのボスだった次兄に聞いて見ても、そんな子供がいたようないなかったようなという頼りない困惑した答えしか返ってこなかった。

（まあ子供達に会ったときにでも聞いてみればいいか）

考えても答えの出ないことは考えない。

この世界に着てから身につけた技術だ。一つ頷いて一旦忘れることにした。

とはいえ何もしないと暇なので自作の釣り竿と銚と桶、その中に薪を少し入れたものを担いで川に向かう。

自分の体力ではかなり重い荷物だがこれも気持ちよく楽しむためには必要なものだ。

一石二鳥で昼ご飯も自給自足できるというのもある。川遊びは暇つぶしと訓練と食事を兼ねたい趣味だと我ながら思う。

川で魚をとる権利：入会権のようなものはこの当りの地域にはないらしく、自由にとることが出来るのは有難かった。

なんでも地域一帯税収は近くにあるダンジョンのおかげでかなりものになっているらしく、そのかわりに周辺一体の税は比較的軽目になっているらしい。

その分モンスターの被害は他所に比べると多めなのだそうだ。

とてとと川へと向かうその途中、村の広場で三人の少年にあった。珍しい。

俺が向かう時間は結構早い時間帯だ。魚は朝の方が釣りやすいからである。だから休みの日でも子供とはほとんど会わない。

帰りにはすれ違うことはあるが疲れきっているため相手をする気力もない。ということもあり、彼らのこともよく知らなかった。

三人とも自分より年上、7、8歳くらいだろうか。自分の身長からみる彼らは、かなり背が高く見えるので自分よりはるか年上のように見えてしまう。

よく考えたら10cm以上の差ってでかいよな……と思いつつ相手を観察する。

三人の容姿は細いのと太いのと普通のだ。中央にいる太い少年が三人の中で一番えらそうにしていた。きっと中心人物なんだろう。

不思議な気分で、目的も忘れてぼーっと見上げていると三人組のうち、細いのが声をかけてきた。雰囲気からどうにも胡散臭そうに見られているようである。

「おい、お前みな顔だな。誰だ！」

「僕はケイト。ケイト・アルティアだよ。よろしくね」

につこりと敵意のない笑みを浮かべて俺は自己紹介した。苗字まで出したのは、次兄の名声(?)を利用するためだ。なんだか相手は威圧的(半分は身長のせいっぽいが)だし、絡まれている面白くない。効果はあつたらしく、相手は少しだけ呻いた。

「あ、あの人の……む、むう。お前も遊ぶときは顔だせよ！」

「わかりました。っと、一つ伺いたいんですが」

頭を下げた後、一番えらそうにしている太いのに顔を向けて続ける。

「クルスって人知ってる？」

「……あいつか。暗いし小さいし汚くていつも一人で友達もいないし可哀想だから折角オレ様の部下にしてやろうと思ったのに、あいつ最近どこにもいやがらねえんだよ。だからこうして探してるんだ」

ちっ！と太い少年が舌打ちする。

これは相手を心配してるのかただ単にえらそうにしたいだけなのか……前者だと信じたいがどうなんだろうか。

「お前もオレ様の部下にならないか？おまえんとこの兄貴ももうすぐ大人だしこれからはオレ様の時代だぜ」

そういつてふんつと胸を張る。勿論遠慮したので苦笑しそうになるのを必死に抑えながら、

「魅力的だけど僕はガイさんの弟子だからね。無理だよ」

「ガイってあのゴブリンの時の…。しゃあねえな。気が変わったらいつでもいえよ」

「ありがとう」

あっさり引いてくれた彼に頭を下げ、邪気のない笑顔…多分…で三人に礼をいい、当初の目的地である川へと歩いていった。

彼らにとっても一年前のゴブリン襲撃は今でも忘れられない記憶になっているのだろう。

当時ほとんどすべての村人たちから爪弾きされていた獵師のガイさんの思わぬ大活躍は少年たちの間でも一目置くに足る出来事だったに違いない。

北の川は東から西に向けて流れ続け、下流に向うに連れて大河へ

と姿を変えていく。

このクルト村はかなり上流に位置しているらしく、小さな岩がごつごつと転がっているような場所を流れる清流といった風情である。

暇なときには棒に糸と針を付けた釣り竿に、岩の裏に住んでいるような小さな虫を餌に付けて魚を釣ったり（魚目的より主に、糸を垂らしているのが楽しいのだが）、お腹がすいたらステータス表示を活用して川の中の魚の位置を特定し、簡易な銚もどきで魚をとるのが日常であった。

野外活動のスキルは獵師のガイさんのお陰で身についているので慣れたものである。

毎日がキャンプといった感じで、元々体を動かすことが嫌いではなかった自分にとっては、退屈を紛らわすいい趣味になっていた。意味があるのかないのかわからないが地味に釣りスキルがあがるのもありがたい。これは高くなったらどうなるんだろう。

鼻歌を歌いながら何時もの釣りポイントへ移動すると、今日は先客がいた。

珍しい事続きた。

まだ夏というには早く、肌寒さが残る今の季節に子供がここに来ることは少ない。

しかし今日は黒髪、黒い瞳の華奢な……というより病的に痩せている印象の少年が、岩の上に三角座りで座って何をするでもなく川を眺めていた。

（誰だ？）

釣りという行為そのものが自分以外にしているものもいなかったのもあり、今まで泳ぐことができる季節以外でこの川に近づく子供はいなかった。

訝しげに、少年の方を見る。服装は元は白かったであろう服がくすんで汚れており、髪の毛はぼさぼさで表情が見えない。

風貌を見る限りはくる前に話を聞いた目的の相手に合致する……が、今まで会ったこともないのに今日に限って誰もこないような場所に来る。そんな偶然はあるだろうか。

「こんにちは」

挨拶というのは意思疎通を取るための素晴らしい発明品だと思う。兎にも角にも糸口を作る為にも声をかけてみる。

「……………」

相手はぴくりとも反応はしない。まるで俺なんて最初からいない風だ。

何気なくステータスを見ようとしてみて止める。

人の能力を勝手に盗み見るのは罪悪感がある。今更ではあるけど。なんだか他人のプライバシーを覗いているような気分になるのである。躊躇なく使う方が便利ではあるんだろうが、悩むところだ。

物や動物に対しては気にしないのだけど。

じっと見られていることに気づいたのか少しだけこちらにがりがりの少年が顔を向ける。

髪の間から瞳が見える。転生してから視力がよくなった事に初めて後悔した。

彼の瞳は闇を映したかのように昏かった。何も映していないように思えた。

血の気が引いていく。

アノトキノ彼女ノヨウニ……

からっ……

足元の石が転がる音がやけに大きく聞こえた。はっと少年の方を見ると興味を失ったかのように川の方を向きなおしていた。

慌てて上を向くが太陽は動いていない。自分が惚けていたのは一瞬だったらしい。

頭を少しふり、歯を食いしばって彼の近くまで歩いて腰を下し、釣り竿を用意して川に糸を垂らした。

彼の方は興味が無いのか一顧だにせず、川を眺めている。

自分勝手な考えだが、あんな目は許せなかった。

何かに絶望した目……前世の最期に見た幼馴染の目が記憶に焼き付いている。あれに似ていた。

父親を亡くしたことはそこまで辛いことだったのか……前世では自分が先に死んでしまったため、その気持ちを押し量ることはできない。

複雑で自分自身整理の付かない感情が沸き上がる。

とにかく、なんとなく彼の浮かべる目が気に入らなかった。

あの目を止めさせたかった。

だから、介入することに決めた。言われたからではなく自分の意思で。

我ながら自分勝手な理由だなあと、彼を見ながら左手で頭をわしやわしやと掻いた。

第四話 接触

とはいえ、どうすればいいのか。

釣り糸を垂らしながら悩む。声を掛けても先ほどのようにスルーされるだろうし。

さらさらと川の流れる音と風が木々を揺らす音だけが響く。

……ちやぶ……

川面が少しだけ揺れる。慌てない。魚がしっかりと食いつくのを待つ。

しばらくするとがつつ！と釣り竿が引かれる。5歳の力しかない俺の体は魚に負けそうなくらい弱いため足を岩で固定し、てこの原理を利用して魚を引き上げた。

そこそこの大きさの鮎に似た魚。釣りで釣り上げる魚としては大きい。

釣り上げられた魚の鱗が太陽の光にあてられて一瞬七色に光った。

「……………」

彼の顔が少しだけ魚に向いた。が、すぐに川に向きなおす。俺も桶に魚を入れてエサを付け直し、もう一度釣り糸を垂らす。

長い戦いになりそうだった。

急がない慌てない無理はしない。関係を作る為には時間も必要、そう心に刻みなおした。

二人とも無言のまま、ときたま魚が釣れたりしつつ時が流れて太陽が真上近くに上っていた。そろそろ昼だ。

硬いパンを1本親に貰い、後は数本の串を用意している。本来は竹串を用意したいのだが、竹がこのあたりには生えていない。代わりに燃えにくい木で串を作った。

石で円を作り、周りに魚の口から串をいれたものを刺す、燃えるものを準備して火を起こす。はじめは手間取ったものの今では慣れた手順だ。

魚を焼く準備をしたら後は待つだけだ。塩は貴重品なので森で教えてもらった唐辛子のような実の粉末を気持ち程度にかける。

この実を見つけたのはガイさんの俺へのいたずらがきつかけだったが、俺にとっては有り難い調味料だった。毒はないし。

暫くすると食欲をそそるいい匂いが辺りに立ち込めた。

パンを半分に千切り、大きめの葉っぱを用意して釣った魚の半分と一緒に乗せる。

そして、未だ川を見ている少年に渡す。

「一緒に食おうぜ。一人で食べると不味いんだ」

少年ははじめは特に反応をしめさなかったが、暫くしてく〜とお腹の音を鳴らすとこっちを少しだけ見て、小さく頷いた。

俺もそれ以上は何も言わず、隣に座って昼ご飯を食べた。

彼に対しての方便のつもりではあったが、二人で食べる昼食は一人で食べるそれよりも美味しく感じられた。ここにいるときの食事は味気ないといつもは思っていたのだが。

昼食を終えると、近くの適当な木に石を投げる。投石の訓練で、石が探すまでもなく沢山落ちているここはいい練習場所でもある。食後の運動がてら無心に石を投げる。

少年はそんな俺を川を見るのと同じように興味なさそうに眺めていた。

それから何時間が経ち、家へと帰る時間になる。荷物を整理していくが、少年が動く気配はない。

「俺帰るな。また明後日くる」

少年は再び川を眺めており、こちらに頷くこともなかった。

返事が帰ってくることは期待していなかったなので、いなけりや探せばいいと思って俺は振り返らずに川を後にした。

二日後、再び川を訪れると同じ場所に彼は座っていた。

平らな岩に三角座りで腰を下しながら興味無さ気に川を見つめている。

「おはよう」

挨拶するところを少しだけ向いてこくりと首をほんの少しだけ動かす。

そして一昨日より少しだけ近くに座ると前と同じように釣りを始めた。

今日の少年は糸の先を見つめている。無表情は変わらないが心無しか前よりも穏やかに見える。

この日も昼食を二人で食べて、帰宅した。彼は俺の後ろに距離を取って歩いていた。

その二日後も同じように過ごし、さらにその二日後。

「やってみる？」

「……………」

じーっと糸の先に目を向けている彼に釣り竿を渡す。彼はぱちくりと一度大きく瞬きし、こくりと頷いた。

ぴくっ

水面が揺れる。それと同時に少年もぴくっ地震える。
慣れない人の普通の反応をしてくれて思わず笑みが溢れた。

彼は気づいて慌てて釣り竿を振り上げるが魚はぱちゃっ針から外れて落ちた。

「……………」

何も言わずに餌の付いていない針にもう一度餌を付ける。しばらくすると、

ぴくっ

水面がもう一度揺れる。

……………ぱちゃ。

針から魚が外れて慌てたように逃げていく。もう一度餌のついていない針に餌を付けた。
今度は近くで見守る。

ぴくっ

「まだだよ。しっかり食い付いてからじゃないと」

今度は手を重ねて慌ててあげようとする手を止める。一瞬びくつと体を震わせたが、拒絶はせずにされるがままにしてくれた。

そして魚を泳がして様子を見ているとぐっ！と沈みこむような手応えを感じた。

「今だ！」

声を合図に釣竿を引き上げるとばしゃっ！と川から魚が飛び出す。

「やったな。やるじゃないか」

彼は暫く呆然としていたが、やがてこくと首を動かした。何時もより勢い良く首を動かしていた。

「もうすぐ昼だし、自分の分取ってくる」

気がつけば太陽は真上に上っており、もうすぐいつも食事にして

いる時間だ。

自分の分の魚も宣言してから数分後には銚で捕まえていた。水のなかにいる魚の位置がステータスで見ようとすれば隠れている場所が丸わかりなのは楽でいいと思う。

「……何故魚全部それにしないの？」

あつさりと魚を取ってきた俺を見てぽつりと彼がつぶやく。鈴が鳴るような響きのいい高くて綺麗な声だった。

どんな内容にしろ初めて声が聞けたことは素直に嬉しいものである。

「釣る方が楽しいから。魚との駆け引きがね。楽しくなかった？」

という俺の答えに彼は少しだけ考えるように首を傾げ、こくと頷く。

多分楽しかったという方の意味だろう。

「なら良かった。そうだ、自己紹介してなかったね。俺はケイト・アルティア。君は？」

「……クルス」

小さくぼそつと名乗った彼の何も映さない絶望の瞳の色はその時少しだけ和らいでいるように思えた。

髪がぼさぼさなので見にくいが……よく見るとがりがりだった体の方もまだ細いが病的な細さではなくなり、初日よりかなりましになっている。俺は手を取って強引に握手し、

「よろしくな」

と、大げさにぶんぶん握った手を振って嬉しさを表現した。相手が反応薄い分、少しでも明るく振る舞うつもりだった。

こうして、二日に一回の川での暇つぶしは二人で過ごすことになったのである。

それが自分も楽しみになってるあたり案外自分も寂しかったのかもしれない。相手が楽しんでいるかはわからないが……

その後日課になっている投石の練習を行った後、川を後にした。この日の帰りは会話こそなかったものの、クルスが隣を歩いていた。

少しだけ距離が縮まったような気がする。いつか彼と友人として笑って下らない話ができる日が来るのだろうか。

何故今みたいな状態になったのか自分から話してくれるまでは慌てずに頑張ろうと思った。

現状を考えるとまだまだ先は遠そうである。

第五話 友人

クルスと知り合ってからなんだかで一週間近くの時が流れた。川にいるとき以外は相変わらず獵師のガイさんのところで修行の毎日である。

少しずつ技術が身についていることが実感できるのは嬉しい。達成感を感じさせてくれるステータスを見る能力に感謝だ。お陰で飽きもこない。

「ケイト。メリーが最近クルスが昔みたいに明るく戻ってきたって喜んでたぞ。あんがとよ」

ばしばし背中を叩いて豪快に笑って喜ぶ彼に俺は振り返って向き直し、

「お礼はいいよ。ガイさんに言われたのがきつかけだけど、僕が仲良くなりたくなっただんだ」

「がはは。そりゃいい。お前も子供同士仲良くできるやつがいらないとな」

「僕に友達がいらないみたいじゃないか」
「いるのか？」

よく考えるといなかった。姉の友達はちょっと違う気がするし。

玩具みたいな……。

やばい誰も思いつかない。

「……それより今日も獲物とりにいこ？」

いないというのもなんとなく嫌なので強引に俺は話を変える。

全部お見通しといった感じで笑いをこらえてるガイさんにちょっとむっとした。

いつもの狩りが終わった後、またひとつガイさんから頼みごとを引き受けて帰るその途中、最近見慣れてきた少年が先日出会った名前も知らない三人に囲まれていた。

森から帰る途中の原っぱで、周りには家も人影も無く他に人はいない。クルスはこっちに気づいていなさそうだし、三人は俺に背中を向けているので気づいていないようだ……

クルスはいつもどおりの無表情で何を言い返すでもなくただ立っている。そんな彼に対して三人はしきりに何かを言っているようだ。近づくにつれ感情的になっている様子が解ってくる。何があったのか。

（助けるか？）

少しだけ躊躇する。確かに、助けるべき場面ではあるだろう。だが、多少強引でも仲良くしようとしてる可能性も無いではない。

その場合助けるなどといった行為はクルスにとっても良くないかもしれない。

俺以外の普通の年頃の友人を作る機会を潰すわけにはいかない。自分は明らかに普通ではない……残念な事に。

（近くまでいってから考えるか）

苦笑しつつそう思いながら気配を消して近づく。森での修行はそこそこ身についてきており、気配を消すスキルの方もかなり上がっている。簡単に気づかれないだろう。

「おい！なんかいえよ。俺様の部下にしてやるってんだ。頭下げろ！」

ばちっ！と太った少年がクルスを張り飛ばす。同年代でも小柄なクルスは簡単によろけてこけてしまった。それでも声は一つも出さない。ただ無機質な目を相手に向けているだけだ。

少年の方は見たかとはかりに勝ち誇って笑っている。

そんな光景に様子を見ようだの、長い目で見ようなどといった考えは一瞬で吹き飛んでしまう。

頭に血が上りそうなのを必死で抑えて冷静さをなんとか保つ。

長い時間一緒にいてようやく少しだけわかるようになってきたクルスの表情が今では結構気に入っていた。それを……大事なものを馬鹿にされたような気分だ。

大人げ無いのはわかってはいるんだが腹が立つ。

「クルス。大丈夫か？」

そのまま三人の横を通り過ぎて、クルスの手を取って引き起こす。彼の手は少しだけ震えていて、そのことがまた衝撃を与える。

（表情が出にくいだけで何も感じないわけじゃないんだ。そりゃ怖いよな。自分より大きいのが三人もいたら）

驚きで完全に冷静さを取り戻すと頭を左手でわしやわしやと？いて一つ溜息を吐き、少しだけ自分より背が低いクルスの頭を撫でる。

「良く頑張ったな。あんな奴に頭下げる必要ないよ。今日のところは後、任せとけ」

「……ケイト？」

俺はにいつと悪ガキのような人を食った泥臭い笑顔を浮かべる。やることは一つだ。ここで引くという選択肢はない。理不尽に對して一度引いてしまえば何度も引かなくてはいけなくなってしまう。そんな姿をクルスに見せるわけにもいかない。

「友達が殴られたんだからやりかえしておかないと」

「……友達」

「おい、邪魔すんなケイト！」

さりげなく友達であると主張しておく。言葉にして伝えといたほうがいいこともあるだろう。

黙っていても伝わるなんてことを俺は余り信じてはいない。

太った少年が今度は俺に対して怒鳴りつけてくる。身長は俺よりも高いため、見上げるような形になるので威圧感は多少感じるものの、心は静まっただけで恐れることはなかった。

「クルスは俺の友人だからな。邪魔するよ。大体年下相手に三対一で脅しつけるなんて恥ずかしいと思わないのか？」

「お、お前、前と全然しゃべりかた……」

下から睨みつける俺に少しだけ相手が怯む。

前は猫を被っていたので違いに戸惑っているようだ。

「男なら一対一で掛かってこい。俺に勝てたら子分でもなんでもな
ってやる」

「や、やるってのか！」

後の二人は……動く様子はないな。予定通り。

格好つけすぎて身悶えしそうなほど恥ずかしいが上場の結果というべきだ。

「一人で来るのか。一対三でもいいぞ」

「ば、馬鹿にしゃがって。お前なんか俺だけで十分だ！」

ありがたい。内心ほっとしつつ、相手のリーダーである太った少年と距離をあける。

これで残る二人が出てくることはあるまい。喧嘩をした経験はないではないが体格が遥かに違う相手との一対三はあまりにも分が悪い。

前世で喧嘩をした原因の殆どは幼馴染を好きになった男に決闘を……何度も。

煮え切らなかった当時の自分も悪かったんだが……。

（ああ、やなこと思い出したなあ）

思い出すと鬱々としてくる。が、今は今だ。気を取り直して構える。

「わあああああああ！！！！」

大声で喚き声を上げながら手を振り回して突っ込んでくる。気の弱い相手ならそれに吞まれてやられてしまうだろう。しかし、冷静

ならば話は違う。横に飛んで簡単にかわす。

「そこにとまれええ！」

「やだね」

力では負けている。当然だ。体格が違いすぎる。だが、他の能力は全て俺が勝っている。一年くらいの短い期間で無理もしてないとはいえ、鍛え方が違う。体術スキルもある。

戦ったりする場合にはこの特殊能力は便利だ。相手の手管もスキルによってわかるようになってくるかもしれない。

スキルや能力がすべてとは思わないがここでどの程度出来るのか少し試せるのは有り難い。ある意味感謝だ。

「く、ふう…ちょこまかと!!」

何度も何度も相手の突進をかわし、息を荒らげて怒り狂う相手を無言で睨みつける。

こちらには余裕はたっぷりある。そろそろか。

「くそおおおおおおお！」

また、やけくそで走ってくる。これもかわす……片足を残して。どしゃっ!!!!!!!!

「ぎゃっ!!」

同じ動きばかりしていて急に足を打されることが予測できなかったのだらう。

簡単に足を引っ掛けて太い少年は前のめりにこけた。呻きながらも起き上がるうとする少年の尻を容赦なく思い切り蹴飛ばし、立えないように後ろから背中を踏みつけ髪の毛を掴んで後ろから頭をあげた。

「う、ぐ、うううう」

「まだやるか？」

「ううう、うわああああああん!!」

痛みに耐えかねたか大声で泣きはじめた。子供だししょうがないのか。

や、やりすぎたか？と少しだけ困惑する。が、表には出さない。

「俺の勝ちだな……お前たちは？」

「い、いや、やらないやらない!!」

二人は太い少年を助け起こすと三人揃って逃げていった。なんだかんだで、見捨てられないあたり、あの少年も人望があるのかもしない。案外悪い奴じゃないのかね。まあまた会うこともあるだらう。

「あー気を付けて帰れよーっと、大丈夫か？」
「……」

立ち上がっていたクルスはこくりと頷く。まだ少しだけ指先が震えている。

「よかった」

ほっとして笑う。

「……」

「でも、次は自分でなんとかできるようにならなきゃな」

依存するような関係になっではお互いのためにならなさそうだ。そのためにも自分の身は自分で守り、自立してもらわないと困る。難しい言葉では理解できなそうなので必死に言葉を考える。

「今回は俺がやった。今度俺が困ったらクルスが助けてくれ。友達
と思ってくれるなら」

「……友達」

彼は真剣な顔で頷いた。表情があまり変わらないが目に力が籠っていたしそんな気がした。もう彼は震えてはいなかった。

「それじゃまた明日」

「……また明日」

大きくクルスに向かって手を振ると相手もその場で小さく手を振ってくれた。

そういえばクルスの家の方向と歩いている方向が違うがどこにくつもりなんだろうか。ふと疑問に思ってから後ろを振り向くと、クルスはまだその場所でこちらを見送ってくれていた。

ゆっくりと一歩ずつ。徐々に関係が構築できている気がしていた。結局はこのとき俺には彼の気持ちはよくわかってなかったんだろう。

そのことを理解するにはまだ暫くの時を必要とした。

とにかくこの日ようやく俺はクルスと友人になることができた。

第六話 異常

次の日をいつもどおり川で過ごす。

昨日はあんなことがあったおかげで様子はどうかと不安に思っていたが、クルスに劇的に変わった様子は見受けられない。微妙に釣りをするとき座っている距離が近くなっている程度である。

ちなみに釣り竿は自分用とクルス用を作っている。はじめは彼も餌になる虫を自分で触ることに、気持ち悪いから躊躇していたが今では普通に餌をつけれるようになっていた。

流石に毎回釣りだけではどうかと思っていたので気になっていたことを聞いてみた。

「クルスは文字の読み書きは出来るか？」

「……」

首を横に振る。この村の識字率はそれほど高くない。

ましてや5歳らしいクルスだと知らなくても当然だろう。

この世界の本はなぜか日本語で書かれているため、俺自身は全く困っていない。

大学レベルの知識は一応あるわけだし。少なくとも家にある本では困らなかった。

「……覚える気はあるか？」

と聞いてみると少しだけ考えて、

「……」

少し考えて首を縦に振った。こうして彼の基本的な教育も二人の時間の日課になった。

クルスはあまり覚えは良くなかったが熱心に文字や簡単な計算を学んでいた。

その翌日、俺はガイさんから頼まれて村の薬師の所へと訪れていた。薬師は前世でいうところの診療所の役目も担っている。村の健康管理は殆ど彼の手で行われている。

ガイさんによると気難しいが勉強家で大量の本を持っており、薬学に関してはかなり詳しいらしい。冒険者のときは魔力がなかったせいで魔法は使えなかったらしいが、剣士兼薬師としてパーティーの要だったそうなの。

一年前のゴブリン襲撃時に一度会っているが無愛想でつつきにくそうな人だった。技術を教えてもらう人にガイさんを選んだのもその辺に事情がある。

レベルは16。比較対象が少ないので判断は難しいがやはり強いのだと思う。

ゴブリン襲撃以後、渋い感じのいい男でもあるので縁談がたくさん来たそうだがすべて断っている。村では女嫌いで有名だ。

しかし、彼が自分に何を頼もうというのか。

どんとドアをノックすると、

「はいはいー。今開けますー！」

何故か中から聞き覚えのある明るくて高い声がした。どう間違っても男の声には聴こえない。この声は……。

「どちら様ーってあら。ケイトじゃない。ジンさんに何か用？」

「いやいや、それは僕の方が聞きたいんだけど」

何故か薬師の家にはエリー姉さんがいた。

「来たか。入れ」

困惑する俺を正気に引き戻したのは奥から聴こえてきた渋い声だった。

姉は掃除の途中だったのだろう。箒を持っていて、俺を薬師の私室に案内すると掃除に戻って行った。

「よく来たな。ガイから話は聞いている」

薬師の部屋はハーブに近い薬草の臭いがシミ付いていて、悪い臭いでは無いが慣れていないと少し辛い。薬草や本は部屋にきちっと整理されており、掃除は行き届いているようだ。

部屋の主であるジンさんは錆びた茶色の髪を持った筋肉質な細身の青年で、顔には大きな傷が走っている。眼光は鋭く、自分にも他人にも厳しい。そんな印象を受ける。

「お久しぶりです。ケイトです」

「君は目がいいらしいな」

「はあ……」

ガイさんにもステータスの詳しい話はしていない。目がいいということで納得してもらっている。薬師のジンさんは立ち上がり足を引きずりながら棚まで歩いて一本の薬草を取り出した。

冒険者時代に片方の足に致命的な怪我を負ったらしい彼は、生活には問題ないものの歩くには不便な体になってしまっていた。それでも、ゴブリン相手にはまったく歯牙にもかけない強さで戦っていた記憶がある。

「これは、傷の消毒に使う薬草でな。ハクベという。消毒草というのが通称だ。次に商人が訪れたときに交換材料が売り物に使いたい

と考えている」

「なるほど在庫が足りないんですね」

なるほど。塩などの生活必需品は月に一度くらいに訪れる商人から買うか、臨時に必要なときは体力のあるガイさんが三日かかる街から仕入れているらしい。商人が来ているときに薬草を売り、代わりに何か仕入れるのだろう。

ジンさんは暫く黙って何かを考えているようだったが、

「……確かにガイの言ったとおりだな」

そう呟いた。射ぬかれるような視線をジンさんから受ける。何か変なことをいっただろうか。

「今の話を理解したか」

「何かおかしかったですか？」

「理解できるのがおかしい。とは思っている」

「……」

そうか。5歳で商売に関してなんて普通はわかるわけではない。

今まで意識してなかったが、明白におかしい。冷や汗が背中を流れた。

「村の大人たちはお前の事を天才だと言っている」

「そんなことはないと思うけど……」

これは本心だ。人並みといったところのはずだ。

物覚えも良くはない。ということは、ぼろぼろと大学生の延長のような態度をとっていたのだろうか。

「ガイは違うと言っていた。うまく言えないが…とな。俺も違うと思った」

「はあ」

「天才ではないが不自然……そう異常だ」

暫く重苦しい沈黙の時間が過ぎる。ふっと、小さく笑って彼が空気をゆるめてくれた。

「ああ、心配するな。ガイは大雑把なようで勘のいい男だ。一年付き合いのあるあいつが信用できると言っていたから俺も信用する。クルスも世話になってるようだしな」

「ありがとうございます」

頭を下げた。色々と気をつけないと変なことに巻き込まれるかもしれない。

この人もクルスのことは気にかけていたらしい。

「今後は気をつけることだ。この村ではお前の立場なら大丈夫だが

……特に他所の人間に会うときはお前の異常さは隠しておけ。出来るか？」

「はい。ご忠告ありがとうございます」

俺は神妙に頷いた。それが原因で平和な生活に厄介ごとを持ち込まれても困る。

「それでだ。話を戻すが知つての通り俺は足が悪い。この薬草の特徴を見て同じものを指定しただけ次にガイと森に入ったときに取ってきて欲しい」

「見せてもらってもいいですか？」

そういつて草を表に向けたり裏に向けたりして確認する。ステータスを見ようと意識するときちゃんとハクベと表示された。これですことは難しくないだろう。

「で、報酬だが」

「あ、子供なのでそれはちょっと……」

「仕事をすれば対価が出る。それは当然のことだ」

ジンさんは5歳の自分が相手でも子供扱いせずに、対等の姿勢で俺を扱っている。

第三者的にはおかしい構図だろうが、当人は真剣である。融通がきかないからなああいつは、というガイさんの笑い声が聞こえてきそう。

しばらく悩んだが、

「ではもし成功したら報酬として技術を教えてください。ガイさんにもそうしてもらってます」

「ふむ……。字は読めるのか？」

「うちにある本をすべて読める程度には」

うーむと腕を組んで暫く困惑したように彼は唸り、

「わかった。ガイも教えているならあいつと相談して決めよう。それでいいか？」

「わかりました。有難う御座います」

これでまた新しいスキルが鍛えれそうである。嬉しい限りだ。うちにはない本もたくさん読める。いい娯楽になるだろう。

「他に質問はあるか？」

交渉も成立したし忠告もした。用は済んだのだろう。

ジンさんがそう振ってきたので気になっていたことを聞くことにした。

「なんでエリー姉がいるんですか？」

「……一年前ゴブリンから助けてな。それ以来断つても追い払つても怒鳴つても二日に一度はうちに来る。半年は頑張ったがいい加減諦めた。まあ子供だからすぐに飽きるだろう」

それは姉の思惑通りなのでは……と思わなくもなかったが、黙っていた。

家事能力が料理も含めて凄い勢いで上がっていると思つたらこんな事情があつたのか……。

ちなみに家に戻ってから姉に同じ質問をしたところ。

「やだ、ケイトったら。未来の奥さんなんだから家事をするのは当たり前じゃないのー。六年後が本当に楽しみよね」

と体をくねらせて恥ずかしがっていた。

なんだか少し冷や汗が背中を流れた。9歳児と思つてエリー姉さんを侮っていると将来ジンさんはロリコンと呼ばれることになる気がする。きっと成人する頃には色々と仕込みが終わっているに違いない。

あの異様な家事スキルの上がりっぷりは……この姉、絶対に本気だ。

第七話 原因

薬師のジンさんの依頼は森の植生を壊さない程度に薬草を集めて無事達成し、基本的には獵師、薬師、休みのローテーションで過ごすことになった。

クルスと会うのは三日に一度になってしまっていたが、その分会ったときにはさらに熱心に文字や計算を習得しようとし、次に会ったときにはそのときのことは完全に習得するようになっていた。

他にもたまに話していた俺の知っている前世の物語の数々をリクエストしたりもするようになった。記憶が曖昧な話もあるので、必死に内容を思い出して話せるように練習している。

結構大変だが、喜んでもらえると思うと頑張れるのが不思議である。

クルスとの会話も今まで相槌や無言で話を促したり、気分が乗らなければまともに言葉を返す事もなかったりで、会話がまともになるようになったのは大きな進歩だろう。

それから大きな変化として、クルスがこちらの修行が終わってから迎えに来てくれるようになった。

獵師のガイさんや、薬師のジンさんの家から帰る途中お互いの家に別れる道までゆっくりと一緒に歩くのだ。

無言であつたり、会話したりまちまちだったが嫌な感じはせず、寧ろ嬉しかった。

後の出来事を考えれば我ながら単純としかいいようがないのだが。

新しいローテーションになつてから暫く時が流れたとある休日、俺達は行きなれた川へと向かわずに村の南側の山を上っていた。

幸い天気もよく、道も登れる程度作つてある上に目印も置いてあるので危険はない。

モンスターの類も南の山一帯にはいないらしく、野生の熊も今の季節は餌が多い上に道の辺りには地形的に近づかない。

子供にとつて最も危険な狼は山の逆側の麓にしかおらず、村の方面から歩いた場合には出ることはないそうだ。何年も毎日山に入っているジンさんのお墨付である。

彼に聞いたところによると昔の人が山道を作つたらしく、詳しい謂われは知られていないらしい。長老か村長なら知っているかもしれないが……聞いたことはない。今度聞いてみたい。

この道の存在とどこに続く道なのかをジンさんから聞いた俺は、初めてクルスの家に彼を呼びに行き、簡単な弁当を二人分用意して貰つてここへと誘つたのである。

「大丈夫か？」

「……」

森に慣れていて体力も高い自分に合わせるわけにもいかないので

時折休憩を取りながら山道を登っていく。

山道は時折小さな丸太などを加工した階段が作られていて、かなり手間をかけて道が作られたことを思わせられる。これがなければ自分とはともかく流石にクルスは登ることはできないに違いない。

特にアクシデントが起きることもなく、昼前には目的の場所である頂上に到着していた。

「これだよ。クルスに見せたかったのは」

「……凄い……綺麗……」

傾らかな山頂には朽ちたベンチが作られていた。流石に長年風雨に曝されたせいで腐っていて座することは出来ないが、道を作った人が作ったのだろう。

二人がけの大きなのは、誰かと見るためなのだろうか。

そんなことを思いつつ、南の景色を見ながら腰を降す。クルスも隣にゆっくりと座った。

村の南、山を超えた向こう側の遙か下には巨大な……果ても見えない湖が広がっていた。

自分たちの村の標高は湖よりかなり高めだからか湖は村を見るよりも遙かに下に見える。

湖の麓には栄えていそうな街も見えるが、ここからだとかろうじて街であることがわかる程度の風景で点景でしかない。

街はそれほど小さく見えるのに、湖は雄大に広がっている。ここまでの道を苦勞して作った人の気持ちがなんだかわかる気がした。

「あれは、エーリデイ湖。別名英雄の湖というらしいよ」

「……大きい」

「うん。この辺では一番大きいんだって。船も出てるらしい」

クルスが首を傾げる。船がわからなかったらしい。
村にはないから当たり前か。

「船っていうのは湖の上を走る乗り物だよ。馬車みたいな感じ。馬はいらないけどね」

「……そうなんだ。不思議。乗ってみたい……」

「……大人になったら乗れるさ」

本当に乗れるかはわからない。ほとんどの村人は旅行などする余裕はなく、村で人生を終えるはずだ。

俺自身は村を出る気ではいるが、クルスにはクルスの人生があるだろう。船に乗るということは特別な事情がない限り村を捨てていくということだ。

それが彼にとって幸せなことかどうかは解らない。彼自身が選ぶことだろう。

俺達は二人横に並んで目の前に広がる美しい景色を眺めながら暫くじっと見つめていた。

「そついやさ……クルスは元気になったな」
「……？」

急な話にクルスが首を傾げる。

「前は全然口聞いてくれなかったしな。最近はどうなんだ？」

冗談めかして笑う。意図があつての会話。

彼の絶望の源泉を知るための会話。するべきではないのかもしれないが。

父親の死だけでは無い気がするのだ。父親の死だけで昔の絶望しか見当たらない眼をするには彼はあまりにも幼かったからだ。3歳で人の死を理解することはそもそも難しいはず。

彼が賢くて全てを理解している可能性も考えた。だけど、彼の理解力はおそらく年齢相応、普通である。

クルスは少しだけ考えて言った。

「……今は楽しい。前は……お父さんが死んでからよくわからないのに追いかけてた」

「よくわからないの？」

「誰も聞いてくれなかった。信じてくれなかった。だから言わない」

少しだけ突き放したような言葉。

ひょっとしたら彼なりの言葉で必死に何かを伝えようとしたことがあったのかもしれない。言葉も上手く話せなかっただろう。子供の言うこととそこで終わってしまったのだろうか。

「ちゃんと聞くよ。ゆっくり話して」

「……ほんとに？」

迷ったようにこちらに聞き返す。俺はしっかりと自信を持って大きく頷いた。

暫し彼は話すかどうか揺れていたが、急かさずに待つ。やがて彼は口を開いた。

「……夢……おかしい夢。村じゃない場所で、私じゃない私が死ぬ夢。毎日見る。起きたとき詳しいことは覚えてない。だけど死んだ事ととても悲しかったことだけは心に残る」

一瞬言葉が詰まった。驚いて思わずクルスの顔を見る。その横顔には諦めに似た寂しさが見えた。

「なるほど、それは辛いね」

「……ケイトは信じる？」

「信じるよ」

頷く。父親が死んだことでそんな夢を見ているだけの可能性もな

いではない。が、自分自身がおかしな事が起こった身の上だ。此の世界では何が起こつても不思議ではない。現実にくルスの初めて会ったときの眼は……

毎日死ぬ夢を、俺と会うまでの二年間見させられては……狂わな
いほうが不思議かもしれない。

俺は一度でも二度とあなりたくないと思つてゐるのに。後悔、
悔しさ、そして裏切り……それらがすべて詰まつた死というもの。
あの瞬間。あんなもの何度も見させられたらと思うと鳥肌が立つ。

「……信じてもらえた」

クルスの表情は変わらない。でもすこしだけ嬉しそうに見え、眼
も潤んでいるように見えた。光の加減かもしれないが。

無邪気に俺を信じるクルスに少しだけ罪悪感を感じる。俺は彼で
はないから彼の話すこと全てを理解出来てゐるわけではない。

ただ、彼の抱えているものを少しくらいはわかつてあげたいと心
から思つた。

「……ケイトと会つてから初めて生きてるの楽しくなつた」

「そか。」

「釣りも覚えたり、文字も覚えたり。計算も面白い」

「それはクルスの努力が大きいなあ」

「ケイトは……たった一人の友達」

「……これからいっぱい一緒に作つていこうな」

彼はそれには返事をせず、湖の方を目を細めて見つめていた。

やれやれと苦笑して俺は左手で頭を搔いて、弁当の準備を始めた。
太陽が真上に登っていたからだ。

山を登ったことだからかなりお腹が空いており、おいしい昼ご飯になりそうだった。

第八話 弁明

山登りで過ごした有意義な休日も終わり、俺は再び訓練の日々へと戻っていた。

身体的な才能には残念ながら恵まれていないため、鍛えてはいるものの中々強さには結びついていない。年齢が年齢なので仕方ない面もあるが。

子供としての時間はまだまだある。長期的に考えていく。

それに対して勉強方面では元々大学生だったこともあり、全く困っていない。ジンさんは読書家でもあるため、薬草学関係以外の書籍を持っているので薬草学を学びつつ、国の歴史やその他の伝承、冒険記なども借りて読んでいる。

歴史書は主観的な立場で書かれていることも多いため判断が難しいが、自分のように転生したことに気づいたものが皆無ではないと思わせる内容もちらほらと見えた。

この世界で日本語が共通語なのもたまたま、奇蹟といった類ではないようである。

お陰で自分は楽ができています、思わず先達に手を合わせてしまふ。

自分がそんな共通語を樹立したような偉人になることはないだろうが、不思議な体験をしているのが自分だけではないことを知り、少しだけ同胞意識のようなものを感じることができたりもした。

平穩で充実した楽しい日々を過ごしていたある日、獵師のガイさんの狩りと修行を終え、クルスとも途中で別れた俺を一人の少年が待っていた。

見覚えはある。前にクルスに絡んでいた三人のうちの一人だ。仕返しにでも来たのだろうかともむっと顔をしかめてしまう。

「や、やあ。喧嘩をしにきたわけじゃないんだ。そんなに怒らないで欲しいんだけど……」

喧嘩をした太った少年、細い少年とは話したことがあるが、よく考えればどこにでもいそうなこの丁度二人の真ん中くらいの体格の少年とは話したことはない。

油断はしないが、とりあえずおどしている少年に話は聞くことにした。

「あーその。こないだの喧嘩のまま終わったら、ちょっとミスが…… ああ、君が喧嘩したやつね。ちょっと可哀想かなと思って。あ、もちろん叩いたのはミスが悪かったと思ってるよ？」

罰が悪そうに話す少年を観察する。

茶色の髪の毛、細めでちょっと垂れ目気味。話している感じ気は弱そうだが、人は良さそうに見える。子供にしては話し方もしっかりしているようだ。

「ふーん、それで君はマリスに言われて言い訳に来たの？」

「あ、僕はホルスね。あいつには内緒で来たんだよ。自分も悪いってわかってるけど素直じゃないから」

もつと力尽くな関係を想像してたけど、どうもそういうわけでもないらしい。

逃げるときにマリスを見捨てなかった点といい、仲が いい のだろうが。男同士の友情というならそれはそれで羨ましい気がした。

「で、ホルス君は何を話に来たの？」

「うん。クルスのことだよ」

「……ふむ？」

そういえば、彼らは俺がクルスと仲良くなる前に彼のことを探していた。

少しだけ長くなるかもしれないので、二人とも適当な場所に腰を降す。

「クルスはさ。昔はあんなじゃなかったんだ」

「らしいね」

「僕らとも……まあ覚えてないだろうけど遊んだこともあるのさ。そついう意味ではケイトよりは普通だったよ。君は昔から変だったし」

「変なつもりはなかったんだけど」

苦笑する。まあ、俺に関しては確かにそういわれてもおかしくない。

子供は子供同士集まって遊んだりすることが多い。上の子供が下の子供の面倒をみたりもする。きっと彼らは同じグループで遊んでいたのだろう。

「でもあいつ変わっちゃてさ。僕はほっておこうっていったんだけど、マイルスはほっとけなかったんだね。初めはもっと普通に誘ったりしてたんだけど、どうにもできなくてね」

「なるほどね」

「まーそれで色々やったんだけどわけがわからなくなって、最後は結局力尽くでもって感じになっちゃったんだよね。どうも無駄だったみたいけど」

ホルスは苦笑し空を見てふーと息を吐いた。不器用な友人を思っているのかもしれない。

彼の行動が良かったのか悪かったのかはわからない。ただ……

「僕も仲良くなれたのはたまたまだよ。自分がやった誘い方が偶然良かっただけだね」

これは本音……というより事実だ。本当にたまたまだった。

それに俺の知らない二年の間、俺たちが出逢った頃よりももっと酷かった可能性だってあるのだ。もし、出会った時よりひどい状態であれば上手く仲良くなれたかどうか。今となってはわからないがマイルスの強引な行動も何かしら効果があったのかもしれないし。

「ま、同じ歳みたいだしなあ。考えればこれでよかったと僕は思うよ。ただ、マイルスも二年くらい頭使って結果は良くなかったけど頑張ったんだ。僕はそれを知ってるから友達をやってるし、出来れば嫌わないでやってほしいと思うんだよね。特にクルスには」

そして彼は俺の方を向く。ホルスは少しだけ微笑んでいた。

「君がクルスの友人って聞いて僕は嬉しかったけど、マイルスは安心だつてもっと喜んでたよ。単純だからねあいつ」

「そか……。意外だよ」

「ただ君にはいつか絶対に勝つて燃えてたけど」

そういつて彼はげらげらと笑った。

「ほとぼりが冷めたら、三人でクルスに謝りに行くよ。そのときは……間に入って欲しい。頼めるかい？」

「うん。わかったよ」

「いやー、本当に助かるよ。かなり叩いたこと気にしてたからね。有難う」

やれやれと左手で頭を搔く。

子供同士なのに、どうにも良い友人関係を築いているらしい。いや、こういうのに年はあんまり関係ないということなんだろうか。

子供という偏見で関わるのを避けていた自分は、誤っていたのかもしれない。

もし、彼の話がすべて真実であるならば……だが。

「ホルス君はなんで一人で僕のところに来ようと思ったの？」

「ホルスでいいよ。友達のためにできることをしようと思ったただだよ。マイスじゃ君に頼むなんて思いつきもしないだろうから。君が間に入ってくれる方が仲直りもうまくいきそうだし。おかしいかい？」

俺はいいやと笑って首を横に振り、これから改めてよろしくと握手した。その手をホルスはまじまじと見つめる。

「簡単に信じてくれるんだね。ケイトは」

「疑うより信じようと思ってるよ。人と内容は選ぶけど。今回はほら、喧嘩した彼は隠し事下手そうだからすぐわかりそうだし」

「あ、そうだった。そりゃばれるなあ」

そういつて二人して笑った。

彼はもう一度よろしくといって去っていき、俺も家路についた。ふと音がした気がして後ろを向く。何もなかった。

「……気のせいかな？」

今度は生き物のステータスが見れるようにして見るが何の表示も

なかった。

まあいいかと呟いて深く気にすることなく家へと歩いていった。

第九話 異変と雷雨

「また明日……川に」

「あ、ああ」

ホルスと会った翌日、いつもの修行を終えて俺はクルスと二人並んで帰っていた。

この日の彼の様子はいつもと違った。彼からこちらに約束を求める。それだけでも初めてのことなのに、さらに何度も念を押しているのである。

「絶対」

「それはいいけどどうしたんだ？」

「……何も」

二人で遊ぶのは何時ものことではあるので特別に問題は無い。だが、いつもと違う切羽詰った様子の反応を見ると何かあったのかと思うのは当然のことだと思う。

心当たりも特になく、クルスも話してくれない。

違和感を感じていたもののどうすることも出来なかった。

翌日、俺は家の窓から空を恨みがましく睨んでいた。

ザーザーと叩きつけるような音が家の中まで響く。ここどころ

はなかった雷を伴う大雨だった。時折思い出したようにゴロゴロと腹の底まで響そうな低い音が鳴る。

流石にこんな天気では外に出ることは出来ない。家の本は読み尽くしているし本を借りてきてもいないため、退屈な一日になりそうだと憂鬱になっていた。

雨が降ったときは休みというのが俺たちの決まりで、いつもそういう日は一人で過ごしていたのである。

チェスか将棋でも作っておけば良かったと思う。何かしらテーブルゲームでも作っておけば兄弟もいることだし、楽しめたかもしれない。今度作るとしようと決意する。

いま作ってもいいのだが紙は高級なため使えない。木材がいいのだが使える木材が今のところ家には無かった。

そんな風に何か暇を潰せることはないかなと考えていたとき、大きな音を立てて家のドアが開き大声が家中に響きわたった。

何事かと家族全員が玄関まで出てくる。

「ケイトいるか!！」

「僕？」

全員を見渡して雨にずぶ濡れになった大男はこちらを向いた。必死に走ってきたのだらう。雨に濡れるのも構わず。何故それ程急いだのか。

「クルスが……クルスがいねえんだ。こっちは来てないか!」

「え……うちには来たことないよ」

「……くそ、ハズレか。すまん、邪魔したな。見つけたらメリーんとこ教えてやってくれ!!」

そのまま、大雨の中をガイさんは慌てたように駆けていく。嫌な予感がした。

ガイさんが出て行った後を苦々しく見送った俺に声を掛けたのは母だった。悪い予感に緊張している俺に対して、母親が目線を合わせて穏やかに声を掛ける。

「ケイト。クルスちゃんの知り合いなの?」

「うん。友達なんだ」

「じゃあ、あの子の行きそうな場所に心当たりはない?」

言われてみれば心当たりはある。昨日のあいつは明白に変だった。そんなあいつと昨日約束した場所。そこは俺なら雨が降った後には危険だから暫く近づかないような場所で……まさかあいつ!!

「あ、ケイト!」

俺は母を呼び止めるのを振り切り、豪雨の中を走り出していた。そうじゃなければいいと思いつつも、約束した場所へと。

息が切れる。

体力はある方だといってもまだあまりにも幼い自分の身体に文句

をいいながらそれでも駆ける。

もつと……もつと早く！

予想通り北の川はいつもの穏やかな姿を一変させて荒れ狂っていた。

こんなときの川は危険だ。いつ鉄砲水が襲ってくるか解らない。川にとってゴミのようなものでも俺たちにとっては致命傷な岩や木が飛んでくることもある。

勿論川に飲み込まれれば助かる術はない。

自然の脅威。自然を甘く見たものは必ずその報いが与えられるのだ。

比較的安全な場所を選んで走りながらいつもの場所へと近づいていく。視界が悪く、いつもの姿とも違うため、場所がぁっているのか心もとないがそれでも走る。

クルスを見る。ステータス探知を起動させながら。これである程度の距離はカバーできる。

……いた……！

やべ……と思わず呟く。荒れ狂う川の近くにクルスはいつものように三角座りで座っていた。

流されていないのは奇蹟としか言いようがない。

「クルス。馬鹿なにやってんだ……！」

「ケイト……約束の場所にいけない……！」

ばやっとした感じでこちらを振り向く。言われたことがわからな
いかのように首をかしげる。立ち話をしているのは危ない。川は荒れ
狂って轟音を立てている。声も聞こえ辛い。

「危ないっ!!」

クルスがこちらを見つけて立ち上がった瞬間、彼を流木が襲いか
かる。ぎりぎりで見つけた俺はクルスの腰に手を回して全力で後ろ
に飛んだ。

「ぐ……痛……」

岩がごろごろしているところに受けみも取らずに背中から突っ込
んだせいで息も出来ないような痛みが体に走った。

それでも歯を食いしばって立ち上がる。ここはまだ安全な場所じ
やない。

クルスの手を引き、なんとか川から離れた場所へと移動する。そ
の間も豪雨が体を打ちつけ、疲労もある上に背中では怪我をしたらしく、
ずきずきと痛み、俺の体力をさらに奪っていく。

それでも、間にあつたことにほっと安堵の溜息を吐いた。

「クルス!この馬鹿野郎!死んだらどうすんだ!!」

雨が口の中に入るのも構わず叫びながら胸ぐらを掴んでぐらぐらと揺らす。

クルスの表情は変わらない。

「約束……守らないと……捨てられる」

「なんでそんな……！」

「ケイトは友達いる。……私なんて忘れられる。夢見たいに忘れられる！」

初めて聞く強い否定の叫びにぐっと思が詰まる。わけがわからない。友人というのはホルスのことか？

今の叫びも彼のようになった一つの原因なのだろう。一体どのような夢なのか……。

否定はしない。有耶無耶にもできない。だけど、どうすればいいのかは思いつかなかった。

「……一人は寂しい。ケイトも忙しい……寂しい」

「そうか」

「もう一人は嫌」

はつきりした口調でクルスが言った。無感情に見えて色々感じていたのだろう。

俺は他に友人がいないが……ホルスはまだ友人とは呼べないだろう……家族はにぎやかだし気のおけない相手であるガイさんやジン

さんと一日訓練してる。だけどこいつはそうじゃない。

メリーさんも独り身だからクルスばかりに構う余裕もないはずだ。それに俺は精神そのものは大人だ。これだけの条件が揃っている自分の一人とクルスの一人では質が違ったのかもしれない。

それをわかってやれなかったのは鈍いとしか言い様がない。

「ガイさんはお前を今、必死で探してる」

「……うん」

「ジンさんもメリーさんも心配してるはずだ。俺も心配した。一人じゃない」

「……うん」

「約束を破られるより死なれる方が俺は辛い。次からちゃんと俺に相談してからにしてくれ」

「……」

その言葉には返事をせず、泣きそうな顔でこちらを真剣に見つめる。

「頼む。お前がいなくなったら……俺は……ああもうくそっ!!」

全くうまく意味のある言葉を出すことができない。こういうとき自分は頭が悪いんじゃないかと思う。

とにかくそう叫んで前から首に腕を回して抱きしめる。

「生きててほんとよかった」

「……ケイト。泣いてるの？」

子供だから涙腺が緩んでるのか。感情が高ぶってまともに頭がまわらない。

クルスは抱きしめられるのを拒まずに、ただ、こちらを心配そうに見つめていた。

「馬鹿！泣くか。帰るぞ。帰ったらみんなから説教だ。覚悟しとけ」
「……ごめんなさい」

俺はクルスの頭を痛くない程度にぽかっと軽くたたくと、家に向けて歩きだそうとした……が。

「あ、あれ」

体に力が入らない。思いのほか川までの全力疾走と豪雨のせいで体力が無くなっていたらしい。こけてしまっかと思っただが崩れ落ちる前に体を力強い腕に支えられる。

「迷った迷った……なんとか追いついたな。足早いなお前は。しかし、よくやったケイト！」

走り去った自分を濡れるのも構わずすぐに追いかけてきたのだろ

う。ずぶ濡れになりながらにつと笑ったカイル兄さんが俺を支えてくれていた。そのまま背中におぶさる。

「最後にかっこつかないなあ」

「やー十分だろ。いい弟を持って鼻が高いぜ。さ、帰るか。クルスちゃんも行くぞ。歩けるな？」

「……大丈夫」

そのまま背中に担がれたまま豪雨の中、家路に付いた。

余程体力を失っていたのか安心したせいなのか徐々に俺の意識は遠のいて行った。

眠っているとき綺麗な少女が心配そうにこちらを泣きそうな顔をしながら覗き込んでいる。

そんな夢を見た。

後で治療してくれていたジンさんに聞いた話だが、泣いて喜んでるメリーさんとガイさんを母さんは叱りつけ、クルスをちゃんとしからせたそうである。

悪いことをしたら叱る。子供には大切なことだ。うんうん。

「お前への説教は私の仕事だ。この大馬鹿者が」

ちょ、え……？

第十話 戻れる場所

次の日、なんとか風邪を引くことはなかったが一日おとなしく寝るように申し付けられた。

薬師のジンさんの見立てでは、無理をしなければ大丈夫だそうである。治療の腕は間違いないので信じるしかない。

説教は耳が痛い内容だった。尤もな説教だったので黙って聞くしかなかった。

子供の身で無茶をしすぎだったのは間違いない。違和感を感じていたのに誰とも相談していないし、飛び出るときも勢いだけで非常にまずい対処だった。怪我人が他に出なかったのは奇跡だ。

人を頼る事も覚えなければならぬかもしれない。

それからジンさんたちがそうだったからかもしれないが、自分が村を出ようと考えていることはばれれば、そのせいで友人を作っていないのではないかと指摘された。

村を出るつもりなのは確かだったが友人に関しては、実際は同世代相手にどう接すればいいのかわからなかっただけで、そこまでは考えてなかったが……。

ジンさんは暗に自分のためだけにではなく他の人のためにも作っておけと言っていた。

筋肉痛と怪我ではきばきに痛む体をもそもぞ動かしてベッドに寝転がりながら、これから先どうするべきかということを考える。昨

日の出来事で頭がごちゃごちゃでいい考えは浮かばない。

とんとん、と控えめな軽い音を立てて扉がノックされる。家族ではなさそうだ。両親や兄や姉ならもつと元気のいい音になる。

「どうぞー」

中々入ってこないのどこちから声を掛けると、姉のお古を着た見知らぬ少女が入ってきた。

黒髪はショートに整えられてさらさらに櫛が通されていて、若干黒い瞳不安そうに揺れている。日本にいた頃を思わせるような……。黒い瞳に黒い髪？

「もしかして、クルス？」

「……うん」

照れているのか不安なのか少しだけ瞳が揺れている彼……。彼女は頷く。

そついや誰も男だなんて一言も言っていなかった気がする。ぼさぼさの髪の毛で服装も動きやすい格好だったし……。あんなに長い間一緒にいたのになんで気づかなかったのか。

今考えればカイル兄さんはわかってたんだろ。他の人も当然に。左手で頭をわしゃわしゃと掻く。

「おはよう、クルス」

「おはよ。ケイト」

何故ここにとかどうしてそんな格好を……とか、流石にそこまで馬鹿なことは聞かなかった。

当然見舞いに来てくれたのだろう。格好の方は母と姉の仕業に違いない。

しばらく二人して沈黙し、先に自分が沈黙に負けた。

「来てくれて有難う。でも、びっくりしたよ」

「……どうせ似合わない」

クルスの方は少しだけ不満だったようだ。

「似合いすぎてびっくりしたんだ」

「……本当に？」

「うん」

俺がそう続けると彼女はそう……と小さく呟いた。

実際に似合っている。ぼさぼさだった髪はすっきりして、前よりも遥かに明るい雰囲気を出しているし、服も清潔で華美ではないものの、少しだけ細工も入ったお洒落な服は彼女を可愛らしく見せていた。

初めて見る丈の長いスカート姿も似合っている。

よほど親しくないと同一人物とは思えない程の変貌だった。無論

いい意味で。

また沈黙する。クルスは饒舌ではない。彼女は言葉をいつも選んで話す癖があるから無理に急かさない。

表情を見るといろいろ考えているらしい。

暫く待つと話すことは決まったらしく、口を開く。

「悪いことしてごめんなさい」

「うん。悪いことだった。あんなことはしたら駄目だ」

悪いことは悪い。変に否定はしなかった。クルスも頷く。
彼女の言いたいことは続きがあるのだろう。

「お母さんにもガイおじさんにも怒られた。……初めて」

「そか……。まあ俺も怒られたけどな。ジンさんに」

一緒だな、と笑った。

しかし、メリーさんのことはよく知らないけどガイさんは今頃後悔で泣いてそうだな……。あの人は甘やかしそうなタイプだし。

頭を抱えてごろごろ転がっている髭もじやの大男を想像して少しだけ苦笑する。

「……お父さんがいなくなっってから夢をよく見る」

「そういえば言っていたね」

「夢では別の人になって……よくわからないけどすごく何かに怒っていて……そして最後は後悔する。苦しむ……その気持ちが起こ

ても胸に残る。自分のことのように」

そう言いながら辛そうに胸を抱える。

それがどんな夢なのかは解らない。理解は出来なかったが、その胸に残る感情は彼女が初めて会ったときの絶望を映した目をするほどのものだったのだろう。

初めて自分のことを話した彼女は、少しだけ息を吐いた。

「辛かったんだね？」

「……うん。でも……」

彼女はこちらの眼をまつすぐに見る。初めに見た昏さは完全に消えていて、表情は乏しいが少女らしい明るい眼になっていた。強い意思も感じられる。

「昨日……夢でその人に会えた。だから言ってやった」

「何を？」

「私はあなたじゃない。強くなるし誰にも負けない。ケイトやみんなと頑張る。だから消えてって。そしたら、初めてその人笑って消えた」

そういつてクルスは微笑んだ。

慣れていないせいか無理したように不器用でお世辞にもかわいい笑みではなかったが、自分にとっては忘れられない笑みになりそう

だと思った。

話の内容は理解出来ないが、何かしら吹っ切れたのだろう。

「それから……次はケイトを助けるって約束したのに……助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。何だか元気出たみたいだし本当によかったよ」

俺も笑顔で返した。だが、続けた言葉には驚いた。

「……ガイおじさんとジンおじさんに、ケイトと一緒にって頼んだから。明日からよろしく」

「は……？」

「私も……強くなる。ケイトを守る」

そついいながら小さい手で拳を作っていた。眼が本気だ。
いいのかそれは。そんな無理しなくても……

「本気？」

「……うん」

なんだか意思は堅そうだ。

二人もすでに認めているようだし、一人でやるより賑やかにもなる。それにクルスは一度決めたら絶対に動かない。

説得を放棄すると右手を差し出した。

「よろしく頼むよ」

「……うん。直ぐに守れるように頑張る」

「直ぐに追いつかれたら立場がないなあ」

彼女は苦笑しながら差出している俺の手を自分の手でしっかりと掴んだ。

暫くゆっくりと彼女と会話をしていたが、別の来客が訪れた。今度は三人だ。その姿を見て俺は驚いた。

「よ、よう。元気か？」

「あーうん」

太った少年が気まずそうに声をかけてくる。自分もどう対応していいものか悩んで、曖昧な返事を返した。

三人ともクルスにも軽く挨拶する。少女がクルスとは気づいていないようだ。

「えーっと。何……？」

「あー。そういえば名前もいってなかったな。俺はマイスってんだ。後の細いのがヘイン。もう一人がホルス」

後のヘインはなんだかばつが悪そうにしている。まあ、当然だろう。こないだ喧嘩したばかりだし。一方ホルスは苦笑いしていた。

「怪我したって聞いてな。お、俺が勝つまでいなくなれると困る」

と、また反応に困るようなことを言ってくる。クルスは何も言わずにこちらを見てるだけだ。

なんだか、そうじゃないでしょと後の二人に突っ込みを受けていた。

太った少年、マイスの代わりに細い少し気弱そうな少年…ヘインが代わりに出てきた。

「なんか怪我したらしいって聞いてお見舞に……と、頼みがあつて」

「どいてろ！ たく。ちゃんと自分で言う。こんなこと頼むのもどうかと思うんだが、クルスに会わせて欲しいんだ」

「何故？」

意地悪な問い返しだ。先日ホルスに頼まれて知っているのだから。ホルスの顔を見ると、目で頼むよと訴えかけてきていた。小さく頷いて先を促す。

「……あの後、三人で話したんだ。いくらなんでもあんな年下殴つたのは悪かつたって。だから、謝ろうつてな。ずっと一人だからほっとけなくて……その……ついきついし嫌な言い方もしちまつたし……あ、でもお前には謝らないからな！ 男同士の一対一だかな！

次は絶対勝つ!!」

なるほど…と、笑ってしまった。

ホルスの話通り案外悪いやつらでもなかったらしい。

「ぷっ、くく。そうだなあ。うん。僕はいつでも相手になるよ」

「何がおかしいんだ。まったく……で、会わせてくれるか？」

「……そういうことらしいよ？」

と、クルスの方を向く。彼女は口を少しだけ開けて驚いていたようだ。

「……は？」

三人がクルスの方を向きその動きが固まる。

気付かないのも無理はない。自分も気づくのに遅れたのだから。

目の前の可憐といった形容が似合う少女がクルスとは夢にも思っ
てなかったに違いない。

「……はああああ!!!!」

三人とも気づくと大声で叫んだ。煩い。

「ちょ、ええ？」

「嘘ですよね……」

「マイルス……」

三者三様困惑した様子でクルスの方を向く。

彼女は彼女で居心地が悪そうにこちらを見ていた。仕方ないので助け舟を出す。

「……で、クルスは許す？」

彼女は暫く考えたあとこくりと頷いた。

「三人も私を探してくれてた。迷惑かけて御免なさい」

そして、マイルスの方を向く。初めて俺以外に目を合わせて頭を下げていた。

マイルスは顔を真っ赤にして狼狽えつつも勢い良く頭を下げた。

「あー。えー。あー。とにかくあのときは本当にすまなかった。ごめん！」

「それじゃ仲直りだね。よかった」

なんだかおかしくて、俺は声を上げて笑った。クルスにも友人が自分以外にもできそうで安心した。クルスも小さくくすくすと釣られたように笑った。

それを見てマイスはまた顔を赤くして不機嫌なような顔でそっぽを向き、残る二人はその様子を見て笑っていた。

俺が強くなった方法を三人が知ると彼らも遊ぶ時間を返上してでも参加すると言い出した。

よっぽど負けたのが悔しかったらしい。

こうして、一人で続けていた訓練は5人できるようになり、ガイさんは上機嫌で教え、子供が苦手だというジンさんは顔をしかめつつも協力してくれるようになったのである。

俺にも同世代の友人が出来た。幼年期に出会った彼らの存在もクルスと共にこの異郷での生活を楽しいものにしてくれたのである。

将来成人した時に、今日という日はある意味で初めてこの村が本当の意味でいつでも戻れる場所……故郷と呼べるようになった日と思い出せる記念の一日になった。

第十一話 妖精

それから三年の月日が流れ、その間俺達は時に喧嘩したり仲直りしたりしつつも鍛えたり仕事をしたり遊んだりと充実した日々を過ごしていた。

太っていたマイスは縦に引き伸ばしたかのように背が伸びた。1歳にして160cmを超えている。

成長期であることもあってもっと背が伸びそうだ。

最近クルスの母でもあるメリーさんと結婚し、農作業もやっている忙しいガイさんの後を将来正式に継ぐべく技術を学んでいる。

手先がそこそ器用な上とにかく体力があることもあって、彼は獵師への適性が高かった。

勉強は苦手で薬師のジンさんからはもっぱら剣術を習っている。彼は長男で本来なら畑を受け継ぐのだが、自分には生活手段があるから次男に譲ると親を既に説得している。弟思いでもある。

細身の気弱そうな少年ヘインはマイスとは反対に野外活動より勉強のほうが性分がっており、最低限の運動能力は勿論身についているが専ら薬学方面の知識を主に身につけ、薬師としての道を進もうとしていた。

姉に気があるようだが、残念ながら姉が振り向くことは絶対ないだろう。幸せを他にみつめて欲しい。

姉も12歳になり、子供っばさの中に大人の顔も見せるようにな

つてきている。

ジンさんにもそろそろ危機感を持って欲しいところだが彼は相変わらずである。捕食の日は近い。

中肉中背のホルスは二人のちょうど中間だった。

どちらともにも適性があるが、どちらも中途半端になっている。能力的には自分と似ていた。将来どうするかは悩んでいるようだ。

彼は長男というわけでもなく、受け継ぐ畑はない。かといって特徴はなく器用貧乏であり、ある意味将来に対して一番悩んでいるのではないだろうか。

クルスは天才だった。

あまりにも技術の習得が早かったため、俺はある日誘惑に負けて彼女のステータスを見てしまった。

能力的には他の子供とあまり変わらなかったが、他のスキルとは明らかに毛色の違うスキルが彼女には付いていたのである。

特殊スキル<天賦の才>というものだ。

これに似たスキルは他には自分の特殊スキルである<ステータス閲覧>しかない。

どのような取得条件があるのだろうか。

薬草学といった学問系はミスと似たような感じなので、恐らくは身体を動かす技能だけの効果だとあたりをつけているのだが……。得意なものに関しては倍近く習得速度が違うのである。

つかつかすると、現時点でも負けてしまいそうな感じだ。

変わったのは強さだけでなく、外見もそうだ。彼女は髪の毛を肩くらいまでのばしてさらに女の子らしくなった。

昔より少し体型も柔らかくなり、それでいて子供なのに凜として媚びるところもなく、強くて将来確実に美しくなりそうな彼女は村の子供全てから一目おかれているようだ。

同性の友達もわずかだができたようだ。

休みは相変わらず自分といることが多いが……いいんだろうか。

俺自身も以前より順調に成長している。特にステータス能力と薬草学を加えたサーチ能力は本当に便利で、旅に出ても路銀を稼ぐのはさほど難しくないだろうと思えるほどだ。

知ってさえいれば薬草の位置をある程度サーチできるのだから。乱用すると、他の皆が訓練できないので自重している。

戦闘技術の実力も上がっているが体術では体格が違いすぎるマイスやおかしいくらい成長の早いクルスとの勝率が5割を切りそうなのが悲しいところである。

そんなある日のことであつた。

その冒険者が商人の護衛としてうちにやってきたのは。

俺の一家は一応村長を勤めていることもあり、村では一番大きい家に住んでいる。

従って客人が来ることは多い。大抵は父や一番上のトマス兄さんかもしくは村の誰かに世話役を頼み、宿変わりになっている離れの方で食事を作りそのまま泊まってもらっているのだが、今日は一人の冒険者が自宅の方の食事の席についていた。

輝く金色の絹糸のような美しい髪。人形のように整った顔に少しきつめの冷たさを感じさせるエメラルドグリーンの瞳。

そして、特徴的な尖った耳の美女。胸は……きつと種族的な特徴なのだろう。何も言うまい。軽装でやぼったい旅人の服を着ているがその美しさは際立っている。

（エルフ……？）

あまりの美しさに思わずぽかんとしてしまう。

だが、すぐに気を取り戻して与えられた席に座る。エルフの女性の隣だった。

父とトマス兄さんは離れの方に行っており、彼女の前にはにこにこ母が座っている。その隣にはカイル兄さんがおそらく自分と同じようにぼけつと見蕩れていた。

エリー姉さんは母の反対の隣でエルフって美人なのねーと色々と教えてほしいなーと呑気に喜んでいた。

「三人とも。彼女は私の旧友なの」

母が恐らくは冒険者だったのだろうということを俺は知っている。ステータスで見る限りこの村で最強だからだ。ただ、そのことを誰も話さないため、母親にそのことを聞けないでいた。

目の前のエルフはレベル42……能力値もスキルも今まで見た誰よりも高い。

レベルに関してはこの三年の間にジンさんから話を聞いていた。冒険者ギルドにはレベルを測ることのできる魔法の水晶が置いてあり、その力でレベルを測る事ができるそうである。自分の力が特別ではないと改めて自覚する。

見えるのはレベルだけで能力やスキルなどは見れないらしいが、高レベルになるほどレベルは上げにくく、また、レベルが上がると目に見えて能力が上がるため、冒険者としてある意味信用にもなっているそうである。

大体10くらいで一人前、20くらいで上位の冒険者、30を超えると一流なのだそうです。

そのジンさんの話からしても、このエルフの女性の強さは伺える。

彼女は俺たちを見ると上品に微笑んで会釈した。本の世界から出てきた妖精……そんな印象。人間にはない美しさだ。

「はじめまして、私はラキシス・ゲイルスタッド。貴方達の母の友人なの。よろしくね」

「ケイトです。よろしくお願いします」

「か、カイルだ……です」

「私はエリー。よろしくお願いします」

目の前で何か兄がてんぱってるお陰で冷静になる。カイル兄さんもエルフを見たのは初めてらしい。

いるということは聞いていたが自分も見たのは初めてだ。

冷たそうな人だなあと思っていたのだがそうでもなく、カイル兄さんが冒険の話を聞くと面倒くさがらずに兄が楽しめるように色々工夫をしながらそれに答えていた。

俺は母の方を見ていたが、自分自身の冒険の話は一言も口にすることはなく、最近のラキシスさんの状況の話や料理の話や世間話に徹している。

食事の時間は和やかに過ぎていった。

兄や姉は珍しいからかエルフの彼女と色々話をしていたが、自分はいく離れた場所から彼女を観察していた。

なんとなく不自然なものを感じたのである。確かに彼女が友人でもある母を訪ねるのはおかしい話ではない。

しかし、それにしても母が嬉しそうにはしていたもの。そこまで歓迎しているように思えなかったのだ。

そしてエルフの彼女にもなんとなくだが、不満のようなものを会話からほんの少しだけ覗かせていたような気がした。

この世界に来る以前なら些細なことなど気付かなかっただろう。自己主張の殆どないクルス相手に鍛えられたような技能だ。当たっているかはわからないが。

何だか裏がありそうで近づき難かったのである。

彼女たちの話は母が俺達三人に寝るように促すまで続いていた。

第十二話 精霊

皆が寝静まる少し前、俺はいつもの日課である投げ武器スキル向上のための投石の練習を家の外で木にかけた的に向かって行っていた。

何年も続けているお陰で、右手でも左手でも殆どが中心近くに当たるようになっていた。

元々は右利きだったのを地道に両手利きになるように練習した結果である。

「ただの子供と思ったけど……いい腕してるね」

いつの間にか背後にエルフの女性が立っていた。

急な声に冷や汗が背中流れる。獵師としても鍛えており、気配の察知にはかなりの自信が付いていたが、全く気付かないその気配の消し方に、上には上がいることを思い知らされる。

「ラキシスさん……いつから見えました？」

苦笑しながら左手で頭を掻く。

「ついさっきよ。眠れなくてね……。続けて?」

「……いえ、やめときます。まだ外は寒いし薪持つてきます」

返事を聞かずに普段から用意している野外活動のセットを使い、火を起こす。

ラキシスさんは準備する俺の様子を感心するように見ていた。

「邪魔してごめんね?……けれど本当に手際がいいわね。君は何歳なの?」

「今年で八歳になりました」

「凄い。人間って成長早いんだね」

本気で言っているのか冗談で行っているのかわからない。

優しそうな声色に反して炎に照らされた冷たそうな緑の瞳がこちらを射抜くように見つめている。

美しいが現実味が全くない。

暗い場所でその瞳を見るとなまじ美しいだけに正直怖かった。魅入られれば逃げることは出来ないのではないかと、そんな恐怖感がある。

まるで精巧で無機質な、だけど完璧で美しい……。そんな人形のようにだ……。と思う。

指の先が無意識に震えそうになるのを手を合わせて俺は必死に止めていた。

「あら、一人前に警戒しているのね。可愛い子」

くすくすと笑う。嫌な感じだ。

存在をそのまま食われそうな……取るに足らないと言われているような……今の俺など彼女からすれば実際そうなのだろうが。

そう思うと不思議と反発心のようなものが湧いてきた。なんとか一矢報いたい。そんな気分になる。

震えは止まった。俺は意を決して彼女の顔を見上げる。

「ラキシスさんの方が可愛いですよ」

「……私が可愛い？」

「うん。すごい可愛いよ」

緊張していないと見せかけるように意識してゆつくりはつきりと子供っぽい口調と笑顔を意識して彼女に顔を向ける。

子供だから許される武器だ。相手の威圧感を解き、空気を和らげれば脅されることもない。

彼女の方を見ると何故か惚けたようにこちらを見ている。先程までの冷たさは欠片も感じない。

「ほ、ほんとに？」

あれ？

今更否定は出来ないのでこくこくと頷く。変な反応だ。

なぜか彼女は涙目で、嬉しさを堪えているといった感じの表情だ

った。

白い肌もうつすらと赤くなっている。美しく整っているだけにそんな感情的な表情に違和感をどうしても感じてしまう。

「可愛いなんて初めて言われた……」

「それはないんじゃない？」

「気を抜くと何故かみんな怯えるもの。怯えなかったのは貴方のお母さんくらい。貴方はやっぱりマリアの息子なのね」

実際には怯えていたし、冷たそうな見た目で判断していたことを心の中で彼女に謝罪する。

悪意は全くなく、普通にしゃべっていただけだったらしい。

失礼にも無意味な警戒をしたことに罪悪感と羞恥で顔が熱くなった。自分の人を見る目の無さには本当に呆れてしまう。

そんな俺の内心を知らず、彼女は座って焚き火に手を翳しながら懐かしそうに眼を細める。

「結婚して冒険者を引退するって聞いたときは反対したけど、今日会って彼女が幸せそうで……正しい選択をしたんだと思った。人間っていいなあ……。こないいい子もいるし」

頭を撫でながら寂しそうに笑う。エルフは長命な種族だ。不老の身体を持っているため人間から憧れられることが多いが、それなりに思い所もあるのかもしれない。

掛ける言葉は見つからず、ただ一緒に炎に手を翳して隣に座って

いた。

「話を聞いてくれる？」

「うん」

彼女は優しい声でゆっくりと話しかけ、冷たい印象を与える瞳でこちらを見つめる。彼女のことがほんの少しだけだがわかったので今度は怖くなかった。

「貴方のお母さん。マリアと出会ったのは私が退屈な森を出て、駆け出しの冒険者になった頃なの」

「母さん冒険者だったんだね。一言も言わないから知らなかったよ」

母さんは一言も冒険について話したことはない。父も同様だ。ガイさんやジンさんは母さんに対する態度から考えて知っているようであつたがこちらからも聞けなかった。

「あの人は格好よくて強くて真っ直ぐで……私の憧れだったわ。マリアが前衛、私が後衛。そして他の仲間。楽しかった。彼女が一目惚れして結婚するって言い出したときには大喧嘩して反対したわ」

「そうなんだ。そんなことが……」

彼女は薪からふき出ている炎をじっと見つめる。

金色の髪が炎を反射して赤く輝き、白い肌もほんのり照らされて

いる。

「結局反対を押し切っていつちゃったけど、私は軽く考えてたのね。退屈な生活なんかすぐ捨てて冒険に戻るって。10年くらい前、マリアに久しぶりに会ったときは驚いたわ。元気な子供と赤ん坊を抱いたあの人は、危険で充実した冒険をしてきた時より幸せそうに穏やかに過ごしてたから。今日も、来てみたはいいけどあの日々は絶対戻らないんだってわかつちゃった。……ほんと、みんな私を置いていなくなっちゃうんだよね」

彼女はどことなく寂びしそうだ。永久に近い寿命と一流の実力を兼ね備えているはずのラキシスさんの表情は迷子の子供のように見える。

無限の時に対する悩みは人間の俺にはとても理解はできない。だったら話を少し変えようと、俺は声を話かけた。

「僕の話も聞いてもらっていい？」
「いいよ」

優しい声色。きっと子供は嫌いじゃないんだろう。

物腰は本当に柔らかいのだ。一見冷たそうに見えるため誤解はされやすそうだが。

「僕は将来冒険者になるんだ。この世界を見て廻りたいから」
「冒険者に……危険なことも多いし、人には回りきれないくらい世

界は広いよ?」

「危険は承知の上だよ。だから死ないように鍛えているんだ。広い世界を廻るのは……僕ひとりじゃ無理かもね。だけど、母さんの子供の僕が世界を廻るように僕の子供も世界を廻るかもしれない。いつかは世界中廻り尽くすんだ」

どう言おうかと悩み、左手で頭を掻く。

流石にあまりにも荒唐無稽すぎる……自分でも何いつてるんだという気がしないでもないが、まあいいかと自分を納得させる。

「僕は子供にラキシスさんが世界を僕より先にたくさんまわってる僕の友達だって紹介するよ。兄姉も……ラキシスさんも……みんなでそうしたらいろんなところに友達ができるよね。きっと楽しいよ。すごくない?」

笑顔で彼女を見つめる。自分でもわかる無茶な論理。いや、論理にもなっていない。ただのでたらめだ。

ただ、疲れたような彼女に何か言ってあげたかっただけ。

あんまり役にも立たないだろうし、初めて会った彼女を一言で納得させることができるようなことはできるはずもない。少しでも気がまぎれたらといった程度でしかない。

彼女は一瞬きよとした後に、適当な話で励まそうとしたことを判ってくれたのか、くすくすと笑ってくれた。

「それは素敵かもしれないね。じゃあまず君が友達になってくれるのね?」

「うん。よろしくね。可愛いお姉さん」
「大人からかつちゃだめ！」

今度は二人一緒に声を上げて笑った。

鈴がなるように上品に笑う彼女が見た目の歳相応に本当に可愛らしく見えた。

「冒険者になるなら、強くないとね」

一頻り笑ったあと彼女はいいものを見せてあげるといたずらっぽく微笑んだ。

座ったまま、人差し指をぴつと薪に向ける。指先に微かに光が灯る。

「我が呼掛けに答えよ。炎の精霊」

芝居がかった声と共に、焚き火の中から身体が炎で出来ている大きな蜥蜴が姿を現した。

こっちに向いて威嚇してくるその生物は今までに見たどの生物とも違う。物理的にはありえない不思議な光景だった。

「えっ！……これは……魔法？」

「精霊魔法よ。この子はサラマンダー」

驚く俺に対して、してやったりといった感じで笑い説明する。

「精霊魔法は精霊と魔力を込めて話す事で使うことが出来るわ。君には魔力があるから練習すれば使えるかもね。普通精霊魔法は使える人は初めから感覚的に使えるのだけど」

残念ながら今まで魔法とは縁がなかった。そもそも魔力の込め方がわからない。

その旨を彼女に告げると彼女は立ち上がり、座っている俺に後ろから手を回し、耳元に顔を近づけた。

柔らかな身体が押し付けられ、端正な顔がすぐ隣まで近づき、息づかいまで感じられ思わず顔に血が昇る。

「え、え？」

「あ、照れてるわね。ませてるなあ……くすつ……さっきの仕返しはできたかな。……落ち着いて目を瞑って。ゆっくり息を吸って吐いて」

意識すると恥ずかしいので彼女の言葉通り目を瞑り、言われたとおりに集中する。

「指先に光を感じるように。そうそう……火に向かって呼びかけるの。炎の精霊って」

「我が呼掛けに答えよ。炎の精霊！」

しばらく集中すると指先が暖くなり、炎の精霊に呼びかけて目を開けると、彼女が召喚した精霊よりも数段小さい炎の蜥蜴が現れていた。自分がやったことに呆然とする。

「やったね。成功よ」

嬉しそうに笑って首に回している腕に力を込める。華奢なのに、意外と力が……

「ごぼっ、く、首しまるって!!」

「あ、ごめんなさい。つついね」

拘束していた腕を離して立ち上がる。背後から暖かさが消えて、少しだけ残念と思ったのは男だからだろうか。自分も立ち上がる。

「後は練習次第ね。早く強くなって冒険者になるの。約束よ?」

「わかった。次会うときは絶対びっくりさせるから。」

「あ、それからマリアが冒険者だったこと話したのは内緒ね。怖いから」

やはり、口止めをされているらしい。俺は笑って頷いた。

翌日、商人一行とその護衛は村から次の目的地へと旅立っていた。

出発前にラキシスさんは全員に挨拶した後、俺に顔を近づけて待つてゐるからねと小声で伝えて頭を撫で、気のせいか来る前よりさっぱりした笑顔で小さく手を振り、そのまま去っていった。

彼女との再開は子供の主観的な時間感覚にとっては遙か先のことになる。

第十三話 僅かな違い

ラキシスさんを見送り、そのままジンさんのところの訓練に向かう。

彼のところの訓練は二種類に別れている。剣技と薬学だ。

剣技は基本のみを教え、後はガイさんの方での訓練に任せている。基本は大事だが、それ以上は教えられるより実際使いつつ学べということらしい。

放任主義に思えるが変な癖が付いていたら的確に指摘するし、しつかりと理論立って考えられており、教え方は上手い気がする。とりあえず俺はわかりやすいが外の四人はどうなんだろうか。

薬草学の方は剣技と違って、現状は全て彼の付きっきりの指導で行われている。

こちらは座学と調合から講義が成り立っている。特に調合はミスが許されないため、教え方も厳しい。

細かいことが苦手なマイルスと調合にそもそも興味がないクルスとホルスは既に脱落しており、その時間帯は三人で剣を振っているようだ。

座学の知識はいざという時のために全員きっちり教わっている。

実際の採集は俺が探すべき薬草の種類を覚えてステータスで確認、他の皆は貰った薬草を参考にしつつ探し、正誤は俺が判断する形を取っている。

「変」

ジンさんの訓練が終わり、5人がそれぞれ帰る別れ道まで一緒に歩いているとき、クルスが突然立ち止まってぽつりと呟いた。

「何がだよ。俺どっか変か？」

そんなクルスに反応したのはマイルスだ。

すぐ前を歩いていた背の高い彼は、自然見下ろすような形でクルスに振り返る。彼女はそんなマイルスをしっかりと見上げて見つめ返して答えた。

「マイルスじゃない。ケイト」

「……俺？」

なんかおかしかった？と他の面々に問いかけるが、皆首を横に振る。

「ケイトはいつも変だし今日が特別ってわけなかったけど」

「うっさい万年笑顔」

人が良さそうな垂れ目で糸目のホルスが笑って顔に似合わない毒を吐き、俺はそれに毒で返す。

真面目で少し神経質そうな感じになってきたヘインも首をかしげる。

「僕も変わらないと思ったけど、クルスは違うと思うの?」

「全然違う。皆鈍すぎ」

クルスの物言いもこの三年間の付き合いのお陰で彼らに対しては全く遠慮がない。

物言いも端的かつ的確なため、四人の心を掴るのが上手かった。これも成長なんだろうか。少しほろっとくるものがある。

「昨日絶対何かあった。何かまではわからないけど」

「あーそついや、おまえんとこ商人来る日だったんだっけ?」

マイルスが思い出したといった風に手をぼんと叩き、それを聞いたクルスがこちらを真っ直ぐに見つめる。

少女らしく可愛らしい感じに彼女は成長しているが、その瞳は以前のことを考えると信じられないくらい強い。

俺は左手で髪をわしゃわしゃと掻いて素直に話すことにした。隠しても調べればすぐにばれてしまうからだ。

そうであれば誤魔化すのはマイナスでしかない。そもそも隠す話でもないことだし。

明日は丁度休みの日、明日きちんと話す事を全員に約束してその日は別れた。

翌日、俺達はクルスといつもは二人で釣りをしている川に歩いていく。

約束のこともあるし家の近くで話して母さんに聞かれるとまずいからだ。

適当な大きさの岩を椅子代わりにしてみんな適当に座る。

気がついたらなぜか前後左右に四人は座っていた。尋問されているような気分だ。

「しかし、クルスは良く気づいたな。俺もいつもどおりしてるつもりだったのに」

「よく見てるから」

苦笑いしつつ本当に感心する。

しっかり見ているつもりだった俺より彼女は俺をよく見ているかもしれない。

自分でも気づいていなかったことを指摘されるとは……。

「で、何があったんだよ」

楽しそうにマイルスが促す。

彼の体は大人並になってきてるが子供っぽい好奇心が年相応に色濃く残っており、身を乗り出して期待に満ちた笑みを浮かべている。そんな好奇心丸出しの彼の顔は愛嬌があって嫌な感じはしなかった。

「何かあったって俺も意識してなかったけど、エルフに会ったからじゃないかな」

「「「エルフ！！！」」」

「……女の人？」

声を上げて驚く三人と淡々と次の質問をしてくるクルス。男三人の反応とまるで違う。

「女の人だよ。話には聞いていたけど本当に綺麗だった。一回見たら多分一生忘れないと思うよ。いろんな意味で」

「ほ、ほんとそんなにか！くくく俺も見たかったぜ。何で呼ばねーんだよ！！」

マイルスが地団駄を踏んで悔しがる。まあ、大げさにやってるだけだろうが。

後の二人も見なかったとうんうん頷いていた。

だが、クルスの反応は違う。

「そう」

と、ただ一言呟いただけだ。そのあまりの重さに何故か冷や汗が背中を伝った。

彼女は続ける。

「それだけじゃないよね？」

「あーうん。夜に投石の練習してたら眠れなくて出てきたから少しだけ話をしたんだ。俺が冒険者になりたいっていったら、頑張れーってさ。いい妖精さんだったよ」

あんまり詳しい話をするわけにも行かず、内容をかなり端折る。クルスは少し考えるように頭を少しだけ傾げ、

「妖精……人じゃなく？」

「人じゃないし……エルフって妖精じゃないの？」

よくわからないことを聞いてきた。

俺の答えを聞いて何を納得したのかくすりと笑って、

「ならいいわ」

と、小さく呟いた。

なんだかよくわからないがクルスがいいのならいいんだろうか。

「肝心の實力の方はどうだったんだ？手合わせしてもらったか？」

「マイスは組み手が大好きだ。というか戦う事が好きなんだろう。強い相手とやるのがさらに楽しいらしく、最近はガイさん相手に全力で挑んでいる。」

「クルスの作り出した重い空気を諸共せず、彼はわくわくして抑えきれないといった感じで聞いてきた。」

「してないよ。僕は何も視界を遮る場所のないところなのに、声を掛けられるまで後ろにいることに気づかなかったぐらいだし。勝ち目なんてあるわけないね」

「まじかよ。ううむ、流石現役の冒険者か！」

「マイスだけでなく他の面々も少し驚いたような顔をする。」

「俺の気配を察知する技能は彼らより遥かに高い。森での訓練期間に一年以上の差があるからだ。」

「相手の實力について話していて一つ話し忘れていた事を思い出した。これが一番重要なのに。」

「そうだ。それで精霊魔法を教えてもらったんだ」

「うおおおおおずりいぞおまえ!!」

興奮気味なマイスは俺に叫ぶ。

精霊魔法については、今日ジンさんに聞いてみたのだ。地のノーム、水のウンディーネ、風のシルフ、その他にもいろいろいるらしい。

使い道もいろいろだそうである。残念ながらジンさんの仲間にはいなかったらしく、詳しくは知らなかった。

「そ、それは僕たちでも使えるのかい？」

驚いた様子で早口に聞いてきたのはヘインだ。知識好奇心に火が着いたらしい。

本を読んでいるときと同じ血走った目でこちらを見ている。

「残念だけど魔力がある人だけらしいよ。やり方は教えるから試してみたら？」

魔力は誰にでもあるわけではない。大体10人に1人くらいの割合らしい。

俺たちの中で俺以外に魔力があるのは、ホルスだけだ。

俺が火を起こして一度見本で前に召喚したサラマンダーを呼ぶと他の面々もやり方を聞いたあとで試し始めた。

ラキシスさんにしてもらったようにも恥ずかしいのを我慢してやってみたのだが、結局ホルスもできるようにならなかった。相性が悪かったのだろうか。

一人、また一人諦めていき、結局最後まで諦めなかったのはクルスだった。

何度も俺に指導するようにいつて精霊魔法を習得しようとしていたが、魔力が無いので当然発動はしない。それでも彼女は諦めない。

子供とはいえ異性にそんなことをするのはかなり恥ずかしいし、クルスも多分そうだろう。

そんなことをしても強くなりたいたいという上昇意識に感心しつつも、なんだか申し訳ない気分になってくる。

後ろから腕を回して顔を近づけて声を掛け、指に魔力を集中させるといふ照れくさい行為は、昼になって飽きた他の皆が食事の準備を済ませて呼びに来るまで続いた。

第十四話 悩み

精霊魔法の紹介を終えて俺達はみんな揃って昼食を食べたのだが、その後、休憩して雑談しているときに明らかに様子がおかしい者が二人いた。

クルスとホルスだ。

他の二人は俺が魔法を使えるようになったことを羨ましがる様子を見せつつも、普段とそれ以外に変わる様子はない。

クルスも変わっているといっても、理由は分からないが何時もより足取りが軽く、地に足がついてないような感じた。表情には出ていないが上機嫌なのだろうということがわかるのでそれ程気にはしていない。

それにしても彼女は精霊魔法が使えなかったのに、落ち込んでいる様子がないのは何故だろう。

「ホルス。どうした？」

「え、あ、なんでもないよ」

しかし、ホルスは羨ましがったり残念がったりすることはなかった。

あまり反応はせず、さらに昼食を食べてからぼーっとすることが多くなった。

考え事をしているのか上の空といった感じだ。

ここに来るまでは普通だったし原因はおそらく先程の魔法だろうと思うのだが……。

どうしてここまで悩むのか、それがわからなかった。

この日、さり気なく聞き出そうとしたが結局彼は誤魔化して何も言わず、帰るまで様子がおかしいままだった。

そして、翌日、翌々日と彼は訓練に来なかった。

これは五人で訓練を行うようになって今までで初めてのことであった。

次の休みの前日、俺達は四人で相談した。

勿論友人を放っておこうなんてことは誰も言わない。

例え殴り合いの喧嘩になっても、悩んでいる友人がいたら力を貸す……俺達の暗黙の決まりだ。

三年苦勞を共にして、それだけの仲間意識は出来ている。

そして、休みの日にまず俺一人で様子を見に行くことになった。皆で行くことも考えたが、逆に皆がいると話難いこともあるかもしれないという話になったからだ。

クルスと一緒に行きたいと言ったが、女の子相手では言えない話もあるだろうということもあって却下された。

そして男性陣の中でマイスとヘインでなく、俺が選ばれたのは二人からの推薦だ。

口下手のマイスと相談されても受け入れられないかもしれないと言ったヘインから任されたのだ。

彼らははつきりとは口にはしなかったが、俺とクルスが仲良くないた時のことも考えていたようだ。

勿論俺が無理なら全員で、ということになっている。

しかし、任されたからにはなんとかしたい。責任は重大である。

「やあ、ホルス。探したよ」

「やつぱり君が来たか。というか良く見つけたね？」

翌日、ホルスを探すのはかなり大変だった。

家を訪ねたら森へ向かったと言われ、広い森の中をステータス閲覧を利用して探し回る羽目になったからだ。

「邪魔したかな？」

「いいよ。休憩しようと思っていたし」

ホルスは木刀をぐるぐるに縄を巻いた木に向けて振っていた。

木刀も縄もぼろぼろだが縄そのものは新しいもののようにも思える。

休んでいても訓練はしていたようで訓練に飽きたとかそういう理由ではないらしい。

「他の三人も来たがったけど無理に俺に任せて貰ったんだ」
「それは嘘だなあ。クルスは君が来るなら来るだろうけど、マイルとヘインは君を頼りにしてるから」

怒ってる様子もなく微笑んで……元々笑っているように見える顔だが……まあ実際に微笑ましいといった感じで笑っている。
まだ11歳のはずなのに、彼は本当に人をよく見ている。

「俺は結構ホルスを頼りにしてるけどね」
「それはどうだろう。本当に君は誰かを必要としてるか？」

まるで禅問答のようだ。しかし、冗談といった風はなく彼は真剣な表情だ。
しばらく、二人の間を沈黙が流れる。

「昔は一人がいいと思っていたけど、今は皆がいてくれないと駄目になりそうだよ」

「……まあそれも本当そうだね。君は賢いのに嘘がつけないし」

ふう……と彼は長いため息を吐いた。

「僕もそうみたいだ。一人だと駄目そうだ。くっ……」

「そか」

彼はどさつと落ち葉で埋もれている地面に腰を下ろした。

先程までの何時も通りの表情が嘘のように、がつくりと落胆した顔を地面に向けて頂垂れる。

そして、嗚咽を必死に噛み殺している。

手を見るとぼろぼろで、血豆が潰れている。

何を想ってこんな手で剣を降っていたのだろうか。

俺は彼が落ち着くのを待つ意味も込めて、普段持ち歩いている傷にいい薬草を使って何も言わずに手の治療をした。

薬草を彼の手に塗って、包帯を巻いていく。

巻き終わると、俺は木に背中を預けて彼が落ち着くのを待つことにした。

しばらく拳で地面を叩いたりしていたが、小一時間も立つと彼も落ち着きを取り戻してきた。

ただ、表情は冴えない。

「聞いてもいいかな」

「……どうしようもないんだ。いつも悩んでた……どうすればいいのか全然わからない！」

心の底から呻くような声。

人当たりがよくて頭の回転も早く、なんでも器用にこなす彼がこ

ここまで深く悩んでいるとは俺は思っていなかった。

「なんで！なんで！君なんだよ！！」

「ぐっ！！」

力なく座り込んでいた彼が急に立ち上がり、近づいた俺の胸倉をがしつと掴む。

彼の叫びはどことなく追い詰められたような雰囲気を感じられる。

「實力もある、頭もいいじゃないか……何で魔法まで君なんだよ！」

「……」

「僕はマイルスに勝てない。ヘインにも知識で勝てない……君にもクルスにも……」

そう叫び、やるせない気持ちを噛み締めるかのように彼は歯を食いしばる。

ホルスの能力は平均的だ。

マイルスのように力に秀でているわけではなく、ヘインのように知識や集中力に優れているわけでもない。

誰に一番近い能力かと問われれば俺だろう。

苦手なものがない代わりに突出するところもない。

ホルスは一度手を放し暫く下を向いていたが、きつ！と顔を上げると今度は殴りかかってきた。

顔を殴られ、思わず後ろに下がる。

「いたた。手加減ないな」

「く！」

これくらいの痛みは普段の訓練で慣れているし、殴られる瞬間に後ろに下がって威力を落としている。

相手もそれ程効いていないのがわかっていているのだろう。

ホルスはこちらを睨みつけ、油断することなく構える。

表情からは憎悪しか読み取れない。

俺もホルスに対して重心を落として構える。

殴られて黙っているほど自分も大人しくない。

ホルスはマイスほどではないが体格が俺よりも優れており、身長も体重も上だ。

リーチの差もかなりあるため油断は全くできない。

「やられたからにはやり返すぞ！」

「負けるもんか！」

いつも飄々としているホルスとの殴り合い。

本気の彼とやりあうのは初めてかもしれない……いつもは搦め手を多用する彼は、なりふり構わず我武者羅にこちらに向かってきていた。

接近戦になれば力とリーチに優れるホルスに優位がある。

だが、本気であればあるほどホルスの冷静さという長所は消えてしまう。

いつもは付け入る隙が見つからず、長期戦に持ち込まれることが多いが今日は一発一発の攻撃が危険なものの戦い易い。

十分ほどの戦いの後、俺はぼろぼろになりながらもホルスを倒すことにぎりぎりで成功した。

「はあ…はあ…」

「あたた……やっぱ負けたか」

ホルスが大の字になって地面に寝転がる。

先程までの憎悪は無く、幾分すっきりしたように見えた。

「全く、勘弁してくれよ。ほんと疲れたし痛いし」

苦笑しながら左手で頭を掻く。

拳が頭を掠ったときにどこか傷が出来たらしく、手に血が付いた。

「ほんとごめん、八つ当たり」

「だよな。まあ俺もいっぱい殴ったしいいよ」

寝転がりながら彼は俺に謝った。

微かに笑っているような色が混ざっていることに少し安心する。

「どうすればいいと思う？」

「実力ではヘインに勝ってるし、知識ではマイルスに勝ってる。クルスはまあ……特殊だからなあ」

「やっぱそれしかないのかな」

元々そんな屁理屈は考えてはいたのだろう。ホルスはそれを聞いて逃げっぽいと苦笑するが、俺は別にそれでもいいと思っていた。彼の本当の強さは冷静さと判断力、そして、人を見る目だ。これは俺には絶対じゃない。

「ホルスの強さは技術以外の所にあると思う。一対一より多対多の方が向いてる気が……そうだ！今度将棋やろう」

「将棋？」

「うん。前作った遊びなんだ。ゲームのルールは後で説明するよ。それから……」

俺は少しだけ考える。

これを話せば、何故そんなことが出来るのか疑問に相手も思うだろう。

ここで話さなくても彼は自力で立ち直るに違いない。だけど……それでも、ここで話さないのは不誠実で友人を裏切ると同じな気がした。

「体術では俺はホルスより経験した時間が長い。剣術や知識もそう。

「ただ経験がほとんど変わらない技能が一つある」

「……どうということ？」

ホルスが体を痛そうに体を起こして困惑したようにこちらを向く。
なんとか立っていた俺も地面に腰を下ろし、座り込んで彼の顔を正面から見えていった。

「俺には魔力の有る無しがわかるんだ。他三人にはないけどホルスには魔力がある」

「つまり、僕には精霊魔法が使えるってことか……。嘘じゃないみたいだね。何でそんなことがわかるのかは……。聞かないほうがいいんだろうね」

話が早くていい。俺は頷いた。

「なるほどね。俺も君に勝てる目があるわけだ」

「簡単に負ける気はないけどね」

にっとホルスが笑う。

いつもの飄々とした人の良さそうな、けども不敵な笑みだ。
先程までの暗さはなかった。

「さっきの八つ当たりで気分も戻ったから、また頑張っていつか君たち全員に勝つつもりだったのになあ。すぐにケイトに勝っちゃい

「そうだよ」

「だから無理だって」

やれやれとホルスは苦笑し、立ち上がって頭を下げた。

「本当に迷惑かけたね。ごめん」

「別にいいよ。俺も悩んだら頼む」

俺達はお互いぼろぼろの顔で笑うと自然に右手を差し出し、お互いの手を掴んだ。

「そついや、魔力のあるなしわかるんだったらあんなにクルスに引付く必要無かったんじゃないか？」

「う……」

「それにエルフさんにもあんなことしてもらったわけか……むっつりスケベだね」

「く……元気出たら本当にやなやつだな！」

その後やいのやいのいいつつも、ホルスは精霊を呼出すことに成功した。

彼の顔は当たり前といった感じの中にもほっとしたのが見えていた。

前に精霊魔法が使えなかったのは、迷っていて集中できずにいたからかもしれない。

後日ホルスと将棋をしたところ、ルールを覚えてばかりの彼に俺は手も足も出ず惨敗した。

自分も密かに自信があつたので割と本気で泣きそうになった。

第十五話 祭りの前

8歳の夏もあつさりと過ぎさり、クルト村にとって最も重要な実りの秋が近づいてきた。

ホルスは一時は気持ちの揺れが見られたものの、何時の間にか何かをきっかけに完全に吹っ切れたらしく、明るく日々を過ごしている。

ただ、なんとなくだが変わった気がしている。

それはそうと秋……というのはこちらの世界に来てから特別な意味を持っている。

農業が主産業の我が村では、収穫という一年の総決算的な仕事とその後には控える収穫祭という一年で最大の行事が待っているのだ。ある意味一番忙しい季節である。

収穫祭では同時に成人の儀式も行われる。

村では成人年齢は男女問わず16歳であり、うちの次兄も来年に成人を控えている。

16歳になれば大人として完全に認められ、結婚や農地、職業を継ぐ権利とそれに伴う義務を負うことになる。

名実ともに子供時代の終わりを意味していた。

収穫も終わり、収穫祭も翌日に控えて村中が準備で忙しくなっていた時、俺達五人も祭りの食べ物調達するためにいつも以上に狩りに力を入れていた。

鹿二頭、猪一匹、鳥六羽を仕留め、大漁な成果に笑顔で村の祭りを準備している場所に獲物を運ぶと村の準備をしている大人たちから歓声上がる。

さらにその周りで細々とした仕事を大人の指示を受けながらやっている子供達もはしゃぐような歓声を上げた。

祭りの準備は老若男女関係なく全員で準備を行っているため、色んな世代から視線が集まっている。

「へ、こういうのも悪くねえな」

猪を仕留めたミスはそんな視線を受けて嬉しそうに笑う。
ヘインとホルスも悪い気はしていないようだ。

「じゃあ、先帰っていいよ。後やっつく」

「ああ、ケイト。頼んだよ」

狩りが長時間行われた上に大物が相手だったので体力が比較的低い彼には大変だったろう。

やせ気味で表情にはちょっと疲れが見えるヘインが心底疲れたように呟いた。

村長の息子という立場もあり、皆との相談で肉の配分の調整を俺がすることになっていたのである。

俺とまるで当たり前のことのようにクルスが残り、三人が手を振って帰って行く。

配分そのものはそれ程時間は掛からず、15分程で終わった。

元々歩きながら考えていたのもあるが、殆ど大雑把に分けるだけだったからだ。

毎年のことだが誰がどの料理を食べるかなんて酒が入る途中からは誰も覚えてないし、結局どうでもいいことなのだと思う。

そんな無意味な時間を過ごして、帰りはクルスと二人並んで歩く。隣を歩くクルスとの距離は手の甲と甲がたまにあたるくらい近い。身体の距離が心の距離とするなら、俺たちの友人関係も大分深くなっているのではないだろうか。

つらつらとそんなことを考えて暫く歩いていると急にクルスが立ち止まった。

そして、ぼつりと呟く。

「なにあれ」

その言葉に俺も前を見ると、遠くでマイルスが三人組の少年に囲まれているようだった。

ホルスとヘインは今いる場所より前で別れているはずだし、遠くで見え辛いがマイルス以外の三人組みは他の少年に間違いない。

相手の身長はマイルスと変わらないくらいにあるので成人少し前と言った所か。

「さてどうするかな。」

「様子見。」

先ほどまで機嫌よく歩いていたクルスが若干不機嫌そうに即答する。

少しだけ考えて、どちらかというと彼の心配より相手の心配をするべきだろうということに気づく。

いざとなったら止めないと……と、苦笑いして左手で頭を掻きつつ、少し話が聞こえるところまで近づくことにした。

すると争う声が聞こえてくる。

「格好つけんなよ！」

「そいつがのろまだから悪いんだろ。どけよ」

マイルスは黙って立っているだけだ。

恐れているなんて有り得ないから、おそらくどうするか悩んでいるだけだろう。

よく見るとマイルスの後ろに背の低い女の子が隠れていた。なんか、既視感が……。

三人相手だと女の子に被害が行く可能性もある。

それでも負けないだろうが……喧嘩しない方が平和で良さそうだ。

俺は早めに助け舟を出すことにした。

「そこで何してるの？」

「お前らなんだよ。子供はさっさと帰れ」

「……やるの？」

穩便に会話で終わらそうとした所にクルスが割り込む。

ぎっ……と、相手を下から本気で睨みつけると、マイスを囲んでいた三人は一瞬びくつと震えたあと、悪態を吐いて去っていった。

「あー。すまんな二人とも助かったぜ」

「どういたしまして」

マイスが俺たちに苦笑いしながら手を上げる。

声にはいつもの元気がなく、少しだけ落ち込んでいるように見えた。

「昔の自分の無様さがようやくわかった気分だ。あんなに格好悪いとは……」

「まあそのなんだ……気にするな」

「私も気にしてない。それより彼女」

クルスがマイスの後ろで怯えていた茶色い髪をポニーテールにした小柄な幼い感じの女の子に顔だけ向ける。

美人ではないが細身で穏やかな感じの可愛らしい感じの子だ。
一つか二つ上くらいだろうか。

「同年代で見たことないな……そいや誰だ？」

「あ、その……リイナといいます。貴方はマイルス君……だよ。エレンちゃんの所の」

「そうだけど」

マイルスは覚えがないと言った感じで困惑したように首を傾げる。
エレンというのは男勝りな気風のいい性格の二つ上のマイルスの姉だ。

うちの姉とも友人で会うと大抵ひどい目にあうので俺は苦手だった。

「わ、私あの子の友達なの。さっきはその……あ、ありゅ……ありがとうございました！」

顔を真っ赤にして必死な感じでマイルスに90度で頭を下げた。
なんだか見ていて微笑ましい気分になってくる。

「しかし、姉貴をちゃん付けで呼ぶなんて度胸あるなあ」

「え……だってエレンちゃん年下だし……」

「……え？」

三人とも驚いて思わず声を出してしまう。

「わりい。俺と同じ歳くらいだと思ってた」

「うう……いつも言われるんだよね。どんくさいせいでみんなにも怒られたし……はあ。明日どうしょ……毎年憂鬱……」

マイスが平謝りし、困ったようにリイナは呟く。

明日の話は恐らくは祭りでの夜の踊りの相手のことだろう。

祭りの日に友人や気に入った相手とキャンプファイヤーで踊るのだ。

若い男性や女性にとっては恋人や結婚相手を探す場でもある。

「姉貴は……無理か。うーん」

「……マイスと踊ればいい」

「俺か？」

リイナにクルスがそう提案する。

マイスは嫌といった感じはしないが多分何も考えていないだけだ。

「え！……でもマイス君って人気でしょ……私なんか……悪くないかな？」

不安そうに、自信なさそうに呟く。

マイスは本人は知らないが女性の間では本当に人気になってきていた。

畑は継がないものの生活手段は既に確保しており、弟思いで知られていて性格は悪くない。

男らしくて顔も悪くない……そして、今のところ年齢的に当然だが女性の影が無い。

そんな感じでかなりの優良物件として現実的な女性達に狙われている。

「別に相手なんていないしいけど」

「え、ほんと！」

ぱあーっと、リイナがマイスを見上げて本当に嬉しそうに顔を輝かせる。

彼女にはそんな裏はあんまりなく、彼と踊れることを単純に喜んでいるように見える。

マイスはそんな彼女の邪気のない明るい笑顔を見て、照れたように顔を少し赤くしてそっぽを向いた。

なんだか祭りが楽しみだ。

「ケイト。私も踊ってみたい」

「うーん、相手どうする？」

「ケイトがいい」

恥ずかしいんだけどなあと思いつつ、まあいいかと俺は彼女に頷

いた。

第十六話 収穫祭 前編

準備も終わり、後は収穫祭の開催を待つだけになった朝、我が家も普段より賑やかな朝になっていた。

女性陣はお洒落に着飾り、男性陣も身だしなみの確認に余念がない。

俺は普段通りで行こうと思っていたのだが、姉に見つかり俺のために作ってくれていたらしい新しい服を着ることになった。

「今日は楽しみね」

姉が何故かこちらを見てにやにや笑う。

なぜ俺の方を見て……と、その時は理解できずに首をかしげた。

村の広場では昼ごろには宴会は始まり、にぎやかな音楽と陽気な踊りで盛り上がっている。

美味しそうな色々な料理の匂いが鼻をくすぐった。

俺がそんな中を歩いていて一番初めにあった知り合いは男女の二人組だ。

「やあマイス……とリイナさんだっけ」

「ああ。ケイト」

「こ、こんにちは！」

昨日と違ってポニーテールは地味な色から明るい赤色のリボンに変えられていて、服装は落ち着いた色で整えている。

それが背が低く、子供っぽくみられがちな彼女を昨日よりちょっとだけ大人っぽく見せていて似合っていた。

だが、緊張して固まっている様子を見ると彼女には悪いが兄と妹にしか見えない。

「今日はゆっくり一緒に回りなよ」

「わかってる。行こうぜ。リイナ……さん」

「リ、リイナでいいってば」

なんか、相性良さそうだなあとそんな二人の様子に安心する。

二人つきりにしてあげる方がいいだろうと思ったので、俺は約束があるからと場所を変えた。

そういうわけで、村の中をゆっくりと歩いていると珍しい組み合わせに出会う。

カイル兄さんとホルスだ。

まだ遠いので話はわからないがなんだか仲はよさそうに見える。接点はなかったはずだが……。

「ケイト」

後ろから聞きなれた小さな、だかはつきりした声が掛かる。
この声はクルスだ。

毎年のことだが、俺は彼女と祭りを回っている。

今年も特に約束はしなかったが、夜……というか夕方から始まる踊りを一緒に踊る約束をしていたので今年も一緒に回ろうと考えていた。

そして、彼女を一目見て絶句する。

彼女が初めて女の子と知ったとき以来、彼女は多少身だしなみに気をつけるようになったがこれまで殆ど女の子らしい格好はしてこなかった。

髪の毛が伸びたくらいでまだまだ中性的な感じがしていたのである。

それが今日は綺麗に梳いた黒髪に白いリボンを付け、フリルの付いた可愛いワンピースを着ている。

彼女はいつもの無表情ではなく、顔を真っ赤にして俯いていた。
普段との差もあり、本当に驚く。

年相応の少女らしい格好をした彼女は鼻根なしに、同世代で一番可愛いと思えた。

「ケイト……？」

黙ってまじまじと見ていた俺の顔をクルスが不安そうに窺う。

「ほんと可愛くなったなあ。」

「ケイトも何時もより格好いい。」

うまい言葉も出ずに左手で頭を掻いて少し苦笑いしながらしみじみと呟く。

そんな俺の様子にクルスはたまに二人でいるときだけ見せる微笑みを見せて喜んでいた。

俺は騒がしい場所は好きではない。

祭りは楽しくて見るのは好きだが、どうにも自分の居場所でない気分になるからだ。

こんなとき、普段はすっかり馴染んだと思っけていても異邦人のような気分になってしまう。

あまりこういう暗い気分の散歩にクルスを付き合わせたくはないのだが、元々騒々しいのは苦手な彼女は別にいいと一緒にゆっくりと歩いてくれていた。

その代わりと、何度か躊躇して手を彷徨わせた後、はにかんで笑って手を繋ぐ。

呼吸が止まりそうになる……笑顔も大分上達したようだ。

「マイス達上手くいきそう」

「見てたか。クルスがそう思っんなら大丈夫そうだな」

雑談をしながら手を繋いで歩く。
会話が途切れることも多いが、途切れても気持ちのいい沈黙といった風で不安感はない。

適当に歩いたところで串肉を二人分もらい、広場の隅で急作りの木製のベンチに座って齧りながら村の人々を観察する。

客観的に眺めてみて、村の人々はみな一様に楽しそうで幸せそう
で今日という日を楽しんでいるように思えた。

「楽しそうだね」

「だなあ」

クルスが嬉しそうにぼつりと呟き、俺はそれに答えて返事する。

「クルスは俺といて楽しいか？」

「楽しい」

俺はあんまり面白みがない人間だと思っている。

だけど、クルスは即答した。

彼女がそういうからにはそうなんだろう。

本当は俺は俺以外の人とクルスも楽しんで欲しいと思っていた。
俺とこのままいれば人間関係がほとんど広がらないまま、普通の
子供時代がなくなってしまう。

将来、数少ない仲の良い人間である俺は村からいなくなるのだ。

だけど俺たちはこうして二人でいる。

俺も彼女をあまり拒まない。俺は彼女を守っているつもりで甘えているのだろうか。

ただ、今彼女は幸せそうな表情をしており、俺も幸せを感じている。

「ケイト。口についてる」

「あ、いって。汚れるぞ」

気分が悪くなったのは急のことだった。

服とお揃いの刺繍が入った白いハンカチで口元をやさしく拭いてくれる……そんな行為に何故か鳥肌が立つ。

自分でも良く解らない。

自分では嫌ではないと思っているのに。

これは何だろう。

「ケイト？」

「あ、あなんでもないよ。ありがとう」

理由のない、理解できない、吐きそうになるような不安を咄嗟に取り繕って笑う。

クルスに余計な心配をかけたくなかった。

理由を考えずに思考を放棄する。

わからないことは考えない、それが俺の主義だ。

本当はわかつているのに……逃げて思い出すことを拒否しているのだろうか。

気分が悪かった。

「ケイト。大丈夫？」

「あ、うん。立ち眩みしただけだから。また少し見て回ろう。夕方まで時間あるし。」

嘘が通じたことがない、何かを見抜くような明るく美しい瞳でクルスは見つめ、言葉を探すような仕草をする。

適当な言葉を言わないための彼女の癖だ。

ワンピース姿の可愛い彼女にまじまじと見つめられると見慣れているはずなのに新鮮で照れてしまう。

「ケイト。悩みがあるなら私は聞く」

「その時は頼むよ」

俺の冗談めかした返事に怒る様子もなく彼女は決意したような表情できゅっと手に力を入れて頷き、村の方に向き直る。

握られた手の暖かさに幾分癒されて気分がましになり、雰囲気で顔色がよくなったのが判ったのかクルスは安心したように微笑んで

力を軽く抜く。

再び二人の間を穏やかな時間が流れていた。

「私は幸せになりたい」

暫くぼーっと楽しそうに踊る男女の方を見つめていたが、唐突に彼女は小さく呟く。

誰にも自分にも言っていない感じで無意識で呟いたような空虚な言葉に思える。

「クルスは幸せになるよ」

「そう……………だよね」

弱々しく、だけど語尾と繋いでいる手に力を込めて彼女は頷く。

俺がいなくとも……………という言葉は流石に言わなかった。

そして何をするでもなく、ゆったりとした気分で椅子に二人並んで座っていた。

空は徐々に朱さをまして、昼から夜へとその姿を変えようとしていた。

第十七話 収穫祭 後編

辺りが暗くなると煩いほど鳴り響いていた音楽も止まり、村人全員が広場に集まってくる。

毎年この時期になると俺たちの住んでいるこの小さな村にこれほどの人間がいるのかと驚かされる。

俺達も集まった人々の一番後ろに並び、収穫祭のメインイベントが始まるのを静かに待つ。

クルスの視線も父が出てくる手はずになっている台の方に待ちきれないといった感じで視線を注いでいた。

まだ開催まで少しだけ時間があるので周りをよく見ると、近くには猟師のガイさんとクルスの母親であるメリーさんの姿や、薬師のジンさんとエリー姉さんの姿も見える。

クルスは母親似で、髪の色は当然として、目元や口元がそっくりだ。

違うのはクルスのように鋭い感じはなく、おっとりとして穏やかそうで、まあ年齢差があるので当然だが色っぽい。

猟師のガイさんは結婚を申し込む前に、荒っぽい感じを出す原因になっていたトレードマークの髭を完全に剃り、結婚して一年以上経っているのに未だに彼女の隣だと緊張しているのか直立不動で立っている。

余程彼女のことを好きだったのだろうか。

一体どんな思いでこれまで彼女に関わってきたのだろうか。

なにせよクルスの事件があつて、彼らは急速に距離を縮めた。

クルスはガイさんのことは元々わかりにくいが大人として慕っていたので、プロポーズの時に彼女の方から頼まれて一緒に色々協力したが、あときは本当に楽し……いや苦労したものである。

不器用な大男も今日は楽しんでいるようだ。

一方、渋く着飾ったジンさんの方はなんだか苦々しい顔をしている。

にこりともせず立っており、腕には笑顔満面のエリー姉さんがくっついていた。

どんな殺し文句で誘ったのだろうか。

十二歳になった姉は成長期なのか背がかなり伸びた。

元々、持っていた溢れんばかりの生命力は昔から少しも変わらず、それでいて最近では大人っぽい仕草をすることも増えていた。

子供と大人の間の不思議な魅力の持ち主とでもいうべきか。

家事に料理に裁縫、掃除も女性らしいスキルは万能で、生活もかなりの部分に食い込んで来ていて着々と外堀は埋まっているようだ。

冒険者仲間の反対を押し切って結婚した母に一番似ているのではないだろうか。

俺とクルスはそんなざわざわと騒がしい場所で静かに始まるのを待っている。

しばらくすると準備も終わったのか、父親である村長が台の上に

登った。

皆のざわめきが一旦止む。

「あー。クルト村の村民諸君。今年も幸いにしてこの日を迎えることができた。皆のおかげだ。これから厳しい冬が来るが、今年も乗りきれんだろう。今日の収穫祭ももうすぐ終わってしまうが最後まで楽しんでいって欲しい。では、点火を。そして音楽を！」

わああああああつと皆の拍手と歓声が上がり、明るい音楽が流れ始める。

毎年の傾向だと終わりに近づくに連れてしつとりとした音楽になつてくるはずだ。

楽器を扱う人たちにとっても今日は腕の見せ所だ。

様々な趣向をこらしており、いろいろな盛り上げ方を今日のために考えているのだろう。

広場では酒や料理が振る舞われ、飲んで食べて騒いでいるものもいれば、独り身の男女が相手を探しているものもいる。

相手のいる者は二人で周りを忘れて踊り、疲れたら食べて飲んで騒いでいたりする。

広場には悲喜交々、様々な人がいた。

ちらりと周りを見るとベンチに座っているヘインと楽しそうに相手を探しているホルスが見えたが一瞬後には隣の少女の声で現実に引き戻される。

「ケイト。私たちも」

「そうだな。今日は……楽しんで！」

満天の星空の下、薄暗くなった世界で白いワンピースを着たクルスが薄らと炎に照らされる。

、都会のような光のない暗い空はその代わりとして無数の宝石のような星々が輝いていて、闇の濃さを和らげる炎の光は彼女を闇の中ではつきりと映し出して、幻想的に魅せていた。

俺はそんな彼女と手を重ねて、皆が踊っているところへと場所を移動する。

正直踊りはみんなのを見て覚えただけで全然自信が無い。

クルスの足を踏まないようにだけ気をつけようと考えていた。

だが彼女は俺とは違った。

相当練習したのか、自信に満ちた表情で俺をリードしながら軽やかに踊ってくれる。

ただ、二人無心に踊る。

言葉は必要なかった。

休み休み二時間も踊ったころ、音楽は大人用のしっとりとした音楽がメインになってきた。

俺達はそこで踊ることをやめて、静かな場所で休む為に移動する。

よく見ると、広場で踊る男女も心無しか少なくなっているように思えた。

広場から離れ、俺たちが訓練を終えた後にたまに休んで行く坂で二人並んで座る。

その辺りは背の低い芝生で覆われていて座り心地がいい。服が汚れるのが難点だが洗えば取れるだろう。

心地のいい疲れを感じている俺の隣で座るクルスは機嫌良さそうに頭を肩に載せていた。

「楽しかった」

「こっこのもたまにはいいかもな」

いつもより陽気な彼女の言葉に俺も頷いて同意する……が。

「来年もこうしていたい。ううん……ずっと」

「ずっとは無理だよ」

自分でも信じられないくらい冷たい言葉が出てしまい、言うてからはっと我に返る。

クルスも驚きで目を見開いた。

動揺しながらも言葉を探して慌てて彼女に言い訳をする。

「あーうん。お互いほら好きな人ができるかもしれないし」

「……できないよ。私はケイトがいい」

「そうでもないさ」

クルスが少しだけ泣きそうな顔でこちらを見る。

単純にずっと一緒にいられると信じているのは子供だからなのか
どうなのか。

ここで突き放すべきなのだろうか……いつまでも自分とだけ一緒
では……。

「大人になったら気持ちも変わる」

「そんなことない！私はケイトを……ずっと守るって決めた！」
「変わるんだ！！」

思わず感情的に叫ぶ。

クルスは体をびくつと震わせ驚いたようにこちらを見る。

「じ、ごめん」

涙を浮かべているクルスに思わず謝る。

自分の叫びをどこか冷静なもう一人の自分が聞いていて、おかげ
でようやく気づいていた。

前世で自分が何一つ納得できておらず、何も自分の中で解決でき
ていなかったことに。

子供なのは彼女ではなく自分なのかもしれない。

「でも俺は……ずっとなんて約束できないから。ごめん」

ずっと好きだった幼馴染の気持ちがあっさり変わったことは、今でも信じれていない。

後輩はゆっくりと心を癒してくれたが、自分の心を自分で解決する強い心はというと死ぬまでもつことはなかった。

そして、きっと今でもその勇気を持つ事が出来ていない。

「……初めてケイトの本当の声、聞いた気がする」

立ち上がって頭を下げる俺にクルスは怒るでもなく悲しむでもなく、微笑んでいた。

彼女もゆっくりと立ち上がる。

「ケイトが私を好きでなくなってもいいよ」

「え……？」

「私は……負けないって約束したから。ケイトが信じてくれるまで、ずっと一緒にいるから。ケイトが嫌がっても」

子供だから……という思いは完全に消えていた。

子供だろうがなんだろうが、長い付き合いから彼女は絶対に本気で言っていると確信できる。

「それでも無理だよ」

「逃がさないから。ケイトも逃げないで」

無茶を……と思う暇もなかった。

クルスが、俺の顔を両手で挟み不意打ちでキスをしたからだ。
子供っぽい口を軽くつけただけのキスだがそこに込められた感情は重い。

「私とケイトの勝負」

一言だけ呟くと彼女は艶やかに笑い、自分の家の方に走り去っていく。

顔が真っ赤だったのは炎のせいだけではあるまい……後には呆然とする俺だけが残されていた。

第十八話 成長

秋の収穫祭も終わり、厳しい冬もあつという間に過ぎていく。

表面的には俺達5人の関係は変わらずに続いているが、収穫祭の一日をきっかけに僅かながら皆がそれぞれに変わっていったように思える。

無邪気なだけの子供時代が急に終わってしまったような。

無条件の信頼だったのがそうでなくなったような。

寂しいようなそれでいて頼もしいような……そんな不思議な感覚を感じていた。

俺も以前のようにクルスといてもゆっくりとした気分ではいられなくなっていたし、マイルスは祭りの日以来なにかとリイナを気にかけている。

ホルスは兄と休みの日にはよく一緒にどこかへ出かけているし、何やら悩んでいるようなヘインは休みの日もジンさんの家の書庫に籠るようになっていた。

変わらないものはない……そうとは頭で理解していてもやはり少しだけ寂しい気がする。

変わってないように見えるクルスとて内心はどうかかわらない。

自分の態度が他所他所しくなっても彼女は以前と変わらない。

彼女は自分の宣言どおりに、行動しているのだろっ。

俺自身はどうすればいいのか、そう自分に対して悩むことは以前

と比べ物にならないくらいに増えた。

前向きに……そう、前向きに答えをだそう。

そのときには手遅れになっているかもしれないが……答えは必ず出す。

それだけは情けないと思いつつも心に決めていた。

そんな風に日々俺達は変わっていても日々は変わらずに過ぎていく。

俺達は誰一人やめることなく訓練を続けていた。

ある日、俺は一对一でヘインと話をしていた。

調査中にはお互い話すことはないために周りに他の誰もいないのは珍しいことで、この日はたまたまクルスが風邪を引いて休んでいたのである。

この世界でも冬は風邪を引きやすい。

クルト村では薬師がいるので死人がでることは少ないが。

ここ三年でヘインはめつきり口数が少なくなった。

気弱そうな部分が表にでることが少なくなり、意識してのことなのかどうかかわからないが段々と師匠でもあるジンさんに似てきている。

「最近、クルスと喧嘩したか？」

何か話をするつもりなのか戸惑ったあとに出た第一声がこの言葉

だった。

俺は驚いて歩いていた足を止めてヘインの方を向く。
彼は切れ長の目で俺の方をじっと見ていた。

「どうしてそう思う？」

「お前を見て思ったんじゃない。クルスを見てそう思った」

俺にはクルスがいつもと同じように見えていたが……
彼にとっては違ったらしい。

「まあ勘だけだな」

「当たらずも遠からずかな」

この友人も良く見ているようだ。と左手で頭を掻いて苦笑する。
付き合いの長い自分は全然わかってなかったのに。

「喧嘩じゃない……意見の違いといつかなんとかいうか」

「そうか。僕はなんであるうが早く解決してあげて欲しいと思っている」

「理由聞いていい？」

彼は三歳上なだけあって、俺を上から見下ろすような形になる。
だけど、彼の態度は年下に対するものでなく、対等の立場として
俺を扱っている。

彼は僅かに悩んだ後、

「うまく言えないが、見ていられないというところか」

「そんなに辛そうだった？」

「そうでもないが……自分を見ているようで嫌だ」

心底嫌そうに呟く。

彼はそういえば好きな人……つまりはエリー姉さんとうまく行っていない……というか望み薄だ。

とはいえ彼自身は本当に本気なのかもしれない。

「原因はお前しかないからな。なんとかしてくれよ」

「善処するとしか言いようがないよ」

真面目な顔で言うヘインに俺は苦笑を返した。

彼はその返事に苦虫を噛み殺したような顔をしていたが、やがてふと思い出したように言う。

「そうだった。いい機会だから相談に乗ってくれ」

「わかった」

再び歩き始めた俺達だったが、また歩みを止める。

そして、座りやすい場所を選んで二人で腰を下ろした。

「実はまだ悩んでいるが、迷宮都市にある学院に入学したいと思っている」

「ええっ！すごいじゃないか」

「薬草学なら迷宮関連だから、結果を残せば金掛からないらしいし」

彼が言っている学院は迷宮都市が管理している大学のような施設だ。

一般の学科もあるが、迷宮に関連する人材を養成するため、迷宮に関係する学科に関してはある程度優秀でさえあれば、卒業後に何年か迷宮都市で仕事をするを条件に学費が免除される制度を持っている。

「あそこには大量の本があるらしいから。まあ、論文を送って審査を受ける必要があるが……。受ければすぐに行きたいと僕は思っている。時間はかかると思うけどいつか……」

彼も将来について、本気で考えていたのだろう。

いつの間にか大人の眼差しになっていた。

祭りのときにベンチに座っていたのもこのことで悩んでいたのかもしれない。

俺はエリー姉さんのことでいつもどおり悩んでいるのだと簡単に考え、全然気付いてあげることが出来なかった。

だけど彼は自分の気持ちよりも将来を考えていたのだ。

「僕は君たちみたいに冒険するのは無理そうだからね。怖がりだし頭も固いし身体も強くないし」

そう呟いて苦笑する。

「どう思う？」

「ヘインの答えは決まってるんじゃない？」

彼の質問にそう返すと一瞬きょとんとして違いないと笑う。
久しぶりに見る晴れやかな笑いだった。
だけど、俺には気になることもある。

「不躰な質問していいかな」

「いいよ」

「エリー姉さんのことはいいの？」

彼は昔から彼女が好きだったし今でも間違いなくそうだ。
だからこそ、彼に聞きたかった。
彼には悪いが自分のために。

「彼女はジンさんの事が好きで多分それは変わらない。僕はそんな真っ直ぐな彼女が好きだったんだ。なら僕は彼女の幸せを応援したい」

「本当に？」

「まあ正直辛いけどね。僕は祝福してみせる。僕は乗り越えて……いつかジンさんより立派になって彼女より素敵な人を見つけるよ」

彼は拳に力を入れて真剣な表情で、後半はいたずらっぽく笑ってそう語る。

その笑みに無理をしている様子はなく、未来を楽しみにしていることが伺えた。

「こんなところで参考になったかい？」

「は？……あ」

「僕もたまには歳上らしいところを見せておかないとね。友人のためにも」

いつも神経質そうに難しい顔をしている彼の表情は穏やかだった。彼は何も俺に相談してない。

初めから俺の悩みを彼なりに考えた上で、わからないなりにも反対に相談に乗ってくれていたのだ。

きつと、エリー姉さんの話を俺から切り出さなくとも自分から話していたに違いない。

「ケイトは僕とは違うんだから、なるべく早く答えだしてあげなよ。……というか、君らは本当に子供らしくないよなあ。僕の8歳のときなんてもう思い出すのも恥ずかしいけど」

懐かしいものを思い出すような口調でヘインは言った。

俺は左手で頭を掻いて、

「ヘイン。有難う」

「どう致しまして。役に立てたなら嬉しいよ。僕がこんなことをしているのも君のおかげだしね。」

一言礼を言った。

彼は笑ってその礼を受け取った。

いつのまにか友人達も子供から少年へ、そして大人へとゆっくりと成長していたのだろう。

元々年齢的には大人であつたはずの自分だけが成長していないのではないか、そんな不安に駆られる。

だが、同時に辛いはずの話を自分のためにしてくれた友人の厚意を無駄にするまいと、俺は心に誓っていた。

第十九話 一步

春が過ぎ、肌を焼く強い日差しの照りつける夏が来て俺とクルスは9歳になった。

今の年齢では一年くらいでは、体格もなにもほとんど変わらない。ただ、ほんの少しだけ伸びた身長が俺達の身体が成長していることを教えてくれる。

ヘインと話した日以来、クルスと一緒にいる苦痛は前よりも少なくなかった。

感じないわけでもないが、半分は開き直ったともいえるかもしれない。

将来のことは大事かもしれない。

裏切られるかもしれない。

だけど、それまでは恋愛抜きにしてもいい関係を築いていこう…

…そう考えたのだ。

その上で成長して大人になったとき、お互い答えを出せばいい。

これは問題の先送りだろうか。

その時に好きになっていたら、クルスが俺を好きでなくても彼女を好きになれるだろうか。

正直言って自信がない。

そう考えるとクルスはすごいと思う。

ヘインもだ。

彼は好きな相手に幸せになつて欲しいと言つた。

これも一つの答えだし、それを自分で考えて決断したのは勇氣のあることだと思う。

それに、彼は今まで小さい村しか知らないのに何も分からない外の世界に行こうとしている。

俺も怯えてばかりいるわけにはいかない。

どうするか悩んだ後、俺は久しぶりにクルスの家へと足を運ぶ。

よく考えれば向こうがこちらに来てても自分からこちらに来ることは少なかった。

いざ来てみると緊張するものだ。

彼女の心境はどうなんだろうと考えて苦笑する。

他の家より幾分小さなクルスの家のドアをどんどん！とノックすると髭の無いガイさんが中から出てくる。

この気の良い大男が髭を全て剃ってからかなりの時間が経っているのだが、未だに違和感に慣れない。

今までよりは着る物も清潔感に溢れていて良くなったとは思っているんだが。

一瞬眉を顰めたが、彼はそんな様子には気付かず何時も通りの気持ちのいい爽やかな笑顔で迎えてくれた。

「お早うございます」

「おう、ケイトじゃねえか。珍しいな……どうした？」

さて何と言おうか少し考えて、素直に話すことにする。

「うん。クルスを誘いに来たんだ」

「クルスなら出かけたぜ。一緒じゃなかったんだな」

「クルスは何かいった？」

「いんや。いつもどおりの様子だったぜ？」

そういつてうーむとガイさんは首を傾げる。

そんな彼を横からそつと遠慮がちに、ごめんなさいと退いてもらって長い綺麗な黒髪の女性がドアの前に出てきた。

クルスが大人になったら彼女に似てくるのだろうか。

彼女の母親であるメリーさんは以前に会った時よりも血色が良くなり、元々美しかったが健康的な美しさが更に加わっている。

表情も明るくなっているのは……ガイさんのお陰なんだろうと思う。

「おはよう。ケイト君。娘に会いに来たのね。有難う」

「お早うございます。メリーさん」

余り慣れてない人な上に、美人な彼女を目の前にして緊張しつつ挨拶する。

メリーさんはびしつと直立している自分を見て穏やかな表情で上品にくすりと笑った。

「あ、笑ってごめんね。ちょっと娘の話と印象が違ったから」
「どんな話してるんだろ……。」
「王子様も逃げ出しちゃうような感じね」
「えええ！」

本当にどんな内容なんだろう。
とりあえず過大評価されているのは間違いないようだと恥ずかし
さで顔が赤くなる。

「冗談よ。娘はいつものところに行くっていった。君は分かるん
でしょう？」
「なるほど。有難う御座います」

いつものところそれは即ち。

「ケイト君。娘のこと……よろしくね？」
「おう、頼んだぞー！」
「はい！」

二人が笑いながら声を掛け並んで手を振る。
俺は目的の場所へ向かって、振り返りもせず駆け出していた。

村の北東に向けて、ばてない程度の速度で駆けていく。
夏の陽射しは厳しく、じわりと服が湿って不快になってくるがそれでも走る。

いつも釣りをしていた場所……木陰になつているところにクルスはいた。

昔と変わらず、静かに釣り糸を彼女は垂れている。

冬は寒さが厳しい上、雪が降ると足元が危ないので毎年川には行っていない。

例年は春になるとまた釣りに来るのだが、俺は去年の収穫祭以来ここには来ていなかった。

それでも彼女は俺を待つてここに着ていたのだろう。

木陰で日差しはさえぎられているもののじつとりとして暑い。

こんなところで休みのときに毎回じつとしているのはかなり大変だろう。

バツの悪さを感じ、彼女にかける言葉を考えながらゆっくりと近づいていく。

「クルス……釣れてるか？」

後ろから声を掛けるとびくつと彼女は震えた。
ゆっくりとこちらを向いた彼女は表情はあまりでないが、何と無く嬉しそうに見える。

「大物が釣れた」

言われて彼女の魚を入れる桶を見てみたが魚は入っていない。
どういふことかと無言でクルスを見る。

「ちゃんとここで待ってたらケイトが釣れた」

「……大分待たせてしまったかな」

その答えを聞き、左手で頭を掻いて苦笑する。
しかし、クルスは微笑んで首をゆっくり横に振った。

「思ったより早かった」

「喜んでいいのか嘆いた方がいいのか」

ぴちっ！と魚が陸へと打ち上げられる。

クルスも釣りがうまくなった。

暑い日差しで川面も光を反射して見にくくなっているのに、こう
して俺と話をしながら魚を釣り上げている。

彼女は微笑みつつ、じっとこちらを見つめながら言う。

「三年は待つつもりだった」

「気が長いなあ」

内容に反して言葉は彼女の口調は冗談めかしていて軽い。
なんとなく感じていた気まずさは無くなり、俺は彼女の隣に腰を降す。

何匹か釣れたところでクルスがふと気付いたようにこちらを向いた。

「ケイト。竿は？」

「今日は暑いからさ。走って汗もかいたし、泳ごうかなって」

川の水は冷たいが今日ほど暑ければそのうち慣れるだろうし。
俺は服を脱ぎ下履き一枚になって水に飛び込む。

予想通り身を切るほど冷たいがそんな冷たさが気持ちいい。
俺はふといたずら心を起こした。

「うおおお、冷た……それ！」

「きゃっ！」

釣り糸を回収してそんな俺を岩の上で眺めていたクルスに手で水を掬って思いっきり掛ける。

「あははは！油断したなクルス！」

「ケイト……」

最近の俺たちのぎくしゃくした関係を元に戻すために、そして、不安を吹き飛ばすように意識して明るく振舞う。

水をかけられたクルスの方はしばらくぼかんとしていたが、薄く笑うと彼女も服を脱ぎはじめた。

「おいこら、クルス。はしたないぞ!」

「心配無い。今はケイトしかない」

「俺がいるだろうが!」

「仕返すから」

彼女も下穿き一枚になって水に飛び込む。

まだ彼女は子供で出るところも出ていないが、女性を思わせるしなやかな柔らかさは何と無くで始めている。

何と無く気恥ずかしくて横を向いた俺の隙を彼女は見逃さなかった。

泳いで俺に近づくと足を引っ掛けてバランスを崩し、俺を水のなかに転げさせたのだ。

「ぶわっ!ごほっ...ごほっ!」

「ふ、借りは返した」

彼女は咳き込んでいる俺を見てちよつと小悪魔っぽく薄く笑う。

そんな彼女に俺はまた水を掛けてやり返す。

そしてお互いを水に沈ませようと体をくっつけて争い、水を掛け

て遊んでいると意識的に明るくしていたのが本当に楽しくなってくる。

他愛のない水遊びは昼時まで続き、終わった頃には二人とも疲労困憊で暫く動くことができなかった。

だけど、なんだか不思議な満足感があつた。

昼時になると太陽が雲に隠れてほんの少しだけ肌寒くなったので、俺達は焼いた魚を食べながら冷えた体を焚き火で温める。

服を着直した彼女は火に手を当てながら真剣な表情でこちらを見つめた。

「実はね……ケイトがこんなに悩むなんて本当は思ってた」
「自分でもわかってなかったんだ。で、考えた。いつか考えなきゃいけないことだったから……クルスのお陰だよ」

正直今でも答えは出ていない。
だけどこれも自分で選んだ答えだ。

「人の気持ちは変わるよクルス」
「そんなことは……」
「だけど、それでもいいんだ」

なるべく言葉が重い感じにゆっくりとした口調でクルスに笑って

俺の内心を伝える。

今まで自分の心を表に出さないようにしてきたから不恰好だけど、
少しずつ。

「俺は俺で、クルスとちゃんと向き合う」

「ケイト……」

「将来俺もクルスもどうなるかわからないけど……できればいい風に
心が変わると信じたいな」

「そうだね」

俺が彼女の目をしっかり見てそう微笑むと、彼女も納得したように
頷いた。

「もし、その時お互いに好きな人が出来たとしても後悔しないように
にしたい」

「うん……」

クルスは不満そうにちょっと唇を尖らせている。

やはり彼女はずっと気持ちは変わらないと信じているんだと思う。

「だから、これからクルスが嫌じゃなければよろしく頼む」

情けない先送りかもしれない。

だけどこれは流されたものではなく、大人になった時に進む道を

決める自分で選んだ一歩だ。

「嫌なわけない。今日も楽しかったし。もっと好きになってもらえるように頑張る」

「俺も俺も！」

ことさら明るく俺が返事すると似合わないとクルスが笑う。
いつしか二人とも顔を合わせて笑っていた。
心の靄が少し晴れた気がする。

まだまだあの時の悪夢は俺を襲うんだろうと思う。
だけど、前向きに地道に一步步進んでいきたい。

それが前世から続く俺の生き方だから。

二人の関係がどう変わるのか、それは今はわからないが……。
依存するのではなく二人で成長していけたら最高かもしれない。

第二十話 兄と弟

元々喧嘩したわけではなかったが、川で遊んだ後、きちんと仲直りした俺とクルスは昔のように自然体で接することが出来るようになった。

自分はそう思っているが本当に昔のようかはわからない。

何だか他の三人の視線がおかしいのと……なんとなく、クルスの笑顔が増えた気はしているが。

しかし、考えなければならぬこともある。

今はたしかに幸せだが、俺はいつかこの村を出てしまう。

旅に出るその時にどういう選択をするかは考えておかねければならないだろう。

覚悟はできている。

とにかく楽しい日々を過ごしていた夏も終わりに近づき、夏の激しい太陽の日差しも幾分緩やかになった頃、俺はカイル兄さんから部屋に呼び出されていた。

これだけであれば次兄に限らずうちの兄弟にはよくあることなのだが、いつもは暇であればトマス兄さんやエリー姉さんも呼ぶので二人きりというのは珍しかった。

なんの用事かはわからないが、以前ちよくちよく暇なときに木を彫って完成させた将棋を間に置いてカイル兄さんと向き合う。

兄の部屋は陽気で大雑把な性格に似合わず整理されており、掃除も行き届いている。

パチッ、パチッ……

普段は底抜けに明るい兄はいつもと違い口を真一文字に結んで将棋盤を睨んでいた。

迷っているのかむむむと唸りつつ、一手、また一手と手を進めていく。

そんな兄に対し、俺は冷たい目で盤上を見つめ、す……っと駒を進める。

「王手」

「あ……ま、まった！そこいかれたら飛車が！！」

「まったは無しだよ。もう三回も待ったじゃない」

そう残酷に宣言をすると、降参降参と兄は吹きだすように明るく笑った。

カイル兄さんは将棋が兄弟の中でも一番下手だった。だけど、一番好きかもしれない。

そして負けても怒るでもなく明るく楽しそうに笑っている。心の広い人なのだろう。

陽気で男らしい頼りになる兄だ。

俺とは全然タイプが違ってとにかく前向きで、似ているのは髪の色くらいかもしれない。

俺も普段から兄に頼っているつもりだが、彼に言わせると頼ってくれなくて寂しい思いをさせられる出来すぎの弟らしい。

やれやれと左手で頭を掻いていると、兄は姿勢を正してゆっくりと話し始める。

「俺は将棋弱いな」

「そうかもね」

「俺はケイトやトマス兄さんほど頭の出来はよくないからな。だから将棋の強い奴と組むことにしたよ」

カイル兄さんは落ち着いた笑みを浮かべて、楽しそうに言う。
だが、比喩的表現なんだろうが俺には言っている意味がわからない。

「僕はカイル兄さんは賢いと思ってるんだけど」

「ははっ！ 僻んでるわけじゃないぞ？ まあ事実って奴だ。ようするにあれだ」

カイル兄さんは一度言葉を止めて、正座していた足を崩してリラックスするように床にあぐらをかき、自分の指を両手で搦めあわせて手を足の上に乗せる。

そして、衝撃の一言を紡ぐ。

「ケイト。俺は冒険者になる」

一瞬息が止まり、片付けようとして掴んでいた駒を思わず手からこぼしてしまう。

ぽかんとして思わず兄の顔をまじまじと見てしまう。

「お、その顔その顔。それが見たかったんだよな!!」

呆然とする俺を見て、カイル兄さんはげらげら笑った。

その顔に悲壮感や寂しさといったものは微塵も見られない。

一大決心といった雰囲気すらなく、当たり前のことを言っているように思える。

「ほ、本気なの？」

「本気も本気。もうすでに父さんと母さんには話を付けてある」

「良くあの二人納得したね？」

楽しそうに話す兄に思わず苦笑してしまう。

暫く見ていなかったカイル兄さんのステータスを見ると、野外活動のスキルは殆ど育ってないが、いつのまにか剣術のスキルを取得していた。

カイル兄さんは冗談めかしているが冒険者になると考えたのはかなり前だったのではないだろうか。

修練で身につけたであろうスキルは一朝一夕で身に付く数字では

なかった。

「親父とは拳で語ったけどな。母さんは……なんかわかってた見たいだなあ」

「そっか」

エリー姉さんほどではないがカイル兄さんも母さんに似ている。姉さんは恋愛方面で似て、兄さんは冒険心という形で似たのだろうか。

「カイル兄さん。理由を聞いていい？」

「前にエルフの……ラキシスさん来たろ？」

確かに兄は好奇心旺盛で村での暮らしは退屈そうだなとは思ってはいたのはあるが……

だけど本当に冒険に出るとは欠片も予想していなかった。

農作業そのものは真面目に打ち込んでいたし、冒険に必要な技術にも興味はなさそうだったからだ。

「よく覚えてるよ。兄さんががちに緊張してたよね」

「ば、馬鹿やろ。その……まあ……、あのエルフの姉さん見たときにさ……外の世界ってすげえ面白いんじゃないかって思ったんだ。あんな美人が普通にいるんだぜ!？」

「えーっと……じゃあカイル兄さんは美人探すために冒険者に？」

あんまりといえはあんまりな理由に、驚いてしまう……今日は驚いてばかりだ。

兄は確かにもてるし女好きではあるが、人生までそれで決めるんだろうか。

「いや、それだけじゃない。何か他にも知らないものが沢山あってさ、一生退屈しなさそうだ」

「危ないよ。死ぬかもしれないよ？」

書物やガイさん達、足が實際動かなくなったジンさんを見ているとその危険さは容易に想像が付く。

それは考えているのかと疑問に思ったので問いかける。

「危険なのは当たり前だろ。それでも冒険者はいるんだから俺だつてやれるさ。勿論死なないように油断はしないし注意はするけどな」

「カイル兄さんは、怖くないの？」

「怖いけど楽しみなのが強いな」

につと人好きのするいたずらっぽい笑みを浮かべながら、どれだけ楽しみなのかを話を続けていく。

その間、兄の手の指は力がこもっているように、赤くなっていた。

「まあ、偉そうにいつてるけど、お前ほど計画的じゃないんだよな。結局は」

暫く一方的に話した後、苦笑しながら頭を掻く。
「だけど、そこには恥ずかしいという気持ちはあっても後悔の色はない。」

それを見て決心は固く止めることはできないと俺は思った。
元々止める資格なんて自分にはないが。

「どうしても行くんだね」

「ああ。行く」

「じゃあ、止めないよ。でも死んだら許さない。絶交」

真剣な表情のカイル兄さんに冗談めかして身体の前で手を交差させてバツを作る。

すると彼は一瞬ぼかんとして大笑いした。

「おいおいそりゃ絶対死ねないな。俺には野望もあるし」

「何それ」

「うん。冒険者として先に成功して、お前が苦勞する前に頼らせるって野望だ。兄貴らしいこと全くお前には出来なかったからな。」

兄は自信満々に胸を張る。

その姿は滑稽でお世辞にも格好いいものとは思えなかったが、本気でやってくれようとしているのだけはわかった。

「ありがとう。カイル兄さん」

「ああ。出来のいい弟を持つと大変だぜ。それと冒険者になるのは俺一人じゃない。ホルスが一緒だ」

がたっ！と思わず俺は立ち上がる。

兄はそんな俺を座りながら穏やかに見つめている。

「俺は将棋は弱いからな。強い奴が代わりに将棋を指してくれるらしい」

「ホルスが……なんで」

「それは本人から聞いてくれ。あいつは年下だが頭がいいし魔法も使える。あいつの経験不足は助けになるかはわかんが俺が補うつもりだ。俺はあいつを認めている。……お前もだろ？」

俺はなんとか頷いたがたぶん鏡で顔を見たら酷い顔をしているに違いない。

あまりにも急で、あまりに驚かされる答えだった。

「それに迷ってた俺の背中を押してくれたのはあいつだからなあ……」

そういつてカイル兄さんは苦笑した。

大事な別れはひとつではなく、一人の友人とのあまりにも急な別れでもあったのである。

第二十一話 別離

翌日、俺達は三日に一度の休養の日だったので、全員に声を掛けて他に人の来ることのない川へと集まっていた。

夏も終わりに近づいているために川で泳ぐには少し肌寒いが、木々はまだ色付いてはいない。

今の時期は一年の中でも過ごしやすい季節であろう。今年には特に暑かったのでその思いは例年よりも強い。

普段の休日は皆それぞれで好きなことをして過ごしており、今日のように全員が集まるというのは少ない。

だが、今日ばかりは全員が集まらないわけには行かなかった。先日のカイル兄さんの言葉を確認しなくてはいけなかったからだ。

確認したところでどう答えるか……それは考えていない。

喜ぶべきなのか、怒るべきなのか、送り出すのか、止めるのか。

答えは簡単には出ずに頭を悩ませる。

周りを見るとマイルスやヘインは恐らくは俺と同じような顔をしているのではないだろうか。

彼らも初耳な話だったはずだ。

いや、俺よりも付き合いが古くて同世代である分、衝撃も大きいかもしれない。

クルスだけはまるで知っていたかのように何時も通りだった。彼女の表情は冷静そのもので、事実を受け止めているかのような印象を受ける。

しかし、内心が見え難いので実際にどう考えているのか。

俺達は川辺に到着すると点在する岩に腰掛け、笑っているように見えるホルスに視線を向ける。

木々による影が少ないため、じわりとぬるい暑さで汗が滲むが、誰も何も言わずに彼が話す事を待っていた。

「う、うーん。みんな怖いんだけど」

よく見るとホルスの口元が引きつっている。

そんな彼を見て溜息を一つ吐き、皆を代表して俺が答える。

「驚かすのが目的だったにしては悪趣味だったよ」

「隠すつもりは……あつたけど、理由はあつてのことなんだよ」

うーと唸りながら頬を人差し指でぱりぱりと搔く様子に悪びれている雰囲気はない。

彼は何から話すべきか整理しているように感じた。

「そつだなあ。僕がこうしようと思ったのは原因はケイトなんだ」
「は……俺？」

全員の視線が今度はこちらに来るが余り覚えはないので首を傾げる。

「将棋を指しているときにさ、君は僕を補佐に向いてるかもっていったろ。そんなの格好悪いっていう僕に、どこの国の物語か知らない話までして」

「ああ、そういえばそんな話もしたような」

思い出した……人の何手先まで読むせいで将棋が強すぎたので言った言葉だ。

負けたのが悔しくて何気なく言った話だったんだが、そこまで真剣に取っているとは予想外だった。

「中途半端な僕じゃ確かに大活躍するなんて出来ない。小心者だしね……だから、主役になれる人と組むことにしたんだ。丁度あの人も悩んでたし」

カイル兄さんは明るくて陽気で面倒みもよくて正義感にも溢れている。

たしかに皆を惹きつける魅力を持っていた。
しかし、ホルスの言葉だけでは俺は納得はいかないし、他の皆もそうだろう。

予想通りマイルスが憮然とした顔で言った。

「俺たちとじゃ駄目だったのかよ」

「うん、駄目なんだ」

それをホルスは元々答えを予想していたのか、迷うこともなく一刀の下に否定する。

うぐつとマイルスが言葉に詰まり、代わりにヘインがホルスに問いかける。

「僕たちとは無理にしても、成人するまで待てなかったのか？」

「ヘイン。君も成人前に外に出るつもりだろう。僕も今じゃないと駄目なんだ」

ヘインもそれで一度口を引き結んで黙り込む。

何かしら理由がありそうだが……どう質問すればいいのか左手で頭を掻いて悩んでいるとクルスがぽつりと言った。

「……必要とされないと辛いから」

動きやすい飾り気のない服装をした彼女は、すっと立つと足元に落ちていた石を拾い、おもむろに川に向かって投げる。

石はゆつくりと放物線を描いて川にぽちゅんと小さな音を立てて落ちた。

「クルス？」

「答えは出てる。聞いても同じ」

彼女にも何か思うところがあるのか声に僅かにトゲがある。もう一つ石を拾うと怒りをぶつけるようにもう一度投げた。そんな姿を見ながらホルスは苦笑いしつつ、溜息を吐く。

「僕はクルスが一番怖いよ」

「どうということだ？」

全く分かっていないマイルスが困ったように問いかける。

ヘインを見ると彼にはなんとなくわかったらしく、苦々しい顔をしていた。

俺も先程のクルスの言葉を肯定したことで漸く彼の真意にある程度は気付く。

そんな俺とヘインをホルスはちらつとだけ眺めて、マイルスに真剣な表情で向き合う。

「マイルス。僕たちは出来る事が似過ぎているんだ」

「はあ？ どういうことだ」

「正確には僕とケイトが……だね」

俺とホルスは似ている。

基礎能力もスキルも魔法も殆ど同じ。

多少のスキルの差異はあるが、何年も経てばその差すらも無くな

つてくるに違いない。

性格は全然違うのだが。

「僕がいなくても君達は大丈夫。それが僕には耐えられないんだ」

言葉の内容とは裏腹に、ホルスは何時も通りの穏やかさでゆつくりと話していた。

「だから、カイルさん……いやカイルと行くよ。彼は僕にないものを持っているし僕も彼に無いものを持っているからね」

「危険は……まあ当然覚悟の上か」

ヘインも肩を落として力なく呟く。

俺はホルスに一つだけ聞きたいことがあった。
どうしても聞かなければ納得できないことだ。

「カイル兄さんを煽ったのか？」

「……違うよ。二人とも迷ってたんだ。二人で決めた。」

拳を握って力強く言い切る彼の言葉を疑う事は自分にはできなかった。
彼を止める資格は自分にはない。

「僕は君にだけは負けたくないんだ」

「なんでさ」

「ライバルと勝手に思っているからね。だから先に行くよ」

そこまではホルスは笑っていたが、不意に苦い顔を作る。

「それに冬が近いからね……うちは兄弟も多いし……さ」
「そっか」

全員バツの悪そうな顔をする。

クルト村は税がかなり安めで、恵まれている方ではあるが不作となれば飢えの危険もある。

全員一度はひもじい思いもしたことがあるのだ。

村での助け合いは勿論あるが、家族が多いところでは死活問題にもなり得る。

今年の夏も雨が少なすぎたため、不作になる可能性は低くない。

「まあでも、それよりも楽しそうというのが最大の理由だよ。ケイトが来る頃には一流になっておくよ。君の兄さんの名前は有名になっっているはずさ」

「街の大人とかに鴨にされるかもしれないぞ？」

「僕は子供だし油断してくれるさ。そしたら喉を噛み切ってやる」

そうホルスは不敵に笑ったが……どこことなく無理をしているように見えたのは気のせいだろうか。

彼は顔が笑ったように見えるせいであんまり迫力はないが、成長すればその笑みが企んでいるようで恐ろしくみえるようになるのかもしれない。

俺達は結局、再会を約束してホルスを送ることになった。

完全に納得することはなかったが、どこかで折り合いは付けないといけないのだろう。

マイルスやヘインは先を越されたようだ、悔しそうにしており、クルスは……特に何も言わなかったが暫く機嫌が悪く、旅に出るまでホルスは冷や冷やしたことだろう。

今年は結局不作で、収穫祭は行われず、それでもささやかに行われた成人の儀を経て、カイル兄さんは成人となり、ホルスと共に旅立っていった。

笑顔で見送っていたうちの家族達と、罪悪感に苛まされているような苦々しい顔で泣いているホルスの両親の対比がどうにも印象に残っていた。

第二十二話 巢穴

収穫祭の行われない寂しい秋を終えて、厳しい不作の冬を超えた。この地域一帯の村にとっては大きい打撃になったのではないだろうか。

国は租税という形でどれほど不作でも租税分持つていってしまうこともあり、不作の年の食糧事情は非常に厳しい。

父の構築した不作時の村人同士の協力体制と、異常な暑さによって激増した特定の薬草を上手く売り捌くことができたこと、今年の気象から食糧不足を懸念していた猟師のガイさんの指示による、燻製などの保存食を多めに作っていたことなどによる備えがなければ餓死者も出ていたかもしれない。

そんな助け合いに協力し、役目を果たして乗り越えることができたのは誇らしいことだった。

元の世界では大学生ということもあり、生活……いや、命が掛かった仕事の経験がなかったからだ。

俺もみんなも休みも返上して食料の確保をしていたが、なんとか冬を超える目処がついた後の休みではそんな苦労も笑い話に話していた。

俺もクルスもマイルスもヘインも、一様に喜んではしゃぎまわる。

苦難を乗り越え、以前よりも俺たちの結束も深まった気がした……
そこにホルスがいないのは残念だが彼は彼でうまくやっている……
……そう信じたい。

翌年にはヘインの薬草に関する論文が認められて彼も迷宮都市へと旅立っていった。

彼の年齢で学院に入学できるのはかなり優秀な部類に入る。

薬草学以外の学問に関しては多少は協力できた……彼の知識の吸収量が高く、直ぐに役目は終わってしまったが。

薬草学に関する論文は昨年猛威を振るった暑さで激増した薬草に
関してだったのは、皮肉というべきなのか、チャンスを生かしたと
いうべきなのか。

心から信頼できた二人の親友が去っても時は流れていく。
俺とクルスは12歳、マイルスは15歳になっていた。

季節は春……。

「ケイト」

「何？クルス」

うさぎ用の罾を設置していた俺にクルスが短く呼びかける。

この年頃では女の子の方が身体も心も成長するのが早い。
身長がかなり伸びて現時点では自分よりもちよつとだけ背が高く、
体付きも少しではあるが大人の女性に近づいている。

元々整っている顔立ちに表情が現れることは少ないが、雰囲気は
以前よりも穏やかになり、時折見せる笑顔は見慣れているはずの俺
も未だにどきどきしてしまう。

将来備える美しさの片鱗が彼女には既に現れてきていた。

一方の俺は少しは背が伸びたものの成長期はまだ来ていないよう
だ。

体付きは鍛えているために締まっているが、痩せっぽちでまだま
だ途上といったところか。

しかし、それでも今ならば普通の大人相手であれば負けることは
まずないだろう。

「……何でもない」

クルスは何かを言おうとして、少し考えて言うのをやめてしまう。
意味がない言葉に思えるが、彼女が本当に意味のないことを言う
ことは少ない。

左手で頭を掻きながら、彼女の言いたかったことを考える。

ふと日差しの暑さを感じ、森の木々の隙間から空を見ると太陽が
真上に登っていた。

「そっか。じゃあ昼にしようか。マイルスは？」

「別の場所でリイナの手作り食べてる」

予想は当たっていたらしく嬉しそうにクルスは首を縦に振る。
間違っただけでも不機嫌になったりはしないが、解ってくれる事が嬉しいようだ。

出来れば言葉にして欲しいものである。

元々背の高かったマイスはさらに背が伸びた。

羨ましい限りだが村でも一、二を争う背の高さで、力も強い。

かなりもてているようだが、興味はないようで背が低く、あまり家事も上手く無いらしいが穏やかで尽くすタイプな三歳年上の恋人と今でも仲良くやっているようである。

昔は、五人とガイさんで弁当を広げながらわいわいと話をしたものだっただ。

何気ない日常のことを話したり、今思えば何がおもしろいのかわからない話で盛り上がりたりもした。

それが今ではクルスと二人きりの食事だ。

少々寂しいが、これはこれでいいのかもしれない。

何と無くふんわりと幸せそうな彼女を見ていると本当に心が暖かくなり、心からそう思った。

昼食を食べ、緩やかな山を慎重に登る。

今日は南の山での狩りを行っていたためだ。

こちらには森の方にはない薬草も生息しているため、たまにこちらを狩りの場所を選ぶのである。

斜面が多く、狩りの難易度は森よりも高くなってしまうが訓練と割り切るならば悪くもない。

今日は俺とクルスには残念ながら猟果は無しで山を降り、先に降りていたマイルスと合流する。

彼は俺たちとは別の場所で猟を行っていたが、難しい顔をしていた。

猟果はなかったようだが、それはよくあることで原因は他にあるだろう。

「マイルス。どうした？」

「ああ、おかしなものを見つけたんだ。一人だから深入りはしなかったが……」

「何？」

彼は俺たちに分かり易い言葉を考えているのだろう。

暫く悩んでからゆっくりとした口調で言った。

「木がまとまって切り倒されていたんだ。自然に倒れたもんじゃない」

「どんな風に？」

「説明が難しいな。切り株だけが残っていたんだ。木は運ばれてた。村の人が入るような深さの場所じゃない」

マイスの言葉を噛み砕いて考える。
何かの理由で木が切り倒されており、それが運ばれている……要するに何かに使っているわけだ。

「……なるほど。知性のある何者かが山に入り込んでいるわけか」
「調べる」

「ああ、ガイさんに相談して対処を考えよう」

三人の意見が一致し、頷きあう。
この日はあたりが暗くなる前に解散することにした。

翌日、ガイさんも含めて四人で先日マイスが見たという切り株の後へと向かう。
彼の言うとおり、山の一角で何十本かの木が不自然に切り取られていた。

「こいつぁ……まずいな」
「ガイさん。わかりますか？」

今日は全員、軽装ではあるが弓以外にも木刀や短剣や斧などで武装している。
いつもは楽観的な猟師のガイさんの口は引き締められていた。

「予想だが、ゴブリンの巣があるな。切り口を見る限り出来たばかりなのは救いだ」

「何故わかるの？」

クルスが不思議そうに聞く。

確かに疑問だ。

以前は襲撃だけで終わって巣は確認していない……はず。

「冒険者時代にやりあったんだよ。成長した巣は数が多くて死ぬかと思ったぜ」

「街の外の依頼もあるんだ」

「そういうこつた」

話しながらも彼は木を引きずった方向などを積もった葉などをどかしながら調べている。

俺達も調べ始めた。

同時に俺はステータスでの探知を使い始める。

ゴブリンなら以前見ているので使えるはずだ。

痕跡を辿って暫く歩くとガイさんの予想通りに探知に引っかかった。

土色の肌で粗末なぼろきれだけを身に纏った背の低い醜悪な人形の魔物だ。

「ゴブリンがいるね」

「相変わらず頼もしい目だな。何匹いるかわかるか？」

「10匹くらいかな。あとよくわかんないのが1匹混ざってる」

ステータスでの探知に付いて皆は深くは聞かないでいてくれる。

俺自身説明に困るので本当にありがたい。

隠すべきだとガイさんからきつく言われてはいるが。

とにかく、俺の言葉に全員の表情に緊張が走る。

いくらガイさんがいるとはいえ4人ではかなり厳しい数だ。

俺達三人は狩りの経験はあっても戦闘は未経験というのもある。

「場所は確認した。一度撤収して人を募る」

俺達は全員頷いた。

ゴブリンの巢は村全体の問題だ。

放置すれば巢は巨大化し、手に負えなくなるし冒険者に頼んで処理することになり、安くない金額が飛ぶことになる。

幸いゴブリン一匹一匹は武器を持っているものの人間よりも弱い。注意すれば人が人は出ても死人を出さずにすむかもしれない。

冷や汗が背中を伝う。

確かに訓練はしてきたが……実際に命の奪い合いをすることが俺にできるのだろうか。

考えているのは自分だけではないだろう。マイスも……クルスだ

ってそうかもしれない。

人型の怪物を殺したとき、自分は平静でいられるのか。
いられたとして、自分は……いやよそう。

今はできることをやるだけだ。
放っておいては村が危ないのだから。

俺達は帰り道をゴブリンと出くわさないように気をつけながら、
巢の対処について話し合っていた。

第二十三話 相談

帰ってすぐに俺はガイさんと共に父親である村長にゴブリンの巣について説明した。

村での対応を話し合うためだ。
人を雇うにしても自分達で解決するにしても村全体で考えていかねばならない。

以前……といってもかなり昔のことに今ではなってしまったがこの村はゴブリンの襲撃を受けたことがある。

その時、村中の人々がまとまった行動が取れずに恐慌を起こして混乱を招いて重傷者を出してしまったため、今回のような緊急時にどうしていくかは一応話し合いは行われている。

「モルト村長、どうすんだ？」

「冒険者を雇うか自分達で退治するか……」

村長である父親は最近めっきり白髪が増えた。

カイル兄さんが出て行ってしまったたからか、トマス兄さんが中々結婚をしないせいなのか……

眉間を抑えて考え込む父親を見て、老けたなあと緊張感の無い場違いなことを思う。

緊張するべき場面なのだろうが、自宅で父親と対面していると緊張感を保つのは難しいことだと思う。

しかし話の内容が重要であることには変わりない。
隣で話を聞きながら気持ちを引き締めて、真面目に考える。

「本当に我々だけで倒せるのか？」

「俺とジンだけじゃ厳しいが相手の数はそこまで多くない。俺達だけで潰すのは今しか無理だ」

ガイさんが父の対面の椅子に座り、難しい顔で話す。

父はそれを聞いて口を結んで黙り込む。

その間に母が水を持ってきてくれたが二人とも口をつける様子はない。

ふと持ってきた母の顔を見ると、穏やかな中にも少しだけ緊張が見て取れた。

冒険者だった母には今の状況がどのようなものか理解できるのだろう。

ゴブリンは強さ的にはたいした相手ではない……らしい。
俺の相手の能力値を見る能力とガイさんとジンさんの話によるとだが。

問題はその繁殖力にある。

同族以外とも交配し、爆発的に増えていくのだ。

その行き着く先は生態系を狂わせるだけでは済まない。
小さな村などならばあつという間に飲み込まれてしまうことになる。

今回の件で問題であるのは巣を作っていることだそうだ。

巣を作らないゴブリンは厄介であるもの定着はしないため、昔の襲撃のように単発で終わる。

巣を作る条件は良く知られていないが、ゴブリンが巣を作ること
は稀なことらしい。

今回はそんなケースだ。

手遅れになる前に発見できたのは不幸中の望外の幸運とでもいうべきかもしれない。

父はまだ悩んでいる。

当然かもしれない……生命の安全と金を天秤にかけねばならない
のだから。

答えをじっと待っていると次第に暑くもないのに汗が流れてくる。

「何人くらい必要そうだ？」

「20人もいれば安全にいける」

相手は10匹くらいしかいないのでガイさんの意見は妥当だ。

ゴブリン一匹一匹は本気の間人より弱いからだ。

問題は俺自身も含めて闘うことに対する恐怖心に打ち勝てるかどうか……

「……わかった。有志を募る。長老たちの説得は任せておけ」

父はガイさんに重々しく頷いた。

いくら村長とはいえ、父の判断だけで命が掛かることを決めることはできない。

だが、父は長老からの信頼は高い。

まず説得が失敗することはないだろう。

俺の心には僅かな不安がよぎる。

どこかで戦う事を恐れているのだろう……冒険者任せになることを祈っていたのかもしれない。

しかし、冒険者になろうと思うのならこの恐怖もいつか乗り越さなければならぬ。

だとすれば、今回の事件はいい機会ではないか。

とにかく危険を少しでも減らし、相手を安全に倒すために……考え込んだ俺の脳裏にクルスと組んだときに行う狩りを思い出していた。

狩りをするとき、組んで獲物を狩る場合には獲物の逃げる方向を誘導する。

その時に片方の役目は獲物を仕留めることではなく、獲物をもつ一人が潜んでいる方向へと追い込むことになる。

そして、潜んでいる方が不意を討つのだ……今回の件でそれに当てはめるとすれば……

「父さん、ガイさんいい？」

「なんだ？」

「どうせなら行ける人全員で行ったほうがいいよ。逃げられたらまずい」

父は俺を何いつてるんだという表情で顔を顰めて見てくる。

彼にとって俺は一風変わっていても子供は子供。

それはありがたいことではあるのだが、こういう真剣な話合いでは子供の考えと思われてしまうようだ。

幸いこの場にガイさんもいるために、彼が続きを促してくれる。

「いい、ケイト。話してみろ」

「まずは、ガイさんと僕達が先行して巢の周囲に一方向を除いた三方向に罾を張る。その上で正面からガイさんと村の人の中で強い人で突入したらどうか。逃げて罾と数人いれば逃さずに倒せると思っただけど」

ガイさんが一瞬きよとし、苦笑する。

父も何故かぽかんとしていた

何か変なことを言っただろうか。

「変かな。相手がいる場所は決まっているんだし……一番安全だと

思っただけど」

「いや、感心したんだ。俺は考えるのが苦手だからな。明日ジンにその手でいけるか確認を取ってみよう」

ぐははと大声でガイさんが笑って賛同する。

父もその笑い声で苦々しい顔をしつつも笑って了承してくれた。

その日はガイさんは家へと戻り、部屋には父と俺だけが残される。

「俺はもうお前に何といえいいのかわからんよ」

「父さん……」

そついう父の顔は本当に複雑そうな顔をしている。

怒っているわけではないようだが、喜んでいるようにも見えない。

「出来が悪いのも困るが出来が良すぎるのも困ったものだ。無茶をしてくれた」

「心配かけてごめん」

俺は素直に謝る。

子供のころから行ってきた数々のことはきつと父を悩ませていただろう。

毎日必死に生きていたから気づかなかったが、そのことに今更気づいてしまった。

「お前には叱ることがなかったからな」
「そうかな」

よく考えるとそうかもしれない。
怒られたことがないわけではないが真剣に怒られたのは豪雨の時に川へと走ったあのときだけな気がする。

「甘えることもないしな……父親として何も出来なかった。ガイやジンに感謝するべきなのだろうが……それも素直に喜べん」
「カイル兄さんもいつてたけどそんなに手がかからなかったかなあ」

俺は左手で頭を掻いて苦笑する。
結構無茶なことも言っただけのために両親を困らせたことも結構あると思うのだが。

喜べないというのはきつと冒険にでると思っただけだろう……
…そしてそれは間違いではない。

「カイル兄さんにも言っただけ僕も父さんにも感謝してるよ」
「それだそれ。それが出来すぎだっていうんだ。増長もしないからなお前は」

困惑する俺に、父は苦笑いする。
そんな俺たちのぎくしゃくした会話に母は笑って、

「流石私達の自慢の息子ってことでしょ。喜びなさいよ。……今回
は私も行くからね」

「母さんが？」

「私が冒険者だったって知っているでしょ。心配しなくても無理は
しないわよ」

えっ……と母の穏やかな笑顔を俺は驚いて見てしまう。

勿論、言ったことはないしラキシスさんと会った後も態度は変え
ていない……はずだ。

「やっぱりちゃんと子供ね。母さん安心したわ」

「どうしてわかったの？」

不思議だ……俺はそんなにわかりやすいだろうか。

「親だからという理由だけではないわよ……ちゃんと考えなさい」
「うん。わかった」

理由はわからないが素直に頷く。
きっと自分で答えを探さないといけないものなのだろう。

翌日、ジンさんは集まった人数に合わせて俺の案を修正して作戦

を立ててくれた。

長老も案に賛成し、殲滅作戦は罨を準備するために数日後に行われることに決まった。

この日から緊張で良く眠れない夜が続くことになる。

第二十四話 戦闘

ゴブリンの巢の殲滅作戦の当日、村の広場には16歳から40歳までのうち、40人近くの村人が集まっていた。

集まった者には十代や二十代が多く、見知った顔も多い。

この数日間、付け焼き刃だが闘うための訓練を厳しく施していた。

参加者は比較的独身者が多いのは気のせいかそうでないのか。

女性からの希望者に関しては父が反対したので、この場にいる女性にはクルスと母だけだ。

クルスに関しても父は……そして、俺もガイさんも苦い顔をしたが、彼女は頑として参加するといって聞かなかった。

父は俺に対しても考え直すようにいったが、他のものに命を賭けさせる意見を出したものが参加しないのはありえないだろう。

他の女性には昼食を用意したり、罾の作成を手伝ってもらったりと裏方で働いてもらっている。

それぞれの手には鍬や鎌などの農具を手に持ち、興奮と緊張で顔を強ばらせている。

ひそりとも話声が聞こえて来ない。

皆一様に押し黙り、村長である父の言葉を待っていた。

「皆も知つての通り、ゴブリンの巢が南の山で発見された。現時点では出来たばかりで数が少ないが放置すれば我々の村も危険に陥る。我々は被害が出る前に自分たちの村を自分たちの手で守らねばならない」

父は一度言葉を切つて深呼吸をする。

村長というのは大変な仕事だと思う。

何かあればすべての責任を負うことになるのだから。

「先行して、獵師のガイとマイルス、そして10名の同士が先に罠の設置を行っている。有利な条件は整えており、ゴブリン一匹一匹は人間よりも弱い。後は皆の勇気だけが重要だ」

当初は罠の設置に慣れたものだけで先に罠を設置しに行くつもりだった。

だが、罠の量が膨大なものとなったため、当日までに数日に分けて罠を現場の近くまで運んでいた。

それでも運びきれなかったものを力の強い大人たちで荷物を運ぶ必要があり、先発隊として先に向かうことになった。

設置そのものはガイさんとマイルスだけで大丈夫と判断されたため、二人で行うことになっている。

俺は俺自身の持ち場に関してはクルスと二人で出来るため、先に設置する場所は二箇所だけだからだ。

俺とクルスは村人を現地に案内することが仕事になる。

説明を行っている父が皆の顔を一度見渡す。

昨日は父は夕食を食べることが出来なかった。

朝も殆ど手をつけることが出来ていない。

だが、少しだけ痩せたように見える父の言葉には力があつた。

全員を見渡した後、最後に俺の方を見る。

責任を受け止めている大人の姿がそこにはあつた。

「問題ないようだな。決められた配置に付く。皆とにかく死ぬな。我々の役目は敵の足止めだ。倒す事はガイに任せていい。皆の奮闘に期待している」

父はそう締めくくった。

一番危険になる突入組にはガイさんの他に父とトマス兄さん、そして母さんも参加する。

責任者が安全な場所にいるわけにはいかない。

止めるガイさんとジンさんに不器用な父はそう話していた。

俺も突入する方に志願したが、それは認められなかった。

危険であることもあるだろうが山に詳しい者を、分散させるそれぞれの班に付けて置かなければならなかったからだ。

突入する方向の反対側にはジンさんが待機している。

一番敵が逃げてくることが想定されている方向だが彼は足が良く

ないため罾を多めにし、ジンさんの所に敵が来るように考えて設置されていた。

そして突入する方向から見て左右を俺とクルス、マイスとで固めている。

待ち伏せはそれぞれ10人程度、突入はそれ以外の全員で行われる予定だ。

森にクルスや他の9人の大人たちと共に配置につき、木々の中に息を殺して身を隠す。

そうすると春先で肌寒さすら感じる季節であるのに汗は止まらず、足は震え、自分の心臓の鼓動がやけに大きく聞こえるように感じる。

自分だけでなく、他のみんなも……クルスも表情には出ていないが、緊張しているのは間違いない。

「……静か」
「だな」

俺だけに聞こえる小さな声で隣のクルスが呟き、自分も小さく答える。

後少しで合図の狼煙が上がるだろう。

そうすれば、ゴブリンとの戦いが始まる。

ステータスでの探知ができるかできないか、ぎりぎりの場所に伏せているが巢にいる敵は10匹しかない。

外に出ている可能性はあるが……。

そして、探知できない不審な敵が1匹。

ガイさんの話ではゴブリンのリーダー格だろうとの話だった。

そのリーダーが巢の原因ではと考えられていた。

何度も確認するように背中中の弓と腰に身につけた鉄製の剣の鞘を触る。

剣は母から貰った物だ。

昔使っていた予備の剣らしく、短めだがしっかりした剣で手入れはされていたのか錆一つない。

剣技だけなら遙かに俺よりクルスの方が上だった。

彼女に渡した方が俺よりも上手く使えるかもしれない。

だけど、俺は自分で使うことに決めた。

目を瞑り、小さく深呼吸して覚悟を決める。

敵を殺すという責任を投げ出すわけにはいかない。

そしてそれができないなら……村で一生過ごすのが俺にとっての最善だろう。

空を見上げると、狼煙が見えた。

すぐに突入組の隠れていた方向から関の声が聞こえてくる。

「はじまった」

クルスが小さく呟き、周りの大人たちを見渡すと顔が緊張で強ばる。

農具を持つ手が汗ばんでいるのがはつきりとわかった。

「一匹来るぞ」

小さく声を出し背中の中の弓を構えると、近くでクルスも頷いて弓を構える。

その間は俺たちを守るように大人たちが、近くで農具を構えた。

息を殺して敵が近づくのを待つ。

首尾よく罠のある方向に向かってくれるようだ。

罠はトラバサミや輪の間に足が入ると吊り上げる括り罠、後は見えにくい色で張りめぐされた紐などの足止めがメインだ。

それで止まった隙を狙い打つ。

「ギャツ！！！」

見える位置まで近づいた所でゴブリンがトラバサミに掛かる。

その瞬間俺達は弓を放った。

ビシュツと弦が鳴り、二本の内一本が足を挟まれてもがいているゴブリンの首に突き刺さり、動かなくなる。

どちらが命中したのかは放った瞬間わかった。
クルスの矢だ。

「……やった」

彼女の顔からは命中した安堵感だけが見られ、命を奪う後悔などは微塵もみられない。

それに対して、普段なら外すはずのない距離で俺は外した。

よくやったとみんなと共にクルスを褒めながら、誰にもわからないように拳を握り締める。

相手を獣だと自分を言い聞かせていたにも関わらず、二足歩行の相手を見たらこれだ。

悔しさが心に広がるのを歯を食いしばって我慢する……とその時、

「……こいつは……。もう一匹来るぞ。正面！」

ステータスが見れない敵、要するに逃してはいけない相手。
何故こいつが！

母やガイさんはやられたのだろうか。
一瞬そんな考えがよぎって血の気が引く。

直ぐに森の奥から姿が現れる。
普通のゴブリンを二回り程大きくしたような巨体。

一般的に人間よりも小さいゴブリンだが、こいつは人間でも背が高いマイスと同じくらいの背丈を持っている。

筋骨隆々な体つきをしており、手には巨大な棍棒……こいつに凄まじい怪力があることを容易に想像させた。

ただ、体は満身創痍といった感じで傷だらけで、折れているのか左腕はだらんと力無く下がっている。

逃げてきたのか……どうなのか。

逃す訳にはいかない……今度こそやるしかない……俺は相手を睨みつけるとその巨体に対して弓を引き絞った。

第二十五話 死闘

筋肉だけで出来てきているようながつしりとした巨体を持つゴブリンが正面から満身創痍とは思えないスピードで走ってくるのを見て、周りの大人達から短い悲鳴が上がる。

俺だって声を上げそうになったが、必死に歯を食いしばって堪えていた。

驚いたものの相手に当てなければ自分が死んでしまうと追い詰められたことにより、完全に手の震えは止まる。

トラバサミの一つが相手の足を捕らえて動きが鈍った瞬間、指を矢から放した。

「グアアアアアアアアアアッツ！！！」

俺とクルスの矢がそれぞれ胴と肩に命中するが、相手の動きは止まらない。

畏に足を挟まれながら畏ごと勢いを緩めず、俺たちを認識して必死の形相でこちらに走ってくる。

ばさっ……ばきつと草や木の枝を踏みつぶしながら。

「痛覚ないのかよ！」

「くっ……！！！」

クルスが大振りなナイフを抜き、俺も剣を構える。

巨大なゴブリンは走りながら、目の前で邪魔をする俺達に向かって太い棍棒を振り下ろす。

「全員逃がさないように囲んで！」

相手から目を逸らさずに大人達に声を掛けるが、固まったように彼らは動くことが出来ていない。

様々な焦りが脳裏によぎる。

（この人数なら力尽くで動きを止めれるのに！）

巨大なゴブリンの力任せの一撃は俺とクルスは後ろになんとか飛び退いてかわした。

ずんと棍棒が地面に凄まじい勢いでぶつかり、鈍い音を立てる。そこでようやく、巨大なゴブリンの動きが止まった。

「アアアアアア！ニンゲンガアアアア！」

「……言葉が話せるのか？」

巨大なゴブリンが怒り狂ったように吠え、持っている棍棒を無造作に振り回す。

辺りの木や草を薙ぐスピードを見るに、当たればただではいられないだろう。

現に細い木はへし折れているし、折れない木でも棍棒が当たった表面は抉れて酷いことになっている。

俺達はそんな攻撃を地形を利用して木を盾にしながら回避していく。

必死だった。

攻撃そのものは単調なものの、早すぎる……！

「ケイト」

クルスが名前だけ呼んで、巨大なゴブリンの横を取るように動く。彼女は後ろを出来れば取るつもりだろう。
ならば……

「はっ！！」

棍棒を振り下ろした手の先を狙うように剣を振る。

咄嗟に腕を引かれたのでかすり傷しか与えられない。

だが、敵とのリーチが違いすぎるため、不用意に近づけば一撃でやられてしまうだろう。

手さえ落とせば、片手は折れているのだ。

相手に一撃で致命傷を与えられなくても、少しずつ攻撃のための

手段を奪って行けばいい。

相手からすれば面倒に感じているだろう。

そうして、自分に意識を集中させておき……

バキッ！！！！

後ろからクルスのナイフが相手の背中に突きこまれる。

背丈の差から首には届かなかったようだが、刃が深く突き刺さる。だが、彼女の突きは鋭く威力も申し分ない……人間であればまず致命傷のはずだった。

さらに追撃をかけようと彼女は予備の武器である使い慣れた木刀を抜こうとするが、

「ガアウアアアアア！」

「……きゃっ」

痛みはあったのか苦しそうな声を上げるが、傷など関係ないかのように手に持った棍棒で遠心力をつけながら横薙ぎに振る。

「クルス！」

かろうじて木刀を盾にし、後ろに飛んで勢いを殺したものの彼女の身体はまるで軽い枝のように吹き飛ばされた。転がりながら吹き飛ばされた勢いで木にぶつからなかったのは不幸中の幸いか。

「……っ」

必死にクルスは立ち上がろうとしているが、痛みが酷いのかどうか怪我をしているのか……

そんな彼女の方にゴブリンは向き直り……

「うあああああっ！！！！！！」

何もしなければ彼女は死ぬと考えた瞬間、頭が真っ白になっていた。

地を蹴り、力強く踏みしめて何もかもを頭から追い出して駆ける。

ザクツツ！！！！

今までのような逃げ腰な攻撃ではない。捨て身といってよかった。

彼女に止めをさそうと背中を向けた巨大なゴブリンに全力で剣を突き刺したのだ。

体をくつつけるように相手に押し付ける。

剣は巨大なゴブリンの前から突き出していた。

肉をえぐる気持ちの悪い感触が手から伝わる。

自分かえぐられたときの経験を思い出して吐き気と恐怖、そして絶望がが込み上げてくるが、それでも手は離さない。

「やってやらあああああああつ！！！」

折れそうになる心を叫びながら無理やり抑え込んだ。

涙も鼻水も止まらない。

だけど剣の柄だけは離さずに押し込み続ける。

「グルウウウニン……ゲン……！」

流石に効いているのか苦しそうに呻くがそれでも暴れ続け、手が柄から外れて投げ出されて体勢を崩してしまう。

尻餅を付いた体勢で上を見上げると、巨大なゴブリンが怒りの形相で見下ろしていた。

間に合わない……死ぬ！……瞬間的にそう思ったが、相手の動きが一瞬止まる。

おかげでかろうじて咄嗟に後ろに転がるのが間に合った。

クルスが投げってくれた木刀が、巨大なゴブリンの頭にあたつてくれたからだ。

一瞬、巨大なゴブリンは後ろを気にしたが俺に止めを刺すのを優先したらしく、こちらを見ている。

そしてゆつくりと棍棒を振り上げるが……その瞬間を狙って木に括つけることによって魚を取る銛変わりにしていたナイフを相手の目に向けて投げた。

普段の成果が現れて狙い通り右目に突き刺さる。

「そう簡単に死んでたまるか！」
「ギャッ……！」

目を潰されて悲鳴をあげる相手を立ち上がって睨みつける。
もう剣もない、弓もない、ナイフも使ってしまった。

それでも、自分がやられればクルスが危ないと思うと気後れせずに相手を睨みつけることができた。

手持ちの札はまだある。

と、考えて集中を始め……その段階になつて大人たちも立ち直ってくれたのか農具を持って俺達を庇うように農具を構えて前に立ってくれた。

「すまない。あ、あとは……ま、まかせ……」

まだ怖いのだろう、震えながらも彼らが前に出る。

巨大なゴブリンは棍棒をだらりと下げたまま動かないが、目は死んでいない。

すぐにまた攻撃してくるだろう。

そう考えて精霊魔法の詠唱を始めたその時、巨大なゴブリンの背中に斧が突き刺さった。

「てめー。うちの娘になにすんだ」

「……ガイさん。僕はいいの？」

聞きなれた頼もしい力強い言葉に思わず安堵の笑みが自然と浮かんだ。

そして、次の瞬間には巨大なゴブリンの首が落ちた。

「手こずらせてくれたわね。ケイト。大丈夫？」

「母さん……」

革の軽鎧を身に纏った母親は、血と土で汚れながらも怪我は一つもなく、穏やかな笑みを浮かべていた。

無駄な動作が一切ないせいで、まるで絵を見ているかのような。

ガイさんの方は相当無茶をしたのか、小さな傷がそれなりにある。

「すまねえな。こいつ追い詰めた所で、残ってたゴブリン全員がこ

いつを逃そうとして玉砕覚悟で向かってきやがって逃がしまった」
「間に合って本当によかった」

ガイさんも母もほっとしたように、息を吐く。

俺もほっとしていた……精霊魔法を使おうと思っではいたが、あの魔法は扱いが難しく、人外のもの、意思疎通をするために伝え方を間違うと自滅することもあるからだ。

毎日練習はしているが正直まだ自信はない。

なまじ威力があるだけに使い方が難しい。

余裕があるときに使うべきだった……だが、魔法というものがいざ戦闘になると完全に頭から抜けていたのだ。

反省の余地は沢山ある。

だが、そんなことよりまずはすることがある。

「クルス……怪れないか？」

膝立ちの姿勢で息を荒らげて動かない彼女に声を掛ける。

「体中痛い」

「助けてくれて……有難う」

彼女が木刀を投げてくださいなければ回避できずに、死んでいたかもしれない。

礼を聞くと彼女は薄らと嬉しそうに笑った。

「立てるか？」

「無理。抱っこ」

「あーんじゃ……ケイトも疲れてるだろうし俺が……いや、悪いなんでもない」

「弱いわねー」

クルスにきつ！と睨まれて、ガイさんはすごすごと明後日の方向を向き、母さんはけらけら笑った。

しかし、もう少し頑張ってくれてもいいのではないだろうか。

彼女を背負って山を降りるのは大変なんだけど……

きらきらと、期待するような目で見つめてくる彼女に逆らうことはできそうになかった。

彼女を背負いふと巨大なゴブリンの死体を見ると、名前がわかるようになっていた。

相手のことは倒すとわかるようになり、ステータスが見れるようになる。

こいつも例外ではなかったらしい。

「先に戻っておけ。罾とかの回収は俺達でやっとかから」

ガイさんの言葉に頷くと俺はクルスを背負ったまま山を降り始めた。

まだ、何か夢の中にいるような気分で現実感に乏しく、気持ちは平坦で頭と感情がうまく働いていない。

ただ、クルスを危険な目に合わせてしまった恐怖と後悔みたいな気持ちだけはやけに鮮明に脳裏に残っていた。

第二十六話 母と子と

クルスを背負ったまま家に戻り、真つ青な顔で待っていたクルスの母親であるメリーさんに彼女を届けると、涙を流しながら彼女を抱きしめた。

家でただ待つしかない彼女にはよほど心配だったのだらうと思う。

クルスの方は冷静で何度も、

「私もお義父さんも大丈夫」

と、抱きつかれたときの痛みで顔を顰めながらも彼女に優しく声を掛けていた。

クルスとメリーさんの母子関係はあまり見ることがない。

昔は、本音を言えば彼女たちの関係も心配だった。

ぼろぼろの服を着ている上、クルスは痩せてがりがりでちゃんと生活できているのか……との不安が常に付きまとっていたのである。

当時は母やエリー姉さんがとにかく気にかけて、よく服や食事を差し入れていて届けるのと同時に、それをきっかけとして彼女たちと話をしにいたりしていた。

今でもどっちが保護者なんだろうと思わなくはないが、現在の彼女達の姿を見ていると以前に感じていた漠然とした不安は杞憂だったかなあと安堵している。

「ケイト君、有難う」

「いえ、僕のほうが助けてもらったんです。寧ろ怪我をさせてしまつて謝らないといけなくくらいで。本当に助かりました」

そういつて、メリーさんに頭を下げた。

事実、彼女がいなければ俺の命は無かつただろう。

「あれ以上どうすることも出来なかつた。別にケイトのせいじゃない」

「うーんそうかな」

もう少しなんとかなつた気がする。

初めから魔法を準備すればよかつたとか、緊張と恐怖心できちんと動けなかつたとか……そんな後悔があつた。

全てを上手くやろうと考えるのは傲慢だろうか。

「それにケイトを今回は守れた」

そう嬉しそうに微笑む彼女に、

「僕としては、クルスが怪我しないのが一番嬉しいんだけどね……」

苦笑するほかなかった。

クルスを送り届けて一人になっても現実感が乏しいような気持ちで家への道を歩く。

まるで、心が凍りついたような……。

会話も出来る、笑顔も浮かべることができたと思う。

なのに心がついてきていないような、別の誰かが話しているような感覚がしている。

家にたどり着いて、中に入る。

皆まだゴブリン討伐に使用した罾等の片付けを行っているのだろう。

エリー姉さんもジンさんから応急手当を学んでいるため、討伐が終わり次第、薬草を準備して皆の治療のために山に入っているはずだ。

いつも明るい家の中はがらんとして、まだ日は高いのに真っ暗なように思えた。

急に疲労を感じてダイニングの椅子に座る。

疲れているのに頭が冴えていて眠くはならない。

水さえも用意する気になれずテーブルの上に手を置く。

何も考える気力も沸かない。

戦って勝った喜びも、体の痛みも、命の危険に対する恐怖も沸かない。

ただ、疲労だけが残っていた。

いつまでそうしていたのだろう。

一瞬だったような気もするし、長い時間そうしていたような気もする。

「ただいま……ケイト。今日は一段と難しい顔してるわね」

はっ……と気がつくと普段着に着替えた母さんが、何時も通りの穏やかな笑みを浮かべながら隣に身体をくつつけるように座っていた。

「母さん……早いね？」

「早くないわよ。ま、少し早く帰らせてもらったんだけどもうすぐ夕方。貴方が心配でね……勘は信じるものね」

言われて窓を見ると、空の色が徐々に赤くなって来ている。
家に戻ってから数時間は経っていたようだ。

「……そんなに様子おかしかった？」

「逆。様子がおかしくなかったからおかしかったのよ」

母さんは筋肉痛なのか、いたたと少し顔を顰めながら俺を正面からみれるように椅子を動かす。

「今は酷い顔をしているわ。良かった」

「良くないよ……本当に……！」

母親は悪くないと頭でわかっているのに、思わず怒りの感情をぶつけてしまう。

だけど、母さんは動じず微笑んだままだ。

ますます、こみ上げるように苛立ちが沸き上がる。

「また死にかけたんだ……怖かったんだ……あんな思い何度もしたく……ないっ！！」

「そうね」

幼馴染に刺されたときのことを思い出す。

大事な人と一生会えなくなる辛さ、置いていく悲しみ、物理的な痛みと精神的な痛み。

「死んだら……何も無くなるんだ。大事な人も守れない」

「まるで、死んだことがあるみたいね……」

はっと驚いて母さんに顔を向ける。

余裕がなく何も取り繕うことができない。

誤魔化すのは諦め、息を吐く。

「……そうだよ。僕にははっきりと死んだ記憶がある」

「記憶が……貴方が子供離れた知識を持っていたのはそのおかげなの？」

「信じるの？母さんの子供じゃないかもしれないんだよ？」

ついに話してしまった……自分自身が延々と抱えていた自己嫌悪感と罪悪を。

しかしその問いに対する母さんの態度に非難の色はない。

「話してもらっていい？」

母さんはこちらに暖かい視線を向けたまま、肩を優しく引き寄せ、自分の胸に抱きしめて呟く。

「……僕は平和な世界で学生をしていたんだ。親友がいて、幼馴染の恋人がいて、優しい後輩がいた」

「うん」

「幸せだったんだ。だけど、親友と幼馴染は僕を裏切ったんだ」

何年も立って記憶が薄れてもこの記憶だけは鮮明に残って色褪せる事がない。

10年近く隠してきた記憶と本心を激情にかられるままに話し続ける。

「裏切ったのは僕ということになって僕は孤立した。誰も信じてくれない。不条理だと思った。僕が何をしたんだ！……本当に今でも解らない。僕は幼馴染が好きだったからそれでも我慢した。非難も甘んじて受けた」

「そうなの……」

母さんは俺の脈絡のない話に口をはさむことなく、考えこむような仕草をしながら相槌だけを打っていた。

「信じてくれた人が一人だけいた。その後輩は一年以上、孤立する僕を信じて一緒に居てくれた。漸く立ち直って、僕は自分を好きでいてくれた後輩と今度こそ幸せになれると思ったんだ」

「うん……何かあったのね」

「……その後、幼馴染が謝ってきたけど僕は全く取り合わなかった。そして、その彼女に刺殺された」

母さんは少しだけ考えて、

「貴方はその幼馴染を恨んでいるの？」

「当たり前じゃないかっ！」

「そう……」

「……けどそんなことより、後輩を守れなくなったことと、幸せにするって約束を叶えられなかったのが……一番辛い」

いつの間にかテーブルに涙がついていた。

指を目元に持っていくと無意識のうちに流れていたらしい。

俺は自分で話しながら気がつかされていた。

振り切ったように忙しく毎日を生きていたが、あの時の後悔を10年近く経った今でも割り切ること、納得することができず引きずっていることに。

「ケイト」

母さんに呼ばれてびくつと震えた。

俺は何を話したのか……少し冷静になって恐怖を覚え、母さんの顔を思わずじつと見つめる。

だけど、母さんは何も言わずにただ強く、そして優しく抱きしめてくれていた。

この世界に来てから初めて、俺は誰にも遠慮することなく思いっきり声を上げて泣いた。

どれくらい泣いただろう……窓から差し込む光は赤く染まりきっていた。

泣いたせいか凍りついたような感情は溶けて幾分すっきりとした気分になり、普段通りのようになっている。

「ゴブリンの胸に剣を突き立てたんだ」
「知ってる」

母さんに普通の子供のように抱きつきながらぼつりと呟く。
情けないが縋らないと崩れそうだった。

「あいつ、言葉をしゃべってた。必死に生きてた。殺したくなかった」
「そうね……」

巨大なゴブリンの満身創痍な姿……それでも、生き延びようとしていた姿を思い出す。

「僕は殺そうとしたんだ」
「ケイトはどう思うの？」

上手く言葉にできない俺に母さんはゆっくりと考えてみなさいと、答えを急かさずに問いかける。

俺は整理できない雑然とした気持ちをひとつずつ整理しながら答えた。

「殺さなければ大事な人が死ぬ。僕にはゴブリンよりクルスの方が大切だった」

「そうね」

「多分同じことがあれば……僕は悩んでも同じことをする」

母さんは一つ頷き、少しだけ体を離して顔を両方の手のひらで優しく挟み込み、

「悩むのは大事なことよ。大事な物を守るために冒険者は戦うわ。……それは自分のものであったり他人のものだったりするけれども……人の命を奪うこともある」

俺は冒険に対する良い側面ばかり考えていたのかもしれない。当然、こういうことはあるのに。

そのための技術を今まで磨いてきていると言っのに。

「今なら……冒険に出ず、村で結婚してゆっくり暮らしていく……ということも出来るのよ?」

「そうだね」

遠くない未来を想像する。

今の気持ちから、もし彼女が変わらなければ、そのまま何も考えずにクルスと結婚し一日一日ゆったりとした時間の流れの中で暮らしていくことになるだろう。

それはきつと幸せなことであるに違いない。

自分の性格としてもそれが向いているのかもしれない。

だけど……

「それでも僕は冒険者になりたい」

縋り付いていた体を起こして、自分の足で立ち上がり母さんの顔を見てはつきりと告げた。

一瞬だけ母さんの顔は哀しそうに歪んだが、すぐに笑顔を作る。

「どうして……今日みたいに辛いことも沢山あるのよ」

「初めは、目指したのもなんとなくだったけど……僕はこの世界が好きだ」

なぜ自分は旅に出たいのか……最近はずっと考えて悩んでいたことでもある。

「ジンさんやガイさんの話とか訓練を通じてもつと見たくなっただ。辛いことがあっても、廻らなかったことを後悔しないためにも、

母さんみたいに世界中を見て回りたいんだ」

前の人生では後輩と一緒に二人で、いろいろ見て回りましょう！と俺の腕を掴んで引き摺り回したのをふと思い出す。

懐かしく、楽しい思い出だ。

この世界での旅も、きっと苦しくても楽しいものになるに違いない。

母さんは苦笑いしつつ、頭を撫でる。

「じゃあ、世界中見て回ったらいつでも帰ってきなさい。貴方の故郷はここしかないんだから」

「冒険に飽きたら戻るよ。ありがとう母さん」

ようやく俺は冗談っぽく笑うことが出来ていた。

「クルスちゃんはどうするの？」

「置いていくよ。僕じゃ守る事はできないし」

そう……と、興味深そうに母さんは呟く。

「他の男に取られてもいいの？」

「……クルスが幸せなら」

母さんは堪えきれないといった感じにくすくす笑った。
何か面白いところがあったんだろっか。

「貴方は人を見る眼は本当にないわね。あの子も本当に心配な子なのよ……まあいいわ……旅に出るまで私が鍛えてあげる」
「母さんが？」

「親らしいこともちゃんとしないとね。今まで楽しめた分は」

母さんは私は甘くないわよと何時もの優しげな笑みと違う、獰猛そうな笑みを浮かべた。

何か冷や汗が背中を伝ったのは気のせいだろうか……

第二十七話 結婚式

瞬く間に時は過ぎ、一年近くの時が流れていた。

俺とクルスは13歳となり、マイルは今年で16歳……成人を迎える。

「クルス！剣が正直すぎる！」

母さんは地面に書かれた円の中から一步も動かずに、クルスの剣を捌いて軽く当て身を喰らわせる。

見た目は軽そうに見えるのだが実際は内臓までずしりと響く恐ろしい一撃だ。

クルスは立ち上がるのもやっという感じで、よろよろと立ち上がる。

「しゃきつと立て！……ふん、そんなことでは誰も守れやしない。諦める」

「……くっ……」

歯を食いしばってクルスは少し涙を浮かべながらも立ち上がってフェイントを織り交ぜながら何度も立ち向かっていく。

母さんはそれを笑いながらギリギリまで攻撃をさせておいて、簡単に弾き飛ばすのである。

これが延々と続けられる。

致命的な怪我をしないあたり、母さんは上手く手加減をしているのだろうか……

「決意だけで、なんとかなれると思うな。実力を付けろ！」

穏やかな母さんのイメージは最早ない。
家に戻れば普段通りの母さんなのだが……余計に怖く感じるのはなぜだろうか。

そういえばと思い出して父さんに聞いてみた。

「母さんと喧嘩したことある？」

「そんなこと聞かずともわかるだろう」

という答えが返ってきただけであつた。

この一年は今までで最も厳しい一年となつた。

俺達は猟や薬草での貢献があるため、農作業は大体免除されていたのだが三人揃って母による拷問……もとい、扱き……いや、訓練

を受けていたのである。

ガイさんやジンさんの訓練も戦闘に関することは母が見るようになり、段違いの厳しさになってしまった。

三人とも何度もガイさんやジンさんに助けを求めたのだが、二人とも目を逸してしまうのだ。

普段穏やかだと思っていた母は……いや何もいうまい。

情けないが三人の結束はさらに高まったかもしれない。
ある意味日々を生き残るために。

そんな日々の中、一つの祝い事があった。
厳しい冬を乗り越えたこの春、長い付き合いをしていた一組の男女がついに結婚したのである。

村の広場では結婚式が行われ、村人が総出で彼らを祝っていた。

「ジンさんおめでとうございます」

「エリー……おめでと」

ジンさんは新調された服を着て、何時も通りの仏頂面で立っている。

一方で新婦のエリー姉さんは喜色満面といった感じでジンさんの腕を取って大はしゃぎしていて、その対比がなんだかおかしい。

姉としては子供のころからの10年弱に及ぶ執念が実った形だし、そりゃ嬉しいだろう。

どうやってあの堅物ジンさんを落としたのか興味があったので姉に聞いてみたのだが、

「女の子だけの秘密だから駄目」

と、断られてしまった。

クルスには何か熱心に説明していたようだが、変な知識を付けるのはちよつとやめて欲しいところである。

まあ二人の結婚は時間の問題ではあった。

姉は家事も万能だし、ジンさんの補佐も出来るしで彼としても手放す選択肢はもはや取れなかっただろう。

外堀を完全に埋め、内堀も埋まっていた。

どんな手段を使ったかは知らないが後は止めを刺すだけだ。

旅に出る前に大事な姉が幸せになるところを見ることができて良かったと思う。

姉とクルスが仲良く話しているのを確認して、俺とマイルスは広場から抜け出していた。

賑やかに楽しんでいる人ごみに紛れて、彼女たちから距離を取り、広場の端にあるベンチに座る。

「こんなこそしなくてもいいじゃねえか。ばれやしないって」
「クルスは鋭いから念には念をいれておかないと」

やれやれ心配性だなあとマイルスは肩を竦める。
こちらとしてはクルスは心が読めるんじゃないかくらいに俺は思
ってるくらいだんだが。

「そりゃああれだ。クルスがお前しかみてないせいじゃねえか？」
「じゃあ、マイルスはリイナさんには全部ばれな訳だ」

マイルスがからかうようにちゃかして来たので、俺も彼の恋人の名
前を出すと少し黙って空を見て、

「違いねえ。女ってなすげーな」

と、げらげら笑った。

「それより、本当にマイルスは村を離れるのか？」
「ああ、成人の儀が終わったらでるぜ」

どうやら彼は本気のように口を引き結んで真剣な顔で頷く。

「リイナさんはどうするんだ？」

「一年で戻るつもりだから待っていてくれて頼んだ。俺がいない間に好きな人が出来たり一年過ぎて戻らなかったら……他の奴探してくれて」

顔を俯けつつも、はっきりとした口調で語ったその返答を聞いて、俺は奥歯を噛んで左手で頭を搔く。

「本気か？リイナさん……もう20歳近いだろ？」

「ああ。でもこれは必要なんだ」

彼は座りながら両手を膝の上で組んだ。

ゴブリン討伐を行ったときに彼の下にも一匹ゴブリンが行ったらしく、普段通りの力を発揮できずに苦戦して悔しい思いをしたらしい。

しかもその後、俺達の戦いも聞いて決めたのだろう。

「リイナが20になってしまう……肩身を狭くさせて彼女にも悪いんだが、だからこそ今年いくしかない」

「何故一年なんだ？」

俺はマイスの方に顔を向ける。

彼にとっても単純な話ではないのか、深い悩みの色が見えた。

「俺は村に戻るつもりだ。問題があったときに解決するための力が欲しいんだよ」

「そうか。今の自分たちじゃ、厳しいか」

今はまだ母やガイさんやジンさんがいるが、いつまでも彼らに頼っている訳にも行かない。

俺たちの世代は俺たちの世代で、村を守るための強さを持っておきたいというところか。

責任感の強い彼らしい話ではあった。

「ガイさんのように何かあったら一人でも街にいけるようにもしくきたいしな」

「ちゃんと考えてたんだな」

「おい！何か俺が何も考えていないみたいじゃねえか」

二人で顔を合わせて笑いあって、話題を打ち切りとりとめもない雑談に話を切り替えた。

男同士で話すのも気を使わなくていいのもあって楽しいものである。

同性にしか解らないものもあるということかもしれない。

今日の会話は自然と自分たちの師匠でもあるジンさんの話へと移っていく。

「にしても傑作だよな。あのジンさんの顔！あれ照れてんのかねえ」
「あ、おい、マイス後ろ……」

「は？ほんと、いつもいつもくそ真面目なのに、俺たちと同年代の女捕まえるなんて意外と隅におけない……よな？」

俺が顔を真つ青にしてベンチの後ろを見ているのを見て、マイスもようやく後ろに気づく。

「中々興味深い話をしているな」

「い、痛い痛い！！く、首っ！首がああああ」

いつの間にか背後に疲れたような様子のジンさんが立っていた。
ここは隅なのに……

「主役が真ん中にいなくていいんですか？」

「ああいうのは私には向いていない」

「そういうわけにもいかないでしょう……お義兄さん」

笑いながらジンさんを違う呼び方をすると彼はマイスを最後に一発殴ってから、広場の中央を向いて苦々しい笑みを浮かべる。

「お前たちは笑うが、明日は我が身だと思っておけ。クルスモリイナもあいつと同じ雰囲気……というか女の怖さを持っている」

「ジンさんがいうと説得力ありますね」

「あたた……。俺にやわかねえな」

楽し気に話込んでいる女性陣がいる方向を三人揃って見つめる。

料理を食べながら話している姿は無邪気で、そんな怖さは微塵も感じられない。

だからこそ怖いのかもれないが。

「まあ、あいつが幸せなら俺はいいのかもしれん」

彼なりの惚気なのだろう。

顔の方は相変わらず苦々しいままだが。

様々な出来事を挟みながらも時は止まらずに流れていく。
俺達が旅立つ日は日、一日と近づいていた。

第二十八話 別れの収穫祭

今年の夏は暑かったものの雨も適度に降り、作物にとっては好条件だったようで最近では一番の豊作となっていた。今年は冬の心配をあまりすることはないだろう。

父さんや村人達の表情も非常に明るく、農作業に向かう足取りも軽い。

俺とマイルスとクルスは訓練漬けの日々を過ごしつつも、最近恒例になっている収穫祭のための狩りを行ったりして過ごしていた。

明日には収穫祭が行われる。

それは、住み慣れた故郷との別れの日を意味している。収穫祭の準備を終えた帰り道、俺は今日までの長い年月を思い出しながら複雑な気持ちで空を見上げていた。

翌日の昼頃には広場はこれまでの年にはない盛り上がりを見せていた。

昨今に例をみない豊作だったこともあるが、カイル兄さんからの祝いの品として贈られた大量の酒の効果でもあるだろう。

届けてくれた商人によると兄さんとホルスは若手の出世頭としてうまくやっているそうだ。

活躍していることも嬉しいが、何より二人が元気そうだという事実が俺には嬉しい。

母さんが毎年収穫祭のときに用意してくれる新しい服に袖を通して俺も広場で食事を摘む。

「ケイト兄ー。こんにちはっ！」

年少の子供たちの元気のいい挨拶を受け、俺も彼らと目線を合わせるように屈み、笑顔で挨拶を返す。

そうすると、彼らは嬉しそうな顔をして仲間の子供たちと走り去っていった。

ゴブリン退治の武勇伝は子供たちでは有名になっているようで、俺達は憧れのような眼で見られることが多い。

俺やマイルスが邪険に扱わないのもあるのかもしれないが子供たちに懷かれ、たまに話をしたり、物語を話したりするようになった。クルスは子供達の羨望の視線が苦手なのか、そういうときは遠巻きにみている。

そんな日の彼女は少し機嫌が悪くなり、周りに誰もいなくなると暫く二人でいることを要求してくるのである。

からかうように子供扱いすると、嬉しいのかされたくないのか微妙な葛藤があるようで、見ていて微笑ましい。

しかし、こうして楽しそうに無邪気に走り回る彼らを見てみると、自分も大人に近づいているんだなあとしみじみ思う。

俺は身体だけかもしれんと、左手で頭を掻いて苦笑しながら。

そんな風にとりとめもなく、考え事をしていると急に周囲の村人たちからどよめきの声が聴こえてきた。

あれ誰だ！といったような驚きの声が多いようだ。

前に彼女の着飾った姿を見たのはいつだったか……クルスの普段の飾り気の無さとあまりに差のある美しい姿を見ながら懐かしい記憶を思い出す。

彼女の髪は腰近くまで伸び、その綺麗な黒髪を白いリボンで飾っている。

今日の彼女は前のような子供っぽいワンピースではなく、綺麗な刺繍を施したドレスのような服を着ており、落ち着いた雰囲気を出していた。

貴族の娘といっても通用するのではないだろうか。

「ケイト」

「ああ、似合ってる。……ごめん、驚き過ぎて他に何も思いつかないよ」

「いい」

少しだけ彼女は微笑んで、俺の腕を取って自分の腕と絡めた。

数年前の同じ日に感じた嫌悪感のようなものが今では少ししか感じられない。

これはきつとあの日から彼女と自分なりに真正面から向き合ってきた結果だ。

ある時は笑い、ある時はからかいすぎて喧嘩したりもしたし、命

懸けの戦いも二人で乗り切ったりもした。

いつも彼女は俺の隣にいてくれたし、友人や幼馴染というものに不信感を持っていた自分の心を癒してくれていた。

お陰で、この世界でも友人も持つことができた……そのことに、本当に感謝をしている。

「いこ」

彼女が少し子供っぽい仕草で、この一年間に背が一気に伸びた俺を上目遣いで見上げる。

大人っぽい格好をしても彼女は彼女だ。

俺は頷いて今年も収穫祭を楽しむために歩きだす。

昔も今もこの村の祭りは変わらない。

変わるのは人だけでそれも緩やかなものだ。

この村の姿はいつまでも変わらないのではないか……現実的に考えてそんなわけではないのだろうが、そう思わせるのはこの村を故郷だと思っているからか。

難しいことを考えるのはやめて、クルスと手をつないで料理を食べたり、音楽を聞いたり、いきなり踊るように引っ張りこまれたりしつつ楽しみ、時はメインイベントであるキャンプファイヤーまであっという間に過ぎてしまう。

西の方角に太陽は沈み、踊りが始まるのを村のみんなと静かに待つ。

ふとマイスのことを思い出して辺りを探すと、成人の儀で飲まされすぎたのかふらふらな足取りでリイナさんに手をひかれて広場から抜け出していた。

「マイスのやつ……大分お酒飲んでたみたいだけど大丈夫かな」
「心配無い。リイナがいる」

クルスは二人の方を見て微笑んで手を振っている。
広場から去るまでに、リイナさんはこちらの方を一度振り向き、クルスの方を見て手を振ってマイスを彼女の小さな身体を一生懸命使って引つ張っていった。
そして広場から、踊りの始まりを告げる大歓声上がる。

「今年も始まったか」
「踊ろう」

二人で頷き、炎に近い広場中央までクルスの手を引いて小走りで駆け寄る。

周囲の大人たちから冷やかすような声が、子供たちからは拍手と歓声が上がった。

「やれやれ、クルスと一緒にだと目立って仕方ないな」
「ケイトに言われたくない」

冷やかしなども一時のことで、次第に皆相手を探したり、決まった相手と思い思いに踊って楽しんでいる。

俺達もまた時を忘れて、少しはうまくなった踊りの腕をクルスと一緒に披露していた。

そして、緩やかな音楽へと変わった時に、俺は彼女を人気の少ない隅に移動を促し、口を開く。

「明日マイルスと行くよ」

「……黙ったまま行くのかと思ってた」

意外そうにクルスは応える。

当然彼女には俺が旅に出る事はばれていたのだろう。

しかし、それでいい……それは意識的に彼女に伝わるようにしたのだから……もう様々な準備は終わっている。

「それを考えなくもなかったけど……クルスから逃げないって約束したから」

「私も行く」

一度手を離し、こちらを上目で見つめる。

「それは出来ない」

「知ってる。ずるい」

ずるいというのは母さんやガイさん、メリーさんの力を借りてクルスが旅に出ないように説得してもらったことだろう。

俺は自分だけでは彼女を納得させることはできず、どんな手を使っても俺と一緒にいようとすると考えた。

クルスが俺のことを何よりも大事にしてくれていることくらいはさすがに解っている。

彼女は俺を守るために何でもしてくれるんだろう。
だけど、それでは駄目だと思うのだ。

だから、彼女にばれないように他の人の力も借りた……そして、
勿論最後は自分で決着をつける。

「どうして……私だけを何故置いていくの!」

普段は大きな声を出さない彼女の振り絞るような叫びを聞いて内心揺れそうになるが、しっかりと彼女の眼をしっかりと見て語りかける。

「マイルスは成人になったけど旅をするには俺達は若すぎる。騙そうとする人間も多いはずだ……自分だけで精一杯なんだ。クルスまでくれば今の俺じゃ対応できない……それに……」

「それに?」

「こっちの方が大事なんだが俺達も一度離れてお互いの事を考えるのが、二人ともにとって大切なことだと思うんだ」

今のままでは俺もクルスもお互いが近すぎて人間関係が閉じているため、共依存的な関係になりかねない。

それはこの村で人生を終えるならそれでもいいのだろうが……冒険にでるなら致命的になってしまうだろう。

正面から彼女と向いあうために、一度離れるという選択を取る。

矛盾かもしれない。その結果俺の心が変わるかもしれないし、彼女の心が変わるかもしれない。

それが自分で選択した結果であるならば、これまでの生活も楽しかった思い出と出来るようになるのではないだろうか。

今度は間違えない。

子供のころの延長として恋愛をするのではなく、一組の男女としてしっかり考えたい。

目の前のクルスは涙を流していた。

心が痛む。

本心をいうなら、俺とて彼女とは離れたくないのだから。

「っ……私の心は変わらない」

「それならそれでいいし俺も嬉しいよ。大事なのは考えて、いろいろ見て……悩んで、結論を出すことだと思う……俺自身も」

嗚咽を零すクルスの肩に手をまわして、力強く抱きしめる。胸に顔を埋める彼女の体は、鍛えていても柔らかかった。

「お互いに答えが出たら、またこうやってちゃんと話そう」
「うん……」
「それまではお別れだ」
「やだ！」

クルスが整った顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら叫ぶ。

「クルス……」
「わかってる……ケイトやお義父さん達の言う事が正しいってわかってるんだけど……納得できないし……ケイトが危ないときは……誰に反対されてもすぐに助けに行く。絶対に」

顔を真っ赤にしながらそれだけは譲れないといった感じに強い視線をこちらに向けられ、頭を左手で掻いて答える。

「その時はよろしく頼む。それから……お互い逃げずに頑張ろう」

俺達は昔の収穫祭のときのように……今度は俺の方から軽く唇を合わせて離れる。

彼女の涙はもう止まっており、顔を真っ赤にして何時もの意思の強そうな瞳でこちらを見つめていた。

俺の顔もさぞかし赤くなっているだろう。

彼女と再会できるのかどうかは、今の俺にはわからなかった。

エピソード 故郷を後にして

幸いにして旅立ちの日は雲ひとつ無い晴天になった。

秋独特の暑さの中にも微かな冷たさが混じる風が気持ちいい。

俺達はガイさんの案内で歩いて三日ほどの距離にある、迷宮のある都市に向けて歩いていった。

冒険者として世界中回るにも力も金もある。

その両方を得るためには迷宮で鍛えるのが手っ取り早いというのとらしい。

腰の剣の重さを感じる。この剣が自分の命綱となるだろう。

「おい、本当に良かったのか？」

「何が？」

「クルスだよ。クルス……別にあいつの強さなら足でまといにやらんだろ！」

マイスは、朝頃は夢見心地といった感じでぼーっとしていたのだが、昼ごろには自分を取り戻したのか、元気に喋っていた。

「お前の言う事何でも聞くだろうから手もかかんないんじゃないかね？」

「だから駄目なんだよ」

彼女の人生は彼女のものだ。

クルス自身がちゃんと考えて、自分の意思で心からやりたいことをやって欲しいと思う。

「マイルスこそ、リイナさんはいいのか？」

「うえ！あ、ああ。たぶん心配無い。たった一年だしな……」

何故かリイナさんの名前を出すとマイルスは顔を赤くして慌て出した。おかしい。

「もしかして、酒飲まされて戻った後……なんかあったな？」

「な、ななななな、なんもないぞ！」

そんな不審な様子に少し前を歩いていたガイさんが堪えきれないといった感じで吹き出した。

「がははっ！ケイト！こうだこう……うまくやったな！こう聞かないとっ！！」

「が、ガイさんっ！！！」

「なるほど」

腰に手を当てて大声で笑うガイさんに、マイスは顔を赤くして抗議の声をあげていた。

「け、ケイトお前こそ……姉ちゃんがクルスとキスしてたって言ってたぞ！」

「あああ、ば、馬鹿こらっ……！」

「なあああんだとおおおおっ！おいケイトてめえっ……！」

一度立ち止まり、ガイさんが俺の胸ぐらを掴んでぶんぶんと振り回す……正直痛い。

親馬鹿の前で余計なことをっ！

「……そこまでしといてうちの娘を振るとは……いい度胸じゃねえか」

「振ったわけじゃないですよ！離れて考える時間取っただけですってば……！」

どさつと宙に浮いていた俺の身体を降ろしてもらったと、げらげらと笑っていたマイスの頭をぽかっ和一発はたいておく。
そんな光景を見てガイさんは感慨深げにつぶやいた。

「まああれだな。しかし、お前ら思い切ったなあ。折角好いてくれる女がいるつてのによ」

「ガイさんときはどうだったんです？」

マイスが彼に質問した。

そういえばそうだ……ジンさんと一緒に旅をしたってことと、旅の中身は良く聞いていたが、旅立ちの時の話は聞いたことがない。ガイさんは、その質問を聞いて暫し沈黙し、

「お前らは聞かないほうがいいんじゃないか？」

と、顔を顰めて言った。

嫌がるガイさんにマイスは何も考えずに是非是非！と詰め寄っているが俺はなんだか嫌な予感が消えない。

ガイさんはあの態度から結婚前からメリーさんが好きだったと予想される。

そして、最近まで結婚していないジンさん……まさかっ！！

「マイス！やめとけっ！！」

はっ……と気付いて俺はマイスに声を上げたが、手遅れだったようだ。ガイさんはにやーっとゴブリンと戦っていた時のような獰猛な笑みを浮かべていた。

「まあ、マイスが聞くんなら仕方ないよな。うん」

「え……」

「俺とジンのやつが旅に出たのは16の時だ。マイスと同じ年頃で……俺達にはそれぞれ好きな女がいたんだよ」

「うわあああ……聞きたくないって……マイスはまだ気付いてないのかぼかんとしている。」

「有名な冒険者になって男を上げて戻ってくるって若くて血の気も多かった俺達は言ってたわけだ……俺達は順調に腕を上げてそこそこの冒険者にはなれた。まあ色々とあって結局村に帰ったんだが……」

「ようやくこの話のオチに気づいたのだろう……マイスも顔を真っ青にしていた。」

「村に戻ったら……二人とも結婚していて、すっげえ幸せになっていたんだ。がははっお前らも同じになるかもな！」

「うわああああああっ！」

「ああああ、嫌な現実がつ！」

「ガイさんは意地悪そうに大声で笑い、俺とマイスは頭を抱えて叫んでいる。」

「まあまあ、お前らも振られたらジンみたいにガキのときから自分好みに育てりゃいいじゃないか」

「それジンさんが聞いたら、殺されますよ？」

育てられたのはジンさんの方な気がするの俺だけだろうか。

「……マイス？」

「か……帰る！！」

「あ、こら正気に戻れ！大丈夫だ。お前はガイさん達と違って一年だろっ！小まめに手紙出してれば大丈夫だ！！……たぶん」

村の方向に走ろうとするマイスを必死に止める。

しかし頭の冷静な部分で、こいつ、いつの間にか本気で惚れてたんだなと妙に感心してしまった。

「リイナ〜！お願いだから待っててくれよ〜！」

「情けない声で叫ぶなよ。あああ、マイスのせいで俺まで帰ってクルスに謝りたくなってきたじゃないか！」

「がはははははっ！まあがんばれお前ら！！」

俺達はどうして大騒ぎをしたりしながら冒険者として生きるために一步を踏み出す。

新しい街、新しい生活に期待と不安を抱えながら、堅実に一步ずつ……そして、どんなことがあっても可能な限り陽気に前向きに生きていこうと俺は考えていた。

閑話 1 ある日の薬師と悩める猟師

薬草の匂いが染み付いた部屋の中、俺は作業を行っていた。椅子に座り、足が動かない俺のために作業しやすいよう調整された机にすり鉢を置いて、適度に力を加えてハクベ……通称消毒草と呼ばれる草を擦り潰していく。

擦り潰した消毒草は乾燥させ、細かくして革の袋に詰めていく。実際に手当てをする時には、水を含ませて布に塗り怪我に当てるといった風に使われることになる。

応急処置用の薬として一般的な物であり、今の俺の生活における収入源の一つだ。

冒険者時代に治療費を削るために本を見ながら見様見真似で始めた薬の調合だが、本業になるとは昔は思ってもみなかった。足が悪くても出来ることを考えると……人生本当に何が役に立つか解らない。

きりの良い所まで作業を行い、薬を作る手を一度止めて休んでいると、どんどん！ と大きなノックが家中に響く。来客が来たようだ……この音はガイだろう。

「ジンさん。ガイさんです！」

背中では三つ編みに括った生命力に溢れた可愛らしい少女……エリーがぱたぱたと音を立てて部屋に走って入ってくる。俺は彼女に頷くと、部屋に連れてくるように頼んだ。そして苦笑いする……子供に頼らなければ友人一人出迎える事が難しい現状に。

ガイは自身で取った革と俺の作った薬を持ち、歩けば三日掛かる城塞都市カイルルまで売りに行ってくれていたのだ。

「よおつ！ ジン。帰ったぜ。薬も革もそれなりの値段で売れたぜ」
「それはありがたいな。助かる」

部屋に手を上げて入ってきた髭の大男は低い机を挟んで対面に座ると、にいつと笑って荷袋から一本の壺を取り出しガタッと机の上に置く。

「見ろ！ こいつは……」
「失礼します」

ガイが満面の笑顔で解説しようとした時、一時的に席を外していたエリーが水差しと小さな棒、コップを二つ、保存食のチーズを切ったものを部屋に運んできた。につとエリーはガイに笑いかけると、奴は苦笑いして頭を掻いた。

「ありがとう。今日は外してもらえるか？」
「わかりましたっ！ また明後日きますねっ！」

「無理はしなくていい」

エリーは頭を下げると踊るように軽やかに部屋から出ていく。十歳くらいとは思えない聞き分けの良さだ。彼女は俺の話す事の真偽がわかるらしく、俺が本当に困る時にはごねることが無い。

「やれやれ、エリーちゃんは気が効くな。ありゃ、いい嫁さんになるぜ」

「早く相手を見つけて欲しいものだ」

俺のように終わった人間の元にいることはためにはならないだろう。俺とガイの師匠である彼女の母……マリアからは飽きるまで好きにさせてと言われているが何を考えているのか。昔から読めない人だ。

「お前さんがもらっちなえばいいじゃねえか」

「阿呆……で、そいつは、何の酒だ？」

げらげら笑うガイに注ぐように促す。とくとく……と杯に注がれると濃密な甘い匂いが漂ってきた。三分の一ほど杯を充たすと、今度は水差しから水を注ぎ掻き混ぜる。

「ワインか」

「南のグライダー産……らしい。いいもんだぜ」

「良く金が足りたな」

「ダンジョンに一日籠もったのさ。浅い階だけだがね」

ぐふふと笑う彼に苦笑で返す。恐らく土産を買っただけに潜ったのだろう。昔からこいつはそうだった。金を自分のために使わず、酒代の他は仲間の装備や道具、俺の本の代金に自分の分のお金を充てていた。

こいつに言わせれば、代わりに強くなったり必要な知識を身に付けてくれるから楽でいいということだったが。

俺の足もガイがいなければ治療できず、切断しなければならなかっただろう。そのために掛かった金を考えると頭が上がらない。

そんなガイは酒を煽ってうめえー！ とからから笑っていた。

「ふむ。確かにこいつは旨い」

「だろっ！ だろっ！ いやあ、いい買い物だぜ」

チーズをたまに摘みながら暫く二人で雑談を交えて飲んでいると、ふと、ガイの目線がたまに揺れていることに気付く。こいつの癖だ。俺は小さく笑った。

「で、何を悩んでいる？」

「うえっ！ な、何でわかった！」

ガイは摘んでいたチーズをぼろりと落として驚きながらこちらを見て苦笑する。

「ガイは分かり易いからな。顔にすぐに出ている。またクルスか？」
「クルスも心配だが……もっとやべえのがいる。ほれ、お前の恋人の弟だ」

「誰が恋人だ……ケイトか？」

珍しく難しい顔をしてガイは頷く。エリーの弟のケイト……彼の噂は俺もエリーや患者から聞いている。

天才、神童……そして、化物では……という畏怖も混じっている。四歳で猟に興味を持つという……異常な子供だ。しかもそれが現在まで二年も続いている。

「そつだ。あいつには不可解な所が多い」

「一番付き合いのあるのはお前だからな。どう思うんだ？」

「天才……というわけではないと思った。俺は頭悪いからお前みたいに上手くは言えんが……元から知ってる……って感じが。あああもう、わかんねえ」

がりがりとガイは頭を搔く。話を聞きながら俺もふむ……と、考える。俺はこいつ自身が思っているほど頭が悪いとは思ってはいない。

知識……という点では確かに足りないが、直感で物事の本質を把握していくタイプだ。人間関係では困っているところを見たことがない。そんなガイが悩んでいる……。

「後な…… 本人は目がいっていったんだが……」

「ふむ？」

「森の中の草むらにいる兎を、点でしか見えなくらい離れた場所から見つけるとかありえんだろ！ 目が良い？ んなわけあるかつ！」

どんっ！と叫びながら机を叩く。がしゃつと壺が撥ねて音をたてた。

「くっ……くく……いや、すまん。あはは……それで誤魔化されると思われてるのか？」

「流石に心外だが……わからないと言っておくしかないからな」

惘然としてガイはそっぽを向く。

まあ、こいつとしてはそうするしかないだろう。それでもちゃんと教えているということは、ケイトは中々見所はあるところか。

「しかし、ケイトには一度釘を刺して置くべきだろう。技術の方は真面目に学んでいるのか？」

「ああ、そっちはな。あいつほど真面目なやつは珍しい。ガキの癖に真剣そのものだ。生き物を殺す事に抵抗があるらしいが、無いよりはあったほうがいいだろう」

「まあ、そうだな」

俺は同意する。生き物を殺すのが趣味になつたりしたら、本当に質が悪い。そういう奴に力を与えてしまえば碌な事にならないのは目に見えている。

「問題はその、目が良いって……それだろうな」

「ああ。ひよつとしたら……『呪い付き』かもしれない……」

「滅多なことというな」

呪い付き……死と破滅を望む呪われた人間。大抵、何かを憎悪している狂いきった奴らだ。正気でない……そして、圧倒的な力を持つていたり、特殊な能力を持っていたりする人間。知恵を持った化物。その殆どが害を為す存在だ。

俺達の仲間を殺し、俺の足を奪った敵も……この狂った『呪い付き』だった。

「例えそうだとしても……殺せるか？」

「無理だ。師匠の息子だぞ……それに、情が移っちゃった」

「だとすれば……ケイトが狂わないようになんとかしてやるのが俺達の仕事だろう」

「俺『達』……ね」

くくつとガイが笑う。俺も声を出さずに口の端だけ動かして笑い、杯を相手に向けて掲げる。俺自身がどうするかは俺もケイトに会って直接判断すればいい。

「しかし、どうすりゃいいと思う？」

「まずは孤立させないようにすることだな……今のままではまずいだろう」

「だけだよ。あいつ子供で友達作ろうとしねえんだよ。違いすぎる」

ふむ……と、考える。同年代では難しいということか。エリーの話だと、可愛い弟といったイメージしか伝わらなかったが……友人に玩具にされたりとか、幸せそうにお菓子を食べるとか……。どうもガイの話がしつくり来ない。

そういえば友人の妹の世話もしっかりやっていたと言っていたな……む？

「……手が無いことはないな」

「どうすんだ？」

「クルスを任せてみよう」

「はあっ！んな無茶なっ！」

クルス……俺達の幼馴染であるバルドスの……俺達が助けられなかった親友の娘は、原因が解らない人間不振に陥っている。

子供達も頑張っているし、ガイも他の大人達も関わっているが……改善していない。

「ケイトの性格は……悪いか？」

「いや……悪ガキっぽい所もあるが、師匠の躰がいいんじゃないか？」

「それなら……俺も何とかなるとは思わないが……難しいだけに、

あいつに出来ない事もあると他の者の心配を取り除けるだろう」

「あいつが……クルスを何とかしちまったら？」

困惑したように俺にガイが聞き返す。俺はワインの入った杯を煽り、笑いながら杯を持った手の人差し指をガイに向ける。

「嬉しいだけじゃないか。皆喜ぶ」

「……成程な」

ガイが笑って杯を置く。何時の間にかワインは全部飲んでしまっていたようだ。

少しの間ガイは考えるように黙っていたが、荷袋を担ぐと迷いは晴れたのか、立ち上がった時にはすっかりした顔に戻っていた。

「クルスに川へ行くように伝えてみる。聞いてくれるかはわからないが」

「そうか。では俺のところ来る理由は依頼だと伝えてくれ。あいつを計る」

「わかった……頼むぜ？」

「ああ。任せておけ」

ガイはにいつと笑うと、背中を向けたまま手を上げて帰っていった。あいつが去ると部屋が広くなり、寒くなったように感じる。やれやれと、苦笑いして俺は杖を持つと、コップとチーズを乗せていた皿を片付けることにした。

あの師匠の息子が相手だ。これからきつと忙しくなるのだろう。
静かな日々はもう残りわずかかもしれない。

閑話2 クルスの祭りの前（15話）

収穫祭を明日に控えたその日の朝、私はベッドと服の収納箱しかない狭い部屋でエリーから貰ったフリルの付いたワンピースを両手で抱えながら、この服を着るべきかどうか悩んでいた。

彼女には悪いけどこんな可愛い服は自分には似合わないと思う。

こんなの着て隣を歩いたらケイトが恥ずかしくないかな？ 迷惑じゃないかな？

そんな不安にかられる。

「むー……」

エリーは私にとって姉のような人だけでも、彼女の考えは未だによくわからない。

服を着ると何か変わるの？ とエリーに聞くと彼女は笑って、

「ケイトと一緒に祭りを廻り易くなるよ？」

とか、

「弟はあれでもてるからねー。大人っぽいし？ 何時も通りの格好だったらクルスちゃんじゃなくて、他の子が先に一緒に廻っちゃうかも？」

と、にやにや笑いながら言っていた……エリーは本当に意地悪だ。

だけど、彼女の言いたいこともわかる。まだ少し早いけど、もう少し大きくなればみんな恋人とかを気にするようになる。そしたら……ケイトも……私みたいなよりも可愛らしい子と恋人になるかもしれない。

そんなケイトが他の人と笑い合いながら祭りを二人で楽しんでいるところを想像する。

……わからないけど、何か嫌だ。

不快な気分になって眉をひそめる。そして、自分がケイトと二人で綺麗な服を着て歩いているところを想像する……。

「クルス」。朝食できたよ？」

「うん」

急にお母さんの声がして考えるのを途中でやめると、私は寝間着から着慣れた動きやすい服に着替えて部屋から出た。今日は収穫祭の準備のお陰で一日狩り。

頑張ろう。と、ちょっとだけ幸せな気分で頷いた。

この日の狩りは幸い上手くいった。

長時間の狩りは少し疲れたけど。体力のあるマイスはともかく、ヘインなんて今にも倒れそう。大人との話し合いはケイトがやってくれるらしく、マイス達は先に帰ってしまった。

「……はい。この班にはこれだけ……」

「ああ、そんじゃ足りない……」

「大丈夫です。その分……」

「そついうことか。わかつたいいぜ。任せろ」

私は残ってケイトと大人のやり取りを見つめる。真剣な表情で私にはわからない話をしていた。昔から不思議……何故ケイトはこんなことが出来るのだろう。

誰もケイトを子供扱いしていない。

それでいてそれが自然なように見える。

（私みたいな子供と祭りを廻るのは嫌じゃないのかな？）

そんな風にも考えながらしばらく彼の仕事を見ていたがふと、

（私が大人みたいになればいいのかな？）

と、思いついた……これは名案かもしれない。
そうすれば自然に一緒にいれるし、ケイトも楽しいはず。うん、
これだ。

（でも、大人ってどうやればなれるんだろう）

首を傾げながら身近な大人を思い出してみる。

ガイおじさん……いや、お義父さんとお母さん……緊張しながら
お義父さんは手を繋いでた。ぶるぶる震えて、ずっと躊躇してたけ
どなんでだろう。後は……抱きしめるのと……キス？

特別難しい技術はいらないし、組手でヘインを倒すより簡単な気が
する。

まずは手を繋ぐことからかな。

「クルス。終わったよ？ 待っててくれてありがとう」
「うん、お疲れ様」

私は地面に置いていた荷物を持つと、いつもより少しだけケイト
の近くに並んで歩くことにした。

まずは手を繋ぐ……繋ぐ……こと。

簡単なことのはずなのになかなかケイトの手をとることが出来な
い。手を繋ごうとして急に湧き上がる不安……変だと思われたら……
嫌がったらどうしよう……。……

そう思うと急に怖くなって手を引つ込めてしまふ。

表情には出さないように気を付けながら、隣を歩きつつも焦りを感じ始めていた。

（そうだ、剣術でも基本が大事。急には出来ないから一歩ずつ……まずは、触るところから）

名案だと思う。さりげなく触るだけなら不自然じゃないはずだし。前を向きながら、手を宙にふらふら彷徨わせてみた。そうすると、自分の手の甲がたまにケイトの手の甲に触れる。何故か顔に血が上り、緊張で心臓がときどきと鳴っているが、まずは第一目標達成。しばらくそんな風に歩き、大分慣れてきて甲と甲が触れるのは大丈夫になった。

（次は……手を繋ぐ！）

なんとか自信も付き、背中に汗を感じながらも手を繋ごうと覚悟を決めて力を込めたその時、

「なにあれ」

前を向いて歩いていたのは失敗だったかもしれない。ミスが男達に囲まれているのを見て、思わず足を止めてしまい声に出してしまった。

「さてどうするかな」

「様子見」

もう少しだったのにとすると、どうしても不機嫌な声になってしまふ。

マイスには今度身体で責任を取ってもらおうと思う。

家に戻って夕食を食べ、桶に入れた水を使って身体を丁寧に拭いてベッドに座る。手元にはエリーが作ってくれた新しい服がある。今年も着ないでおこうと思っていたのだけれど……。

「どっしょ」

思わず口に出してしまった。慌ててドアの方を見て誰もいないのを確認し、ほっと息を吐く。

結局、マイスが助けた女の子のお陰でケイトと踊りの約束をすることが出来た。だから、マイスは許すことにする。問題は……明日。

約束はしたけど、エリーの何時も通りだと外の人に誘われて踊ってしまいかも……という言葉が頭から離れない。立ち上がり、手元の服を体に合わせてみる。

例えばこんな服を着た自分以外の人がケイトと踊っている姿を想像する。

……絶対嫌だ。

そんなのを見たら強引に取り戻そうとしてしまつかもしない。

でも、普通の女の子に暴力を振るうわけにもいかない。嫌われるし、困ったことになってしまう。

なら、どうすればいいのか。

去年のように誰も近づけないようにケイトを見つけて見張っておけばいい。

だけどそれだと、ケイトが楽しめない。それも困る。

ぐるぐると悩んでしまつて答えがでなくなり、ふと、お母さんに聞いてみようと思いついた。大人っ婆ければケイトは楽しめる。したら、一緒にいても問題はない。

思い付くと服を持ってまだ食堂で洗い物をしていた母のところに
行つて聞いてみた。

「これ」

「あら、今年のお祭りの服なのね？ エリーにまたお礼を言つておかないと」

「……大人っ婆い？」

お母さんは少し考えていたけど、

「大人っ婆いし素敵よ？ それを着たらどんな男の子でも喜ぶわ」

と、くすくす笑つた。

どうやらケイトも喜んでくれるらしい。動きにくいし恥ずかしいけどそれなら問題無い。私は一つ頷くと、お母さんに言つた。

「明日これ着る」

自分の部屋に戻ると服を丁寧に置き、ベッドにぱすつと音を立てて倒れ込む。

随分と悩んだけど、これでいい……何だかこんな感じで同じように悩んだ事があったような……気のせいかな。心がぽかぽかする感じで嫌じゃないし、あっても悪いことじゃなかったのかも。

この服を着れば今日出来なかったこともちゃんと出来るかもしれない。この服を着て、ケイトと二人で楽しんでいる自分を想像するとなんだか幸せそうに思えた。

……明日が楽しみ。

閑話 3 ヘインの憂鬱（18話）

暖かかった春が終わると、今年はすぐに真夏かと思わせる程に暑くなった。毎年、春の終わりには雨がまとまって降るのだが、今年はそれもなく唐突に夏がきたのかと思わせられる。書庫はこの家ではまだ風がよく入る涼しい場所にあるのだが、それでも本を捲る指に汗が滲んでしまうのが煩わしい。

そんな暑さを恨めしく思いながら、僕は自分の観察が役に立つかもしれないことを喜んでいいのか嘆けばいいのか悩んでいた。

僕は知っている薬草に関しては、毎年の生育について種類ごとに細かく日記らしきものをつけており、例年と全く違う薬草の生え方と育ち方から今年は異常気象になるのではないかと疑っていた。

もし、本当にそうなるならばすごい発見ではないだろうか。異常気象などならないほうがいいのは間違いないが。

最もこの話をしたのは師匠の一人であるジンさんにだけだ。不吉な予想など誰も喜ばないのだから……彼なら疑いつつも調べ、村のために対策を考えてくれるだろう。そうなれば、後は大人達の仕事だ。

ジンさんは頼りになる師匠であり、このような点では尊敬している。しかし……、

「ヘイン君、難しい顔して……まだ調べ物？」

「う！ あ、ああ。そうなんだ。エリーさん」

後ろからひょいっと顔を近づけられて耳元で明るい声で急に呼びかけられると、一瞬で顔に血が上り、飛び上がりそうになった。

気が付くと、後ろにいつのまにか友人のケイトの姉であるエリーさんが二人分のハーブティを用意して立っている。

ケイトの姉である彼女は、顔立ちこそ似ているが真面目でどちらかというと口数も少ない落ち着いた弟と違って、底抜けに明るく元気で、話好きで相手まで明るくしてしまうような性格の魅力的な女性だ。

二人分のお茶……今日はジンさんは村を回って診察しているためにいない。出かけるときにジンさんは僕に遅くなると行って出かけて行ったのだが……彼の狙いはなんとなく透けて見えている。

「そろそろ一度休憩にしましょ？」

「ああ、もう結構時間経ったのか。時間が経つのは早い」

窓から外を見ると、昼に彼女の手料理を頂いてからそこそこの時間が立っているようだった。集中したせいか、太陽の光が目に入ると少し痛い。

僕は彼女の方を向き直して有り難い申し出に頷くと本を読む手を止めて、彼女の後ろについてテーブルのある部屋へと歩いていった。

テーブルを挟んで僕とエリーさんは向き合う。彼女は僕ととりと

めもない話をしながらにこにこしている。僕は話が苦手だ……他の女性は誰もが敬遠する僕の面白いと言えない話でも本気で笑ってくれるのは本当に有り難い。

はつきりいつて僕は彼女のことが好きだ。

僕と話すときに驚いたり笑ったりコロコロ変わる表情も、困っているときは見逃さない鋭さも、氣遣いの出来る優しさも、可愛らしい唇も……だけど、彼女は僕に友人としての好意は持ってくれてくれるものの、僕に対して恋愛感情は持っていない。これは断言できる。

なぜなら彼女には好きな人がいるからだ。

心の中で一つ溜息を吐く。その彼女の好きな相手は恐らく僕と彼女をくっ付けようというらない気を使っている。そして、僕はそのせいで余計にどれだけ彼女が彼を愛しているか……そう、もう恋ではない。

愛しているのかを聞かされるのだ。

さらに厄介なことにその時間でさえ楽しいので更に好きになってしまふ悪循環。

おそらく彼女は無意識なのだろうが、僕としては彼女と二人でいる時間は嬉しいが痛いという微妙な時間なのである。嬉しい気持ちのほぅが強いのがまた辛い。

「……？　ヘイン君どうかした？」

「あ、いやなんでも。ちょっと考え事が」

ぼーっとしていたようだ。慌てて手を振る。

「なにになに！　悩み事なら相談乗るよ？　友達だもの！」

友達……年少のいたずらっ子のように笑う彼女には悪意はない。苦笑しながら、何か悩み事あったっけか……と記憶を探ると、一つ最近おかしいことがあったので彼女に意見を聞いてみる事にした。

「最近、ケイトは変だと思いませんか？」

ことつ……と、木製のコップをテーブルに置き、彼女の方を見ると少し考えるような仕草をした後、頷いた。

「そうね。秋くらいから少しおかしいかも。クルスちゃんを避ける？」

「はい。理由は知りませんが」

避けてるのは解る。問題はその避けている理由だ。クルスに変わったところはないし、特別ケイトが何かをされたわけでもないだろう。多分。

無口で能動的でもない彼女が普通の女の子っぽく恋人になるように迫るのとかは全く想像が出来ない。

「クルスちゃんは……うちの弟の事が好きだよね？」

「まあ、多分」

「じゃあ、好きな人に興味無いつて態度とられるのは辛いよね」

むう〜と可愛らしく唸る。全くもってその通りだ。本当にこの姉弟は……。

半分飽きれつつ見ていると、エリーさんはそうだ！ とぼんと手を叩いた。

「ヘイン君、弟に原因を聞いてよ！ 私はクルスちゃんに聞くからさ？」

「構わないけど……男女の問題は自分達で解決するしかないのでは？」

正直、男女関係に関わるのはごめんだ。だが、彼女は、

「それは違うよヘイン君！ 確かに最後は自分達で解決しなきゃいけない。けど、もし悩んでるなら年上として、ちゃんと相談に乗ってあげないと！ 自分たちの力で解決するための手助けは必要だよ？ それにやっぱり心配だし……」

勢い良く立ち上がって言いながら最後は不安そうに呟きながら椅子に座る。僕は溜息を吐くと関わる覚悟を決めた。彼女に不安そうな顔はさせたままでいたくない。

自分は馬鹿だなと正直思うが、彼女にはやっぱり笑顔が良く似合

うのだ。そのためには僕はなんだってしてあげたいのである。それが今の自分の幸せなのだから。

「わかりました。ちゃんと僕がケイトにアドバイスしておきます。いい案もありますし、すぐに解決しますよ」

「ほんとっ？ 流石ヘイン君ね。賢いと違うねー。お礼に今度私の友達紹介するね？」

「それはいいから」

苦笑いする僕に彼女はほんとお堅いんだからーっとくすくす笑っていた。

堅い訳ではなく、彼女にしか興味がないだけだ。と、本人に言えたらどれだけいいだろう。

この後の小さなお茶会は穏やかな雰囲気ですることができた。僕にとっては一番大切な時間である……けど、こんな時間もあと何回あるのだろうか。

彼女はきつと目標を達成する。僕にとっては辛いことだけど、彼女の幸せがそこにあるなら祝福しようと思う。あの人も流石に彼女を不幸にすることはないだろうし。

それなら、彼女が迷わないように、僕のことは友人として良い思い出になるように……気付かれる前に僕は彼女の前からいなくなると思う。勿論、それは彼女の為だけでなく、僕自身の夢を叶える為でもあるのだけど。

僕に例え自分のことを好きでなくても力づくで振り向かせて、奪

い取るくらいの気概があればまた違ったのだろうか。将来……情けなさに後悔する日が来るかもしれない。

だが、それも自分で選んだ未来だ。

どんな手を使ってでも好きな女性を奪った未来に幸せを思い描けなかった自分に資格はないのだ。そう、思った。

小一時間程話をした後、僕は借りていく本を選び、家に帰る準備をしていると師匠であるジンさんが丁度家に戻ってきていた。家に戻る前に挨拶をしておかなければと、調合を行う部屋へと足を運ぶ。彼は戻って休む間もなく、薬草の葉を擦り潰していた。

「ジンさん、お疲れ様です……何もこんな時間になるまで回らなくてもよかったのでは？」

「ああ。だが、身体の動かない人もいるからな。俺もここにずっといては身体が錆びるし、まあ、ついだという奴だ」

ジンさんは足が片方悪いため歩くには杖がいるし、それを持っても歩きにくい。だから村人は基本的にはこちらまで歩いてくる。病氣の人には自身で行かざるをえないが、薬だけであれば家族に取りに来てもらっている。

だが、今日の場合はそこまでの必要がある人は2、3人だけだった。午前中だけでも十分終わる人数だったろうし普段はそうしているはずだ。

彼は一度手を止めると、身体を調合台からこちらに向けると、僕の顔をみてうつすらと笑う。

「それに、若い者同士が語らうの邪魔するのも無粋だろう」

「僕達は多分そういう関係にはなりませんよ」

頭が痛くなる。少しこめかみを抑えながら、僕は血を吐く思いで言った。だが、師匠にはそんな思いは伝わっていないようだ。

「お前なら大丈夫だ。頑張れ」

「手遅れですよ。どう考えても無理です」

ジンさんは僕の気持ちに気付いているだろう。そして、エリーさんの気持ちもわかっている。そちらはどうも軽く見ているようだが……苦笑いする僕にジンさんは若いから大丈夫だと見当外れなことを言っていた。

僕はジンさんは頼りになる師匠であり尊敬している……が、男女関係に関してはどうしようもなく駄目な人だと思っているし、殴りたいと思って僕が悪くないと思うのだがどうだろうか。誰かに一度聞いてみたい。

閑話 4 相談その後（23話）

マイスから報告を聞いたお義父さんは、ケイトのお父さんのモルト村長との相談に向かっていた。
そこから家に帰ってくると疲れたのか珍しく難しい顔をして、椅子に座っている。

「どう？」

「ああ……いや」

水と夕食を私とお母さんで三人分用意し、お義父さんの対面に座る。

私に問いかけに対してお義父さんの反応は鈍い。

そんな様子にお母さんも心配したように声をかける。

「ガイ……何があったの？」

「ああ。ちよいと放置するとやべーもんがな。戦わなければならないくなった」

お義父さんはパンを少しだけちぎって口に入れる。

昔、結婚する前は狩りのときとか豪快に食べていたけどお母さんと結婚して行儀がよくなった。

ぎこちないけど、いつもはそれでも幸せそうにしている……しか

し、今日は流石に真剣だ。

「危ないの？」

「クルス……今回は……危険すぎる。お前もケイトも置いていく」

苦々しくそういつて、お義父さんは苦いものを流すように水を軽く飲んだ。

「ガイ。貴方は……大丈夫なの？」

「心配すんな。俺ならいける……それに、マリアさんも手伝ってくれる」

「マリア……ケイトのお母さん？」

戦うときには出てこなさそうな名前に不思議に思って問い返す。
お義父さんは頷き、

「あの人は俺よりも強いからな」

「え……」

かわいい服を作つては私を着せ替えて遊んだり、お菓子を焼いたり、いつもいつもにこにこしてるしで家庭的なイメージしかないから驚いた。

流石ケイトのお母さん。

「それでどうするの？」

「ケイトがいい案を出してくれた。それをジンと相談して決める」

「なら、ケイトは絶対に参加するね」

「んぐっ」

何年も見ているからわかる。

ケイトは自分で出来ない事を提案なんてしない。

彼は自分ができる範囲のことをする人だから。

それなら私の取る道は決まっている。

彼を守るために……一緒にいるために……。

「私も行く」

「だ、駄目だ駄目だ！！危ない！！」

反対されるのはわかっている。

お義父さんが私を心配してくれるのも嬉しい。
だけど、

「駄目でもついていく」

「クルス……危ないのよ？クルスにもしなにかあったら……」

不安そうにお母さんの視線が揺らぐ。

愛している人を失った辛さは私には解らない。

だけど、

「ケイトが死んだら私も死ぬ」

「おい、馬鹿なことをいうなっ!!」

だん!とテーブルをお義父さんが叩いた。
だけどこれは本当のこと。

体は大丈夫でも心はまた死んでしまう……そんな気がする。

「そう決めた。だから私がケイトを死なせない」

「勘弁してくれよ……とにかく駄目だ」

お義父さんが泣きそうな顔をする。

申し訳ないけどこればかりは譲れない。

二度も命と心を助けられたこともあるし……それに、

「ケイトが好きだから……死なせたくない」

「クルス……」

「駄目だからな。絶対だめだぞ!」

お母さんが、泣きそうな困ったような顔をする。

私はお母さんのように後悔で泣いて暮らしたくはない。
怒った顔でこちらを見ているお義父さんを見つめる。

「駄目だ！子供には危険すぎる！」

「大人も一緒。森に慣れてないから余計に危険」

ぐっとお義父さんが息を詰める。

「お、女は全員認めてないんだ！」

「私はミスにも勝てる」

「あのなあ！ありや練習だろうが！！」

しかし、勝ってるのは事実だ。

命懸けになればどちらが勝つかはわからないが。
ケイトを守るためなら絶対に勝てる。

お義父さんが黙ってしまったためそのまま睨み合う。

「……だああああ！わかったよ。だけど条件がある！」
「条件？」

30分程で根負けしたようにお義父さんは叫ぶ。

「ああ。まずは一番危険な場所は駄目だ。これはケイトも絶対にだ」

こくりと頷く。

ケイトがいらないなら、そこに固執はしない。

「でかいゴブリン…… ノーブルゴブリンが来たら…… 絶対に無理をするな。出来れば逃げろ」

「ノーブルゴブリン？」

水の入ったコップを弄りながらお義父さんは頷く。

「ゴブリンの上位種だな。冒険者時代に戦ったことがある。強敵だった」

「お義父さんは勝てた？」

「ジンと二人でな。ケイトの話から推測すると恐らくいる」

そこまで話すとお義父さんは一度立ち上がり、物置の方へと歩いていった。

部屋にお母さんと二人きりになる。

私は、心配そうに見ているお母さんの方を見た。

お母さんのお腹は少し膨らんでいる。

あまり心配はかけたくないのだけど……。

「お母さん、我儕言ってごめん」

「大事なのね…… ケイト君が」

私は頷く。

「ケイトは頭いいし大人っぽいけど怖がり寂しがり屋だから」

「そうなの？」

「そう。だけどそこも好き」

不思議そうな顔をしたお母さんにそう続けると、理解してくれたかのように微笑んでくれた。

解ってくれたら私も嬉しい。

「あなたの好きはどういう意味の好きなのかしらね……」

「……？」

お母さんはよく意味のわからないことを言った。
好きなのに種類があるのだろうか。

しばらくして、お義父さんは無骨なデザインの大きなナイフを持つて戻ってきた。

「これ持つてけ。クルスなら使える」

「これは？」

「友人の形見だ。女好きのどうしようもないやつだったが、いいやつだった。あいつもクルスが使えたら喜ぶだろ」

友人を思い出しているのか苦笑いして、その幅のあるナイフを鞘ごと私に渡す。

自分でも手に持ってみる。

何故かぴつたりと私の手に馴染んだ。

「まあゴブリンだけなら、木刀で十分だろうけどな」

「ありがとうお義父さん」

「感謝なら死んだハザードにいつといてくれ」

言われたとおりにお義父さんの友人に目を瞑って祈りを捧げておく。

ケイトを守ってくれるようにと。

女好きらしいから嫌っていかもしれない。

「しかしどうしてこう、お転婆娘になっちまったかなあ」

「お義父さんのお陰」

苦笑するお義父さんにきっぱりと告げる。

「感謝してる。ケイトに出会わせてくれたことに」

「俺はちよつとばかり後悔してるぜ……まったくあの野郎……」

「他の人ならいいの？」

「そうだなあ……ダメだな。情けない男には嫁にはだせん！」

お義父さんにとってケイトの存在は複雑なんだろう。
少し可笑しくてくすくすと笑ってしまった。

「ガイ……貴方親馬鹿になってるわよ。もう……」

お母さんもお義父さんのあんまりな言いようにくすつと笑っていた。

「さあ、食べましょ。いろいろ心配もあると思うけど、まずは元気出していかなきゃね」

「ああ、そうだな。辛気臭い顔はしておられん」

お義父さんは慌てたように緊張でしまった顔をマッサージするかのようにくにくにと触る。

「ガイは明るくなくっちゃ。皆それを期待してるし、私は……まあ全部好きだけどね」

「お、おい……」

そんなお母さんの言葉に真っ赤になる。
いい加減慣れればいいのに……と思いつつ、私とケイトもこんな風になればなーとふと思う。

雰囲気も軽くなり、私たちは食事を再開した。

プロローグ 暗闇の中

薄暗いダンジョンの内部を俺はミスと二人、走っていた。

ダンジョンの内部は完全な闇ではない。真四角に石を切り取ったような人工的な物に見える通路には等間隔で頼りない光源が配置されている。この光源は人が作ったものではなく太古の昔から、ダンジョンを照らしているものらしい。

どういう技術なのかは現在までわかっていないが……。

しかし、その明かりだけでは心許ないので、松明やランプを用意するのがダンジョンでの冒険者の基本だ。

もっとも、そんなものはとくに投げ捨てている。

「いやー……ほんとクルス連れて来なくてよかったな」

「そうだね」

俺も走りながら苦笑いして頷く。ミスも俺もまだ笑える状況だ。鍛えておいて本当に良かったと痛感している。

今、俺達はゴブリンの群から逃げていた。俺には100m先まで敵を判別できる能力がある。普通、こんなことにはなりはしないのだが……。

「まさか、言い出しつぺのあいつらが……四人とも俺らを置いて逃げるとは」

「だから危ないっていったろ。どう見ても悪人面じゃないか！」

「ぷっ！ 顔で判断かよ。おっさん達可哀想じゃねえか？」

マイスが四人組の冒険者にゴブリンの溜まり場があるから倒しに行こうと声を掛けられたのだ。

その冒険者達のレベルは7と俺達より高かったが、スキルは殆ど無いに等しかった。

敵がゴブリンくらいなら六人もいれば大丈夫だろうとの目算があったこともあり、知らない相手と組んで一度騙されるのもマイスの為と思ったのだが……ダンジョンを甘く見すぎていた。

城塞都市には冒険者になるために様々な人がやってくる。一番多いのは農民だ。税が安い為、この都市の近郊の農家は多めの子供を養う余裕がある。だが、農地には限りがある……水やその他の権利などの問題もあり、容易に畑を増やす……というわけにもいかないのだ。するとどうなるか。

畑を持つ事が出来ない者達は職を求めてこの街に来ることになる。比較的安価で農家でも読まれる紙の本の内容が、冒険を賛美するような内容の物が多いのもこの街に夢を持った者達が集まる原因の一つなのだろう。

そうして、危険があることを知らず……知っていても自分は大丈夫と一攫千金の夢と希望を持ってこの都市に来るのだが、成功する

のはごくひと握り……らしい。

冒険者になるまで戦ったこともないような人もいるのだから、不思議ではないのだが。

「マイス！ 前っ！」

「げえ！ やるっきゃないか。囲まれたらまじいな」

「巻き込む訳にはいかないよ。その二人……逃げる！」

逃げている方向にいた二人に声をかけると走っていた足を止め、懐の布袋から土の塊を取り出し、大地の下位精霊ノームを呼び出す。ノームは帽子を被った髭むくじやらな、手のひらサイズの小人だ。可愛らしく見えて、意外と力が強い。

マイスは中古の両手剣を俺の魔法の射線にはいらぬ場所に陣取って構えた。

ステータスを確認し、暫し待つ。そして、ゴブリンが固まった所を狙い、

「ノーム。正面の奴らを攻撃しろっ！」

叫んでその方向を指して叫ぶとノームの姿が消え、その姿が無数の石礫に変化し、前を走っている三体のゴブリンに向かって勢いよく飛んで頭や体に命中した。

マイスは突っ込んで魔法で怯んだゴブリンを一瞬で切り倒している。

ゴブリンはキィアアアアと甲高い断末魔の声を上げて倒れ込む

と、もともと存在していないかのように姿を消して行っただ。

「ダンジョンの敵は死体が残らないからいいな」

「後ろは気にしないでいいよ」

「……そうこなくっちゃな。後8匹か」

ゴブリンの群を前に、にいつと獰猛な笑みを浮かべてマイスが剣を構えた。

逃げるのに飽き飽きしていたんだろう。マイスが前で戦い、俺が後でサポートする。これがダンジョンに入るようになってから決まってきた戦い方だ。慣れないときは色々失敗しながら試行錯誤したが、今ではこれが定着している。

俺自身も前に出ないわけではない。最近では躊躇なく敵を倒せるようになってきている。やはり死体が残らないことが大きいのだろう。感覚が麻痺しないか……そんな恐怖はある。

マイスは簡単に考えているが、俺は出来れば逃げたかった。

数の差というのは簡単な足し算ではなく、数が多ければ多いほど厄介さが跳ね上がっていくからだ。今いる場所が狭い5m程の通路でなければ、まず逃げることを提案していたと思う。

他のゴブリン達も追いついてきたのを確認すると、俺は袋から石を二つ取り出し、両手に持ってマイスに叫ぶ。

「前二匹！」

「おう！」

そのまま右手と左手で、前の方にいるゴブリン二匹に向かって右左とテンポ良く投げ、命中したかどうかも確認せずに剣を構える。自分にはマイスのように力ずくで押し切ることはできない。

ならば出来る事は彼が取り零した敵を倒すことだ。

これ程の数を同時に相手するのは初めてで複数相手をしなければいけないかもしれないと思うと少しぞつとする。慣れてないのだ。

「キィアアアアアアッ！！！」

石が当たったゴブリンを素早く仕留めているマイスの横を二匹のゴブリンが抜けてこちらへと向かってきた。暗くて見えにくいため、ステータスを表示させて位置を確認しながら先にこちらにくる方へ、体を向ける。

ゴブリンは棍棒を中々の速度で振り下ろしてくるが焦らない。少しだけ下がってかわして首に剣を突き入れた。だが、引き抜くまでのタイムラグで次のゴブリンの攻撃が来る。

冷汗を流しつつ、咄嗟に柄を手放してその攻撃もかろうじて避ける。拳を握って相手と対峙すると、首を刺されたゴブリンが消え去って、からんと剣が転がっていた。

「おい。マイス……きついんだけど」

「泣き言言うな。こっちはまだ後三匹もいるんだぞ」

「拙僧も手伝おう。愉快愉快。実に愉快」

ぬつと横から子供くらいの身長のこと……だが、がっしりとした筋肉質で髭の生えた男が自分の身長ほどの棍棒を、俺に攻撃してきたゴブリンに一瞬で叩き込んでいた。

そしてすぐに引き戻してガンつと床を柄で鳴らす。

危険に巻き込まれかけたというのに、この髭の生えた男はからからと笑って次の相手を物色していた。俺も考えるのは後だと落ちている剣を拾う。

相手を全滅させたのはこの後すぐのことだった。

戦闘が終わるとゴブリンの死体に変化した『魔力石』を回収する。この魔力石こそが城塞都市カイルルにおける最大の特産物であり、ダンジョンの上に城塞都市が築かれた最大の理由である。

ダンジョンの怪物達は外と違い死体が残らず、その代わりに魔力石が後に残る。そしてその魔力石は様々な加工することが出来、武器から生活に関わるものまでありとあらゆるものに使われているのだ。

クルト村で使われている農具なども、一般的な農具に魔力石を加工することにより、錆びなくなったり寿命を伸ばしたりされていた。

また、高価な魔力石はどんな傷でも癒すような薬になったり、魔法の道具にも使用されるなど、その利用の幅は広く、この街の学院では様々な研究が行われている。

その話を聞いたとき、俺はまるで鉱山のようにだと思ったものだ。

「いやー、おっさん中々やるじゃねえか」

「助かりました。ご助力有難う御座います」

失礼な言い方をするマイルスを軽く殴り、頭を下げる。目の前の小さいががっしりした髭の男は大声で笑って首を横に振った。

「まだまだおっさんと呼ばれるような歳ではないが、構わんよ。わしは人間達のいうところの亜人じゃからな。普通に扱われるだけでも有り難いもんじゃて」

「そうなのですか。貴方のお名前は？」

「拙僧は『鍛冶の神』ガランに使える神官でゼムドという。ドワーフ族じゃ」

彼は重々しく頷くと、遠巻きにこちらを見ていた少女の方を向いた。恐らくは二人いたうちのもう一人だろう。大きな帽子を被っていて、帽子のから白い髪がちらちらと見える。

「そこにおわす方が拙僧が仕える姫じゃ。彼女が言わなんだら拙僧も助力などせんかったわい」

「ああああああ、こら！ 言っちゃだめ！ って誰が姫だ！ あんなやつらどうでもいいの！」

茶目つ気の箆もった笑顔のドワーフの発言で、驚きの声を上げたのは俺とマイルスではない。姫と呼ばれた少女だ。走って近づいてきたかと思うと、ゼムドの胸倉を掴んで抗議の声を上げていた。背中のマントの下から飛び出した尻尾が逆立っている……獣人族のようだ。

「ありや……シーリアじゃねえか」

「奇遇だね……まあ、助けられたのかな？」

未だにドワーフにくっついてかかっている気の強そうな白い髪の知人の少女を眺めて苦笑しながら、俺はこの城塞都市に来てから今日までの道程を振り返っていた。

第一話 城塞都市カイル

故郷であるクルト村から歩いて三日目、日が傾きかけた頃によく俺達三人は目的地である城塞都市カイルに辿り着いていた。旅に慣れているガイさんは疲れた様子もなく笑顔で歩いているが、俺とマイスは二日間も野宿するのは初めてで、慣れないため疲労の色が濃い。

「やゝつと、着いたかあ……ほんと遠いんだなあ」

「本当にね。身体が痛いよ」

「がはは！ お前らもすぐ慣れる。俺達も初めはお前らみたいな感じだったしな」

やれやれと、俺達は溜息を吐いて硬くなった身体を伸ばしたりこきこきと動かす。

旅をするとき色々気付くこともある。

水に限りがある為、身体が拭けない事。靴が履き潰れるため、寝る前に確認して修理をしておく必要がある事。野生の生物と盗賊への対処を考えなければならない事。保存食が不味い事。地面で寝ると身体が痛む事……様々だ。

このような不便な点だけではなく、本来の目的である世界を知ること……という点でも歩くだけで様々なことを知ることが出来た。

三日間の間だけで遠目に何十もの村を確認することが出来たし、城塞都市に近づくとも村では考えられない規模の畑が広がっていることもわかった。広大な畑は人口二十万とも三十万とも言われているカイラルの人々を支える食料を生み出すのだろう。

領土には王領と貴族領の二種類があり、クルト村のような、街から遠く、徴税権だけ貴族に与えられた王の領土を王領、カイラルの周辺に広がるまとまった広大な畑は貴族の固有の領地で貴族領と呼ばれているらしい。知識では知っていたが実際に見ると、その地の果てまで続いていそうな広さに圧倒されそうになる。

貴族領の畑やその他の農業や畜産は貴族の子飼いの役人と奴隷によつて行われている。

奴隷と聞くと、この世界と異なる価値観を持つ自分は眉をひそめてしまうのだが……法律で認められている制度であるため、ただ反発するのではなく、何故奴隷制度があるのか……現状を知って考えていく必要があるのかもしれない。

「しかし、驚いたよな。城塞都市ってくらいだから城壁の中にだけ街があるのかと思ってたぜ！ しかもなんだこりゃ！ 祭りか？」
「祭り……じゃなさそうだけど確かにそうだね。城壁の外にも街が広がってるなんて」

城塞都市には『外壁』と『内壁』の二枚の城壁があり、城壁の中に入る為にはそれぞれに手続きが必要となる。しかし、城壁の中だけでなく城壁の外にも街が溢れ出たかのように小さな建物が所狭しと建てられていた。

もちろんそんな場所が静かなはずもなく、がやがやと物売る声や荷物を運ぶ音や旅人達の往来で活気に溢れている。他にも音楽をかき鳴らしてお金をもらおうとしている人や手品をしている人などいろんな人がいて、まるでお祭りのような騒ぎだ。

俺達はそんな喧騒に満ちた城門の前で中に入るための手続きの順番を待っていた。

「お前ら、こんな平和な東側で驚いてたら南側に行けばもっと驚くぞ」

にいつと悪巧みするように旅のせいで無精髭の生えた大男が笑う。

「何があるんですか？」

「そりやお前……そうだな、俺も三日くらいはここにいるんだ。一回連れてってやろうじゃないか。いや、マイルはともかく……ケイトにや早いかな？」

成程、そういう場所なのかと苦笑して頷く。マイルは分かってないのかきょんとしていたが、何かを思い出したかのようにあつと声を上げた。

「そついや……これからどうするんだっけ？ カイラルに来てからの事、何も考えてなかった。」

そういつて、ぱりぱりと頬を搔いてこちらを向く。少年時代に出会ったエルフのラキシスさんから、街に着いたら顔を見せるように手紙を貰っていたが、今の旅に汚れた状態で会いに行くのは気恥ずかしい。と、なると、まずは……。

「ガイさん。冒険者が使う宿は南の方にあるんですね？」

「そうだ。今日はもう遅いから宿を探すか。冒険者の登録は明日だな」

「ええ、明日登録してラキシスさんに挨拶してから、カイル兄さん達やヘインを探そうと思います」

「おい、ケイト。なんで宿が南にあるってわかったんだ？」

俺とガイさんの話を黙って聞いていたマイルスが不思議そうな顔でこちらを見る。どう説明したらいいものか……

「ガイさんが驚くっていうほど南側には面白いところがあるんだよね」

「ああ、言ってたな」

「と、いうことはガイさん達のような冒険者がよく遊びに行ってるんだよ。それなら、そういう冒険者が泊まる場所が近い方が、南の城門の外にあるお店も儲かるよね？」

「あー。そういうことか。なるほどなあ！」

感心したようにマイルスは笑顔で頷く。正直に冒険者の稼ぐお金目的な歓楽街は近くにありそうだから……と言おうかとも迷ったのだ

が。まあ、男同士だしそれでもよかったかもしれない。

次！ と、外壁の大きな扉まで順番が進むと鎖帷子を着込んだ門番の兵士らしき若い男と、初老の男の二人が自分達三人に来るように促す。俺達の検問の番が来たようだ。

やっとか、とガイさんは呟くと兵士に薄い金属で作られた証明書を見せるが、初老の兵士はそれ見ずにガイさんの顔を見ると、懐かしい知り合いを見るかのように楽しそうに笑った。

「ガイ・ライエル。二級冒険者だ」

「久しぶりだな！ 名乗らなくても知ってるが……まあ規則だからな。そつちの子供は息子か？」

「おい、俺がそんな歳に……て、もうそんな歳になっちまったんだよな」

「あつはつは。いつまでも若くねーよ」

少しの間、初老の兵士はガイさんと二人で笑っていたが生真面目そうな若い方の兵士に肩を叩かれるとああ、と返事を返しこちらに向いた。

「若いの。わしは東門の衛視長のミハイルじゃ。よろしくな。ここでは、名前、出身、目的、荷物の確認、犯罪者の確認を行う。ガイのように冒険者の証明書を持つてると名前だけでいいんだがね。そんじゃ……でかいのから」

「マイス・アライゼル。クルト村から来た。目的は冒険者になりに来たんだ。荷物はこれだ」

「良い体付きしてるな！ ガイが連れてくる子供は毎回おもしろいな。こいつも見どころありそうじゃねえか……荷物も問題ないな。よしいぞ！」

「え、ああ。ありがとう」

ばんばんと、明るいミハイルさんに叩かれマイスは呆氣にとられたように苦笑いを返した。マイスは終わりのようだ。次は俺の番かと、若い男の兵士に自分の荷物を渡す。

「ケイト・アルティアです。自分もクルト村出身。目的は冒険者になり。荷物の中の草は薬草です。来る途中に採取したのでそれは売ります」

「ふむ……おい、ガイ。大丈夫なんだな？」

「ああ。そいつの薬草の知識は中々のもんだ。規制品は教えてある」

値踏みするような目でミハイルさんは、俺を見つめる。顔は笑っているのに、目は笑っていないような……何だ？

「なるほどな、こりゃ面白い。若いのが、冒険者になっても無理だけはするなよ？」

「はい。有難う御座います」

一体なんだったのだろうか。荷物を受け取ると外壁の中への通行を許可され、城門を潜っていく。兵士達も次の通行者を相手に仕事を行っていた。

外壁の中に入ると、城門の外よりもしつかりした作りの家々が立ち並んでいる。住宅地といった感じか。外よりも清潔感があり、道も石畳がしつかりと引かれていて歩きやすい。

「くー！ 俺達本当にカイルルに来たんだな！ わくわくするぜ！」
「気が早いよ。マイス」

さつきまで、旅で疲れていたはずのマイスが街中をきよろきよろ見回しているのを見て、苦笑する。だけど、彼が興奮する気持ちも解る……村しか見たことがない自分達にとって、これだけの人工物が立ち並んでいる光景というのは信じ難い未知の光景なのだ。

前世の記憶に大都市の知識は一応あるが、それとも全然違う。マイスがいなければ自分が好奇心の赴くままに辺りを見回していたに違いない。

「このあたりはそこそこ街で成功したやつが住んでるな。ここに住めれば……ま、一流ってところだろうな。んじゃ、宿とってうまいもん食って今日は休むか」

「賛成っ！ よし、今日は食うぞ。保存食は飽きたんだよっ！」

ガイさんの提案に元気にマイスが返事する。俺も笑って頷いて、目を細めて暮れかけた空を見る。

明日から冒険者になる。その先に何が待っているのか……俺達は未来に不安とそれ以上の希望を心に抱きながら、夢と悪意の溢れるこの街での生活を開始することになった。

第二話 冒険者ギルド

冒険者の宿には二種類の泊まり方がある。一つは一日だけ部屋を借りて泊まるやり方。もう一つは長期的に部屋を借りて泊まるやり方で、旅行する場合には前者が、長期的にこの都市に滞在する場合には後者が使われる。

先日は前者の泊まり方を利用して、体を拭き、身を清潔にして宿と一緒に経営している食堂で三人とも無心に料理を平らげた後、すぐに眠ってしまった。

余りにも疲れていたからか料理が美味しかったか不味かったかすら覚えていない。

ベッドで眠れたおかげか、起きたときには完全に疲労は抜けていて久しぶりに爽快な気分で起きることが出来た。マイルスも同じ気分らしく、気分よさげに隣を歩いている。

夜の南側……冒険者の宿がある一帯の店は夜が本業といった具合で、着いた時間帯は人を呼びこむ声や行き交う人々の声、酔っ払いの大騒ぎで賑やかだった。

しかし、早朝の今は街中は静寂に包まれており、開いている店は一般的な雑貨屋や冒険者達に売っている弁当屋、薬屋といった冒険に関係している店くらいしか開いていない。

人通りもまばらで冒険者らしき鎧の人達や荷物を運ぶ商売人らしき人が歩いているくらいか。

「ここが冒険者ギルドかーって、なんか普通の家っぽいな」

「そうだね。この看板が目印なのかな？」

「まあ、本部はでかいんだがな。支部はあちこちにあるからこんなもんだ」

昨日泊まった冒険者の宿の近くにある剣と丸っこい……石(?)を持った棒人間のマークが書かれた看板の掛かった家に着き、がちゃつと扉を開けて中に入る。

そこには酒場のようなカウンターがあり、職員らしき太ったおじさんが中の椅子に座っていた。

他の職員はなにやら忙しく紙を整理したり、何かを書いたりしているようだ。

カウンターの外にはいくつかテーブルと椅子が置かれており、飲み物はないがカフェのような趣きがある。恐らくは掲示板に貼つてある仕事を仲間と検討できるようにテーブルが置かれているんだろう。

「なんか、思ってたのと違うなあ。もつと胡散くさそうで汚くて中にいる人もいかにも！　って感じのごつい奴ばっかいるものだと思つてたぜ。掃除もちゃんとされてるし綺麗じゃねえか」

「まあギルドってな元は冒険者が作ったんだが今は国が運営してるしな。他の職業のギルドは雰囲気違うぜ？　職人や商人達で管理してるから、それぞれの色があるしな。」

「なるほど、冒険者は仕事も国が管理してたりするんだね」

同職者の組合ではやっていけなくなったのか……まあ、冒険者になる人が事務をするって想像できないし、そういうものなのかな……利点もあれば欠点もありってところか。

「新規登録、二人だ。頼むぜ」

「あー。わかった。字は読める……ああ、なら後で規約は読んでくれ」

ガイさんが太ったおじさんに声を掛けると、おじさんは二枚紙を取り出して、俺達に一枚ずつ渡すと奥に引っ込んで行く。そして、水晶玉と四角い底の浅い箱のようなものを重たそうにカウンターまで持ってきた。

「右手を水晶、左手を箱の方に置いて名乗るんだ。本名でな……偽名でも登録出来るがばれたら犯罪だから気をつけてくれ。その後、紙に名前と出身地と生誕日書いとくれ」

言われた通り名乗ると箱から出てきた名前と不思議な模様が書かれた金属製の板を渡された。ガイさんも持っていたものだ。

「二人ともレベル3か……子供にしちゃやるな。まあ、精々死なないうようにな」

「ふん、簡単に死んでたまるか。っと、これが冒険者の証明書か！」

レベルに関しての説明や、この魔法の道具の説明は以前にジンさんから受けている……一体どういう原理なのか気になるがレベルを調べる事ができるらしい。もっとも、能力やスキルはこの道具では調べる事ができないらしいが。

意外と魔法に関する技術は高度に発展しているのかもしれない。そのうち調べてみたいものだとか好奇心が沸々と湧き上がってくる……が、今は我慢だ。

とりあえず、身分証明も兼ねているようだし、絶対に落とさないようにしなければ。

「仕事はここでも受けれるし、提携している宿でも受けられる。ダンジョンで取れる『魔力石』は内壁の中にある本部の方で換金するんだ。後は紙に書いてある。手続きは終わりだ」

俺はおじさんの説明を聞きながら、ついに冒険者になったんだな……と、しみじみと証明書を見つめていた。

手続きが終わると冒険者の証明書を貰った俺達は冒険者ギルドの支部を後にし、ガイさんから細かな説明をしてもらいながら内壁の中に入る為に歩き始めた。

街の中央部にはこの街のシンボルでもある巨大な神殿のような構造物が立っているのが遠目に見える。

俺もミスも、あれがダンジョンの入口か……と、思わず一度足を止めて見つめたりした。

内壁の中には貴族や大商人の家やヘインも通っている研究施設である学院、商人、冒険者など各種のギルドの本部や神殿、領主であるカイル家の居城、中央にはこの街の発展の要にもなっているダンジョンが存在しているなど重要施設が固まっているため、中に入るには資格が紹介状が必要となる。

中に入る手段として最も簡単なのは冒険者ギルドへの登録だが、魔法を利用した本人の確認や他国の冒険者が一定人数以上中に入る事への制限、居城のある東部への立ち入りの禁止などの他、安全のために様々な規制がある。

また、ダンジョンで手に入る加工されていない魔力石は冒険者が内壁の外へ持ち出すことは禁止されているなど、ダンジョンというある種の『鉱山』を管理しているようだ。

内壁の中に無事に入り、大きな建物や綺麗な彫刻の立ち並ぶ街並みをラキシスさんの自宅に向かって歩いてみると、マイルスがこちらを見て苦笑いしていた。

「何にやにやしてんだよ。ケイト」

「あ、うん……そんなにやけてるかな？　でもほら、本当に楽しみなんだ」

カイル兄さん達に会うのも楽しみだし……数年ぶりにあのラキシ

スさんに会つのかと思うと緊張したりするが……カイル兄さんは元気だろうか。やはり、あの人は美人なままなんだろうか。本当に会えるのが嬉しい。

「うーん。俺は別行動のがいいか？」

「え、何ですか？」

「いやー……俺はお呼びじゃない気がしてなあ」

ガイさんは自信なさ気に苦笑しながら、手紙に書いてある住所に立っている二階建ての大きな一軒家を見上げる。内壁に立っている家に住む……というのは、冒険者としてはとんでもないことらしい。この街でも何人いるかというところだとか。

他に住んでいるのが大商人や中級以上の貴族という富裕層であることから、その金額が想像できそうな感じた。

人間以外の異種族は人口の関係や文化の関係もあり、この国ではかなり少ないがそれでも差別を受けている。そんなエルフのラキシスさんがこんなところに住んでいるのだ。その苦労を考えると、自分もそんな凄い人に会っていいのか？　と思えてくる。

「これが噂のエルフさんの家か！　冒険者つてやつばすげえんだなあ」

「馬鹿やろ。この人は特別だ……まあ、いい。俺も挨拶だけしとこ。弟子が世話になりそうだし……カイル達も世話になってるかもしれないしな」

「特別……かあ」

昔会ったラキシスさんを思い出す。冷たい雰囲気で威圧感があって……それでいて、暖かい人で、寂しがりっぽくて……優しい人だった。

あの人は友達といってくれた。子供の時の約束だし、今は偉大な大先輩と全然立場は違うようになったけど、なるべく彼女とは自然体で接することにしよう。

そんなことを考えながらも心臓をばくばく言わせつつ扉を大きくノックする……と、時間をあけずに、扉が勢いよく開かれた。緊張が最高点に達し――

「……誰あなた」

扉から顔を出したのはラキシスさんではなく……少し年上だろうか……白い髪に赤い瞳を持った女性だった。予想外なことに一瞬驚いて言葉を失う。

丈の長いスカートにゆったりとした質の良さそうなローブを身に纏ったその少女は、きつそうに見える釣り上がった瞳などの特徴があつたがそれ以上に目立つ特徴……髪の毛と同じく三角形の白い耳が頭に付いていた。

（獣人……？）

と、少しだけ放心してしまつたが、すぐに気を持ち直して胡散くさげにこちらの見ている彼女に向きなおす。

「ラキシス様に一目会いたくて……とかいうのなら通さないわよ」
「私はケイト・アルティアと申します。ラキシスさんに招待して頂きました」

「あんたが……っ……聞いてるわ。中へどうぞ」

何故だろうか、彼女に憎悪の視線を向けられた気がする。

だが、それも一瞬だけのことで彼女はすぐに感情を消し、俺達を事務的に客間へと案内してくれた。

第三話 出会いと再会

動物の耳が付いている白い少女は、ラキシスさんを呼ぶ為に俺達を客間に案内した後、不機嫌そうな顔を隠さずに出て行った。

本当に何か嫌われるような事をしてしまったのだろうか……勧められた丸太を短く切り取ったような椅子に座りながら、彼女のことを考える。

身長は俺よりも少し低いくらい、可愛いと言われるよりは綺麗と言われそうな顔立ち。ちよつときつめに見えるつり目……獣人は身体能力が高いといわれているが、彼女もそんなのだろうか？

単にラキシスさんの所で身の回りの世話役として雇われているだけとかの可能性もある……それにしても、着ているローブの仕立てが上等そうだったが。

そもそも獣人……と一括りにしているが獣人には大雑把に二種類のタイプがある。

人間に近いタイプと、獣に近いタイプだ。

どちらに近いかで、能力的にも人間に近いか獣に近いかわかっているらしい。獣人の中でも知性のないものや低いものは魔物に分類されているなど、あまり厳密なものではないのかもしれないが。

この国では少ない方らしいが獣人に対して……いや異種族全体に対して人間優位の国では差別があるらしい。異種族はそれぞれ人間

にはない力を持っていることが多いのだが、世界的に人間の人口が一番多いため、それが少数者への圧迫になっているのだろうか。

彼女が俺達を嫌っているのがそうしたものが原因だと仲良くなるのは難しいかもしれない。本気で仲良くしようと思うなら、彼女達の事を良く知って根気よく付き合う必要がありそうだ。

マイルスも初めて見る獣人に何か思うところがあるのか、真剣な表情でむうと唸って重々しく口を開く。

「耳だけじゃなく、ちゃんと尻尾も付いてんだな」

「……気になったのそこだけ？」

げらげら笑うマイルスをじと目で見る。

獣人への差別はそもそも村には獣人がいないからか、彼の頭にないようだ。それとも大物なんだろうか。あれだけ敵意の視線を向けられてもそんなところにだけ目が行くのは。

「ケイト、お前はいつも難しく考えすぎなんだよ！ いいじゃねえか細かいことは。見た目は可愛いんだしよ……まあ、尻ひっぱたいてきそうな女っぱいけど」

ばしばしとマイルスが俺の背中を叩く。確かにそうかもしれない。俺は髪の毛をわしゃわしゃかいて、小さく笑った。まあ、そうか……無理せずとも、気が合いそうなら頑張って、無理そうなら無理しないのでもいいかもしれない。

ふう……と息を吐く。この街に来てから物事を難しく考えすぎていたか……気が少し楽になった気がする。こういふときマイルのからつとした明るさは有り難い。

「そうだね……実は俺もちょっとあの犬っばいふさふさな尻尾触ってみたかった」

「ぷっ！ そりゃだめだろ！」

あははと声を上げて笑う。お陰で客間の空気は大分軽くなったような気がした……ガイさんはがちがちに緊張しているけど。あがり症なんだろうか。

しばらくすると先程の獣人の少女が飲み物を持ってきてくれた。さつきから二階でどたどた凄い音が鳴っていたのはこの用意だったんだろうか……そして飲み物を置くと彼女も取り付くしまもない不機嫌そうな顔のまま椅子の一つに腰を掛ける。

改めて見ると彼女はマイルやガイさんにはいないように扱っている節があり、俺だけを敵視しているように見えた。ということは個人的に俺に恨みがあるのかな？

だけど自分には心当たりがない。

「有難う御座います」

「……いえ」

お礼を言ってみたが話したくないといった感じで口をつぐんでい
る。

何故かはわからないがわからないことは気にしても仕方がない…
と、あまり気にしないことに決めて、たまにぴこぴこ動いている
耳をぼーっと見ながらあれはどうなっているんだろうかとか人間の
耳の部分はどうなっているんだろうかとか呑気に考えていた。

二十分くらい待っただろうか。客間の扉がゆっくりと開き、そこ
にいる皆が息を飲んで立ち上がる。

「お久しぶりです。ラキシスさん」

「……っ！ ……久しぶりね。ケイト君」

窓から入る薄い光を浴びて輝く絹糸のような金色の髪、エメラル
ドグリーンの瞳……冒険者として村に来た時と違って鎧ではなく緑
を基調とした色合いのドレスを着ているが、それが似合っていて自
然に見える。

ともすれば冷たくみえるのは整い過ぎているからかもしれない。

数年ぶりに会うラキシスさんは、記憶にある思い出と変わらない
姿でそこに立っていた。

あの日の鮮烈な思い出と感動を思い出して、沸き上がる感情を抑
えながら頭を下げる。ラキシスさんはそんな自分を見ながら、楽し
そうに微笑んでいた。

「本当に人間って成長が早いよね。あの時は小さかったのに」

「もう六年ですからね」

「たった……六年。私にとってはね。変わらないもの……他の子も紹介してもらえる？」

ラキシスさんは俺達全員に座るように促し、自分は俺の対面にある椅子に座った。

そして、驚いて惚けているマイスの背中を何度か叩く。はっと気づくと彼はびしっと直立してラキシスさんに頭を下げた。

「マイス……マイス・アライゼル！ ケイトとは親友です！ よろしくお願いしますっ！」

し、親友って……いや、俺もそう思ってるけど大声で言われると少し恥ずかしいんだが。

ラキシスさんはクスクス笑って、

「聞いていると思うけれど、私はラキシス・ゲイルスタッド。よろしく」

「は、はい！」

緊張しているマイスをぽんぽんと叩いて座るように促す。こういうところは師匠であるガイさんに何か似ているな……と苦笑する。だけど、それも愛嬌かもしれない。

そのガイさんは神妙な面持ちで立ち上がり、頭を下げる。

「ガイ・ライエルだ。こいつらの師匠をしていた。俺は村に帰るが……弟子達のこと……こんなこと言える立場じゃないが、頼む」
「ケイト君とマイルス君は彼等の手に余る事に関しては私がちゃんと見ているから心配しないで？ それから……貴方のことは知っているわ。娘さんから手紙を何度か頂いたから。私も送ったのよ？」
「うええええ！ クルスが？」

ガイさんが奇声を発しているが俺も驚いた。
俺は前に会った時からこまめにラキシスさんと手紙のやり取りをしていたが、それを知っていたのは家族だけの……ああ、家族が知っているからか……。

「娘さんは……来てないのね。残念」
「あ、ああ。嫁の出産が近くてな。見てもらってたんだ」

残念……というわりに、そんな風には見えない。何かを探るような感じというか……クルスは一体何を書いたんだろうか……全く想像が出来ない。そんな話を聞いたこともない。
空気がなんだか悪くなっているような気がしたので、慌てて俺は言った。

「ラキシスさん、そちらの女性は？」
「紹介するわね。彼女はシーリア・ゲイルスタッド。私の養女よ」

名前を呼ばれた獣人の少女は仕方ないといった雰囲気で立ち上がって少しだけ頭を下げる。そんな様子を見ながらラキシスさんは困ったように小さく溜息を吐いていた。

「シーリアです。よろしくお願いします」

「見ての通りい……狼系の獣人なの。悪い子じゃないから……仲良くしてあげてね？」

「狼なのか。てつきり犬かと思ったぜ……ん？　なんだ？　ケイトお前が犬っぽいっていったんじゃねえか」

感心した風に頷いているマイルスに馬鹿！　っと肘で突く。シーリアは耳と尻尾の毛を逆立てて、がたと立ち上がると俺の側までつかつか近寄って胸ぐらを掴み、大声で叫んだ。

「誰が犬だ！　私は狼だ！　訂正しろ！」

「わ、わかったから！　悪かった！」

がくがく揺らされながら、俺は彼女と仲良くなれるのか……流石に不安に思っていた。

とりあえず第一印象が最悪なことだけは間違いがなさそうだ。

第四話 白い魔法使い

その言葉は彼女への禁句だったのだろう。

殺してやるといわんがばかりに綺麗な赤い瞳から怒気を放っているシーリアを前にしながら、俺は自分の心のノートに獣人はプライドが高いと書き添えると同時に、後でマイスを殴る事を決意する。

人間よりも身体能力が高いとされる割に彼女の力が弱くてあまり痛くないのは救いだっただ。

「シーリア。そのくらいにしておきなさい」

「う、でも……ラキシス様！」

「シーリア」

「……はい」

2、3分罵詈雑言を続けたあたりでラキシスさんが止めてくれた。もう少し早く止めて欲しかったんだけど……と、ラキシスさんを見ると、真面目に怒っているように見えて反応を楽しんでいるように思えたが、気のせいだろうか。

怒られたシーリアは、しゅんとして耳をぺたんと寝かせている。年上っぽいからこういう言い方はまずいのもかもしれないけど、なんだか犬っぽくて微笑ましい。

きつ！ とこちらを睨んでるが、ちょっと怖いので目線を逸らした。こほんと小さくラキシスさんは咳払いして話を続ける。

「それでこれから……貴方達はどうするの？」

「あ、はい。長期的に泊まれる宿を探します」

ふむ……と彼女は目を瞑ってしばらく考え、うんと頷いてにこやかに微笑んで言った。

「私の家を使ってもらってもいいわよ。部屋は余っているし」

「えええええっ！」

子供のころの自分に向けてくれた優しい穏やかな笑みだ。懐かしさと嬉しさはもちろんあるが、首を横に振る。嫌そうに叫んでいたシーリアがあからさまにほっと息を吐いていた。さっきから自分に正直な人だ……と、思いながら苦笑してわしゃわしゃと髪をかく。

「申し出は本当に嬉しいのですが、僕は昔の目標を忘れていないので」

昔のことだけど……なんとなく……ラキシスさんは数年前の夜の事をちゃんと覚えてくれていると確信していた。だから、これで通じてくれる……はず。

彼女は残念そうな表情をしたが、

「世界中廻るためには慣れておかないと……か……本当に成長したのね」

「びっくりさせるって約束しましたから」

「くす……そうだったわね」

ラキシスさんは口元に手をあてて上品に、そして嬉しそうに笑った。そして、彼女は俺に釘を刺すように続ける。絶対にこれだけは忘れないようにという意味が込もった真剣な表情で。

「冒険者になれば、二人だけじゃ対処できないこともある。そういうときは絶対に私に相談するのよ？ 友達に頼る事は恥ずかしくないんだから」

「まだそう言ってもらえるんですね」

「当然でしょう？ 嫌だった？」

小首を傾げてラキシスさんは聞き返してきた。当然そんなわけはない。

ラキシスさんの隣のシーリアの視線がさらにきつくなってきた。いるが……ひょっとして、ラキシスさんが俺を構っていることへの嫉妬なのかな。

養女という立場なんだから、一番身近にしていると自信を持っていると思うんだけど。

「その時はよろしく願います」

「他には……あ、そうそう、ケイト君のお兄さん……カイル君はこの街にはいないわ。他の街で仕事を受けているみたい」

どうしてか理由をラキシスさんに聞くと、どうやらカイル兄さんは、この何年かでかなりの実力者になったらしく、見聞を広げるために依頼を受けながら諸国を回っているらしい。

一緒に旅にでた友人のホルスにも自分のやりたいことを先にやられていると思うと、少し悔しいが、同時に嬉しさも感じている。隣を見るとマイルスも同じようで、微妙な表情で俺達も負けてられないかと呟っていた。

「後……ヘイン君だっけ？ ケイト君の友人は学院にいるはずよ。」

シーリアに案内させるわ。この子も学院に入学している生徒だから」

「ええええっ！ 私がですか！ だってあいつのとは！」

「シーリア」

「うっうっう……わかりましたぁ……はぁ」

何故そこまで嫌がるのか。先程の自分を嫌っている嫌さとは違うような気もする。

しよげているシーリアの頭を嬉しそうに撫でているラキシスさんを見ながらそう思った。

それから十数分後、俺達はラキシスさんの家を後にしてカイル内壁の中……第一市街西部一帯を占めている巨大な学院……カイル王立学院に向けて歩いていった。ガイさんは先に宿を俺達の代わりに探してくれている。

本当は一緒に探したかったのだが……ガイさんは余程疲れたらしく一人にしてくれと虚ろな表情で呟いていたから諦めたのである。おそらく昨日、話が途中で終わったせいで気になっていたのか案内してくれるという話の後、

「師匠が俺達を南の城壁の外を案内してくれるっていつてただけど、何があるのか教えて欲しい。気になってたんだ。冒険者なら誰でも知ってるって師匠が言ってたんだけど」

とか、思い出したようにうっかり言っただけで、女性二人から絶対零度の視線を受けたのが原因だろう。

案内してくれているシーリアは、不潔なものを見る目で今もこちらを見ているし。

シーリアは年上といってもまだ若そうだから仕方がないとして、ラキシスさんは母さんと同じくらいの歳……か、それより上なんだし、多少理解してくれても……と思わなくもなかったがどうだろう。

いや、そういう店に行く気はないけどさ。

「シーリアさん、先ほどの口振りだと……ヘインを知ってるの？」
「……」

前を歩くシーリアは答える気はないようだ。白い髪を揺らしなが

ら振り向くことなく、早足ですんずんと歩いている。

「おい、ケイト。もういいじゃねえか。ほっとこうぜ」

「そういうわけにはいかないよ。ラキシスさんから仲良くしてくれ
って言われたしね」

「お前余程あの人好きなんだな」

呆れたようにマイルスが言うが、俺の言葉は前を歩くシーリアに向けて
言っていた。ラキシスさんからの頼み……という部分で白い髪と耳と尻尾がピクツと反応する。
分かり易い人（？）だ。

「……ええ、知ってるわよ」

シーリアは立ち止まって錆びたドアのようにぎぎぎっとこちらを
振り向いた。

不本意そうだが、ラキシスさんの言葉を思い出したに違いない。
感情を隠せないタイプのようで今も嫌々だが、ラキシスさんの言葉
は絶対なのだろう。

「ヘインは親友なんだ。俺達と話すのは嫌かもしれないけど教えて
ほしい。頼む」

そう頭を下げて頼むとシーリアは諦めたように溜息を吐き、肩を

がつくり落として絞りだすように口を開いた。

「はぁ……わかったわよ。変な人間ね……人間なんてみんな偉そう
で、見下してて嫌なやつばっかなのに。これで断ったら私が悪者み
たいじゃない」

「人間も異種族も……みんな人それぞれだと俺は思うけどね」

「それぞれ、あんたの親友も言ってたわ……貴族相手にもそれでい
つてるから関わりなくなかったのよ。巻き込まれたらラキシス様に
迷惑かかるし」

うーん、ヘインは何をやっているんだろうか。本人に聞けばいい
と思っていたが本気で気になってきてしまった。まずいことになっ
てなければいいけど。

「ヘインだけど、貴族に目をつけられちゃって今は女子寮の屋根裏
部屋にいるの」

「なんだそりゃ。ヘインの奴なにやらかしたんだ？」

マイスが心配そうにいう。俺もどんな風に解釈すればいいのか判
らずに困惑していた。

本当に大丈夫だろうか。何故女子寮なのだろうか。

「私もよく知らないわ。知っているのは私が在籍している魔法学部
の寮に住んでるってこと。詳しいことは……私はラキシス様の家に
住んでるから」

「本人に聞いてみるか……で、シーリアって魔法使えるんだ」

少し驚いてシーリアを見るとふふんと自慢げに胸を張って……結構ある……あ、いや、自信あり気に鼻を鳴らした。よく表情がころころ変わる娘だ。

今の表情が普段のものなのか、明るくて可愛い感じがした。

「魔法学部、攻性魔法学科……攻撃魔法の専門家なのよ」

「あれ？ 攻性魔法？ 精霊魔法は？」

「同じ魔法だったら将来ラキシス様と旅ができないじゃない！」

魔法は大きくわけて自然魔術と人工魔術に分けられる。俺が教えてもらった精霊魔法などは前者だ。

特別な知識はいらないがムラが大きく、細かい操作が難しい。また、自然を利用するために使用のための条件が厳しい。

人工魔術は、学問によって生み出された魔術で発動すれば決まった結果を生み出す魔術だ。一般的に魔法使いとはこちらを指す。

使用するためにはある程度の知識が必要で、薬を作る魔術、道具を利用する魔術、生活で使う魔術、戦闘用の魔術、他にも冒険者用の簡易の魔術など幅が広い。

その幅広さは生前の学問研究にも引けをとらないくらいの種類があるようだ。

どちらの魔法に共通しているのも魔力が必要だということである。

獣人族は身体能力が高いものは多い代わりに魔力を持つ者は少ないとされている。

ラキシスさんの養女になつてゐることもあるし、結構生まれが複雑なのかと思つたが……彼女は魔法を使えることを喜んでゐるように見える。

この学院に入る大変さはヘインを見ていて知っている。ラキシスさんも冒険が多くてシーリアをずっと見れたわけではないだろうし、彼女の立場で学院に入学しているのは……相当努力をしたのだろうか。

「本当に凄いね。シーリアは。驚いたよ」

「ふ、ふん！ 人間に褒められたつてっ！」

彼女は隠すのが本当に下手だ。顔が真っ赤で赤い瞳を逸らし、耳が動いて尻尾が忙しく揺れている。俺はわしゃわしゃと髪をかき、苦笑した。こういうストレートに感情を出す相手は嫌いじゃなかった。

だから、多少の理不尽なら我慢できそうだ。

今は嫌われているが、いつかは普通に話せるようになる日が来るかもしれない。

「でもよお。魔法使いつてこう……物語だと冷静で頭良くて知恵袋！ って感じがするんだけどよ。なんかちょっと違うなあ」

「う……冒険中はそうなるのよ！ あんたいちいちづるさいのよ！」
「気になつたんだからしょうがねえじゃねえかつ！」

マイスは一度口で酷い目に合った方が彼のためかも。

前に見える端から端までが見えないくらいに大きい学院を見ながら俺は溜息を吐き、その手前で口喧嘩を繰り返している年上二人を見ながらそんなことを考えていた。

第五話 親友

カイラル王立学院は内壁の中、第一市街の1/4を占める巨大な施設である。

この学院はピアース王国で最も大きな研究施設であり、カイラル公爵家の影響を受けないよう、国家事業として運営している学院だ。

最も実態は城塞都市の領主であるカイラル家が殆ど牛耳っているらしいが。

ともあれ、この学院では優秀な人物が様々な学問を学び、ここを卒業したものは国のあちこちで活躍をしていた。大学のようなものかと俺は考えている。

俺達の友人であるヘインもこの学院で学んでいる……はずだ。

女子寮に辿り着くと、シリアと同じ服を着ている一人の少女に声をかけられた。

金色の髪の毛をくるくると後ろで巻いている。歳は13、4だろうか……同年代に見える。背は低くて、顔立ちもきつそうではないのに何故か威厳があった。

歩き方が綺麗でことなく上品な雰囲気があるし……貴族だろうか。

「貴方達。ここは女子寮。殿方が敷地に入るとは禁止されているのですが」

「ゆ！ ユーニティア様！ 申し訳ありません。ここに住んでいる人の客人なんです。な、中には入らせませんから！」

慌てたようにシーリアが頭を下げる。様付け……ということやはり貴族なのか。俺はマイスの腕をつくと、黙っているようにと小声で伝えた。

貴族と争いを起こしてしまえばヘインに迷惑がかかるかもしれない。

「お騒がせし、申し訳ありません。私の親友がこちらに住んでいらしく、シーリアさんと呼んで頂こうと思っています。敷地からはすぐ立ち去りますので寛大な処置を……」

ゆっくりと、はっきりと可能な限り丁寧に相手に伝え、頭を下げる。

目の前の少女は愉快そうに口の端だけにやーと笑っていた。思ったより大変そうな相手かもしれない。失敗したか？ と、思ったが……。

「貴方もしかして……ケイト・アルティア？」

「……そうです」

「ヘインから聞いているわ。色々だね。想像と少し違ったけれども」

ヘインから特徴を聞いていたのか。どんな話をしてたのやら。ユーニティアと呼ばれていた少女は玩具を見つけたみたいな表情

でなんだか楽しそうだ。

「まあいいわ。私がヘインを呼んできてあげましょう」

「えっ！ ユーニティア様にそんなことさせるわけには！」

強気な性格だと思っていたシーリアが耳をぺたんと寝かせてあわあわと慌てている。

余程高位の貴族なのか。

「いいのよ。そこで待っていないさい……どんな顔するか見物ね」

「わかりました。お願いします」

うつ……と苦虫を噛み殺したような顔でシーリアが唸る。貴族の少女が女子寮に去っていくと、彼女は安心したようにほっと大きく息を吐いた。

「あの人……貴族だよね？」

「会いたくない人に今日に限って……ユーニティア・ル・クロック・カイラル。本家じゃないけど……領主の一族なのよ。若いけど天才って言われてる」

学院への入学は平等に……建前としては行われているらしい。天才ということは実力で勝ち取ったということか。でもなんでまたそんな大貴族が……

「ヘインと知り合いなんだね。あの人」

「そりゃ、あんたの親友を女子寮の屋根裏に引越させた人だから」
「んーあんま悪そうにや見えなかったがなあ」

黙っていたマイルスがぼつりと呟く。どうだろう。

貴族というものを知識としてしか知らない自分には判断出来ない。

「……貴族なんて大嫌い」

顔を伏せて悔しそうにしているシーリアの態度から考えて、この世界の貴族は横暴なのだろうか。このことも調べる必要があるそう
だ。

しばらく待つと、ヘインが女子寮の中から走って出てきた。後を追うようにユーニティアさんが息を切らせながら出てくる。

「マイルス！ ケイト！ 来たかつ！」

最後に別れてから一年以上の月日が流れ、ヘインは見違えるように大人っぽくなっていた。学院の指定の服らしいローブも似合っている。

ヘインは俺達に走りよると、マイルスの肩をばしと叩き、続いて俺の肩もばしと叩いて感情を爆発させていた。俺達も徐々に会う友人に、上手く言葉が出ない。感無量だ。

「久しぶりだなっ！ ヘイン！ 元気そうじゃねえか！」

「久しぶり。俺達も冒険者になったよ……ほんと、久しぶり」

少しだけ旧交を温めあった後、ヘインに案内されて人気の少ない芝生のある場所に移動して腰を降す。ユニティアさんは、用事があるからと学院の中へと歩いていった。

シーリアも頼まれたのはここまでだからと学院の方へと歩いていく。別れ際に、

「縁があつたらまたな。お互い頑張ろう」

と、声を掛けてみたのだが、

「縁なんかないわよ。それに、あんたなんかには負けないわ！」

こんな感じで結局最後まで彼女の印象を良くすることは出来なかった。

残念だが仕方がない。本当に縁があればまた機会もあるだろう。

女性二人を見送った後、俺達は芝生で円になって座っていた。芝生でこうやって三人で座っているとクルト村での日々を思い出

す。あの村では話をするときはこうやって、柔らかな草の生えている場所で座って語ったものだ。

あときは周りは見渡す限り何もない、空と雄大な自然だけがある美しい光景を見ながらだったが、今日は周りの光景は建物ばかりだ。過去と現在、過去は美しく思えるもの……か。

「ヘイン、お前よ……女子寮に住むなんて何があったんだ？」

「ああ、別に問題無い。ユニティ……いや、ユニティアの父親と仕事の契約を結んでいてな。取引に便利だから……だそうだ。屋根裏だが、住み心地は悪くない」

なるほど、心配していたような状況ではなかったか。俺としては女子寮に平然と住んでいるヘインの神経はちょっと疑いたくはなるが。

「ほっとしたよ。ヘインが何かやらかしたのかと思った」

「マイルと一緒にしないでくれ。僕は注意している」

「何で俺なんだよっ！」

怒鳴るマイルにヘインが押し殺したように笑い、俺も声を上げて笑う。そのままお互いの近況を話した。ヘインも俺達も久しぶりで話すことは尽きなかった。

そして、話題が先にこちらに来ているはずの人のことになり……

「ヘインはカイル兄さん達には会ったの？」

「……ああ。会った。そのことでお前達に伝えなければならないこともある」

ヘインは急に雰囲気を変え、真剣な……そして、苦い表情で言った。さっきまでの楽しそうな表情とはまるで違う。ヘインは少しだけ考えをまとめるように黙っていたが、

「ホルス達の話をするその前に、今この街……いや、街だけじゃないかもしれない。広い範囲できな臭い事件が起こっている」

「な、なんだそりゃ」

「僕も全部知っているわけじゃないし、関わりたくないからね。だけど、ケイト達は冒険者だから、関係する事件に巻き込まれるかもしれない」

確かにこの街で何か事件が起きているなら知っておきたい。だがそれと、カイル兄さん達がどう関係しているというのか。

「あのシーリアって子が外してくれてよかったよ。実は異種族の事件が多発してるんだ」

「……犯罪ってこと？」

「いや、犯罪じゃないな。自分から消えるんだ。ぱっ……とね……学院でも十数人。誘拐ってわけじゃなくて、退学届を出して。これは例年の資料を見る限りおかしいことなんだよ」

「何らかの目的を持っている……か？」

ヘインは難しそうな顔をしながら頷く。

「結論から言おう。カイルさんとホルスは恐らくこの事件に大きく関わっている。どんな目的かは知らないが、組織的に行動しているのは間違いない」

「カイル兄さんは……悪いことはできないさ」

「僕もそう信じたいけどね。良い悪いは立場が違つと変わるものだから」

ヘインが苦笑する。おそらく何かを知っていて、俺達を案じてくれているのだろう。

「俺達にホルスを疑えつてか！ 友人を疑えるかつ！」

「マイルス……信用と盲信は違つ」

マイルスが不機嫌に怒鳴り、ヘインが負けじとにらみ返す。

俺は頭をわしゃわしゃかいて、苦笑していたが。

「俺達は冒険者に成り立てだから……大きな事件には巻き込まれたくないね」

「おい、ケイトまでホルスを疑うのかよ」

俺は首を横に振る……が内心は悩んでいた。マイルスの真っ直ぐさ

が羨ましくなる。

どうしても自分には人を信じることが出来ない。

結局、俺の出した結論は実際にあったとき判断するというものだ。

「ケイト、マイス……盲信はするな。お前達が死ぬと楽しみが少なくなる」

「気をつけるよ」

ああ、とヘインはほっとしたように頷いてこの話題を打ち切り、学院での生活を話し始めた。施設の利用の仕方、学園で作ったものの販売などの話は今後、冒険の役にたちそうだ。

第六話 宿とダンジョン

結局、時を忘れて話し続けて気がつけば昼になっていた。

道中に色んな薬草を拾いながら歩いてきた話をヘインにすると、薬を作る為に必要になるとのことだからかなりいい値段で買い取ってくれることが決まった。

安くても良いといったのだが、必要経費でお客が出してくれるから大丈夫とのことだ。

貴族相手の仕事らしいがどうやら本当にうまくやっているらしい。ご機嫌取りなのか昼は取引相手の娘であるユーニティアと一緒に取らないといけないらしく、そこで今日のところは解散になった。

ヘインと別れた後、俺達は待ち合わせ場所に決めていた中央の巨大な神殿のような建物……中に地下のダンジョンがある建物の入り口でガイさんと合流し、取ってくれた宿に移動していた。

第二市街南部……一枚目の城壁の中の南側、昨日泊まった宿の近くに、ガイさんが取ってくれた宿……『雅な華亭』はあった。ガイさんが昔、冒険者時代に利用していた宿らしく、カイル兄さん達も最近まで利用していたらしい。

この街では一般的な二階建ての建物で一階は食堂になっている。二階の広さに比べて食堂は狭いが、奥に従業員用の生活スペースがあるのだろう。

二階はベッドと机だけがある小さな部屋が十室くらいある。部屋の中は外見のぼろぼろさに見合わず、シーツは清潔で掃除は行き届いていた。

もつとも長期間借りる場合には自分で掃除しなければならないなど、前世に大学生活の際に使っていたワンルームマンションが印象としては近いかもしれない。

宿の主人であるエーデルさんは、はきはきとしゃべる恰幅のいいおばさんでカイル兄さんのことは印象強かつたらしく、自己紹介すると、

「あの悪餓鬼の弟か！ あんた兄さんに本当っぜんぜん似てないねえ！」

と、笑っていた。

おばさんの息子で、宿で働いているリックさんも似たような感想だった……何をやってたんだか。今度カイル兄さん達の事も聞いてみようと思う。

これから暫くお世話になる狭い部屋に持ってきた荷物を置くと、一階から肉の焼けるいい匂いが漂ってきた。昼食を食べていないと聞いたエーデルおばさんがじゃあうちで食べなど作ってくれているのだ。

もちろん有料である。断ることが出来ない迫力だった。商魂たく

ましいというか……味は文句の付けようの無い出来で、自信を持って勧めれるのも頷けたが。

食堂で大きなパンをちぎって肉料理のたれに絡めて食べているとガイさんが唐突に今からちよつと散歩に行くぞといった感じの気軽さで、

「これ食ったらダンジョンに行くぞ。初回は案内してやる」
「え、今から？」

と、言ったため、思わず問い返してしまった。

「何言ってるんだケイト。お前は何しに来たんだ」

呆れたようなガイさんの言葉に、今度は気をゆるめ過ぎたか……と、ひき締め直す。ガイさんは、苦笑いして続けた。

「本当は明日からでもいいんだがな。俺も明日には帰ろつかと思ってるんだ。あんま心配は無さそうだしな。何かあった時にはあのおっかないエルフを頼れ」

「おお、いよいよかつ！ くっつ！ 楽しみだぜ」
「うん。わかった」

それと……と、ガイさんはネジの付いた丸い機械っぽい物を取り

出した。これは……時計？ それにしては針はあるけど文字盤が付いていない。

「こいつはケイトに預けておく。これを作ったドワーフのおっさんの話だと、ネジを一番巻いた状態を10回繰り返すと一日になるらしい。ダンジョンは薄暗くて時間がわかりにくいからな。カイル達には、俺のやつを渡したんだが……こいつはジンのやつだ。壊すなよ」

「なるほど。これは便利……ガイさん、ありがとう」
「馬鹿やろ。礼はジンにいつとけ」

よくよく見るとシンプルな構造だが、開けて中を見れるようになっていて、内部はかなり精巧であることがわかる。マイスはすげーと驚いているだけだったが、これは結構高いものではないかと俺は思った。

食事を終えて、ダンジョンに向かう準備を行う。といっても、防具などはまだ買えていないために動きやすい服装に剣と予備のナイフ、投石用の石、松明、火の精霊以外で唯一使いこなせている土の精霊を呼び出すための土などを持っていくだけだ。

狩りで使っている弓は持つてきてはいるが、大きすぎて中では使えないだろうという話だった。中に入ってこれはまた判断することにしたい。

母さんに貰った剣を鞘から僅かに抜いて、刀身に顔を映す。
自分の無力さに泣いた日から一年。かなりの訓練は積んできた。

それも今日からの生活に活かすためだ……しばらく、そうしていると準備が終わったマイルスが俺を呼びに来た。

「ケイト。いよいよだな！ 頑張ろうぜ」

気負ったところのまるでない満面の笑顔のマイルスに頷く。

この図太い大男はいつでも変わらない。ガイさんと一緒に旅をしているジンさんもそうやって安心したんだろうか。あの人も難しく考える癖がありそうだし。

「用意できたか。今日向かうのは地下一階だけだ。夕方には出るが俺は危ない時以外は手を出さない。お前達がやりたいようにやってみろ」

「だってよ。頼むぜケイト。頭使うのはお前の仕事だからな」

「何か気がついたらマイルスもなんか言ってくれよ」

俺は笑うマイルスに苦笑いして頭をわしゃわしゃかいた。

ダンジョンの入り口は巨大な神殿のような素材不明の建材で作られた謎の建物である。

太古の昔から劣化することなく、この姿のまま存在していると言われている。どういった由来があるのかは最早誰も知らない。少なくとも二千年以上前からあったのは確実なようだ。

大昔から生きているエルフなら何か知っているかもしれないが…

…ラキシスさんの知り合いなら知っている人もいるかも？ 一度聞いてみたい。

中に入ると巨大な柱が何本も立っていて、そこに背を預けるように粗末な装備の冒険者達が弁当を広げている。大抵は複数人で潜っているようだ……男性がやはり多い。

ガイさんの話では自信がない頃は、警戒して外で食べることが多かったそうだ。実力のある冒険者は効率を求めて食事でも食べているらしいが。

今はわりと静かだが、これが朝に來ると一時的な仲間を求める冒険者の声や、冒険者に道具屋薬品を割高で売りつける冒険者ギルドの役人の声で騒がしいらしい。

どうでもいいが、他のギルドは同職者の組合で全然違和感がないのだが、冒険者ギルドだけ役所みたいなのはやはり長い年月で徐々に変異したんだろうが……違和感がある。

他の名前に変えろよと思うのだ……やってることは、役所仕事と専門的な派遣のアルバイト……みたいな感じだし。まあ、使う方もわかりやすいんだろうが。

そして、神殿っぽい建物の中央にある薄暗く大きな地下への階段。階段の降りる場所の側面の壁には恐らくこのダンジョンを作った職人が彫ったのだろう……読むことが出来ない文字が彫られている。

「この壁は面白いぜ。手をかざしてみな」

ガイさんがいたずらする時の子供のような笑みで笑う。こういう

ときの彼はろくでもないことを大抵考えているのだ。だが、俺達はその文字に手をかざす。

“この中にあるものは百億の絶望とたったひとつの希望である”

急に頭の中に声が理解の出来る言葉が響いて俺達はびくつ！として壁から手をどける。そんな俺達を見て、してやったりとガイさんが大笑いしていた。

「誰がどうやって作ったかはしらねえがいい趣味じゃねえか」

「他のこういうダンジョンにもあるの？」

「ああ。らしいな……一つ一つ違うらしいぜ？」

楽しそうに、感慨深そうにガイさんが目を細める。初めての時は同じように誰かに脅かされたのかもしれない。ミスも不思議そうに壁の文字を見つめている。

この言葉には何か意味があるのだろうか。

不思議なことは……本当に楽しい。この世界は知らないことしかない。

歩けば知らないことに直面し、人の手が入っていない自然に感動し、一つ一つの物がどういった意図で作られたりされているのか……真実を知っていく。

自分の中の知識と照らし合せて、世界を理解する……生きることの大変さは痛感させられるが、そのこと自体が本当に楽しいのだ。

旅をしてよかったと思う。

後は命の危険を体験してもそう思えるか。それだけだ。

思わず溢れそうになる知的好奇心を抑え、俺は現在、最も不思議な場所であるこのダンジョンの中に入るため、二人に行こうと促した。

第七話 初めての迷宮探索

階段を一步一步降りることに緊張感が増していく。

恐怖心は不思議と無い。完全な暗闇ではなく弱々しいが光源があるおかげだろうか。

延々と続く長い地下への階段を降りて行く。その間、階段の側面の壁になっているところをコンコンと叩いてみたが、石のような感触だった。

一番下に着くまでその石の壁は続き、階段の終わり……地下一階に到着すると、そこからその石を切り取ったように大広間が作られている。

この世界の技術では人工的にこれほどのものを作るのは難しいだろう。

「ここがまあ……最終準備地点といったところか。稼ぎの分配もここでやることが多いな」

「人が結構多いね」

広間では仲間同士で数人ずつ固まって何かを話している。この時間帯から探索を始める人は少ないだろうから、ガイさんの言う終わった後の分配中なのかもしれない。

用意してある松明に火を点けて左手に持つ。片手がふさがるが魔

法を使うにも火が必要なため、それ程問題ではない。マイスは力が強い分、戦闘に集中してもらい、俺がそれ以外を担当するというのが俺達二人が相談した計画だ。

壁際は光源があるから問題ないが、広間の中央部まで行くと手元も見えないくらい暗いため、やはり明かりは必要である。

「とりあえず、壁沿いに歩いていこう」
「おうよ！」

壁沿いを歩いていくと狭い横幅が大体5m程の通路があり、ガイさんの話によると一番多い基本的な広さの通路らしい。もちろん、他にも様々な種類があるらしいが。

人の気配が無くなると辺りは足音以外、耳が痛くなりそうなくらいの無音になる。

しばらくの間、風景の変わらない通路を歩いていると、同じ場所を歩いているのではないかという錯覚をしてしまう。地下一階ではそんな畏は無いらしく、その点は安心だが。

ちゃんと進んでいる証拠に目の前が行き止まりにつきあたり、左右に道が伸びている。

分かれ道を左に曲がって進んでいくと目の前に金属製の扉が現れた。

「このへんにやないが、畏のある扉もある。注意しろよ。後は奥に進むほど怪物共も出る可能性が高くなる。人がいるところはすぐに

掃除されちまうが……ま、こっからが本番だな」

ガイさんの話によると、この迷宮の怪物は地面から湧いてくるらしい。どうなってるのかは彼にもわからないらしいが。沸いた後は徘徊し、人を見たら問答無用で襲ってくるらしく、会話とかは一切できない。

マイスの顔を見て頷き、敵がいなかを探知する……少し離れた場所に二匹。倒していない相手だ。

金属の扉をガチャツつと開けると、先程までと同じ通路が伸びていた。

「早速おでましか」

「そのようだね……なんか虫みたいだね」

剣を構えたマイスがぴょんぴょん飛び跳ねる中型犬くらいの大きさのバッタのような生き物に、じりじりと近寄る。油断はしていないようだ。

俺ももう一匹に剣を構えながら近づく。どんな風に攻撃してくるのか……飛びかかってくるのか、何か特殊な攻撃があるのか。倒せばわかるようになるのだが……ならば。

「サラマンダーよ。正面の敵を倒せ！」

左手に持っている松明の炎が一瞬ぼあっ！ と強く燃え盛るとそ

これから小さな炎の蜥蜴が飛び出す。初見の相手は出し惜しみせずに倒すに限る。

松明の炎は消えてしまったが、後で点け直せばいい。炎の蜥蜴は、地面を這うようにシヤカシヤカと走っていき、巨大な虫に取り付いた。

声を出せない虫なのか無言で炎に巻かれながら狂ったように飛び回る。俺は止めを刺すべく、飛び回る虫を剣で切りつけた。

鈍い感触と共に巨大な虫の姿が消え、からん……と小さな石が落ちた。

「ミス。体当たりに気をつける！」

「おうよっ！」

飛蝗……読み方を変えればバツタ。そのまんまだった。飛び回って体当たりするだけのようだ。

大きさが大きなので馬鹿にならない強さかもしれないが。

ミスは一気に飛んで距離を詰めてきた飛蝗を蹴り飛ばし、ひっくり返ったところを剣で突き刺した。彼だから出来る力業だ……あの蹴りはもう喰らいたくない。

サラマンダーを帰らせて、松明に火を点けなおし初めて見る『魔力石』を拾う。

「さすがにやるな……お前ら。おめでとさん」

「あつたりまえだぜ！ な、ケイト！」

「当然！ ……と言いたいけど緊張したよ。気を抜かずに行こう」

自信満々で笑うマイスを見て苦笑しながら、俺達は先に進んでいた。

道を頭に叩き込みながら探索し、飛蝗やゴブリンを倒して進んでいく。

敵を効率よく倒すことはマイスに任せて、俺は帰る道や退路を考えながら戦っていた。やはり大事なものは生きて帰ることだろうから。

「なんでえ？ あの時。弱そうだな……魔力石頂くぜ」

初めて見る相手だ。一匹だけ、大型犬のような大きさの蛙がぼつんと座ってゲコゲコ鳴いている。

マイスがゆっくりと近づくと、蛙が水鉄砲のようにピュツと口から水らしいものを噴いた。

「なんだ？」

水の勢いは怪我をするようなものではない。マイスは飛んできたそれを手で防いだ……様子がおかしくなったのはそこからだ。

うつ！ と呻くとマイスがその場でばたりと倒れる！

「おい！ マイス！」

「うぐぐぐ、し、しびれ……」

毒か。近付きたくはないがマイスが倒れているからサラマンダーは使いにくい。

マイスに飛び乗ろうとしている蛙を蹴って邪魔をすると、今度は自分が正面にでて対峙する。あの水に気を付ければそれほど強くはなさそうだ。

ゆっくりと近づき相手の攻撃を待つ。俺も痺れさせるべく吐き出してきた水は横に飛んで回避し、次の攻撃をしてくる前に剣で串刺しにした。

敵の名前は……毒蛙か。これもまたそのまま……毒は麻痺毒。本来は動けなくして、獲物を食べるのだらう。

自然界にいる毒蛙が麻痺をさせて、小型の動物を食べている姿がなんとなく思い浮かんだ。

「……………はああ……………は、マイス！ 大丈夫か？」

「ぶっ……………くく！ 油断したな。三分もすれば治る。初めて見る敵は気をつける」

「ち、ちくしょう！」

しびれて動けないマイスが回復するのを待ちながら、敵が近づいて来ないか探知する。この状態で他の敵に襲われでもしたら一溜りもない。

「こういう毒を受ければこういう危険を招くことにもなる。弱い毒だがそれでも危ない」

「解毒薬とかはないんですか？」

「学院で研究されている魔法の解毒薬もあるが、一番安いやつでも結構高いぞ。こいつじゃ元がとれん。後は魔法での治療や、神に仕えてるやつらが奇跡を起こしたりつてのもあるな」

便利だな魔法……本来毒は、成分を研究しなければ直せないと思うのだが。

技術がアンバランスに高かったり低かったりするの、便利魔法も原因の一つに違いない。

「すまねえ……うーん、まだちょっと痺れるぜ」

「仕方ないよ。マイスがああならなかったら俺もやられてた」

申し訳なさそうな顔でしょげているマイスをぼんぽんと肩を叩いて慰める。

この後は順調に探索を続け、倒しきれそうにない数の敵が一度に出たところで来た道を全力で逃げて、初日の迷宮探索は終了した。

「いい判断だ。道も覚えていたようだな。臆病なくらいで丁度いい」
「命は一個しかないからね」

「わかってんなら安心だ！ もう教えることはねえな。二人とも」

地上に出て苦笑しながら頭をわしゃわしゃかいていると、ガイさ

んがばしばしと背中を叩いて大声で笑った。そうか……こうして教えてもらうのも……最後か。

緊張で忘れていたが……最後。訓練の締めくくり。それが今日だったのだ。

「ガイさん、十年もの長い間……本当に……本当にありがとうございます」

「師匠！ 次会うときはもっと強くなっておくぜ」

「寂しいような嬉しいような、複雑な気分だな。弟子の成長つてのはよ」

思えばこの人がある意味では俺の始まりだった。

陽気で明るいこの大男にはどれほどのものを教えてもらったかわからない。それも今日で終わる……俺は涙を堪えながら万感の思いを込めて頭を下げた。

第八話 本当の始まり

冒険者ギルドの本部は、第一市街の南部にある大きな建物の中にある。

他国で活動している冒険者の管理や調整も必要なため、冒険者のギルドは形式的には民間で運営しているという形をとっており、国同士の利害は裏側で調整しているようだ。

「しかし、よっぽど儲かってるんだな」

と、マイスが呆れまじりに溜息を吐いたように、本部は非常に大きい施設で様々な優良・無料のサービス、探索に必要な道具の販売などが行われている。職員の数も多い。

迷宮で手に入れた魔力石の換金はここでしかできないため、夕暮れ時の今の時間帯では多くの冒険者達がこの施設には集まり、賑わっていた。

手に入れた魔力石はここで換金してもらう。加工された魔力石は外に持って出ていいのだが、未加工の魔力石の持ち出しは禁止されている。このあたりは国の政策で、理由はわからないが持ち出されたら困ることもあるのだろう。

ここで回収された魔力石は学院や専門の機関に送られて加工され

るそうだ。

ますます、迷宮が鉾山のように思えてくる。

体を拭く水を無料で貸してくれるサービスもあり、昼から短時間しか潜っていないので汗はあまりかいていないが、軽く体を拭いてから俺達は借りた宿へと戻った。

『雅な華亭』に戻った頃には日も暮れて、城塞都市を夕日が紅く染め上げていた。

宿の食堂は、ここに宿を取っている冒険者だけでなく、宿の主人であるエーデルおばさんが作るおいしい料理と酒を求めて満席に近いほど席が埋まっている。

明るい店内ではがやがやと話し声や笑い声が響き、料理のいい匂いが漂っていた。

中に入るとカウンターの奥にいる恰幅のいいエーデルおばさんとひよろつとした人が良さそうな息子のリックさんが俺達を見つけ、大きな声で呼んでくれた。

「生きて帰ったかいっ！ みんな！ ケイトとマイルス……小僧達は今日が初めての迷宮入りだよ！ よろしくやってやんな！」

おばさんの声と同時に食事をしていた客からおおおお！ と歓声が上がリ、同時に席中から大きな拍手が湧き起こる……が、

「おいおい、本当に子供じゃねえか。ダンジョンは子供の遊び場じ

やねえぞ！」

「そつだそつだ！」

こついう怒鳴り声も同時に叫ばれていた。彼らも冒険者なのだろうか。酔つ払つた中年に差し掛かろうとしている男達が唾を飛ばしながらこちらを睨み付けていた。

確かに命懸けの仕事に遊び半分で来られればいい気はしないに違いない……が、自分は本気だ。マイスの顔を見ると、にやにや笑っていた。

俺に任せるといふことか……子供と舐められるわけにはいかない。今日は見ている人が多いから下手に引くと後の仕事に関わる。かといつてやりすぎて恨みを買うのもおもしろくない。

さてどうするべきか……

彼らには申し訳ないが相手の能力を見る。レベルはこちらより高いが、技能は遥かにこちらが高い……なるほどなるほど。

「そこのおじさん達……俺達は本気だよ」

「くつ！ 聞いたか！ ママのおっぱいが恋しいような子供が本気だよ！」

野次を飛ばしていた中の一人が馬鹿にしたように笑い、周りの男達も同調するように笑った。マイスが前に出ようとしたので殴りかからないように腕で止めて努めて冷静に、ゆつくりと相手に向かって問いかける。

「おじさん達も冒険者なら結果を出せば本気かどうかかわってくるよね？」

「結果か。はん！ お前みたいな子供には無理だ。ダンジョンを甘く見るな！」

「じゃあ…… どれだけ稼げば本気だと認めてくれますか？」

どれだけ馬鹿にされた笑いをされても一切気にせず、感情も高ぶらせず、静かに問いかける子供…… まあ年齢的には子供だ…… に、流石に困惑したのだろう。

野次を飛ばしていたおじさん達は顔を見合わせる。

「そうだな…… 小銀貨で三枚つてどこか。ま、まあ無理はするなよ。若造が張り切っちゃまって死んだら寝覚めが悪いったらねえぜ」
「有難う御座います。気をつけます」

大体小銀貨1枚でこの宿に料理付きで二人一泊することが出来るくらいの金額だ。

彼らに一礼して、席を離れてエーデルさんが用意してくれた席に付く。隣にマイルとガイさんが座り、用意してくれた飲み物で乾杯をした。

俺は果実水でマイルとガイさんはワインだ。村の基準だと成人していないため、酒はそれまで飲まないことに決めている。マイルは酒を一気に飲み干すと、俺に不思議そうに聞いてきた。

「なあ……ケイト」

「ん？ さっきのこと？」

「マイスが頷く。彼が質問してくることは予想できていた。何故なら……。」

「だってよー。俺達二人で小銀貨6枚と銅貨20枚稼いだじゃねえか。俺達二人で半分ずつでも超えてるだろ。なんであそこで言わなかったんだよ」

「昼から潜って、それだけ稼いでると彼らが知ったら恨みが残るよ。馬鹿にした分、周りから大笑いされてそれはもう酷いことになるだろうね」

「自業自得じゃねえか」

おもしろくなさそうに、ふんと鼻を鳴らして酒を煽る。

「ガイさんはふむ……と、頷き、

「まあ、そうだろうな。無駄に敵を作ることもないか。ガツンとやらなきゃいかん時もあるのもまた事実だが。今回ののはどうだろうな」
「明日はガイさんがいない分、今日より慎重に行くと思うし……多く稼ぎすぎたら俺とマイスで分けて換金してもらってぎりぎりを装うよ。それで、まだ馬鹿にするなら……。」

「俺の出番か」

「マイスが腕を叩いて笑う。俺も苦笑しながら頷いた。」

結局は荒事を仕事にすることになるのだ。気弱さを見せるわけにはいかなさそうだ。職業柄。

話に聞く限り礼儀正しさなどは無縁の者が多いようだし……安定を求める人、食にも困っていない人は冒険者などという命を賭けた博打のような仕事は選ぶはずもない。

「カイル兄さんならどうしたかな」

何気なく呟く。何年も会っていない兄を思い出すと、どうにも寂しい気分になってしまう。

「そりゃあんた！ あの悪ガキなら、指さして馬鹿にし返してたよ。あいつらがあんたを馬鹿にしてるのはその意趣返しさ。カイルの弟だからね」

「うおっ！」

いつのまにか後ろに料理を両手に持ったエーデルおばさんが立っていた。話を聞かれていたらしい。食堂がうるさいから大丈夫と、気を抜きすぎていたかもしれない。

彼女は料理の皿を置きながら手を腰にあてて苦笑いしながら思い出すように、

「陽気で実力もあつて、目立つし敵はいっぱい作ってたけど味方はもつと多い。そんなやつだったよ。あんたはちよつと違うみたいだね」

「俺はカイル兄さんみたいには出来ませんから」

「そうかねえ。私の勘じゃあんたも相当出来ると思ったんだかねえ」

やれやれと、首を横に振ってエーデルおばさんは次の料理を取りにいった。

カイル兄さんのような生き方は自分には向いていない気がする。

あの兄さんはどんな危険でも笑って乗り越えていくんだろう。それこそ物語の主人公のように。

羨ましいとは思っけど……それよりも兄らしいと笑みが浮かんだ。

翌日の早朝、俺達は第二市街から外に出る東門に、クルト村に帰るガイさんを見送るために来ていた。門の前では一昨日通るときにもいた、二人組の衛視が眠たそうに仕事を始めている。

「んじゃ、お前達すっかりやれよ。手紙はちゃんと渡しておいてやる」

「有難う御座います。お元気で」

「一年で俺はちゃんと帰るから。師匠も元気でな」

簡単に挨拶をするとガイさんはサッと未練もなく、あっさり背中を向けて城門の外へと消えていった。俺達はその大きな背中が見えなくなるまで、ずっと見送っていた。

ガイさんだけでなく、世話になったクルト村の人達にはいつか恩返しをしたい。そう心の底から感じていた。

頼ることの出来る人がいなくなり、本当の冒険者としての生活が
今日から始まる。

第九話 転機 前編

師匠である狩人のガイさんと別れて二ヶ月近くの時が流れた。

経験を積んだお陰かレベルの方も幾らか上がり、その結果としての不自然な身体能力の急な向上には本当に驚いている。

この世界に生きる人達の間では、これを『神の恩恵』と呼んでいて当たり前のこととして捉えており、不自然さなどは感じないようだ。

俺達は今も二人だけで迷宮への挑戦を続けている。何度か組んで潜ったこともあるのだが、どうしても効率が悪くなってしまふのだ。俺達のように子供の頃から訓練をして技術を磨いてきた者は少なく、臨時で入りたいと頼んでくる相手になかなか高い能力の者がいないのだ。

付き合っていけそうな性格なら能力はそこまで気にしないのだが、そういう一人の冒険者に限って性格に難がある者が多いこともわかってきた。

何度子供となめられ、難癖をつけられて報酬を多く持っていかれそうになったかわからない。

それなら一から育てればいいとも思わないでもないが、俺達より若い冒険者などそれこそ僅かしかない。それに育てて逃げられれば丸損だ。

じゃあ、腕のいい冒険者に仲間に入れてもらえば……と、考えて

も見たがそんな簡単には見つからないし、そういう冒険者は自分達のような子供には見向きもしない。

そういうわけで、二人での探索に限界を感じながらも頭を悩ませる日々が続いている。声をかけられることは増えてきているのだが……仲間には誘われたら受けるべきだろうか？

悩みは大きく、答えを焦って出すわけにはいかない問題だけに難しい。そんな風に悩んでいると別行動していたマイルスが、俺が待っていた場所に走って戻ってきた。

なんだか、マイルスは面白いことがあった感じの笑顔を浮かべている。

「おい、ケイト。あんときの酒場のおっさんが一階に沸いた大量のゴブリン倒そうだったよ。ほら、一か月前のあのなんてったっけかあの喧嘩売ってきた……」

一か月前……名前は覚えてないが俺達を馬鹿にした相手か。あの後、ぎりぎり目標の金額を集めたように見せかけて、敵意をもたれないように気をつけていたのだから……。

「それでマイルスは受けたのか？」

「ああ。だって倒さないと邪魔だろ。俺達がよく稼ぎに行ってる辺りのようだし。他の三人は全く知らないが、ま、なんとかなるって」

あいつはそもそも、店で一緒に飲んでいた人間と組んでいたはず。

それが知らない人間と組んでいる……どう考えても怪しすぎる。

背中を気にしながら戦わないといけなくなるかもしれない。だが、マイスに失敗から学んでもらうこともあるだろうし……。

「マイス。あの人は危ないかもしれないよ?」

「知ってるやつもいるんだし大丈夫だって! 心配症だな。ケイトは」

大笑いするマイスに頭をわしゃわしゃかいて苦笑し、溜息を吐いた。

マイスと二人で待ち合わせの地下の大広間に向かうと、粗末な革製の鎧を身につけた戦士風の男が四人、談笑しながら待っていた。

俺達を見つけると、酒場で俺達を馬鹿にしようとした中肉中背の男……閲覧の能力で名前を確認するとリユーグという名前だった……が、俺達にニヤニヤ笑いながら馴れ馴れしく近づいて肩を叩き、他の三人の方を向いて紹介する。

「こいつらが話していた優秀な新人だ! こいつらがいれば大丈夫だぜ」

「おおっ! そりゃ助かるねえ!」

笑っている男達の対応をマイスに任せながら、紹介しているリユーグと残る三人をよく観察する。武器は全員剣のようだ。狭い場所もある迷宮では剣は無難な選択ともいえる。年代は全員二十代後半

といったところか。

身体能力は俺達とあまり変わらない。レベルは7と二つほど俺達より上であることを考えると、微妙なところな気がする。そして、技能は武器のみ。それも、あまり訓練されていないように思える数字だ。

彼等は俺達を見て、喜んでいる……ように見える。

俺達はマイスの武器を優先したため、鎧を未だにつけていない。俺達のことを知らないはずの三人があからさまに喜ぶのはおかしくないだろうか。

信用など出来るはずがない。

「勿論先輩方が前に出てくれるんですよね？ 手本として」

「う……え、あ、ああ。当たり前じゃねえか」

先手を打つと想定外といった感じの驚き方をされた。表情は変えずに、内心決まりだな……と思った。

彼等は俺達を利用しようとしている。それでもいい。

どう利用されようがこの人数がいれば、一階の敵が相手ならなんとでもなる……この時の俺はそう判断していた。はつきりいえば迷宮のことも彼らのこともなめていたのだ。

地下に入り、四人が前に立って彼等が俺達を誘った理由である大量のゴブリンがいる地点へと移動する。帰り道を間違わないように、

歩いた道を記憶しながら。

「あれだ。あの通路の向こうの広間にゴブリン共が待ち伏せしている」

「んじゃ、手っ取り早く終わらせるか。一人二匹くらいか？」

マイルスが笑みを浮かべて、大きな両手用の剣を背中の鞘から抜く。その剣を軽々と構えているのを見て他の四人の男達からどよめきが起こった。

「へへ、すげえじゃねえか。頼むぜ」

「任せとけ」

全員で広間に出て剣を構える。俺は一番後ろで敵よりも男達の方を警戒していた。

後ろから切りつけられてはたまったものじゃない……が、そういう様子はない。気にし過ぎか？ 敵を排除するために利用しただけか……？

「いくぜっ！」

マイルスは剣を持って大声で吠えながら相手に突っ込んでいく。男達はそれを見た後、全力で走り出した……揃って真後ろに。

「……え？」

「けけっ！　がんばんなよ。期待の新人さんよお」

リユーグが馬鹿にするように笑いながら俺の肩を叩いて走り去っていく——あまりに想定外だった出来事に俺の思考が一瞬止まった。

だが、すぐに焦燥が沸き上がる。あそこは広間……まずいつ！

「ミスっ！　引け！　あいつらは逃げたっ！　囲まれたら死ぬぞっ！」

聞こえていることを祈りながら大声で叫ぶ。

幸い聞こえていたのだろう。ミスは両手剣を真横に大きく振りながら後ろに飛び下がっていた。そして、ゴブリンと対峙しながらじりじりと後ろに下がる。

「逃げたってっ！　本当か！」

「ああ。ごめん、予想外だった」

怒りで目が眩みそうになるのを抑えて、相手を確認する。

数が多すぎる……戦うにしてもこんな広いところだと不利だ。

「マイス！ 三つ大声で自分で数えて、その後、全力で背中に向けて逃げる。いくぞっ！」

「三！」

急いでマイスの近くまで走り、ゴブリンに向けて松明を投げる。

「二！」

「炎の精霊サラマンダーよ！」

「一！」

「代償を糧に……爆発しろっ！」

「〇！」

マイスが0を数えた瞬間、松明の木が大きな音を立てて爆発し、炎を纏った小さな木片がゴブリンに降り注ぐ。これで殺せはしないが、炎と音でマイスから注意が逸れた。

その一瞬を利用して、マイスが来た道を引き返して走る。

俺も遅れないように後ろを警戒しながら逃げ始めた。

俺の見通しは甘かった。信用できないことはわかっていた。だが、これほどの悪意を持って……本気で殺そうとするとは……想像していなかったのだ。

向けられた悪意と、見抜くことが出来なかった悔しさを噛み締めながら俺は足を動かし続けた。

第十話 転機 後編

結局俺達は逃げまどって無関係の冒険者を巻き込みそうになり、命懸けで大量のゴブリンと闘う羽目になったというわけだ。短くも濃密だった二ヶ月、そして今日の失敗を振り返るのをやめて俺達を助けてくれた二人の方を見る。

巻き込んだ冒険者の一人、赤に近い茶色の髪、筋肉質でがっしりした子供くらいの身長、髭の長い『鍛冶の神』ガランに使える神官のドワーフ、ゼムドが加勢してくれなければ、負けたとは思われないが怪我くらいはしていたかもしれない。

そしてもう一人、ゼムドに声を掛けてくれたのは以前、俺達を学院に案内してくれた白い髪の強気そうな狼の獣人シーリアだった。俺達を嫌っているのに助けてくれたらしい。

ドワーフの胸ぐらを掴んで黙らそうとしている彼女に、頭を下げる。

「ありがとう。シーリアさん」

「ふん……このドワーフが勝手にやったのよ。私は知らないわ」

胸ぐらを掴んだまま、つが惡そうにふいつとシーリアは横を向く。掴まれているゼムドはがははと豪快に笑った。

「今日はおもしろい日じゃ。神の導きというやつじゃな」
「……どういふことよ」

シーリアが手を離し、ゼムドを胡散臭そうに見る。

「くだらん人間の茶番には辟易させられたが、こうして姫に会えたしの。この若者達も拙僧の見たところ、実におもしろい運命を持っているように感じるのじゃ」

「馬鹿馬鹿しいっ！ 初めて会うあんたが何を知っているのよ」

なるほど、神官らしい物の言い方だ。だけど、俺は神を敬つてはいるが信じてはいない。運命などという言葉も信用していない。というか、ゼムドとシーリアも初対面か。

「買い被りですよ」

「それを判断するのは拙僧じゃ。で、提案があるのじゃが」

いかつい顔のドワーフは長い髭を弄りながら顔に似合わない人好きのする笑顔を浮かべて続ける。

「拙僧らと今日は組まんか？ お主らと同じようにこちらも仲間に見捨てられた口でな」

俺達の前に走って逃げていた男を見ていたのか……見捨てられたというのとは。

拙僧ら——ということは、シールアも一緒にということか。

彼女の顔をみると何か余程悔しいことがあったのか、ゼムドの言葉聞いて顔を伏せて白い顔を怒りで赤く染めて拳を握りしめて震えている。

「ゼムド……同情しているつもり……？」

「ほっほ。まさか……拙僧のみるところお主は原石じゃろ。ドワーフは土に生きる種族。良い石見分けるのはお手のものじゃ」

飄々としているゼムドと、苛立っているシールアのやり取りを聞きながらマイルスの顔を見ると彼は頷いた。その意味を理解して俺も彼に頷く。

俺に任せるということだ。

「俺達は構いません、いや、こちらこそ頼みたい」

「ほう、即答か。拙僧らが見捨てられた理由は聞かないのかの？」

楽し気にゼムドが笑う。俺を試しているのか……青い瞳を細めて見透かしているかのようにこちらの目を外さずに見つめてくる。

「貴方とシールアが信用できるかは俺達自身で判断したい」

「拙僧らは異種族じゃぞ？」

「俺には関係ありません」

断言すると我慢できないといったようにげらげらとゼムドは大笑いした。何がそんなに面白いのか腹を抱えて彼は笑い続けている。

「甘い甘い！ くつくつく……青臭いつ！ いや、実にいい！」

「なんだとっ！ 誰が青臭いつてんだ！」

「マイルス！ いい。彼は馬鹿にしているわけじゃないよ。多分」

マイルスの怒りも気にせず一頻り笑った後、ゼムドは目を瞑って神妙な表情で神に俺達との出会いに対して感謝の祈りを捧げた。

「いやすまん。殺伐としたこの街でお主らのような者に会うとは。

白狼の姫はどうじゃ？ 彼等と共に今日一日、一緒に迷宮を潜るのは嫌かの？」

「姫じゃないっ！ たたく……私なんかと組んでどうしようっていうのよ……」

シーリアが顔を伏せ、耳を寝かせて力なく呟いた。

彼女とは一日しか顔を合わせていないが、らしくないなと思う。身分を気にする素振りはあるが、それもどちらかというとラキシスさんに迷惑をかけないためだろうし……彼女は強い女性だと思っていたのだ。

「シリアは魔法使いでは？」

「……そうよ。けど……」

そこで言い淀む。言いたくないのかもしれない。

シリアはきつ！ と顔を上げると叫ぶような大声で言った。

「一緒に来た人間に、獣人の癖に非力な役立たずと罵られて置いていかれたのよ。ゼムド……貴方もそう思っているんじゃないの？ 役立たずだって！」

「さてのう。拙僧は神の意思を信じておるからの」

これが悔しそうだった理由か。怒っているように見えるが……違うな。

友人と殴り合いをした時を思い出す。あの時の彼の顔だ。自分の力の無さへの憤り、悔しさ……自己嫌悪……そんな風に俺は感じていた。

彼女の事をよく知っているわけではない。別に魔法使いに力はいらないと思うのだが、彼女の価値観では違うのかもしれない。

なににせよ彼女は——心が折れかけている。

学生の身分で迷宮の中にいるのは、おそらくラキシスさんと旅をするという夢を叶えるためだろう。ここで折れてしまえば絶望的になってしまう。

彼女の夢は……俺は諦めて欲しくない。

そして、大事な友人であるラキシスさんの娘にしてあげられることは……これが正しいことなのかはわからない。だけど、このやり方しか思い浮かばなかった。

本当は旅をすることを諦め平和に生活する方が彼女にとってもラキシスさんにとっても幸せなのかもしれないが……このまま終われば後悔が残るのではないだろうか。

悩む……彼女に対して好悪の気持ちはない……だがそれでも俺は歯を食いしばって拳を握った後、シーリアの方を見て薄く嘲笑するように笑みを作る。

「シーリアさん。貴女は……負け犬になる気ですか？」
「なっ！」

犬というのは彼女にとって、やはり最大の侮辱の言葉らしい。シリアは俺を殺さんばかりに憎しみを込めて睨みつける。口からは鋭い牙も見えた。

マイルスも驚いたようにこちらを見ている。俺は笑みを消し、彼女を見つめて続けた。

「そうでないなら……実力を見せつけるしかない」
「当たり前でしょ。やってやるわよ！ あんたこそ足引っ張るんじゃないわ」

シーリアの目には敵意しかないが、姿勢がしゃんとして活力は戻

っているように思えた。

ふう……と、彼女にわからないように溜息を吐いて彼女の側を離れ、マイルとゼムドに行こうと声を掛ける。マイルは慰めるように背中をぽんと叩いてくれたが、これでしばらくは自己嫌悪に自分自身も陥ることになりそうだ。

あんなことを言う資格は自分にはないだろうに。

一日に探索を終えて地上に戻ると、俺達を置いて逃げた奴らはもういなかった。恐怖で逃げたのならいいが……わざとであれば、なんらかの対処を考えなければならぬ。

……いや、間違いなくわざとだろう。やつらは俺達を自分達の手を汚さず、合法的に消そうとした。俺は自分の甘さのせいでマイルを危険に晒したのだ。

この悔しさは絶対に忘れない。

一方で、心配していたシーリアは迷宮の怪物相手に活躍することができていた。

途中からは自信が付いたのか張り切りすぎて魔法を使いすぎ、結局立つ事すら出来なくなるくらいに疲労していたが。今まで限界を知らなかったらしい。

帰りはマイルが恋人以外の女に触れるわけにはいかないと断ったため、シーリアは俺が背負って帰る事になった。軽いから問題は無いが、気恥ずかしい。

それに油断したら後ろから噛みつかれそうだ。

「換金して分配したら四人で食事にいこう。俺が間違ってたよ……
シーリアさんは凄かった……あたっ！　噛まないでよ！」
「動けなくなっただけなのに……嫌味？」

背中の彼女は不機嫌そうに唸る。本心から凄いと思ったのに……
遠距離からの確に相手を仕留めていく魔法の威力と精度は自分には
ないものだ。

「まあ、いいわ。私の勝ちなんだし、あんた夕食奢りなさいよね」
「え、賭けだったの？」
「いいわよね？」

苦笑いして頷く。まあ、暴言の対価と思えば安すぎるくらいだろ
う。

彼女もそれほど怒っていないようだ。

さっきまでの不機嫌そうな感じではなく、言葉にはどこかほっと
したような……それでいて誇らしげな響きがあった。

第十一話 宴会

魔法の使いすぎで疲労したシーリアを背負いながら『雅な華亭』に戻る、丁度夕食時で食堂の中はがやがやと賑わっていた。

「おかえ……おや……あんた、やっぱり女好きな兄貴に似ているのかい？」

「そういうのじゃないって。魔法の使いすぎです。すぐ戻るらしいですよ」

にやにや笑っているエーデルおばさんに反論し、シーリアを下ろすと彼女はよろよろと頼りない足取りながらも自分で立って椅子に座った。

マイルスとゼムドも席に着く。周囲から妙に視線を感じるが……。

「なあに、気にすることはない……いつものことじゃ。いや、ましかの？」

「そうかもね。不快なことをいうやつもないし」

ゼムドが笑い、シーリアも頷いて同意する。

彼らは……異種族はそういう中で生きているということかと……と、俺がしみじみ思っているとマイルスが杯を振り回して明るく声を上げ

た。

「まあ、細けえことはいいいじゃないか。乾杯しようぜ乾杯！」

「そうだね……じゃ、シーリアさん。よろしく」

「あ、ええ！ 私？ あ、う、え……乾杯……」

自信なさそうなシーリアの音頭にあわせて、かんぱーいと大きな木製のジョッキを打ち合わせる。満杯までいれられた麦酒の泡がそのせいでテーブルの上に飛んだ……もっとも俺だけ中身は果実水だ

が。
それを疑問に思ったのだろう。シーリアが不思議そうに聞いてきた。

「なんであんなだけ酒じゃないのよ。飲めないの？」

「俺の村だと成人は十六歳なんだ。俺は十三……いや十四だったかな。そのくらいだから」

「え……」

シーリアの酒を飲む手が止まり、驚いた顔で見つめる。俺の顔は老けてるんだろうか。

「……年下？」

「シーリアさんの歳知らないけど、そうなの？」

「私は十七よ……信じられないわね」

そう呻くように言って満杯に入った麦酒を勢い良く、ガツ！と飲む。

酒に強いのだろうか……そう思ったが、これだけの量で色白な頬に朱が差しているところを見る限りそうでもなさそうだ。

「苦っ……、まずい……何でこんなの飲むのかしら」

「嫌いなら飲まなきゃいいのに」

「初めて飲むからわかんなかったのよ」

ジョッキを置いて両肘を付き、顎に手を当てて、はぁ……と、溜息を吐く。

そして、シリアはそのままの姿勢でこちらを向くと恨めしそうに言った。

「あんたのせいよ。飲まないとやってられないわ」

「初めて飲むのにそれは……いや、今日のことなら本当に申し訳ない」

シリアに頭を下げると、しばらく彼女は黙っていたが……急に肘を机から離れたと思うと片手で俺の頭を引き寄せ、反対の手で拳を作ってぐりぐりと頭を……いたたたた！

「あんた、私を馬鹿と思ってない？ 年下の癖に生意気なのよっ！」

「お、思っていない思っていないって！　ちょ、身体近いって！」

頭を引き寄せているため、自然と密着する。彼女の身体はそこそこ豊かで胸が当たりそうになるのを必死で頭を上げて防いでいた。シーリアは気が済んだのか腕を話すと、酒が回っているのか狼の三角な耳をピンツと真っ直ぐに立てて真っ赤な顔で続ける。

「……迷宮に潜るのは初めてだったのよ。敵を前にしたとき怖くて動けなかったの」

「初めて……か。初めての時は仕方が無いよ」

俺達と一緒にのときは自分の限界を知らずに戦っていたけど、技術そのものは見事だったので彼女が役立たずと言われたことに疑問を感じていたのだ。

今日が初挑戦だったから、上手く動けなかったということか。

シーリアはジョッキをがたと置いて、ぺたんと耳を伏せた。中身はいつの間にか無くなっていて、ジョッキを逆さにして足りない……と呟いている。大丈夫かな？

「あのときは本気で背中に魔法当てて殺してやろうかと思ったけど、冷静になればね」

「……」

絶対にこれからは禁句を言わないようにしようと心に誓う……目

が本気だ。

「だから、あんたは謝ったら駄目。殴りたいのと同じくらい感謝もしてるわ。狼は恩知らずじゃないのよ。あんたは年下の癖に強いし冷静だし本当に可愛げがなくてむかつくけど」

「じゃあ……どうすれば？」

やっぱり怒りのほうが強そうなシーリアに問いかけると彼女は少しだけ考え、頷いて言った。

「あの様子じゃどうせ明日は迷宮には行けないでしょ。あんた明日は買い物に付き合いなさい。一人で街を歩くと面倒なの」

「それでいいの？ 店とか……俺はあんまり知らないよ？」

「ある程度は私ができるから大丈夫。あんたは荷物持ちすればいいのよ」

まるでデートのようだが、彼女との関係を考えてとまずそんなことはない……となると、彼女の言葉通りの荷物持ちと人間に絡まらないための護衛のようなものか。

シーリアがあのような様子といったのはマイルスとゼムドの二人のことだ。彼等二人は客の中にいたらしい旅の楽師の陽気な曲に合わせてジヨッキの酒を飲みながら踊って他の客を笑わせて、店を盛り上げていた。

楽しそうで、店に馴染んでいる二人をしばらく黙って眺める。

麦酒を飲みながら彼らを見るシーリアの顔も何時もより穏やかなものに思えた。

「そういえばゼムドとはどうやって知り合ったの？」

「私は一人で潜れると思うほど自惚れてなかったから、仲間を探してたら声かけてきたのよ。で、他に人を探していたら、むかつく二人組が来たの」

あれ？ と彼女の話に少しだけ違和感を感じる。なんだろう……。何かを忘れているような……。そんなもどかしさ。彼女が一人でいて、ゼムドが声をかけ……。その後二人が来て……。その二人が逃げて、ゼムドは残った……。か。不自然ではない。だが……。

解りそうと思った時、どん！ とシーリアがジョッキをテーブルに叩きつけた。

「あんたらちみtainな人間ばかりなら、この街もたのしいのにー狼で何がわるいのよ！」

「ちょ！ シーリアさん。暴れないで！ 酒が飛ぶ！」

シーリアの杯にはいつのまにか満杯の酒が注がれていた。もう四杯目だ。

マイス達に目を逸していた隙にエーデルおばさんが注いでいたらしい。もう、彼女は明らかに酔っていて呂律が怪しいのに。

目がとろんとしていて、ちらりと服から見える肌もほんのり朱色

に染まって色つぽい。慌てて目を反らせる。

「初挑戦だったんだろ。こんな日くらい飲まなきゃ」

「誰がどうやって彼女を世話するんですか」

「あんたがやりな。素面だろ……ま、仲良くやんな。若いもん同士。あんたなら危険もないだろ」

エーデルおばさんがにやりと笑って他の客の所へと歩いていく。俺だって若い男なのに。安全と言われるのはあんまり喜べない。

そんな風に思いながら酒が入って説教するような感じになってきた彼女の……意味を理解することが難しくなってきた一方的な話……というか愚痴？ を、わからないながらもうんうんと頷きながら聞く振りをずつとしていたのだが、一つ大事なことを忘れていた事を思い出していた。

………そういえば。

「シーリアさん！ 内壁の門はいつまで開いてる？ ……って」

「……」

いつのまにかジョッキの中身は半分くらいになっており、すー…すー…と、彼女はいつのまにか幸せそうな笑顔で寝息を立てていた。

いい夢でも見ているのか尻尾がゆっくりと左右に振られている。

もう夜も遅く、客も徐々に少なくなってきた。いつの間にか
ミスとゼムドの姿も消えていた。あいつら……酔っているように
見せてそうでもなかったのか。

シーリア起こしたとしても恐らく、内壁の門は開いていないに違
いない。ラキシスさんが心配するかもしれない……しまったな。

隣で気持ちよさそうに眠っているシーリアを揺するが、全く起き
る気配はない。

頭をわしゃわしゃかいて苦笑して、彼女を店にきたときと同じよ
うに再び背負うと自分が借りている部屋へと運び、吐いても喉を詰
めないように顔を横にしてベッドで眠らせた。

そして、エーデルさんから毛布を一枚借りて、自分は床で眠る。
ベッドに横たえた時のシーリアの体のしなやかな柔らかさが運ん
だ手に残っていて頭が冴えてしまい、眠れそうにはなかったが。

あの柔らかさ……故郷にいるはずのクルスを抱きしめた時の感触
をなんとなく思い出してしまい溜息を吐く。こんなことで彼女を思
い出すなんて……と。

闇夜の中、ふとシーリアを見ると……窓から入る前世のそれより
も少し明るい月の光が彼女の白い髪が淡く反射し、ほんのりと輝い
ていて銀色の狼が丸まって眠っているように見えた。

起きているときと違い、狼というには眠っている彼女の姿は可愛
らしすぎたが。

俺は思い浮かんだ表現に苦笑し、どうせ眠れないなら明日ラキシ
スさんにする言い訳を考えよう。そう考えて毛布を体に巻きつけて

床の上で丸まった。

第十二話 買物

翌日、俺は……いや、俺達は命の危機に晒されていた。

目の前で椅子に座っているラキシスさんは何時も通りに穏やかに微笑んでいるのだが……全く目が笑っていない。

隣のシーリアも彼女から発せられている空気の重さを感じているのか顔を真っ青にして、耳をしゅんと寝かせている。

俺はシーリアを送ったところでやっぱり彼女を見捨てて宿に引き返そうと思ったのだが、逃げようとしたところを彼女に肩を掴まれ、

「一緒に言い訳してくれるよね？」

と、引きつった笑みで詰め寄られたのである。

……余りの迫力に俺は頷くことしかできなかった。そして今、俺は死地にいる。

「ケイト君、シーリア。何故、朝帰りしたのか……説明して欲しいのだけど」

「あーっと、えとその……」

にここに笑ってるラキシスさんの圧力に負けて、シーリアが口ごもる。

余計怪しくなっている気が……彼女に任せているといつまでもこの濃厚に漂う死の気配と戦うことになりそうなので、俺が説明することにした。

「昨日、偶然迷宮で一緒に探索したのでその後一緒に食事することにしたんです。それで、遅くなったので帰れないと思い、そのまま自分の部屋に泊まってもらいました。心配おかけし申し訳ありません」

「ば、馬鹿！ そんな説明だと……」

事実をかいつまんで説明したつもりなんだけど、シーリアが頭を軽く叩いてきた。

おかしい説明かな？ と、シーリアを見る。

「しょ、食事してそのまま宿で……確かに私は貴方達に仲良くしなさいと言ったけれども、その……ちゃんと節度を……うつつう、ケイト君とし、シーリアちゃんが大人に……」

「な、なってませんっ！」

ぼかんと、顔を真っ赤にしている二人を見る。しばらく、自分の発言を思い返す……あ、これは説明が全然足りてないっ！

「違います！ 俺は床で寝たんです！」

俺も慌ててしまつて碌な言い訳が思い浮かばない。昨日はいろいろ考えていたのに。

それにしても、冷静で大人なラキシスさんのイメージが……。

結局ラキシスさんが誤解を解いて納得してくれるまで、十分以上の時間が掛かった。

「そういうことなのね……シーリア……冒険者になるのならそれでもいい。だけど、旅に慣れていない魔法使いが一人で生きていける程、甘くはないわ。認められない」

「はい……」

コホンと咳払いして、ラキシスさんは立ち直ると昨日一人で無茶をしようとしたシーリアを叱り、説教をした。ゼムドがいなければシーリアは本当に危なかったことを考えるとラキシスさんとしてはどれだけ怒っても足りないくらいだろう。

朝、家に戻ったとき、ラキシスさんは鎧を着込んでいた。シーリアを探すつもりだったのかもしれない。彼女には本当に心配させてしまったのだと思う。

しかし、シーリアは冒険者を諦められないに違いない。俺は少し考えて、内心先走ることをマイルスに謝りつつ、顔を上げてラキシスさんの方を向いた。

「ラキシスさん、お願いがあるのですが」

「何？ ケイト君」

「シーリアさんさえ良ければ、俺達と組んでもらえないかと思ってるんです。出来れば彼女が冒険者になることを認めてもらいたい」

ラキシスさんが目を細める。それだけで、俺の心臓が驚悸みにされるような緊張を感じるが、ここで目は逸らせない。彼女はシーリアを危険に晒したくないのだろう。大事にしているのはわかる……けど、どうするかはシーリア自身で選んでもらいたい。

「ケイト達はいいの？ 貴方達は強いじゃない。私は……」
「シーリアさんは、目標があるんじゃないの？」

戸惑うシーリアに、問いかけると彼女はグツと口を引き締め、ピンと耳を立てて頷いた。

彼女の赤い瞳には、意思の強い決意の光があった。

「ラキシス様。私は冒険者になります。一人前になりたいんです」
「……はあ……何かわかりあっちゃって……仲間外れね」

ラキシスさんがため息を吐いて苦笑する。俺も苦笑いして頭をわしゃわしゃかいた。

彼女は条件として、学校はやめないことと何か危険なことがある時は自分に相談するようという二点をシーリアに約束させていた。

「ケイト君、娘をよろしくね……あ、お付き合いは駄目よ？ ケイト君には早いわ」

「そういう関係じゃないですってば」

ラキシスさんへの謝罪を終えた後、俺達は昨日の約束の通りに二人で買い物に出かけていた。向う先は第二市街の西側だ。

学院と近い第二市街の西側は多く職人達が住んでいて、彼らの作った様々な品が売られている店が軒を連ねている。

彼女が何を買うのかはわからないが、シーリアは色んな店を案内してくれている。少し前のきつい様子が嘘のように柔らかな表情で酒の力で溜まっていた鬱屈した気分を全部吐き出せたのかもしれない。

「こっちの方には本当に色んな店があるんだね」

「そうよ。学院と契約してる職人とかも沢山いるの。それに、北の交易所から近くて材料が集め易いから……だから西側は色んな店があるのよ」

あれは何の店、これは何の店といった感じにシーリアは楽しそうに解説する。

俺は道を覚えながら、頷いたりなるほどと相槌を打ったりしながら、売られている商品を閲覧の能力で見てみたりしていた。流行がわかったりして、中々楽しい。

シーリアは、女性物のアクセサリを売っている店では長い時間一つ一つデザインを確認している。もしかすると……。

「シーリアさん、もしかしてラキシスさんに？」

「え？ あ、うん……そうなの。でも、ちゃんと店に入るのって……ほら、初めてだからどれが良いのわからなくて。場所はわかってるんだけどね」

そう照れくさそうにシーリアは笑った。

楽しそうに解説していたシーリアの姿を思い出すと、店そのものに興味は物凄くあったのだろうということは容易に想像できる。入れなかったのはそれなりの理由があるのだろう。

それにしても、初めての報酬の使い道は親へのプレゼントか……彼女はラキシスさんを本当に大事に思っているんだなと自然に口元が綻んだ。

「それなら、しっかりと選ばないとね。ちゃんと一日付き合うから」

「あんたは、どんなのがいいのかわかるの？」

「うーん、シーリアさんが選んだのならどれでも喜ぶと思うけどね」

頭をかいて苦笑する。シーリアは頷くと、獲物を狙うような真剣な目で店に並べてあるアクセサリーと財布の中身を見比べていた。俺も自分の分を探す。折角だからクルスに贈ろうと考えたのだ。

クルスの姿を思い浮かべながら、どれが一番似合うだろうかと探していく……と、小さな鳥をあしらった青い硝子細工の付いた首飾りが目に止まった。

これにしよう。そう決めて店の主人にお金を払う。どうやら、シリアの方も案外早く決まったようだ。彼女は俺が買った首飾りを見ながら、

「あんたそれ……クルスつて子に？」

「うん、手紙と一緒に贈ろうかなって」

「ふ、ふうん。恋人なの？」

少し悩む。が、この問いに対してはこう答えるしかない。

「違うよ。大事な人ではあるけど」

「キスしたのに？」

「……え？」

呆然とした俺を見て、シリアが尻尾を振ってにやにやと笑っている。何故それを……。

「ラキシス様宛の手紙に書いていたの。機嫌悪くなって大変だったのよ？」

本当にクルスは何を書いているんだろう。顔に血が上って真っ赤になってしまっているのを俺は自覚していた。そんな俺を見てシリアは声を上げて笑った。

「生意気な年下にやっと一矢報いたかな？」

「参ったよ。ほんとに……年上っぽい仕返しかはわかんないけど」

無然とした俺に、彼女はくすくすと笑っていた。

その後、再びアクセサリーを色んな店で見ていたシーリアは気に入った物があったのか、ちらちらアクセサリーと俺を交互に見ていたが、そうだった！ と大きな声を上げると、ちよつと強ばった笑顔で、

「これから冒険一緒にする記念に何か買ってくれない？ 私も買うから」

「え、うん、別にいいけど」

じゃ、これねと彼女が選んでくれたのは小さな人形のバッジだった。地の精霊、ノームをデフォルメしたものだ。迷宮で呼び出したとき、気に入ったらしい。

俺は悩んだが彼女に似合う物を考え、月の形をした銀色の硝子細工の付いた首飾りをプレゼントした。彼女が普段着ている学院のローブは黒っぽい色合いなので、彼女の髪の色に似ている銀色のアクセサリーは色合いが合っているし似合う……と思う。

喜んでくれているのかアクセサリーを笑顔で弄りながら、シーリアは尻尾をゆらゆらと振っていた。

「有難う……大事にするわ……こうやって誰かと外に出たらやってみたかったの」

「あ、うん、そうなんだ」

そんなに嬉しそうな顔をされるとこちらまで照れてしまう。普段の様子を見ていると、知らない人にはきつい感じだし、ラキシスさん以外と出かけたことが……もしかしたらないのかもしれない。まあ、喜んでるならいいかなと軽く思っていた。

「そ、そうだ。これからはケイトって呼んでいい？」

「そういやずっと『あんた』だったね。もちろんいいよ」

「私のことも呼び捨てね？ け、ケイト」

「……わかった。シーリア」

照れながら笑顔で嬉しそうにぱたぱた尻尾を振っている彼女を見ていると、友人になつたら心を開いてくれる人なのかな……と、そう感じていた。

買物の後も、二人で露店で売られているパンと蜂蜜を混ぜたような食べ物を買って食べたり、色々な店に売られている物を見学したりして楽しく過ごしていたのだが、そんな時間は突然終わることになる。

歩いていたとき、目の前に現れた若い二人組の男によって。

「おー。こりゃ偶然っ！ シーリアちゃんじゃないか」

「冒険者に相手されないからって、ガキとデートかあ？」

「おいおい、そんな言い方するなって嫌われたらどうすんだ。これから俺達とデートなのによ」

先程まで機嫌が良かったシーリアの表情が怒りに染まっているのが簡単に分かった。

おそらく、昨日シーリアを置いていったやつらなんだろう。俺は溜息を吐くと、シーリアの前に出て目の前の二人組と対峙した。

第十三話 レベル差と技能差

目の前にいる若い男二人は、俺を見てにやにやと笑っている。自分達が確実に強い……そう自信を持っているようだ。身に付けている防具は胸部を金属で補強したしっかりしたものであることを考えると、その自信も実力の裏打ちあつてのことかもしれない。

小声でシールシアに二人の名前を確認し、危なそうなら逃げるように彼女に告げて彼等二人に向きなおす。辺りはガヤガヤと騒ぎ始めるが、助けが入る様子はない。誰でも暴力的な冒険者に巻き込まれるのは避けたいのだろう。

騒ぎから、衛視が駆けつけてくれれば一番いいのだが。

「おいおい、小僧。獣人なんてなんで庇うんだ？ ゴミみてえなやつらじゃねえか。お前さんもそいつをほっときゃ怪我しないですむぜ」

「仲間だからね」

前に出てきたのは二人組のうち、筋肉質なごついハゲな男だ。もう一人の金髪の優男の方は彼の背後で愉快そうに俺達のやり取りを見ていた。

「くくっ！ まるで、英雄様だな。すました顔も気にいらねえ」

「俺も気に入らないよ。このハゲ」

距離をあげるように後ろに飛び二人の能力を『見る』。茹で蛸のように赤くなっている男……ザグはレベル12……強い。武器の技能も高めだ。だが、徒手格闘の技能はない。

もう一人はサイラルって名前か。レベル15……こちらも徒手格闘の技能はない……えっ！

「なに他所見してやがんだ！」

「ケイトっ！ 危ない！」

「がはっ！」

驚いて気が逸れた瞬間を、相手は見逃さなかった。

顔面に殴りかかってきたのは腕でかろうじて防いだが、追撃の蹴りを腹に食らってしまった。力の差も体重の差もあるため、軽く宙に浮くほどの衝撃が走り、無様に転がってしまう。

シীরリアの悲鳴がなければもろにもらっていたかもしれない。

今は……効いた。少し足にきていたが、立てないほどじゃない。よろめきながら立ち上がると、筋肉質な男……ザグはい……と口を歪める。

「もう一度言っぜ？ 犬っころ置いてガキは帰って毛布でも被って寝てな」

「……寝言は寝てから言え。ハゲが。それからシীরリアは狼だ」

「お前、早死するぜ」

優男の方は参戦する気配はない。なら、勝機はある。

武器を持っていたなら現時点では厳しい戦いになっていたかもしれないが、技能の差が大きくある素手なら。

俺は口の端の血を腕で拭い、半身に構えて相手を睨み付けて攻撃を待つ。

「死ねっ！」

ザグが右腕で殴りかかってくるのに合わせて前に出て、握った左腕を曲げ、相手の右を受け流しながら低い体勢で懐に入る。相手より小さい俺の身体は近づけば有利になる。

「なっ……っ！」

「はっ！」

俺は相手の攻撃の勢いに任せて体を回転させながら、右足に力を込めて地を踏みしめ、右手の拳で相手の顎を打ち抜いた。ぐらつとよろけたザグの顎をさらに左手で追撃する。

驚いた表情のままで膝を付いたザグに対して、立つ気力も残らないように念入りに蹴りを入れておく。

相手の方が格上なのだ。油断はしない。

自分よりも背が高く、体格のいい相手を倒した俺に野次馬たちから拍手が沸き上がった。

「素手で挑んだのは失敗だったな」

「よ、容赦ないわね……」

「師匠の教えを忠実に守っているんだ。良い弟子だよね……で、そ
ちの人はどうする？」

倒れているザグに注意しながら、優男……サイラルを見る。

彼は俺やクルスのような……特殊技能を身に付けていた。特殊ス
キル『結界』……詳細がわからないため、素手の技能はないとはい
え油断が出来ない。

サイラルは、余裕の表情でこちらを見て拍手をしていた。

「少年……なかなかやるな。俺の下で働かないか？ その女を俺に
くれたら他の女まわすぜ？ 好き勝手やって楽しめるんだ。悪くな
いだろ？ そのわんこ、気にいったんだよね」

「どうやら寝言が流行ってるみたいだね」

あまりの馬鹿馬鹿しさに苦笑いするしかない。が、目の前の優男
はどうやら本気だったようだ。彼はやれやれと心外そうに首を横に
振って、呆れたような声を出す。

「残念だよ。所詮お遊びなこんな世界で真面目に生きてどうするん
だい。もっと肩の力抜いたらどうかと俺は思っけどね。若いんだ
からさあ」

「お遊び？」

不思議なことを言う。サイラルは頷いて演劇のような大袈裟な手振りをしながら笑って答える。

それが似合うのは、見かけだけは好青年のように演じて見せているからだろうか。

「そう、俺達選ばれた人間の遊び場だよ。この糞みたいな世界は」「
「新手の宗教かなんかか？」

「宗教じゃなくて事実さ……俺は野蛮なこと嫌いだから今日は行っていないよ」

世界に対する言葉には憎しみを感じたが……サイラルは本気で言っているように感じた。

どうやら、今はやり合う気はないらしい。それにしても……今日は………
は………ね。

「その子は俺の物にする予定だから、それまで大事に預かっておいで。やっぱ犬耳いいよね。強がりも可愛いし、心が折れたときどんな声で鳴くんだろっかね？」

好色そうな熱っぽい目でサイラルはシリアを見た。俺はびくつと震えた彼女を背中に隠す。シリアもとんだ変態に目を付けられたものだ。こいつと一時でも迷宮に潜って無事だったのは、本当に運が良かったのではないか？

それとも、何か手が出せない事情があったか……か。

「そのうち絶対手に入れるから……それじゃゼムドにもよろしく言っ
つといて。またね」

サイラルは馴れ馴れしい口調で言った後、倒れているザグを放つて去っていった。

俺達も用心しながら彼を見送った後、足早にその場を離れた。

こんな状況でシーリアを一人で歩かせるわけにはいかないので、ラキシスさんの家まで彼女を送る。家で休んでいってという彼女の言葉に俺は頷き、お言葉に甘えて少し休ませてもらっていた。

シーリアが入れてくれた果実水を飲みながら今日のことを考える。

あのサイラルという男の執着は相当強いもののように思えた。だが、ザグという男をけしけながら自分も自分は動かなかった。彼の言うとおり遊んでいるのだろうか。

そして、効果のわからない特殊スキルの『結界』……彼が武器を持ち、本気でシーリアを狙ってきた場合、守りきれるのか……？

「ケイト、殴られたところ痛くない？」

「大したことないよ。殴った拳の方が痛いくらい」

心配そうな顔をしているシーリアに笑いかける。実際には蹴られた場所がずきずき痛んでいるが、我慢できないほどではない。訓練ではこの程度よくあったことだ。

「……巻き込んだじゃってごめん」

「いいよ。この件は念のためラキシスさんに伝えておいてね」

果実水に口をつけながら、耳を寝かせてしゅんとしている彼女に伝えるべき言葉を探す。

「そんなことより、今日は楽しかったね」

「え、あ……うん。色んな店に入れたし、露店の食べ物は美味しかった。いつも見るだけだったから、ケイトを利用して……私なんかとで、ほ、本当に楽しかったの？」

俺は頷く。なんで彼女はそんなに自分に自信がないんだろう。強気そうなのにそうでもないし、怒りっぽいのに臆病。彼女のことをわからない。

付き合いが長くなればわかることなのかな。

「私、ケイトのこと大嫌いだったのよ。昨日まで……いつも比べられてる気がする」

「そうなんだ」

ラキシスさんがシリアに俺の話もしていたのかもしれない。
大好きな母親が贖罪にしたのが気に入らなかったのか。

「私より先に迷宮に潜ってるし、私、ケイトに負けたくなかったの」
「それで、無茶を？」

「うん。馬鹿みたいでしょ。それであんなやつに目を付けられて迷惑かけて」

泣き笑いのような顔でシーリアが力なく呟く。

「本当は怖くて今日も難癖つけてついてきてもらって。私の勝手に連れ回して……学院の他の人みたいに友達とあやって回るのにも慣れていたから……本当にごめん」

「シーリアは楽しかった？ あいつらに会うまで」

「うん、楽しかった」

「ならいいよ。俺も楽しかったし……なかなか、遊ぶ機会ってないしね」

俺とマイルスだけだと、迷宮に潜るばかりで殆ど出かけたりがない。あいつ、剣振るのが趣味みたいな感じで迷宮潜るのが娯楽のようだし。

たまに出かけても実用品を見るのが殆どで、今日のような買物は全く無い。まあ、男同士でアクセサリーを見てまわるといってもぞっとしないが。

「で、でも、私のせいであいつらに……」

「大丈夫、俺は……いや、俺達は負けやしないよ。そうだろ？」

自信なさげに困惑するシリアに苦笑して頭をわしゃわしゃ掻いて続ける。

「誰が相手でも絶対守るよ。仲間なんだから」

「ほんと、年下の癖に……ちょっと怖いし、頼りになるけど生意気ね……でも、ありがとう」

「どういたしまして」

ようやく、くすくすとシリアは明るい様子を取り戻して笑ってくれた。

第十四話 好事

仲間を守る———ということは、この城塞都市では言葉ほど簡単なものではない。

迷宮の中まで街の警察のような組織……衛視はいないからだ。冒険者の不文律として、当然に迷宮の中で人を襲うことは当然に禁止されているが、俺達も殺されかけたように何があるかわからない。

ある種の無法地帯になっており、迷宮内では怪物以上に他の冒険者に注意しなければならないくらいだ。そういう理由もあり、魔力石を集めるための狩りは上や下に向かう階段から離れた場所で行っている者が殆どだ。

地下に行けば地下に行く程、その手の心配は減るだろうが……。

なににせよシーリアを守るためには相手より強くなければならないだろう。

昨日出会ったサイラル……あいつにせめて対抗することが出来る強さを持つ必要がある。

「なんじゃ？ 拙僧の顔に何かついておるかの？」

俺達と共にゴブリンと戦ってくれたドワーフ、ゼムドはシーリアが俺達と固定で組むことを聞くと、笑って協力を申し出てくれた。今日も彼は重そうな鎧を身に纏い、彼の低い身長より長い鉄製の

棍を地面に付いてこちらを向き、人生経験を積んでいることを思わせる皺のある顔を少しだけ綻ばしている。

神官は神の様々な奇跡を限定的だが行使することが出来る。使用に条件があるらしく、可能な限りは使わないそうだが瞬間的に怪我を癒したり、毒を消したりすることが出来るらしい。

他にも危険な使い方があろうだが、彼自身忌避しているらしく教えてもらえなかった。

ゴブリンとの戦いを見る限り戦士としての腕も申し分ない。ただ……。

「サイラルについて何か知りませんか？」

「なるほど、奴に会ったか。不愉快じゃが知り合いだの。で、奴の何が知りたい？」

ゼムドはそういつて顔をしかめる。どうもいい関係ではなさそうか。特殊技能のことは聞けない。何故知っているのか理由を言えないからだ。

「彼はどれくらいの実力なんですか？」

「剣の腕はそれなりじゃ。だが、強い……レベルも高いしの。何故そんなことを聞く？」

ゼムドが不思議そうに首を傾げた。特殊技能のことは知らないのか、それとも答えてもらえないのか……俺も疑い深くなったと自嘲する。以前の自分なら彼も無条件に信じただろうに。

「シーリアが狙われているので」

「何っ！……なるほどのお……拙僧が側におるからには姫に手を出させせんよ。任せとくがいい。それが拙僧の運命じゃからの」

一瞬真剣な表情を見せた後、がっはつはと小さな体を震わせて豪快に笑う彼を見て、シーリアを守ろうと考えているのだけは信じてもいいかもしれないと俺は考えていた。

俺には人を見る目がないから正しいかはわからないが。

四人になったことにより、効率的に戦う事が出来るようになってきた俺達はゼムドの案内で迷宮の地下、奥深くへと潜ることに決めた。

地下に進めば進むほど敵が強くなり、稼ぎの効率も上がるからだ。もちろんその分、危険も増えていくのだが……早く強くなる必要がある。

何日も経つと闘う場所は地下二階、三階へと進み、新しい敵、新しい場所で戦闘を重ねていく。

戦闘ではミスとゼムドが前にでて、俺は彼らの援護。初めての時は魔法の加減がわからなかったシーリアも倒れないように自分の魔力を調整しながら戦えるようになっていった。

「ゼムド！ 左は任せるぜっ！」

「ふん、はよ片付けんとそっちのも倒すぞー！」

地下三階で新しく現れた六匹の二足歩行する蜥蜴、『リザード』と対峙しながらミスとゼムドが競うように武器を振るう。

この蜥蜴は動きは素早く、力も強いものの武器は持っていないため彼らの大きな武器なら戦いやすいようだ。通路での戦闘では俺は投擲用のダガーを準備しながら、他の方向から敵が来ないか警戒し、二人に近づく敵がいれば牽制の意味も兼ねて武器を投げる。

「ちつ。抜けてきたか」

「時間稼いでね。ケイト」

「了解。落ち着いて狙って大丈夫だよ。任せて」

リザードが一匹、ミスとゼムドの間を抜けてくる。人型の敵は本能だけでなく考えて動いてくるため、こうして後ろを狙ってくることも多い。慌てずに剣を抜いて、大げさに真横に振って敵を後ろに下がらせて俺も一匹を相手に対峙する。

その間にシーリアは集中して魔力を両手で持った杖を掲げて集め始める。専門家である彼女の魔法は時間は掛かるものの指先にしか魔力を集められない俺とは集まる魔力が違う。

迷宮の中が一時的に明るくなるほど彼女の杖に集まる魔力の光は強い。松明の光と薄暗い迷宮の光しかない中で銀色の髪が魔力の光を反射し、美しく輝く。

「……炎よ。矢となりて、我が敵を貫きなさい！」

シリアの魔力によって生み出された炎がごうつ！ と大きな音をたてながら俺達の頭を飛び越えて、奥のリザードへと飛んでいく。魔法が向かった三匹の内二匹が魔法を腕で弾いてあさつての方向に飛ばし、一匹だけ相手の胸に命中して大きく燃え盛る。リザードは奇声を上げながらどさっ！ と倒れた。

「ごめん、数削れなかった」

「十分じゃよ。さすがは姫っ！」

彼女の魔法は俺の使う自然の力を借りて行使する精霊魔法と違って、人が魔力を研究して作ってきたもので、魔法の箒もった道具を利用して決まった手順で魔力を制御することにより、様々な現象を起こすものだ。

精霊魔術を『自然魔術』、人が作った魔法を『論理魔術』と呼ぶこともある。論理魔術は俺の使うような魔法と違って、決まった効果しか発動しないが使った際の効果のぶれが少ないという特徴がある。

ゼムドがはしゃぐように声を上げてリザードの頭を重い鋼鉄の棍で叩き潰す。同時にミスも自分の前のリザードの攻撃に合わせて腹に蹴りを入れ、下がった相手を袈裟懸けに両手剣で切り払っていた。力業すぎる……まあ、向こうは二人に任せていいだろう。

「ケイト！ 援護は？」

「大丈夫。いけるよ……シリア。ありがとう」

近接戦闘の腕はどんどんミスに差をつけられている気がする…
…そう、苦笑いしながら自分の相手の出方を窺う。力の弱い俺は力
ウンターで急所を狙うのを得意にしている。

無機質な蜥蜴の顔を見ながらじりじりと距離を詰める。すると、

「キシヤアアアアアアアア！」

奇声を上げながら一気に掴みかかろうと飛び掛ってきた。早い…
…が、狙い通りだ。

声を気にせず、よけられないように冷静に首の根元に真っ直ぐに
剣を突き出す。リザードはしばらく暴れていたが、すぐに姿を消し
て魔力石に姿を変えた。

「はぁ。掴まれると危ないし緊張するね」

「ご苦労さま。よくあんなこと出来るわね」

溜息を吐くとシーリアが笑顔で俺を労ってくれた。初めはガチガ
チだった彼女も余裕を持つて周りを見ることが出来るようになって
いる。前は魔法の誤爆に随分怯えさせられたものだけでも。

「なんか言いたそうね？」

「な、なんでもないよ。向こうも終わったみたいだね」

強気な性格も徐々に戻ってきているようだ。まあ、その方が明る

くて元気そうでいいけど。魔力石を拾い終えたマイルスとゼムドに少しだけ休憩して次に向かおうと声を掛ける。

「ゼムドもマイルスもお疲れ様」

「なあに、こちらの相手くらいなら余裕じゃ。でかいのにも負けんよ」
「俺だってまだまだいけるぜ！」

張り合う二人にシーリアが口に手を軽く当ててくすくす小さく声を上げて笑う。そして、俺は元気な二人に苦笑しながら頭をわしゃわしゃとかく。

生死をくぐり抜け、共に食事を食べて日々の生を喜ぶ日々を過ごすことにより俺達四人はお互いを仲間と認識できるようになった。った。

その間、心配していたサイラルも現れず、迷宮の探索を行う安定した日々が二ヶ月程続き……その順調さに、かつての俺の不安は杞憂だったかと考え始めていた……それが上辺だけの平穏だったことをすぐに理解することになるが。

一枚の手紙と、一人の仲間の様子の变化……徐々に平穏は崩れていく。

俺達は誰も気づかぬ内に、大きな流れに巻き込まれようとしていた。

第十五話 理想

大きな変化の始まりは、故郷からの一枚の手紙……そして、ゼムドの態度がおかしくなったことからだった。

ゼムドは迷宮に潜っているときは普段通りに明るく振る舞っているが、時折ばーっと考え込むことが増えた。普段は俺が探知の能力を使って警戒しているし、戦闘中などは集中しているので問題は出てはいなかったが……。

「……ゼムド、大丈夫？」

「む？ ああ、むっ……全く問題ないっ！」

地下三階までと異なり、ざらざらの砂のような壁で構成された不思議な地下四階を歩きながらシーリアも魔法の威力を増幅させる杖を胸に抱えて心配そうにゼムドに声を掛けている。

彼女だけでなくマイルスも気がついていいるだろう。彼が何かに悩んでいることに。

「おい、ケイト。リーダーの仕事だぜ？」

「無茶を……いつの間に俺がリーダーに？ だけど放っておくわけにも……いけないかな」

頼むぜと、にやつとマイルスは笑って俺の背中をばしつと叩く。マイルスには向いてないのかもしれないが、ゼムドの悩みを理解する努力はして欲しい気はするのだが。

痛いわとマイルスの腕を殴り返しながら、慌ててシリアに弁解しているゼムドを俺達は眺めていた。

その日の探索を終えると、今日はマイルスにシリアを家まで送ってもらい、ゼムドをいつも食べている『雅の華亭』ではなく、初めて入る酒場へと飲みに誘う……まあ、俺は飲めないんだが……ゼムドは客の少ない薄暗い酒場で、苦笑いしていた。

「珍しいの。お主が拙僧だけを誘うなど。姫を誘えばよいものを……物好きじゃの」

「マイルスとシリアも心配してるからね。迷宮で気を抜かれると安全に関わる」

ゼムドは長い髭をいじりながら、むむ……と唸って答える。

「しつかり戦ってるつもりじゃがの」

「戦闘中はね。それ以外はもうあからさまに変だよ」

俺も頭をわしゃわしゃかいて苦笑する。ゼムドの麦酒と俺の果実水が店のマスターに用意され、俺とゼムドが向かい合うテーブルに置かれた。

く。
ゼムドは麦酒をグツと煽り、ふう……と息を吐いてジョッキを置

「……拙僧を疑っておるのか？」

「無条件で信用している……とは言わない。だけど力になりたい」

俺は他の仲間の命も……ある意味で預かっているのだから。
判断を誤れば……仲間全員が危険に陥る。それは避けなければなら
ない。

「正直じやの。それでいて、愚直……嘘でも信じているとも言え
ばいいものを。まあ、それでこそお主か。初めはただの子供かと思
うておったが……侮れん男じゃて」

「不器用だからね。俺は……ゼムド、何を悩んでいるんだ？」

「そうじやの……何から話せばよいのか……」

ゼムドは真っ直ぐにこちらを見つめる。俺は目を逸らさなかった。
薄暗いテーブルの炎がゆらゆらと静かに揺れ、しばらく沈黙の時間
が続く……やがて、一杯目の麦酒を飲み干したゼムドがゆっくりと
……重々しく口を開いた。

「ケイト殿……拙僧はの。叶えたい夢があるんじゃ」

「……夢？」

「そうじや。我が友と共に見た大きな夢……叶えるべき理想とい
うべきか」

遠い過去を見るように小さな蒼い瞳を細め、髭を触りながらゼムドは続ける。

「友が死に、娘が理想を継いだ。拙僧も協力した。だが、何の運命かの……娘が理想を貫くために皆の反対を押し切って助けた一人の男は……偶然にも理想を形にする力と知恵を持っておった。そら恐ろしくなるほどにな」

「理想……か」

俺はゼムドの話を黙って聞いていた。悩みの理由はこの話に隠されているだろうから。

ゼムドは話し続ける……嘆くように……苦しそうに。

「男はバラバラだった異種族を援助している者達をまとめあげた。そして、今も友の娘の理想を実現するため……いや、己の目的のために神輿として利用しておるのかもしれない。拙僧にはわからん……あの『呪い付き』を纏める主は拙僧程度では理解することはできないのだな……」

「『呪い付き』？」

「そうじゃ。不思議な力と知識を持った……虐げられた人間。それが『呪い付き』じゃ」

不思議な力……特殊技能か？

そしてそれを持つ者が持つ不思議な知識……思わず息が止まる。

まさか……いや、まだ材料が少ない。判断するには早い。慎重に調べなければ。

今はゼムドの話だ。俺は続きを促す。

「拙僧は今、そいつらと共に理想を現実とするための歯車として生きておる」

「ゼムドが悩んでるのはそのこと？」

「さよう」

二杯目が注がれたジョッキに目を向けながらゼムドは髭を触って考えこむように俯き、しばらく時間を置いてから苦々しい表情で頷いた。

「そうじゃの。理想と現実。頭の悪い拙僧には難しすぎるわい……自分は甘かったのかもしれん。現実には安物の麦酒よりも遥かに苦いわ……」

「……なるほど。現実には厳しい……か」

理想だけでは物事達成することは出来ない。現実にするには行動が必要になる……その行動がゼムドの性格では向いていないのなら、それは辛いことなのかもしれない。

そんな風に考えていると、ゼムドが今度は俺に疲れた表情で問いかけてきた。

「……お主はどうして冒険者をしておるのだ？」

「俺はただこの広い世界を見たい。それだけだよ。理想も何もない」

薄暗い店内で甘い果実水に口を付けて俺は正直に即答した。

「それもまた良いの。羨ましいわ……理想に縛られず、権力に媚びず、差別もしない……自由な旅人……といったところか。お主の性格じゃと女には縛られるかもしれないが」

「俺は英雄になれる器じゃないしね。身の回りの大事な人しか守れないよ」

そう冗談めかして笑う。ゼムドも少しだけ顔を綻ばせて笑った。ひとしきり笑った後、がたと立ち上がるとゴッ！とテーブルに擦りつけるように頭を下げた。

「ケイト殿。シーリア殿を守ってやってくれ。頼む……頼むっ！」
「大丈夫、絶対守るよ」

ゼムドの話からなんとなく想像は付いていた。今、彼は彼が所属する組織と俺達の間で何らかの事情で板挟みになったために悩んでいるのだろう。

大方あの『呪い付き』のサイラルが絡んでいるに違いない……話の内容、敵視している存在、特殊な力……奴しか俺の頭には思い浮かばない。ゼムドは俺の特殊技能を知らないから……自分がほぼ相手を断定していることには気づいていないはずだ。

「ありがたい……情けないが……拙僧もいつまで守れるかわからんだ」

「どういうことだ？」

「拙僧の立場は不自由なものでな。全てを話すことはできん。すまぬ」

ゼムドの真剣な表情を見て話は聞けないと判断した俺は頭をわしやわしかいて奥歯を食いしばり、溜息を一つ吐いて頷いた。

「ところでゼムド達の理想ってどんなのなんだ？」

「拙僧らの理想は、差別のない世界を作ることじゃ。拙僧らのような異種族だけでなく人間も含めての……遠い夢じゃな。年を取るほど遠くなるわ」

苦笑いしながらジョッキの中の麦酒を飲み干すと、ゼムドは帰ることを俺に告げ話を聞いてくれた礼だと二人分のお金を支払って店を出て行く。

俺が飲んでいる甘いはずの果実酒はどことなく苦く感じた。

晴れない気分のまま『雅な華亭』に戻り部屋で就寝する準備をしていると、マイルスが俺の部屋の方へ訪ねてきた。相当気になっていたのだろう。ガタツと勢い良く扉を開けて中に入ってくる。

「ケイト！ どうだった？」

「ごめん、駄目だったよ。どう言えばいいのかわからなかった」

首を横に振ってマイルスに答え、ゼムドと組むことのできる時間は残り少ないかもしれないと伝えた。組織云々の話は彼にはしなかった。知ることは必ずしもいいとは言えない。ゼムドが積極的に敵に回る心配はない……彼にとってはそれだけでいいはずだ。

「そうか、残念だな……強いし面白いおっさんだったのに」

「ゼムドの言う所の運命があるならまだまだ大丈夫さ」

しょげているマイルスの肩を叩いて笑ってそういうと、彼もそうだなと頷いて納得してくれたようだ。

そしてふと、マイルスの手を見ると一枚の手紙が握られていた。

「マイルス。それは？」

「ああ、クルスからだよ……今日来てたんだ。お前宛にな」

マイルスは胡坐をかいて座り、にやにや笑って興味深そうにこちらを覗いている。

「部屋帰れよ。マイルス」

「まあ、いいじゃないか。中身聞かせろよ」

苦笑して、帰りそうにないマイルスを放置して手紙を読み進め……
その内容に驚いて手紙を落としそうになってしまい、慌てて空中で
手紙を掴み直す。

「……………どうした？」

「明後日クルスが……………来る。詳しく書いてないが俺達に直接伝える
ことがあるらしい」

「本当かつ！　って俺もかよ！」

毎回クルスの手紙は長くは書かれていないが……………彼女の意図が分
からず、俺とマイルスは手紙を二人で何度も読みながら困惑していた。

意外と早い再会の時は、心の準備も出来ないままに間近に迫って
いた。

外伝 プロローグ

「クルスさん！ 俺とつきあってくれ！」

「いや」

森での猟から帰る道で待っていた果実園を持っている同じ歳の農家の息子……カランが、私の前でがっくりと膝を付いている。大袈裟。何回目かな……こうして彼が声を掛けてくるのは。

彼だけではない。ケイト達がいなくなってからというものの村の男達から声を掛けられるようになった。エリーがいうには、弟がいなくなったからチャンスだと思ってるんじゃない？ ということらしいけれど、何故私なんだろう。

女性らしいことは何も出来ない私で彼等は本当にいいのかな？と思う。第一私のことをよく知らないのでは？ ……不思議。

「どうすれば俺を認めてくれる！」

今日は立ち直りが早い。彼は顔を上げてきつ！ と真剣な目付きでこちらを見た。いつもだと、そのまま立ち直れずに一週間は姿を消すのに。

カランは背も高いしリイナから聞いた話では顔も良く、話も面白

いらしい。尚更私を選ぶ意味がわからない。

まあ、リイナは大袈裟に言う事が多いから話半分には聞いているけど。

彼女の話の終わりには絶対にマイスには適わないけど……という惚気が入るし、マイスが格好いいといたいのがための踏み台として、良いように言っている可能性は高い。

「……他の子の方がいいよ？」

彼の将来のためにも心の底からそう伝える。

だが、彼は顔を真っ赤に染め、茶色っぽい眼を見開いてこちらの瞳をまっすぐに見て、ぐっところちらに身を乗り出すように近づく。

そして、手を取ろうとして……私が回避したために空に手を泳がせて、一瞬焦りを見せたが気を取り直したように私を見る。

「クルスさんじゃないと駄目なんだよ！」

はぁ……と、心の中で息を吐く。声を掛けてくる男の中でも彼は一番しぶとい。

それならどうしてケイトがいる時は何もしなかったのか……そう考えてしまうのは間違っているのかな。そう思いつつも、こういうときにはエリーの顔を思い浮かべてしまう。

ケイトの姉である……そして友人でもあるエリーは普通なら有り

得ない年上の男を子供のころに好きになり、最近遂に結ばれた。彼女なら仮にジンおじさんに恋人がいても……絶対に諦めなかったはず……間違いなく。

そんなエリーは私の憧れでもある。

……私と違って女の子らしいし。

そこまで考えて、カランに諦めてもらえそうな言い訳を私は閃いた。これなら間違いなく彼も諦めてくれるに違いない。どう考えても不可能だからだ。

一つ頷いて微笑むと私は近づいてきたカランの肩を押し返し、彼に告げた。

「付き合ってもいい」

「わ、笑った……って！ ほ、本当か！ やった！」

「ただし条件がある。私を倒す事ができたら……ね」

子供っぽい顔を紅潮させて喜んでいる彼には可哀想だけれども、私はまだ答えを見つけていない。曖昧なまま彼と付き合うというのも……彼が本気であればあるほど失礼だと思う。

カランは私の顔を見てしばらくぼかんとしていたけど、ぐっと顔を引き締めると拳を握った……逃げ帰ると思ったけど……やる気かな。

「いつでも……不意打ちでもいいよ？」

「正面から倒してみせる！ そして、絶対俺に惚れさせてみせるっ

「……そういの、嫌いじゃない」

十四歳にしては背が高く、身体も大きいカランは覚悟を決めたのか勢いよく殴りかかってきた……けど、返り討ちにするのに結局十五秒もかからなかった。

収穫祭の後、ケイト達は冒険者となるためにクルト村を去ってしまった。

ケイトもマイスもホルスもヘインもない……ぽっかりと胸に穴が開いたような……そんな寂しさはすぐに埋まると思っていたけれども、日々寂しさは増していく。

友人のエリーやリイナはよくしてくれているけど、彼女達のように女性らしいことは私には出来ない。二人は私も料理とか裁縫とか出来た方がいいと教えてくれるのだけれど……悪いけど退屈。

秋のうちは良かった。猟をすることで山を駆けて走り、森の中を動物を追いかけて走り回ることと紛らわすこともできた。

今は冬……マリアの訓練以外することがない。

一人で城塞都市の方向を向き、ケイトからたまに来る手紙を読んで小さく溜息を吐くことが多くなった。彼らは楽しそう……ずるい。

「……獣人のシーリア……名前から考えて女の子」

ケイトの心がすぐに変わるとは思わないけど、自分より近いところに女の子がいると思うとやっぱり不安を感じてしまう。彼の周りには多くの人が集まる。集まった人の中には私よりも好きになれる子がいるかもしれない。

今回の手紙だと学院まで案内してもらっただけで嫌われたって書いてるけど、何がきっかけでケイトを気に入るかはわからない。彼女だけでなく街の他の女の子も。
大きな街の子だし、きっと女の子らしい可愛い子が多いに違いない。

「ほんとずるい」

手紙を綺麗に畳んで皺にならないように気を付け、服の中に入れて立ち上がりズボンについた草を払う。見えるわけもないのに目を細めて私は城塞都市の方角を目を細めて見ていた。

数分だろうか、物思いに耽っていたのは……それを止めたのは背後から聴こえてきた最近聞き慣れてきた声。

「見つけたぞっ……クルスさんっ！ 今日こそ勝ってみせる！」

「……今日は手加減出来ない」

「え……？」

ぼろぼろで蹲っている懲りないカランの側でしゃがんで生きているか……いや、意識があるかを確認し、さすがにやりすぎたのでこめんと謝る。

「だ、大丈夫だ……こちらこそ悪い」

「何が？」

何故彼が謝るのか不思議なので聞くと、俯向けに倒れていたカランが仰向けになって空を見ながら右手で顔を抑え、

「手紙を読んでたし帰ろうと思ってたんだが、辛そうだったからつい」

「普通に声を掛ければいいのに」

「あ……それもそうだ」

はっはっはとカランが楽しそうに笑った。ぼこぼこにされたのに何が楽しいのだろう。

行くね……と声を掛けると彼は明るく大きく、またな！と声を上げた。

カランと『戦って勝てたら付き合う』と約束してからというものでどこをどう伝わったからか私に挑戦してくる男が増えた。結婚している者や恋人がいる者が混ざっているのは腕試しや度胸試しの意味も不本意ながら混ざっているのかもしれない。

流石に村中の男達を殴るのはまずいと師匠でもあるケイトの母親、マリアに相談したものの……修行中の鬼神のような彼女とは別人の料理中の穏やかな彼女は、

「マリア。面倒なことになった」

「ああ、貴女に勝てたら付き合えるってあれね。ぷっ！ ああごめんごめん……いいじゃない。男は強くなkachane。これを機会に頑張って欲しいわ」

「……本当に困ってる」

「自分の言葉には責任を持たないと。あ、息子も貴女に勝てるかしら……」

あらあら困ったわと頬に手を当てて笑って取り合ってくれなかった。大方、それも修行だと考えているのではないかと私は内心溜息を吐いてそう思った。

日常は変わらないようできて、徐々に変わっていく。

例えケイトがいなくなっても……そんな当たり前のことを強く感じる。彼らはいなくなり、私は他の村の人と以前より不本意ながら関わるようになった。

そして最大の変化は……

「おかえりなさい。クルス」

「おう、クルスおかえりっ！」

家に帰ると待っているお義父さんとお母さんとの間に生まれた新しい命。

お母さんの腕の中で眠る私の可愛い妹の存在。

お義父さんとお母さんの結婚には私は反対しなかった。いや、むしろこちらから背中を押して二人を結婚させた……だから二人の關係は認めている……はず。

なのに、本当に幸せそうな三人を見ると釈然としない思いに駆られる。

お父さんとお母さんは愛し合っていたから私がいる。だけど、今はお義父さんとお母さんが愛し合っているから妹……セレナがいる。

それが、自分とケイトの未来を暗示しているかのような思いを抱いてしまう。

焦燥感……それがこの退屈でゆっくりと変化していく生活で私が一番持て余している感情だった。

ケイトから二枚目の手紙が届いた。手紙には一月に一度手紙を送ると書かれている。

私からは正直に楽しそうだと書いたのだけど、ケイトからの手紙によると楽しいばかりではないようで、苦勞もしているらしい。

子供だから足元を見られてしまうんだとか。私がいれば相手にそんな態度、絶対にさせないのに……力尽くでも。

とりあえず、今はマイルスと二人で迷宮に入っているらしくほっと安心する。

ケイトの手紙と一緒に気に食わないエルフからも手紙が届いていた。

あのラキシスとかいうエルフとの手紙のやり取りは昔から続いている。私は何故嫌いな相手と文通しているのかな……と、思わないでもないが、彼女も私の重要な情報源だ。

川辺で水を汲むための桶を置いて手紙を広げる。早朝でかなり寒いけど走ってきたこともあり、身体はまだ火照っていた。

ケイトからの手紙と違ってゆっくり読みたいものでもないし、いつも身体が冷えるまでの短い時間で読んでいる。後は、忙しい用事の合間とか。

「彼のことは私に任せて貴女は村に引き籠ってなさい……すぐに忘れさせてあげるからご安心を……」あの女………」

陰湿な性格に似合わない可愛こぶった丸っこい字で、彼の現在の生活が細かく書かれている。これを書きながらあのエルフが高笑いしていると思うと、怒りが込み上げて手紙を破り捨てようと思ったが、ぎりぎりで堪えて畳んで服の中に直した。

何歳か知らないが、いつもながら大人気のないエルフだと思う。お義父さんは『氷の魔女』とか言っていたがたぶん中身は子供に違いない。キスしてもらったって書いたときは荒っぽい字で純真な彼をどんな悪魔のような手を使って誘惑したの？ とか、あれは面白かった。

エルフは年をとらないらしいから、きっと中身だけじゃなくて外見も子供みたいな女だろうし……彼女に関しては私はあんまり心配していなかった。

村にも井戸があるのに離れた川まで走っているのは鍛えるのと……一人になるため。

川で水を汲み、帰りは歩く。水は料理と……そして、私が身体を拭くのに使う。

秋はここで拭いていたけど、流石に今の季節では寒くて風があるから厳しいので家に帰ってから体を拭いている。

私は習慣になっているけど、話に聞いたところ私と同じくらい体を毎日拭いている人は友人である二人くらいしかない。原因はケイトにある。

彼は綺麗好きで毎日きちつと体を拭いていて……清潔でいい匂いがした。私はそれが普通なのだと思うって真似をしていたのだけど……その後エリーが私達の肌を見て、何か思うところがあつたのか彼女も気を付けるようになった……彼女の場合はジンさんのためかな。

そして、リイナもエリーから話を聞いて清潔にするようになったらしい。好きな人を手に入れるための執念を私は二人から感じていた。

帰り道にいつものように現れたカランを殴って帰り、身体を綺麗に拭いて朝食を食べ、鍛錬のためにケイトの家である村長宅を訪ねる。

すると今日はドアの前に高価そうな仕立ての服を身につけ、剣を持った中肉中背の金髪の青年が立っていた。

ノックしようとして緊張しているのか太い眉を寄せ、口をへの字に曲げていた。

顔立ちは精悍で、背筋が伸びており男らしい。村の人じゃない。二十代前半くらいだろうか。体は鍛えているのか引き締まっている。

彼が立っているのは入れないので声を掛けることにした。男の人達と多少は話（？）をするようになり、慣れたお陰かちゃんと声は出た。

「こんにちは」

「っ！ し、失礼。貴女は村長のご令嬢かな？」

「ご令嬢……？ 自分に似合わない形容を聞いて、首を傾げてしま
う。

「私はこの家の夫人に色々と教えていただいている者……です。貴
方は？」

「私は新しくこの付近の徴税官に任命されたグルード・ヘイル・ク
ラインだ。よろしく頼む」

青年は多分、礼儀作法なのか綺麗に頭を下げた。確かヘイル……
というのは下級貴族出身の騎士の人が持つ称号だと聞いたような気が
する。

「騎士様ですか」

「ああ。徴税官としてセイ村に赴任することになったので村長に挨拶
をと」

セイ村はこの辺りで一番大きな村で、貴族の役人が住むための邸
宅が建てられている。代々付近一帯の徴税官はその家に住んでいる
し、彼もそこに住んで仕事を行うのだろう。

私の無愛想な受け答えにも彼は怒る風もなく、微笑んで答えてい
た。前の徴税官はもっと堅い高圧的な人だったけど……今回の人は
そうでもなさそう。村にとってはいいことかもしれない。

「失礼しました。グルード……様……少々お待ちを」
「有難う」

彼の青い眼を見ながら丁寧さを意識して話す。敬語あつてなのか……と、悩みながらモルト村長を呼ぶと連絡が先に入っていたのか、応対するために外へと出て行く。

任せて大丈夫そうなので、私はマリアの所へと向かう……が、彼女も新しい徴税官に挨拶するために、今日は一人で素振りをしておいて欲しいと言われた。

仕方がないとはいえ、これは退屈である。

一時間くらいマリアとの戦いを想像しながら素振りをしていると、応対が終わったらしくマリアが私を呼びに来た。普段着のまま……今日は鍛錬無しのようだ。

マリアは珍しく困ったような表情で、

「ごめんなさい。クルスお願いがあるのだけど」

「……何？」

「グルード様に村を案内してもらえないかしら」

と、頼んできた。それは本来モルト村長の仕事ではないだろうか。私には何もわからないのだけれど。マリアを見ると苦笑いしていた。

「先入観無しに村の様子を一度見たいそうなの」

「……構わない。ただ、私は礼儀を知らない」

問題はそこ。それを理由に難癖つけられると村全体が困る。それは望まない。

「クルス。貴女、女性としての礼儀作法とか教養を私に学んできると思われているわよ？」

「それは……困る」

どうも勘違いされてしまったらしい。

どうしようか悩んでいるとマリアが私の肩をぽんと叩いて真剣な表情で、

「多分……あまり喋らなければ大丈夫。絶対……絶対に殴っては駄目よ？」

「私はマリアより手は早くない」

私が好きで殴っていると思うているんだろうか……マリアは。本気で心配している彼女に私はちょっとだけむっとした。

私はマリアに正式に紹介をしてもらって、金髪の若い徴税官、グールドを案内することになった。モルト村長の顔をみるに結構疲れるやり取りをしたらしい。

厳しい取立てをしそうな人なのだろうか。

「グールド……様、西側が畑。果樹園はあっち……あちらです」
「なるほど……管理はしっかりされているようだ」

グールドは難しい顔をしながら農地を見て、分厚いノートに何かを細かく書いている。

私は案内するだけで、何も喋らずに言われたところを見せていた。彼は一通り回ると、疲れたのか首を回して、腰のポーチにノートとペンを直し、私の方を厳しい表情で見た。

「この村は家畜が少ない。畑と果樹園以外に産物が殆どないが……不作はどうやって乗り切ったのか……君は知っているか？」
「薬草を売り、猟をして保存食を作った……作りました？」
「ふむ……ああ、無理に敬語でなくてもいい」

彼は顎に手を当てて考え込んでいた。何か敬語以外でおかしいところがあったかな？

しばらく悩んでいたようだけど、彼は苦笑いして言った。

「いや、すまない。その人に会わせてくれないか？」
「複数人いる。そのうちの半分は村にもういない」
「一人でいい。確認したいだけだから」

どうしてそんなに難しい顔をして言うのだろう。ケイトならこう

いう顔の意味がわかるのかな……私にはわからない。首を傾げて、でも正直に言うことにした。

「私」

「……は？」

「そのうちの一人は私」

何故かグールドはぽかんとしていた。獵をするくらいおかしいことではないと思うのだけど。薬草もそこらに生えているから別に特別じゃないし。何か変？　と思いながら真面目そうな彼の顔を見つめる。

彼は失礼といって私の腕をとって手のひらを見た。私の手はゴツゴツしててあまり綺麗じゃないからやめてほしいのだけど……大事なことみたいだから我慢する。

「……すまない、邪推だった。疑っていた……詫びる」

「よくわからないことで謝られると……困る」

「税の過少申告をしているのだと考えていたのだ」

堅物のモルト村長がそんなことするとは思えないけど、初めてだし仕方ないのかな。

「わかってくれてるなら別にいい」

「そうか。よかった……それにしても意外だな。君のような美しい

少女が……」

……この人は何を言っているんだろう。
あまりにも不可解で少しだけ眉をひそめる。

「私は女らしくないから」

「それは違う。騎士である私相手に臆さず話せる芯の強い凛とした
美しさがある」

そういつてグルードは朗らかに笑った。仕事中の気難しそうな顔
と違って、明るい惹きつけられるような笑みだった。だが、この人
も私を知らない。

「買い被り。私は……別に強くないから」
「そうか」

少し気まずい雰囲気になってしまったけど、案内も終えたので村
長宅に戻ろうとした。仕事も果たせだし、村の人間ではないからも
う会うこともない。問題はない。

そう思っただけで忘れることにして歩いていたのだが、前方から最近さ
らに立ち直りが早くなってきた同世代の背が高い少年……カランが
走ってきた。遠くから私を見つけたのだろう。

「クルス！ 勝負だ！」

「カラン……私は忙しい……グールド様、三十秒……いえ五秒待って下さい」

困った……周りが見えていない。グールドが見ているが仕方がない。不意打ちでもいいと言ったのは私だから。彼の攻撃に合わせて一撃で仕留める。

……そう思ったのだが、カランの拳を私の前に出たグールドが受け止めた。

彼はカランを睨みつけ、大声で怒鳴る。

「この馬鹿者がっ！ 婦女子を傷付けようとするとは何事か……恥を知れ！」

「あ……」

止めるまもなく、グールドがカランを殴り飛ばした。

中々の強さ……流石は騎士。鍛えているのは飾りではないみたい。グールドは男らしい太い眉をよせて、座り込んでいるカランを睨みつけて大声で、

「少年っ……女性に男が守るものなのだ。男の力は弱き者を守るためにあると知れっ！」

……この人は何を言っているんだろうか。

客人在るのに挑んできたカランも悪いけど、これ以上意味不明な理由で殴られるのは殴られ慣れていないカランでも可哀想。止めよ

う。

「グルード様……やめて。私の責任」

「クルス嬢……のせい？」

「私と付き合いたければ、私をどんな手を使ってでも倒せと言った」

啞然としているグルードに続ける。

「卑怯なことをせず、真正面から負けても負けても向かってくる力
ランは立派」

「そ、そうか……しかし……」

「戦いに男も女もない。カランは恥知らずじゃない」

そう、怪物……あのゴブリンのような敵は女だからと容赦はしない。

私は戦いになれば誰にも負けるつもりはない。そして、ケイトをあらゆる敵から絶対を守る……そのための強さを得るために、鍛えている。

グルードには悪いけれど守るといふのは余計なお世話。私が守るのだから。

「カラン……大丈夫？」

「う……クルス……うう……やべ、泣きそう」

「でも、もう少し強くないと。弱すぎ」

カランの側に座って声を掛けると、泣きそうになりながら器用な顔で笑っていた。

私は立ち上がったってグルードに頭を下げ、行こうと促した……が、グルードは留まってカランに頭を下げた。

「事情も知らずに失礼なことを言ってしまったようだな。すまない、少年」

「あ、いえ、こちらこそ……って、うええええ貴族様!？」

すみません！ すみませんと頭を下げるカランと、鷹揚に気にすることはないと難しそうな顔で言っているグルードがなんだかおかしくて、私は少しだけ微笑んだ。

怒るかと思っただけ、意外と心が広い人なのかもしれない。

「……あ」

「む……」

二人が私を驚いて見る……なんだろう。

よくわからないけど、二人が和解してくれてよかった。

この日以来グルードはたまにクルト村に馬に乗って遊びに来るようになった。村に來ると特に何をするでもなくカランを鍛えたり、

私の手が空いてるときは話をしている。

「グールド様。仕事は大丈夫？」

「心配無い。休めるように片付けている。それから……グールドでいい」

金色の髪を触り、照れくさそうに彼は笑った。

彼は笑うとちょっとやんちゃな子供っぽい。だから普段顔をしかめてるのかな。

新しい日常……新しい出会い……私の日常はゆっくりとその姿を変えていた。

不快ではない……だからこそ焦燥感が募っていく。変わることに恐怖がある。

この焦燥感に押しつぶされる前に答えを探そう……私はそう心に誓った。

だが、日常というものが意外と脆いものであるということに……この時……私は気が付いていなかった。

外伝 二話 二枚目の手紙

ケイトからまた手紙が届いた。また一月経ったらしい。

今回は手紙だけでなく、何か紙に包まれた物が入っていた……何だろう。

夕食を食べ終えた後、お義父さんにランプを借りて机に座りながら私は手紙を読んでいた。

前回私はみんな元気でやってるということ、変な知り合いが出来たということ、私に勝てたら付き合うつて言ったら毎日誰かが挑んでくるようになったことをケイトに書いた。

前二つに関しては喜んでくれて最後の部分はそんな選び方ではなく、本当に好きな人を選ぶようにと書いていた……ようするに選ばなくていいということかな。
好きな人は村にいないし。

読み進めると、どうやら新しい仲間が出来たらしい。ドワーフ……背が低くいけどがちりしていて力も強い種族……後、職人も多い……だっけ？ ゼムドと言う名前。

そしてもう一人は狼の獣人。魔法使い。

「シéria……か」

どんな女なんだろう。学院に通っているらしいし、ヘインのように物静かな賢い人？

静かに本を読む感じの……ケイトも頭良いし……お似合いかもしれない。

でも、嫌われてるって書いてたし大丈夫……。

取り出した紙に包まれた何かに目を向ける。これはケイトが私のために職人達の店で探してくれたプレゼントらしい。

少しどきどきしながら、ゆっくりと……中身を傷つけないように慎重に紙を広げていく。

「これは……青い鳥……私に似合うのかな」

ケイトが私に似合うと書いているから、きっと似合うに違いない。紙の中から出てきたのは小さな青い鳥の硝子細工が付いた首飾りだった。慌てて落とさないようにもう一度紙に包み直して、机の奥の方に置く。

締め付けられるような嬉しさを感じて思わず胸を抑える。そして手紙の続きを読もうとして……文字が滲んでいることに気付いた。

「あ……」

誰も見ていないのに気恥ずかしくて慌てて涙を拭いた。子供じゃないのに。

いい気分のままエルフのラキシスから届いた手紙も読む。普段は時間を掛けるのが勿体なくて、急いで読んでいるけど今日は気分いいし構わない。

「……………」

手紙を読むと冒険の初報酬でプレゼント貰ったとか、自分に似て賢いとか、どうでもいい養女の自慢が手紙いっぱい書かれていて……最後に養女がケイトと朝帰りしたと書いていた。

娘の成長を大人として余裕を持って認めて上げたとか……きっと……いや絶対取り乱して頭の悪いことを言ったに違いない。

しかし、朝帰りってなんだろう。

翌日、鍛錬のない日だったので早速首飾りを身につけてエリーの住んでいる薬師の家を訪ねる。今日はリイナとエリーから料理を教えてもらう約束になっていた。

エリーの夫であるジンおじさんの家は独特の薬草の匂いが染み付いていて慣れてない人には辛いらしいけど、私はなんだか森の中にいるような気分で落ち着く。

エリーは急な仕事で少し席を外している。ただ出かける前に私と対面に座っているリイナに暖かい薬草茶を出してくれた。苦いけど香りは良い。身体が温まって落ち着く効果があるらしい。

「リイナ……元氣ない。ミス手紙書かなかった？」

「えっ！ そんなことないない！ ちゃんと届いたし元氣だよ？」

身長が私の肩より少し高いくらいで止まってしまったリイナは年上だけど可愛い女の子で、いつも明るい感じがするのだけど今日は何だか元氣がない。

恋人のミスからは手紙がちゃんと着ているようだし……先月は手紙が着た翌日は一日にやにやしてたのに。何か悪いこと書いてたのかな。

「そ、それよりその首飾り可愛いね」

「うん。ケイトが送ってくれた」

ちゃんと似合っているらしく、ほっとする。

話を聞くとミスもリイナにプレゼントを送ったらしい。

「ミスからのプレゼントは付けないの？」

「うん……大事に取ってる。私どんくさいから、落としたくないし……でもでも！ 凄い嬉しかった。絶対大切にするっ！」

この話のときは余程嬉しかったのか、いつものような明るい笑顔で惚気けていた。だけど、やっぱり何かが違う……何かに悩んでいる。そう思った。

「リイナ。悩みがあつたら聞く」

「ありがとうクルス……でも、まだはつきりしたわけじゃないから」

珍しい真剣な表情でリイナは私にそういうと薬草茶にゆつくり口を付け、窓の方を見て小さく息を吐いた。私も残っている薬草茶に口を付け、そんな……なんとなく、不安そうな……それでいてうれしそうにも見える彼女の表情を眺めていた。

エリーの料理教室がなくなってしまったので、リイナと私で持ち運び出来る簡単な料理を作ることにした。リイナはエリーに比べるとまだまだ味は落ちるけど、随分上達している。

私にはどうもこの手の女性らしい技術には才能がない上、やる気もないので一向に上手いいかない。リイナの努力と向上心は本当に凄い。

エリーにリイナは薬師としての相談があるらしく、ちょっと疎外感を感じるけど私は箱に料理を詰めてもらい、外を散歩することにした。今日は冬なのにいい天気で暖かいし。

薬師の家から村の広場に向かって歩いていると、西の方から馬が走ってきているのが見えた。多分グールドだろう。馬は村に近づくと速度を落とし、私の前で止まった。

「こんにちは、グールド。用事？」

「ああ、こんにちは……今日は休暇だ。館でゆっくり過ごすのは性にあわんなのでな」

そのまま一緒に村長宅まで歩き、馬を手早く杭に繋げると私はまた散歩を続けようとした……が、グルードから声が掛かった。

「その箱は？」

「お弁当作った。食べる？」

「おお！ ありがたい。何も食べてなかったのだ」

結構な量を作ったので、大丈夫のはず。私は少なくともいいし。そう思っただけでグルードは笑顔で大きく頷いた。

外を散歩するときは訓練が終わった後、今は村にいない仲間達といつも座って話をしてた坂の芝生に座って私は食べている。そこまで歩いている途中に朝の農作業を終えたカランも自分の弁当を持って合流し、三人で食べることになった。

グルードはカランのことも気に入ったようで、前にいい兵士になれる素質があると褒めて……多分褒めていたんだと思う。だから彼と一緒に食べるのを歓迎していた。

「む、なかなか美味いな」

「お世辞はいい。私はこういうのは下手」

パンに炒めて味付けした肉と野菜を挟んだものを、右に座ったグルードは勢い良く食べている。

私は小さめを選び、遠くを見ながらゆつくりと口に運んだ。
左に座ったカランは黙って自分の分を食べていたけど、ふと思い出したように言った。

「そっぴやさ、クルス。そんな首飾り昨日までしてたっけ？」
「昨日届いた……ケイトから」

パンを置き、綺麗に指を布で拭いてから大切に青い鳥を軽く摘む。
明るい日差しが硝子細工に当たって淡く輝いている。うん、綺麗。
私を見ていた二人が変な顔をする。なんだろ。

「クルス。ケイトとは誰かな？」
「私の大事な人」

何故かグルードがうつと唸る。カランの方はちよつと不機嫌そうに弁当を一心不乱に食べていたけど、それをすぐに食べ終えて立ち上がる。

「村を捨てて、クルスを置いていったやつだ。許せねえ！」
「カラン。落ち着きたまえ……落ち着いて教えてくれないか？」

カランは座り直すと大きく溜息を付いて話し始めた。エリーとリイナ以外から聞くケイトの姿は初めてなので少し楽しみ。私は食事を再開しながら黙って聞くことにした。

「あいつは……天才って言われてました。頭もいいし、強いし、努力もしてる……人間よりでかいゴブリンを倒したり勇気もある。不作のときは村のために獵をしたり、大人も顔負けのやつで……同じ歳のやつらはいいつを嫉妬と憧れで見てた」

「ふむ……そんな少年がいたのか」

重々しくグルードが頷き、私もこくこくと首を縦に動かして肯定する。

「だけど、あいつは村を捨てたんだ。何考えてるのかわかんねえよ」

「捨てたんじゃない。世界を見に行ったの」

項垂れているカランに訂正をいれる。グルードは腕を組んでうむと唸り、

「若さからくる無鉄砲さか……単に現実の厳しさを知らずに冒険に夢を見ただけではないか？」

「ケイトは大人。全部知ってた……軽薄な人ではない」

グルードがカランを見る。彼は肯定するように頷いた。だけど、カランは私の方を怒ったように向いて続ける。

「でもなっ！ あいつはもう帰って来ない！ 村の外を選んじまっ
たんだ……あいつなら……あいつならと思っただけなのに……あ
んな奴に任せられない！」

「カラン。私も答えが出たら旅に出るつもり。他を探したほうがいい」

彼は嫌いではないし、話していると穏やかな気分になる。不思議な感じ。

「だけど、いつまでも私に関わっては他の出会いを見つけないことが出来なくなる。」

「クルス。答えとは？」

難しい顔で太い腕を組んだままグルードが私に聞いてきた。

「ケイトと約束した。お互い自分の気持ちに答えを出したらまた会おうって」

「なるほど、答えはまだ出ていないわけか」

そう、答えは出ていない……そもそも、答えとは何なのだろう。ケイトが好きというだけでは足りないのかな。わからない。

「答えてなんだろう。悩んでいる」

「私見でいいかな？ ケイトとやらは真面目な人間かい？」

グールドは私やカランよりも歳上だ。そして、ケイトと同じ男性。何か参考になるようなことがわかるかもしれない。私は彼に頷く。

「恐らく彼は君がまだ子供だから恋をしていないと感じていたのではないだろうか」

「子供？」

「私は彼を知らないから推測だがね。子供の頃から一緒に過ごしたんだろうし、彼自身も恋なのかそうでないのか自信がなかったのかもしれない。二人ともそんな曖昧な考えで命の危険がある旅に連れたいけない……とね。男女関係は旅では大変なものなんだ」

なるほど……と、私は思った。今までミス達くらいしか同世代の男性を知らないから……ケイトは私を心配していたのかな。大人だから苦労するのわかっていたから……。

「答えというのは君自身の覚悟と本当にどうしたいのかという意思かもな」

「ありがとう。グールド。参考になった」

「いやいや、いいさ」

面白そうにグールドは大きく笑った。何が面白かったのだろう。私もカランもぽかんとして笑い続けているグールドを見ている。

「いや、申し訳ない。今ならば私にもカランにもチャンスがあると思っただ」

「どういうことですか？ グールド様」

「カラン……つまりだ。クルスの答え……気持ちはこちらに向けば彼女が村を出る必要はなからうということだ。ケイトとやら自身が言っているように恋人同士でもない。遠慮いらんだらう」

グルードの言っている意味はわからないけど、何と無く面倒になりそうな感じがすることだけはわかった。彼は立ち上がり、私の手を取って口付けた。

「クルス。私と結婚して欲しい」

本気の眼だ。頭が真っ白になった……嬉しいとかよりも困惑で。何を考えているんだらう。私は眉を寄せて正直に今の気持ちを口にした。

「……正気？」

「正気だ。私は騎士なのでカランのように殴り合いをする気はないが。君の心が欲しい。強制したり急かしはしないが、考えて欲しい」
「ちょ、ちょっと待ってください。グルード様！」

困惑している私を置いて、カランが立ち上がって叫ぶ。

「なんだ、カラン」

「例えグールド様でも……もう誰にもクルスは渡さないっ!」

「うむ、男らしくて良い。私が心を得る前に勝つことだな。まずは見学させてもらおう」

はぁ……と、私は大きく溜息を吐いて立ち上がる。勝手に決めないで欲しい。

確かに私は女の子の中では背は高めだけど……そんなに上に見えるのかな。カランもどちらかというと背が高いし、成人してると勘違いしているのかもしれない。

カランのようにお付き合い……ならともかく、結婚は早すぎる気がする。

とりあえず、グールドから聞いた答えのヒントは後で検討することにして、すっかりやる気になっているカランをまずは手早く黙らせることにした。

日が暮れる前に二人と別れて家に戻ると、家にエリーが来ていた。生活が安定していない時はよく私達を助けてくれたけど、結婚したし私たちの一家も安定したこともあって、彼女が私の家にいるのは久しぶりかもしれない。

お母さんと楽しそうに話していたエリーは会話を切り上げると、話があるからと私の部屋へと歩いていく……もしかして、リイナのことかな。

エリーは暫く黙っていたけど、ふう……と息を吐いた。

「エリー。どうしたの？」

「あーなんていえばいいのかな。まあ先を越されちゃったなーって
いうかさ」

首を傾げる。なんだろう。エリーはらしくない乾いた笑みを浮か
べて続ける。

「リイナ……その……出来ちゃってるみたいなの」

「何が？」

「子供」

「……………え？」

子供……子供……リイナに？

頭が混乱して理解を拒否しているような……そんな驚愕が私を襲
っていた。

外伝 三話 忍び寄る変化

エリーから話を聞いた翌日、日課の鍛錬を終えると私はすぐにリイナの家に向かった。

穏やかな雰囲気の彼女の両親に頭を下げて家に入れてもらい彼女の部屋の前に立ち……何を言えいいのかを悩み、ノックを躊躇ってしまっただけ……意を決して部屋を叩いた。

「リイナ。私」

「どうぞ」

中から聞こえた声は明るかった。
どんな顔をすればいいかわからなかった私は安心して、息を吐いて中に入る。

「クルスはもうエリーに聞いたの？」

「うん」

「そっか。聞いていましたか」

机に向かって、マイスに宛てた手紙を書いていたリイナは一旦手を止めてぐっと身体を伸ばしてから目を閉じていたずらっぽく、に

やゝと笑いながら椅子をこちらに向けた。

「昨日悩んでたから気にしてた」

「ああ、そういうことね。確かに悩んでた……いや、期待してた……かな」

背が低くて子供っぽいと言われたり、一緒に歩くと私の方が年上に見えるとか言われることが多いけど、やっぱりリイナの方が大人だと思う。結構大変なことだと思うのに。

「エリーに確認するまでは不安だったけど……今は嬉しいの」

「嬉しい？」

「そう。まだ、不安定な時期は続くらしいのだけど……ちゃんと産んであげたい。私は母親になるの……あはは、信じられないよね」

そう話すリイナの顔は本当に幸せに見える……妹を抱くお母さんと似ている笑みだと思った。自分には現実味がなくて想像も出来ない。

「本当に好きな人と結ばれることは幸せなことなのよ。クルス」

「幸せ……か。そうなのかな」

「うん。貴女も本当に好きな人を選ぶんだよ？ 殴りあいでも決めるんじゃないって」

ね？ と、からかうようにリイナは笑った。私はその冗談に苦笑いして頷いた。彼女やエリーにはこのことを何度笑われたかわからない。確かに失敗だったけど……。

まあ、私のことはいいとして気になることはある。

予定ではマイルスが帰ってくるまでまだまだ遠い。それをどうするのか。

「マイルスはどうするの？」

「そのことでクルスにもお願いがあるの。このことは手紙に書かないで欲しいの」

リイナはそういつて微笑む。意図が分からず、何故？ と返すと彼女は、

「マイルスに後悔してもらいたくないから。彼の邪魔をしたくないの」

と、少し困ったように苦笑いしながら言った。マイルスの性格だと確かにこの話を聞くと集中することが出来なくなるに違いない。

「本当に……それでいいの？」

「一年のことだから」

だけど、迷宮は命懸けの仕事だと聞いている。今は大丈夫そうだ

けど……もしマイスに何かあったら……子供は私のようになってしまうかもしれない。

本当にそれでいいのだろうか……私には答えを出せなかった。

リイナの家から帰りながら幸せについて考える。記憶がおぼろげになっているけど……昔、夢に出てた女性も幸せになりたかったと言っていた。

私にとっての幸せってなんだろう……歩きながら胸元で揺れる青い鳥を触り、難しい問題に頭を悩ませていた。

時が流れて三枚目の手紙が来た。ケイト達は順調に冒険を続けているようだ。

ケイトに朝帰りって何？ と書いてみたところ、お義父さんに聞いてみてと返事には書いていた。他にもシーリアとはどう？ と書いてみたけどケイトは今、余裕がなくてシーリアも和解したけど友人としてしか見ていないみたいだった。

結婚を申し込まれたことに関しては、大事なことからちゃんと考えて答えるようにと書かれていた……けど、字を何度も書き直したようで、そこだけちよつと汚かった。珍しい。

ラキスからも手紙が届いていた。今回の手紙には最近、冒険ばかりで娘が構ってくれないと泣き言と愚痴のようなものが手紙いっぱいに書かれていた。ケイトには悪いけれど頼る相手を絶対に間違えてると私は思う。このエルフはどうしようもない。

グルードもあれから本人の言葉通りに急かしたりせず、カランも

何時も通り返り討ちにしたりと、特別変わったこともなく過ぎていく。

そんなケイトのいない新しい日常にようやく慣れてきた頃、事件は起こった。

ある日何時も通りに鍛錬のために村長宅を訪れると、十人程の金属製の鎧を身に付けた男達が村長とマリアを取り囲んでいた。

一瞬騎士かな……と思ったが、騎士ならグールドみたいな人だろう。目の前の男達は彼とは違い、仕草が洗練されていない気がする。村長と話している一人だけは他の男と違って礼儀正しく話をしていたようだが……。

男達が私に気付く。にやにや笑っていて、視線も舐めるように感じて不快だ。剣をいつでも抜けるように力を抜いて無言で相手を見つめる。

「まあまあ、そう警戒するなってお嬢ちゃん。仲良くしようぜ?」

男達の中でも一際傷が多い、中年くらいの鍛えている様子の男が口を歪ませて笑う。背は高くないが野生の猛獣のような……そんな印象を受けた。

私は更に警戒を強める。

「止せ。ジムス」

村長との話が終わったのか礼儀正しい黒髪の男は他の男達に下がっているように命令し、今度は私の前に来た。この男達の責任者のだろう。

「失礼。私はカイラル騎士団のウィルスと申します。貴女は村長の関係者ですか？」

目の前の男を油断せずに見つめる。歳は……まだ二十代前かな。何だか疲れているように感じる。背丈は高め……腕は先程のジムスと呼ばれた男に比べると落ちそう。

「一応」

「私はこの村に『呪い付き』がいるとの噂を聞き、調査に来たのです。そのような話を……貴女は知りませんか？」

「呪い付きって……何？」

「特殊な能力や知識を持つ人間のことです」

首を傾げる。聞いたことのない言葉。特殊な能力……？

「知らない」

「そうですか……わかりました。呪い付きは災いを呼ぶ存在。早急に見つけなければなりません。気づいたことがあれば離れの方にいますので教えてください。よろしく願います」

彼は私に一礼すると、男達のリーダーらしいジムスに行くぞと命令し、客が泊まる事が出来るようになっていく離れの方へと歩いていった。

私は彼等の姿が消えるのを待ってマリアと顔を合わせると、彼女は黙って頷いて私を家の中に促す。表情は真剣で口を引き締めている。

モルト村長とマリアと私……三人でテーブルを囲んで座ると、マリアが口を開いた。

「彼等はどうやらケイトを探しに来たようね」

「ケイトを？」

彼等は『呪い付き』と言っていた。何故それでケイトのことになるのか。

「商人から噂でも聞いたんでしょう。幸いあの子はいないし……とぼけてこの件は終わり……だといいのだけど、おそらく簡単にはいかないわね」

「ケイト……呪い付き？ 災いを呼ぶとか言ってたけど」

「貴女はケイトが災いを呼ぶと思う？」

私は首を横に振った。マリアはそれを見て微笑む。

「呪い付きに危険な者が多いのは事実よ。だけど、それは本人の性

格と育ちによるもの……私はそう思ってるし、そのつもりであの子を育てたの」

「そうなんだ」

「私の兄も呪い付きで……兄のようにはしなくなかったからね」

マリアは苦笑いしながら、過去の兄との出来事を語ってくれた。

『呪い付き』と蔑まれて生きていた兄がある事件をきっかけに住んでた村を滅ぼして……その兄を倒すために剣を取って冒険者になったという凄惨な話を。

「ケイトは不思議な力を持っているわ。知っているのは家族とガイとジンだけ。貴女や友達は薄々知っているとは思っただけ」

「あの遠くの動物とかをみる力？」

「そう。名前さえわかれば……ある程度離れても人の強さを数字で見ることができらしいの。人だけでなく、動物や植物でも……あの子は簡単に考えているけど、危ない力よ」

私は頷いた。使い方次第では本当に便利な力かもしれない。マリアは薄く笑って私に問いかけてきた。聞くまでもないことを。

「怖い？」

「全然。ケイトは大丈夫」

側で聞いていたモルト村長が苦笑し、マリアは声を上げて笑った。

「あー。本当にいい子ね……そうそう、あの騎士達だけど……」

「あれは騎士じゃない気がした」

「よく気付いたわね。あれは恐らく傭兵よ。礼儀正しいのは何者かわかんなかったけど」

モルト村長がむう……と唸っている。傭兵が十人も村に居座るといふのは、あまり望ましいことではないらしい。武器を持った人間が何をするか予測出来ないから。

「クルスがグルード様と仲良くなってくれたのは幸いだったわ」

「そうだな……トマスをセイ村に走らせるか。前の徴税官よりは我々のことを考えてくれそうだ。彼には悪いが頼らせてもらおう。ガイとジンにも連絡を。奴らには大量に酒を出しておこう……村で暴れられると困る」

「連絡は私がやる」

モルト村長とマリアは頷くと、それぞれの準備を始める。

私も村長宅を辞すると、お義父さんとジンおじさんに連絡するために歩きだした。

ケイトの兄さんがセイ村に辿り着いてグルードがこちらに来るのは恐らく明日か、明後日になる。それまで何も起こらないことを祈るしかない。

どうやら黒髪の青年……ウィルスは色んな家に聞き込みをしてい

るようだった。ケイトは村でも有名だし、彼が答えに行き着くのも遠くない気がする。その後、彼がどうするつもりなのか……確かめなければならぬ。

私はそう考え、訪ねた家から出てきた彼に偶然を装って声を掛けた。

「こんにちは。ウィルス様」

「ああ、君はさっきの……様はいいよ。君は……ええっと」
「私はクルス」

よろしく、とウィルスは手を出してきたのでそれを握る。

彼は次の場所へ歩こうとしたのでその横を歩く。

「調査はどう？」

「旅に出た村長の息子……が怪しいと思っている。君とも深い関係があったそうだね。何故教えてくれなかったんだい？」

「私は呪い付きという言葉そのものを知らなかったから」

ああ、そういうこともあるのか……とウィルスは驚いたように呟いた。

そんなに変かな？

「その首飾りも買ってもらったらしいね」

「皆……口が軽い」

「ははっ！ みんな微笑ましそうに話していたよ。村長の息子さんはいい人だったようだね。彼も君もみんなから好かれてる……羨ましい。それにしても、青い鳥か。意味深だ」

どういうことだろう。首を傾げているとウィルスが懐かしい出来事を思い出すように遠くを見ながら……穏やかに微笑みながら教えてくれた。

「古い童話があるんだ。幸せの青い鳥という話が」

「どんな話？」

「……少年と少女が幸せの青い鳥を探しているんな場所を旅をするんだ。だけどそれは旅では見つからない。何故ならその鳥は身近な自分達の鳥籠にいたって話さ。どうだい？」

青い鳥が冒険をしているケイトから届けられた……から。つまり……私の幸せは私の身近にある……そういう意味で……渡したのかな？

彼はどう考えてこのプレゼントをくれたのだろう。だけど、今はそれより聞かなければならないことがある。大事なことを。

「『呪い付き』を見つけたら……どうするの？」

一番大事な疑問。この答え次第では……。彼は苦笑しながら私に答えた。

「仲間に勧誘する。災いと呼ぶ能力を……正しいことに使わせてもらうんだ」

意外な答えだった。思わず立ち止まって彼の顔を見る。彼の顔はまだ若いのに本当に……何か疲れているように思えた。

「正しいことって何？」

「難しい質問だね。人によって正しさは違うから。私もどうかと思うけど仕事だからね」

「なるほど。頑張って」

「……ありがとう。クルス。楽しかったよ」

ウィルスはそう微笑んで頭を下げて、次の家へと入っていった。

正しいことをしているなら、彼はどうしてあんな辛そうな顔で微笑むのだろう……私はそんな疑問を感じながら、家へと戻った。

外伝 四話 警戒

朝起きると私は部屋で身支度を整えた。今日はいつものように川には行けない。

傭兵らしい一団が村に泊まっているため、一人で人気のない場所に行くことは止められている。

お義父さんも泊まっている男達をかなり警戒していて、皆が寝静まった昨日の夜の内に緊急用の連絡を村中に回し、自身は村の何人かの大人と交代で離れの見張りをしていた。

グルードに変わるまで徴税官は本当に取り立てるだけの人で、頼りにしようとは誰も思っていなかったこともあり、私達の村では自分達の身は自分達で守ろうという想いが強い。

一年前にゴブリンの巣を潰した後、さらにそれが強くなっている。村人に死人を出したこと、私やケイト、マイルスといった成人していない者が命の危険を晒して戦ったことが原因……かな。農具を警戒のたびに使うことはできないので、全ての家には硬くて長い棒が最低一本置かれている。

一週間に一度、男達はお義父さんの指導でそれを振ってるそう。

村長宅へ向かうため、私は剣を腰に下げ、弓を持っていくかどうか迷い……結局、弓と矢筒を背中に担ぐ。何か言われたら獵に行くとてもいい。

「まあ……怪しいが戦いになると決まったわけじゃねえ……もしそうになったら、お前はマリアさんに任せて隠れてろよ。絶対に無茶はするんじゃないぞ」

「うん。わかってる」

お義父さんが真剣な表情でそういつて、心配そうにこちらを見た。マリアを除くとお義父さんは一番強いから……今回も夜間の見張りとか危険な仕事を引き受けている。

私が心配する方だと思う。

「俺はメリーとセレナをジンの所へ連れて行ってから、村の人間をまとめとく」

「わかった。じゃ、行ってきます」

「おう」

私は頷くと不安そうなお母さんに手を軽く振って家を出た。

寒い冬空の下、村長宅に行くために村の広場を歩いていると黒髪の疲れた顔をした青年……騎士を名乗ったウィルスが、井戸で水を汲んで顔を洗っていた。

酒の匂いはしない。飲んでいないのだろう。素通りするのもおかしいので頭を下げる。

「おはよう……ございます」

「ああ……あ、おはよう……ってどうしたんだい。その格好」
「猟に行く」

決めておいた答えを彼に告げると、驚いたような声を上げた。弓はともかく、剣はおかしいかもしれない……だからかな……と思う。

「びつくりしたよ。君は結構勇ましいんだね」

「変？」

そういえばグルードも私が猟をするのに驚いていた気がする。

ウィルスは水を入れた桶を置くと、私を見て笑いながら言った。

「いや、可愛いのに案外似合っているから驚いたんだ」

「そう……普通だと思うけど。生きるために動物を狩るのは」

家畜が少ないこの村では肉を食べるために、野生の動物を狩らなければならぬ。

猟師の一人や二人、どこにでもいそうだけど。まあ、もしかすると普通じゃないのかもしれない……他の女の子はこんなこととしてないし。

「そういう意味じゃないんだけど……生きるため？」

「そう。生きるため。ウィルスは生きるために騎士をしているの？」

ふとした疑問。グルードは騎士であることに誇りを持っていた。私の考え方とは少し違うけれど、彼は人を守るために力を振るうことを大切なことだと考えていたし、その生き方を彼は楽しみ、喜びを感じているようだった。

だけどウィルスはどうだろう。とてもそんな風には見えない。

「僕は……理想を……そう、理想を現実にするために……生きている」

彼は若くみえるのに、理想と語ったときにはまるで疲れた老人のようにも見えた。

何故だろう……どうしてだろう……。

「……後悔してるの？」

「たくさん……後悔してきたよ。だけど、僕はやらないといけない。そうでないと何もならない」

ウィルスは諦めたように微笑んでいた。

その顔を見て、私は……何かを言っておきたいと思った。彼は私が答えを出すためのヒントを一つくれたし……恩は返しておきたい。それにケイトなら……こんな人がいたら、きっと私には思いつかないような凄いことを言ってお励ますと思うし……私もそうしたい。

ケイトとの会話を思い出す。彼なら何て言うだろう……しばらく

考えて私は彼に言った。

「ウィルス。貴方の理想が叶えられることを……私は信じる」

「……え？」

「自分で自分を……信じてなさそうだから」

ウィルスは聞いた瞬間ぽかんと口を開けていたが少し呆然とした後、微笑んだ。

年相応らしい明るい笑顔だと私は思った。

「私には貴方の辛さはわかってあげられないけど……私は貴方は嫌いじゃないから応援する」

「ありがとう……クルス」

少し元気が出たみたいで良かった……ケイトに近づけたかな？
うんと私は一つ頷いて少しだけ笑った。

「ウィルスはこれからどうするの？」

「……ああ、いや、そうだな……今日の昼に村を出ようと思う」

「もういいの？」

私にそう聞かれたウィルスは、真剣な表情で唇を引き締めて頷いた。

それも一瞬で、また彼は何かに悩んでいるような、諦めた表情に

戻ってしまふ。

「ああ、いいんだ。目的の人はいないようだしね」

「そう……青い鳥の話は参考になった……本当にありがとう」

そう頭を下げながら目的の場所に行こうとしたが、

「クルス！」

と、呼び止められた。ウィルスは呼び止めた姿勢で何かを言いたげな顔でしばらく黙っていたが……やがて大きく息を吐いて首を横に振った。

「いや、何でもない。こちらこそありがとう。世話になったね」

ウィルスは苦笑いし、私と握手し自分達が泊まっている離れへと帰っていった。

彼は何故あんなに辛そうな表情をしているのだろう……他の仲間と雰囲気は全く違う彼を見送りながら私はそんなことを考え、理解できずに悩んでいた。

私は太陽が真上に近くなるまで、マリアと話をしながら彼らが帰

る時間をゆつくりと待っていた。マリアもいつもの普段着ではなく、軽い革製の鎧を着込んでいる。

横着だけだと彼女は笑っていた。対応はモルト村長に任せるようだ。

昼が近づいてお腹も空きはじめてきた頃、客間で待っている私たちの元へモルト村長がやってきた。彼の顔には緊張と疲れが見える。

「二人とも、グルード様がもう少しでお着きになるようだ」

「トマスが狼煙をあげたのね」

「どうやらその前に帰ってくれるようだかね。やれやれだよ」

ケイトの一番上の兄であるトマスは昨日、グルードを呼びにいていたがどうやら近くまで来ているらしい。最も彼らが素直に帰ってくれたなら、グルードに無駄足を踏ませることになってしまう……その時は私も謝ろうと思う。

モルト村長は苦笑しているがマリアのいった彼らが騎士でなく、傭兵だということは信じているようだ。私が何故かを聞くと、

「マリアの勘を信じているのもあるが、彼等にはおかしな部分があるんだ。一番大きいのは彼らはカイルル騎士団を名乗ったことだ。何故かわかるか？」

「うっん」

首を横に振る。こういう難しい話はちょっと苦手。

でも、ちゃんと聞かなければ。モルト村長はどう説明すればいいのか考えるような仕草をしながら、ゆっくりわかり易く続けてくれた。

「このクルト村はカイラルに税を納めているが、貴族領ではない。

徴税官は国から派遣されてくるのだよ。それがグルード様だ。彼は貴族で騎士だけれどもピアース王国の騎士であって公爵領であるカイラルの騎士ではない」

「でも、同じ国の騎士じゃないの？」

「そうだ。だが、同じ国といっても我々の国は王領という所領を持った一番偉い貴族の国と、公爵領という所領を持った大貴族の国の集まりでしかない。王と公爵の領土は大げさにいつてしまうと別の国のようなものだ……まあ、ちょっと乱暴な説明だが間違っではおらんはずだ」

自分も上手く説明出来ないと、モルト村長は苦笑した。

私はこんなこと全然知らないので知っただけでも凄いと思うのだけど。それになんだが、私に教えてくれるときのケイトの顔にそっくりで少しおかしかった。

モルト村長はここからが本番だと前置きを置いてさらに続ける。

「クルト村は王の土地だからな。ここで、カイラルの騎士がああいう捜し物をするときには、グルード様の許可が必要になるのだよ。そして、グルード様がこちらに向かってきてくれているということは、その許可を出していないということだ」

「なるほど……グルード偉かったんだね」

気難しそうに見えて気さくで明るいグルードを思い出す。彼は下級貴族は貧乏で一般人と変わらないと言っていたんだけど。こう話を聞くと本当なんだろうかと思う。

同じ国の騎士でもその関係はややこしいらしい。つまり、ウィルスはカイラルの騎士でも問題があり、勿論そうでなければ身分の詐称は犯罪だから捕まる……というわけらしい。

彼自身それがわかってでも仕事でやらないといけないから、疲れた顔していたのだろうか……と、礼儀正しい黒髪の青年に少しだけ同情した。

「私は彼等を道まで送って来る。森の中の道を使ってこれから東に向かうそうだ」

「モルト村長、気を付けて」

私が声を掛けるとモルト村長は笑ってああ。と頷いてすっかりした足取りで表に彼らの対応をするために出て行った。

「あの人、クルスのこと娘みたいに思ってるのよ。エリーもお嫁にいつちやったし。さっきの嬉しそうな顔……妬けちゃうわね」

「そうなんだ」

くすくすと MARIA は笑った。ケイトはモルト村長は厳しい父親だったって聞いてたけど、私にはそんな印象はない。人は見る人によって印象が変わるのかもしれない。

私はモルト村長を見送りながらそんなことを思った。

モルト村長が戻ってくると三人で食事を取り、もう大丈夫だろうということとで母親がいるジンさんの家に向かって私は歩いていった。マリアがまだ鎧のままだったのは気になるのだけど……と、考えているとカランが必死な形相でこちらに向かって走ってきた。

余程必死だったのか、私の姿を見て止まると膝を手で抑えて息を切らせている。

「カラン、どうしたの？」

「ク、クルス……あいつら……あいつら……！」

「落ち着いて。息を長く吸って……そう……ゆっくりと吐いて」

カランの背中をさすりながら、彼を落ち着かせる。

「ごめん、クルス。あいつら、森の中で仲違いしてたんだ」

「……カラン。どうしてそんなところに……いや、それは後……どんな喧嘩？」

カランの表情にあるのは怯えと……恐怖。彼は弱いけど気は弱くない方だと私は思ってる……何が……何があった……？

「黒髪の騎士つばいやつが……斬られてたんだ。俺は遠くから見て

ただ、怖くなって……逃げてしまった。た、助けられなかった……無理だ！」

「カラン……落ち着いて。そんなの貴方のせいじゃない。私でも無理」

「でもっ!!」

この村では人が斬られるというのを間近で見ることはない。ゴブリン退治のときもカランは参加していないし……取り乱すのも仕方がない。私は彼の両頬を両手で触ると顔を近づけて、カランの瞳をしっかりと見つめる。

「貴方にしか出来ないことがある」

「あ、ああ」

「マリアとお義父さん……ガイに連絡。グールドにも。お願い」

「わ、わかった」

カランが正気を取り戻してごくごくと何度も頷く。死んだようだった目にも光が戻っている……やっぱりカランは強い。私は少しだけ笑った。

「クルスはどうするんだ？」

「私は森で彼らを探る。心配無い、ここの森なら私の庭。村の中より安全。それより急いで！」

カランは口を引き締めて頷くと、村長の家がある方向に向かって

全力で走っていった。

私はそれを見送ると……弓を左手に持ち、森の方角に向かって走った。黒髪の騎士……少しだけ話をしたウィルスが無事であることを祈りながら。

外伝 五話 悪意と真相

クルト村の東に広がる森は東に抜ける狭い道が中央にあり、道以外のところは木の根が地面を這うように飛び出ているような場所が多く、森に慣れていないと移動し辛い。

木々の一本一本の間隔は狭く無いので走れないことはないのだけど……。

カランもそれほど森に慣れていないこと、傭兵達もそこまで森に慣れていないだろうということを考えると、ウィルスが切られたのは道に近い場所のはず。

私は傭兵達と出会わないように道から少しだけ外れた薄暗い森の中を駆ける。

ある程度の距離を走ってから少しずつ速度を落として、道が見えてこちらは見えにくいぎりぎりの場所を今度はなるべく音を立てないように進んでいく。

息を殺し、小さな音も聞き逃さないように神経を集中させる。

あの疲れたような騎士は、大丈夫だろうか……最善は彼が軽傷で傭兵達が側にいない……もしくは少ないことだ。少なければ弓があるからなんとかなる。

緊張で汗が流れる。小さく長く息を整えて体を軽く動かし、強ばらないように注意する。戦いになった時に最善の動きが出来るように。

ふと、脳裏に一つの考えが頭を過ぎる。
もしかして、自分は戦う事を望んでいるのだろうか……。

いや、危険だから注意しているんだ。そう困惑を振り払って注意しながら進んでいく……と、微かに血の臭いが漂ってきた。道には誰もいない。

道の側に除けたのかな……そう思い、よく目を凝らすと道の向こう側に横たわる人影が見えた。動いてない――。

周りに人影がないのをざっと確認し、道を横切って倒れている人影に近づいていく。

「ウィルス……」

間違いなく横たわっているのは……黒髪の騎士を名乗った、疲れた表情で笑っていた青年……ウィルスだった。最悪の事態に血の気が下がる。

彼の胸には抉られたような傷があり、片腕は半ばまで断ち切られて皮だけで繋がっているような……そして、致命的な肩から斜めに走った斬撃の後……これは……生きていても助からない。そう直感する。

「どうして仲間に……?」

考えるのは苦手だけれどウィルスと他の傭兵達と仲間割れしたくらいはわかる。

今ここにいない傭兵達……傭兵達は村に行っただんだと思う。

ウィルスはもしかするとそれを止めようと思ったのかな。そして、それに反対する傭兵達に殺された……なんだろう……心の底から湧いてくるこの強い感情……覚えがある。

昔、夢で感じていた感情……これは悲しみ？ 怒り？

横たわる彼の側に座り、一応生死を確認する。彼は理想のために生きてるって言うてたし、せめて生きてたら最後の言葉だけでも彼を待つ誰かに伝えてあげたい。

そう思い、顔を近づける。

「ク……クルスカ……？」

「うん。ごめん、助けられなくて」

ウィルスに意識が残っていて明瞭な声が聞こえてきたことに私は驚いた。

私は殆ど諦めていたから。だけど、これで……伝えてあげられる。

「ウィルス。誰かに伝えることはある？」

「ば、馬鹿……早く逃げろ……ジムスが近くに……」

「……！」

ウィルスに気を取られすぎて気がつかなかった。こんなに明確に
気配があるのに。

左手に持っていた弓を捨て、慌てて横に飛ぶ。私の頭があった場
所をナイフが通り過ぎ、地面に刺さった。

「おー。あれかわすかあ……まあ、死ななくて良かったぜ。色々
楽しめそうだ」

「あの時の継ぎ接ぎ男」

「ジムスってんだ。惜しいな、もうちょいむつちりした女が好みな
んだが」

錆びた鉄のような色の髪をした、がっちりとした野性味溢れる中
年の男……ジムスは村長の家の前であつたときと同じ、からかうよ
うなにやけた笑みを浮かべてこちらを見ていた。仲間に致命傷を与
えたというのに、こいつの表情には一切の後悔がない。

私は剣を抜き、ウィルスから離れると油断せずにジムスを睨む。

「どうして仲間を……殺そうとしたの？」

「殺すって誰をだ？ ああ、この化け物か……くっ、あははははは
ははっ！」

ジムスは笑って傷ついたウィルスを踏みつける。ぐっ……とウィ
ルスが呻き声をあげる。

憎悪の感情が燃え上がりそうになるが……昔の夢に比べれば……
大丈夫。

「お、意外と冷静だな。ますます面白いな……この化け物はこれくらいじゃ死なないんだよ。あんまり馬鹿なことを言ったから、ちょっと黙ってもらったただけだ」

「致命傷。死なないわけがない」

ジムスはウィルスを足で踏みにじり、くくつと笑いを噛み殺しながら続ける。

「ウィルスは化け物じゃない。足を離せ。外道」

「あんま笑わせんなよ。おい、ウィルス……お前が化け物じゃないってよお！ 教えてやんなきゃなあ。現実ってやつをよ」

「よ、よせ……」

嫌らしい笑いだ。本当に……。

ウィルスが苦しそうに止めようとしているけど、ジムスにやめるつもりはないみたいだ。

「こいつはな。幾つもの村を焼いた俺と同じ外道なんだよ。騎士を語って『呪い付き』の化け物共に国への憎悪を植え付ける……俺と変わんねえ外道だ……それだけじゃねえ」

ふんつと鼻を鳴らして、ウィルスから足をどけて私の正面に出る。

「その憎んでる『呪い付き』共を味方面して仲間誘うんだぜ。滑稽すぎて笑えるぜ。なあ、嬢ちゃん……くくつ……そんな外道のこいつも『呪い付き』なんだぜ。これだけやっても死なねえんだ。笑えるぜ。化け物じゃなくてなんだってんだ？」

心底可笑しいとジムスは笑う。ウィルスが……『呪い付き』？
ケイトに憎しみを植えるために、村を……燃やそうとした？

「そんなこいつが今回は止めようとかいったんだぜ。何を今更いい子ちゃんぶってんだ。何時も通り金と女を持って帰らないとダメだろ」

『呪い付き』の仲間を集めることで彼の何らかの理想は叶えられる……でも、現実……彼の疲れたような表情の謎がようやく解けた気がした。

難しいことは私にはわからない。だけど、わかることもある。

彼が今そうされているように……もしかしたらケイトも彼のように化け物と蔑まれて生きていたかもしれないのだ。災いを運ぶと言われて……意味もなく踏みにじられて。

その時、ケイトは今のよう自由に生きれただろうか。

「軍資金集めるのも仕事なんだからな。これは相応の罰つてやつだ……全くついてないぜ……こいつのせいで俺の相手は小娘だしなあ」

私はジムスを警戒したまま顔をウィルスに向けて、息を大きく吸い込んで意識的に大きな声で断定して言った。

「ウィルス。貴方は化物じゃない」

「ほう……言うねえ。嬢ちゃん。嫌いじゃないぜ……気の強い女は」
「私は貴方が嫌い」

ジムスが笑みを消し、真剣な表情で背中に差していた重そうな剣を抜く。両手用の剣……かなり使い込まれている。こいつは……本物かな。

背中の矢筒を捨てて森に背を向け、私も剣を構える。

「なんでこいつを恨まねえんだ？ 今頃、村は火の海だぜ？」

「貴方の仲間はどうせ捕まってるから。騎士がもう到着してるはず」

「ちっ……そういうことか。あの狼煙は……やっぱ俺は運がいいな
訂正するぜ」

村に被害があれば……私はウィルスを許さないと思う。自分勝手だけど……私と村に被害のない今は……助けようとしてくれた今だけは彼を許したい。

彼も私と同じようにこれから答えを探していく人なんだろう……
そう思う。

「悪いな嬢ちゃん。本当は気の強いお前さんを泣きながら謝るまでぼろぼろにしてから売り飛ばしたかったんだが、そんな悠長なこと

をしてる暇無くなっちゃった」

「構わない。貴方はここで死ぬのだから」

私は無造作に相手に近づき、一瞬で間合いを詰めた。

その勢いを利用して相手の眉間と首狙って突きを放ったが簡単に受け止められてしまう。

「ひゅーやるなあ嬢ちゃん。だが、軽いぜっ！」

ジムスは私の剣を弾くと両手剣を右斜め上から斬りかかってきた。それを右に飛んで回避。さらに追撃で真横に薙いだがそれは下がることでかわす。

騎士に化けていたこともあって相手は金属製の鎧を身につけている。それに対して私は鎧すら身に付けていない。こちらの方が動きやすいが、一度ミスをしたら負けてしまう。

実力差も悔しいけど……ありそう。命のやり取りをした場数の差……か。

間合いを取って対峙しながら考える。正面は不利……矢筒を捨てたのはミス。足はこちらが早いし、弓を捨てて逃げながら矢を撃てば時間を稼げたのに……焦ってたかな。

正面が無理なら地形を利用するしかない。あのケイトと二人で巨大なゴブリンと戦った時のように。森は……私達にとっては味方だ。

「痛くないように一思いに殺してやるから安心しな」

ジムスは私のような女に負けるなど少しも考えていないに違いな
い。だからこそ、私にも勝機がある。こいつには隙がない。だから、
隙が出来るまで……我慢。

「泣いて謝るなら許してあげてもいい」

「残念だぜ。お前さんみたいな面白い女を殺さないといけないなん
てな」

嵐のように剣を振って斬りかかってくるジムスの剣をkaroujiで
回避し続けながら、私は深い森の中へと相手を誘導していった。

外伝 六話 二人

森の中を足元に注意しながら、相手の攻撃を掻い潜りながら下がっていく。

このまま逃げるか……という考えも浮かんだけど……そこまでは甘く無さそう。足場の悪い森でもジムスは安定した攻撃を続けていた。背中を向けた瞬間斬られそう。

「嬢ちゃん。追いかけてこはやめにしようぜ。俺はおっさんだから体力無えんだよ」

「噓。全然余裕」

傷跡をたまに摩りながらジムスはたまにこうして声をかけてくる……体力が尽きるのも……このままだと私の方が早いかもしれない。身体能力が違いすぎる。

「しかし、二十かそこらの小娘にここまで避けられるとはな。歳はとりたくねえぜ」

「……私はまだ十四」

「まじかよっ！」

驚いたような顔をした後、ジムスは吹き出して狂ったように笑った……が、

「ざけんなっ！ このガキが！」

前髪が少しはらりと落ちる。今は危なかった。

からかうような笑みを浮かべていたジムスが、急に怒気を発した。なんでだろ。

「ちつ……身軽だな。才能か……うぜえ。こっちは命懸けでのし上がったてのによ」

「ちゃんと訓練してる」

一筋の汗が私のこめかみを流れていく。訓練の時とは比べものにならないくらい体力も精神力も削られていく……相手の一つ一つの攻撃が私の命を削っている。

「殺す理由が増えたぜ。俺はお前みたいに才能があるやつが……胡散臭いあの化物共のボスと同じくらい気持ち悪くて嫌いだ」

「……………っ！」

相手の斬撃が激しくなっていく。森を利用して動きを限定しているにも関わらず、彼の剣は速い上に的確にこちらを狙ってくる。何度も回避に失敗しそうになった。

「あっ！」

「くそ……ん、なんだこりゃ？」

首の近くをはね上げるように剣が通り、ちんっ！ と軽い音と共に木漏れ日を浴びて……私の青い鳥が宙を飛んだ。ジムスの足元に向かって。

私は下がるのを止めて慎重に前に出る。あれは……あれはっ！

「焦ってやがるな……こいつのせいかな。いい顔だぜ」

無謀を承知で飛び出して剣を振る。狙うのは腕……だが、ジムスは何度攻撃しても私の攻撃を見切って簡単に防いでしまう。そして上段から剣が振り下ろされる。単純でよけやすいその攻撃の目的は……。

音を立てることもなく……小さな青い鳥が大きな剣の下で砕けた。

「命中……っか。小さいから難しかったが……さすが俺だな。げ、硝子かよ。安物じゃねえか。ゴミみてえ……くく……ガキにや丁度いいか。これ買った奴も糞だな」

そう、ジムスが私を嘲笑する。ウィルスが教えてくれた……ケイトがくれた幸せの青い鳥を壊して……馬鹿にして……許さない。絶対に……絶対に。

憎悪が心から溢れだした……その時、心の中から懐かしい声が響

く。

力を貸しましょう……と。

「クスクス……復讐するのよ……？」

「ああん？」

自然と口から溢れる言葉。もう一人の『私』が語る言葉……それを私は止めない。私だけでは勝ちきれないから……彼女にも頼る。そして謝る。

笑って任せてくれたのにごめんなさいって。

ジムスはその私を見て困惑しているが気にしない。

「私はね……私達はね……幸せになるの……今度こそ」

「お、おかしくなっちゃったか。気持ち悪い笑い方しやがって」

怒り……悲しみ……憎悪……そして狂気で心が溢れ返りそうになる。

私は自我をぎりぎりですべて冷静に保ちながら、私にとって身近なその感情を解放する。身体感覚がなくなり、それでいて力は満ちていることが理解出来る不思議な感覚。

これは駄目な力だ。直感的にそれがわかる。

明日は立てないかもしれない。でも、それでもいい。今日身体が

動くなら。

「今度こそ手に入れるの。今度こそ離さない。今度こそ守りきる……
貴方は邪魔。だから……可愛いもう一人の『私』……クスクス……
一緒に殺ろ……」

「な、なんだ？ なんなんだ！ まさかてめーも『化け物』かつ！
「死になさい」

剣が軽い……身体も。腕も足も悲鳴を上げているのがわかるのに
痛みはない。

基本通りに全力で右から斬り下げる。ジムスが剣で防ごうとする
が関係無い。迷わずに振り切る……浅い。けど、大丈夫。

ギイン！ と、剣が打ち合う鈍い音が鳴り響き、ジムスがその
衝撃で剣を取り落とした。私の腕も……多分、重傷だと思うけど。
顔には出さず、呆然と驚いた顔のまま落とした剣を見つめているジ
ムスの喉に剣を突きつける。

「降伏する？」

「わ、わかった……降伏する……俺の負けだ」

心の中では殺せ！ と声を上げているが、捕まえてグルードに引
き渡した方がいいと説得する。だが、彼女は納得しないようだ。

抵抗しない相手を殺すわけにもいかない。ふう……と息を吐き、
剣を下ろそうとした瞬間。

「つと言つても思つたか……馬鹿がつ！」

腕を払われ、油断していた私の手から剣が飛んでいく。そのままジムスは私より遙か大きい身体でそのままぶつかり、私を押し倒して身体の上に乗った。

「かはっ！」

木の根が背中に当たって背中から身体が押されて口から空気が漏れる。ジムスは私の右手を抑えて予備の武器らしいダガーを左手に逆手に持つて私の首に突きつけた。

「形勢逆転つてやつだ。戦争で生き残れないな。お前は」

「卑怯……なの忘れてた」

「ほんと鬱陶しいくらい落ち着いてるな。これから死ぬつてのによ」

呆れたようにジムスが傷だらけの顔で溜息を吐く。

左手はまだ空いている。体に痛みはない……まだ諦めない。私にも予備のダガーがある……お義父さんの友達の形見……最悪刺し違える。

ゆっくりとジムスの短剣が私に近づき……私も左手で腰のダガーに手を伸ばして……。

「あああああうあああああ」

ガサガサッ！ と森を掻き分け走りこんできたのは皆に連絡しに
いったはずのカランだった。

泣きながら剣を振り回し、草を掻き分けながらこちらに走ってく
る。

身体の上のジムスがびくつと震えて私の上から飛びのき、ダガー
をカランに投げた。それは彼の太股にざっくりと刺さり、彼はジム
スに近づくことなく地面に転がる。

「ぎゃあああああ！ い、いい、痛いっ！ 痛い！」

泣き喚き、痛みに転がっているカランに心の中で礼を言い、すぐ
に落とした剣を拾う。

ジムスも気付いたように自分の剣を拾おうとするが……。

「遅いつ！」

落とした剣を取るために私の前を横切り、慌てて屈んだジムスの
足を私の剣は深く切り裂いた。そのままジムスは前のめりに倒れる。

「ぐあああああ！ ちきしょう！ クソガキどもがああ！」
「死になさい」

私は彼に近づく、と剣を逆手に持ち、ためらうことなく全力でジムの首に突き刺した。首を貫通して地面まで決り、血が私の手と足を赤く染める。

ジムの手が私の足を握り潰さんと掴むが……その力もすぐに抜けた。

それと同時に『彼女』の気配も消えていく。

最後に心配そうにしっかりとね……と呟いて。子供の頃のあの日から遠くから見守ってくれている姉のような……今日も助けてくれた……そんな恩人に私は心から感謝をした。

私はジムが動かないことを確認し、急いでカランに駆け寄った。

「カラン……どうして来たの」

「ひっ！」

地面に座り込んできたカランが青ざめて引き攣るような声を上げて、後ずさろうとした。心がずきりと痛む……なんでだろう……この顔……カランが怖がってる？ 誰を？ 私を？

自分の手を見ると……べったりと血が付いている。

「……ごめんね。カラン……」

「ちがつ！ お、俺はクルスが心配でっ！ 他の奴に任せて！ 傷だらけの男がこっちだって……だ、だから！ へ、平気……っ！」

恐怖と痛みで脂汗をかいて青ざめながらも必死でカランは私に氣を使っていた。怖がられることへの諦めと……彼への感謝で自然と笑みが出た……と思う。

「ありがと。強いね……カラン」

「ク、クルス……俺は……なんで」

人を殺すこと……カランの平和な日常……村での生活にそれはない。それは恐怖の対象なんだと思う。私にとってもそれは……同じ。動物や怪物と人は違った。

命を狙ってきた相手を倒した安心と同時に……人を殺した不安と後悔が沸き上がる。

戦いを私は望んでなんかいなかったんだ……怖がってたんだ……震える手を見て、それが不意にわかった。結局私は昔のミス達をケイトの後ろで怖がってた弱い子供の頃のまま……。

「カランが助けくれなかったら、私は死んでた」

「俺は……俺は……！」

血みどろの私の手を見てガタガタ震えながらもカランは自分の腕をぐっと握って叫ぶ。

「怖く……こ、怖くなんかないっ！ 違うんだクルスっ！ 俺はお

前が！」

「いいの。ありがとう……本当に強いね。カラン……私なんかより」

私は自嘲して剣を腰に戻す。恐怖と痛みを味わっても私を気遣いを忘れない彼に……弱いと彼を馬鹿にする資格は私には無い。彼は強い人だと思う。

私の手も彼のようにカタカタ震えて、上手く鞘に中々入れられなかった。

彼と同じ恐怖……だけど、私は……助けてくれたカランを気遣う余裕も持てない。

「カラン。この手じゃ貴方の治療は出来ないし、人を呼んでくるね」

私は血止めのために自分の服を裂いて彼の太股にしっかりと巻きつけると、逃げるように彼に背中を向けて私は走った。ふと頬が気持ち悪く感じて腕で拭く。

無意識のうちに私は涙を流していた。

外伝 七話 迷い

目を覚ますと私はベッドの上にいた。

窓から入る日の光が眩しくて、手を翳してそれを遮る。

カランと別れて道を走っていて……それからすぐに私は倒れてしまった。グルードが来て……朦朧とする意識でカランとウィルスのことを伝えて……。

「そか……カランだけじゃなく、グルードにも迷惑かけた」
「後は、村のみんなにもね。ほんと馬鹿なんだから」

首を横に動かすと、私のベッドの側にマリアが座っていた。
彼女は苦笑いしながら桶の水で濡らした布を絞っている。

「マリア……どうしてここに？」

「ここはジンの家よ。エリー一人で貴女を見れないから私も応援だね。どうやったらこんなことになるのかしら……腕も足も真っ赤。五日は動けないそうよ」

「うん……痛い……」

手も足も……痛みで少し動かしただけでも痺れて激痛が走る。手

と足だけじゃない……全身が痺れて起き上がることにすら出来そうにない。思いの外、きつい。

マリアは布で一番酷い腕と足を水で冷やしてくれている……そう
だ、聞かないと。

「マリア。カランとウィルスは？」

「カランは大丈夫よ。ちゃんと足も動くようになるそうだから。ウィルスってあの騎士は……姿が無かったわね。カランは重傷だったはずって言ってたけど。本当？」

ふう……と息を吐く。カラン……本当に無事で良かった。

ウィルスは自分で去っていったのだろうか。死んでいることはないと確信できる。

いつかまた会うことがあるかもしれない。

「私が見たときは即死してると思った。そういう『呪い付き』らしい」

「そう。まずいわね。他の傭兵は何も知らなかったし……はあ」

マリアは苦い顔をしながら溜息を吐いて温くなった布をもう一度水につけて絞り、当ててくれる。火照った体に冷たい布が当たると心地よかった。

「……マリアは怒らないの？」

「私はちよつと……怒りにくいわね。傭兵が来ることは予想してい

たの。クルスを戦いから遠ざけようと小細工をしたらこれだもの。
本当に無事でよかった……ごめんね」

私の疑問にマリアは苦笑してそう答えた。

首を横に振ろうと思ったけど首が動かないことに気付いた。不便
……。

「危険ってわかってたのに行った私が悪い。それに一番の被害者は
カラン」

「そうかもね……まあ、剣を教える者としてはよく勝ったと褒め
てあげたいわ。貴女じゃあいつには勝てないと思ったから。私程じ
やないけど相当出来る使い手だったし」

やったわねーと、楽しそうにマリアは軽く笑った……でも、私は
それに頷くことが出来ない。勝つには勝った……カランの怪我と引
き換えに。

そして、私は初めて人を殺した。

「マリアは人を殺したことある？」

私は目を瞑ってしばらく考えてその言葉を口に出す。今日まで無
意識に避けていた話。

多分聞くことで彼女への印象が変わるのが私は怖かったんだと思
う。

「あるわ。数え切れないほど」

わかっていただけで、彼女は微笑みながらそう言った。

何故マリアは笑えるんだろう。普通に生活できるんだろう。人を愛せたんだろう……。

殺したのあんなやつなのに……こんなに辛くて……泣きそうになるのに。

「私はマリアみたいに笑えない。痛いし辛い」

「それでいいのよ。辛いときに笑えないのは当たり前。笑えたらおかしいの」

やっぱり……とマリアは呟くと、私の腕が痛まないように軽く手を両手で支えるように掴んだ。しばらく、そうして手を握っていてくれた。

マリアの手は暖かくて少しだけ安心する。

「誰だってそうなのよ。昔は私だってそうだった」

「ケイトなら大丈夫なんだろう……だから私を置いていったのかな」

それを聞いたマリアは可笑しそうにくすくす笑った。何か可笑しかったかな……？

そう思ってマリアの顔を見つめる。

「あの子は貴女より酷かったわよ。ゴブリン相手なのに……大分取り乱してた」

「嘘。あの時、ケイト普通だった」

ケイトは巨大なゴブリンを倒したとき、私を背負って家まで送ってくれた。お母さんとも普通に喋ってたし、私も氣遣って笑ってた。何時も通りに。

否定してもマリアはゆっくりと首を横に振って微笑んでいた。

「男の子は女の子の前では我慢するのよ。格好つけだからね……みんな」

「そうなの？」

「そうよ。あの子はそれが特に強いよね。貴女の前では絶対に見せないと思う」

ケイトは自分が困っても私には見せてくれない……私を頼ってくれない？

私が頼りないから？

「誰かあの子をわかってくれる人が側にいてくれたらいいのだけだね」

「マリアみたいに頼れる人？」

「違うわ。良く相手を見て、理解してくれる人……見せられなくても、わかってくれれば……きっと、心が楽になるんじゃないかしら。私の考えだけだね」

ケイトは私のことをよく見て、何時も考えてくれていた。こちらから話さなくても私の考えていることを理解してくれていたと思う。だけど私はどうだろう……彼がそんな風に苦しんだなんて全然わかってあげられなかった。祭りの時に私を避けたときも……結局助けてくれたのはヘインだったみたいだし。

そう悩んでいると、マリアはにやにやと意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

「あの子が取り乱した姿を見たのは母親の特権なの。可愛かったわ」

「ずるい。私も見たかった」

マリアはくすくすと少しだけ笑い、ふう……と、息を吐いた。

「クルス。旅に出ればどうしても戦わなければいけない時もあるわ。盗賊とかね」

「うん……」

「本当に大切なことが何なのかを考えるの。そして、悩みなさい。それでいいの」

きつとマリアも悩んできたんだろう。ケイトも今悩んでいるのかもしれない。

私もずっと悩むのだろうか……逃げずにちゃんと考えよう。そう思った。

「マリア。ありがとう」

「弟子の面倒みるのは当然よ。貴女も私の娘みたいなもんだしね」

にっといたずらっぽく笑ったその表情は、エリーに似ていた。
やっぱり親子なんだなと私は思った。

五日間はエリーとマリアとお母さんに本当に迷惑をかけてしまった。

お母さんは私には怒らないけど泣くので本当に困る。そして、珍しくお義父さんと喧嘩した……私の前で。喧嘩じゃないか……一方的に怒ってたし。

お義父さんも小細工のことは知っていたらしい。

村の総意だったみたい。仲裁に入ったマリアがそう言っていた。
昔も私がゴ布林退治に参加するのを反対してたし……確かにどちらにも危険だったけど。

私は動けるようになると一人で考え込むことが増えた。
今日も一人、いつもの坂の芝生の上に腰を降す。寒いけど……日中なら大丈夫。ここにいると昔の友人達が側にいて一人じゃない気がするから。

人を殺した話はすぐに広まったんだと思う。私に挑戦してくる男

もいなくなつた。

カランに会いに行く勇氣も無く……グールドは事件の後片付けで忙しいのか村に遊びに来れなくなつた……らしい。ケイトがいなくなつたばかりの時に逆戻り。

「はあ……」

ごろんと寝転んで空を見上げながら溜息を吐く。

以前なら別に何も感じなかったと思う。だけど、今は無性に寂しかった。

寂しいとき慰めてくれてたケイトがくれた首飾りも……もうない。幸せを運んでくれるはずの青い鳥は碎けてしまった。それが何かを暗示しているようで嫌になる。

本当にどんなつもりでケイトは私を置いていき、どんなつもりで青い鳥の首飾りを送ってくれたんだろう……わからない。答えて何だろう。

そういえば、ケイトは私が他の誰かを好きになるかも知れないと言っていた。

前は絶対にそんなことはないと思っていた。

そもそも私と仲良くなろうと考える男なんていなかったから……ただ今はいない？

カランは正面から私にぶつかってきたし命懸けで助けてくれた。グールドは村のために戦ってくれたし、私に結婚を申し込んでくれ

た。彼らのことはどう思ってる？

「今でも私は本当にケイトのことが……誰よりも好き？」

それだけじゃない。村を出たい？ それとも残りたい？

村を出れば必然的に……戦わなくちゃいけない。命を賭けて。

ひよつとしたらこういう色々な悩み……それがケイトの言った『答え』の意味なのかもしれない。

今、私が悩んでいるようなことをケイトは自分で考えて、自分の答えを出して……自分の力だけで旅に出たんだ……そうか……私が置いていかれた理由って……甘えてたから。

そんな風に悩んでいると、

「クルス。何を難しい顔してるの？」

ぼん……と急に背中から肩を叩かれた。

いつの間にかリイナが私の後ろに立っている……全然気が付かなかった。

子供のような姿なのに急に大人っぽくなった彼女は、軽く微笑むと私の隣にゆっくりと腰を降ろした。

「珍しいね。隙だらけだったよ？」

「リイナ……」

「実はさ。エリーから事情聞いて……心配だったの」

私が怪我をしたこと。そして人を殺したこと。

そして、様々な……すぐには答えの出ない色んなことに悩んでいること……リイナはエリーから全部聞いていたみたいだった。お腹に子供いるしあんまり心配かけたくなかったのに。

「リイナは私が怖い？」

「馬鹿」

一瞬も間を置くことなく、ぽかっと軽く殴られた。

リイナは笑っているけど……目は笑ってない。本気で怒ってる。

「私達は友達でしょう。嫌いになるわけないよ」

悩みで一杯だった心が少しだけ軽くなるのを感じる。リイナにも会わずに一人でいたのは……自分でも気付いていなかったけど彼女にも拒絶されるのが怖かったからか。

思えば私達も……少し前の私達では考えることもできない状況にあるなぁと苦笑する。

「短い間で随分変わった……私は人を殺して、リイナは新しい命を産む」

「……本当に悩んでるんだなあ。あのクルスが」
「何も考えてないと思われるのは心外」

不貞腐れて横を向く私に、リイナはクスクス笑った。
「だけどね……と、彼女はお腹に優しく手を当てて言う。」

「悩んだらいいんだよ。本当はね……この子のことをエリーと相談したとき私も悩んだんだ。あの日話したみたいに……本当はすぐに素直に喜べなかったんだ」
「リイナ……そうなの？」

リイナは私を見て少しばつが悪そうに頷いた。

「悩んで悩んで……どうしたらいいかわからなくて……どうしようって泣きついたらの。怖くて墮ろそうかとも……そのときは考えたんだ。情けないよね」

「エリーはなんて？」
「今なら魔法の薬で墮ろせるけど……マイスの子供殺すのって」

言いそう。普段は優しいけど……マリアに似て、同じ人とは思えないくらい厳しくなることもエリーにはある。ジンおじさんには絶対に見せない顔……。

「リイナはどうしたの？」

「絶対嫌！　って。そしたら、エリーは笑ってじゃあ喜ばなさいよって。私もクルスと同じ。エリーがいなかったら……　一歩間違えたら奪う側になってたね」

リイナも悩んだんだ。新しい命を産むって大変なのかも……　今の私にはわからないけれど。

「リイナは今、幸せだよね」

「うん。この子のこと喜んだら悩みは嬉しいことばかりになったの。クルス、どうせなら……　悩むのも楽しい気持ちで悩んだらいいんじゃない？」

「難しいことをいう」

脳天気そうに笑うリイナに苦笑で返す。でも大切なことかもしれない。

答えを出すことでケイトは私に不幸になって欲しいとは思っていないはずだから。

「リイナ。有難う……　しばらく一人で考えさせて。大丈夫だから」
「そう。頑張ってね。クルス」

楽しく……　か……　私の楽しいこと……　何かあったかな……。

そうやってしばらく考えていると、ふと昔に彼が冒険に出たいと子供の頃に私に語ってくれたことを思い出した。彼は綺麗な光景を

見せてくれて楽しそうに夢を語っていた。

「そうだ……あそこに行ってみよう……何かわかるかも」

彼が大好きだった場所。私達の思い出の場所……私は気付くと走り出していた。

外伝 八話 一つ目の答え

村の南側は山になっていて今の季節は頂上近くまで上がると、歩くのに邪魔になるほどじゃないけど、ちらちらと雪も積もっている。

子供の頃に登ったときはこの丸太の階段や簡易な山道が辛くて、いつまで登るのだろう……と思っていたけど今の自分だと何の苦労もなく登ることが出来るしまう。
病み上がりの今でも。ちょっとだけ寂しい。

あの時はケイトが励ましてくれた。疲れたときには自分は疲れてないはずなのに休ませてくれた。十年近く前からちゃんと考えてくれてたんだと思う。

心がぐちゃぐちゃで……悪夢に悩まされて、誰も信じられなくて……本当はケイトも信じてなくて……でももしかしたらって思ってた子供の頃。悩んで悩んで……死にたかった。

彼は私を無条件で信じてくれた。生きていることを楽しくしてくれた。

あそこなら……今の迷った私でも……何かがわかるかも……。

山頂に登ると昔と同じ風景が広がっていた。山頂の朽ちたベンチは雨風を受けて完全に壊れてしまっていたり、少しだけ変わってい

たけど……。

「……………やっぱり綺麗」

私は時が流れても変わらない、鮮やかな空を湖面に映した風景を見ながら地面に腰を降す。

冷たい風がそよそよと首筋をくすぐり、山登りで温まった身体には気持ちよかった。もやもやした気分がずっと無くなっていく感じがする。

山の向こう側には果ても見えない広大な湖が広がっている。その麓には大きな街が広がっていて……だけど、ここからだとその街も小さくしか見えない。

「エーリディ湖……英雄の湖か……」

彼はここから湖を見て、彼は……そうだ、冒険に出たいって言うたわけじゃない。

ただ、私にこの綺麗な光景を見せたかったって言ったんだ。私のために。

「そっか……そういうことかな……きつとたくさん綺麗な場所があるんだ」

私はあの日、ケイトとは関係なく船に乗ってみたいって思った。面白そうでわくわくして、何かわからないものに触れてみたい。色んなものを見てみたいって思った。村では見れないものを。綺麗な風景を。世界の広さを……初めて。

子供の頃の私なら夢物語だった。だけど今の私は違う。身を守る力もあるし外でも生きていけるだけの技術を身に付けている。後は私が決めるだけ。

「どうしたいのかな……って……決まってるかな……ね」

少しだけ笑って立ち上がり、目を細めて湖の果てを見る。足元には子供のころの自分達が仲良く座ってお弁当を食べている……そんな風に思えて心が暖かくなっていた。

「行こう。探しに」

私はよし！ と声を出して頷く。

一つ目の問題に対して私は……一抹の寂しさとその数十倍の希望を持って答えを出した。

山を降りると日も暮れかけていたので、私は家に帰ることにした。足取りは朝に比べると軽い。少しだけ悩みが減ったからかな。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「おう、帰ったか」

家の扉を開けるとお義父さんとお母さん、妹のセレナが泣き声で迎えてくれた。

朝喧嘩していた二人はもう和解しているようだ。昔からの付き合いらしいし、お互いのことわかってるからなのかな。私にはわかんない。

セレナを寝かしつけ、しばらく三人でテーブルを囲んで食事を取りながらとりとめもない話をしていただけ、今日はお母さんがカランのお見舞に行ってくれてたし、様子を聞いてみることにした。

「お母さん、カランのところ行っただよね。どうだった？」

「そうね……貴女を心配してたわよ。自分の方が酷い傷なのにね」

お母さんがくすくす笑う。少し……罪悪感が。彼にも話をしにいけないといけない。

カランのことを考える。彼は私から冷たくされても、ずっと我慢して私と関わろうとしてくれた。彼がきっかけを作ってくれなかったら私はずっと一人だったと思う。

私自身はどう思っているのかな……と、彼を思い浮かべる。

彼のことは嫌いじゃない。だけど恋愛として考えると……どうなのか……彼といると何故か凄く安心するんだけど、これは好きだからか……

らなのかな？

考え込んでいるとお母さんが笑って続ける。

「貴女と喧嘩してるって聞いていたけど、安心したわ。いい子じゃない……ケイト君もいいけど、あんな子と結婚してくれると私も安心で嬉しいんだけどなあ」

「おいおいおい、駄目だぞ！　お、俺は認めん！」

「お義父さんは黙ってて。お母さん、私は彼が好きかどうか知らない」

話に割り込んだお義父さんを止めてお母さんに聞いてみる。
こついうことは、お母さんの方がいろいろと詳しそうだし。

「うーん、カラン君といるとどんな感じなの？」

「何故かわからないけど安心する。落ち着く感じ」

ふむ……と、お母さんは少し考えて、ふう……と溜息を吐いた。

「それは恋じゃないわね。長く一緒にいたら好きになるかもしれないけど」

「何でわかるの？」

「だって、こつ……胸がときどきしたりしないでしょ？」

彼の顔を思い出して確認し、こくこくと首を縦に振る。

「ああ、もしかして……あの子は貴女のお父さんに似てるかも……ね。ガイ」

「え！ ああ。あいつか……馬鹿正直なところか、怖がりな癖に無謀なところとか……あと、顔もなんとなくバルドスに似てやがるなそう言われてみれば」

「不器用なところが似てるわよね」

お義父さんが苦笑いして頷く。お父さん……か、そういえばお母さんがお父さんのことを楽しそうに話してくれたのは初めてな気がする。ちよつと驚いた。

聞いてみるとお義父さんも仲が良かったらしい。知らなかった。

「でも、私の好みはお母さんの好みと違うみたい」

「そう……でも案外付き合ってみたらっていうのもあるわよ？」

「まだ成人じゃねえんだ。選んでもいいだろ。うん」

お母さんがちよつと真剣に私に勧め、お義父さんは嬉しそうに頷いていた。そつか……お父さんか。私はカランにも……ちよつと甘えていたのかな……そうかも。

普通はあれだけ殴ったら嫌いそうだけど、そんなことないって安心感あつたし。

きつと彼と結婚すれば私を大事にしてくれるんだろうけど。

私は小さく溜息を吐いた。

とりあえずこの話は置いて大事なことを先に……二人には言っておかないと。

「お義父さん、お母さん。私来月から旅に出る」

「えっ？」

「はあああああ？」

お義父さんとお母さんが変な顔で驚いた。当たり前……かな。急に決めたのもあるし……私もまだまだ村にいて思ってたくらいだし。お母さんが固まって何も言ってくれなくて……私はお母さんの肩をぽんぽんと叩いた。

「どうしたの？」

「どうしたの？ ……じゃないでしょう！」

お母さんが怒鳴った。珍しい。こんな風に怒るとは思ってなかった。

頑張っただけで言ってくれと思ってただけ。

「大丈夫。お義父さんにカイルルまで送ってもらってから」

今度はお義父さんの方を向く。野宿にはそれ程慣れてないから出来れば初めはお願いしたい。

「行ける？」

「あー。いや……ちょっと待て……いきなりなんでだ？」

怪訝そうな顔でお義父さんは私に聞いてきた。色々と理由はある。私がいてはお義父さんやお母さん、セレナも変な目で見られるかもしれない。だけど一番の理由は。

「世界中見て回ってくる。まず、船に乗る」

「一人でか？」

お義父さんはこちらを真剣な顔で見つめる。きっと私が旅に出るという可能性も考えてくれてたんだと思う。ケイトがお義父さんに何かいい含めていたらしいし。

私は少し考えてから答えた。

「まずはケイトと合流する。ケイトに断られたら一人でも」

「……そうか」

お義父さんが溜息を吐いて肩を落とし、お母さんの方を見た。

お母さんは泣きそうな顔で私を見ている。この顔にはちょっと弱い。

「なんで急に……」

「村にいたら解らない答えがたくさんあるから」

答えを探していると、新しい疑問が沢山わいてくる。恋愛のこと、友人のこと、旅のこと、闘いのこと……そして、新しい命のことと人を殺すということ。

このまま村にいたら何も分からない。そのもやもやを抱えて生きるのは……。

多分、私にとって最高の幸せとはいえないと思う。

「お母さんが心配だけど、お義父さんがいるから安心」

「私は……行って欲しくないっ！」

泣き始めたお母さんの背中をお義父さんがさする。お義父さんは、お母さんを慰めながら、苦笑いしながら私に言った。

「ケイトとの約束だ。お前が村に残るように説得する代わりに、自分の意思で旅に出たいって言ったら認めてやれってよ。あの野郎、ここまで読んでたのか」

「そうなんだ」

「正直俺も行つて欲しくはねえがな。大事な娘だ。危険なところにや行かせたくない。旅は辛いこともあるぞ。こないだみたいな命の危険もある。それでも行くのか？」

私はお義父さんとお母さんの方を向いて……頷いた。

「戦いは怖い。辛いのも嫌。だけど、それ以上に……私も広い世界を見てみたい。カラン達が教えてくれた知らない人と関わることの楽しさを感じてみたい。誰のためでもなく、私がやりたいの」

「やれやれだなあ……ケイトがいなくなって安心してたんだが。クルスも変わったな」

苦い顔でお義父さんが俯く。お義父さんには本当に感謝している。父親の事をほとんど知らない私をずっと気にかけてくれた。諦めないでいてくれた。大切な人に引き合わせてくれた。セレナとお母さんを幸せに……してくれる。

私がいなくてもきつと大丈夫。信じることができる。

「ごめんね。お義父さん。お母さん」

熱いものが込み上げてきて、私はお義父さんの側で泣いているお母さんを抱きしめた。

私はなるべく明るく笑おうとしたんだけど……私も少しだけ泣いていた。

外伝 九話 さよなら

翌日、私はカランの家を訪ねた。家の前まで来ると何故か少し緊張する。

カランとはあの日以来、顔を合わせていない。あの日の様子を考えると何を言われるか怖くて、同じジンおじさんの所にいたにも関わらず逃げるように避けてしまっていた。

意を決してどんと家の扉を叩く。そうすると、しばらくして中からふくよかな身体の……お母さんと同じくらいの歳のおばさんが出てきた。あんまりカランには似ていない。はいはいと明るい声を上げて出てきた彼女の顔が私を見ると強ばる。

「あんたかい。何しにきたんだい？」

「カランに会いに」

用件を告げるとカランにあまり似ていないおばさんは腰に手を当ててドアの前に立ち、険悪な表情で私を見た。

「あんた……あんた……よく家に顔を出せたもんだね」

「……遅くなつてすみません」

助けてもらったのに確かに失礼だったかもしれない。私は頭を下げた。

だけど、彼女は納得していないみたい。

「毎日毎日ぼろぼろにして……今度は怪我をさせて……いい加減におし！」

「やめなさい」

怒る彼女の後ろから肩を叩き、カランによく似た……彼よりも穏やかで落ち着いた雰囲気の中年の男性が出てきた。大声を聞いて出てくれたのだろう。

彼は落ち着いた声で私を中に入るように促す。カランの母親は溜息を吐いて家の中に戻っていき、私は父親にカランの部屋へと案内してもらった。

「すまないね。あいつもわかってはいるんだ。誰も悪くないってね。殴られてるのは息子の自業自得。こないだのもあいつが先走ったせいだ」

カランのお父さんはそういつて私に頭を下げた。私は首を横に振る。

今まで考えたことはなかったけど……母親として、大事な息子のことは本当に大切なんだと思う。怒るのは当たり前。

お義父さんが私が一方的に殴られた……とか聞いたら何するかわ

からないし。

「いえ…… 本当にごめんなさい」

「ははっ。君に謝られたりする日が来るなんてね。信じられないよ」

困ったように笑ったカランのお父さんに頭を下げた。しかし……私はどんな風に村の人に思われているんだろう。気にしない方がいいかもしれない。

「ここだよ…… ま、上手く振ってやってくれ」

そうにこやかに笑うとカランのお父さんは軽く手を振って去っていった。

私は驚いてその後ろ姿を見送っていた。

中に入るとカランはベッドの上で、退屈そうに寝転がっていた。歩けないわけではないけど、まだ傷口が開くからと安静を申し渡されている。

全く動かせないと動けなくなるらしいので、毎日少しずつ動かしている…… ってエリーが言ってた。本当に…… 悪いと思う。

「はあ…… やつちまつたよなあ…… だせえ」

「カラン。こんにちは」

「うおあああ！ ク、クルスっ！」

私が来たのに気づいていなかったらしいカランは声をかけると驚いて身体をばたばた動かして……足の痛みで顔をしかめていた。私は彼の部屋の椅子を借りて座ると、彼が落ち着くまで待つことにする。

「遅くなつてごめん」

「なんでクルスが謝るんだ。俺のせいだから！　つあたた……」

カランは足を抑えて少し痛みが収まるのを待ってから、困ったように笑った。

「私のこと……怖くないの？」

「当たり前だろっ！　馬鹿いっくんじゃない。あのときはどうかしてたんだ」

そういつてカランは悔しそうに拳を握った。今は本当に私のことが怖いとかそういうのはないみたい。試しに手を触ってみただけ、びくつと一瞬震えただけだった。

なんだか触っている手が熱くなつてきてる気がするけど。

「ク、クルス？」

「……本当に怖くないんだ。カランは凄いな」

私を助ける為に……戦いに全く縁のないカランが自分が刺された上に、私が敵に止めを刺したところまで見たのに。もう乗り越えたのかな。

私なんて何度も何度もあの瞬間を夢を見て跳ね起きて……全然なのに。今でも思い出すと震えてしまうのに。戦いの恐怖で……。

「そ、そんなことねえよ……それより、クルスは大丈夫か？」

「怪我は治った。心配無い」

「そっちなじゃないんだけどな。ま、大丈夫そうか」

そう呆れたようにカランは笑った。そのまま、会話が途切れる。こうして、カランとゆっくり話すのは初めてな気がするし……何を話せばいいのかわからない。

私は少し考えて、ここに来てから忘れていることを思い出した。

「カラン。助けてくれてありがとう」

「お、おう、格好悪かったけどな」

「そんなことない」

照れているカランがおかしくて、少しだけ笑った。そして、心が痛んだ。

これから彼に言わなければならないことを考えて。

「私はカランに謝らないといけない」

「……………な、何を？」
「えと……………」

言葉にすれば簡単なこと。それなのに、中々言い出すことが出来ない。どうしても躊躇してしまう。私はこんなに口下手だったかな……………。

カランの手を離して、両手の指を揃めあわせる。手の平にはじつとりと汗をかいていた。

「カランには感謝してる。カランがいなければ、私は知らない人とは誰とも関わらなかつたと思うから。この何ヶ月で色んな事を学ぶ事が出来たのはカランのお陰」

「お、おい、クルス……………」

どうしてこんなに苦しいんだろう。カランも私に拒絶された時はこんな気分だったのかな。

「カランが私に何度拒絶されても真っ直ぐに向かつてきてくれたから。私もちゃんと……………人と向き合うことが出来るようになった。好きになるってどういうことか教えてくれた」

辛くても、胸が痛くても、言いたくなくても最後まで言わないと。

「私は弱いっていつも言ってたけど……………今はカランは強いと思って

る」

それが私を好きになってくれたカランに出来る唯一の事だから。

「私は……カランのこと、嫌いじゃなかった。この村に残ればもしかしたら好きになれたかもしれない。だけど……ごめん」

「クルス、まさか……村を？」

「うん。私は旅に出る。色々な答えを知る旅に」

そう言い終えると大きく息を吐いた……カランの顔を見るのが怖い。

命を賭けて助けてくれた人の想いに応えることが私には出来ない。

だけど、カランの声ははつきりとしていて……落ち着いていた。

「そうか……聞いて欲しいんだ。クルス。俺は決めてたことがあるんだ」

「え……？」

「もし、今日のようにお前がケイト達みたいに村を出ることになったらさ。俺も男だ。絶対に笑って送ってやるって……お前なら絶対平然と行くと思ったから。なのに……」

カランが辛そうに顔を歪めながらも、こちらをしっかりと見つめている。

「お前が泣いてどうすんだよ！俺まで泣きそうになるじゃないか！」

「う……」

なんだか最近泣いてばかりだ……私。恥ずかしい……こんな弱かったっけ？

カランは困ったような顔で微笑んでいた。

「なあ、やっぱりケイトが好きなのか？」

「好き……でも、それもきちんと本当にそうなのか……ちゃんと答えを探す」

「だったらさ。もし本当に好きなら、あいつに他に好きな奴がいても……」

カランはそこで言葉を止めて握りこぶしを作って、上に向けて何度か殴る真似をした。

なんとなく意図がわかって、私は声を上げて笑った。

「うん。絶対に諦めない。力尽くでも手に入れる」

「それでこそ俺が惚れた女だぜ」

そういつてカランも明るく笑った。その顔を見て私は椅子から立ち上がる。

「クルス……頑張れよ。お前の活躍が村に届くの期待してるからな」
「カラン。ありがと……さよなら」

そして、背中を向ける。

お互い泣いてる顔は見せたくないだろうから。

外伝 第十話 青い鳥

心が決まると私は数少ない同性の友人であるエリーとリイナにも旅に出る事を告げた。

二人とも複雑そうな表情ではあったけど、

「そつか。ヘイン君と弟のことお願いね……私みたいに素敵な人探すのよ?」

「うう……やっぱそうなっちゃったか。寂しいし残念だけど……クルスが自分がやりたい事なら仕方ないよね……だけど、絶対に元気でいてね?」

と、それぞれ苦笑いしながらも私が旅に出ることを納得してくれた。

あんまり女らしいことがわからない私のために彼女達はいろいろ考えてくれたし……相談にも乗ってくれた。私も二人の幸せを心から願った。

本当はすぐにも旅に出ることは出来る。だけど私はケイトと………ついでにあのエルフへの手紙を書いたり、マリアとの訓練を続けながら時を待っていた。

あの事件から二週間程の時間が流れた頃、いつも通りマリアと訓練をしていると遠くから馬の鳴き声が聴こえてきた。私が待ってい

た……ようやくその相手がきたようだ。

私の前で剣を構えていたマリアもそれに気付いて剣を納めて微笑む。少しだけ疲れているのか用意している手拭いで額の汗を拭いていた。初めは私とケイトとマイスの三人を相手にしても汗ひとつかいていなかったことを考えると……腕は上がったのかなと思う。

「動きに迷いが少なくなっただね。教えるのも今日までか……残念」

「ありがとう。マリア」

「どういたしまして。元気でやるのよ？ それから……」

マリアはにやつと獰猛な獣を思わせるような迫力ある笑みを浮かべて私の肩を叩いた。

「貴女は私の弟子の中では一番よ。負けたら許さないから」

「わかった。誰にも負けない」

「ならよし！ さ……グールド様が待っているわ」

私はマリアと笑いあうと、訓練の道具を二人で片付けて客人を迎えるために歩きだした。

グールドとモルト村長の話が話をしている間にマリアに水を借りて体を拭き、服を着替える。服は……マリアが色々と用意してくれたけど、結局、動きやすい服を選んだ。

三十分ほどすると話が終わったのか、部屋で待つ私をマリアが呼びに来てくれた。

私は彼女に連れられて、グルードが待っている客間に向かう。

「こんにちは。久しぶり」

「ああ。最近忙しかったものでな。報告も遅くなってしまったよ」

モルト村長に頭を下げて、グルードに外で話そうと声を掛ける。彼は一瞬きょとんとしたけど、ああ、といつもどおりに力強く頷いた。

私が歩くのを選んだのは初めて案内した村の西側。作物が刈り取られた後の畑がある場所だった。深く考えてのことではなく、なんとなく……だけど。

初めて歩いたときのように二人で枯れ草の匂いがする小道をゆつくりと歩く……彼と会ったのもつい最近のはずなのに、もう随分前のように思える。不思議な気分。

グルードはそんな私をしばらく太い眉を寄せて怪訝そうに見ていたけど、そういえば……と、こちらを向いて口を開いた。

「クルス。君にも報告は必要か？」

「お願い」

短く答える。村を出るにしても……聞いておきたい。彼等はケイ

トを探していた……場合によっては彼が危険に巻き込まれる可能性もある。

グールドは仕方ないなと苦笑して、話してくれた。

あの日、村に来た残りの傭兵はマリア、グールドとその部下、お義父さんが指揮した三十人近くの村人達とで協力して被害なしで捕らえることに成功したらしい。

だけど……。

「捕まえた奴らは何も知らなかった。『呪い付き』を探してたってことだけだ」

「そう……」

「詳しいことはウィルスって男と君が殺した男だけが知っていたようだ」

お金で雇われているだけで詳しくは知らなかったらしい。

グールドは難しい顔をして、だが……と続ける。

「君が聞いた話を村長から伺ったが……この事件は意外と根が深い。私も国と近郊の領主に報告書は出したが……大きな力が動いているようだ」

「大きな力？」

「個人や小さな組織が出来ることじゃない。やり口も……狂ってると思うえん」

嫌悪感を顔に出して言い捨てる。生真面目そうなグールドには不

快なんだと思う。

彼は常にまっすぐで正々堂々だから。そこが彼のいいところだけだ。

「君の友人にも手紙か何かで注意を呼びかけた方がいいかもしれない。危険だ」

グルードは真剣な顔でケイトの心配をしていた。
彼が本当に私と結婚するというなら、ケイトは敵ではないんだろうか……不思議に思っただけグルードをじっと見つめる。

「な、なんだ？ クルス」
「うん……グルードはいい騎士なんだなと思って」

意味もわからず首を傾げているグルードが少し可笑しくて、私は微笑む。

「だけど、ケイトは大丈夫」
「ほう……随分と信頼しているのだな。それほどの男か」
「違う。私が守るから」

グルードが驚いたのは一瞬だけだった。
すぐに穏やかな笑みを浮かべて……グルードは、そうか……と、遠くを見て呟いた。

「恐ろしい腕を持っている……あのマリア殿の弟子の君が守るのなら安心だな」

「ごめんなさい」

私がグルードに頭を下げると、彼は明るく大声で笑った。

こちらは真剣なのに……失礼じゃないだろうか、軽く睨むと彼はすまないと謝り、

「どちらにしろ二年待たなければならんだから……聞いた時は驚いたよ」

「年齢聞いたら……子供扱い？」

少しだけ怒りを感じる。だけど、彼は微笑んで首を横に振った。

「結婚して欲しいという言葉を撤回はしない。今は駄目そうだが……君が旅に出てケイト君をもし見限ったなら……二年後、私にもう一度結婚を申し入れる機会が欲しい」

「……正気？」

「くくっ！ またそれが。正気だよ正気」

呆れたように見る私にグルードは男らしいからつとした笑いで応えた。だけど、あまり嫌な感じはしない。彼のような男にそう言われるのは多少は嬉しい。けど、

「大丈夫、グルードの心配は杞憂。多分……だから、いい人を探して」

「まあ、未来に何があるかはわからんからな。お互い頑張ろう」

そういつてグルードは右手を差し出した。私もしっかりとそれを握る。

「ありがとう。グルード……貴方に会えてよかった」

暖かい春の太陽のような性格の彼には湿っぽい別れは似合わなさそうだ。

だから、私は出来る限りの笑顔を彼に見せた。

グルードとの別れを済ませたことで私が村にいる理由は完全に無くなった。

ケイトへの手紙も、もう出してある。

手紙の内容は悩んだが、結局短く済ませた。話したいことは山ほどあるけど……手紙には書ききれそうもない。それなら直接会って話せばいい。

リイナのこと……彼女には悪いけど、私は話す。マイルスが心配なのはわかるけど私は友人として彼を信じている。自分で答えを出してくれるはず。

旅の準備も済ませた。後は……明日、村に別れを告げる。
眠れないかと思ったけど、睡魔はすぐにやってきた。

気付いたら不思議な空間に私はいた。

足元に地面は無いのに立っている感触があり、暗闇で周りは何も見えないのに目の前に立っている女性は……ぼやけているけど見える……この感覚を私は知っている。

これは私の夢。昔に見ていた悪夢の残骸。

「久しぶり……ずっと見ていた。大きくなったね」

「久しぶり。助けてくれてありがとう」

目の前の彼女に頭を下げる。彼女は落ち着いた表情で微笑んでいる……と思う。

私の前に立っているからは昔の憎悪や狂気はまるで感じられない。でも、この前出た時は昔の狂気を感じた……よくわからない。

「どうして助けてくれたの？」

「そうね。貴女の憎悪に引きずられたのもあるけれど……」

彼女はしばらく考えるように黙って、

「そう……まだ、貴女が頑張る姿をまだ見ていたかったから」

「私は貴女じゃないって、消えてって……酷いことを言ったのに？」

私は彼女のぼやけている顔をまっすぐに見る。敵意は感じないけど……意図がわからない。彼女には私を助ける理由が無いように思える。

「怒りに我を忘れて、狂っていた私の方が貴女に酷いことをしていたしね。あの言葉でようやく目が醒めたのよ……冷静になれたの」「冷静になった？」

「ええ。私は自分が嫌いだったから……自分と違う貴女ならもしかしてと思ったの」

目の前の彼女は、落ち着いた様子で続ける。

「それに私は醜いの。その時は様子を見てればいいと思っていたわ。『私』だから、すぐ不幸になるって。そしたら身体を奪えばいいって……そうやって笑っていたのよ」
「今は……違うの？」

彼女の告白を聞いても自分は意外と冷静でいられた。私の問いに彼女は頷く。

「優しい両親、素敵な友達……私にはなかったものを貴女は手に入れた。私にばろばろにされた心を強くして、頑張つて。それを私は中から見えた」

私を諭すように、羨むように彼女は続ける。

「それは当たり前にあるものじゃないの。だから、私は嬉しかった」
「そう……」

「暖かいものを教えてくれた貴女に感謝してる……それと、本当に御免なさい。消えてあげたい……貴女に合わせる顔もない……だれと消えられないの……」

見えにくいけど、多分頭を下げたのだと思う。彼女と向き合つてると心が伝わってくる。彼女の後悔と謝罪は真実なんだと思った。

「構わない。私はもう気にしてない……お陰で色々な人に出会えた。ケイトとも会えたし、お義父さんもできた……命も助けてくれたし、おあいこ」
「ありがとう」

ふっ……と、ぼやけている彼女の姿が私に近づき、私を抱きしめる。

私の身体に涙が落ちている……そんな気がした。

「言っておかなければいけないことがあるの」
「……………何？」

抱きしめながら彼女は落ち着いた静かな口調で大事なことから
……………と話す。

「前の力は多分もう自由に使えるはず。でも、今回は上手くいったからいいけれど……………私は余り助けてあげられない。体に乗っ取るといけないから」

「本当に……………乗っ取りたくないの？」

「私は貴女も気に入っているの。それに……………私のたった一人の大事な人はもういないから」

彼女の表情はわからないけど……………その言葉は寂しそうに私の耳に響いた。

「クルス……………これから旅にでるのね」

「うん。そう……………青い鳥を探しに行くの」

ケイトがくれた鎖の付いた幸せの青い鳥。それは壊されてしまっただけれど……………悲しいけれど……………あの青い鳥は私を広い空に羽ばたかせるためにあつたんだと思う。

「そうね……………クルス。私と違う貴女なら縛られていない……………本物の

青い鳥を見つけれれる」

「ありがとう、もう一人の『私』。私、頑張るから。強く……幸せに生きてみせる。安心して中から見てて。絶対に大丈夫だから」

私は敢えて……目の前にいる、かつては否定した自分を苦しめていた人を……そして今は私の中で見守ってくれている人……助けてくれた人を『私』と呼んだ。

きっと彼女は私の中で罪悪感を感じながら、辛い思いをしながら見守ってくれていただろうから……それが心を通じてわかってしまっから。一緒に幸せになれば……そう思った。

彼女は驚いて押し黙ったけど、しばらくして嬉しそうに笑った。

「ふふ……中で楽しみにしてる。頑張ってね……もう一人の『私』」

私は私の自分の幸せを、自分の力で掴みに行く。

もう一人の自分と笑いあう私の心に、今までにない晴れやかな気持ちがいっぱい溢れていた。

外伝 エピローグ

三日間の旅路は私が想像していたよりもずっと厳しかった。

足は痛いし冬だから寒いし防寒具が重いし……でも、焚き火を囲んで食事をしながらお義父さんから冒険の話を聞くのは楽しかったし、星空は綺麗だったかも。

それに村の中だけではわからないことが沢山ある。ただ、この刈り取られた麦畑の間に伸びている道を歩いただけでも……私にとっ

ては目新しいものが多くて楽しかった。

本当に狭い世界に生きていたんだと思う。

新しいことを知るのは楽しい。

子供の頃はケイトが色々と教えてくれたけど、今は自分から知ろうとしている。

お義父さんはそんな風に観察しながら黙って歩いている私を心配そうに見ながら、

「クルス……足痛くないか？ 大丈夫か？」

「心配しすぎ。大丈夫」

と、何度も何度も……確認してきていた。

確かに私は何日も連続で歩いたことはないけれど、普段厳しい訓練を受けてきた分、丈夫だと思っている。昔からそうだけど、心配性すぎる。私はもう子供じゃないのに。

歩きながらケイト達はとうだったのかともお義父さんに聞いてみた。

やっぱり初めはケイトもマイルスも辛そうだったらしい。でもあいつらは……と、お義父さんは呆れまじりの溜息を吐いて教えてくれた。

「マイルスは疲れてる癖に無駄に元気でうるさいわ騒ぎまくるわ……ケイトなんてメモに何か書いたり、歩きながら道端に生えてる薬草を採取してやがった。緊張感の欠片もないんだ。呆れるぜ」
「凄いね。私は珍しいのばかりで驚いてるだけなのに」

やれやれお前もか……とお義父さんは苦笑して続ける。

「俺とジンなんて……案内してくれたマリアさんに強がって見せてたが、内心ビクビクしてたもんだ」

「……お義父さんが？」

いつも堂々としていて……まあ、お母さんの前だとあれだけど……陽気で細かいこと気にしなさそうなお義父さんが？ ジンおじさんもそんな緊張するような印象ないけど。

「まあ、あんときや若かったからな。見ず知らずの世界に飛び込もうってんだ。当たり前だろ。色んな出来事を乗り越えて、俺もあいつも強くなっただんだ」

「そうなんだ……私も強くなる。お義父さんに負けないように」

心配させないように言っただけだけど、お義父さんは複雑そうだった。

少しだけ頭垂れた後、困ったように笑って遠くを指さす。

「……あんま強くなるのも複雑な気分だがな……ほら、見えたぞ。この坂の下で遠くに見える街が城塞都市カイラルの一部だ」

「あれが一部……？ 城塞都市……城壁は？」

「壁の中に収まらないくらい人がいるから、壁の外まで街が漏れてるんだよ」

なるほど……と私は頷く。話で聞くのと実際みるのでは全然違う。私は足を止めて、目の前に広がる信じられない光景を呆然と見つめていた。

村みたいに家の間隔は空いてないみたい。遠くから見ると家が視界一面に並んでいるように見える。どれくらいの人がいるんだろう。想像もつかない。

これが……街……！

「すごい。こんなに人が……」

「ああ。いい奴も悪い奴も人間以外もたくさんいる。騙されるな」
「それと騙すな……だよな」

お義父さんに微笑むとお義父さんはそうだと、笑って力強く頷いた。

物売る威勢のいい声や、楽器を引いたりといった喧騒溢れる夕暮れの通りを真っ直ぐに歩いていくと、やがて人が並んでいる巨大な門の前に辿り着いた。

どうやら街に入るには兵士の確認が必要みたい。門の前では鎧を着た二人の兵士が並んでる人に確認を取っていた。お義父さんによると、この都市の治安を守る衛視という職の人らしい。

「次！　ってまたお前か。最近多いな」

「ガイ・ライエル。二級冒険者だ。まあ今回で最後だ」

お義父さんと知り合いらしい初老の兵士は呆れたように笑い、お義父さんも苦笑いしていた。知り合いなのは……毎回お義父さんが街に来る人を案内しているからかな。

初老の兵士は皺のある顔に笑みを浮かべてこちらを見る。なんだから楽しそう。

「で、そっちのえらい別嬪のお嬢ちゃんは？」

「俺の娘だ」

「ほう……お前さんのなあ……かっかっか！　似てなくてよかった

なあ」

「うるせえ！」

初老の兵士は近くで立っている気難しそうな若い兵士の肩を叩く。彼は頷くところらへと歩いてきて……初老の兵士はこちらを向いて言った。

「わしは東門の衛視長のミハイルじゃ。よろしくな。ここでは、名前、出身、目的、荷物の確認、犯罪者の確認を行う。その若いのに言ってくれ」

「クルス・ライエル。クルト村から来た。冒険者になる」

私は頷いて若い兵士に荷物を渡す。何故か初老の兵士も若い兵士も驚いているようだ。

剣を腰に下げているし、驚く事ないと思うのに……何故か、私が狩りをしているとか戦うとか説明すると男の人はみんな驚いている気がする。

「何か？」

「いや、すまんの。驚いた……嬢ちゃんも冒険者志望か。ガイ……お前のとこの村はどうなってんだ？ こんな娘まで冒険者か。何人来るんだ？ まさか、お前んとこの村はやべーのか？」

「俺も止めたんだが……クルスがいっつらの中で一番強いんだ」

「嘘だろ……？」

あいつら……というのは先に来ている他のみんなのことだろう。兵士二人はそれを聞くと苦笑いしつつ、通ってよしと中へ案内してくれた。

彼らがあんな反応をするのは……きっとみんな頑張っているからに違いない。

そう思うとちょっと嬉しかった。

城壁の中は、外よりもしつかりとした作りの家々が立ち並んでいた。

外の喧騒とは少し違う感じ。

外よりも落ち着いているというか……人が暮らしている感じがな色んな人が歩いているけど、外のような活気じゃなくて村に住んでいたときのような生活感がある。

お義父さんの話では街は方角によって全然姿が違うらしく、今、私たちがいる東側は住宅が多い地域みたい。冒険者が多いのは南側だから、まだ少し歩かないと。

街に入った安心感で疲労が一気にきたけれど、なんとか気を取り直して歩く。

黙々と歩いているとお義父さんがあつと声を上げてこちらを向いた。

「そうだそうだ。聞くの忘れてたぜ……クルス。すぐにケイトのところにいくか？」

「明日でいい。今日は宿でちゃんと身体拭いて……綺麗にしてから

会いたいから」

三日の旅の間、全然身体が拭けなかったから……汗の臭いも気になる。

こんな姿では会えない。絶対に駄目。

「なるほどなあ。お前もそついうの気にするんだな」
「当たり前」

私はそんな風に意外そうに言ったお義父さんをちよつと睨んだ。

明日になったらいよいよ私を置いていった友人達に会うことができる。

まずは何から話をしようか……そして、これからどんな旅が待っているのか……私は胸を高鳴らせながら宿に向かって歩いているお義父さんの少し後ろを歩いていた。

村では考えられない石を敷き詰めたような不思議な道を歩きながら私は微笑む。

さあ、私の冒険を始めよう。

二章前編 あらすじ

二章の前半の簡単なあらすじ

覚えておられる方は飛ばしてください。

まとめ方が上手くないので、時間に余裕がある方は読み返しても
らえれば嬉しいです。

二章完結後、改訂した後にこのあらすじは削除する予定です。

1～8章

城塞都市カイラルは二重の城壁と、その中に入りきらずに外にまで広がった街からなる巨大な都市である。街は東西南北、方向ごとに特色があり様々な顔を持っている。

城塞都市カイラルの最大の特徴は『迷宮』と呼ばれる巨大なダンジョンが存在していることである。

このダンジョンで出る怪物は倒すと『魔力石』と呼ばれる石に変化する。この石は加工がやすく、様々な道具に利用されるために需要が高い。また、特殊な財宝などが見つかることもある。

それ故、冒険者は腕を磨くため……日々の糧を得るため……そして大金持ちになるために冒険者達は日々迷宮に潜っていた。

住み慣れた村を離れる決心をしたケイトは強くなるために旅に出

ることを決めたマイルスと共に、師匠であるガイに連れられて城塞都市カイルルへと向かった。

彼らもまた、冒険者となるために。

慣れない野宿を続けながらカイルルに着いたケイト達は一晩宿に泊まると、冒険者になるための書類上の手続きを行い、城壁の中で暮らしている古い知り合い達に会いに行った。

初めに訪ねた子供の頃に出会ったエルフ、ラキシスの家で非友好的な白い狼の獣人、シーリアと出会う。マイルスがシーリアを怒らせたりあったものの、ラキシスの命令で彼女にカイルル王立学院への案内をもらうことになる。

カイルル王立学院では、幼なじみの一人のヘインが貴族から仕事を引き受けてお金を稼ぎながら学業に励んでいた。ヘインはケイトとマイルスに異種族が絡んでいる事件が発生していることを告げ、ケイトの兄であるカイルや幼なじみのホルスがそれに関わっていることを告げる。

マイルスは友人は疑えないと怒るが、ヘインが確信を持って告げている雰囲気であったためにケイトは悩んでいた。

ヘインとまた会うことを約束した二人は、ガイの紹介で兄達も利用していた『雅な華亭』に宿を取り、すぐにガイと共に初の迷宮探索に乗り出すことになった。マイルスが油断して毒を受けるなどもあったが、初の探索は二人で協力することで乗り切ることが出来た。

この探索は十年近くに及ぶ師弟関係の終わりを意味していた。

探索後、宿の主人のエーデルおばさんに初探検であることを紹介されたことで、歓迎するものもいれば歓迎しないものもいることを知った。

翌日、ガイは二人からの手紙を持ってクルト村へと帰っていった。

プロローグと9～15章

師匠のガイと別れてから二ヶ月経ち、二人は時に誰かと協力したりもしつつ、迷宮の探索を続けていた。ただ、若さが災いしてか中々いい仲間にはめぐり会えない。

そんなある日、マイルスが以前酒場で争った相手から協力を要請されて引き受けてしまう。ケイトは危険を承知でマイルスにも危険を学習してもらおうとそれを承知する。

マイルスに声を掛けた冒険者達はゴブリンの大群に遭遇するとマイルスをけしかけた上で、逃げさってしまう。この件でケイトはいかに自分が甘いかを思い知りつつ、生き延びるために動揺を抑えて逃げるために魔法で相手の気をそらしてマイルスと二人で逃げた。

悪態を付きながら大量のゴブリンから逃げていたが、逃げている先に二人の冒険者がいることにケイトは気付く。巻き込むことを恐れたケイトはマイルスに声を掛けて厳しい戦いに向かうことを決意した。

それを見ていた冒険者の一人、ドワーフ族のゼムドはケイトとマイスに加勢してくれたため、二人は何とか怪我をせずにゴブリンを倒すことに成功する。

ゼムドは自分が助けようと思ったわけではなく、もう一人の冒険者。彼が姫と呼ぶ人物から加勢するように頼まれたと説明する。

その女性は以前、ラキシスの家で出会った白い狼の女性、シーリアだった。

シーリアは迷宮に初めて潜ったこともあり、上手く動くことが出来ずにいた。

そのせいで初めて組んだ仲間から罵られて見捨てられ、心が折れかけていた。それを察したケイトは後で憎まれることを覚悟して、彼女をわざと怒らせる。

シーリアは怒りで緊張が解けたのか、最後は魔力が尽きて倒れたものの元々の実力を発揮することが出来た。

その後の宴会でシーリアからケイトの意図はばれだつたと告げられ、暴言を許す代わりに獣人一人で買い物するのは難しいため、翌日買い物に付きあうように言われる。

結局その宴会でシーリアは飲みすぎて家に帰れなくなりケイトの部屋に泊まることになる。

翌日、シーリアと二人で出かけたケイトはシーリアに案内されながら店を廻った。彼女の目的が、義理の親であるラキシスへのプレ

ゼントであることを知って、彼女のことを見直す。

ケイト自身は故郷に残してきた幼なじみのクルスへのプレゼントを探し、硝子細工で作られた青い鳥の首飾りを買う。それをからかうシーリア。

それを見てシーリアは初めて冒険した記念にと、お互いに何か買うことを提案した。彼女はケイトにノームのバッチを贈り、ケイトはシーリアに対して月を象ったペンダントを贈った。

そんな風に楽しんでいた二人の前に、シーリアを見捨てた二人の冒険者が現れる。

二人はシーリアを拐かそうとしているとケイトは判断し、対峙することになる。

ケイトは二人のうちの優男、サイラルに自分とクルスにしかなかった特殊技能があることに気づき、動揺してもう一人の男、ザグの攻撃を許してしまう。

二人ともケイトよりもレベルは高かったが素手での戦い方の技術を持っていなかったため、ケイトは油断していたザグを倒すことに成功する。

サイラルはケイトに『この世界は所詮お遊び』という言葉と、いつかシーリアを手に入れることをケイトに告げ、ゼムどに優しくとザグを放置して去っていった。

それから二ヶ月、サイラルが干渉してくることもなく四人で冒険することになった俺達は順調に冒険を続けていた。

しかし、変化は足元に迫っていた。
ゼムドの変化と……そして一枚の手紙という形で。

第十六話 相談と再会

夕方の『雅な華亭』はいつものように大勢の冒険帰りの冒険者や仕事を終えた住人達で賑わっていた。エーデルおばさんの作る美味しくてポリュームのある料理が食堂のテーブルを占拠し、客は酒と料理と友人達との雑談で一日の疲れを癒している。

俺達もまたテーブルを囲んで食事と酒を楽しんで……いなかった。今日も一日の迷宮探索を終えた俺達は料理を摘みながら、一様に難しい顔をして話している。別に今日の稼ぎが悪かったとか仲間の動きが悪かった……とかではない。

原因は一枚の手紙。クルスが来るといふこの手紙が原因だ。遊びに来るのならそんなに問題はない。何日か迷宮探索はできなくなるけど、付き合えばいい。だが、クルスがこの街に来るといふことはその意味は一つしかない。

すなわちクルスが冒険者になるといふことだ。

「そういうわけで、俺達の幼馴染が明日来る」
「ふうむ。にしては嬉しそうではないのお」

苦笑いしながら手紙のことを俺が話すとシériaはあからさまに不機嫌そうな表情になり、ゼムドは探るような……少しだけ楽しそ

うといった様子でこちらを見る。

ミスも他人事のように笑っているが……あのクルスがミスにも特別に話があると書いてあるのは……あんまりいい予感はないのだからだろう。

ゼムドは長い髭を触りながら、考え込むように目を瞑ってしばらく黙ってから口を開く。

「拙僧としては……そのクルスといったかの。その娘次第じゃない」
「私は反対！ 折角四人で上手くいってるのに。連携がおかしくなるだけよ」

白い髪、赤い瞳を持つ狼の獣人の女性、シーリアは不機嫌さを隠さずに麦酒を煽っている。彼女の言葉にも一理あると認めざるを得ない。

俺はまああとシーリアを宥める……彼女は機嫌が悪くなると酒量が増えるのだからあんまり酒癖がよくない。控えて欲しいのだが、麦酒が気に入ってしまったらしい。

「俺は賛成だな。あいつ本気で強いぜ？」

ミスはエーデルおさんの秘伝のソースがかかった肉料理を頬張りながら一人だけ上機嫌そうな笑みを浮かべてそう言った。

俺はミスの方を向いて黙って頷く。そう、実力は心配していない。

「賛成一、反対一、保留一か……」
「ケイトはどうなのよ」

隣に座っているシーリアがアルコールで少し顔を赤らめながら、
麦酒の入ったジョッキで俺の肩を突っついてこちらを見た。

「一度様子をみたいかなと思って。マイスはともかく二人はクル
スをよく知らないしね」

「……大事な娘だから？」

シーリアが三角形の耳をピンと立てて俺の表情を伺うようにこち
らを見上げる。そう思われるのも当然なので怒りは湧かなかった。
俺はシーリアとゼムドを順番に見て答える。

「同郷の友人だから放っておけないのは確かにある。だけど、剣の
腕は間違いない。問題はシーリアの言うように仲間同士で協力して
いけるか……なんだけど」

そう、これが最大の問題である。シーリアは感情的に言っている
ようである、俺が考えているクルスの最大の問題点を言い当ててい
た。俺がクルト村を出る前のクルスから変わっていないければ……ま
ずい。

クルスを置いていったのも気持ちを確かめるためという理由や、

家庭の事情、成長を願って……ということもあるが、他人と関わらなすぎるために他の人と協力が出来ない……というのもある。

もしそうになると、俺だけでなくクルス自身やマイルスまで危険になると考えたのである。

「それがわからない。だから一度二人に彼女を見てもらいたい……駄目かな？」

「拙僧はそもそも反対ではないからの。構わぬよ」

ゼムドは頷いてくれた。彼としては自分が抜けるかもしれないからというのもあるだろう。シーリアの方はジョッキに口を付けながら悩んでいる様子だったが、

「そんな顔をされたら……断れないじゃない。見て駄目なら駄目っていうわよ」

「ありがとう。シーリア」

「ふんっ」

照れくさそうにそっぽを向いた彼女に礼を言う。彼女は感情的だが、それでも冷静な判断を失わないし頭の回転は早くて鋭い。流石学院の生徒といったところか。

多分クルスのこともしっかり見てくれると思う。

俺がそうやって安心してしていると、俺の前の席で聞いていたマイルスが、あ……！ と大声を上げてこちらを向いた。

「そついや、ケイトお前……そんでシーリアが駄目って言ったらどうすんだよ」

「その時は……」

頭をがしがしとかきながら考える。もし、それでゼムドとシリーアが駄目と言ったら俺達は彼等かクルスかを選ばなくてはならなくなるということか。

急なこちらの都合で別れを切り出すのは不義理だ。特にシリーアはラキシスさんに直接頼んだというのもある。だが、クルスを放っておくことは俺には出来そうにない。

ふと、顔を上げるとシリーアがじくじくっと穴があきそうなほど見ていた。怒っているわけでも疑っているようでもない。ただ、無表情でこちらを見ていた。

何故か身体が震えた……が、こほんと咳払いして俺は続ける。

「まずはクルスと会ってからだな。無理そうなら……そつだな、村に帰ってもらう」

「ふん、当たり前よ。私はあの手紙を見る限りあんまり仲良く出来る気はしないし。あ、ちゃんと彼女の実力を見るわよ。誤解しないで」

「大人だね。シリーアは」

俺がそうやって褒めると当たり前といった感じで頷きもせず料理を摘んでいた……が、耳がパタパタ動いていた。嘘が付けられない人だなあと思う。

「俺はクルスがそれくらいで諦めるとは思えねえんだがなあ」

マイスが苦笑いしながら呟いていた。俺もそう思わないでもないが……。

俺はそこまで深刻に捉えていなかった。マイスにも見せていないが、今回の前の手紙には友人ができたことや、村の人達との付き合いも増えたと書かれていたからだ。

俺がいないことでクルスが成長している……そんな期待もあった。自分以外の人を好きになるかもしれないという寂しさはあったが……喜ぶべきだろう。
しかし……。

「どうした？ 何か悩んでいるようじゃのう」

「え……ああ、大丈夫。じゃあ、二人とも明日はよろしく。そういえば……」

いや、悩むことでもないだろう。ゼムドの心配そうな声で俺は我に返るとこの話を打ち切って、他の話題に切り替えた。

翌日の朝、宿の主人であるエーデルおばさんから、クルスを送ってきたらしいガイさんから待ち合わせの伝言を受け取った俺達は内壁の門の前に向かった。

たった数ヶ月……それだけしか離れていなかったのに、いざ彼女と会うとなると本当に緊張する。マイスはそんなガチガチな俺を見ながらにやにやしていたが、睨むくらいしかできない。

内壁の門の前は朝から冒険者達で賑わっている。俺達は朝早めに出ているからまだましな方だが、もう少し時間が遅くなると中に入るのも一苦勞なくらい人が並んでしまう。

南側に冒険者の宿が固まっているからこその不便かもしれない。

門の前には懐かしい二人が既に着いていた。背が高くて体格のいい大男、俺達の師匠でもある狩人のガイさんそして……。

「ケイト、マイス。久しぶり」

絹糸のような黒髪の……落ち着いた雰囲気のが可愛いというよりは美しいといった言葉が似合う少女。数カ月経って、少しだけ大人っぽくなったように見える幼馴染が微笑んでいた。

「クルス。久しぶり……会えて嬉しいよ」

俺も笑顔でそう応える。昨日の悩みがなかったかのように……ただ本当に嬉しかった。

だけど、同時に不安を感じていた。

「私も冒険者に……なるよ。強くなって……そして世界を見て廻る」

「……そっか。とりあえず仲間を紹介するよ」
「うん」

いつになく楽しそうなクルスの言葉に安心する。やっぱり、村での生活で何かあったのかもしれない。何かきっかけがあつて視野が広がったのだろう。

「そういえば。クルス、宿は？」

「お義父さんがケイトになんとかしてもらって」

ガイさんの方を向くと、彼はなんだか笑っているのに泣いているように見えた。きっとクルスと別れるのが辛いのだろう……しばらく会えなくなるかもしれないし。

「ガイさん……娘さん、おめでとうございます。セレナちゃんですたっけ？」

「おう。クルスの妹だ。別嬪になるぜ。クルスのことは……宿も含めてお前に全部任せるが……絶対泣かせるなよ。絶対だぞ！」

ガイさんは真剣な表情で、俺の肩を両手ではしばしと叩いていた。なんだか殺気がこもっている気がする。

そんな光景を見ながらクルスはこちらを見て微笑んでいたが……そこで、ようやく俺は不安の原因に気付いた。自分がプレゼントした首飾りを付けていない……。

いや、迷宮に入るのだし置いているのかもしれない。それに、付けてなくてもそれは彼女の意思だ。俺がとやかく言うことじゃない。

「……ケイト？」

彼女自身にちゃんと考えるようにと言っておいて不安を感じるのはさすがに情けない。

頭をわしゃわしゃかいて自嘲し、小首を傾げているクルスに笑いかける。

「なんでもない。がんばろうな」
「うん」

彼女は微笑んで頷いた。彼女は前よりも明るくなった。
それは喜ぶべきなんだ……そう思い、俺は不安を強引に心の中に押し込めて忘れることにした。

第十七話 話合い

内壁の城門前でクルスと合流した俺達は、ゆつくりと物珍しそうに辺りを見ているクルスを案内しながら残り二人が待つエルフのラキシスさんの家へと向かった。

クルスはラキシスさんの名前を聞くと、村では余り見たことのない……なんだか嫌いな食べ物を目の前に置かれたような顔をしていたが、迷宮の近くで集まりやすい場所だからと説明すると不承不承頷いていた。

本当に手紙に何を書きあっていたのだろうか。気になって聞いてみたが、

「内緒」

と、教えてはくれなかった。

ラキシスさんの家は内壁の中の北側の高級住宅地にある。この一帯は貴族や大商人の家が殆どで大きくてデザインの良い家が多く、彼女の家も例外ではない。

家の前に着くとクルスも彼女の家を見て感心したような声を少しだけ上げていた。

ドンドンとノックをすると鎧を着込んだゼムドが中から出て来る。

彼はクルスの顔を見るとにこやかに笑って頭を下げ、中に入るように促した。

「ラキシス殿と姫は飲み物を入れてくれておるでの。紹介は客間でしてくれんかの」

「わかった。気を使わせたかな」

俺は苦笑したが、ゼムドは長い髭をさすりながらにやりと笑って首を横に振る。そして、興味深いといった表情でクルスの顔を見上げる。

「姫は不機嫌そうじゃったがラキシス殿は楽しそうに見えたのう。気のせいかもしれんが」

「気のせい。歓迎はされないはず」

そんなゼムドにクルスはにこりともせず、にやにやと返した。好意の欠片もない受け答えにゼムドは気を悪くする様子もなく、そうか、と笑って頷いていた。

観葉植物が所狭しと並べられた客間で暫くラキシスさんとシーリアを待ち、彼女達が席に付くのを待つ。シーリアが俺の隣に座るクルスを見て一瞬ビクツと反応したが、すぐに表情を消して彼女も席に座った。ゼムドの言うとおり不機嫌そうだ。

全員が席に付くと、視線が俺に集まる。どうやら司会をやれって

ことらしい。俺は頭を掻いて苦笑しつつ頷いて話を進めることにした。

「じゃあ、クルス。自己紹介を」

「クルス・ライエル。よろしく」

それだけ言っただけでクルスは頭を下げる。視線は……困惑して不可解な物を見るかのような表情でラキシスさんとシーリアの間を見比べるように動いていた……何でだろう。

不思議だったが、考えても答えは出ないのでクルスを知らない四人に自己紹介を促す。

一通り名乗り終わると、クルスはラキシスさんの方を向いた。ラキシスさんはクルスの視線を受け、上品な仕草で口を付けていたカップを置き、いつものように穏やかに微笑んで小さく頷く。

「私がお願いするのも筋が違っただけ……クルスちゃんも連れて行って欲しいの」

「ほう……それはまた何でなの？」

理由を聞いたのはゼムドだった。彼は見透かすような目でラキシスさんを見ている。俺も彼女がクルスのために頼むというのは意外だった。ミスも困惑している。

シーリアも不機嫌そうに唸っていたが……ラキシスさんは気にせず続ける。

「理由はわからないけど狙われてるらしいから。ケイト君が」

「ケイト殿が？」

「そう。だから守るために近くにいないといけない」

クルスがゼムドに頷く。クルスが嘘を俺に吐く………ということは考えにくい。と、なるとここに来る前に何かがあったのだろうか。狙われる理由は検討が付かないでもないが。

なるほどの……とゼムドは頷いたが、シーリアは納得出来ないといった風にクルスを睨みつけた。俺達の初対面でもそうだったが、彼女はどうも人見知りが強い気がする。

「別に貴女がいなくても守れる……仲間にする理由にならないわ！」
「他にも理由はある」

クルスはシーリアの視線を受け流して静かな声で彼女に返す。シーリアは全く動じないクルスに気押されているのか、耳をぺたんと寝かせて見つめながら続きを促す。

内心怒ってるな……と、クルスの横顔を見ながら俺は思ったが、彼女は冷静にシーリアに頷いた。

「マイルスが近々村に帰るから」
「はあ？　おいおいおい。まだ半年以上あるぜ。勝手なこと言つなよ。クルス」

急に自分に話を振られたマイルスは苦笑しながらクルスに抗議する。だが、俺には彼女が冗談ではなく本気で言っているように思えた。

「理由は夜に言う。それに……」

クルスは真剣な表情でシーリアを真っ直ぐに見る。そして彼女は言葉を一度切って、息を吸って……ゆっくりと息を吐いた……昔ながら感情的な言葉を受ければ言い返していたはずだ。

だけど、クルスは自分を落ち着けるように深呼吸すると少しだけ微笑んだ。

「実力を見て決めると聞いた。なら心配無い」

「え……あ、うん。そ、そうね」

毒気を抜かれたようにシーリアが呻く。マイルスが声を出さずに表情でどうなってるんだ！と混乱した顔をこちらに向けている。俺も想像外の答えで驚いていた。

そして、クルスがどう？ 褒めて褒めて！ と、いった感じの表情でこちらを向いて小さく笑う。シーリアのように尻尾があれば、ぶんぶん振られていたに違いない。

俺は苦笑して頷く。随分と……少しの時間で本当に変わったなあと思った。

「本当に……貴女強いの？」

そんな俺達を見て、シーリアが胸元の首飾りを弄りながら納得が出来ていない表情でクルスに問いかける。まあ、クルスは華奢だし彼女の心配はわからないでもないが……。

クルスが何かを答える前にゼムドが大声を上げて笑いだした。

「はっはっは！　そう疑うな姫よ。焦らずとも戦えばわかることよ……のお？」

「姫言うな！　それもそっか。役に立たなければそれまでなんだし」

溜息を吐いて疲れた表情で、シーリアがゼムドを見て頷く。納得してくれたらしい。

マイルスもほっとした表情で座っている。

「まとまったようね。冒険者は協力しあうことが大切なの……頑張っ
つてね」

「有難う御座います。ラキシスさん」

それまで黙って聞いていたラキシスさんが、落ち着いた声色で俺達を諭すように言った。きつとこれまで冒険者として似た場面を乗り越えているんだろう。大人の笑みだと……そう思った。

隣のクルスは何故かそんな彼女を見て、苦々しい顔をしていたが。

話が終わると、俺達は荷物を持って迷宮へと向かった。クルスにとっては初めての迷宮だ。今日は後ろで見てもらうか……とも考えたのだが……。

ゼムドはともかくシーリアが納得するだろうか。だけど、命には代えられない……か。

歩きながらそうやって迷っていると、クルスが俺の肩をぽんと軽く叩いて微笑む。

「ケイトの思うように。失敗しても私が守る」

「そうそう、クルスの言うとおりだぜ。あんま難しい顔すんなよ」

マイルスも笑って俺の背中をバシバシ叩く。ああ、そっか……。折角クルスが来てくれたのに、彼女を重荷に思ってしまった。そうじゃなかった。彼女の言葉でようやくわかった。

クルスは俺がいない間にちゃんと成長してくれたのかもしれない。盲目的に信用し、もたれ掛かるのではなく……お互いに支えようとしてくれている。

俺は彼女をいつまでも子供だと……侮っていたかもしれない。本当にみんな成長していく。俺が反対に置いて行かれそうなくらいに。

「ぶ……くくっ！ 本当にそうだね。クルスに遠慮なんて必要ない。忘れてたよ」

俺もマイルス達に釣られて笑う。クルスはうんうんと無表情で頷い

ていた。俺は興味深そうにこちらを見ているゼムドと不機嫌そうなシーリアが歩いている方を向く。

「今日はクルスとゼムドで前衛を。真ん中にシーリア。後ろは俺とマイルスで行く。ゼムドが先頭。クルスはゼムドを見て迷宮での戦い方を学んで」

「了解」

「ほう……これは愉しみじやの。間近で見れるわけか」

クルスがゼムドに微笑んで、よろしくと声を掛ける。以前では考えられない光景だ。それを見ていたマイルスが俺の近くで小声で呟く。

「お前がクルスを置いた理由、ようやくわかったぜ」

「俺も驚いたけどね」

マイルスがそう嬉しそうに笑う。寂しいような嬉しいような……。そんな風に思っていると、今度はクルスはシーリアの方を見ていた。そこそこ豊かな胸元にある首飾りを。じーっと……少しだけ眉を寄せて。

「な、なによ」

「さっき言つのを忘れてた」

シーリアは慌てて大事そうに首飾りを両手で隠す。そんな彼女に

クルスはそう呟くと、一度俺を責めるように見た後に、挑戦的な…
…小悪魔っぽい笑みをシーリアに向けた。

「貴女が役に立たなければ…首にしてもいい？」

負けず嫌いだったり、毒舌だったり、結構根に持ったりするところ
らだったり…人をからかうことも案外好きだったりするところは
…変わっていないのかもしれない。

第十八話 水と油

薄暗い迷宮の中をドワーフのゼムドを先頭に進んでいく。

初めて潜るクルスに気負っている様子は見受けられない。左手に松明を持ちゼムドの少しだけ後ろを歩きながら、時折、おっかなびつくり壁の不思議な石のような素材の感触を確かめたりしている。

心配はなさそうだ……どちらかというとシーリアの方が心配かもしれない。

彼女は気が強そうに見えて……案外と気が弱い……のかな。今もクルスから逆に掛けられたプレッシャーのせいなのか、緊張していて動きが堅い。

「シーリア？」

「ひ、ひゃいつ！ な、何？」

後ろから声を掛けると、シーリアが耳と尻尾をピンツ！ と立ててびくつと震えて此方に振り向いた。何かと前を歩く二人もこちらに振り向く。

驚きすぎじゃないかな……と、苦笑する。

「いつもどおりで大丈夫だから」

「う、うん。そうだよね」

シリアは強ばった笑顔で頷いた。少しだけましになったようにも思えるけど……大分、力んでそうだ。肩に力が入って白い耳と尻尾も立ったままの彼女を見ながら、初日の彼女を思い出して溜息を吐いた。

どうもまずい気がする。薄暗い迷宮の中を歩きながら頬を人差し指で掻き、そう考える。

しばらく進むと探知に飛蝗ひろうの集団が引つかかる。正面だしこのまま歩けば戦闘になるだろう。

「何かいる」

クルスがまだ見えていないはずの位置で声を小さく上げ、剣を構える。ゼムドもほう……と、呟いて両手で鉄製の棍を構えた。

マイルスが何でわかるんだ？ と呟いて俺の方を向く。

「ケイト。俺達は？」

「必要ないかな……飛蝗五匹」

「お手並み拝見か。俺も剣振りたいんだがなあ」

小声でマイルスと声を交わしながら一応油断せずに剣を抜いておく。飛蝗はバッタのような虫で声は上げないが、中型犬程の大きさがあるため近づけば音がする。クルスが遠くから気がついたのもその小さな音を拾ったんだろう。

やがてクルスが照らしている松明の炎に、巨大な飛蝗の姿が照らされる。クルスが身長差があるゼムドを見下ろす。

「ゼムド」

「ありや飛蝗じゃ。体当りに気を付けて……好きにやるといい」
「了解」

ぴょんぴょんと飛び跳ねる飛蝗をクルスは落ち着いた様子で観察し……勢い良く飛び込んできた一匹を上段から一撃で頭部を真つ二つにした。連続で死骸を乗り越えて飛んできたもう一匹を下から突き上げるように串刺しにする。

まるで無駄がない……流れるような動き。

「くっ……『炎の理』『風の理』『矢の理』……行け！」

シリアが焦るように杖に魔力を集めて魔法を詠唱する。

彼女の魔法は杖を媒介に魔力を自分の思い通りに変換していく。

詳しくはわからないが、『理』には数多くの種類があり、その『理』に込める魔力の量で魔法の種類が決まるらしい。

覚えれば魔力がある者なら誰でも使えるようだが、応用するには専門的な知識が必要になるという話だった。彼女は慌てながらも魔法を暴発させないように制御し、後ろから迫っている二匹を狙って魔法を打ち出したが……外れる。

「やるのお。負けておれんな……っと！」

ゼムドが重量のある棍で飛蝗を叩き潰す。残り二匹……クルスとゼムドは顔を見合わせるとそれぞれの相手に向かって行った。

結局、飛蝗はクルスとゼムドの二人で全滅させてしまった。二人とも疲れている様子は無かったため、魔力石を集めると再び歩き出す。

最近悩んでいることが多かったゼムドは今日は朗らかな顔でクルスの隣を歩いていた。

「クルス殿の腕は話に聞いておったが、大袈裟に言っておるのだと思ってたわ」

「それほどでもない。普通」

和やかな雰囲気話をしている二人と違い、シールアは耳をぺたんと寝かせて落ち込んだように歩いている。普段なら殆ど外さないのに……。

何故そこまで……？

「何であんなにシールア焦ってるんだろっ」

「お前……わかんねえのかよ？ 俺でもわかるんだが」

小声で思わず呟くと、マイルスが呆れたような顔をして俺を見た。幸い前の三人にはさっきの言葉は聞こえていなかったようだ。

理由が分からないと問題の解決も出来ないのでマイルスに無言で続きを促す。

「重症だな……どうしたんだケイト。お前が狙われてるって話があったからだろ。当事者のお前がなんでそこまで落ち着いているんだよ。逆におかしいぜ」

「ああ、すぐに危ないわけじゃないだろ。今すぐ危ないならラキシスさんやクルスが迷宮に潜るのを止めてるはずだし。今日からいきなり危険に……というわけではないと思うよ」

迷宮の中では俺の特殊能力があるので不意打ちは出来ないし、街を一人で歩く時は気を付けないといけないかもしれないが……。そう思ったのだが、疲れたようにマイルスは長い溜息を吐いた。

「はあ……そういうことなのか。緊張して損したぜ。ちゃんとわかり易く説明しろよ。俺だけじゃなくて絶対シーリアも今日も危ないと思ってるんだぜ」
「あ、そういうことか」

ようやく理解できた。ようするに今のシーリアはクルスに挑発されたのもあるだろうが……それ以上に見えない脅威を警戒しているわけか。

俺を守るために……かな。やっぱり。俺は苦笑いしながら、耳と尻尾を立てて警戒しているシーリアを見ていた。本当にお人好しな

いい獣人だと思う。

結局、クルスが初日ということもあり、今日は早めに切り上げて地上へと戻った。

平然としているクルスと違って、シーリアは明らかに疲れた表情を見せて街の中を歩いている。

クルスは一番浅い階とはいえ殆どの敵を軽く倒していた。自分だけで戦うのではなく、ゼムドを援護したりと内容的に問題は全く無かった。

問題は……シーリアの方かもしれない。

普段は冷静に的確に敵を倒していく彼女が殆どの魔法を外してしまい、あまり敵を倒すことが出来ていない。気にしているのか肩を落としてしよげていた。

「シーリア。大丈夫？」

「うん……ごめんね。役に立たなくて」

雰囲気がどんよりとしていて、いつもは生命力で溢れて輝いて見える白い髪もただの白髪に見えるくらいにシーリアは落ち込んでいる。

半分は自分のせいだからなあ。どうしたものかと悩む。

「俺達は普段のシーリアを知ってるから心配ないよ。今回は危険がそこまである探索じゃないし、次があるから。すぐ慣れるよ」

「あっはっは！　そうそう、ケイトの言うとおり！　らしくねえぜ。シリア」

シリアの肩をバシバシ叩いて、笑ってマイスも同意する。彼女は痛そうに顔をしかめて、マイスを睨みつけた。

「痛いわねっ！　放っておいてよ！」
「そう……放っておけばいい」

いつの間にか俺の隣を歩いていたクルスが不機嫌そうに呟く。彼女がここまで他人に敵意をあらわにするのは珍しい気がする。

彼女は端正な顔を俺の方に向けると、咎めるようにこちらを睨む。

「ケイトはこの女ばかり気にしてるし。ずるい」
「……今日は調子が悪そうだったからね。普段は凄い魔法使いなんだ。手紙にも書いたような。出来れば二人とも仲良くしてくれればと思うんだけど」

納得してくれるかと、クルスを見たが……彼女は頷いてくれなかった。

「私は別にこの女を嫌ってない。どちらかというと……」
「どちらかというと？」
「どうでもいい。どうせ長く一緒にいない」

思わず足を止めてしまう。クルスは思いの外、厳しい表情をしていた。シーリアはその言葉でカチンと来たのか、足を止めてクルスと正面から睨みあった。

「どうということよ。ケイトは私の友人なんだから狙われてるからって見捨てないわよ」

「……そうね」

クルスは落ち着いた様子で、彼女にゆっくりと話す。感情的になっ
ているシーリアに比べて冷静に。俺の方に一度向き、俺へも告げるように。

「しばらくは大丈夫。だけど、危険」

「……どうということ？」

「ラキシスは貴女の心配をしている。この街にずっといるのも……ケイトは危ないと思う。その時、どうするの？」

なるほど……と、クルスの言いたいことが少しだけわかった。意外と俺の立場も自分で考えていたより危ないのかもしれない。

そして、学院に在籍し……義理の母でもあるラキシスさんがいるシーリアに無茶をさせるわけにはいかないということが。今日の迷宮については関係ないらしい。

ちゃんと、クルスなりに客観的な事情を考えてのことらしい。夜

にクルスからそう考えるに至った話は……しっかりと聞いておく必要がありそうだ。

シリアは驚いたように口を開けていたが、胸元の首飾りを弄り目を瞑り暫く考え……目を見開くとクルスにはつきりと言い返した。

「何度も言わせないで。私は友人を見捨てないって言ってるのよ」
「……やっぱり嫌い。こいつ」

マイルスが俺の肩を叩いてニヤニヤと笑う。俺はマイルスを殴ると、大きく溜息を吐いた。

とりあえず、話を聞くことにしよう……。

第十九話 クルスの話 前編

探索を終えたのが早い時間だったため、日が暮れるまで時間もあるし準備をしようということで俺達は一度解散することにした。話をする前にやらなければならないこともある。

クルスの宿を決めなくてはいけない……歩きながらラキシスさんの家で部屋を借りれば……と提案したのだが、宿に慣れないと駄目と却下されてしまった。

女性同士だし悪くないと思ったが自分が同じ理由で断っている以上、強く言うことは出来ない。すると選択肢は自分達が利用している『雅な華亭』だけになる。一緒に宿の方が何かと便利でもあるからだ。

ゼムドは自分の宗派の神殿に間借りしているらしいし、彼の事情を考えるとクルスを預けるわけにはいかない。

「一部屋空いてて良かった。エーデルおばさん、頼んでた奴は？」

「ああ、出来てるよ。箱は持って帰ってきておくれ」

「ありがと」

別の宿に置かせて貰っていたクルスの荷物を引き取り、『雅な華亭』に取れたクルスの部屋に荷物を置くと、俺はエーデルおばさん

に頼んで置いたものを受け取った。

今日の夜の集まりでは俺の予想では……必要になるものだ。

「おい、ケイト。何で酒と料理を持って行くんだ？ ラキシスさんが手料理作ってくれるらしいじゃねえか。手ぶらでいいんじゃない？」

酒の入った陶器の入れ物を両手に持ちながらマイルスが不満そうな顔をする。重いからだろう。

俺は料理の入った箱を同じく両手で持ちながら笑った。

「俺の勘だよ。マイルスは後で俺に感謝すると思うね」

「折角なんだしょ。美人の手料理でいいじゃねえか」

そうマイルスが悪態を吐いたが、軽目の料理を持っているクルスは彼を睨む。

「料理に美人かどうかは関係ない。絶対にリイナの方が腕は上」

「う……そうはいうけどなあ。あんな上品な感じの人が作るんだ。きっと料理も美味いぜ」

まだ見ぬ料理を楽しみにしているのか、マイルスがだらしなく笑う。だが……俺もそう思いたいし彼には悪いが……俺はわかりたくないことでもわかってしまうのだ。

世の中、何かを極めている人間が他のことを極めているとは限らないのである。

それが全く違う分野であればなおさら……。

全員がそれぞれの準備を終えると、俺達はラキシスさんの家に集まった。

ここであれば時間が遅くなっても泊まる事が出来るし、一人で歩くりスクも減らすことができる。内壁の中は治安もいいこともあるし。

家の中に入り、客間のテーブルを見ると大量のサラダの入った皿がでん！ と二つ置いてあった。見事なまでに緑一色である。後は人数分のコップだけが置かれている。

マイルスが啞然とし、クルスが眉をよせる。

奥の台所らしい場所からはシーリアの叫び声が聞こえてくる……何をやっているんだろうか。

「……料理……？」

「やっぱ、ケイトの勘はあてになるな」

ガシャーンと皿の割る音が響く。マイルスがうんうんと頷き、クルスは持ってきた料理を置くと、

「私が行ってくる」

と、台所の方に歩いていった。クルスが台所に行くとシーリアの悲鳴と物が壊れる音がしなくなった。しかし……これは……。

「クルスの料理か……想像出来ないな。ケイト、お前の勘だどうなんだ？」

「……知らない方が面白いこともあるよ。きっと」

苦い顔をしているマイルスに俺も苦笑しながら応えた。彼女の能力を今ここで確認するのも……無粋というものだろう。楽しみにさせてもらおう。

クルスが台所に入ってから、しばらくしてゼムドも家を訪れた。彼も自分で料理と酒を買って用意していたのだが、三人が俺達のために料理を作ってくれているという話をする、一瞬きょとんとした後、

「結構結構！ エルフ料理というのも一度食べて見たかったんじゃ」

そう大笑いしていた。俺の見たところラキシスさんに出来るのはサラダと丸焼きくらいだと見ているのだが……彼女の料理がエルフ料理と伝わるのはどうなのだろうか。

強くて上品で……一見なんでも出来そうなラキシスさんにも弱点がある。そう思うと何だか微笑ましくて、身近に感じられるのは不思議だ。

時間は掛かったが、マイルスが空腹で倒れる前には彼女達を作った料理が運ばれてきていた。食べられないものが出てくると戦々恐々していたが、見た目は普通である。

全て運び終わると、ラキシスさんが全員に飲み物を入れてくれた。そして、俺の正面に座った。両隣にはクルスとシーリアが座っていて、ラキシスさんの両隣にマイルスとゼムドが座っている。

全員の準備が整ったことを確認し、ラキシスさんが立ち上がる。

「みんなお疲れ様。クルスちゃん、カイラルにようこそ。じゃあみんな……後で難しい話をするけれども、まずは私達を作った料理とお酒を楽しみましょう。乾杯」

「乾杯！」

私『達』という言葉を強調したラキシスさんの声でみんなが酒の入った杯を合わせる。俺とクルスは年齢の関係で果実水だが。

肉料理や炒め物、煮物っぽい料理など色々な料理が作られていたが味は……美味しくはないが食べれないわけではない……そう、普通の味。そしてどこか懐かしい味だった。

だから、俺はわざとらしく独り言のように言う。

「料理、美味しいね」

「当たり前」

その言葉を聞いたラキシスさんとシーリアは少しだけ苦い顔をし、クルスは料理にフォークを突き刺しながら、ほんの僅かに笑みを浮

かべてそう呟いた。

料理を食べ終わると、飲み物だけを残してもう一度席に付く。クルスの話を聞くためだ。

ラキシスさんは手紙で事情をある程度知っているようだが、俺の件とマイスの件はここにいる全員に影響があるため、話を聞いて判断しなければならぬ。

クルスは口下手だし、しっかりと聞く必要がある。まずは、ラキシスさんがほんと咳払いを一つして、クルスからの手紙の説明を始めた。

「まずは私から説明するわね。クルスちゃんから貰った手紙には、村に傭兵の集団が騎士と偽って現れたと書かれていたわ。目的は……ケイト君を仲間に入れるため？」

「そう。ケイトの噂を聞いた傭兵の集団が来た」

ラキシスさんの言葉にクルスが頷く。これだけでは、何故俺が狙われるのか疑問だろう。

ラキシスさんは……平然としているけど知っているからかな。案の定ゼムドやマイス、シージャが疑問があるのか、顔をしかめている。

俺自身『呪い付き』という負のイメージが強い言葉がどうして使われているのか理解出来ないが……文献を調べようにも忌避されているせいか書いている物が少なくて中々難しく、大量の蔵書を読むことが出来るヘインやシージャには聞き辛くて情報を集められな

ったのだが……。

こう問題が大きいなら、調査の協力を頼むべきかもしれない。

「わからんのお。どうしてケイト殿が狙われる？」

「そうよ。ケイトは結構生意気なところはあるけど……その……賢いだけだし！」

当然の疑問だろう。マイスは……まあ、付き合いが長いからなんとなく気付いてはいるだろう。難しい顔をしたまま腕を組んで口を閉じて黙っていた。

さて、どうするか。シリアに伝えるのは構わない……問題はゼムドだ。

彼は『呪い付き』について知っている。恐らくは俺以上に。果たして信用が出来るか？

「取り敢えずクルスちゃんの話最後まで聞きましょう」

悩んでいる俺を見たからか、クルスにラキシスさんが先を促してくれた。クルスは頷いて続けて村で起こった出来事を話す。

「ケイトがいないことがわかると騎士に化けた傭兵達は村を燃やして略奪しようとした」

「なっ！」

マイスが声を上げる。他の皆もそれぞれの反応で驚いていた。俺も言葉も出ない。

俺のせいで……村が？

「傭兵のボスは私が倒した。他の傭兵は村人と騎士で捕らえた。被害はない。安心して」

「よかったぜ……だが、うちの村じゃなかったら……」

そつだ。うちの村には母さんを初めとして実力のある人がいる。だが、もし……俺が普通の家庭に生まれていたら？ 俺の立場は本当は……危なかったのか……？

「騎士が今回の件を辺り一帯に報告して注意してるから、大丈夫とは思う」

「だけど、それくらい相手は手段を選ばないってことか」

「国に恨みを持たせるためって言うてた」

怒りで拳を強く握り締める。俺を勧誘しようとした相手は、自分のような立場の者に何かの不思議な能力があることを知っているのだろう。そしてそれを利用しようと考えている……そういうことが俺を育ててくれた村を焼いてでも。

ゼムドは顔をしかめて、クルスを見て口を開く。

「クルス殿。繰り返しになるが……ケイト殿を勧誘しようとした理

由を聞かせてもらえんかの？」

「……わからない。ただ、逃げた人間は『呪い付き』と言われている」

「まさか……」

ゼムドが絶句する。彼も知らないことだったらしい。そして……話の流れからもう全員わかっていているだろう。隠す意味もなさそうだ。

ラキシスさんの顔を見ると少しだけ哀しそうに顔を歪ませていた。母さんの友人であるラキシスさんは聞いていたのかもしれない。そして、彼女は小さく頷く。

「狙われたのは多分、俺が『呪い付き』だから……だよ」
「なんだそりゃ？」

理解が出来ないといった反応をしたのはミスだけだ。知っているクルスとラキシスさんは取り乱した様子はなく、反応があったのはシーリアと……彼女以上に驚いているゼムドだった。

第二十話 クルスの話 後編

部屋が静まり返り、重い空気が流れている。

とはいえ、当事者である自分は大事だとは思っていない。自分への認識は昔の記憶と便利な能力を持った一般人くらいにしか思っていないからだ。

そもそも、『呪い付き』を知らない……いや、聞かされなかった俺を含めて、マイルスやクルスはだから何？ と不思議そうにしているくらいで特に反応はない。

全員が静まり返ってしまったのに耐え切れなくなったのはマイルスだった。マイルスは変わってしまった空気に引きつった笑みを浮かべながら声を上げる。

「お、おいおい、どうしたってんだよ。みんな黙ってしまったてよ」
「だって……『呪い付き』だなんて、ケイトがそんなわけ……」

シリアが強ばった表情で呟く。否定したがっているような……恐れているような……そんな感情が表情に出ている。彼女の反応が普通……なのだと俺は思った。

だが不思議と怒りや残念といった気持ちは湧いてこない。人間以外の種族が人間から向けられる視線がこういうものなのかもしれない……そう思うからだろうか。

彼女を責める気にはならなかった。

今にして思えば薬師のジンさんが俺に気をつけるようにいったのも、隠すためだったのかもしれない。村の大人達は技術を教えるだけでなく、俺をそういった視線から守ってくれたのだろう。俺が自分の身を自分で守れるまで……。

そう感謝しながら考えると、俺を鍛えてくれた大人達の照れくさそうな顔が思い浮かんで心が暖かくなる。シーリアに恨みの感情を覚えないのも自分が幸せだったからかもしれない。

だが、確認はしておかなければならない。俺はラキシスさんの方を向いた。

「ラキシスさん。『呪い付き』という言葉は俺達はよく知らないのですが、特殊な能力と不思議な知識を持っている……という認識でいいんでしょうか」

「そうね。子供の頃に急に症状……変化というべきかしら。変わってしまったの。大抵は狂ってしまったてすぐに……不思議な能力で被害を起こす災害みたいな扱いね」

「災害か……」

昔のクルスを思い出す。クルスも……俺と同じだろう。そして、彼女は悪夢と必死に戦っていた……そして勝った。負けていたら災害のような扱いになっていたのだろうか。

俺はそもそも狂う要素がなかった。この差はなんだろう。

「それならまだいいの。厄介なのは後天的に狂った場合よ」

「……どういうこと？」

「子供の頃は自分を隠して……大人になったら暴発する感じがしら。不当な扱いを受けることが多いから恨みを抱えてしまうのかもしれないわね」

なるほど。俺のように初めは狂っていなくても……理不尽な扱いを受け続ければどうか。なまじ、昔の知識があるだけに復讐心を持つということはありえる。

俺は頷きながら、ラキシスさんの話を聴き続ける。

「その場合は私達に討伐の仕事としてくることがあるわ……手強い敵としてね。私もケイト君の母親……マリアも戦ったわよ。だから育てるって聞いたとき本当に驚いたわ」

そこまで話してラキシスさんは一度、果実酒の入ったコップに一口だけ口を付けた。

マイスは説明に納得いかないらしく、腕を組みながらしきりに首を傾げる。

「わっかんねえなあ。なんでそんなに恐れられてんだ？」

「……私にもわからない。何百年、何千年と言い伝えられる中でそうなったのかもね。だけど、多くの国で同じように呼ばれているのは確実……エルフの長老でも知っているかどうか」

こつ……と小さな音を立ててラキシスさんがテーブルに手を下

るす。むう……と唸りながら黙ってしまったマイスに変わって声を上げたのはクルスだ。彼女は話を聞いても冷静で、顔色一つ変えていない。

クルスらしいな……と思わず笑みが浮かぶ。

「ラキシス。そんなどうでもいいことより……ケイトはまだ狙われる?」

「ど、どうでもいい?」

驚いたのはラキシスさんではなくシーリアだ。耳をピンと立ててクルスの方を向こうとして……間にいる俺の顔を見る。そして、気まずそうな泣きそうな顔で下を向いた。

気にしなくてもいいのに……と、年上に対して失礼なのを承知で、微笑んでぼんぽんと軽く頭を叩く。

ラキシスさんはそんな俺をじつと見ながらクルスに答えた。

「すぐには無いと思う。今、ケイト君を狙うのはリスクが高すぎるし……それに……」

「多分、同じような人を大勢狙った……その中の一人……だからかな?」

「そう。ケイト君だけが特別なわけじゃない。手紙を貰ってからすぐに裏を取ったんだけど、似た事件は結構あるみたいだね。驚いたわ……本当に」

はぁ……と、ラキシスさんが疲れたように溜息を吐く。そして、

クルスがこちらを向いた……今後どうするかを決めるということかな。俺はクルスに頷く。

「もうしばらくカイルルで経験を積む……クルス。宿を決めたばかりで悪いけれど……ラキシスさんの家に泊めてもらおうと思う。いいですか？」

「もちろんいいわよ。大歓迎。賑やかになるわね」

ラキシスさんは微笑んで頷いてくれた。ゼムドは大好きなはずの酒に手を付けず、難しい顔をしながら目を瞑って考え込んでいるようだったが、彼の方を向くと重そうに顔を上げて俺を見返した。

「そうさな……拙僧は遠慮させて頂こう。そして、今日聞いたことは忘れる。拙僧には重すぎるわい。これまで通りの関係とさせてもらおう」

長いため息を吐いてゼムドは弱々しく諦めたように苦笑いした。ゼムドが組織の仲間に話せば……俺は恐らく狙われる。その上で俺はまだ街に残ると言った。

ゼムドを信用するということだ……おそらく彼はそうとってくれたと思う。

彼の結論は誰にも言わない……そういうことだろう。

「わかった。シーリアは……どうする？」

俺はシーリアを見る。さっきの調子だと今まで通りというわけにはいかないかもしれない……そう思ったのだが……意外としっかりした表情で……何故か俺の頬を思いっきり引っ張っ……痛たたた！

「馬鹿にしないで！ えっと……ケイトはそ、そう……友達だから何でも関係ないわ！」

「大嘘」

真っ赤になりながらさっきの仕返しよっ！ と顔をシーリアは顔を背け、俺の隣のクルスが不機嫌そうにぼそっと呟く。本当に相性が悪そうだ……この二人。

この話題は早めに変えたほうがいい……そう判断し、マイルスを見て声を掛けようとしたが……先に、あっ！ と気が付いたのか大声を上げた。

「そうだ！ クルス。俺がすぐに村に帰るってどういうことだよ」

「忘れてた」

「忘れんなよ。で、何なんだ？」

クルスは大事なことなのに……と、独り言のように小さく呟き、マイルスを見てゆっくりと……そして、はっきりと告げた。

「リイナに子供が出来たから。マイルスの」

「……………は？」

声を上げたのはミスだけじゃない。クルス以外の全員だ。俺も耳を疑った。声も出ない。ゼムドも、ラキシスさんすらも口を半開きにして呆気にとられている。暫く沈黙の時間が流れ……。

「わ、悪い。もう一回言ってくれないか？」

「リイナに子供出来た。マイスの」

しーん……と、空気が凍る。そして、すぐに爆発した。

「えええええええええええええええええええええつ！」

「ちよつと……え……え？」

マリスが立ち上がって叫び、俺もわけがわからず困惑する。ラキ
シスさんやシーリアも慌てるような声を出して混乱し、ゼムドはぼ
かんとしていた。

そんな中、クルスは一人冷静に果実水を気に入っただのか幸せそうに飲んでいる。

クルスには驚かされたことがたくさんあるが今日のが間違いない一番だ。

「リーナの手紙には書いてなかったぞ！ そんなことつ！」

どんどんテーブルを叩くマイルスにクルスは静かに返す。まあ、当事者のマイルスが冷静になれないのは当たり前だろう。俺も混乱しているんだから。

「私は絶対って返事した」

「じゃあ何で今？」

クルスは約束を破らない。俺は不思議に思っただけでクルスに聞いた。彼女は、んっ？ とコップを置いて俺の方を見ると、悪戯っぽく微笑む。

「リイナのために絶対に伝える……そういう意味の絶対」

「そ、そう……」

「子供の頃の私にするわけにはいかない」

俺はおかしな顔で固まっているマイルスを見た。彼には悪いが、ちよつと同情するような感じになってしまっているかもしれない。めでたいし喜ぶことなんだろうけど。

クルスの言うとおり、確かに迷宮には危険がある……マイルスに何かあれば……。

結局、マイルスは考えさせてくれと用意してもらった部屋に戻って行った。他の皆も用意された部屋にそれぞれ案内されて行く。

俺だけは話があるらしくラキシスさんに呼び止められて彼女の部屋に案内された。

ラキシスさんの部屋は専門書らしき本から流行りの恋愛物まで様々な本が床に雑然と積み上げられていて、本の隙間に机とベッドがある……そんな足の踏み場にも困る部屋だった。

これで片付けた形跡があるのがなんとも言えない。

机には書類が山盛りになっており……宿にさせてもらっし掃除しよう。うん、絶対に。

ラキシスさんはベッドに腰掛け、隣か机の椅子に座るように促す。俺は机の椅子を借りて彼女の正面に座った。

「ごめんね。汚い部屋で」

「え、あ……そうですね」

「そこは嘘でもそんなことないって言うのがマナーじゃないかしら」

咎めるような口調だがラキシスさんは静かに微笑んでいた。俺は昔会った時以来の二人きりの状況に緊張して心臓がバクバクと大きな音をたてている。

部屋のランプの光を反射して輝く金色の髪も、冷たさを感じさせるエメラルドグリーンの瞳も、人形のような……完璧なまでに整った容姿は、十年近く前から一切変わっていない。時が止まっているかのように……記憶にあるあの時のままだ。

そして、この先も変わらないのだろう。

「ごめんね。呼び出して……聞きたいことがあるの」

「何かありました？」

「ええ、どうして街を出ることを選択しなかったのか。他の街にいればケイト君の足取りを掴むのは簡単なことじゃないわ。旅の間にお金を稼ぐ力は既にあるでしょう」

笑みを消して心配そうな表情でラキシスさんがじつと見る。

不自然さに気付かれてしまったらしい。流石というべきなのか……いや、シーリアのためだろう。俺の危険にシーリアが巻き込まれるのを警戒しているのかもしれない。

俺は頭をかいて苦笑いし、少しだけ考えた後に応えた。

「サイラルという名前に聞き覚えは？」

「確かシーリアが言ってたわね。でも変な男に付きまとわれるのは冒険をやったら普通よ？ それくらいあしらい方を覚えて何とかしなきゃ」

「普通ならそうです」

そう、普通ならそうだ。ラキシスさんではなく自分が話を聞いてもそう思つかもしれない。今日、クルスから話を聞くまでは危険と思っているだけでも甘く見ていた。

「サイラルという男は『呪い付き』です。そして何かの組織の一員として動いています」

「『呪い付き』なのを判別出来る……それがケイト君の能力なのね。それが事実なら、ケイト君を襲った者と関連があるかもしれない……でも、そうなら余計に残ると危険じゃないかしら」

確かめるように聞くラキシスさんに俺は頷く。

「彼はシーリアに執着を持っています。自分がこの街から去る場合、シーリアは残ると思います。そうなれば、彼女は危険になる」
「その話を聞いて、私がその男を……生かして置くとでも？」

ラキシスさんが当たり前のことを言うかの如く、そう静かに宣言して微笑む。彼女が本気で動けば……サイラルがどんな能力を持っているようが勝つ事は不可能だろう。

彼の能力『結界』も伝えて置けばどんなものであれ、いろんな対処を考えることもできる。

「証拠が無いとラキシスさんの立場が悪くなります。サイラルが違法行為をしていれば、捕まえられますから……ラキシスさんにそれを掴んで欲しい。その間は……」

一拍置き、俺は決意を込めてラキシスさんを見つめる。

「俺がシーリアを守ります」

「なるほど……そういうこと」

「彼女との約束なので。旅に出るのは安全を確保して……それからです」

ラキシスさんはちらつとドアの方を見るとゆっくりと立ち上がる。そして俺の肩に手を置き、驚く俺にその氷のように冷たく見える端正な顔を……彼女の絹糸のような金色の髪が顔に掛かるくらいのところまで近づけた。

間近で見つめられ、困惑と……飲んだ果実酒の香りだろうか……甘い香りで頭が蕩けそうになる。ラキシスさんはそんな距離で何故か苦笑いしながら……平坦な……そして大きめの声で言った。わざとらしく。

「本当に……ちゃんと男の子に成長したわね……あの子達には勿体無いわ。私が……もらっちゃおかしらね。唇も身体も……心も……」

「え？」

困惑したのも束の間、バシンッ！ と大きな音を立てて部屋のドアが開いた。驚いてそちらを見ると、ラキシスさんを睨んでいるクルスと……顔を真っ赤にして座り込んでいるシーリアがいた。

「発情エルフ。ケイトから離れて」

「あらあら。クルスちゃん恋愛は自由よ……盗み聞きは良くないわ

ね」

少しだけ顔を赤くしたラキシスさんはぼすんとベッドに座り直し、クルスの方に楽しそうな顔で振り向いた。ぐっとクルスが言葉に詰まる。

「説明はいらないわね。私が調べている間、警戒されないようにいつも通りにしておきなさい。調査の進み具合は報告するわ……注意はするけど……自分の身は自分で守りなさい」

「言われなくても」

クルスが不機嫌そうに応え、俺も頷く。前に街で会った時からずっと迷宮に潜ったお陰であの時より強さの差は無くなっているはず。迷宮に潜って少しずつでも向こうより強くなれば……危険さも大分ましになるかもしれない。

ただ、この話はマイルスには……出来ない。話をすればあいつは絶対に残るといっだろう。クルスの話を聞いた以上……どうすればいいのか。俺は迷い、深く悩んでいた。

第二十一話 包囲

翌日の早朝、ゼムドにはマイルスが結論を出したら今後どうするかを彼が寢床にしている神殿に伝えたと説明した。今の状況ではとても迷宮には潜れない。

ゼムドは悩むのも仕方がないと頷き、

「これも運命じゃな。神は老人には慈悲を……若者には試練を与えるからの」

神への祈りを捧げた後、そう笑って住処にしている神殿へと帰っていった。

この世界の神は信じる者に具体的な力を貸し与えてくれる。概念ではなく、存在する神というのはどのような存在なのだろうか……。

俺のように別の世界で死んだ人間が、この世界で新たに生きていることも神が与えた試練なのだとしたら……礼を言うべきなのか、恨みを言うべきなのか迷うところだ。

不当な扱いを受けている者は間違いなく神を恨むのでは無いだろうか。

俺は去っていくゼムドの背中を見ながら、彼には悪いけど神を無条件に信じることは自分には出来そうにないなと、そんな風に考えていた。

ゼムドを見送った後、客間に戻るとシーリアがいつもの学院の制服を着て昨日のままで放置されているテーブルを片付けていた。酔っていない自分がやっておけば良かったのに……と、自分の気の利かなさに苦笑する。

「シーリア。おはよう。ごめん、一人で片付けさせちゃって」
「へっ！ あ、お、おはよう！ きよ、今日はいい天気よね！」

焦ったように慌てているシーリアの言葉を聞いてそうだった……と、思わず窓から外を見る。今日は曇り空だ。彼女は髪も肌も白く、色素が薄いから今日のようないい天気なのだろうか。
ないな……昨日の話を気にしてるに違いない。尻尾がぱたぱた揺れてるので怖がられているわけではなさそうなのが救いかな。

「手伝うよ。これから暫く泊めてもらうことになるし、片付ける場所を教えて」

「あ、いいのに……ありがとう」

シーリアはコップや皿を洗い場まで持っていくと、狼の刺繍をしたエプロンを付けて桶に用意した水を使って洗い始める。俺もシーリアを見ながら真似て洗う。

料理は出来ないみたいだけど、シーリアはこういった洗い物は慣れているようだった。機嫌よさそうに鼻歌を歌いながらやっている所を見ると好きなのもかもしれない。

「シーリアは手際がいいね」

「ラキシス様に養ってもらってるし、これくらいいしないかね。料理も本当は自分で作りたいんだけど教えてもらう相手がいないの。ほら、ラキシス様も出来ないし……ばれてるよね？」

昨日の様子を思い出しているのか乾いた笑いを浮かべているシーリアに頷く。

クルスが料理出来るというのは驚いたが、彼女の場合は近くに料理上手な俺の姉がいる。クルスと姉は仲が良いし、教えてもらったに違いない。

こうして話していてシーリアの様子が普段通りになって……いや、普段より柔らかい感じに接してくれていることに気付き、俺は自分で考えていた以上に安心していった。

どんな眼で見られても自分は平気だと思っていても怖かったのだろうか。

「クルスが出来るといだし、教えてもらえばどうかな？」

「絶対嫌！ ケイトには悪いけどなんか腹立つの」

予想通りの答え。シーリアは犬歯を見せて嫌そうな顔をしながら即答した。まあ、一緒に過ごせばそのうち仲も良くなるかもしれない。

あまりしつこくは言わずに洗い物を続けていると、あっ……と、シーリアが声を上げてこちらを向いた。

「そついや、ケイト。今日はどうするの？ 私は学院に行くけど」
「ミスがああ調子だからなあ……そうだ、悪いけど俺も学院に行きたいんだ」

丁度いいかもしれない……学院にはヘインがいる。

『呪い付き』について調べてもらえるか頼んでみたい。それにクルスもカイルルに来たばかりだし、久々に会わせたい。

シーリアはヘイン……というより、彼の近くにいる貴族が余程苦手なのか、うゝと唸りながら耳をぺたんと寝かせていたが、頷いてくれた。

「ありがと。洗い物が終わったらクルスを起こすから、ちょっと待って」

「そつか……あの子も同郷なんだよね。そういうのいいなあ」

ふう……と溜息を吐く。シーリアは獣人でエルフであるラキシスさんの養子になっていることから、事情が何かあるのは容易に想像が出来る。

迂闊に踏み込めないし、同情するのは侮辱だろう。なら……と、自分に出来そうなことを必死に考える。

「時間があるならさ。シーリアをちゃんとヘインに紹介したいんだ。友人だって。駄目かな？ まあ、シーリアも前に言ってたけど……何かと問題はある奴だけだ」

「え？ でも……邪魔にならない？」

身分に囚われない発言をヘインはしているため、シーリアはヘインを避けていた。だけど、だからこそ上手くやればシーリアとヘインも仲良く出来るかもしれない。少しでも仲間と呼べる人が彼女に増えれば……と思う。

シーリアは貴族を相手にすることでラキシスさんに迷惑が掛かることを恐れているけど、あの人なら大丈夫だろう……多分……一応後で確認は取ろう……。

「ならないならない。友人を紹介しない方が怒られるよ」

「うん……そういうことならいいわよ」

シーリアは暫く悩んでいたが、笑って頷いてくれた。

洗い物を済ませて、部屋の掃除が終わる頃にはクルスも起きて着替えていた。ラキシスさんはお酒が入ると次の日は昼まで起きないらしく眠っているが、クルスに学院にいるヘインに会いに行くことを説明し、書置きを置いて三人で家を出ることにした。

前と同じようにヘインが住んでいる女子寮まで歩き、シーリアに呼び出してもらう。

俺とクルスは前にヘインと話し込んだ人気の少ない芝生のある場所で座って、ヘインを待つ。クルスはヘインが女子寮に住んでいることを聞いて不思議そうにしていたが、事情を聞くと不器用なヘイ

ンらしいと頷いていた。

暫く待っているとヘインと疲れ果てた顔をしたシールリアがこちらに小走りで近付いてきた。

ヘインはこちらを見つけると笑顔で手を上げる。元氣そうだ。

「ケイト。久しぶりだな。クルス……驚いたよ。見違えたな」

「ヘインも……背が伸びた。それに服のせいで頭が良さそうに見える……久しぶり」

「服じゃなくて研究者っぽい雰囲気……とかの方が嬉しいんだがね。よく来たな」

クルスが微笑んでヘインと握手をし、俺の隣に座る。シールリアもふらふらと反対の隣に座った。なんで彼女はこんなに疲れた様子なのだろうか。

困惑してヘインを見ると、彼は苦笑して教えてくれた。

「すまない。俺の仕事の付き合いのある……前に話した……ユーニティアに絡まれたんだ。少し話したら納得して解放してくれたんだが。それで、そちらの白い狼の獣人は……」

「シールリア・ゲイルスタッド。よろしく。ケイトの仲間なの」

「ケイトから聞いていると思うけど僕は薬草学部ヘイン・クサナギ。よろしく」

ヘインはシールリアに頭を下げた後、何かを暫く顎を指で触りながら俺達を見て眉をひそめて悩んでいたが、まあ、いいかと呟いて

笑う。

「クルスも来たんだな。これで全員村から出てしまったか」

「わからない。マイルスは帰るかも」

クルスが短くそう返し、俺がヘインに事情を詳しく説明する。

彼は右手で頭を抱えてなんともいえない笑みを浮かべていたが、しばらくして立ち直ると抑揚のない乾いた笑い声を上げた。気持ちは物凄くわかる。

「今日あいつがいないのは……そういうことか。参ったな」

「ああ、今頃悩んでると思う。俺も何いえばわからない」

「僕が後で行くよ。あいつと話もしたいし」

年下の俺やクルスよりも、こういう話は同年代のヘインの方が確かに頼りになるかもしれない。

俺は彼に頼むことにして本題を切り出すことにした。

「ヘインに頼みがあるんだけど……いいかな？」

「物によるな。出来ることならやるけれど」

「『呪い付き』に関することを調べて欲しいんだ」

俺がそう告げると、ヘインは押し黙って真剣な表情で俺を見た。そして、考え込むように俯いた後、シリアに警戒しているような

視線を向ける。獣人だから偏見で……というのはヘインの性格では無い。となると……。

「その話をして、ここに彼女がいる。信用できるということか？」
「信用できるよ。友人なんだ」

答えを聞くとヘインは一瞬ほかんとした後、笑いだした。何か可笑しかっただろうか。

「いや、すまない。クルスも彼女も苦勞しそうだ……まあいい。
シーリアさん、無用の警戒だった。謝罪する……ケイトを危険に
たくなかったんだ」

「え、じゃあ……貴方は知ってたの？」

「当然だよ。僕と君も会った貴族のユニティアも一度君たち異種
族、そして『呪い付き』の事件に巻き込まれたんだから。ケイトが
来る大分前にね」

胡座をかいて座りながら、なんでもないことのようにヘインが言
う。

俺は驚くよりも納得した。シーリアを警戒し、ヘインがホルスに
疑念を抱いた理由……その事件が関わっているからか。

そして、過去に俺と付き合いの深いヘインは俺も『呪い付き』だ
と気付いた。

それなら事件に関係しているカイル兄さんやホルスも間違いなく
気付いている。だから気を付けると……そういうこと……か。

「さすがヘインだなあ。で、ヘインは俺が怖いかな？」

『呪い付き』だと知ったヘインは自分をどう思っているのか。俺は彼に問いかける……が、

「おいおい、ケイト。わかりきったことを聞くなよ。僕を馬鹿にしに来たのかな？」

そう馬鹿にするように笑う。俺もヘインの返答は想像が付いていたので何も言わずに笑って返した。クルスもうんうんと頷いている。シリアはばつが悪そうだったが、彼女にもヘインが信用できるとわかってもらえたのではないだろうか。

ヘインから彼が巻き込まれた事件について詳しく話を聞くと、発端は学院から人が消えるという噂を調べ始めたことだったらしい。彼は全部は話せないと謝りつつ、苦虫を噛み殺したような表情で話す。

「僕は色々な人の力を借りて、真実まで後一步まで迫ったんだ。だが……僕が不甲斐ないばかりにホルス達の介入を許してしまった。証拠は無い。だけど、彼らが介入するタイミングが良すぎた……命を助けられたのは感謝しているけど……」

ヘインは悔しそうに呟く。原因まで解決できる情報を掴んでいた彼を出し抜いた二人に命を助けられたことを感謝しつつも、そのせいで完全に解決出来なかったことを悔やんでいるようだった。

「実はケイトには僕から会いにいかうとも思っていたんだ」

「……まさか、何かあった？」

ヘインは両手で自分の膝を強く掴み、難しい顔で頷く。

「事件が解決してからおかしいな失踪は無くなったんだけど……最近、またそれらしい事件が起こってる。手口と消える対象が同じだ」

「そういうことが……」

「ケイトも狙われるかもしれない。早く街を出た方がいい」

そうヘインが心配そうな顔をして締めくくる……本当に有り難い友人だと思う。

クルスは黙ってヘインをじっと見て、シーリアはヘインの言葉に驚いていた。

「ヘイン有難う。悪いけどそういうわけにはいかない」

「何故だ？」

「犯人の目星は大体ついている。ヘイン、それも調べられるか？」

ふむ……と、ヘインは黙って考え込んだ。時間を掛けて……顔を上げる。

彼の顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「犯人がわかってるなら話は早いね。やつらに借りが返せそうだよ」
「ラキシスさんにも頼んでいるから、協力して欲しい」
「わかった。僕に任せておけ」

自信を持ってヘインは大きく頷くと、今度はシーリアの方を向く。

「シーリアさん。こいつは他人や周りのことは良く見えるが、自分のことは見えないから心配なんだ。助けてやって欲しい」
「え、あ、うん。と、当然よ！ 私がケイトを守るわ」

シーリアが立ち上がって力強く力説する。

物凄く恥ずかしいんだけど……昨日の夜に聞いていた彼女もこんな気分だったのか。朝、変な反応だったのも恥ずかしい台詞を聞いて、反応に困ったからか。これはまずい。

「くくつ、本当に分かり易い……いや、心強いな。な？ クルス」
「ヘイン……後で覚悟しとくといい」

ヘインはからかうようにクルスを見て……クルスは殺気を放ちながらヘインを睨み返していた。

第二十二話 個人の力、社会の力

雑談をしばらく続けていると、金色の髪を後ろでくるくると巻いた女性がヘインを迎えに来た。確か前に会ったユニティアという名の貴族だろう。

学院に用事があるらしいシーリアも彼等と一緒に行ってしまったため、特にやる事が無くなってしまった。家に戻るのも何なのでクルスに何処か行きたい場所があるかを確認すると、

「西側の職人街を歩いてみたい」

と、少し考えてから答えたため、俺達は街の西側を見てまわることにした。クルスも来たばかりで、色々と興味があるらしい。時間があれば商人達の集まる北側も回って見ようと思う。

ただ、現状はやはり人通りの少ない場所は行きにくい。その辺りは不便だ。改めて自分を狙う連中に文句の一つも言いたくなる。

学院関係の施設が立ち並ぶ内壁の中の西側を歩きながら、クルスは俺の隣を歩いている。二人だけでこうして並んで歩くのも思えば久しぶりだ。

半年くらいしか経っていないのに随分前のことのように感じる。

「ケイト。ヘインに何を頼んだの？」

「え、あの時の話の通りだけど」
「なんだか難しくて意味が全然わからなかった。みんなわかってるのにずるい」

突然のクルスの問いに一瞬どういうことが判らずに立ち止まってクルスの顔を見る。少し考えて……ああ、と、理解する。クルスは前に会った時の会話を知らないのを忘れていた。

どう説明すればわかってもらえるかを考えながら言葉を選ぶ。

「ヘインが俺に会う前に異種族や呪い付きに関わる事件に巻き込まれてたんだよね」

「うん、それは聞いてた」

わかりやすい場所から説明する。これはヘインが話していた通りだ。

「あいつはどうやったかわからないけど、事件解決寸前まで動いていた」

「でも、失敗した」

失敗というのはどうだろう。ヘインが……まあ自分から動くタイプではないから、多分成り行きだったんだろうが……動いたからこそ事件は減った可能性はある。

「まあ、それは一旦置いておいて、ヘインは貴族から仕事を受けてるんだ」

「仕事？」

「そう、薬に関する仕事。さっきヘインを呼びに来た女性の父親から」

背が低くて同世代くらいの幼い感じの女性……迫力があるのは人の上に立つための教育を受けているからなんだろうか。

「さて、ヘインは自分とその女性が巻き込まれたと言ったよね？」

「待って………うん、言ってた」

「にも関わらず彼女はヘインと仲がいい。ということはヘインは信頼されてるんだ」

クルスがそれに何の関係が？　と言いたげに首を傾げる。この辺りは村での生活しかしていないクルスには……ちよつとわからないのかもしれない。

人間関係の恐ろしさというか、権力の恐ろしさというか、その辺りの重要さは。

「例えばさ。クルスのお母さんが意味無く殴られたでしょう。どうする？」

「……半殺し」

「貴族さんもそう思うと思わないかい？」

クルスが上目遣いで俺を見て、こくりと頷く。理解してくれているようだ。

なんだか、幼い頃に二人で勉強していた時を思い出す。

「だとすれば、ヘインを通じて協力することも出来るかもしれないよね」

「うん。同じ目的がある……ということ？」

自信なさげに答えるクルスに正解。と俺は頷く。

村で育ち、知識に関しては俺から殆どを学んでいるクルスは身分関係については疎い。

自分ではわかつているけど、この世界では……貴族とそれ以外の身分というものに関してはよく学んでおかなければならない必須の知識だったかもしれない。今となっては後の祭りだが。

今話しておいて損はないだろう。

「クルスも冒険者になるなら覚えておいた方がいいけど、貴族っていうのは強いんだ」

「……戦いに強いのか？」

俺は首を横に振る。素朴な答えで俺は好きだけど……今の調子で貴族に失礼なことをしてしまうとまずい。彼女は誰であろうと喧嘩を売りかねない。

「貴族はたくさん知り合いがいるし、お金をいっぱい持ってる。人

を雇うことも出来る。この街の有力な貴族なら街の役人を動かすこともできる」

「なるほど……あ……ま、大丈夫かな……何でもない」

クルスは何かを思い出したらしく声を上げる……すでに何かやったのか？

気になるけど……追求するべきかどうか。とりあえず話を進めよう。

「……続けていいかな？ ヘインは賢い方だと思うけど十六歳だし、こつという難しい事件に手を出したときにはいろんな人の力を借りているはずなんだよ。彼だけじゃ無理なんだ」

「ケイトなら……いける？」

期待のこもった目でクルスはこちらを見たが、俺は苦笑して首を横に振る。

「俺も無理だよ。一人で何でも出来る訳じゃないから」

「だから、ラキシスやヘインの力を借りて……そこからさらに色々な人に力を借りて行く……そういうこと？」

あつてる？ と嬉しそうに見上げてくるクルスに俺は笑って頷いた。

「普通なら力を借りても隠れてる犯罪者の尻尾を掴むのは大変だけど……今回は俺が犯人を知っているからね。そこまで難しくないはず」

「……そんなやり方、全然思い付きもしなかった。戦えばそれでいいと思ってた」

「上手く行くかはわからないし、絶対正しいなんてことないし、それに……」

そんなやり方を理解していても困る気がする。殴れば解決というのは女の子としてはどうだろうか。まあ、クルスはクルスだからそれもいいのかもしれない。

それに俺のやり方も華がないというかなんというか……自分でもどうだろうと思う。俺は苦笑いしながら言葉の先を続ける。

「自分の力ではないから……物語みたいに格好良くはないけどね」

「そんなことない。私もそういうのも覚えてく」

「出来れば俺に出来ること残して欲しいなあ。クルスはただでさえ強いんだし」

やれやれと頭を搔くと、クルスはくすくすと笑った。

西の門を超えて外に出ると、南とはまた違った賑わいを見せている。

南は食堂や酒場の呼び込みなどが多いが、こちらは職人が作った商品売るために露店を出して声を上げていたり、学院の生徒らしき人間が占いを出していたり……祭りのような雰囲気というのだから

うか。

店も剣のマークの看板や杖のマークの看板、それぞれの家に特徴的な看板が掛かっている。この看板が掛かっているのはどれも商人や職人が作った物を売っている店だ。

学院と提携した魔法のアクセサリーや道具を売っている店などもあり、南の一带に負けないくらい色んな商人や冒険者、一般人で賑わっている。

クルスはこういった物がたくさん売られている賑わいを楽しそうに見ながら、俺の手を引つ張って好奇心の赴くままに露店で売られている物をみたり、触らせてもらったりしていた。

「ケイト。次あれ。何だろう」

「わわ、人に当たるって！」

「急いで」

世界が変わっても女の子はこういうのが好きなのかな……と、少しの心の痛みと一緒に懐かしさを感じながら、そんな風にちょっと思ったりもした。

そうやって暫く一緒に見ていると、クルスはアクセサリーの所では長めに立ち止まることに気が付いた。そして、並べられているそれを真剣に見つめている。

「ケイト……」

「何？」

「何でもない」

何かを言いたそうに口を閉じて黙り込む。本当は何か言いたいことがあるときの表情だ。彼女が何を言いたいのか考えるが……わからない。村にいるときなら殆どわかったのに。

先ほどまでは楽しそうだったのに、何だか暗い顔をしてしょげている。

「もついい……」

力無く、俺を置いてふらふらと歩いていこうとする。一人にするわけにはいかない。

慌てて追いかけて隣に並ぶ……するとクルスは俺を上目遣いで見て、少しだけ辛そうに言った。

「ケイトはシリアにも買った……あいつの方がいい？」

「は？」

彼女の言葉の意味がわからずに思わず困惑する。どういう意味かと必死に考えようとして……横から別の人物から声を掛けられ、思考を強引に中断させられた。

「これは奇遇じゃの。二人とも、ミス殿は放っておいていいのか

「？」

「ゼムド……」

気がつけば目の前に普段の鎧姿ではなく、神官用のローブだろうか……真っ白な裾の長い服を着た背の低い長い髭のドワーフが俺達の前に立っていた。

第二十三話 理解

神官用の白いローブを着たゼムドは髭を触りながら俺達を見比べ、ふむと一つ頷いた。

いつもと違いこうしてちゃんと神官服を着ていると、不思議と着慣れているような雰囲気があり神官に見える。彼は笑いながら指で印を切った。

「これも運命か。お邪魔かと思うたが、お主らを見ておると今日はそうでもなさそうだし」

「ゼムドは神殿に？」

「うむ。迷宮に入らぬ日は仕事をせねばな。さて、暇なら拙僧に付き合わぬか？ なあに、損はさせぬよ。神の思し召しというやつじや。拙僧はこの辺りは詳しいからの」

クルスと顔を見合わせると、彼女は頷いた。このまま妙な空気のまま二人だけで歩くのも少し辛い。俺は念のため探知の能力を発動させて、ゼムドの方を見て頷く。

「ゼムドありがとう。もう仕事は終わったのか？」

「うむ。幸いにの。それに迷える若者を導くのも立派な仕事じゃて」

にいつとゼムドが意味ありげな笑いを浮かべて俺を見る。もしか

すると、俺達の間のきまずそうな空気に気づいていたのかもしれない。

俺達はゼムドに案内されて職人街を歩く。狭い道も通っているが彼は道がしっかりわかっていようで迷う様子は無い。歩きながらクルスは自分からゼムドに話しかけていた。

「ゼムド。ドワーフってどんな種族？」

「興味があるのかの？」

「書物では読んだ。だけど、本人達に聞くのがわかりやすい」

ゼムドはクルスの答えを聞くとほう、と感心したような声を上げて頷く。そして、困ったように俯いて考え込んでしばらく時間を空けてから答えた。

「いざ、自分達がどんな種族なのかを聞かれると難しいの。お主ら人間も人間とはどんな種族かと聞かれても困るのではないか？」

「ん……そうかも」

「ドワーフにもいろいろいるしの」

話を聞きながらなるほど俺も思う。書物には、頑固で融通が利かないが根気が必要とする仕事は得意としている……と書かれている。全てが全てそうではないのだろう。

人間に色々な人がいるように、当たり前だがドワーフにも様々な者がいるということか。

クルスも納得するように頷いている。

「まずはここじゃ」

「ん、料理屋？」

「はっはっは！ 空腹だとなんことを考えんからの」

ゼムドにまず連れていかれたのは、西の外壁近くにある料理屋だった。味は確かに美味しかったが量がとにかく多く、俺とクルスは二人で一皿食べることになってしまった。

彼自身は小さい体のどこに入るのかという勢いでおかわりまでしていたが。

腹ごしらえを終えると、元々小食なクルスは二人で食べても多かったのかお腹を抑えていた。ただ、満足はしたようで表情は柔らかい。

ゼムドはそんな様子をみて笑いながら、

「これから行く場所が本当にお主らを案内したい場所じゃ」

と、俺達告げ、先頭に立って職人街を歩いていた。

どれくらい歩いただろうか。ゼムドは小さめの何かの工房らしき看板の掛かった家の前で足を止めると、ドンドン！ と扉を強く叩く。どうやら目的地に着いたらしい。

「なんだ、ゼムドか。おいおい人間も一緒か？」

「うむ、世話になっておるもんでな」

中から出てきたのは、白髪で皺だらけの年老いたドワーフだった。老人であることはわかるが眼光は鋭く、弱々しい雰囲気は全くない。体付きもゼムドのように頑健そうだ。

「まあいい。入れ」

促されて中に入る。工房の中は鉄の臭いや木の臭い、物を燃やした臭いなどが混ざり合った独特の匂いが立ち込めていて、この建物の中で長い間それらが使われていた事を思わせられる。

白髪の老人の工房には剣や槍などの武具を始め、生活道具、アクセサリー、玩具から芸術作品らしきものまで乱雑に置かれている。

値札などは付いていない。売ることを考えていないのだろうか。俺もクルスもそんな不思議な空間をゼムドの後ろについてキョロキョロと見回しながら歩いていた。

老人は人数分の椅子を用意すると座るように勧める。

「ゼムド。お前が人間を紹介するとは珍しいな」

「何、神の導きでしてな。見所もある」

「ふむ……。若いが剣の腕は立ちそうだな。特にそっちの娘は」

低いが良く通る声で白髪のドワーフはそう話しながら、俺とクルスを値踏みするように見る。外見からそうということがわかるのだから

うか。

「僕はクロムだ。見てのとおり色々な物を作っている」

「私はクルス。よろしく」

難しい顔をしたままクロムが自己紹介をし、俺達もそれぞれ自己紹介をした。それ以上彼に話す様子が無かったので俺の方から彼に話し掛ける。

「武器を見せて頂いてもよろしいでしょうか」

「構わん。買うものがあれば僕に言え。値段を教える」

俺は頷くと籠に入られている剣を一本ずつ抜いて確認していく。どれも切れ味は良さそうだが……違和感を感じる。一度剣を置き、母親から貰った自分の剣を抜く。

自分の剣を見て、その違和感になんとなく気付いた。ただ、指摘するかを迷う。それに気づいたのか白髪のドワーフ、クロムはじろりとこちらを睨んだ。

「小僧。言いたいことがあるならはっきりと言え」

「この剣は量産品ですか？」

「ほう……若いのに目が利くようだな」

クロムがその強ばった皺の顔を俺達が来てから初めて緩めた。笑っているのだろうか。白い髭で口元が完全に隠れているため、表情は読みにくい。

疑問を感じたのかクルスがクロムに不思議そうな顔を見せた。彼女もなんだか昔より好奇心が旺盛になっている気がする。

「どうということ？」

「つまり、売り物の剣の品質と値段は鍛冶ギルドが決めているということじゃよ」

むつつり黙ったクロムではなく、ゼムドが彼の代わりに答えた。クルスはまだ不思議そうにしている。納得いかなかったのかもしれない。

クロムがクルスの顔を一度見て、俺の方に向きなおす。

「小僧、わかるか？」

「安定した品質の供給と価格の暴落を防ぐため」

「ふん、建前はそうだな。剣を貸せ、正解の褒美に研いでやる」

後は一部の腕のある職人の独占を防ぐため、というのもあるのだろ。彼も腕を中々震えずにいる一人なのかもしれない。俺は礼を言つて剣を渡すと彼に頭を下げた。

彼が奥に下がってからゼムドは俺を見て笑った。

「気に入られたようじゃの。珍しいわい」

「そうなのですか？」

「人間を嫌っておるでな。だが、ギルドに入らなければ鍛冶が出来る。素材も買えんしの」

苦い顔でクロムが消えた方をゼムドは見る。クルスは先程の話を整理しているのか、しばらく目を閉じていた。そして、ゼムドの方を向く。

「クロムは全力で好きな剣を作れないということ？」

「中々難しいの。方法はあるのじゃが」

「俺達が稼いで一から全部作ってもらえば出来るかもね」

なるほど、とクルスは頷いて立ち上がりクロムが作った一つ一つの作品を見せてもらい始めた。俺も彼女に並んで売り物を見る。

一つ一つの道具に量産品でありながらも、どこかこだわりが見られるのは彼の職人としての意地なのかもしれない。

そんなことを考えながらアクセサリーを見てみると、クルスがこちらをじつと見ているのに気が付いた。今日の朝からそうだが、何か欲しいのだろうか。

「欲しいのがあったら買おうか？ …… あたっ！」

「この馬鹿者がっ！ そういうときは黙ってお主が選んでやらんか！」

クルスにそう聞こうとすると、バシッ！ と、店中に響くくらい思いつき尻を叩かれた。正直痛い。いつも穏やかなゼムドが何故か怒っていた。

「全く。何でそんなとこだけ鈍いんじゃない」

「いや、ゼムド。これには事情があるんだ」

「言い訳は見苦しいぞ。ケイト殿」

詰め寄るゼムドを説得する方法が思い浮かばず、あたふたしているとクルスが割って入って引き離してくれた。が、彼女も思いつめたような表情で俺をじっ……と見る。

「事情って何。あの女の方が……いいから？」

「え、あ、迷惑なのかなって。前に上げたのも付けてないし……」

言いながら胸が痛み、ふう……と、溜息を吐く。クルスはきょとんとして、俺を見ていたが少しずつ申し訳なさそうな、泣きそうな顔になり、

「あれは戦った時に壊された……ごめんなさい」

話に聞いた傭兵の隊長と戦った時か。戦うときも肌身離さず付いて……そういうことか。彼女をある意味疑っていたことに恥ずかしくなり、頭が痛くなる。

「ごめん、クルス」

「ううん。私も言えなかったから」

クルスは微笑んで首を横に振った。ゼムドは笑いながらこちらを見る。

「一件落着かの。深い付き合いでも話さねばわからぬことはある。誤解が解けるまで、しっかり話すことも時には大切なことじゃて」
「ケイトなら何でもわかんと思ってた」

真顔でゼムドにそう返したクルスに苦笑しながら、俺はゼムドに頭を下げた。

俺も話さなくてもわかりあえると思い違いしていたようだ。俺とクルスは違う人間なのだから当然理解し合うにはお互いを理解する努力をしないといけないのに。

「買い被られてるな。ゼムド……有難う」

「なあに、拙僧は何か上げれば仲も直るかと思っただけじゃからな。お互いを理解するにはぶつかることも必要じゃがお主らは喧嘩はしそつにないしの」

なかなかよく人を見るのは流石神官というべきなのだろうか。
俺はクルスの背中を叩き、またアクセサリーの置かれている方に行

くと、彼女に似合いそうなアクセサリーを探し始めた。

第二十四話 首飾り

一つ一つのアクセサリーを見ながら真剣に悩む。壊れたのと同じものが無いのは当然だが、出来れば今のクルスに一番似合うものを選びたい。本当にそう思う。

俺の記憶にあるクルスと今のクルスは少しだけイメージが違う気がするのだ。

あれでもない、これでもないと乱雑に置かれているかなりの数のアクセサリーをかきわけながら探す。クルスの方は安心したのか、ゼムドに解説をしてもらいながら楽しそうに置かれている色々な武器を手に取り、その感触を確かめていた。

「投げ武器？」

「こりゃ暗器といつての、相手の不意を討つ武器じゃ」

「そういうのはちょっと苦手」

クルスには飾りものより実用的な物の方がもしかするといいのかもしれない。彼女の嬉しそうな様子を見ながらそんなふうにも思った。

すっかり放置されてやれやれと溜息を吐きながらも、何と無く笑みが自然と浮かぶ。

小一時間くらいは探しただろうか、俺は一つのアクセサリーを見

つけていた。

「これにしよう。どうかな」

小さな水色の珠を銀で掴むようにデザインされた首飾りを手に取り、クルスに見せる。今の好奇心溢れる彼女には、何だか地球を掴んでいるようなこれが似合うような気がしたのだ。

「似合う?」

「似合うのは間違いないよ」

ちょっと不安げな彼女に笑いかける。成長しても自分に自信を持てないのは相変わらずらしい。近くにいると、時折ドキッとさせられるくらい綺麗になっているのに。

「小僧。そいつは小銀貨二枚だ。剣……出来たぞ」

「有難う御座います」

クルスが首飾りを受け取っているんな方向から飾りを眺めている時、奥の部屋から白髪のドwarfが剣を研ぎ終えて出てきた。彼は相変わらずの苦々しい顔で俺に剣を渡す。

「業物だな。久しぶりにいい仕事が出来た。大事にしろ」

「わかりました」

深々とクロムに頭を下げて礼を言い、剣を受け取って鞘から抜き、刀身を確認する。

「凄いね。まるで別の剣みたい」
「そうだね」

クルスが少しだけ驚いたような声を上げ、俺も頷く。ただ研いただけ。

自分でもいつもやっていることだ。だけど、これだけ出来が違う。まるで剣が生き返ったかのような……これがドワーフの技量か。

「はっはっはっ！ クロムは我が神に愛されておるからの」
「ふん、神など知らぬわ」

笑うゼムドをクロムが睨みつける。
ゼムドはいかんいかと慌てたように苦笑いして呟くと、俺達の方を見た。

「こやつの腕は優秀じゃが中々生かせなくての」
「いつか剣を作ってもらいたいですね」

心底からそう思う。彼の作る自分用の剣……戦う事が全てではないがどうしても惹かれてしまう。そんな魅力がただ研いただけの今の剣から感じる。

「人間の鍛冶士と同じ条件だ。儂に不満はない」

クロムはゼムドに言葉少なく、それだけを言って黙り込んだ。

クルスも何か買うものがあつたらしく、彼女がお金を支払うのを確認し俺達はクロムの工房を後にすることを彼に告げた。

クロムはいつでも来るがいいと不機嫌そうに言いながらもドアまで見送ってくれた。

クロムの工房でゼムドとも別れ、後の街の探索を二人で楽しんだ後、『雅な華亭』で宿の女将のエーデルさんに謝罪して宿の解約をさせてもらい、ラキシスさんの家に戻る頃には日が暮れかけていた。

街を歩くクルスは時折思い出したように、首飾りを何度も弄っていた。表情には出ていないけど、気に入ってくれたのかもしれない。

部屋に置いていた荷物をマイスの分まで担ぎながらラキシスさんの家に戻ると、客間でシーリアがぐったりと疲れた顔で椅子に座っていた。

そんなシーリアをラキシスさんが困った顔をして慰めているようだ。

「ただいま帰りました」

「あ、ケイト君。クルスちゃん。おかえりなさい」

どうかしましたか？ と、シールリアの方に顔を向けるとラキシスさんはああ、と頷いて少しだけ苦笑いする。

「さっきまでケイト君のお友達と私の知り合いの女の子が遊びに来てくれていたの。ちよつとその子がシールリアは苦手だったみたいでいい子なのに」

なんでかな？ と小首を傾げながら困惑した顔を見せる。俺の友達はヘインとして、彼女の話の内容から察するにもう一人は……。

「もう一人は金髪の子でしたか？」

「あら、ケイト君もユーニティアちゃんのことを知っているの？」

「友人と仲がいいみたいなので。ラキシスさんは何故？」

恐らく学院での様子からシールリアは彼女とラキシスさんが知り合いであることは知らなかったはずだ。学院で彼女に捕まり、家に来てもずつと怒らせないように気を配っていたのだろう。

「仕事で良く彼女の家に行っていたの。ちよこちよこ歩いてて、名前呼んでくれて……昔から可愛いかったのよ？ あ、今日は他人行儀だったわね。お友達がいたからかしら」

「なるほど。そういうことでしたか」

懐かしそうに、そして嬉しそうにラキシスさんは眼を細める。

彼女の話聞いてると仲が良かったのかもしれない。となると、ユーニティアはシリアのことを元々知ってたそう。もしかすると……ううむ。

ぐったりしているシリアに同情する。きっとからかわれたに違いない。

「ところで、ヘインは何か言っていましたか？」

「ええ。とりあえず情報は交換したわ。あちらにはあちらの狙いがあるとは思っただけねど……カイルの力を借りられるのは大きいわ。ケイト君のお友達も若いのに賢いわね」

本当に人間は面白い……と、ラキシスさんは小さく呟く。薄らと浮かぶ微笑みは好意的なように俺には感じた。

「どれくらいの組織なのかはまだわからないけど、私の身内を狙ったのが運の尽きね。少し泳がせて証拠を掴んで……一ヶ月以内にこの街から叩き出すわ」

「じゃあ、その間は注意しておきます」

シリアを組織的に狙っていることに余程の怒りを感じているのか、静かだが力の込めった口調でラキシスさんはそう言い切った。そして、彼女は俺を真っ直ぐに見つめる。

「ケイト君、一つ聞かせてもらってもいい？」

「なんでしょう」

「ケイト君の能力はどんななの？」

その質問を聞き、ぐったりとしていたシーリアが急に顔を上げてこちらを見る。

そのまま話そうとすると、それまで黙っていたクルスが俺の隣に立って手を広げて俺を静止し、シーリアをじっと見つめて静かな口調で口を開いた。

「貴女も聞くの？」

「……どういう意味よ」

シーリアが立ち上がった……一瞬だけ、クルスの胸元を見て驚いたような顔を見せ、彼女を睨む。だが、クルスは気にせずに続ける。

「ケイトの能力を聞いてまた態度を変えたら彼が悲しむ」

「貴女は知ってるの？」

「大体想像は付いているし、私はケイトを信じているから関係ない」

クルスとシーリアが睨み合う。シーリアも下がる気はなさそうだが、彼女は昨日、友達だから関係ないと言っていた……信じて見よう。怖がられたらその時はその時、仕方がない。俺は俺の出来る事をや

るだけだ。俺は変わらない。

「いいよクルス。一緒に聞いてもらう。心配してくれて有難う」

「ケイト……」

「クルスちゃん。うちの娘をあんまり虐めないで欲しいわ。怖がりなんだから」

クルスが不満そうな顔をし、ラキシスさんはくすくすと笑う。

「大丈夫。ケイトは自分を守ってくれる人だしね」

シーリアが自信あり気に笑ったのを見て、俺は頷く。

「俺の能力は、能力や技術、『呪い付き』の特殊技能まで数字で見られる能力です。有効範囲はこの家が五、六戸分くらいはあります」

クルスになるほど、いつもどおりの無表情で頷き、ラキシスさんとシーリアは啞然とした表情をしていた。まあ、驚くのは当たり前かな。

だけど、嫌悪の色は二人ともない。ただ、ラキシスさんは思ったよりも深刻な表情をしていた。

「ケイト君。その能力……絶対に口外しては駄目。クルスちゃんと

「シリアもよ」

「危険ですか？」

「危険ね。特にカイラルには絶対伝わらないようにすること」

クルスもシリアも神妙な顔で頷く。ただ、能力をみることの出来るだけの便利な能力だと思っただけど、それ程危険なのだろうか。

「わかりました。気を付けます」

「ええ、お願いね。それじゃ……マイス君に会ってきなさい。貴方の友人が先に話しているはずだから。待っていると思うわ」

俺は自分の能力についてももう少し考えてみようと考えながら黙って頷くと、クルスに行こうと声を掛けてマイスの部屋へと向かった。

第二十五話 友人達

ラキシスさんから宿として借りたマイスの部屋の扉をノックすると、中からヘインが入るように促してきた。俺達は頷きあって中に入り、宿から運んできた荷物を置く。

部屋の中ではマイスが目の下に隈を作り、むっつりと口を閉じてヘインの対面に座っていた。何時もの明るさは欠片もなく、相当悩んだのが想像できる。

「おかえり。ケイト、クルス」

「ヘイン。早速動いてくれてるみたいで悪いな」

村にいた頃よりも気難しそうになってしまったヘインは、ふう、と疲れたような溜息を吐いて苦々しい顔で首を横に降った。この四人が集まるのは本当に久しぶりなのに……雰囲気は重苦しい。

「構わない。ただ、あのエルフさんは僕は苦手だな。殺されるかと思っただ」

「そうか？ 優しいと思うんだけど」

「……ケイトは騙されてる」

ヘインが何を言ってるんだという顔をし、クルスも理解しがたい

といった感じに小さく呟く。何だかみんなまだ誤解をしているようだ。

「まあいい。確かに君には優しいんだろうし。マイスの話は後でするとして、まず僕から彼女と話し合ったことを報告しよう。大体は聞いたと思うが」

「ああ、ヘインの友人と協力するとかなんとか。領主の関係者なんだっけか」

ああ。とヘインは頷く。そんな相手と平然と付き合えるとは……子供の頃は普通に怖がりな部分もあったのだけれど。いつのまに精神的に強くなったのだろうか。

報告のこととは関係の無いことを考えながら、ヘインの方を見る。

「ああ。ラキシスさんはお前の名前を表に出さないことを協力の条件にした。僕はそれがケイトのためにも良いと思ったんだけど、ユーニティアが興味を持ってしまってたね」

ヘインは苦笑する。二人の間に立って大変だったのかもしれない。ユーニティアさんとやらが、どんな人なのかはわからないが。この巨大な都市を管理しているカイルル家の一員だし、油断できない女性なのかも。

「お陰で笑顔で剣を突きつけ合うような、雰囲気だったよ。ユーニティアは君が『呪い付き』であることは知っているけど、能力は知

らない。だから気にしてるのさ」

「カイルルには気をつける……か」

「違うないね。優秀な貴族というのは恐ろしいものだよ。僕はそんな彼女に嘘を吐いておいた」

「何故嘘を？」

後が怖いね。と、ヘインは笑う。そんなことをして大丈夫なのだろうか。

クルスは嘘を吐く理由がわからなかったのかヘインに質問した。

「研究者は隠されると知りたくなるからね。嘘の答えでも知ってれば納得するのさ」

「どんな嘘を」

「ケイトの能力は遠くを見る能力だって。多分、実際は違うだろ」

クルスが頷く。俺は彼とマイルスにも自分の能力を説明をしようと思ひ、口を開こうと思つたが、制止されてしまう。

「俺とマイルスは知らない方がいい。マイルスは顔に出やすいし、僕はどんな手を使ってでも聞き出されてしまいそうだからね」

「そっか。今まで黙つてて……悪いな。本当に」

「いいさ。どうせ僕達は変わらないし。長い付き合いだからね」

ヘインは大したことないから深刻ぶるんじゃないと、立ち上がった俺を軽く殴つた。俺はやれやれと苦笑して、ヘインの肩を一度だ

け叩き、クルスと一緒に床に座った。

「それでマイルスは……？」

さっきから俺達の話の黙って聞いていたマイルスに顔を向ける。俺が来るまでヘインと話していたせいか、顔色は優れないものの落ち込んでいるといった雰囲気はない。

マイルスを放って出かけるのも気が引けたのだが、一人で考えたいと言われたので問題が問題なこともあり、介入しにくかったのである。

「ああ、決めたぜ。ヘインから話を聞くまでは悩んだんだがな」

少し疲労が残る顔でマイルスは明るく笑い、俺の肩を思いっきりバシバシと叩く。痛い……わざと思いつき叩いているらしい。

「馬鹿野郎！ 大事な話だけ俺を省いているんじゃないやねえよ。水臭すぎるぜ！」

「……もしかして全部話を聞いてしまったのか」

この話を聞けばマイルスの選択は固まってしまう。恋人が待っているこいつを危険な目に合わせたくなかったというのに。だからわざわざ大事なところは隠してたのに……。

「当たり前だ。お前はマイルスを心配するがマイルスが帰ればお前とクルスが危なくなる」

「全くだ。友人を見捨てて帰ったなんて、リイナと子供になんて言やいいんだ」

ふてくされたようにマイルスがそばを向き、ヘインが苦笑いする。クルスは黙って俺達を見ているがあまり納得はしていなさそうだ。彼女の父親のことを考えると仕方ないのかもしれないが。

「父親がいないのは大変」

「う……だが、決めたんだ！ 帰るのは今回の件が解決したらってな」

クルスは睨んでマイルスを見るが、彼は彼で引かずに睨み返す。こうなってしまったか……と、思わず苦笑する。今回の事件で俺達に差し迫った危険があることを知らなければ、安全に過ごせたはずなのに。

マイルスは損な性格をしている。困った者を絶対に見過ごせない正義感を持っている。

それは素晴らしいことだとは思うが……俺がもし同じ立場の時、迷わず危険のある方を選ぶことができるだろうか。

「完全に巻き込んだな。しょうがないか」

「ああ。そうだそうだ。しょうがねえ」

俺が諦めて笑うとマイルスも同じように笑う。ヘインも苦々しく笑い、クルスは大馬鹿、と呟いて憮然とした顔で拗ねていた。

「大体半分以上はシリアのせいなのに」

「まあまあ、そういうなってクルス。あいつも結構いい奴なんだぜ？」

そう、シリアのことがなければ恐らく俺もここまで警戒しなかった。普通に迷宮へと潜り、多分マイルスも俺達が心配なければ迷いつつも帰っていたかもしれない。

だけど、彼女に責任が完全にあるとはいえないし、責めるのは酷だろう。

ラキシスさんの娘でもあるし、何より仲間だ。見捨てられない……。

「てかよ。ケイトも俺と変わんねえじゃねえか。シリアの為に命を賭けてよ。お前だって家族がいるのに俺だけ駄目ってのはねえぜ！」

「あ………そっぴやそっぴか。参ったなあ」

「ケイト。女誑し」

マイルスの言うとおりだ。俺も当たり前のように危険な道を選んでいた。俺は頭を掻いて苦笑いする。そんな俺を見てヘインはおかし

そうに笑った。

「マイスの迷いも晴れて何よりだ。さて僕は……っと、危ない。忘れるところだった。これを渡しておかなければ」

そういつて、ヘインは自分の鞆から袋に入った何かを俺に手渡す。袋の中には球体の何かが入っているようだ。クルスも興味深そうに袋を見る……これはなんだろう。

「何これ？」

「それはケイトの位置を確認するための道具だ。魔力石が加工されててね。対応する魔力石がある方向と距離を光の強弱で教えてくれる」

クルスとマイスが説明を聞いてもよくわからないといった風に首を傾げる。ようするに、発信機みたいなものかなと思う。問題はこの道具を俺に渡す意図だ。

「何故こんな物を？」

「ケイト達が狙われているなら、迷宮内でもお前を襲わないとは限らない。だから、雇った冒険者に警戒させるらしい。まあこれはラキシスさんの発案だが」

「親馬鹿……だけど、ちよっとだけ見直した」

ふむ、と少しだけ考える。自分の能力があれば迷宮内でもおそらく逃げ切ることが可能だ。意味はない気がするが……ラキシスさんの好意を無にすることもない。

俺は頷いて彼からの道具を利用することに決めた。

道具を渡すとヘインは寮へと帰ろうとしたが、マイスは帰ろうとする彼の首根っこを掴んで止める。俺達もヘインも何事かとマイスを見たが、彼は笑って酒を飲む仕草をした。

「まあ待て。折角四人集まったんだ。飲もうぜ。ヘイン、お前はもう成人だろ」

マイスはヘインに片目を瞑って笑いかける。ヘインは驚いたような顔をしていたが、はぁ……と溜息を吐き、

「僕は酒で前に失敗したんだ。酒飲まなくていいなら付き合っよ」

諦めたように頷き、マイスと並んで歩いていった。

第二十六話 能力

翌日の朝にはマイルスは何時もの快活さを取り戻していた。

まあ、この大雑把な友人に複雑な悩みは似合わないし、これで良かったのかもしれない。

マイルスは書くのが苦手な手紙を、紙いっばいに彼の思いを書いて送ることにしたらしい。クルスが読ませてと頼んでいたが、大きな体の後ろに手紙を必死に隠して恥ずかしいから駄目だと断っていた。

きつとリイナの手元に渡ると一生大事に保管されてしまうに違いない。

準備をして神殿に宿を取っているゼムドを来るのを待つて迷宮のある荘厳な建築物の中に入る。迷宮に潜るための冒険者で溢れる建物の中、歩いていると探知の能力に知っている名前が引っ掛かった身を固くして警戒する。サイラルだ。

後ろには殺してやるといわんばかりの表情の坊主頭の戦士、ザグも立っている。

軽目の鎧を身に付けた金髪の優男風の奴はすぐにこちらに気が付き、手を挙げて傍目には爽やかに見える笑みを浮かべながら馴れ馴れしく近付いてきた。

「やあ、おはよう！ ケイト君も元気そうだね」

不快そうに顔をしかめるシーリアを背中に隠しながら、俺は肩を叩こうとした奴の手を軽く払い、感情を出さないように冷静に返す。

「サイラルだっけ。俺達に何か用？」

「俺のシーリアちゃんはきちつと守ってくれてるらしいね。お……今日はまた新しい可愛い子もいるじゃないかつ！」

そういつてサイラルはクルスの方を見たが、彼女はまるで物を見るような眼で見返した。

「おおっ！ こわっ！ だがそれもそそるねえ」

「あんたみたいな変態は好みじゃないらしいよ」

「やー。君は本当に堅苦しいなあ。俺のになるんだし、彼女達の好みなんてどうでもいいのさ。わかってないなあ」

サイラルは本当に俺のことを心配するようにため息を吐くと、やれやれと首を横に振る。本当に彼は同じ人間なのだろうか……そう思い、怒りよりも不快さが沸き上がる。

だが、サイラルは俺の態度を意に介さず微笑む。

「なんで他人のためにそんな必死になれるのかな」
「仲間を守るのは当たり前だ」

不思議そうに聞いてくるサイラルに答えると、彼は腹を抱えて笑いだした。馬鹿にしているといった感じではない。心底可笑しいといったように。

「あははははははっ！ う、ごほっごほっ！ はあゝいやいや、若いねえ。だが、覚えておくといい。人間は……いや、全ての生き物は須らく裏切るものさ」

サイラルは笑みを納めると、剣の鞘を弄りながら口の端だけ歪める。そして、ザグにそろそろ行くぞと声を掛ける。

「君もいずれわかるさ。いや、早く分かって欲しいね。本当に信用できるのは自分と金だけだってね。後は利用するかされるかだ」

本気で言ったのだろう。今までで一番真剣で、自棄な言葉だった。彼も呪い付きだ……何か変わるような事件があったのかもしれない。だが……。

「人が裏切るなんて昔から知ってるさ。だけどそれだけじゃない」

去っていく彼らを見ながら、俺は誰に言うでもなく小さく呟いていた。

この日も用心し、探知をしながら潜ったが、サイラルとは朝以外出会うことは無かった。常に名前の知らない人間の反応があったが彼等はヘインが言っていた護衛だろう。

俺達の近くを付かず離れず歩いている。同じ階の魔物に襲われても大丈夫なところを見ると、中々の実力者かもしれない。

シーリアも初日にクルスと潜った時と違って、普段の調子を取り戻しており、冷静な判断で魔法を使い分けて戦っていた。

クルスとマイスの前衛も上手く連携が取れることを確認すると、効率よく魔物を狩るためにそれなりの強さの魔物が襲ってくる地下三階の広間になっているところに陣取り、シーリアに明かりを生み出す魔法を使ってもらう。

光で集まった魔物をシーリアを守りながら倒していく。このやり方だと魔物もまとまった数が来るため俺達も慣れるまでは何度も逃げたのだが、俺に魔物の特徴を聞いていたクルスは両手剣を振るうマイスと変わらない強さで狩りをこなしていた。

一日の狩りを終え、ドワーフのゼムドと別れるとみんなで夕食を食べながらラキシスと情報を共有する。ラキシスさんは料理に懲りたのか夕食は前に宿に取っていた『雅な華亭』で作ってもらっており、冒険を終えた俺達が受け取って帰っていた。

今、ラキシスさんはみんなと一緒に料理をフォークで突つつきながら、機嫌よさそうにみんなの話を聞いている。

「ふうん……じゃあ、シーリアも今日は大丈夫だったのね」

「当たり前！前は調子が悪かっただけよ」

パタパタ振っている尻尾がたまに俺が座る椅子に当たって小さな音を立てている。彼女は満面の笑みをを見せていて……どうやら気づいていないらしい。

クルスは心底どうでもいいといった感じだが、

「足でまといではなかった」

と、それだけ呟いて我関せずといった風に料理を食べていた。

今日のシーリアの仕事は的確だった。仲が良くないクルスのフォロームも完全にこなし、全体を見ながら戦えていた。クルスも見直したらしい。

彼女も素直ではないので絶対に認めないだろうが。

「ラキシスさんの方はどんな感じですか？」

「今日からだからなんとも言えないわね」

ラキシスさんが、冷たく見えるエメラルドグリーンの瞳を此方に向ける。彼女はサクツと野菜にフォークを突き刺しながら、少しだけ微笑む。

「今は泳がせてる。例の彼自身は普通に冒険者として活動してるわね」

「ええ。今日は迷宮の方に行きました」

「彼が色んな事件の黒幕つてのは証拠が弱いから、早く動いて欲しいかな」

確かに彼を犯人と確信出来る証拠はない。俺の能力によるある種の反則のような力での状況証拠だけだ。それでも動いているのはラキシスさんの信用と、貴族の怒りからか……失敗するのはまずいということか。

「ま、始まったばかりだし大丈夫だけどね」

「すいません。よろしくお願いします」

「いいのよ。他に何か気づいたことない？」

ラキシスさんはサラダを上品な手付きでゆつくりと口に運びながらこちらに確認する。俺はしばらく悩み、答えが出ていない問題が残っていることを思い出した。

「能力……サイラルの能力を忘れてました」

「『呪い付き』としての能力ね。どんななの？」

他のみんなも興味深そうにこちらを見る。俺の能力のこともあり、相手がどんな能力を持っているのが気になるのかもしれない。

クルスだけは必死に肉を切り分けようと料理と格闘していたが。

「サイラルの能力は『結界』です。詳しい力まではわかりません」
「名前だけ……か。『結界』ね。名前から連想できる能力なんでしょうね」

好奇心を刺激されたかのようにラキシスさんは楽しそうにああでもない、こうでもないと考え始める。こういうところは冒険者らしい。

謎があれば答えを知りたくなるといった雰囲気がある。

考えるのが苦手なマイルスは早々にわかんねえ！ と大声を出して考えるのを諦めた。

まあ、平和な村で過ごしてきたマイルスが判断するには向いていない問題だし、知識も経験も足りないからしょうがないが。

彼は頭をかきむしり、顔をしかめてシリアの方を見る。

「魔法かなんかでないのかよ。『結界』ってよ」
「そうね……『結界』といっても魔法だと色々考えられそうなのだけど」

話を振られたシリアはテーブルに肘を付いて顎に手を上げ、悩むような素振りを見せた後、マイルスに答える。

「結界には何種類があるんだけど、大雑把には二つに大別できるわ」
「おいおい、俺にもわかるように専門用語なしで説明してくれよ？」

「わ、わかってるわよ！ 二種類っていうのは儀式結界と個人結界ね」

不安そうなマイルスに慌てたように答える。彼が何も言わなければ専門用語漬けの解説を聞かされていたかもしれない。

彼女の説明によると、儀式結界というのは魔力の込めつた道具を利用して大規模な効果を発生させる魔法で、個人結界というのは人の魔力を利用してごく狭い範囲に効力を及ぼす魔法らしい。

結界内の効果は様々で、魔力を使えなくする、精霊を消す、外からの魔法を防ぐ、物理的な攻撃を防ぐ結界もある。当然魔力や道具で効果は大きく変わるそうだ。

「まあ、私の専門じゃないから完全に説明は出来ないけれど」
「十分だよ。最悪を想定したほうがいいかもしれないね」

長い説明をしてくれたシーリアに礼を言い、結論として俺はみんなにそう答えた。

必死に話に付いてきてややこしそうな魔法だな……と呟いていたマイルスが、顔を上げて俺の方を向く。最悪という言葉に引っ掛かったらしい。

「最悪ってどういうこと？」

「あらゆる結界を扱える可能性があるってところかな？」

「うげ！ そんなのどうすんだよ？」

嫌そうな顔をしているマイルスに俺は頷く。俺の能力を考えると、同じ『呪い付き』であるサイラルの特殊能力もかなり高い可能性がある。だが、彼のレベルは15。

今の俺達よりは高いが高すぎるわけではない。俺は安心させれるようにマイルスを見て笑った。

「ただ、完璧な能力じゃないと思う。もしそうなら仲間はいらない」「そうね……私の方でも魔法の結界について調べておくわ。その上で考えた方がいいかもね。サイラルの対応を」

俺の答えにラキシスさんは頷き、そう纏めたラキシスさんにクルス以外の全員が頷く。シーリアは落ち着いて料理を食べているクルスを嫌そうに見て声を掛けた。

「クルス。貴女は考えないの？」

「話は聞いている。魔法の知識がないから貴方達の結論通りに動く。ケイトの最悪を想定するというのには賛成。私が会った人は即死の怪我を短時間で治して逃げたから」

「嘘は……つかないわよね」

食べ終わったのか口を布で拭きながら、クルスは淡々と答える。シーリアは彼女の答えを聞くと大きな溜息を吐いて首を横に振った。

クルスの話に誇張がないなら『呪い付き』が迫害されるのも無理はないかもしれない。

『呪い付き』の特殊能力は異常すぎる。そんな風に俺は思った。

第二十七話 葛藤

友人であるヘインとラキシスさんにサイラルの監視を頼んでから三週間近くの時が流れた。

彼の背後にいる組織に関しては未だに全体像は見えていないらしい。ラキシスさんは日を追う事に難しい顔をするようになり、

「カイラルにあるのは彼等の本拠ではないわね」

と、ため息混じりに捜査の進み具合を説明していた。

ただ、サイラルはカイラルでの誘拐事件等に関わっていることは恐らく間違いはないらしい。俺にとっては一番気になる問題については、

「サイラルはまだ捕まえられませんか？」

「もう少し。この街にある彼の仲間の拠点の位置を大体把握したら一網打尽にするつもり。バラバラに逃すと捕まえるの大変だからね」

後もう一息かな。と、微笑んでいた。

あの日からもサイラルとはたまに迷宮の入口で顔をあわせている。彼の様子は全く変わっていないが、本当に気付いていないのだろうか。

それとも気が付いていて、それでも余裕でいるのだろうか。
不安は尽きない。甘い相手ではない予感が消えないのである。

その不安を助長させられる要因になっているのが迷宮探索中の仲間
のドワーフ、ゼムドの様子だ。

彼は日が続つことに顔色が悪くなっている。以前の快活さが嘘の
ように。

前のような悩んでいる様子ではない。どちらかというと思い詰
めている……といった雰囲気だ。

俺はゼムドがサイラルが所属している組織の一員である可能性が
高いことは他の仲間には話していない。

ラキシスさんにだけは話していたが……彼女はゼムドを連れて歩
くことに難色を示していた。だが、彼を今の状況で外せば、そこ
からサイラルに感付かれる。

もし、他の仲間がゼムドの素性を知っていればどうしても態度に
出てしまうだろう。

特にミスなんかは嘘が吐けないから。そうなると確実にサイラ
ルに逃げられ、狙われる危険を残してしまうことになる。

現状、俺達は有力者の力を借りることが出来ていているがその優
位は薄氷を踏むようなものだ。

「ゼムド。大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「ん？ いや、わっはは、少し寝不足でな。大丈夫じゃ」

心配そうなシリアに明るく笑うゼムドが痛々しい。彼も大事な仲間だ……からつとした性格で思いやりもある。個人的には友人だと思っている。

だが、俺はクルト村を狙った連中やサイラルを放置は出来ない。俺は普段通りにすることを心掛けながら内心では葛藤していた。

おそらく、サイラルに関係する者達を抑える時にはゼムドも……。上手くいかないものだと思う。誰かを助ける為に誰かを犠牲にすることになる。前にゼムドが話してくれた葛藤も今の自分と同じ種類のものなのかもしれない。

いざとなればゼムドと一緒にサイラルを捕まえるのも辞さないと考えて置きながら、今こうして知らないふりをして彼と迷宮で協力している。俺は卑怯だろう。

それでも、村のみんなや守ると決めたシリア、そして親友達を守るためなら……。そして、ゼムドがもし奴に与し、犯罪行為に加担しているなら……。容赦はしない。

彼が街から逃げてくれればお互いにとって一番いいのだが。

「ケイト。大丈夫？」

敵を倒した後の休憩中、クルスはそうやってたまに小声で確認してくる。シリアは不思議そうにしているが、付き合いの長さの差だろう。

彼女には嘘はすぐばれてしまう。だが、大丈夫と自然に返しておく。

動きがあつたのはクルスにそう返したその時だった。

俺達を常に尾行している二組のうち、一組の近くにサイラルとザグ、他二名の反応が近づいたかと思うと一瞬で尾行していた冒険者達の反応が消えたのである。

「なっ！」

「え、え、何？」

思わず驚きの声を上げた俺に全員が振り向く。

「いや、勘違いだった。すまない……そろそろ行こう」

「驚かせんなよ。ケイト」

少なからずショックを受けながらも平静さを取り繕い、状況を整理する。

今いる場所は迷宮の地下三階。迷宮内部はかなり広大で、偶然に他の冒険者と出会う……という可能性はそれほど高くない。

そうなるとサイラルは自分達が襲った冒険者達が俺達の護衛であることを知っていたことになる。あいつは何らかの手段で俺達の居場所を把握している。

しかし、一方的に勝てるほどサイラルはともかく、ザグの能力は高くないはずだ。

他の仲間か『結界』の力だろうか。

このままこちらを襲いに来ることを警戒したが、サイラル達は引き返していった。

しばらくすると、もう一組が異常に気付いたのか、サイラル達に襲われた冒険者の方に近づいていく。俺も彼等まで襲われた場合にフォーローできるよう、みんなの移動を誘導していったが、どうやら近くにはサイラルはいないようだ。

「……そんな……まさか……」

戦闘を大分こなした後でもあったため、もう少しだけ探索した後、襲われた場所を迂回して俺達は迷宮から帰還した。

自分を護っていた冒険者の死……それは他人の死にあまり慣れていない俺に予想以上の衝撃を与えていた。

帰宅するとラキシスさんは家の窓から外を眺めて沈む夕日を物憂げに眺めていた。

もう一組の冒険者から報告は届いているのだろう。彼女の横顔は普段と変わらないが、どこか辛そうに見える。

「ただいま」

「おかえりなさい。今日も無事で良かったわ」

俺達が戻ったことに気付くと、彼女は穏やかな笑顔を見せてくれた。ミスやシーリアは楽しそうに当たり前だと騒ぎ、クルスは無表情にラキシスさんをじっと見ている。

食事前に身体を拭くために、ミスとシーリアは部屋をすぐに出ていったがクルスは出ようとして足を止め、ラキシスさんに近づいていくと声を掛ける。

「ラキシス。何があった？」

「……そんなに私は変だったかしら？」

「貴女は変だけど、ケイトがそれ以上に変だったから」

ラキシスさんは俺の方を見て苦笑した。クルスも俺の方を見る。諦めるように俺は溜息を吐いた。

「全員が揃ったら言うよ。まずは俺達も着替えよう」

「嘘は許さない」

俺は真剣な表情のわかってるとクルスに頷くと彼女を促して、話をする前に先に身体を拭いて服を着替えることにした。

全員の着替えが済むと食事の前にと、ラキシスさんが全員を集める。今日の事件の話をするためだ。俺の見通しの甘さが原因で人死にを出してしまった。

気が重い……いや、焦燥と後悔が胸の内を吹き荒れている……だ

が、だからこそ聞かないわけにはいかない。無関係ではられない。

「まず、貴方達の護衛をしていた冒険者……三人が殺されたわ」

「なっ！ まじかよ！」

シリアが驚きで眼を見開き、マイルが大声で叫ぶ。

だが、クルスは冷静で彼女に聞き返す。

「どんな風に？」

「一方的に。抵抗した素振りがなかったらしいわ。剣も鞘に入っただけのまま」

淡々とラキシスさんは状況を説明する。殺された冒険者はそれなりの実力者だったが、抵抗することなく、一太刀で殺されていたらしい。

「全員無抵抗というのも変な話なんだけどね」

「複数人……いました。サイラルの能力は仲間にも効果があるのかもしれません」

沸き上がる激情を拳を握り締めて抑えながら、意識して声を落着かせて言った俺の言葉に、ラキシスさんは心配そうにこちらを見ながらなるほど……と頷く。

「報告を聞いてサイラルを形振り構わず捕まえようと思ったのだけ
ど……彼がアジトにしていた宿はもぬけの殻だった。別の街に行く
といって出ていったらしいわ。内壁の警備兵は今日の行きはサイラ
ルをみたけど帰りは門を通らなかった……そう言ってた」
「なるほど。奴に感づかれた。そういうことですか」

ラキシスさんは頷く。そして、俺達全員を見ると彼女はその秀麗
な顔に厳しい表情を浮かべて告げた。

「事件が解決するまでここにいなさい。あいつは貴方達の手に残る」
「そんな！ ラキシス様っ！」

シーリアが不服そうな声を上げるが、きっ！ とラキシスさんは
睨み付けて彼女を黙らせる。

その眼光に恐れたのかシーリアが耳を寝かせ、涙目になる。しか
し、顔は伏せずにしっかりラキシスさんを見つめ返していた。

だが、ラキシスさんが心配するのも無理はない。娘が危険とわか
っている場所に飛び込むのをよしとするはずもない。

「ラキシスさん。この家にいても危険は変わりません」
「……どういうこと？」

不機嫌さを隠さずにラキシスさんが俺を見る。あまりの迫力に恐

怖心も沸くがここを引くわけにはいかない。

「俺の能力ではサイラルの反応は見えていました。だが、奴は相手に気づかれていない。恐らく目の前にいても見えないのではないかと。だとすればラキシスさんが離れたときにこの家が襲撃されると思います」

「なるほどね……ケイト君はどうしようと思っているの？」

落ち着きを取り戻したのかラキシスさんは小さく息を吐いて、こちらを見る。

「相手がどうやって俺達の位置を把握しているかは想像が付きます。サイラルも元々感づいていなくて、偶然に護衛の存在を知った可能性もあるんです」

「あ、そういうことね……ますます危険じゃない」

俺達の場所を把握する方法……俺がヘインから受け取ったアイテムだ。基本的にこれは特定の相手との距離しかわからない。

他の三人の手前はつきりとは言えないが、ラキシスさんは理解してくれたらしい。

サイラルが偶然警戒されたことを知った可能性……低いがないわけではない。急に宿を引き払ったこと、ラキシスさん達に自分の関係者の居場所を突き止められていること。

余裕な表情だったのも組織そのものを潰しに動いていることに全く気付いていなかった。都合はいいがそう考えるならば……。

もしそうだとすれば、彼等も焦っているに違いない。

何にせよ彼が執着しているシーリアを襲う可能性は高い。そのまま現れずに逃げてくれればそれでもいい。それを確認する方法は簡単で明日、確かめることができる。

「俺達が囷になって……奴を引きずりだして、ラキシスさんに倒してもらいます」

「ケイト君……本気？」

例えこちらが調査をしていたことが分かっていたとしても、俺の能力を知らなければ……油断を付くことは出来る。

驚いたように伺っていたラキシスさんに俺ははっきりと言った。

「同じ『呪い付き』である俺にしか多分、あいつの優位は潰せません」

「そう……ケイト君はそう言ってるけど他の子達はいいの？」

ラキシスさんは他の三人をちらつと見て諦めたように眼を瞑って苦笑する。

「いやまた、ケイトが俺だけで行くっ！とか言い出すかと思ってはらはらしたぜ」

「うん。格好つけたら殴ろうと思ってた」

マイスが俺の口調を真似して大笑いし、クルスが楽しそうに微笑む。そして、シーリアも少し震えて顔も真っ赤にしながらもしっかりとラキシスさんの眼を見て言った。

「私が狙われてるなら……返り討ちにしてやるわよ。このシーリア・ゲイルシュタッドを舐めたことを後悔させるの。絶対にっ！」

シーリアは立ち上がり、興奮した様子で拳を振り上げてそう宣言した。ラキシスさんはそんな彼女を呆れたように見ていたが、心無しか嬉しそうにも見えた。

第二十八話 主人公になれない者

夜、俺はラキシスさんから明かりを借り、自分の部屋で故郷から持ち込んだ弓の調子確かめていた。手元は見えにくいがピイン……と弦を弾いて張り具合を確認し、正確に調整していく。

村を出てから数ヶ月弄っていなかったため、弓の使い方の勘を忘れ、弦は緩んでしまっていた。それでも弓を触っているうちに、動物を狩っていた頃を徐々に思い出していく。

弓の調整を終えると俺は立ち上がり、ゆっくりと矢をつがえずに構えて弦を強く引いた。

大丈夫そうだ……。

確認して弓を置く。明日はおそらくこの弓を使うことになる。動物ではなく、人を射るために。

ふう、と息を吐く。昔のゴブリンの時ほどの緊張がないのは何故だろうか。

慣れてしまったからか……それとも、現実感がないのか。

矢の本数の確認も終えたとき、部屋の扉をノックする音が聞こえた。この叩き方はクルスだろう。俺はそのまま中に入るように促す。

「弓……使つの？」

「相手が近づいたら弓を使いやすい場所に誘導して容赦なく撃つ」
「撃てるの？」

クルスは部屋の中に入ると、ベッドの上に腰を降ろした。俺は弓を置くと、椅子を彼女の対面に移動させ、座って彼女と向き合う。彼女は部屋に入る前に髪を拭いていたらしく、顔にかかる乾き切っていない長い髪を鬱陶しそうに背中の方にどけながらクルスは俺の反応を伺っていた。

彼女の言葉は疑問……というよりは確認に近い。

「撃つよ。俺も前とは違う」

「本当……かな。それならケイトは何に迷ってるの？」

本当に隠せないなあと思いつく。それを見たクルスが早く話せといった風に足をバタバタ動かして微笑む。

「今回、サイラルに位置がばれた原因はゼムドの可能性が高い。八割くらいかな」

「後の二割は？」

「俺の能力の有効範囲よりサイラルの能力の有効範囲が広く、俺達を常に追跡できるほど使いこなしている可能性」

どちらの可能性が高いのかと考えるとやはり前者だ。
知っているのか知らずに利用されているのかはわからないが……

恐らくヘインが俺に渡した物と同じ物を使っているのだろう。

後者である場合、サイラルの能力は俺を遥かに上回っている可能性が高い。

俺よりも広い範囲を、特定するだけの精度を持って探し当てることができるのだ。結界という能力も俺のものより汎用性がありそうだし、かなり手強くなるだろう。

だが、サイラルの見た目の年齢と今のレベルを考えると、そこまで奴の能力は便利とは思えないのだ。転生前の知識がもしあるならば、レベルを上げることが強さに、少なくとも身体能力に関しては関係していることにすぐに気がつくはず。

能力が強力なら、もっと上げている方が自然な気がするのだ。だが、迷っている理由は後者ではない。前者についてだ。

「サイラルを撃つことは出来る。だけど、ゼムドがもし敵になったら……」

「私はあのドワーフが外道に与するとは思えない」

クルスもこの三週間でゼムドの性格も掴んできているのだろう。明るく実直で卑怯なことを嫌う誠実なドワーフ……だが、彼は理想を実現しようとしている組織と板挟みになったとき、果たしてどんな選択を取るのか。

俺にはその彼の理想への想いの重さを推し量ることが出来ない。

「俺もそうあって欲しい。いや、今日までそう思ってた。自信がな

いんだ」

「信じられないの？」

失望させただろうか……と思う。仲間を信じきれない俺に。

物語の主人公なら当たり前のように信じて、進んでいくのだろう。ただ自分はこうだ。自分だけではなく、クルス、マイルス、シーリア、そしてラキシスさんの命まで賭かっている今の状況に怯えている。ただでさえ、俺は既に失敗しているのだ。

だが、彼女は不敵に笑っていた。

「ケイト。心配は要らない。失敗しても私とマイルスが助ける。信じるように選んでくれればそれでいい」

「失望させたと思ったんだけど」

「完璧だと困る。安心した。後、私はどんなことがあっても味方」

そう言っ、て、クルスは微笑んでいた。俺も少しだけ心が楽になる。今日ここに来たのも元気づけるためなのかもしれない。

「ありがとう。だけど、もしゼムドが敵に回したら……ラキシスさんに任せるんだ」

「どうして？」

「クルスは今レベルが8、ゼムドは……ガイさんより高い21だ。技術はクルスが上だけど、身体能力は比較できないくらい違う。いつもはあれで手を抜いている」

クルスは頷く。俺も恐らく勝てない。マイルスも力負けしてしまう。勝ち目があるのはラキシスさんだけだ。俺達の仕事は彼女が力を発揮できる状況を作ること。

ゼムドが俺達に協力してくれるなら一番良いのだけれど。

それより気になるのがクルスの能力だ。さつき久しぶりに確認したが、一般の技術の欄にある『狂化』ってなんだろう。見るからにやばそうな名前なんだが。

俺だけが『呪い付き』として目立っているが、クルスも『呪い付き』だ。

彼女の特異能力は自覚の出にくい能力だから誰も気付いていないだろうが……出来ればこのまま誰にも知られたくはない。

彼女に昔の知識が残っているのかは気になるが、昔の会話を思い出すと残っていない可能性が高い気はする。

「ケイト……どうしたの？」

「隠し事はしない。だったな」

今、この狭い部屋には二人しかいないのだ。

念のため盗み聞かれていないか能力を使って確認する。

「クルス。多分クルスも俺と同じ……『呪い付き』だ」

「……そうなんだ」

「うーん、全然動揺してないね」

なんで今頃といった感じに首をかしげた後、こくりとクルスは頷く。

「多分そうと思ってたし。夢の中のもう一人の私が不思議な力持ってた」

「昔、言ってた夢？」

「そう。でも、ケイトとは少し違う感じだからどうなのかな」

『呪い付き』としてのあり方も人によって違うということか。子供の頃のクルスは俺から文字を学んでいるときも、知っているのを隠している感じではなかったし。

「生まれる前の知識とかは無い……ということかな」

「そんな便利なのであれば、勉強苦労しなかった。頑張ったんだから」

少し拗ねた感じでクルスは横を向く。子供っぽい仕草に俺は笑った。彼女は彼女だ。

俺にとってはそれでいい。

俺は安心して椅子の背もたれにもたれ掛かり……こけそうになつて慌てて身体を前に戻した。

「もう隠し事はない……全部話した。これでいい？」
「よろしい」

くすくすと笑いながらクルスが立ち上がり、扉から出ようとして振り返る。

「あ、ケイト。今日は一緒に寝ていい？」
「良くない。さっさと寝ろ！」

明らかにからかっている口調と顔だったので、怒鳴るように言い返す。年を追う事に彼女は手強くなっている気がする。
クルスはふふっ……とおかしそうに笑うと、

「自分のとマイスの弓の調整もしないといけないし、今日は我慢する。おやすみ」

と、そう言い残して去っていった。

俺ははあ……と一つため息をつく、机に置いていたサイラルの能力の仮説が書かれた書類を掴み、ベッドに横になった。

決着をつける日は近い……本当に俺達を放置して逃げてくれればどれだけいいか……そんな風に思いながら俺は遅くまで書類を読み耽っていた。

第二十九話 長閑な朝

翌朝、早めに眼が醒めた俺は今日の迷宮探索の準備をさつさと終えて、椅子に座ってテーブルに肘を付き、客間の窓からぼーっと外を眺めていた。

天気は良いが時間が早めなため、窓から見える道に人通りはまだない。小鳥の囀る声だけが外から聞こえてくる。

遅くに寝たはずなのに、早く起きたのはやはり緊張しているからだろうか。

落ち着かない。落ち着こうと深呼吸を繰り返しても焦燥感が消えない。

「ふわぁ……、今日は早いね。ケイト」

「うん？ ああ、シーリア。おはよう」

いつものまにか寝間着姿のシーリアが眠そうな笑顔を浮かべて後ろに立っていた。

腕を上げて欠伸をしているが、その姿を見てすぐに顔を背ける。

寝癖が付きやすい髪なのか、長い銀色の髪の毛があちこち跳ねている。長いふさふさな尻尾にも寝癖が付いているのか、普段と違って長さが整っていない。

そのままふらふらと台所の方に歩いていき、二人分の果実水を作

り、俺の隣の椅子に腰を下ろす。囃として一番の目標になっているはずの彼女は全く緊張しているようには見受けられない。

案外、大物なのかもしれない。

「シリア。昨日は眠れた？」

「うん。ぐっすり眠れたけど？」

何で？ と不思議そうにシリアは首を傾げる。そんな彼女を見ていると、緊張しているのが馬鹿らしくなってきた、少しだけ笑ってしまった。

「何かおかしい？」

「まあ寝癖いっぱいなのはおかしいけどね」

「……起きたらこうなってるのよ」

ふん、と顔を背けるがあまり不機嫌そうではなさそうだ。

「俺はあんまり眠れなかったよ。今も緊張してる。シリアは凄いな」

「私も眠れないと思ってたけど、ラキシ様が来てくれるし、ケイトが考えてくれてるから……その……安心してちゃったのよ。何時も通り頑張ればなんとかなるって……わ、悪い？」

顔を赤らめて恥ずかしそうに上目遣いで見つめてくる彼女に、俺

は首を横に振った。変に緊張するよりはきつといいことなんだろう。後は期待に応えないと。

「いや。頼もしいよ。今回はシリアが要になるから。頼らせてもらう」

「ふふ、頼ってくれていいわよ」

ぴこぴこ耳を動かしながら、飲み物に口を付けシリアは嬉しそうに笑う。

彼女が要と言ったのは嘘ではない。実際に彼女が中心になる可能性が高い。

「ところでケイト。作戦とか……決まってるの？」

真剣な表情でシリアが俺の方を見る。マイスにも説明しなければならぬが、シリアと彼は役目が異なる。個別に話した方がいいかもしれない。

俺は彼女に頷き、説明することにした。

「まず、俺の能力については覚えてるかな？」

「うん。能力を数字で見れるとか……離れてもわかるんだっけ？」

「そうそう。今回はそれを利用する。昨日、護衛の人が殺されたとき……俺の探知にはサイラルは引っ掛かってたんだ」

「そうなんだ……あ、そういえば。あの驚いたとき？」

昨日のことを思い出したのかシーリアがこちらを向いて確認してくる。

「そうそう。つまり、気付かれずに近づけるあいつの能力は俺には通じない」

「なるほどなるほど……」

「だから弓を使う。俺、クルス、マイスの三人は弓が使えるからね。長い通路なら一方的に攻撃が出来るはず。これが第一段階目」

迷宮だと狭い場所が多く、視界も良くないために能力を隠す必要のある普段は使うことは出来ないが、相手の居場所が探知出来る自分にとって、本来これほど有利な武器もない。

「ケイトって弓使えるんだ」

「猟をしていたからね。問題はこれを通じなかった場合。魔法の結界の中には、物理攻撃を防ぐ結界もあるらしいから……弓で倒せなかった時どうするかが第二段階目」

木製のコップを両手で包みながらシーリアは真剣に聞いている。彼女から眠たそうな雰囲気は消えていた。

「私はその場合に魔法を使えばいいのね」

「そう。重要なのはここからなんだけど……」

昨日の夜、ラキシスさんが結界について調べてくれた書類を見ながら考えた作戦。

結界には様々な種類がある。探知のためのものだったり、物理攻撃を防いだり、魔法を防いだり……だが、儀式結界も個人結界も能力の強弱はあっても基本的に一つの効力しか持たせることができないらしいのだ。

複数の効果をもたせる場合には魔法を重ねて掛ける必要がある。この場合には先に掛かっている結界と整合性を取らなくてはならず、魔法の難しさが段違いに上がるらしい。

ひょっとしたら、一つの魔法で複数の効果を持つ高度な魔法もあるのかもしれないが。

色んな仮説を立てておけば、相手の反応を見ながら闘うこともできる。とにかく、いろいろな攻撃手段を考えておくに越したことはない。

「魔力を使えないようにする結界とかもあるみたいだけど、慌てずにならずと魔法を……相手が倒れるまで撃ち続けられるようにしたいんだ」
「なるほど……」

シーリアは暫く俯いて考え込んでいたが、パツと顔を上げると微笑んで言った。

「ようするに、何時も通りってことね！」
「そういうこと。頼むよ」

彼女は俺の隣で楽しそうに笑うと、任せなさいと他の女性陣に比べるような胸を叩いた。薄い服でそういうことはしないで欲しいものである。目のやり場に困るから。

話し込んでいたシーリアが着替えと身嗜みの準備に向う頃には緊張はすっかり溶けていた。話すことで少しは頭を整理することが出来たのも大きい。

全員の準備が終わると客間で最後の打ち合わせを行う。マイルスもクルスから全部話を聞いたのか神妙な顔つきをしていた。

俺もマイルスも……多分シーリアも、人を殺したことがないのだから仕方無いのかもしれない。クルスも……村で悩んだに違いない。案外優しいから。

手筈としてはまず、ラキシスさんが俺達の位置を確認するための道具を持って迷宮へと潜る。そして、俺達の少し先を歩いてもらう。

今日、歩くルートは俺が作った大雑把な迷宮の地図で確認しているため、離れすぎたりすることはないだろう。最終的に合流する地点も決めている。

初めから一緒に歩かないのはゼムドを警戒させないためだ。合流予定時点で彼を説得し……無理なら合流してそこで取り押さえ、サイラルを迎撃する。

「これ以上は思いつかなかったよ。もう少し安全な作戦があればよかったんだけど」

紙に書いた迷宮の地図を広げながら、俺は溜息を吐いた。

「甘いわね。ケイト君……。だけど、貴方の気持ちはわかるわ」

甘いか……。そうかもしれない。

ラキシスさんはクスツと小さく笑うと、先に迷宮に向かうために立ち上がった。

普段着姿の彼女は落ち着いた雰囲気と美しさ、上品な仕草も相まってまるで貴婦人のように見えるほど似合っていたが、今の革製の鎧姿に武器を持った姿はそれ以上に似合っている。所作には一部の無駄もなく、流石一流の冒険者、といったところか。

「うーん、格好いいな」

「すぐ追いつく」

マイルスが感嘆の声を上げ、クルスが対向心をむき出しにしているかのようにぼそつと呟く。シーリアはなんだか嬉しそうだ。

これが彼女の尊敬するラキシスさんの姿なんだろう。

「ラキシスさん、相手が気付かれないように狙ってきたら……大丈夫

夫ですか？」

「大丈夫よ。常時、複数の種類の精霊に警戒させておくから。見えなくても場所がわかれば、逃げられないように隙間なく魔法で潰してしまえばいいのよ」

彼女はそう言って不敵に笑う。俺は心底、敵でなくてよかったと思いつつ、彼女の背中を見送った。

ラキシスさんが出かけてから数十分後、ゼムドは普段通りの時間にラキシスさんの家に現れ、俺達に声を掛けてきた。彼は普段より重装備の俺達に驚いていたが、弓を試してみたいからと説明すると、そうか、と深く追求せずに頷いていた。

随分と……やつれた表情で。

「行こうか。今日も稼ぎに」

何事も無いように……そう祈りながら、俺は全員に向かってそう声を掛けた。

第三十話 訣別

探知の能力を発動させていても特に何か特別に疲れるということはない。

ただ、見えないはずの遠くの生き物の数字が見えてしまったため、戦闘中などに視界の邪魔になる。デメリットはそれくらいだ。

ひょっとしたら、自分にもわからない何かが無くなっているのかもしれないが。

特殊能力……というものを考えるとき、参考になる例が少ないために相手の能力の性質を予測するのが難しい。クルスの能力は本人すら解りにくい代物だし。

迷宮に入る前、迷宮の入口がある荘厳な建物を潜った時点で探知の能力を発動させる。能力を発動させながら迷宮の入口まで歩き……周囲を観察する。

……遠くにサイラルがいた。周りには数人の男。

ふう……と、溜息を吐く。そんな俺をゼムドが訝しげに見た。

「ケイト殿。どうかしたかの？」
「いや、なんでもない。行こう」

笑う余裕も無く、全員に出発を促す。

先頭はマイルスとクルス、真ん中にシールリア、後ろに俺とゼムド。クルスが加入してから俺達の並び方だ。どちらかというと攻める方が上手い二人を前に置き、援護の方が得意な俺が後ろに行く。

ゼムドが後ろなのは彼のレベルが高いため、前の二人に経験を積んでもらおうと考えたからだ。当初の理由は。魔法が使えるという理由もある……もっとも、ゼムドが魔法を使っているのは見たことがないが。

前を歩くマイルスとクルスにも、今日歩くルートはしっかりと説明してある。間違えそうなきには俺がさり気なく指摘し、歩く道を修正していく。

何時も通り順調に下の階層を目指して迷宮を潜っていく。今日ほど目的の場所に着かないで欲しいと思いながら進んでいることはないが……。

地下二階に降り、地下三階へと降りていく。探知にはまだ反応はない。だが、今日地上にいた以上、サイラルが来る可能性は高い。マイルスやクルス、シールリアもわかっているのか口数が少ない。迷宮探索は順調なのに、今までにない緊張感が俺達の間に流れていた。

「ふむ……皆、変じやの。何かあったか？」

ゼムドは狭い通路上の道で立ち止まると、長い髭を触りながら顔をしかめ、怪しむように俺達を見回す。普段はうるさいくらい明るいマイルスまで黙り込んでいるため、不審に思ったのだろう。

ラキシスさんとの合流地点はもう少し先だ。他の三人の視線はこちらに集まる。不安そうだったり、苦笑いしながらだったり、普段通りだったり、その表情は異なるが。

今の地形は曲がり角が近くて弓の射程を生かしくい。

「ま、歩きながら話そう。ゼムド」
「ふむ」

他の皆が頷き、先に進み始める。ゼムドも不承不承といった雰囲気だが、頷いて歩き始めた。せめてあと少し……出来れば合流するところまでは……。

「以前、俺の故郷が襲われた話は覚えてる？」
「うむ。クルス殿が話していた件かの」

ゼムドは何度も何度も髭を触りながら、うつむと唸る。

「『呪い付き』だと考えられていた……そう言ってたよね」
「……そうじゃな」

歩きながら時間を稼ぐように意識してゆっくりと話す。ゼムドを裏切っているようで……胸が痛む。俺は彼を今、全く信じていない。

「まあ、それはどうでもよかったんだ。あの時、ゼムドがいる時に話したように、本来、俺がもう一度襲われる可能性は少ない。特別な事情がなければ」

「特別な事情……じゃと？」

ゼムドは警戒するように、俺を窺う。

俺は目を逸らさずに彼を見つめ返す。既にラキシスさんは俺の探知の範囲に入っている。立ち止まって話をしていれば、すぐに来てくれるだろう。

ある程度曲がり角から距離を取ったところで……終わらせる覚悟を決める。

ゼムドが今回の件に関わっていないなくても、彼とはもう旅をすることはできないだろう。

俺は足を止めると、ゼムドしか知らないはずの情報を……話した。

「サイラルは俺と同じ『呪い付き』なんだ」
「なっ！」

ゼムドが驚きの声を上げる。何故それを知っているのか……といったところか。

こんなことは言いたくない。だが、齒を食いしばって続ける。

「そしてあいつは、俺達……いや、シーリアを狙っている。いや、もしかしたら俺のことも流れていて、俺も狙っているのかもしれない」

「……なるほどの」

ゼムドは肩を苦虫を噛んだような表情で頷く。

「昨日まではゼムドを信じていたんだ」

「……本当に驚いたわい。どこまで知っておる？」

苦笑いしてゼムドはぼんぼんと、棍で自分の肩を叩いた。

彼の笑みはいつものように愛嬌がある笑みではない。どこか疲れたような……全てを諦めているような……そんな表情に思えた。

俺達が話をしている間に、クルスとマイルスが俺を何時でも護れるように近付いて警戒している。ゼムドの話はしていなかったシーリアだけは、話がわからないのか慌てながら俺達を見ていた。

「大体は調べてもらったよ。二、三ヶ月くらい前からサイラルの関係者を中心に誘拐事件が多発したことか。その関係者が一つの組

織……いや、その尻尾の部分になってることとか。いつでも切り捨てられるように」

そこまで話して周囲を警戒する。まだ、サイラルの反応はない。ラキシスさんはこちらに近づいている。

「ふう……ケイト殿は十四歳じゃったか……未恐ろしい小僧じゃの。拙僧の見る目もなかなか捨てたものではなさそうじゃ」

「何言ってるのよ。ゼムド！　どういうことよ……？」

シーリアが泣きそうな顔で、ゼムドを見る。からかわれたりもしていたが、恐らくゼムドを一番信用していたのは彼女だろうと思う。初めての冒険の時、彼に助けられているから。

だが、彼がサイラルと仲間だったとすれば……ゼムドがやったことは、自作自演だった……そういうことになる。

頭の良い彼女なら俺達の話から大体の事は想像できているだろう。

「すまんの。姫の思っておる通りじゃ。ケイト殿の推理は正しい」
「な……そんな……」

ゼムドはシーリアの方を向いて頭を下げる。彼女は怒りよりも……哀しそうに顔を伏せた。彼女に説明しなかったことには理由はあるが……やはり、しておいた方がよかったのだろうか。心の準備をする意味でも。

「昨日、俺達の護衛がサイラルに殺されたのは、ゼムドが位置を確認するための道具を持っていて、サイラルがそれを辿ってきたから……拙僧としても、あれは予想外での」

懐から淡い光を放っている白い石を取り出すと、彼は地面に捨てる。

予想はしていたのに……実際にその証拠を見せつけられ、胸の痛みは更に酷くなる。どうしてこんなことになったのだろうか。

「ゼムド……！ 街から……逃げてくれないか？ すぐに。いや、今からでも遅くない。サイラルを倒して、俺達と冒険を続けよう！」

護衛達の仇……けじめをつけなければという心と、仲間であり友人だったドワーフと戦いたくない思いが胸の内でせめぎ合っている。

だが、ゼムドは少し顔を伏せ……顔を上げると俺を出来ない生徒を見るような目で見て、困ったように笑いながら首を横に振った。

「甘い。拙僧はもう手遅れじゃ。お主もわかっておるのに……まあ、お主はそこがいいのかもしれないが」

「どうしても駄目か」

「知られたからには戦うしかあるまい。遠慮することはない」

静かにゼムドはそう告げると、彼は自身の鉄の棍を俺達に向けて構える。マイルとクルスもすぐに剣を抜いてゼムドを牽制した。

ゼムドには少しも動揺した様子はない。彼の理想というのはそこまで重いのだろうか。

「出来れば降伏して欲しい。拙僧もお主らを殺したくはない。全員の身の安全は拙僧が責任を持って保証する。特にケイト殿を連れて帰るのは上からの命令でな。すまん」

彼の返事を聞き、先手必勝とばかりにクルスが切りかかろうとしたその時だった。

安心感を与える、鈴の鳴るような綺麗な声が迷宮に響いたのは。

「あら、勝手なことを言ってもらっては困るわね」

ラキシスさんは小さな光の精霊を数匹自分の周りに纏わせ、微笑みながら迷宮の奥からゆつくりと歩いてきた。その右手には装飾の施されたレイピアが握られている。

「ラキシス・ゲイルシュタット……！」

「ケイト君は甘いけど、用心深いのよ。降伏しなさい……ゼムド」
「任せます！」

俺は少しだけ走って、二人から距離を空け背中
の弓を取り出して構える。ついに探知にサイラルが……俺の動きで察した二人も剣を納めて弓を構える。

暗闇の奥……恐らくサイラルがいるであろう場所に俺は狙いを付け弓を引き絞った。

第三十一話 心理戦

それまで持っていた松明は既に前方に捨てていた。

緊張で指先を汗が流れるが……今回はゴブリンの時のように外すわけにはいかない。

まだだ……まだ……曲がり角を曲がった瞬間を狙う。

ラキシスさんを牽制しながら、こちらを伺っているゼムドの視線を感じる。だが、俺達の行動の意味はすぐには理解出来ないだろう。

サイラルは後方に控えているようだ。相手の姿までは見えないため、狙うことはできない。射線が通っていることを祈るしかない。

歩いてゆつくりと俺達のいる通路に出る曲がり角に近づくのを待つ。

もう周りのことも考えられず、心音だけが響いている。

ただ、無心に祈る。

あと少し……。

今だっ！

曲がり角を曲り、通路に入った瞬間を狙い、限界まで引き絞った矢を放つ。

弦が軽い音を鳴らし、三本の矢が暗闇の中に吸い込まれるように飛んだ。

「しまった。そういうことか！ サイラルっ！ 弓じゃっ！」
「ぐあっ！ ぎゃああああ！」

弓を放つ時に、ようやく気付いたゼムドが叫ぶがもう遅い。複数の叫び声が迷宮に響きわたった。だが、サイラルの間に仲間がいたために矢は届かなかった。

そのまま、次の矢も間を空けずに放つ。

二射目の後は悲鳴が響かなかった。俺は弓を捨てて右手に剣を構え、左手に隠すように石を持つ。

探知で相手を確認すると、誰にも矢は命中していないらしい。この狭い道で回避したということはありえない。なら、サイラルの能力の影響だろう。

「ミス、クルス……剣を。シーリア、行けるか？」

「わかってる……私は大丈夫。何があっても私は負けないんだから！」

ゼムドが話した真実を聞きシーリアは動揺していたが、自棄になったように叫ぶと、自分を取り戻したのか目に生気が戻って杖を構える。

「守られるんじゃないくて、私が守るんだから……『炎の理』『風の理』『矢の理』……」

シーリアは杖を両手で持って複雑に動かし、魔力を集める。付け焼刃な俺の魔法とは明らかに違う、迷宮を照らすような魔力の強さだ。

そして、サイラル達の姿が視認出来た瞬間、

「行けっ！」

魔法を放つ。しかし、魔力で作られた炎の矢が彼等に届く前にも無く消え去ってしまった。サイラル達は余裕の表情で、俺達に向かって歩いている。

「なっ！ 魔法が消えた！」

「大丈夫。まだ予想通りだから……わかってるね？」

「えっ……あ、うん。了解」

相手の方からは視線を外さず、取り乱しそうになったシーリアに小声で話し掛ける。

相手はもう俺達の前に立っている。人数は四人。七人中三人は先程の弓の射撃で動けない程度の怪我を負わせることに成功したようだ。

ここからが本当の勝負だ。

背が高い金髪の優男風の男……サイラルは小馬鹿にするような笑みを浮かべながら、抜き放ったサーベルを俺に向けて口を開く。

「おやまあ！ 『氷の魔女』までお出ましとは驚いたね。まあ美人だからいいけど」

ラキシスさんがいることに驚きながらも、サイラルは全く気負い無く馴れ馴れしく俺に話し掛ける。

「さて……ケイト君、ゼムドの様子を見る限り、交渉は決裂したようだけど降伏しないかい？」

「村を襲撃した奴の仲間になれって？ 正気か？」

サイラルの隣にいる禿頭の戦士、ザグは俺を今にも殺さんがばかりに睨みつけている。だが、サイラルを無視してまでは襲う気はないようだ。

決裂すればすぐに戦えるよう、得物である両手剣は抜いている。

他の男たちは片手剣か……レベルは俺達よりも低い。ザグと同じくらいの高さの相手がいなくて良かったと心底ほっとする。

サイラルは俺の馬鹿にするような声色の返答を聞いても表情は崩さない。

「別にあんな奴ら仲間ではないだろ？ ケイト君……君は選ばれた人間だ」

「俺は別に特別じゃない。お前も」

剣を構えて警戒する。サイラルの相手をするのは……俺だ。クルスやマイルスには他の連中を相手にしてもらおう。奴も用心するように剣を構えながら、じりじりと俺との距離を詰めていく。

「本当にわからず屋だね。俺達選ばれた者達には、ゆっくりと休める居場所が必要なんだよ。君も俺達の仲間になれば直にわかる。俺達や異種族の悲惨さが」

「お前達がやっていることも似たようなものじゃないか」

村を襲い、人を拐かす。恨みを植え付けて自分達の都合のいいように誘導する。

だが、サイラルは指摘を受け、更に笑みを深める。愉快で仕方がないといったように。

「尊い犠牲というやつさ。俺達の国を作るためのね」

「ふざけたことを。犯罪で国が作れるか」

「わかっていないな……まあ、確かに仕事の給料として、美味しい思いも出来るんだが」

やれやれと、芝居がかったように大袈裟な手振りをしながら首を横に振り……にたりと笑う。

「少ない犠牲で多くの者が助かるんだ。合理的だろう?」

「本気か?」

「本気さ。俺もゼムドも……まあ、ゼムドは軍資金を調達出来なかつたんだが」

初めて笑みを消し、サイラルは落ち着いた口調で言った。

「これが最後だ。君は俺には勝てない。降伏しろ」

ふう……と、息を大きく吐く。自分が次の言葉を発すれば、殺し合いをすることになる。だが、弱気にはなれない。俺は思いつきり息を吸うとサイラルを睨みつけた。

「断るっ!」

「ふふ……残念だよ。俺は君のような頑固者は嫌いではないのだけど。ゼムドっ! 魔法は使えない。ラキシスを殺せっ!」

サイラルの声で背後の二人の空気が変わる。ラキシスさんは接近戦もこなせるが、やはり得意なのは魔法だ。身体能力に差があるため、負けはしないだろうが急がなくては。

俺は隠し持っていた左手の石を、手首のスナップで顔を目掛けて

投げつけるとそのまま距離を詰め、相手の左手首を狙って剣を迷わず振り切る。

サイラルは石は右腕で弾き飛ばしたが、その後の剣は左腕に迫る剣を回避しようともせず、そのまま受ける。俺はサイラルの攻撃が来る前に飛び下がった。

そして、余裕の表情で俺を見る。

「わかったか。俺に勝てない……」

「シーリア！ 魔法を使い続けろっ！」

俺は後ろに向けて叫びながら、サイラルの言葉を全く気に留めずに剣を横薙ぎに振るう。

これで、攻撃が効かなければ危ないが……。

がしいっ！

鉄と鉄が打ち合う音が迷宮に響く。サイラルはサーベルで俺の剣を受け流し、警戒するように距離を取った。奴の顔は腑に落ちない……といった感じが。

俺は内心冷や汗をかきながらもそれを見せないよう、余裕があるかのようにサイラルに笑いかける。

「忘れてないか？ 俺も『呪い付き』お前のように能力があることを」

「まさかあの弓も偶然じゃなく……何故だ。俺は一度も見せていないはず……」

「さてね。素直に言うと思うか？」

化かし合いだ。サイラルのやり方は、相手に自分には攻撃が効かないと思い込ませ、選択肢を奪っていく……能力をそう生かしているのだろう。そのための余裕そんな態度。

何も知らなければ引っ掛かっているだろうが……生憎俺には通じない。

しかし、正直いつて分は悪い。俺の能力は相手のことがわかるだけ。特別に戦闘の役に立つわけではない。時間も掛けるわけにもいかない。

互角の戦いを行っているミスや、二人を同時に相手取っているクルスの援護にも行きたい。

焦る……だが、それを振り切って相手に集中する。

ただでさえ相手の方が強いことから。他を気にする余裕は無い。

まずは、魔法を使えなくするという能力と、相手の攻撃を受ける能力が、共存出来ないことは確認できた。それと現在の戦いっぷりを見る限り、他の仲間……ザグ達には攻撃を無効化する能力は与えられないらしい。

先程の弓はその能力で防いだはず。魔法の無力化の方を重視しているからか、他に理由があるのか。

「ゼムドが……いや、ないな。どういうことだ？」

「余裕がないな。サイラル。俺の見た目の年齢に惑わされたか？」

相手の能力がわからなくても俺は焦らない。何通りも検討し、それぞれの場合に従った攻略法を考えてあるからだ。だが、サイラルは違う。

俺の能力がわからない上に、自分の能力が把握されていると考えている。これは、はじめての体験のはずだ。もし、俺と同じ能力の者が仲間にはいないのなら。

相当焦っているのではないか……と思う。

サイラルに対して心理的に優位に立たなくては俺の勝機はない。もっと……冷静さを失い、相手がミスするように誘わなければ。

「『氷の魔女』が出張ってきたり……予想外のことはかりだよ……本当に恐ろしいね。俺と同じ出身なのに人殺しに忌避感はないのかい？」

重い動きで剣を構え直しながら、強ばった笑みをサイラルは俺に向ける。

彼なりの揺さぶりだろう。それも想定済みだ。

「ないな」

今の俺の故郷は平和だったあの国ではない。生きることが命懸けの世界であり、いろんな人が助けてくれたクルト村だ。

俺は微笑みながらあっさりと、その揺さぶりを切り捨てた。

第三十二話 全力を尽くして

剣をお互いに構え、間合いをじりじりと詰めながら相手と睨み合う。軽装の俺とは違い、サイラルは鎖帷子の上から部分的な鉄製の鎧を身に付けている。

能力だけではなく、装備の上でもサイラルの方が有利だ。だが、俺は少しずつ前に出て、奴は後ろに下がっている。

『結界』という能力を考えると、サイラルは自分の命を賭けず、安全なところに身を置いて戦う事が出来る。しかし今、奴はその安全な立ち位置から叩き出されたのだ。

命懸けの戦いの経験が果たしてサイラルにはあるのだろうか。

「ははっ！ 参ったねこれは。流石はあの狐野郎の親友様だ。性格が悪いぜ」

サイラルに余裕がないのは暗くても解る。だが、彼に逃げるつもりはないようだ。

奴の話には耳を貸さず、一気に切り込む。

頭部と腕以外は殆どが鎖帷子と鎧で覆われているため、狙える場所はない。

フェイントを交えながら、薄いところを狙っていく。だが、サイラルはフェイントには掛からず、冷静にサーベルで俺の本命の斬撃を受け流し、反撃してくる。

俺の場合は相手の一撃が致命傷になりかねないため、攻撃は大きめに回避し、あるいは剣で受け止めながら、攻防を続けていく。一つの判断ミスは許されない。

緊張で汗が流れ、普段の戦闘よりも遥かに早く疲労が溜まってくる。

何度か剣を合せ、俺はわざと隙を見せて相手の横薙ぎの斬撃を誘うと、後ろに飛び下がりながら、相手からは見えないように自然な動作で、腰の袋から石を取り出し左手に持った。

「本当に難易度の高いイベントだね。ま、余裕でこなせるけど。俺は特別だし？」

サイラルは戦いながら余裕を取り戻してきたのか、気楽な調子で口を歪めて笑う。

まるで苦戦しているのを楽しんでいるかのように。

剣を交えて自分の方が上であることを確信したのかもしれない。

確かに剣技の差は僅かな上、身体能力では格段に劣っている。ならば、他の技術で補う。サイラルが使えるのは剣だけだが、俺には体術も投石も魔法もあるのだから。

ゼムドから俺のことを聞いていたとしても、どの程度の習熟度な

のかはわからないだろう。俺の能力の便利な点だ。

ただ、奴の余裕は気になる。油断しているのか、それともまだ、俺がわかっていない能力の使い方があるのか……歯を食いしばって恐怖心を必死に堪えながら、石を持つ左手に力を込めた。

「この世界で生きるのは……遊びじゃないんだ」

俺は間合いを詰めながら石を顔に近距離から投擲する。一瞬、奴の顔は歪んだが、一度見たこともあり、簡単に左手で石を受け止めた。

そこまでは予想済みだ。狙いは右腕！

剣を両手持ちに切り替えて全力で踏み込み、剣を振り下ろす。

がしいっ！

腕を狙い、確かに命中した。

にも関わらずサイラルの腕は切断されるどころか怪我一つ存在しなかった。

石を斬り付けたかのような衝撃に、思わず俺は後ろに飛び下がる。だが、全力で踏み込んだことで出来た隙をサイラルは逃さず、強引に斜め上からサーベルを振り下ろした。

回避しきれずに肩に鋭い痛みが走る。

だが、それを確認する暇も無く、サイラルは顔を愉悦で歪めながら右、左と連続で斬りかかってきた。

その連撃を後ろに下がり、剣を盾にして防ぎながらしばらく耐え……態勢を立て直したところで、逆に俺は一步左足を踏み込み、下腹を狙って左拳を振り抜いた。
拳に鈍い激痛が走ったが衝撃は届いたのか、サイラルはぐつ！と呻いて俺との距離を空けた。

鎖で切れてしまったのか、血が流れている左拳を見ながら眉をひそめる。

傷が痛んだからではない。肩の傷の方は出血はあるようだが、かすり傷のようで腕を動かすには問題はない。左拳も痛むものの骨は折れていない。

攻撃が通じた？ さっきとの差は……。

「ケイトっ！ 一瞬だけ魔力が集まったわ！ 5秒もあれば魔法は飛ばせるからっ！」

シーリアが杖を掲げながら叫ぶ。彼女の言葉で理解していた……ようは、斬られる瞬間に、結界を切り替えて攻撃を防いでいたのだろっ。

「わかったかい？ ばれたって関係ないのさ」

もう勝利を確信したかのようにサイラルは舌舐めずりし、シーリアの方を見る。

俺はもう敵ではないといった風に。

乱れている呼吸を整える。大丈夫。俺の心は折れていない。
右手で剣を構え直し、余裕ありげに石をこれみよがしに左手でお
手玉するように投げる。

俺のそんな仕草を見て、サイラルは心底嫌そうに顔を歪めた。

「まだ諦めてないのかい。しつこいな」

「手品のタネがわかれば、対処はそう難しくないんだよ？」

切り替えが一瞬で出来るなら、楯を使うように一瞬だけ物理攻撃
を防ぎ、すぐに魔力を封じること出来る。予想以上に不利だ。

だが、弱気は見せない。俺が負ければシリアには対抗する術は
ない。

他のみんなも不利になるのだ。

それにまだ手は……ある。

俺は転がっている二本の松明に目を一瞬だけ向けると、覚悟を決
めた。

大きく息を吸い込む。今は相手も警戒しているだろう。
相手が油断する隙を窺う。

「強がり言うな。俺とお前じゃこの世界で生きてきた時間が違う。
実力もな」

「その割には剣技には差はないんだけど。サボってたのか？」

につ……と、笑い、サイラルと剣を合わせる。剣で薙ぎ、突き、振るう。思い切って前に出ることはせず、お茶を濁すように負けな
いことを意識しながら、わざと焦らすように。

気がつくと、他の仲間達が剣を合わせる音は遠くなっている。
奴も気になっているのか、周りを気にするように周囲を確認する
と、一度距離を取ってサーベルを構え直した。

「ふふ……ケイト君。長引かせると俺の仲間が来るぞ？」

「馬鹿なことを。クルスとマイス、それにラキシスさんが負けるわ
けないだろ」

仲間が来ることを信じるのと同時に焦りもある。これは俺もサイ
ラルも共通の焦りだろう。サイラルの能力は一对二だと生かし切れ
ないはずだ。

俺も複数人数になれば対処のしようはない。

「時間を掛けるわけにはいかないか。使えない奴ばかりだからな…
…」

サイラルが呟き、表情を引き締める。

俺は立ち位置を確認し……勝負を掛けるべく、半身で相手と向か
い合った。

サイラルが俺の方に踏み込んだのと同時に、石を投げる。三度目だ……動揺させず、回避させずに、結界で受ける。ここからだ！

「なっ！」

サイラルが驚愕の声を上げる。

俺は低い姿勢でサイラルの懷に勢いをつけて飛び込み、自由になった『両手』で、相手の太股を抱えるように持って、そのまま体当たりで押し倒した。

ずしゃあああつ！ と鉄と地面が擦れる音が迷宮に響く。

「がはっ！」

強かに背中を打ち、サイラルが息を吐き出す。

石だけでは無く、同時に剣も投げつけたのだ。

結界に弾かれた剣は俺の足元に転がり、軽い音を立てる。だが、俺は落ちている剣には見向きもしない。立ち直る前にケリを付ける！

「おおおおおおおっ！」

俺はサイラルより先に立ち上がると奴に飛び掛かかり、左腕でサ

ーベルを持ったままの右腕を抑える。

そして左膝を奴の右脇の下辺りに突いて、右足は左肩あたりを踏み付けるようにして足を置き、右の拳でサイラルの顔面を殴りつけた。

何度も、何度も殴りつける。俺の手がサイラルの歯で切れて血が流れても殴り続ける。

「ぐっ、く……！」

「うあああああっ！」

サイラルが抑えられた腕を滅茶苦茶に動かし、サーベルが俺の足に当たって切り傷が出来る。殴りつける右拳も途中からは物理攻撃を弾く結界で守られ、痛むのは俺だけだ。

それでも殴り続ける。この態勢ではシーリアの魔法は使えない。サイラルも魔法については理解しているだろう。物理攻撃を防ぐ結界を使い続ける判断は正しい。

相手が俺でなければ。

俺は拳は止めずに……しかし、意識は左手に集中している。

サイラルは気付いていない。腕を掴み続けている俺の左手の魔力の光には。

「炎の精霊サラマンダーよ！ 代償を糧に……暴走しろっ！」

気絶する寸前まで魔力を込め、魔法を起動する。
今まで一度に今回ほどの魔力を込めたことはない。

俺が生み出した炎の精霊は転がっている松明を糧に顕現し、サイ
ラルと一緒に俺を巻き込んで大爆発を引き起こした。

第三十三話 裏切りというもの

魔法を発動させる瞬間、サイラルから飛び退こうとした。だが、自由になっっている左手で足を掴まれ、俺は自分の魔法の暴走に巻き込まれていた。

「……っ！ あああぐうううっ！」
「ケイトっ！」

手を放したサイラルから離れてしゃがみ込むと、俺は歯を食いしばる。

だが、感じたことの無い種類の、あまりの激痛に我慢できず、声が漏れてしまう。

背中からはシーリアの悲鳴が聞こえるが、気にかけることすら出来ない。

依代になった松明が床に落ちていたお陰で、炎の蜥蜴も低い位置で顕現してくれたため、火傷をしたのは足だけだ。炎も一瞬、足を燃やしただけで消えてくれた。

だが、両足とも靴は焼け溶けており、痛みを感じる限界を超えてしまっているのか、歩くだけでも痛いというよりも吐き気がするような感覚に陥ってしまう。

特に掴まれた右足は酷く、足の大部分の皮膚が溶けているのがわかった。

倒れ込みたい……もう駄目だ。立ち上がれない……なぜ俺がこんな目に……。

そんな思いが頭をよぎる。

離れていた俺でさえ、こうなのだ。サイラルは生きてはいないだろう。

俺は……人を殺したのか。

身体だけでなく、心にも嵐のような……大事なものを失ったような焦燥感が生まれ、恥も外聞もなく、大声で喚きそうになる。

そんな俺の精神を引き戻したのは目の前に転がる母さんから貰った剣だった。

「冒険者は……大事なものを守るために闘う……まだまだ……終わってない」

そのために冒険者は命を奪うこともある。覚悟はしたはずだ。辛くても、戸惑っても、泣き言を言いたくなくても……出来る事を逃げずにやるのだと。

サイラルに応えたように戸惑いなく人を殺せれば、どれほど楽だろう。

だが、俺はそんな風にはなりたくない。他人の人生を終わらせる

ことを簡単なことにはしたくない。

他人の人生の重さに後悔することになっても、俺は俺のやり方で生きていくのだ。

悩み、苦しみながら……それでも前に進む。一歩ずつ。

俺は剣を掴み、杖代わりにしながら、震える足を叱咤して立ち上がる。

そして愕然とする。

「嘘だろう……？」

「まだだ……俺の復讐は……復讐は終わらないんだ」

サイラルは上半身を焼け焦がせながら、それでも立ち上がっていた。

軽い火傷ではない。鎖帷子の下の服は溶け、地肌に鎧が当たっている。整っていた顔も右半分は焼け爛れ、殆ど原型を留めていない。

うわ言のように独り言を呟きながら、サーベルはこちらを向けている。

かろうじて焼け残っている左目には光が無い。

「元の世界に戻るんだ……この世界を滅ぼして……絶対戻るんだ……」

俺もサイラルを侮っていたのではないか。どれほどの恨みが……望郷の念が彼にはあるのだろうか。彼も俺のように心残りを残して死んだのかもしれない。

しかし、滅ぼすというのは……。

「死ぬわけがない……特別なんだ。俺は……俺の邪魔する奴は皆殺しにしてやる」

サイラルの目に光が戻る。対峙しているだけで、汗がとめどなく流れていく。

痛みによるものか、恐怖によるものか……自分にも判断がつかない。

獣染みた殺気をサイラル放っている。サーベルを持つ手も焼け焦げて、炭のようになっていっているのに……痛覚を感じていないのだろうか。

一步……また一步と近づいてくる。

俺にはもう打つ手がない。手札は全部切ってしまった。

相手が失敗するまで耐えるしかないか……俺はそう考えて剣を構える。

だが、今の足でどこまで戦えるのか。いや、そもそも動けるのか？

いや、俺はどんな理由があれ、ここでは負けられない。

絶対に。

「サイラル。降伏しろ。ゼムドがいる……今なら生き延びられるはずだ」

出来れば殺したくない。だが、これが最後だ。
もし、これ以上迷えば……目の前の手負いの獣に喰い殺されてしまふ。

奴は答えなかった。ぶつぶつと何かを呟きながら剣の間合いに入ると、サイラルはサーベルを振り上げた。

「くっ……！」

痛む足を前に踏み出し、相手のサーベルに合わせて自分の剣を振るう。

だが、剣がぶつかる金属音は響かなかった。

相手が剣を振り上げた瞬間、鋭い炎の矢が俺の顔の横を走り、サイラルの顔に命中したからだ。見覚えはある……シーリアの得意な魔法だ。

困惑はしなかった。思わぬ援護を生かすべく、途中で狙いを変えた俺の剣はサイラルの右腕を切断し、連続で放った突きが相手の首を貫いた。

「くっつ……はぁ……はぁ……何で効いた……うっうっ！　いつ
う……！　ラキシスさん！　サイラルは倒したっ！」

叫んでから剣を手放す。からん……と、軽い音を立てて剣が落ちた。

勝った。だが、全然嬉しさは感じない。ついに本当に人を殺してしまった。心の中はそんな後悔だけだ。俺はこの感触にもいつか慣れてしまうのだろうか。

今はただ、肉を裂く気持ち悪い感触のせいで、吐き気が止まらない。魔物相手にしろ、人間相手にしろ、絶対この感触には慣れそうにない……そう思った。

「大丈夫っ！　ケイト！　なんてことをっ！」

「俺より、他の連中の援護を……降伏を勧めて……」

「う、うんっ！」

もう、魔法の制限はない。これ以上は一方的になる。

相手もそれくらいはわかるだろう。

サイラルを生かして捕まえられなかったのは無念だが……仲間の無事を祈りながら、俺はシーリアが戻るまで、荒い息を吐いていた。

結局降伏させることが出来たのは一人だけだった。

クルスは爆発音で相手が驚いた隙を付き、一人を切り捨てていた。それを見たもう一人は勝ち目なしと見て、クルスに降伏。

そのまま彼女はすぐ近くで戦っていたマイスの相手、ザグの背中から短刀を投げて隙を作り、マイスはそれを利用してザグを切り伏せたらしい。

「おいおい、ケイト。その怪我っ！　すげえ火傷じゃねえか」
「マイス……悪いけど動けない。肩を貸してくれ」

まだ、ラキシスさんが残っている……行かなければ……そう思いつつも立てずに膝を着いていた俺に肩を貸し、立たせてくれたのはマイスではなく、クルスだった。
彼女の横顔は少し怒りを感じさせる。

「無茶しすぎ。後で説教」
「う、わかった。だけどそれより今は先にゼムドを」
「わかってる」

クルスは重そうにしながらも、絶対に譲らないという雰囲気で俺を支え、よろよとラキシスさんとゼムドが見える場所まで歩く。
シーリアはラキシスさんが気になるのか先に向かっていた。

二人は向かい合って立っていた。但し、ラキシスさんは剣を納めており、ゼムドの鉄の棍は床に転がっている。ゼムド自身は植物に

全身を絡まれ、動くことは出来ないようだ。

ラキシスさんは無傷だが余裕だったわけではないようで、髪の毛が汗で顔に張り付いているし、呼吸も荒い。

縛られているゼムドは全身に細かい切傷がある。ラキシスさんとゼムドの能力を考えると、どんな戦いだったかなんとかは想像が出来る。

ゼムドは俺の顔を見ると、ばつが悪そうに苦笑いした。不思議と彼には憎しみが湧かなかった。自分でもその理由はわからない。

「サイラルは負けたか。ここまでのようじゃの」

「手強かったよ。お陰で死にそうなくらいに」

俺とゼムドは何も話すことなく、静かに見つめ合う。

「ゼムド……約束は守った。シーリアは守りきった」

何を言えいいのかわからない。どんな顔をすればいいのかも。だから、俺はシーリアを見て、淡々とかつて彼とかわした約束を守ったことを告げた。

ゼムドはしばらくきょとんとしていたが、弾けるように笑う。
シーリアはえ？ え？ と何のことかわからずに、おろおろしていた。

「わっはっはっは！ ドワーフよりも融通が効かん男じゃの。お主は」

「性分でね。これからどうする？」

俺は動けないゼムドにそう問いかける。

「情けは無用。拙僧はお主たちを裏切った。殺そうとした。悪事も知っていて、放置した。お主達の情報を組織に流した……十分な罪じゃ」

「裏切り……か。そうなのかな」

裏切りと聞いて思い出すのは、今となっては大昔の……幼馴染と友人だ。だが、ゼムドを見ていて思う。本当に彼等だけが悪かったのかと。

あの時は幼馴染の言い訳も聞かず、一方的に悪と決めつけていたが……彼等にも彼等なりの言い分があつたのかもしれないと。

幼馴染や友人を許すことはできないが、少なくとも彼女を追い詰めたのは自分の態度も理由の一つだったことは間違いない。

「拙僧を見逃せばいつかお主等の敵になるやもしれん。禍根は絶つことじゃ。甘さはお主だけではなく、仲間の危険を招くことになるぞ」

俺を諭すような表情でゼムドはそこまで話し、どかっと思い良く座った。

確かに彼の言うことには一理ある。ゼムドが関わっていることを知りながら、俺は放置し続けていた。もっと不利な段階でサイラルが襲ってきていれば……。

今回もだ。俺はゼムドが俺達の敵に回らないという一縷の望みを賭けて、ラキシスさん以外の援護を頼まなかった。他の者がいては、サイラルとの関係を誤魔化すことができないからだ。そうなれば、彼が敵に回らなくても捕まってしまう。

ラキシスさんはそれがわかったんだろ。だから甘い……と言った。

俺は少し考え、ゼムドには応えず、シリアの方を向く。

「何か彼に言いたいことはある？」

「え、そうね……」

急に話を振られてシリアは驚いていたが、うーんと唸って悩んで……顔を上げる。

そして、つかつかとゼムドに近づくと右手を振り上げ、ぽこつ、と軽く殴った。ただ、彼女としては全力で殴ったようで、涙目になりながら痛そうに手を振っている。

「一発殴りたかったの。馬鹿にするんじゃないわよっ！ 私があのくらいことで、助けてくれたゼムドを軽蔑するとか思われるなんて心外なの。後、私が守られるような女だっと思われるのも。私は一緒に戦ってるのよっ！」

一気に叫ぶようにシーリアは言い切り、ぜーはーと肩で息をする。

「む……あ、むう……そりゃ見くびっておった。すまぬ」
「ならよしっ！」

ゼムドは何だかよくわかってない様子だったが、とにかく謝り、シーリアは強気そうな顔にすがすがしい明るい笑みを浮かべて頷いていた。

彼女が恨んでいないなら、まあいいのだろう。

「ゼムド。貴方には死んでもらうつもりはないんだ」
「ほう……どういうことかの」

胡散臭気にゼムドは俺を見る。彼の言うことも理解している。だが、俺は彼を殺さない。そんな楽をさせる気はない。

俺は、ラキシスさんの方を向いた。彼女も俺の方を向いて頷く。

「私に協力してもらおうわ。ゼムド」

「拙僧に仲間を売れと?」

ゼムドが初めて怒気見せた。そんな彼にラキシスさんは首を横に振り、微笑む。

「貴方はただの神官。気がついたら街に居なくなるの。そして……ケイト君や娘の安全に関わる情報だけ、不思議なことに私に届くようになるのよ」

「虫のいい話じゃの」

疑っているゼムドに、くすくすとラキシスさんは笑う。ただ、俺達に向ける穏やかなものではなく、氷のように冷たい……そんな笑みだ。

「私は貴方の命に価値など認めていないわ。異種族の組織もどうでもいいことよ。死んだのも冒険者。仕事で命を落とすなど良くあること……恨みもない」

ラキシスさんは一度そこで話を区切り、クルスに俺を下ろすように言って、壁を背に座らせ、水の精霊を召喚して俺の足を冷やす。そうやって火傷の処置を行ってからラキシスさんはゼムドに向きなあす。

「友人や娘のために貴方を生かすの。それに、貴方は私に借りがあ

るでしょう?」

「ケイト殿といい、シーリア殿といい、お主といい借りだらけじゃな。その条件飲もう」

ふう……と大きな溜息をゼムドは吐いた。

「もう一つ。こちらの方が重要なんだけど……貴方の魔法でケイトの足を治療して欲しい。これが私が貴方を見逃す一番の理由ね」
「拙僧が神の力を振るわぬということはお主も知っておろう。神の御心に反することにも手を染めておるでな。神にも合わせる顔が無いのじゃ」

ラキシスさんは俺の足の様子を確認し、もう一度ゼムドの方を見る。

「それでもよ。このままだと切断するしかなくなるの。私の貸しはそれで帳消しにしてあげるわ。貴方もこんなつまらないことで、ケイト君を再起不能にするのは本意ではないでしょう」

「なるほどの……やむを得ぬな……承知した」

ゼムドは苦々しげな表情で同意した。

俺の足は思いの外、危ない状況だったようだ。

ミスやクルスやシーリアの目が怖い。

後が大変そうだ……俺はそんな風に考え、痛みで脂汗をかきなが

ら苦笑した。

第三十四話 戦いの後

神の奇跡……神官の魔法をゼムドが使ってくれたお陰で、俺の火傷は殆ど治ったのだが……ゼムドは完全に治しきることが出来なかった。それだけ酷かったのだ。

信仰の力というのは、魔力のように寝れば回復するようなものではなく、普段の神への敬虔な奉仕で溜め込んでいく性質がある。そのため、ゼムドの治療はこれ以上は無理らしい。

従って俺の怪我は、しばらく休みながら、薬と他の神官へのお布施をすることで治すことになったのである。そして、それはゼムドとの別れを意味していた。

ゼムドは別れるとき、マイスに背負われた俺に声を掛け、

「運命とはわからぬものじゃ。お主は負けぬようにな」

と、彼が明るかった時の笑顔を向け、頭を下げ去っていった。

こうして俺はベッドの中の住人になった。

二日目の今はまだ、初日は中途半端に残った火傷による地獄の痛みと、高熱でまるで生きている気がしなかった。自業自得なん

だが。

クルスとシールリアが看病してくれたのだが、二人は時々睨み合い、俺の方を見て矛を納め……を無言で繰り返すため、胃が痛くて仕方がなかったのも辛さに一役買っている。

村の仲間達以外に初めて負の感情を見せながら、食事を食べさせてくれるクルスと、耳と尻尾の毛を逆立てながら、冷やした布を変えてくれているシールリアの無言の争いは、本当に胃に悪かった。

そんな風に昨日も大変だったのだが、今よりはましだったかもしれない。

昨日、どうやってサイラルを倒したのか説明させられたのだが、話を全て聞くと、マイルスが太い腕を組んでむっつりと考え込むように下を向き、クルスは呆れたような顔をして、間近で戦いを見ていたシールリアは苦笑いしている。

シールリアはともかく、残る二人とは長い付き合いだ。

この沈黙が嵐の前の静けさであることくらいは理解できている。

「何か昔の嫌な思い出が……まあ、それはどうでもいいとしてだ」

マイルスが腕組みをやめ、こほんと咳払いをすると俺が寝ているベッドに近付く。

俺は先手を打って耳を塞いだ。

「こんの……大馬鹿野郎がつ！ 馬鹿じゃねえか？ おい！」

「うん。馬鹿。大馬鹿。本当に馬鹿。救いのない馬鹿」

予想通りにマイルスが家中に響く勢いで叫び、クルスは平坦な口調で、延々と馬鹿を繰り返す。

いや、俺もちょっと格好悪いとは思ってるんだ。

「予定では華麗に飛び退いて、サイラルだけを巻き込むつもりだったんだ」

「そういう問題じゃねえよっ！ 何でそんな博打みたいなことするんだ！」

苦笑いしながら、俺は耳を塞ぐ。他に思いつかなかったからしょうがないと思う。

確かに、他にも方法はあった気はするのだが……予想外というのは常に存在しているものである。うん。

心配してくれてるのは嬉しいのだが、ちょっとは労わって欲しい気もする。

この件に関しては平謝りするかなさそうだが。

「大体、そんなことしなくてもな」

マイルスは自分の胸を叩いて豪快に笑い、自信満々に胸を張る。

「この俺様が目の前の相手をさっさと倒して、すぐにお前の援護が出来てんだ」

「こっちはさっさと片付けて、ケイトを助けれた」

マイルとクルスの声が合わさり、マイルとクルスが顔を見合わせた。

クルスは小馬鹿にするような笑みを浮かべてマイルを見る。

「苦戦してた癖に。マイルの出番は無かった」

「なっ！ お前は敵が音で驚いたからだろうが！」

おや？ と、二人を見る。なんだが、先程までと空気が違う。

何故か今度はマイルとクルスが睨み合っていた。

「私が助けなかったら危なかった」

「んなわけねーだろ！ お前こそあんな弱そうなのに苦戦しやがって！」

「く……二人相手は慣れてなかった。マイルは一人」

ぬぬぬっ！ と二人が睨み合う。俺には口出し出来なかった。

そうしたら最後、二人の怒りは俺に来るだろう。

この二人の言い争いも懐かしい。

俺を除けばクルスと真っ向から言い争いをしていたのはマイルスだけだ。

俺と学者になったヘイン、今はどこにいるかわからないホルスは、昼食のパンを賭けてよく二人の争いをネタにして遊んでいた。

ちなみに口でマイルスが負けるか、拳でマイルスが負けるかの賭けである。

二人には口が裂けても話せないが。

「あんたら本当に仲いいわね。結局、二人ともケイトを助けられなかったんじゃない。責める資格はないわよ。本当に役に立たないんだから」

はあ……と、わざとらしくシーリアは溜息を吐き、頭の上に乗っていたタオルを桶にいれた水に付けて絞り、もう一度頭の上に乗せてくれる。

彼女は握力も弱いのか、あんまり絞れておらず、ぼたぼたなのだが。

「ケイトを助けたのは私だしね。あいつの結界の性質を見抜いたし、冷静に魔法を打ち込んだし。ケイトの頑張りを一番わかってあげられるのも私だし？」

ベッドの側で座り込み、機嫌良さそうに俺に顔を近づけてシーリアは微笑む。

彼女は俺に顔を向けてるから見えてないだろう。マイルとクルスの怒りに染まった顔が。

俺はもう一度耳を塞ぐ。そろそろ勘弁して欲しい。

「何言つてやがんだ。お前が一番悪いんだろっが！」

「この無能狼は、何を言っているのか」

「ひゃうっ！ な、なによっ！」

急な後ろからの大声にシーリアはびくっ！ と飛び上がり、立ち上がって睨みつけてくる二人を睨み返した。

「ケイトが魔法使う前にお前が使えよ！」

「ケイトが魔法使ったら貴女いなくても同じ」

また、マイルとクルスの声が揃う。どうやら、二人の怒りはシーリアが引き受けてくれたらしい。俺はほっとしつつ、目を閉じる。

「私の魔法に巻き込むわけにはいかないでしょ！ それに自爆するなんて思わないしっ！ 私だってちよっと馬鹿じゃない？ って思ってたわよっ！」

「自爆は馬鹿だが、上手くやる方法あったろっ！」

「うん。自爆は頭が悪すぎる」

……味方はどこかにいないのだろうか。
当事者であるはずの俺をそっちのけで、三人楽しく喧嘩してるし。

「騒いでいるから来てみれば……で、貴方達は怪我人の部屋で何を
しているのかしら？」

いつのまにか、彼らの後ろのラキシスさんが立っていた。穏やか
そうに微笑んでいるように見えるが、目は笑っていない。

彼女の凍り付くような声を聞き、それまでわーわー騒いでいた三
人の声がピタッと止まる。貫禄の違いだろうか。

「外で頭を冷やしてきなさい。三人とも」

三人とも顔を見合わせ、ようやく冷静に今の状況を理解したのか、
すくすく部屋から出て行った。

三人の後ろ姿を見送り、やれやれ……と苦笑してラキシスさんは
首を横に振る。

「あの子達はまだまだ子供ね。素直じゃないんだから」
「扉の外で待つてないで早く助けてくださいよ」

俺が指摘すると彼女はいたずらがばれた子供のように、くすくす
と笑った。

「あら、能力を使ったの？」

「使ってません。タイミングが良かったので」

ラキシスさんは俺の側に寄り、ベッドの側に座ると、人差し指を
ぴっ……と伸ばして、俺の額をちゃんと突つつく。

「馬鹿なことをした子にはお仕置が必要と思わないかしら？」

「もう、何年か分くらい言われたんで勘弁して下さい」

「ふふ……そうね。あの子達も本当はわかってるのよ。貴方が大
人だから甘えているのね」

額から頬に指を滑らせ、ラキシスさんは微笑む。

「命を賭けて娘を助けてくれて有難う……それから」

そして腕を回して、俺をゆっくり起こし自分の胸に抱き寄せた。

「本当に良く頑張ったわね。一人で色々なものを抱えて……失って
……それでも、最後まで戦って……偉かったわ。仲間をずっと何ヶ
月も疑って……辛かったでしょうに」

「仲間を嵌めたし、人を殺しました。正直辛いですが……だけど、大
丈夫です」

落ち着く香りがするラキシスさんに優しく抱えられながら、今度
はちゃんと大丈夫と強がりを言えた。

昔よりは強くなったということだろうか。

ラキシスさんはゆっくりと俺から身体を離すと、ちらつと扉の方
を見て薄く笑う。

そして今度は顔を引き寄せて、頬にキスをしてくれた。

「これはお礼ね。それとさっきのは無し。言い換えましょう……立
派に冒険者になったのね」

「はい。ラキシスさんのお陰です」

俺は笑ってラキシスさんに頭を下げた。ラキシスさんは、本当に
人間の成長って早いわね。と、呟き、よろしい！ と冗談っぽく胸
を張って頷いた。

「本当、ケイト君が来てくれて良かった。シーリアも明るくなった
し、退屈しなかったわ」

ラキシスさんは、過去形で残念そうに言った。

本当に聡い女性だと思う。どうやら俺の考えはお見通しらしい。

「ばれてましたか」

「はい、ばれてます。ケイト君もまだまだね。いい男になるには、まだ五年はかかりそう。あ、でも、その時あの子達がまだ、子供みたいなことしてたら私がもらっちゃおうかしら」

そんなことを話しながらラキシスさんは楽しそうに笑う。

俺にはなんだか一瞬、彼女の目が本気に見えたような気がして、自分の馬鹿な考えに困って頭をかいた。

「期待に答えられるように頑張ります。黙っててすいません」

「いいのよ。なんとなくわかっていたしね……じゃあ、ケイト君の考えている今後のことを聞かせてもらおうかしら。その三人も、気になるなら、ちゃんと中に入って聞きなさい」

ラキシスさんは立ち上がって扉の方に声を掛けると、三人は気まぐずそうな顔をしながら中に入ってきた。全く……仲が良いのか悪いのか。

彼らの表情を見て、俺は思わず吹き出してしまっていた。

そして、俺は話が長くなりそうだからと、全員に座ってもらい、今後のことについて、考えていたことをみんなに話すことにした。

第三十五話 次の目的

部屋に一つだけ置いてある椅子にはラキシスさんが座り、俺はベツドに腰掛ける。あとの三人は床に座っている。狭い部屋ではないが、流石にこの人数は多い。

「その三人も盗み聞きしていたとおり、俺はカイラルをすぐにも発つつもりでいる」

盗み聞きと言う部分に三人がうつ！ と呻く。まあ散々苛められたしこれくらいの反撃は許されるだろう。ラキシスさんも手を口に当ててくすくすと笑う。

「さて、ケイト君より楽な相手に手こずった情けなくて不甲斐ない、その三人は彼が街を出ることに決めた理由はわかるかしら？」
「マイスを村に送り届ける」

ラキシスさんのからかうような言葉に、一番に反応したのはクルスだ。確かにそれも理由の一つだが、ラキシスさんが考えた理由ではない。

その理由なら『今すぐ』とは言わない。少し悩んで俺は首を横に振った。

「ん？ 違うのか。まさか、またサイラルの仲間に襲われるのか？」
「それはないね。彼等の拠点は一掃されたはずだよ」

マイスの答えはすぐに否定する。これは確実だ。この街の彼らの組織は俺達が来たばかりのときはゼムドが、その後はサイラルが指揮を採っていたことは掴んでいる。

非合法なことを大規模に行える組織だ。二人がいなくなれば後は蜥蜴の尻尾にできるようになっているだろう。証拠を可能な限り残さないように。

残っても黒幕である者達に追求が及ばないように。

いや、裏で領主のカイラルと繋がっている可能性すらある。お互いに利用し合うために。

権力者を信じてはならない。個人では利用されるだけだ。

「じゃ、じゃあ、この街に嫌気が差したとか？」

「シーリア……貴女ね……学ぶというのは知識を身に付けるだけじゃないのよ？」

なんだか不安げなシーリアの答えに、ラキシスさんは指を眉間に当てて、深い苦悩の表情を浮かべた。流石にこの答えには困惑しているようだ。

というか、シーリアは貴族を警戒していたはずじゃ……？

俺も苦笑いするしかなかった。

「答えは目立ちすぎたから。俺は確実にカイラルにマークされてるはずだよ」

「なんでえ。カイラルは味方になってくれたじゃねえか」
「今回はね」

不思議そうな顔をして、頭に手を置いて素直に疑問を口にしたマイスに俺は答える。そう、今回は味方になってくれた。

「俺の能力はまずい。サイラルと戦って痛感したよ。これがカイラルに知られれば、確実に利用されるはず。彼等なら俺の能力を、俺よりも効率よく使おうと考えるだろう」

「えっと……それってまずい？ 危害はないんじゃない？」

シリアはわたたと慌てながら、そう問い返す。ラキシスさんという後ろ盾のあるシリアには危険がないかもしれないが……。

「ないかもしれないけど、楽観は出来ないというところかな」

「う、う、でもでも……」

「仕方無い。他にも迷宮はあるし、冒険が出来るのもここだけじゃない」

クルスはシリアを見て、冷静にそう言い聞かせる。そして、シ

ーリアはクルスを睨み……ああ、そうか……と、そこで俺はようやく気が付いた。我ながら鈍い。

俺は髪の毛を軽く掻き乱して、苦笑した。

「シーリアは学院があるし、ラキシスさんもここに住んでいるから強制はしないよ。シーリアも自分で選んで欲しい」

「うん……わかった」

しょんぼりと耳をシーリアは寝かせて落ち込んでいる。俺も寂しいがこればかりは仕方がない。俺達全員が、自分で選んでいるのだから。

恐らく彼女は残るのではないだろうか。

そうすれば、次に会えるのは何年後かわからない。俺も辛い。

だが、貴族に巻き込まれれば、村もマイルスもクルスも危なくなる。本当の理由は言えない以上、何か理由がある。

「カイラルに利用されると街から出にくくなる。そうなれば、俺の冒険の目的が果たせなくなるんだ。それが一番の理由」

「ケイトの目的って？」

シーリアが顔を上げる。赤い瞳には好奇心の色があった。そういえば、彼女にはちゃんと話したことがない気がする。俺の本来の目的。

「世界中を廻ること。迷宮に潜っていたのもその準備なんだ」
「世界を廻って……どうするの？」

不思議そうにシリアは首を傾げる。ただ単に、この不思議な世界を見たいだけ……とか言ったら怒るだろうか。だけど今は他に理由はない……我ながら無計画だ。

「興味があるんだ。この不思議なことが溢れている世界に。それだけだよ」

「本当に変わってるわね。ケイトは」

だが、シリアは俺の予想に反して、くすくすと笑った。
そんな彼女をラキシスさんは少し寂しそうな表情で見えていたが、話が途切れたところで俺の方を穏やかに微笑んで見た。

「ケイト君、世界を廻るにしても、何か当面の目的とかはないの？」
「それなんですが……世界中の『呪い付き』の伝承を集めてみようかと。サイラルが少し気になることを言っていたので。滅ぼして元の世界に戻る……とか」
「うへえ、いかれてやがるな」

マイルスが嫌そうに顔を歪め、なるほど、それで伝承ね……と、ラキシスさんは難しそうな顔をして呟く。

「昔、私とケイト君のお母さん……マリアが戦った『呪い付き』も似たことを言っていたわ。元の世界とかはなかったけれど、この狂った世界を滅ぼす力を見つけたとか。あ、ゼムドの組織とは関係なかったわよ？ 彼の所は元々、人間以外の種族の助け合いのための組織だから」

「世界を滅ぼすとか……そんな力が実際にありえるんですか？」

ラキシスさんは俺の問いを聞いて考え込み、首を横に振った。

「現実的ではないわね。私達が戦った相手が使おうとした力も、発動すれば街が一つ消えるくらいの威力はあったけど世界とまでは」
「でも、街一つ消えるような力はあるんだ」

ラキシスさんの話にシーリアが頬を引き攣らせて苦笑いした。
俺も驚いて声が出ない。そんな力がもし他にもあれば……。

ラキシスさんは嫌なことを思い出したといった風に眉をひそめて続ける。

「二度と利用出来ないように、それがあつた施設は封印したわよ。壊せなかったから。場所も今となっては私とマリアしか知らないしね」

「なるほど。壊せない施設……迷宮の建物みたいな感じなのかな」
「そんなところね。そう考えれば他にある可能性はあるけれど」

誰かが知ってたら、壊すなり利用するなりされている。それがラキシスさんの答えらしい。俺もそうは思うが、不思議な物はある……というのは間違いないようだ。

ラキシスさんは一度、話を止めて、あ……と小さく呟いて俺を見る。

「忘れていたわ。伝承を探すなら南に行きなさい。エーリディ湖を超えて更に南に行ったところに私の故郷、ザーンベルグ大森林があるわ。紹介状を書いてあげるから、そこを訪ねてみなさい。無駄に長生きしているのが住んでるから」

「……嫌そうですね」

「退屈なとこだったのよ。しきたりがどうの、エルフの誇りがどうのと……全く……流行らないのよ。だけど、古い知識なら確かに豊富だからね」

まるで、やんちゃな子供みたいなことを言いながら、ラキシスさんは微笑んだ。

それが嫌で故郷を飛び出した人の紹介状で大丈夫なんだろうかと、思わなくもなかったが、短期的な目的地があるのはありがたい。

「有難う御座います。そうしてみます」

「うん。あ、西のディラス帝国は絶対に近づいては駄目よ。ゼムドの組織の本拠があるから。あの組織も昔はただの助け合いだったのに、どうなってるやら」

困りきった表情でラキシスさんは目を閉じる。何故そんなことを知っているのか……。

異種族の組織なら、彼女に声を掛けないはずはないか。

そんな風に考えに耽っていると、シーリアが何かを言いにくそうに声を掛けてきた。

「ね、ねえ。ケイト」

「何？ シーリア」

床に座っているため、シーリアは俺を見上げるように……少し泣きそうに顔を歪めながら、先を続けた。

「カイラルをいつ出るの？」

「もう動けるし、今日の治療で完治すると思うから……明日は、お世話になった人に挨拶をして、道具を揃えて……明後日には」

「そ、そんな！ 早すぎないっ？」

シーリアは立ち上がって、俺の顔を間近に見るように詰め寄ってくる。俺は背中後ろに手について思わず仰け反ってしまった。

銀色の髪が顔に掛かり、息遣いも聞こえてきそうな距離だ。

自分の状態に気付いたのか、シーリアは真っ赤に顔を染めて後ろに飛び下がる。

「ごめん。ちょっと考えさせて」

彼女はそう言って俺に背中を向けると、部屋から出て行った。ラキスさんは、俺をちらっと見て、シーリアを追いかけるように部屋を出ていく。

彼女達が出ていったあと、クルスは俺をじいつと見て、

「良かったの？」

と、ぼつりと呟いた。

非難しているわけではなさそうだ。確認といった感じが。良かったかどうかであれば、考えるまでもない。俺は頷く。

「お互いのためだよ。ラキスさんもいるしね。でも……」

俺はクルスに笑いかける。

「来てくれたら嬉しいよね。クルスも仲がいい見たいだし」

「っ……ケイトの目はおかしい。あんな駄目狼、どっちでもいい」

少しだけ顔を赤くしてクルスは顔を背けた。

本当に嫌いならクルスは相手にもしないだろう。そんな彼女の照れたような顔を見て、俺はマイルスと二人、声を上げて笑った。

第三十六話 逆襲

翌朝、俺達はシールシアに学院の寮に住んでいるヘインを呼び出してもらった。

カイラルの領主一族の少女、ユーニティアは事件の後始末で忙しいらしく、今日は会わなかったらしい。彼女には悪いが俺達としては都合が良い。

俺はヘインにユーニティアへの丁寧なお礼の伝言を頼み、明日にはカイラルを旅立つことを告げた。ヘインは俺達の事情を察してくれたのか、

「そうか……また、寂しくなるな。何かあればまた連絡してくれ」

と、残念そうな表情をしながらも、深く理由は追求しなかった。

こうして俺達は再会とお互いの無事を約束し、幼い頃からの親友にしばらくの別れを告げた。

きつとまた、生きてさえいれば会う事もできるだろう。

俺はヘインと握手しながら、そのときには俺も彼に負けないよう、成長しておきたいと考えていた。向こうもそう思っているのかもしれない。

なんとなくだが、そんな気がしていた。

ヘインと別れた後は、長い間お世話になった『雅な華亭』で昼食を取り、宿の女将であるエーデルおばさんと、息子のリックさんにも別れを告げた。

エーデルおばさんはその大きな身体で豪快に笑い、

「冒険者なんだから仕方無い！ でも、カイラルにまた来たらうちを使いなよっ！ あんたもあの悪餓鬼の兄さんに負けんじゃないよ！」

と、しばしば俺の身体を叩き、山盛りの食事をサービスしてくれた。

他にも『雅な華亭』の常連さん、行きつけの道具屋、雑貨屋の主人、ドワーフの鍛冶士のクロールさん……色んな人が色んな形で別れを惜しんでくれた。

この街で過ごした短いが濃密な時間を振り返ると、本当に色んなことがあったな、と笑みが溢れた。楽しいことばかりではなかったが、この街に来たことは後悔していない。

「結局よお。昨日の話って、この街から逃げるってことなんだよな？」

「いきなり何よ」

頭の後ろで手を組みながら俺の隣を歩いていたマイルスが急に声を上げ、俺の後ろを歩いていたシールリアがそれに反応した。俺は苦笑しながらマイルスに答える。

「違うとは言わないよ。もう少しここにいたかったけどね」

「まあ、ケイトがやることには意味があるんだろうから、しゃあねえんだがよ」

マイルスは歩くのを止め、後ろを振り返ってシールリアを見る。何か言いたそうだ。

言葉を探しているのか、彼はしばらく唸っていたが、きつ！と顔を上げて俺を見る。

「そうそう、いくらなんでも急すぎるぜ。今まで一緒に戦ってくれたシールリアに義理が立たねえ。一日二日遅れたって構わないだろ」

俺の肩を両手でがしつと掴み、マイルスは顔を近付ける。

「ケイト。俺は頭は良くないが、お前はもっとちゃんと、シールリアとお互いが納得できるまで話し合う責任があるんじゃないか？ 男ならそこは逃げちゃいかんだろ」

「マイルス。余計」

拳を振り上げているマイスを、クルスは冷めた目で見てぼそつと呟く。

彼の言うことにも一理ある。俺達や他の者が危なくなるからといってすぐに街から逃げるのは、これまで冒険を共にしてきたシーリアに不義理だ。

いや、シーリアは俺達に怒っていいくらいじゃないだろうか。

「確かにマイスの言うとおりだね。俺は焦ってたかも」

「え、え……？」

シーリアは意味がわかってないのか、俺とマイスを見比べながら困惑していた。

マイスはそんなシーリアに、にかつと爽やかに笑うと、彼女の肩を軽く叩く。

「そついうわけだ！俺とクルスで旅の準備の買物はするからよ。先に戻ってケイトと納得いくまで二人きりで話し合ってくれ。なんなら殴つてもいいぜ？」

「え、え？ ええええ！」

いい笑顔でマイスは片目を瞑り、シーリアは耳と尻尾をぴんと立てて、驚きの声を上げる。クルスは何も言わなかったが、マイスの足を思いつきり踏み抜き、不機嫌そうな表情で先に歩いていった。

マイスは立ち止まったままの俺達に手を振り、苦笑してクルスの

後ろをついて行った。

家に戻ると、ラキシスさんも出掛けているのか家には誰もいなかった。

俺達は飲み物を用意して、客間で椅子に座る……が、なんだか気まずくて会話が続かない。シーリアは視線を外していて、時折目が合つと慌てて逸すし、俺も何を話せばいいやらわからずに困惑してしまう。

中々話す糸口が掴めないのも、何かないかと俺は昔のことを思い出してみた。

彼女と初めて迷宮に潜ったときは、わざと怒らせた。お陰で翌日には買い物に付き合わされ……本当の彼女は明るくて奔放なんだと知ることが出来た。

迷宮に何度も一緒に潜り、命懸けの戦いをくぐり抜けてきた。休日には、マイルスと俺と三人で出かけたり、二人で出かけたり……とにかく俺達を引っ張り回していた。

そんな風に出会ってから今までのことを思い出していると、感じていた気まずさはゆっくりと溶けていく。俺は、本当に彼女に助けられていたと思う。

マイルスの言うとおり、このまま何も話さず、全てを彼女任せにしてみるのは不義理に違いない。俺も心残りを残してしまうだろう。

「そういえば、こうやって二人だけでいるのも久しぶりだね」

「えっ！　そ、そうね」

「前は良く町中引っ張り回されていたのにね」

俺がからかうような口調でそう言って笑うと、シリアは一瞬だけきょとんとし、普段通りの表情に戻った。

「ケイトがすぐ宿に籠ろうとするからでしょ。ずっと何か書いているんだから」

「冒険の記録を付けてるんだよ」

「あんたをほつといたら、地味な記録になっちゃうわよ。色々見ないと」

クルスが来る前、俺達の周りがまだ平和だった頃の会話、そのまんまだ。シリアも自分で言っていて気付いたのか、くすくす笑った。

「本当にケイトが来てくれて、楽しくなったわ。気兼ねなしに外を歩けるし、私が人間じゃないことも意識しなくてよかったし」

「俺も楽しかったよ。本当に。シリアのお陰で、気分転換が良く出来たしね」

心の底からの感謝を彼女に告げる。

だが、シリアはそれには応えず、ゆっくりと木製のコップに入っていた果実水を飲み干し、コップを置くと赤い瞳を俺の方に真っ

直ぐ向けた。

「ケイト。きちんと答えて欲しいのだけれどいい？」

「何でも」

彼女のあまりの真剣さに、身構えながら俺は頷く。

「クルスのこと、どう思ってるの？」

「好きだよ」

即答した。やきもちはすぐ焼くし、気難しかったり、喧嘩をすることもあるが、俺の気持ちは村を出た頃から変わっていなかった。シーリアは少し驚いていたが、すぐに苦笑を浮かべる。

「はつきり言うわね。クルスの方は……ま、わかりやすいか」

「隠しても仕方ないしね。まあ、困ったところも多いけど」

俺は今も不機嫌な顔をしながらマイルスと歩いているであろう彼女を思い、苦笑した。

シーリアはそうね。と笑って頷き、立ち上がる。

「ケイト、そこで少し待ってて。今回助けて貰ったし、お礼を買ってあるの」

「仲間なんだし、気にしなくてもいいのに」
「いいから待っておくっ！」

彼女は怒ったようにそう言って、二階へと上がっていく。そして、すぐに紙袋を持って階段を走って降りてきた。

余程慌てて取りに行ったのか切らせている息を整え、彼女はそのまま俺の隣まで歩いてくる。そして、何かを思い出したように、あ……と、声を上げる。

「ケイト。目を瞑って。すぐに何かわかったらつまらないでしょ？」
「あ、うん」

早口で捲し立てるように言ったシーリアの指示に従い、俺は目を閉じる。

「良いつて言うまで目を開けたらだめよ」
「了解」

シーリアはよしっと小さく呟く。そして、紙袋の落ちる小さな音がして……。

頭にゆっくりと手が回され、唇になにかしっとりとした柔らかい感触が……って！

慌てて目を開けると、目を閉じたシーリアが至近距離にいた。

真っ赤になりながら俺に唇を押し付けて。

たっぷり、十秒ほどしてから彼女はゆっくりと離れ、顔を赤くしたまま、いたずらに成功した子供のように笑った。

「隙だらけね。ケイト。仕返し成功！」

「な、な……」

あまりのことに声も出ない。シーリアは、にししつと笑いながら、屈んで腰に手を当て、尻尾をぱたぱた振りながら、椅子に座る俺の顔を正面から見る。

「私も冒険について行かせてもらっわよ。ラキシス様……お母様の故郷に挨拶に行きたいもの。私も世界中色々と見て廻りたいしね。お母様とは昨日お話したの。寂しいけど、親離れもしないよね。私はケイト達より年上なんだし」

今日の朝のような、少し悩んでいた表情は今のシーリアには欠片も残っていない。まさか、朝からこれを企んでいたのだろうか。

「私を侮ってもらっては困るわね。ゲイルシュタッドの名前を背負っているんだから、情けないことを言うわけないじゃない。絶対行くって昨日から決めてたのよ」

声を上げて笑いながら、シーリアは驚愕している俺の頬を指で挟んで引く張る。

「ケイトの考えていることなんてお見通しなの。また、私や他の誰かに迷惑掛けないようにとか思ってたんでしょ。本当馬鹿なんだから」

「痛い痛いっ！」

余程怒りを我慢していたのか、ぐぐつと捻ってから彼女は手を離した。

そして、微笑む。

「それにね。ケイトとクルスを二人きりにはしないわ。ケイトがあの子が好きだろうと、両思いだろうと、私には諦める気はないの。ケイトが好きだから」

「え、いや、ありがとうと言うべきなのか？ それは。だけど、心変わりはないよ」

俺はいきなりの告白に戸惑いながらも、はつきりと彼女に告げる。だが、シーリアは全く動じてはいなかった。

「そんなの旅をしている間に変わるかもしれないじゃない。絶対に変わらないものなんてないんだから。こちらを振り向かせてみせるわ」

彼女の言葉は、俺がクルスに言ったことだ。まさか自分に返ってくるとは……と、彼女の自信満々の笑顔を見て苦笑する。

その時、背後から俺の首に冷たい手が添えられた。

「それでこそ私の娘ね。欲しいものは自分の力で手に入れるのが冒険者よ」

「ラキシスさん……」

びくつと震えて後ろを振り返ると、いつのまにか、ラキシスさんが俺の後ろに立っていた。彼女はシーリアを見ながら、穏やかに微笑んでいる。

「でも、旅の間の恋愛には気を付けなさいね。他の人と一緒の時は特に」

「わかってます」

「ケイト君も抜けてるところがあるから、シーリア。しっかり助けてあげなさい。魔術師として、年上として、重要な役割なのだからね」

がんばりなさい。と、ラキシスさんはシーリアに楽しそうに言った。

シーリアは……少しだけ泣きそうになっていたが、明るい笑顔を浮かべて頷いていた。

エピローグ 幼い日の夢

結局、シールリアは俺達と一緒に旅をすることに決めてくれた。

キスをした……いや、されたことは、シールリアがクルスにばらし、大荒れになってしまったのだが、変に隠すよりは良かったのかもしれない。それでも、クルスが彼女の同行を認めたのは、

「ケイトも貴女がいつて言ってるんだし、自信があるなら構わないでしょ。もしかして自信ないの？」

と、いうシールリアの堂々とした悪びれない挑発が原因だろう。

本当はラキシスさんも旅に行きたがっていたが、事件の後始末が残っているために残らざるを得なかったらしい。彼女は俺達に、何かあればすぐに連絡するようにと、何度も何度も繰り返して念を押し、俺達を笑顔で見送った。

本当に頼りになる大人だと思う。

あの日からシールリアは色々と吹っ切れたらしく、サイラルに狙われる前に明るさを取り戻して……いや、それ以上に明るくなった気がする。

クルスとの言い争いも真正面から受けて立つようになり、どこことなく楽しそうにクルスをからかっている。仲良くなっただんどうか？

シリアの告白に対する答えは、旅が一段落するまで保留で構わないと言われた。

俺は既に答えを出しているつもりだったのだが、駄目らしい。

そんな風に、出発までどたばたしてしまっただが、なんとか城塞都市カイラルを発した俺達は、目的地に向かう前にマイスをクルト村まで送ることにした。

クルト村は南のエーリディ湖を目指す場合、通り道にあるため、ついでに何日か村で休んで行こうということになったのである。

こうして俺達はクルト村を目指したのだが、マイスは村に近付くにつれて落ち着きが無くなって行き、到着するや否や恋人のリイナを探して走り去っていった。

「本当にマイスは恋人が好きなのね」
「仲良い」

抱き合う二人を見つけたシリアとクルスは片や呆れたように、片や無表情にそう感想を漏らした。俺もクルスと再会したときあんな感じだったんだろうか。

いや……流石にそんなことは無かった……気がする。

恋人と再会して喜んでいるマイルスはそのまま放置し、俺達は久しぶりになる村の中をゆつくりと歩く。一年も経っていないため、穏やかで牧歌的な雰囲気のある村はあまり変わっていない。

時折すれ違う村の住人達に挨拶をしながら三人で自宅を目指していると、シリアがふと立ち止まり、村を見廻して怪訝な顔をしていた。何かあったのだろうか？

村の人達の視線が気になるのか……と思っていたがどうも違うようだ。

「ケイト。何だか私この村に見覚えがある気がする」

「ん？ でも俺は会ったことないと思うんだけど」

「私もない」

シリアの外見は目立つ。一度でも見れば、忘れるはずがないと思う。

旅で寄るならうちに寄らないはずはないし……。

「気のせいかなあ」

家に着くまでシリアはそんな様子だったが、家に着くとシリアは、はしゃぐように俺の肩を叩き、大声を上げた。

「あ、絶対知ってる！ 私、ここに住んできたことある！」

「は？」

クルスが取り乱しているシーリアを無視して、扉をノックする。しばらくすると、中から夕食を作っていたのかエプロン姿のマリア母さんが出てきた。

マリア母さんは俺達を見ると少しだけ驚き、すぐに目を細めて嬉しそうに微笑んだ。

「お帰りなさい。ケイト、クルス……それに、貴女はシーリア……よね？」

「は、はい！　こんにちはっ！」

シーリアは緊張している様子で顔を強ばらせながら、マリア母さんに深々と頭を下げた。母さんはシーリアに近付くと、優しく頭を撫でる。

「大きくなったわね。貴女には息子がお世話になったみたいね」

「いえ、ケイトには私が世話になってしまっ……ケイトが命賭けで守ってくれたし……その……あ、そうだ。ラキシス様から手紙を預かってます」

あたふたしながらシーリアは鞆から手紙を取り出し、にやりと笑って俺を見ているマリア母さんに手紙を渡した。マリア母さんはエプロンに手紙をしまい、シーリアの方を複雑そうな表情で見る。

そして、言葉を選ぶように間を空けて口を開いた。

「ラキシスは……ちゃんと親が出来てた？」

「え？ はい。最高の親だと思ってます」

「信じられ……いや、それなら良かったわ。さ、いいときに帰ってきたわ。貴方達。すぐに食べる物を用意するわ。クルスは家に戻りなさい。ガイ達が喜ぶわ」

シーリアの返事を聞き、母さんが微妙に眉をよせたが……誤魔化すように笑って、クルスの方を向く。クルスは頷き、自分の家の方に荷物を担いで歩いていった。

マリア母さんによると、正式にラキシスさんの養女になるまでの間、一ヶ月ほど家で預かっていたらしい。俺とクルスが知らないのは、まだ赤ちゃんだったからのようだ。

その際は何が大変なことがあったのか、マリア母さんはぼかして苦笑いしていた。

思い返すと、俺だけでなく次兄のカイル兄さんやエリー姉さんもラキシスさんと俺が初めて会ったとき、初対面だった。彼女は村まですり取りに来たわけではないのだろうか。

謎は深まるばかりだ。

しかし、一ヶ月もここで過ごした割に俺と初対面の時、嫌われていた気がするのだが……後で聞くと、名前は覚えていなかったかららしい。ラキシスさんも説明してくれればいいのに。

一番上の兄、トマス兄さんはちゃんとシーリアのことを覚えてい

た。この分だと、シールアと同じ年の姉も覚えているかもしれない。

シールアは徐々に昔のことを思い出したのか、笑顔でマリア母さんやトマス兄さんと楽しそうに話し、リラックスした様子で家で過ごしていた。

マリア母さんに誘導尋問され、キスのことまでばらされた時には困ったが。

母さんはクルスとのことを知っているはずなのに、彼女にも頑張れと煽っていた。面白がるのはいいが、正直勘弁して欲しいものである。

翌日、俺とクルス、そしてシールアは南の山の頂上で昼食を食べていた。

ここはクルスとの思い出がある場所だ。

子供の頃は辛かった山も、今では楽に登ることが出来る。これほど小さい山だっただろうか……と、懐かしく思う。

体力のないシールアは息を切らせて、クルスに手を引かれてなんとか登っていたが。

「絶景ね！　こーんなに広いんだ……エーリデイ湖ってっ！」

しかし、その素晴らしい風景は成長した今も変わらない。終始涙目だったシールアも頂上に着くと元気を取り戻し、眼下に広がる果てが見えないほど広い湖を見て、目をきらきらさせて感動

したように声を上げていた。

俺は座って落ち着いた気持ちで湖を見る。いつかはあそこに行きたいと……子供の頃から思っていた。意外と早かったな……と思う。

クルスが子供の時と同じように俺の隣に座って、背中後ろに付いている俺の手に、そっと自分の手を重ね合わせる。

「ケイト。船乗れるね」

彼女も覚えていたのだろう。

照れたように頬を赤く染め、湖の方を見ながらクルスが小声で言った。

「大人になったら……乗れるか」

「うん、ケイトと一緒に乗る」

幼い俺達は大人になった俺達が、こうして本当に船に乗ることを決めたことをどう思うのだろう。喜ぶだろうか、子供から変わらないことに呆れるだろうか。

そう思うとなんだかおかしくなって、俺は小さく笑った。

当時は自分一人で船に乗るつもりで話していたが、彼女は彼女なりに本気で冒険したいと考えていたのだろう。

彼女は自分のやりたいことを、自分で決めたのだ。

「何二人でいい雰囲気になってるのよ」

シリアは苦笑いしながら俺の隣に腰掛ける。クルスは慌てるように重ねた手をどかせ、真っ赤になって顔を背けた。

「ケイトが世界を見て廻りたいって言ったのもわかるわね」

「あの湖の向こう側はどうなっているんだろっね？」

「さあ。わからないわ。でも、面白そうね！」

シリアがくすりと笑ってすぐに口を閉じ、水平線の彼方を見るように目を細める。

クルスも彼女に同意するように頷いた。

俺達は先に待ち受けている冒険のことを考えながら、三人並んで雄大な風景を静かに眺め続けていた。

外伝 プロローグ マリアとシéria

懐かしいと感じるほど長い期間、城塞都市カイルルに滞在していたわけでは無かったが、私は久しぶりになるクルト村で、ゆっくりと身体を休めていた。

今日はケイトとシériaはジンおじさんの家で暮らしているケイトの姐、エリーの所に挨拶に行っている。

私ที่บ้านに来る前に出掛けてしまっていたのは、最近、無駄に明るくなったあの狼女が無理矢理引っ張っていったに違いない。

私もケイト達を追いかけようと思ったのだが、マリアに捕まってしまった。彼女は私からカイルルでの冒険の話を聞きたかったようだ。

私は私が来てからのカイルルでの話を包み隠さずマリアに話した。

「ケイトは自爆したってところは言わなかったわね」

「あれは危なかった。ただ、そうでもないし難しかったのも事実」

「『呪い付き』か……よく勝ったわね」

私は果実水を、マリアは私にこっそり頼んでいた酒を飲みながら、感心したように息を吐いた。彼女も冒険者時代に『呪い付き』とはよく戦ったらしい。

その恐ろしさは身をもって知っているのだと思う。

「ただと……と、目を細めたマリアは木のコップをテーブルに置き、困ったような表情をしながら指で弾く。」

「何であの子はラキシスをあんなに尊敬出来るのかしら。昔からだけど……」

「どうということ？」

意味がわからず私は首を傾げる。ラキシスは確かに気に入らないけど、ケイトの頼みを聞き、サイラルの所属している組織を完全にカイラルから叩き出している。

「直接対決でも私達を助けてくれていた……私としても流石に認めざるを得ない。」

疑問を投げかけた私を見て、マリアはしばらく悩んだ風だったけれど、クルスならいいか……と、苦笑してテーブルに肘を付きながら懐かしそうに話し始めた。

「ラキシスは確かに身内には優しいし、優秀よ。強力な精霊使いで魔法使い。剣技もそれなりに使える。頭の回転も早いわ。ただどね……」

「だけど？」

「長所と同じくらい短所も満載の子なのよ。あの子は『氷の魔女』と呼ばれているみたいだけれど、他にも異名があるの。本人は知らないだらうけど」

くすくすとマリアは笑う。彼女はラキシスを嫌っているわけではないようだ。

ケイトの兄、カイルがケイトに向けていたような……仕方がない奴……といったところなのだろうか。駄目な妹を見る感じ……かな？

「『歩く天災』、『衛視泣かせ』、『永遠の反抗期』、『暴発エルフ』、『半殺しマイスター』とまあ、私が現役時代に聞いたのだけでこれくらいね。教育を間違えた私の責任も大きいんだけど」
「……見た目からは想像できない」

マリアが並べた凶悪そうな二つ名に眉をひそめる。彼女は頷き、溜息を吐く。

「そうなのよ。一見、優雅で気品がありそうに見えるから厄介なの。きつと親御さんの躰がよかったのね。お陰で馬鹿な男に何度絡まれたか」
「なるほど」

衛視泣かせや半殺し云々は、その辺りかもしれない。だけど、他の異名はよくわからない。暴発とか天災は……流石に……。

「ラキシスはどんなことをやって天災とか呼ばれるようになったの？」
「そうね。あの子は……うーん、難しいわね。そう、理想の冒険者像があるの」

「理想の冒険者？」

「ええ。何の本を読んだのかわからないけれど、颯爽と現れて圧倒的な力で問題を解決し、格好良く去っていく……そんな感じがしる？」

マリアが人差し指をさまよわせながら言葉を探しつつ、説明してくれる。彼女には理解できなかったのかもしれない。私も意味がわからないけれど。

「なまじそれが出来る強さがあつたのが迷惑だったわ。私が彼女と組み始めた理由は、私の宿敵から逃げなさそうな性格だったからだけど……一ヶ月後には後悔してたわね」

「なんで？」

「危険な仕事ほど喜んで引き受ける奴だったからよ。到底無理そんなものでも」

その時の冒険の数々を思い出しているのか、マリアは微笑んでいた。

そんな無茶があつたからこそ、ラキシスやマリアの圧倒的な強さがあるのかもしれない。

「まあ、エルフの森は彼女には退屈だったでしょうね。本当に冒険しているときのラキシスは生き生きしていたし。ただ、勤勉というわけでもなかったけれど」

「そつえば、よく昼まで寝てた」

ケイトは疲れが出たとか好意的に解釈することが多かったけれど、あれは絶対ただの寝坊。シーリアも起こさないからぐーたらしっているんだと私は思う。

「独特のなんというかな。エルフ時間……みたいなものがあるのかもしれないわね。何度も起きない彼女を無理矢理着替えさせて、背負って歩いたわ。何度叱ったか」

「それで、帰ってきたとき……信じられないって」

マリアは首を横に振った。どうやら違うらしい。

「そんなのは些細な欠点よ」

「じゃあ他に？」

些細なんだ……と、私は苦笑した。マリアも大概、普通じゃないと思う。

「私が冒険者を引退してからも、国が運営している冒険者のギルドから、彼女が起こした問題の相談はよく来ていたわ。シーリアのことは国は関わっていないけれど……」

「ラキシスが原因？」

「ま、そんなところね。彼女は悪くはないけれど後処理は最悪だったわ」

苦々しい顔でマリアはそう言って、シーリアが来た時の様子を話し始めた。

日も暮れ、夕食を食べた私たちは食後の団欒を楽しんでいた。

長男のトマスと次男のカイルがどたとと暴れ廻り、エリーはまだ一歳のケイトの面倒を見てくれている。私は最愛の旦那と今年の作物の様子について話したりしながら、ゆっくりと過ごしていた。

冒険者の時代と違い、慌てることは何もない。

剣を教えてくれとしつこかった二人も今では一人前の冒険者となり、村からは離れて頑張っている。剣を掴むこともない……そんな緩やかな生活。

目的も果たしたし決して後悔はしていない。

最近はずきずきも丸くなったのか問題を引き起こすことも少なくなつたし、静かなものだと思う。息子達や娘の成長を楽しみに生きていくのは悪くない。

私はそんな風に考えていた……が、その静けさは一瞬で打ち砕かれてしまう。扉を叩く、大きなノックで。私は立ち上がると玄関へと向い、扉を開ける。

「夜分にすまん！　ここはマリア殿の家で間違いないかの？」

「私がマリアだけれど……何か？」

扉を開けると立っていたのは一人のドワーフだった。背が低く、多くは長く髭を伸ばしており、力が強い。義理堅い種族だとも言われている。

重そうな鎧を着込んだドワーフを見て私は直感的に理解した。絶対にラキシスが厄介事を運んできたのだと。

それを証明するように、彼が引いている荷車には可愛らしい狼の耳、尻尾が生えた白い少女が乗っていた。

「じいじ。ついた？ ついた？」

幼いその少女は私に気付くと荷車からドワーフの頭に飛び乗り、好奇心に溢れる目でこちらを見る。何と無くうちに来た理由は理解できていたが、私は頭に白い獣人族の少女を載せたドワーフに理由を聞いてみた。

「ラキシス殿から……拙僧は頼まれての。この子、シーリアはマリア殿がきつと立派に育ててくれる。彼女のところにいるのがシーリアの幸せだからと」

「……ラキシスは？」

眉間を抑えながら、私は彼に問い掛ける。少し頭が痛い。ドワーフは辛そうに顔を伏せた。

「氷の上位精霊『イルファータ』を解放するときに雪崩に巻き込まれ……命を助けられた拙僧達は彼女の遺志を果たすことにしたのじや」

「死んだと？」

「流石にあの雪崩で助かるわけが……」

ドワーフの沈痛の表情を見て、私の頭はさらに痛んだ。

それくらいで死ぬならラキシスは数十回死んでいると。自然の扱いは彼女が最も得意としているところだし、雪崩の対処も間違いないと考えているだろう。

そういう冒険者としての強さの意味では彼女を信頼している。

「事情はわかったわ。この子はしばらくうちで預かりましょう」
「おおっ！　ありがたい……感謝する！」

嬉しそうに笑うドワーフを見ながら、私はシーリアをどうしようか真剣に悩んでいた。

とりあえず、本人にも聞いてみようどドワーフの頭からシーリアを引きはがし、両手で抱えて視線を合わせる。

「シーリアちゃん。ラキシスは……何か言ってた？」

「んー？　かぞくっ！　ほこりたかく、ゆうがでーえっと、さいきよー……」

無邪気な笑顔で自信たっぷりに言った彼女の答えに、思わず乾いた笑いが出てしまう。

これは詳しく聞く必要があるかもしれない。

「ドワーフさん。今日はもう遅いので泊まってください。貴方に詳しい事情を聞かなくてはなりませんし」

「む？ わかった。拙僧が話せることであれば話そう」

こうして、シーリアは私の家にしばらく泊まることになった。

そしてこの夜、ドワーフから話を聞いた私は久しぶりに本気で怒ることになる。

外伝 一話 エルフの朝

ベッドから出たくない……春はすぐそこまで近付いているはずなのに寒すぎる。

私は毛布を三枚重ねにして、くるまりながら起きなければいけないという気持ちと、そのままごろごろしたいという気持ちとで戦っていた。

目が覚めてから三十分はそうしていただろうか。

流星に今日は起きなくてはならない。そう決心し、毛布を取ろうとし……。

「後……もう少しいいよね？」

目を瞑りそうになり、ダメダメっ！ と、もぞもぞベッドから這出る。

冬の冷えた空気が、薄着で眠っていた私の肌を刺し、一気に眠気を奪い取っていった。

「寒いし働きたくないなあ」

そんなふうにはやきながら、昨日のうちに枕元に置いてあった今日の服に着替え、足の踏み場もないほど本が転がった部屋をかき分けて、鏡の前に置かれている椅子に座る。

私には働かなくてはならない理由があった。

城塞都市カイラルの役人から一ヶ月先に予定されている税金の支払い額の通知が来たのである。そして、手持ちの金額はその金額に足らなかったのだ。これはまずい。

私の住んでいる場所は、城塞都市カイラルでも一等地であり、非常に住み心地のいい場所ではあるのだが、その分税金も高い。

最も、私の實力であればすぐに稼げる程度ではあるが……税金を払わなければ大変なことになるため、時間に余裕を持たせて働く必要があったのである。

まあ、通知から一週間以上経っているのは、冬の寒さと魔性のふかふかベッドが悪いのであって、私は悪くない。

「うー酷い寝癖」

所々跳ねた自慢の金色の髪の毛を、櫛でストレートに戻していく。髪の手入れをするときは、自分の長い耳が邪魔になって頭の後ろ側はやりにくかったりする。仲間と旅をしていたころはやってもらっていたが、今は自分でやるしかない。

その仲間も、今では引退して四児の母。たまに無駄に長い寿命があることに苛立ちを感じることもある。私にはいい恋人なんて出来

ないのに……と僻んでいるわけではない。

仲間が次々引退していくのだ。こればかりは仕方がないことではあるけれど……。

エルフと他の種族では寿命が違いすぎるから。

かといって、森に戻る気はないけれど。

目が覚めれば、後は早い。私はてきぱきと身嗜みを整えると朝食代わりに果物を一つ齧り、仕事を求めてカイルルにある、この国の冒険者ギルドの本部へと足を運んだ。

私の実力に相応しいいい仕事があることを祈りながら。

城塞都市カイルルの第一市街にある、ピアース王国の冒険者ギルドの本部は、本来の同業者の集まりという意味の『ギルド』とは全く異なる、国の一機関である。

役所じゃなくてギルドと名乗っているのは成り立ちに理由があるそうだけれど、あんまり私は興味がないので調べてはいない。

ま、どうでもいいことかなと私は思う。大切なのはこの施設では、様々な仕事を紹介されていて、解決すれば領主が責任を持って報酬を払ってくれるということだ。

お金を稼ぐだけなら、迷宮に潜ればいい。

だけど、私のような優秀なエルフが面白くもない迷宮に潜るのは、このカイルルにとっても好ましいことじゃないはずである。

それを証明するように、ギルドの役人達の不安そうな視線が私に集中している。きつと、一番難しい依頼をこなしてくれることを期待しているのだろう。

（しょうがないなあ。でも期待には答えないとね）

このギルドは私がいないと駄目なんだから……と、内心で微笑みながら、表情には出さず、掲示板に貼られている依頼を一つ一つ確認していく。

いつの間にか冒険者ギルドから冒険者達が消えている。

いつも感じることもだけど、みんな仕事熱心なのだ。きつと自分の仕事を見つけてすぐに仕事に向かっているのだと思う。

依頼を探していると……二枚、気になる依頼があった。

一枚だけなら気にも止めなかったんだけど……。

とりあえず二枚とも掲示板から剥がして、カウンターの向こうにいる役人を呼びつけて、気になった依頼の紙を見せる。

「この依頼なのだけれど」

「は、はいっ！」

何故か目の前の若い役人は顔が青い。風邪でも引いているのかしら？

そんな疑問を覚えつつ、質問を続ける。

「片方はアルカイン山脈への護衛。もう片方はアルカイン山脈に住み着いているらしい、氷の上位精霊の再封印、もしくは退治、解放」

「は、はい、そうですね」

「何故、ただの護衛の方が依頼料が高いのかしら？」

そう、何の目的での護衛なのかは書かれていないが……冬のアルカイン山脈の厳しさ、住み着く魔物の強さを思えば、護衛の方は依頼料こそ中々の報酬だが、相場通りと言える。

だが、もう片方の氷の上位精霊の退治の依頼はというと、誰もこの程度の報酬では引き受けないであろうという報酬であつた。

しかも、この難しい依頼で金貨や銀貨だけでなく、半端に一番価値の低い貨幣である銅貨まで記載されている。

上位精霊というのは災害なども司る自然の化身とも言つべき、精霊によっては弱小の神に匹敵するとすら言い伝えられている強力な存在である。

それを封印するには、相当の技量を必要とする。私でも出来るかどうか……退治などはまず不可能。私は慎重な性格だから、危険なことは出来ない。

「確かアルカイン山脈には氷の上位精霊『イルファータ』が封印されている。そんな伝説があつたわね。この依頼は……それを倒せということかしら？」

「いや、その……私共もよくわかりませんで……依頼主が違つんで

す」

首を傾げる。二枚を見比べると確かに署名が違った。

護衛をして、さらに封印して報酬が増えるというわけではないよ
うだ。

よく見ると紙の新しさも違う。護衛の方は最近だが、もう一枚は
古いし……なんだか、金額が何度も消されて上乘せされている。

ふむ……と、顎に指を当てて思案する。

もし、伝説通りアルカイン山脈に氷の上位精霊がいたとすれば、
山脈から近いこのカイルルにもある程度の影響があるはずだし、私
も精霊の働きを感知できるはず。

だが、一番氷の精霊の力が増す冬でも、そのような働きは感じた
ことがない。と、なればガセか……と思うと、この依頼書の必死な
様子を見る限りそんなはずはない。

と、なれば護衛も、もしかすると、この氷の精霊に関係している
のではないか？

関係なくとも同じアルカイン山脈だし、改めて上位精霊を探して
話してみればいい。精霊は狂っていない限り一方的に襲ってくる
ことはないはずだから。

色々と裏がありそうだ……これは面白い依頼かもしれない。そん
な匂いがする。

私は役人に見られないよう、紙を見ながら小さく笑った。

「こちらの古い方の依頼主はどんな人なのかしら？」

「あ、その、そっちの依頼主は死んだんです」

「……はあ？」

「獣人なんです、夫婦で冒険者になって……魔力石を換金しては依頼料を上げていってですね。無茶したのか、半年くらい前に夫婦揃って……」

ふむ……と、役人の泣きそうな顔を見ながら考える。

やはり、これは本気の依頼なのだろう。理由はわからないが命を賭けるほどの。

その執念が、この依頼を私に引き合わせたのではないか？

私は古ぼけた一枚の……ぼろぼろの依頼用紙に夫婦の魂を感じていた。

「申し訳ありませんっ！ 誰も受けるわけないんで外そうかと思っ
たんです！ 勘弁してくださいっ！ べ、別のいいご依頼を紹介し
ますから！」

「構わないわ。この二枚、私が両方とも引き受けましょう」

「ええええええっ！」

この夫婦はどうして命を賭けたのか。それはきっと、彼等にとつては命より大切なことだったのだと思う。そして、彼等の想いに応えることのできる能力を私は持っている。

ならば、この超一流の天才冒険者、ラキシス・ゲイルスタッドが

依頼を引き受け、解決するのは最早運命に違いない。

どんな困難な依頼であろうとも、どんな手段を使おうとも私は必ず達成してみせる。

危険な依頼だけれど……引き受ける価値のある依頼だと思う。

「遺志を引継ぎ、依頼を解決することは、ギルドへの信頼に繋がるでしょう」

「そ、そうですが……いや、でもですね！ 失敗すると、カイラルがとんでも……！」

私を心配してくれている若い役人を片手で制し、静かに彼に告げる。

「心配はありません。私であれば解決出来ます」

「い、いやでもですね……う……はい」

「よろしい。では護衛の方の依頼人への紹介状をお願いします」

か弱く見える私が無茶をしようとしていると思ったのだろうけれど……。

見かけで判断するなんて若いわね。うん。

私はその役人に紹介状を書かせると、アルカイン山脈について詳しく調べるため、数多くの書物が保管されているカイラル王立学院に向けて歩きだした。

久しぶりの血が滾るような大冒険の予感と、名も知らぬ依頼人夫婦を必ずや安心させるという使命感に心を震わせながら。

外伝 二話 獣人の村

依頼を受けてから四日後、私は約束の期日に間に合うようにカイラルを出発した。

街の外へ移動する時の相棒であるシュトルム……背は低いけど力は強い私の馬を引いて、カイラルの北を流れるパルイア河を船で渡してもらい、アルカイン山脈の麓にある村を目指して馬を歩かせていく。

四日も掛かってしまったのは調べ物と、調べた情報から判断した準備に時間が掛かってしまったからだ。

きちんと調べてみると、アルカイン山脈に関わる伝説の話は無数に存在していた。

当然ながら色々な話があるのだけれど……どれも共通しているのは氷の上位精霊『イルファータ』が『魔法使い』に封印された……というもの。

おかしい話だと私は思う。不自然なのだ。

上位精霊も精霊……なのに封印しているのは『精霊使い』ではなく、『魔法使い』である。

一つの例外もなく。

私は一般的に魔法使いの魔法と呼ばれる人間の作った理論魔術も、

自然の力を借りる精霊魔術も使うことが出来るが、精霊と相対するときは必ず精霊魔術を選ぶ。

人の理で現象を引き起こす理論魔術は、精霊相手には不向きなのである。上位精霊になればなるほど、理論魔術で精霊を封印することは難しくなってくるのだ。

理論魔術は自然の働きを一定の状態に押し込めてしまう。

だが、自然というのは本来刻一刻と変化していくものである。ずっと押さえつけるには、どれほどの魔力が必要になるというのか。

これが精霊に力を借りるということなら、まだわからないでもない。

だが、自然の化身である上位精霊を強引に封じる……それがどれ程困難なことであるのかは、使い手である私にはわかる。

「大魔術師ダグラスが城塞都市カイルを救うために、悪の精霊使いが呼び出した氷の上位精霊『イルファータ』を命と引き換えに封印した……か」

アルカイン山脈が近付くにつれ、気温が下がっていく道をのんびりと馬に歩かせながら、寒さで固まった身体をほぐすために腕を天に向けて伸ばした。

吟遊詩人の詩、当時の資料、歴史書……全ての文献に共通する一文である。

だが、私は疑っていた。

果たして命を賭けたくらいで、人が上位精霊を封じることが出来るだろうかねと。

そして、私は調べ上げ、ある一枚の論文を見つけたのである。

その論文は私に一つの予測をさせるのに十分な資料だった。

目的の村は目に付くのが小さな畑くらいしかない、貧しそうな村だった。

村の中では犬のような耳を付けた獣人があちこち弓を持って歩いており、狩猟を中心に生活しているのだということを思わせる。

雪山でも狩りが出来るほどの腕があるのかと、私は彼らを見ながら感心していた。

珍しい獣人達の村。護衛の依頼主は獣人だったのか……と、村を見回す。

もう一つの依頼主の方も獣人の夫婦だった……さりげなく夫婦を知っているかどうか確認してみようと、じゃれ合っている子供達に私は近づいていく。

「ひっ！ きゃああああっ！」

「あうあ……うわあああっ！」

旅人に慣れていないのか私を見た子供の獣人達が走って声を上げて逃げていった。

……子供は苦手。何故か私を見ると逃げるし泣くし。

私は耳を伏せて逃げていく子供達の後ろ姿を見送り……しばらく、立ち尽くす。

（ま、まあ、他の誰かに聞けばいいか）

私は頭を振って気分を切り替え、待ち合わせ場所である村で一番大きな家を目指して歩いていった。うん、きっと旅人に慣れていないんだ……と、言い聞かせながら。

扉を叩いて中に入れてもらうと、私を迎えたのは痩せた目付きの鋭い初老の獣人と若そうなドワーフだった。家の主である初老の獣人は、私を暖炉の置かれている部屋まで案内し、私に椅子を勧める。

若いドワーフも私に頭を軽く下げ、空いている椅子に腰を降ろした。

「ようこそ。歓迎しよう。私は村長のバードだ。そちらのドワーフはゼムド」

「私はラキリス。今回の護衛の依頼を引き受けたわ。護衛対象はこちらで聞けという話だったのだけれど……」

二人の様子を見る。どちらも、何だか融通が効かなそうないや、真面目そうなというべきか。堅い雰囲気を持っている。

村長、バラドは表情を少しも変えずに頷いた。そこから感情らしきものは伺えない。

事務的なと言えればいいのか……そんな雰囲気。私は内心で眉をひそめた。

「護衛対象は村の一人の子供だ。村の習わしでな……ある場所まで護衛してやって欲しい。詳しくはゼムドに確認してくれ。村から案内も一人付ける」

「冬の雪山に子供を連れて行くななんて、厳しい習わしがあるのね」

私の皮肉にも二人とも反応しない。

彼等は自分達が非常識な依頼をしているというのはわかっているはず。

基本、ギルドの報酬は先払いのはず。この護衛の仕事でもお金は先払いされている……そのお金はどこからでたのか。習わしの一言で片付けるのはいかにも厳しい。

私はゼムドを見る。私が説明を促していることがわかったのか彼も私の方を向いた。

「拙僧はゼムド。ラキシス殿のご高名は聞き及んでおる」

「そう」

「今回の仕事は獣人族の少女、シériaをアルカイン山脈へと護衛するのが任務じゃ。距離は片道で三日。保存食、登山道具はこちらでも用意できるが？」

ゼムドは私を値踏みするような眼で、じっとこちらを見つめる。
さてさて、何を考えているのか。どうも相手の表情は読みにくい。

「こちらで全部準備しているわ……出発はいつ？」

「護衛は他の者は先に集まっておる。明日で大丈夫かの？」

「私は何時でもいいわ。他の護衛の紹介もよろしく」

わかった、とゼムドは頷く。あくまで事務的なことだけの説明。
これでは、私の仮説を確信には出来ない……そう考え、少し情報を得るためにも揺さぶるうかと口を開きかけ……。

「じいじ、おはなしおわった？」

「し、シーリア殿」

目の前のドワーフの表情が急に慌てたものに変わる。

彼の無表情を崩したのは、白い髪に透き通るような赤い瞳のくり
つとした目を持つ4、5歳くらいの少女だった。彼女も獣人のよう
で、犬の耳とふさふさな尻尾が付いている。

身体に見合った小振りの尻尾をふりふりと揺らしながら、彼女は
ゼムドの頭にしがみつくように飛び乗った。大分懐いているらしい。

「じいじ、きやははっ！ たかいたかい」

「こりゃ。頭の上に乗ってはいかん」

村長の孫かなにかだろうか。私は問いかけるようにバードを見る。彼は少女を嗜めるでもなく、興味なさそうにやりたいようにやらせていた。

「その子が護衛対象だ」

「なるほど。シーリアちゃん、こんにちは」

複雑な内心を隠し、私は子供向けに鏡に向かって何度も何度も練習した笑顔を、ゼムドの頭の上で楽しそうに笑っている少女に向けた。

すると、彼女は笑うのを止め……。

（う、泣かれるかな。またかぁ。うつうつ、何で？）

そんな風に戦々恐々としながら、シーリアと見つめ合い……。

「おねえちゃん、だれ？」

不思議そうな顔で私に問い掛けてきた。泣かない！
練習の成果はちゃんと出てくれていた。自分の才能が恐ろしい。

喜びが表情に出ないよう、必死に抑えながらゼムドの頭に乗っているシーリアに近づき、目線を合わせるように少しだけ屈む。

「私はラキシス・ゲイルスタッド。冒険者よ。よろしくね」
「ぼっけんしゃってなに？」

冒険者がわからないのか小首を傾げ、聞き返してくる。
子供とあんまり話をしたことのない私は、必死にどう説明すれば彼女にわかってもらえるか……わかりやすいかを考えてから答えた。

「正義の味方よ。とても強い」
「えええええ、どれくらい？」
「凄く強い」
「すごく？ すっごく？」
「ええ、すごくすごくすつつごく強いよ。最強なの」
「えええええ、おねえちゃんつよいんだー！」

どうやら理解してもらえたらしい。私は少女の頭を撫でて頷く。
中々、見どころのありそうな少女だと思う。

「……ラキシス殿、拙僧の頭の上で会話しないで欲しいのじゃが」

ゼムドの声で私は我に返ると、私は彼に今日の宿に案内してもら

うことにした。

彼に聞くことは護衛の途中で聞けばいい。そう考えながら。

外伝 三話 アルカイン山脈

翌日、私達は登山用の道具を持ち、獣人族の案内に従って雪山に登り始めた。

幸い天気は良いため、寒さはまだましと言ったところか。

雪が日を反射するため、じつとりと汗を掻きそうなくらいである。

子供のシーリアはゼムドが背負っている。彼の分の荷物はその代わり、他の冒険者が分担して持つことに決まっていた。

「シーリア。これをあげましょう」

「なになにー」

「お守り。ちゃんと首に掛けておくのよ？」

「だから、ラキシス殿……」

困惑するゼムドを無視し、彼に背負ってもらっているシーリアの首に、紐の付いた袋を掛けてあげる。昨日の夜に作った、私特製、必殺のお守りである。我ながらいい出来の一品だ。

「ラキシスさん、先程のものは？」

今回の護衛の依頼は私とゼムドの他にも三人の冒険者が依頼を受けていた。

声を掛けてきたのはそのうちの一人、中年くらいの年頃の男の剣士だ。

名前は確か……セインとか言ったか。

茶色の髪の少し神経質そうな顔付き。腕は見た感じそれなりには使えそう。

顔で性格を判断しては失礼かな……と思う。

だが、シーリアを空気のように無視している辺り、面白みはなさそうだと私は判断していた。私への質問も何だか咎めているような雰囲気がある。

護衛対象と交流を持つなど暗に言っているのかもしれない。

「雪除けのお守りよ。自分のために買ったのだけれど、彼女が使う方がいいでしょう」

「そうですか」

余計なことをするなと言わんばかりの彼に内心で舌を出す。

彼の相棒らしいもう一人の……こちらは若い剣士、グランも似たような雰囲気を持っている。

今回の依頼は疲れそうだな……と、私は思っていた。

冒険者というのは底抜けに明るい者が多くて結構楽しかったりするのだけれど、今回は無口で愛想のない冒険者ばかりだ。

残り一人は冒険者らしい冒険者なのが救いか。

「ま、まあ、いいじゃないか。今回は仲間なんだし仲良くやろうぜ。『氷の魔女』の実力が見れるなんて俺はついてるぜ」

険悪なムードの私達を仲裁するように、残る一人、くすんだ金髪の痩せぎすな体格の魔法剣士のジェイドが間に入って作り笑いしていた。

私自身は彼等に剣士だと紹介している。

エルフだしカイルルでは名が通っている気がするから、ばれてはいるだろうが、彼等に手の内を晒す必要はない。何故なら信用をしていないから。

「行こう」

ドワーフのゼムドが獣人族の案内人に出発を告げる。

無口な案内の獣人は頷き、目的地に向けて歩き始めた。

アルカイン山脈は緩やかな傾斜の、標高は雲には届かないがそれなりの高さを持つ山である。麓はなだらかで歩きやすいが頂上に近づくに従って、岩が転がり、地形も複雑になっていく。案内人無しでの登山はかなり難しいだろう。

私にとって登山は大きな問題ではない。

もつと危険な山にも私は登ったことがあるからだ。雪山だけではなく、あちこちでマグマが吹き出しているような……何故か実体化した下級精霊、サラマンダーがうようよしている火山とか。

冬の山は天候が変わりやすいので、油断は出来ないが……。

日が暮れる前に、早めに風を防いでくれる木々の生えた場所にテントを張っていく。雪崩も今いる場所なら大丈夫だろうと思う。

幸い、夜まで天候は変わることはなかった。運がいい。

私は自分の準備を終えると、ゼムドからシーリアを預かる。彼女を背負ったまま作業するのは大変だろうから。

彼の代わりにシーリアを背負った私に、彼は頭を下げた。

「ラキシス殿。すまぬな」

「構わないわ」

そして、黙々と作業している彼に近付き、小声で声を掛ける。

「後で話があるわ。他の三人には聞かれたくないわね」

「む……なんじゃ？」

「後でテントに行くから」

それだけ告げると、私はシーリアをゆっくりと地面に下ろして彼

女に笑いかける。

シーリアは少しだけ眠たそうにしていたが、にへらーと笑った。

「頑張ったわね。疲れたでしょう」

「だいじょぶ！　じいじてつだう」

「もう出来上がるから、向こうで私のお手伝いをしてもらえるかしら？」

「うん！　おねえちゃんてつだう！」

偉い偉いと頭を撫でると、シーリアは小さな尻尾をぶんぶん振っていた。

何故かそんな私を見ながら金髪の魔法剣士、ジェイドが変な顔をしている。

「……何か？」

「あ、いや、似合わ……や、あ……えっと……なんでもないっす……」

しどろもどろになって何故か逃げていった彼は放置し、私はシーリアと一緒に食事を用意するために、自分のテントに向かって歩き始めた。

食事を終え、皆がそれぞれのテントで眠ったことを確認すると、私は毛布を持ってゼムドのテントへと向かった。彼のテントではシーリアが疲れたのか、小さな寝息を立てている。

「さて、何かの……ラキシス殿」

「悪いわね。聞き忘れたことがあって」

ゼムドは私を疑うように手元に武器を置いて、髭を撫でている。近くに彼女がいる以上、用心をしているのだろっけれど。私は気にせず、寒さを少しでも和らげるために毛布を羽織る。テントがあっても寒いものは寒い。

地面には毛布を引いているのだが、それでも冷たさを感じるし。まあ、それはいい。今、重要なのはゼムドから情報を引き出すことだ。

「貴方はシーリアがやろうとしている儀式を知っているの？」

「知らぬ。だが、行けば彼女が判ると聞いている」

私はゼムドの表情から真偽を読み取ろうとして……ふう……と溜息を吐いた。

ドワーフの表情の読み方など、私にはわからなかった。

とりあえず、なかったことにして会話を続ける。

「貴方とシーリアは旧知のようだけれど、知り合いなの？」
「ああ。死んだ友人の娘じゃよ。それが何かあるのかの？」

シーリアの懐き様を見ている限り、事実には違いない。
彼もまた、彼女を可愛がっているように思えた。だが……。

「アルカイン山脈の伝説は知ってる？」

「上位精霊が封印されているとかかの？ おとぎ話じゃろう」

ゼムドは質問の意図がわからないらしく、眉をひそめている。

冒険者は行き当たりばったりの者が多いが彼もそうなのかもしれない。

「……カイルで依頼を受けたのではないの？」

「いや、拙僧は村長から直接じゃよ。まあ、元々は別の者が派遣されるはずだったのを、友人の忘れ形見ということで拙僧が無理矢理変わってもらったんじゃが……お主も異種族なら聞いたことがあるのではないかの？ 拙僧達は助け合っておるでな」

「なるほどね。依頼料も貴方達が？」

「半分だけの。後は村が出しておるんじゃないか？」

彼の説明を聞き、頭が痛くなった私は眉間を指で抑えた。

恐らく本来行くはずだった者は儀式の理由を知っていたのではないだろうか。お金を支払うということは、支払う意味があるということだ。

出資者としてはゼムドはイレギュラーなのかもしれない。

「本当に馬鹿ね。ドワーフは頭まで筋肉が詰まっているの？」
「なんじゃとっ！」

素直な気持ちを言葉にした私に、何故かゼムドは激昂して立ち上がった。

だが、そんな彼を小さな声が引き止める。

「じいじー、おねえちゃん！ けんかだめ！」

「む……起こしてもうたか。すまぬ」

「ごめんなさい」

シーリアはいつの間にか目を覚まし、寝袋にくるまって転がって移動し、私とゼムドの間に割って入っていた。そんな彼女を私は自分の方に引き寄せて、膝枕をする。

「ゼムド、貴方はディッシュとレティという人は知っているかしら？」

「……シーリアの父親と母親じゃ。何故知っておる」

「ぱぱとママ？」

うさんくさげにゼムドは私を見る。どうやら彼は本当に知らないらしい。

「二人が亡くなったのは誰から聞いたの？」

「村長からじゃ。事故と言っておった」

「迷宮で亡くなるのは事故と言えるのかしらね」

私はシーリアの頭をなるべく優しく撫でながら、驚いているゼムドを見て苦笑した。

「ゼムドのお陰で確信したわ。本当にこそそと面倒ね」

「……何が起こっているのかの？」

「ろくでもないことよ。貴方は何も知らなくていい。いえ、知らないことにしておいた方がいいわね。シーリアを守っていればいい。後は私がやる。簡単でしょう？」

「ふむ、それは簡単じゃの」

ゼムドは眠たそうにしているシーリアに優しい表情を向け、いかつい顔を綻ばせた。

「おねえちゃん……ぱばとままをしっているの？」

「ええ。優しくて私の次に強い、立派な人達だったのよ？」

冗談めかして私は彼女に笑いかける。

「ぱばとままに頼まれたの。シーリアを守って欲しいって」

「ぱばもままも……もうあえないって……」

「そうね。でも村のみんながいるわ」

泣きそうなシーリアに何を言っているのかわからず、諭すように彼女に語りかける。だが、彼女はうーっと唸り声を上げながら泣き、顔を私の膝に何度も擦り付けた。

「そんちよきらい。みんなきらい。じいじとおねえちゃんのほうがいい」

「なるほど……ね」

困ったような顔をしているゼムドを私は見る。彼もどうやら困惑しているようだ。

さて、どうしたものだろうか……私はいつの間にか太腿に頭を乗せて眠ってしまったシーリアを見つめながら、頭を悩ませていた。

外伝 四話 エルフの家族

二日目も多少雲行きは怪しかったものの、雪は降らなかったため目的地に向けて、順調に進むことが出来ていた。予定では三日目に到着することになっている。

アルカイン山脈を登り、目的の場所に近付くにつれて、私は精霊の異常を強く感じるようになっていた。自然のものが強引に歪まされているような……そんな気配があるのだ。

（これは、間違いなさそうね）

野営の準備を整えた後のテントの中で私はそう考え、シリアのお守りと同じ効果を持たせてあるイヤリングに手を触れる。

今日の行軍では魔物に何度か襲われたのだが、魔物達の様子も何処かおかしかった。

冬で餌が少ないというのもあるだろうが、欠片も理性を感じさせないような……。

特に雪を媒体に実体化していた下級精霊は特に影響が顕著に出ており、通常では滅多に戦闘にはならないはずの氷の下級精霊が問答無用で襲いかかってくるなど、歪みと異変を感じさせる出来事が何度も起こっていた。

「おねえちゃん、どうしたのー？」

「ん？ なんでもないわ」

先日はゼムドと眠っていたシーリアは、今日は私のテントで休んでいた。

シーリアが私がいいと我俣を言ったのである。

ゼムドも私が良ければ頼むと頭を下げたため、私が彼女の面倒を見ることになっていた。

私も子供の扱いはよくわからないため困ったのだけれど……。

夕食を終えたシーリアは私の方を何か言いたげに、ちらちらと見てくる。

「シーリア、何かしら？」

「おねーちゃん、かつこうよかった。えっと、えっと……おっきいいぬ！」

にこにこ笑いながら両手を広げて大きさを表そうとしていた。彼女の言う大きい犬、というのは昼に襲ってきたアイスハウンドのことだろう。

背の低いゼムドと同じくらいの体高を持つ巨大な白い毛並みの……学者の分類上は犬だと言われている……巨体に似合わない俊敏な動きと下級の精霊魔法を使う強敵だ。

相手が一匹だったのは都合が良かった。足場の悪い雪山では戦い
難い相手だ。数匹で現れれば、私も本気を出さざるを得なかったか
もしれない。

私達は剣士の二人と魔法を使えるジェイドが囃となって、注意を
引き、身軽な私が攻撃するという分担で戦った。

アイスハウンドとは長時間牽制しあったが、結局、私は相手の身
体に飛び乗り、魔法の込められている剣で相手の頭を貫くことに成
功したのである。

他にも様々な魔物が現れていたが、彼女に一番印象を残したのが
その戦いだったのかもしれない。私は彼女の言いたいことを理解す
ると彼女に答えた。

「大したことはない。貴女もそのうち倒せるようになるわ」

「ほんとっ?」

「当然よ。貴方は犬ではなく、賢くて誇り高い狼なのだから。自信
を持ちなさい」

「うん!」

私は笑顔を心がけて彼女の顔をのぞき込み、頭を撫でる。

そのまま嬉しそうに抱きついてきたシーリアを膝の上に乗せて抱
え、私は彼女を今後どうするかを考えていた。

シーリアを助けること自体はそこまで私にとっては難しいことでは
ない。けれど、もし予測が正しければ……村に彼女を戻すことは
論外だ。

ゼムドの組織もおそらく同様。

しかし、明るく素直なシーリアを天涯孤独にしてしまうのは、彼女の両親の遺志に反することになるのではないだろうか。

私自身、利発で私を怖がらないこの少女は気に入っているし、楽しく生きて欲しい。

「ねえ、シーリア？」

「んー？」

本人の意思も聞くべきかもしれないと私は考え、楽しそうに足をばたばた動かしている上機嫌そうなシーリアを見下ろす。

「貴女は村に帰りたい？」

「や。だって、そんちょパパとママいじめてたんだもん。じいじといる」

「ふむ……」

急に不機嫌になった彼女の言葉の意味を私は考える。シーリアの両親が村長と争う理由……それは、シーリアが関わっているとしか考えられない。

村に子供はたくさんいた。その中でシーリアが選ばれた理由。無造作に選んでいる訳ではなく、彼女で無くては駄目だったとすれば……。

「おねえちゃん？」

「え、ああ、ごめんなさい。でも、ゼムドは長くはいられないわ」

「うん……じゃ、おねえちゃんは？」

「私？」

不安そうに見上げてくるシーリアを後ろからしっかりと抱きしめながら、私が引き取った場合のことを考えてみる……これは意外な提案だ。

結論はすぐに出た。無理。エルフ族には子供は少なかったし、子育ての経験とかはないからわからない。

「シーリアは私の家族になりたいの？」

「かぞく？」

エルフ族の家族は人間や獣人の家族……とは少し違うのかもしれない。私はそのことに思い当たったが、大きく違うことはないだろうと言葉を続ける。

「ずっと一緒に住んで、色んな事を学んだりすること……かしら」
「そうなんだ……かぞくなるなるー！」

シーリアは元気よく手を上げた。そんな簡単に決めてもいいのか

しらと、思わず苦笑してしまう。

「ゲイルスタッドを名乗るのは大変よ？」

「げいるすたつど？」

「家族になるのでしょうか。獣人族にはセカンドネームがないから…

…家族なら私の名前を名乗らないとね」

「おねえちゃんとおなじなまえ？」

一生懸命理解しようとしている風に見えるシーリアに私は頷く。

「そう。そして私の家族である以上、誇り高く優雅で、しかも最強でなくてはいけない」

「ほこりたかく、ゆうがで、さいきょー？」

難しい言葉だから理解できないのか、シーリアはきょとんとして私を見上げる。意味はわからなくても構わない。言葉を覚えておけばそのうちわかるだろうし。

私は彼女の頭を撫でながら、その通りと真剣さを込めて肯定する。

「貴女の両親のように。誇り高く……強い狼じゃないと私の家族にはなれないわ」

「パパとママみたいに？」

「そう。出来るかしら？」

シーリアはしばらく俯いて考え込んでいたが、

「うん！」

と、今までで一番良い笑顔で頷いていた。

「わかったわ。じゃあ、これからはシーリア・ゲイルスタッドと名乗りなさい」

「はい」

「それじゃ、そろそろ寝ましょうか」

私は一度身体の上からシーリアを退けて彼女の寝袋を取り出し、中に入るように促す。

私自身は何時でも魔物に対応出来るよう、使うのは毛布だけである。

シーリアと一緒に寝る準備をしながら、私はエルフの家族について思い出していた。

私達エルフは子供が少なく、子供のことは両親だけじゃなくて村のみなで見守り、身の守り方を身に付けさせ、知識を教えていく。私にとっては村の住人の全てが家族であり、教師であった。

（そうだ！ 私は子供の育て方なんてわからないし……わかる人に任せればいいんじゃないかしら。家族ってというのは助け合いだしね）

不意に名案を思い付き、私は手を小さく叩いた。

シーリアを任せるためには信用が出来、子供の扱いに長けていて彼女を立派に教育することが出来、しかも、色んな者から守ることが出来る人物じゃないといけない。

そんな都合のいい人物は私には一人しか思い浮かばなかった。

私の唯一の友人である彼女なら……シーリアを幸せに出来るに違いない。

私の友人、元冒険者で仲間だったマリア・アルティアはしょっちゅう無茶をするし、色んな相手と問題を起こすし……そのくせ冷静で常識人な私を説教するのが趣味みたいな困った人間だったけれど、結婚してからはなんだか人が変わったように穏やかになっていったから。

子供の躰は前にあったとき、きちんと出来ていたみたいだし……学問もそれなりに出来る。

信用できるし腕の方は彼女以上の剣士は探すほうが難しいくらいだろう。

（問題はどうかやって彼女を任せるかね。マリアは短気で怒りっぽいから）

私はみの虫みたいな格好で転がっているシーリアの隣に毛布を一枚引き、もう一枚を身体に掛けると、彼女の隣で横になる。

さすがに二日連続の登山で疲労が溜まっているのか、睡魔はすぐにやってきた。

外伝 五話 儀式

アルカイン山脈の奥、儀式が行われる場所……私達が向かっている目的地に近づくにつれ、気温は下がっていき、息も凍るような寒さになっていた。

足場の雪も氷のように固く、ちらちらと舞っている柔らかい雪がその上に降り積もっている。

気温が下がっているのは山を登っているからということだけが理由ではない。

氷の精霊達の暴走が原因である。

ここまで来ると生物は何も姿を見せず、実体化している狂った精霊だけが、まばらに生えている木々の間を歩き回っていた。

「ああくそっ！ 数が多過ぎるぜ。ラキシスさんも魔法使ってくださいよ！ 使えるんでしょ！ 頼みますよっ！」

「おい、エルフ！ 魔法を使えるなら何故全力をださないんだ」

「出し惜しみかね？」

次々に現れる私の腰くらいの大きさの、子供が作った泥人形のような形をした狂った氷の下級精霊を斬り倒しながら、魔法剣士であるジェイドも、若い剣士、グランも頭の硬そうな中年の剣士、セイ

ンも不満げにこちらを見る。

ゼムドだけは子供を背負っている為、そんな余裕も無いのか周囲を用心しながら、私達を援護するように棍を振っていた。

シーリアにはお守りがあるから、私達と離れて置けば大丈夫だとは説明したのだけど、彼が納得しなかったのだ。確かにゼムドの武器は叩き潰すから、憑代が形を失うと消えていく下級精霊相手なら有効ではあるのだけれど……シーリアの安全の方を優先して欲しいものである。

最も彼が戦いに参加しているのはシーリアが、

「わたしこわくないよ！　さいきょーだから！」

と、ゼムドを止めなかったのも原因なので、私も余り強くは言えない。

私は先頭に立って目的地の方に向かって歩きながら、正面から襲いかかってくる自分の受け持ちの敵を次々に剣で切り裂き、三人に言い返す。

「あら、貴方達と同じくらいには働いているつもりだけれど？」
「ぐっ……！」

私は可能な限り穏やかに微笑んで言った。

魔法を今、無駄に使うわけにはいかない。私の魔法は小物相手ではなく大物相手に使わなければならないのだから。

事実を彼等に伝え、丁重に断ったつもりだったけれど……何故かジェイドは泣きそうな顔になり、残る二人は怒りの表情を浮かべていた。

「貴方達の腕はこのくらいの相手に手間取る程度なの？」

不思議に思い、私はそう続ける。彼らの実力は低くはない。ゼムドも他の三人も一流とまでは言わないけれど、それに近い実力はある。

「貴様……！」

「やめておけ。グラン。彼女は我々より敵を倒している」

敵より私を攻撃してきそうなグランをセインが宥める。グランも彼の言葉を聞いて悔しそうに押し黙った。

「しかし、この精霊……かな？ こいつらの攻撃はいつまで続くんですかねっ！」

また一匹、ジェイドが氷の精霊を斬りながら悲鳴を上げるように叫ぶ。

「もう少しで目的地に到着するはず。私の予想が正しければ」
「ほんとですかい？」
「そうよね？」

後ろを振り向き、獣人族の無愛想な案内人に確認すると彼は頷いた。

「もうすぐ着く。前を見る。遠くに一本だけ枝が全て落とされた木が見えるだろう。あれが目印だ」

「あれかーってか、あの目印……よく雪とかで倒れないな」

自分達に襲いかかってくる精霊だけを私達は倒しながら、まばらに生えた背の低い木の隙間を歩き、雪山を登っていく。

目的地に付いたのは一時間後のことだった。

私は目的地に到着すると、ゼムドに耳打ちする。

ここからが本番だ。

「ゼムド。シリアを案内人に渡さないように。この『装置』を私が調べ終わるまでは」

「む……わかった」

そして、私は全員に休憩を提案する。獣人の案内人はすぐに儀式を始めるようにと慌てるように言ったが、ゼムドが私に同調し、ジエイドも私に賛成した。

残り二人は顔をしかめていたが、やはり疲れていたのだろう。少しだけ時間を置いて頷いた。

「だが……急がなくては精霊に襲われるのではないか？」

セインが辺りを見回しながら言ったが、私は首を横に振った。私は両耳に付けたイヤリングのうち、右耳の物を外すとそのイヤリングに魔力を通す。

「我が呼び掛けに答えよ氷の精霊『ヘルムート』」

イヤリングの宝石に仮住まいしてもらっていた氷の中位精霊『ヘルムート』を私は呼び出し、周囲を警戒するように命令する。

氷で出来た巨大な狼の姿を持つ中位の精霊は、吠えるような仕草をして、少し離れた場所に座り込んだ。

「なるほど。魔法か」

「一時間くらいは持つでしょう」

納得したようにセインが頷く。ジェイドは微妙な表情をしていたし、グランは私の魔法を見て、怒りの表情を浮かべたが……怒る理由が分からないので、どうしようもない。

二十分ほど休憩を取り、私はその間に儀式の場所……魔法の装置を注意深く調べていく。

事前に調べていた魔法の術式と照らし合わせ、私は出来れば外れていて欲しかった推測が殆ど当たっていることを確信していた。

魔法の装置を調べている私を獣人の案内人は嫌がるように見ていたが、時間が経つにつれ、彼は徐々に焦りの表情を見せてくる。

「どうしたのかしら？」

「わ、我々の神聖な場所を荒らさないで頂きたい！」

「ふふ……どうして？」

怯える彼の様子がおかしくて私は思わず笑った。

他の冒険者達は何事かと私に注目する。

私はゼムドの隣で毛布を引いて座っているシーリアに、もう少し座っているようにと言い、剣の柄に手を掛ける。

「獣人は魔力を持たない種族だと思っていたのだけれど……そうではないみたいね」

「……！」

目に見えて、獣人の案内人が動揺する。

「どんな言い訳を考えていたのかは知らないけれど、私にまやかすは通じない」

「ラキシス殿、どうということじゃ？」

ゼムドはわけがわからないと言った雰囲気で、霜の降りた髭を不快そうに触りながら、首を傾げる。私は他の三人に注意を払いながら、目の前の案内人を見つめる。

「この魔法の『装置』はね。三つの巨大な術式で成り立っているの。一つは精霊を封印すること。一つは魔力を吸収し、封印を維持すること」

私は剣を抜き、案内人に突き付ける。ゼムドはシーリアを庇うように立ち、他の三人は状況がわからないながらも私に武器を向けた。

「最後の一つの術式は……稼働した者の魔力を、普通の術者なら制御できない程に増幅させるものよ。この術式を発動させれば、術者であるシーリアは魔力を制御できずに暴走して……彼女は魔力だけではなく、全てを封印を維持する装置に吸収される……そうね……恐らく死体も残さず完全に消滅することになるはず」

「なんじゃと！ それではまるで生贄ではないか！ どういうことじゃ。ガルフ殿！」

私に剣を突きつけられて、案内人……ガルフは怯えて後ろに後ずさり、雪に足を取られて尻餅を付いた。

「そ、それは！　だが、我々がこれをしなくてはっ！」

「氷の上位精霊『イルファータ』が復活するでしょう」

「なぜそこまで……ゼムド！　お前は知って派遣されたんじゃないのかっ！　この女を排除しろっ！」

慌ててガルフは叫ぶが、ゼムドは困惑したように動かなかった。
私はゼムドも疑っていたのだけれど……本当に知らなかったらしい。

「どういうことじゃ……組織は知って……？」

「カイルルと取引でもしてるんでしょう。ここの精霊に生贄を渡して暴走させない代わりに、ゼムドの組織とカイルルが儀式のために必要な資金を出す。後は……アルカイン山脈周辺の獣人達の集落に対する自治権が絡んでる……というところかしら」

「そのために、幼子を生贄にするというのかっ！」

ゼムドは今までにない怒気を発し、鉄の棍の柄で地面を思い切り叩く。案内人の中年の獣人は慌てながらも立ち上がって私を怒鳴りつけた。

「封印し続けなければこの辺り一帯の集落が滅ぶんだっ！　城塞都

市カイルル周辺も冷害は免れない。どれだけの死者が出るか……犠牲は仕方がないんだ……」

私は彼の弁明を聞き流しながら、呼び出した中位精霊にシーリアを守らせる。

「つまらない男ね。シーリアはこんな風になっちゃ駄目よ。狼は誇り高くて優雅でなくてはならないのだから」

ゼムドはシーリアを守るように立ち、他の三人は私に困惑の視線を向けていた。

彼等の視線を私は気にせず、ゆっくりシーリアに近づくと屈んで彼女の頭を撫でる。シーリアは気持ちがいいのか、くすぐったそうに笑った。

子供らしい無邪気な笑い。彼女に触れていると私の心もなんだか暖かくなる。

こんな子供を大人の都合の犠牲にするなど、とんでもないことだ。

私はシーリアを抱えて立ち上がるとゼムドの方を向き、彼女をゼムドに渡す。

「ゼムド。貴方は私に何かあればカイルルの東……クルト村に住む、マリアという女性の所にシーリアを連れて行きなさい。私の親友の彼女ならシーリアを幸せに出来る」

「お主……何を考えておる？」

怪訝そうな顔でゼムドは私を見た。何をする気か？
そんなこと、わかりきっているでしょうに。

「『イルファータ』の封印を解き、精霊の暴走を止める。元凶を潰すのよ」

「しょ、正気か！ 失敗したら……滅ぶぞ！ カイラルも！」
「黙りなさい」

睨み付けて私はガルフを黙らせ、ゼムドへの説明を続ける。

「シーリアの首に掛かっている袋には、そこにいる氷の中位精霊が住んでいるわ。危ないときには呼びかけなさい。ゼムドの命令を聞くように頼んであるから」

「相手は伝説に残るような相手じゃろう……お主本気か？」

「当たり前よ。貴方達は下山しなさい。一時間後から……作業を開始する」

全員に向けて私は宣言し、カイラルで準備した魔術の術式を弄るための道具の準備を始める。そんな私に真面目そうな中年の剣士、セインは剣を向けた。

「止めるんだ。君はカイラルを滅ぼすつもりか？ グラン！ 氷の中位精霊を牽制しろ。ジェイド！ ゼムド！ 君達もこんな暴挙に

は加担するな！」

「暴挙？ 面白いことを言うのね」

ゼムドは私とやり合う気はないのだろう。シーリアを担ぎ、守るように立ったまま動かない。

それでいい。私も無益な殺生は好まないから。

「貴方を直ぐに殺してもいいのだけれど……まだ時間には余裕があるし、昔話をしましょう。ダグラスという男の話よ」

「大魔術師ダグラスのことか？」

私に剣を向けながらも、話を聞く気にはなったのかセインが答える。

「彼は学院に論文を残していたわ。題名は『日用品に魔力石を組み込むことにより、利便性を高めることが出来る可能性について』。内容はやる気のないお粗末な物よ」

「……何が言いたい」

恐らく彼はわかっているのだろう。堅そうだけど頭は悪く無さそうだし。

「私の推測も入るけれど、もし本当に精霊使いが氷の上位精霊を暴走させたのだとしたら、ここにあるような巨大な術式を作れるはず

がないのよ。これは精霊を呼び出す前に準備されたもの。つまり……」

私は剣先を魔法の装置のある方角に向ける。

「なんらかの実験が失敗した場合に、即座に封印出来るようにしたものなの。これだけの規模と精度の術式なら、国が関わっていないということは無いでしょう。そして、実験は見事失敗。哀れ関係の無い学生は生贄にされちゃって英雄になったのよ。どうかしら。この予想は。暴拳というのはカイルルのやり方でしょう?」
「だが、無関係な人間が巻き込まれることは変わらない」

彼は私の説明を聞いても剣を収めなかった。グランも私に斬り掛かれるように身構えている……ジエイドは中立……か。彼には悪いけれど敵対したら魔法を使える彼には真っ先に死んでもらうことになる。

「彼女には悪いが儀式は進めさせてもらう」
「ふふ……貴方はそういうと思っていたわ。カイルルのスパイの貴方なら」

予想通り。ゼムドが組織から派遣されているように……国の方から確実に儀式を進めるために、冒険者を装って監視をしていると思っていた。

誰がそうなのかはわからなかったが、恐らくセインがそうなのだ

ろう。

私は自分の推理の怖いぐらいの完璧さに酔いそうになりながらも、止めを指すべく二人に剣を持っていない方の指をびしっと向けた

「セイン、グラン。冒険者は正義の味方なのよ。子供の夢にならないと。カイルルの犬になるなんて冒険者の風上にも置けないわね」

「は……？ 君は何を言っているんだ？」

セインは本当に困ったような表情で私を見た。正体がばれたからに違いない。

私は余裕を見せるように微笑み、話を続けようとして……急に怒り出したセインに阻まれた。

「大体さつきから黙って聞いていたら、君の言ってるのは滅茶苦茶だっ！ 大体、カイルルが本気で介入しているとしたら、冒険者なんて雇わず、自分達の子飼の部下だけでやるはずじゃないか！ 私もグランもただの冒険者だ！」

空気が静まり返る。何を言い訳を……と思いつつ、私は話を聞いていた全員を見回す。

「……………あれ？」

何故か全員が私に呆れたような白い目を向けていた。
自信満々で向けていた指を、宙にさまよわせ……私はセインの言葉
を咀嚼する。

カイラルは独自に騎士を持っている。
そういえば、自分達だけで何とでも出来るような……。

(……あれ、どこで推理を間違えたんだろう)

確かに彼の言うとおりかもしれない。
私は指を引っ込めて、口元に手を当て……咳払いをした。

誰も一言も喋らない。う……どうしょ。いや、か、構わない！
私はもう一度セインの方にびしっと指を突き付ける。

853

「セイン、グラン！ 冒険者は正義の味方なの。子供を犠牲にする
ような暴挙は見過ごせないわ。どうしても私の邪魔をするなら……
死んでもらう。幸い、証拠は残らないし」

「な！ なんなんだ……この無茶苦茶なエルフはっ！」

「失敬ね。理性的にちゃんと考えているわ」

「どこがだっ！」

セインが狼狽えるように呻く。私は頑張ってマリアから人間の常識
を学んだのだ。

人間の知識は完璧だし、大人らしく、しっかりと弁えている。

「ちゃんとシールアに残酷なのを見せないように魔法で綺麗に殺すわよ。剣で斬り殺してしまうと子供には刺激が強いらしいから」
「どこを気にしているんだ！ そこじゃない！ 君は大勢が死んでもいいのかね！」

どうやら、グランはともかくセインは私とやり合う気はないようだ。殺気がない。

ただ、私のやることを止めたいだけのようだ。少し安心した。

そして、彼の問いに答える。

「まずは目先の子供が優先よ。後のことは後で考えなさい。何となるわよ。貴方は本当に細かいことを気にするのね」

「……っ！ ……………っ！」

セインが剣を落として怒りの表情を浮かべながら崩れ落ち、何度も悔しそうに拳で地面を叩いている。グランも氷の中位精霊と睨み合っていたが……諦めたように剣を収めた。賢明だ。

「セイン。小さいことをちまちま気にしていると、老け顔が更に老けるわよ？」

「余計なお世話だ！ 君は上位精霊を何とか出来るのかね！」

「そう……可能性は半々といったところかしら。余裕ね」

「狂っている……」

失礼な……とは思ったが、口には出さなかった。

「後は任せなさい。必ず成功させてみせるわ。シーリア……遠くから見ているさい。ラキシス・ゲイルスタッドの実力を」

「おねえちゃんかつこいいー」

「……本当にこのエルフの親友は大丈夫なのかの……」

私は剣を納めるとシーリアに微笑みかけた。彼女は喜んでくれたが、ゼムドは呆れるような表情のまま小さく呟いた。どこがおかしかっただろうか。

何にせよ……セインが戦意を完全に失ったようなので、私は魔術の構成を弄るための準備を再開する。がつくりと力尽きた彼にグランは心配するような表情で駆け寄っていた。

「いいんですか？ あの女放っておいて」

「あいつはエルフだ。それなのに剣技であの強さだぞ。魔法は間違いないくそれ以上……化け物だ。我々では勝てん。どうすることも出来ない……成功を祈るしかない……」

……化け物……。

これまで色々言われてきたけど、酷い言われようである。

私は周囲の無理解には負けない。そう心に誓いながら、準備を続けていた。

外伝 六話 解放

他の全員を下山させると私は、魔法の装置の術式を改造するための準備に取り掛かる。

シーリアには中位精霊の加護がある。雪崩などに巻き込まれる危険はないだろう。

（う……なにこの面倒臭い術式は……）

格好をつけたはいいが魔法の術式の解析に、私は苦戦していた。

三つの術式は純度の高い魔力石を加工した物で別々に作られているのだが、それぞれが連動しているために、どれか一つを弄ると相互に影響が出そうな気がして、どうなるか予測がつかなかったのである。

簡易な術式を作るための魔力石を液体にしたもの……術水も持ってきていたが、この術式に付け加えて使うことは出来なさそうだった。

この装置を維持したまま上位精霊『イルファータ』の封印を解くことは難しい。ならば……私は巨大な魔法の装置になっている術式を眺めながらポンと一つ手を叩いた。

（別にこの装置を残す必要ないよね）

私は封印を術式に従って解くことを諦め……いや、効率的に封印を解くことに決め、距離を取って魔力を三つの術式のうち、魔力を吸収し、封印を維持している部分を術水で囲っていく。

今作っているのは元々の術式を弄るものではなく、これから使う魔法の範囲を壊したい部分だけに限定するための術式である。

私はそれを書き終わると封印を維持している術式に対して剣を向けて集中する。

「『光の理』『火の理』『風の理』……光爆」

直接この術式に魔法を打ち込むと魔力が吸収され、魔法が発動しない。だから、術の影響範囲を小さくすることにより威力を上げ、少し離れた場所からの爆風で物理的に魔力石を吹き飛ばし、術式を潰す。

予想通りに私は増幅する術式と封印をするための術式を綺麗に残して成功させることができた。そして、封印を維持するための結果が破壊されたということは……。

「……アアアアアアアアッ！」

アルカイン山脈全体がこれから現れる天災を司る者に怯えるかの

ように震え、轟音と怒りの色の混じった鼓膜が破れそうなほど大きな咆哮が、何も無いところから響く。

そして徐々に雪山から雪が消えていき、私の前方に集まって固まり一匹の巨大な獣の姿を形作っていく。

私は冷静にその光景を受け止め、ゆつくりと実体化しようとしている氷の上位精霊『イルファータ』の姿を眺めていた。

氷で出来た狼の姿をした中位精霊『ヘルムート』。『イルファータ』の姿はそれに似ていた。ただし、大きさと感じる圧力は桁が違う。まさに山のような……。

「神と並ぶ……そう言われるのもわかるわね」

この季節では信じられない光景が目の前に広がる。周囲の白銀の風景が消え、赤茶けた山肌がむき出しになっている。

冬のアルカイン山脈の深い雪山の……目に見える範囲の全て雪が、ただ一点に集まっているのだ。そして集まった雪の全てが『イルファータ』の力へと変換されていく。

私が見た中で最も巨大な生物……大きな館くらいの大ささを持つていたドラゴンよりも目の前の神々しささえ感じる狼は更に大きい。ドラゴンが大きな館だとすれば、まるで巨城だ。

セインに勝率は五割と言ったのは言い過ぎだったかもしれない。一割といったところか。だけれど……。

「子供に良い所見せなきゃね」

私は笑う。恐怖に押しつぶされないように。

勝利条件は相手を倒すことじゃない。原因はわからないが無理矢理アルカイン山脈に縛り付けられて狂っている『イルファータ』があるべき場所に返せばそれでいい。

問題は私の力でそれが出来るかだ。

「氷の精霊『ヘルムート』。呼び出しに答えよ」

私はここに来る前に用意していた小さな宝石を使い、狼の姿をした三匹の中位精霊を召喚する。私の魔力も魔法の使いすぎで底が見えつつある。

さて、ここからは賭けだ。彼らを媒体として、『イルファータ』に語りかける。

「『イルファータ』よ。私は貴方を解放しに来た！」

だが、山のような巨大な狼は何も反応を起こさない。まだ動くことはできないのか低い声で唸るだけだ。赤く光る瞳には憎悪の色しか見つからない。

そして、語りかけるための媒体にした狼が、『イルファータ』の一睨みで身体が溶けてその姿が消えていく。

私は拳を握り締め、次の狼を言葉を届けるために放った。
寒いのに手には汗をかいている。

「『イルファータ』私に力を貸しなさいっ！」

自らを解き放つのに協力させるために、私は叫び続ける。
だが、それでも動かない。二匹目も簡単に砕け散った。

思った以上に相手の力が強く、声が届かない。

その間にも『イルファータ』の力はさらに強まり、彼が発する力
によるアルカイン山脈全体の振動も強まっていく。ちらちらと振る
程度だった雪も身体を打ち付けるような風を伴う吹雪へと変わり、
立っているだけで体力が奪われていく。

「まずいわね……」

思わず呟いてしまう。私の精霊使いとしての技量が足りていない
のか、この精霊を呼び出した術者が相当の実力を持っていたのか。

おかしい……私でも手も足も出ない上位精霊を、準備を揃え、条
件を整えていたにせよ呼び出せる術者がいるなら、そもそも封印な
どせずに、失敗した時点で解放しているはずだ。

わざわざカイルルを危険にする理由がない。

そんなとき、私の目に自分が潰した魔法装置が目に入った。

この術式は互いに連動しているものの、術式一つ一つは異なるものだ。

ああ……そういうことか……。

私は薄く微笑んだ。

もし、私が失敗すれば完全に実体化した『イルファータ』はその身体に相応しい暴走を始め、氷の嵐を地域一帯に吹き散らすだろう。今、下山を始めているシーリアもまず助からない。

私は魔力を増幅させる術式の中央に足を踏み入れた。

「さあ……『イルファータ』……勝負よ」

目を閉じ、精神を集中していく。

尽きかけているはずの私の魔力が増大していき、私の身体の中を走り回る。

今、私がやろうとしていることが、もしかしたら実験の目的だったのかもしれない。

暴走を招くほどの魔力の増幅による、上位精霊の召喚が。その先にあるのは……国による精霊の軍事利用だろうか。

ただの術者では制御できない。『イルファータ』を呼び出した術者も恐らくは失敗している。私なら……私ならどうか？

暴れ狂う魔力の波を必死に制御し、三匹目を自分の近くまで呼び寄せる。

「さて、古の術者と私……どちらが勝っているのかしらね」

私の指先から真つ赤な血が垂れる。指先だけではない。

目からも血が流れているのを感じるし、靴の中も既に血溜まりになっっているに違いない。

身体の内こちの血管から血が出ている。だが、痛みは感じない。魔力に酔っているからだろうか。

「『ヘルムート』……私と『イルファータ』を繋ぎなさい」

増幅した魔力を最後の狼に注ぎ込む。

「『イルファータ』……貴方呼び出した術者はもういない。私が貴方の主よ！」

恐らく精霊を呼び出した術者もこの術式を利用し……そして、召喚に成功したものの魔力を制御できずに死んでしまい、精霊は狂った……いや、命令が無いために本能の赴くまま、天災を引き起こしていたのかもしれない。

ならば、召喚主以上の魔力で強引に『イルファータ』への支配権を奪い、命令を与えればいい。

三匹目の中位精霊も砕け散り、私は術式から出て地面に膝を付く。全身血だらけになってしまったけど、気絶もせずになんとか生き残っていた。

最も、目の前の山のような大きさの狼に私の命令が届いていなければ、踏まれて終わりなんだけれど……。

「グルアアアアアアアアアツ！」

『イルファータ』が空を向き、咆哮を上げる。
私は覚悟を決めて、上位精霊を見つめた。

彼の瞳の色を見て、私は勝利を確信する。

「グル……チイサキモノ……メイレイヲ……」

信じられないくらいに巨大な狼は私を踏まないように座り込み、大きな顔を近づけた。

それだけで凍るような寒さを感じる。

だが、何とかなった。シーリアも助けることができた。
私は嬉しくて笑っていた。

「貴方の居るべき場所に帰りなさい。長い間お疲れ様」
「カンシャ……スル……チイサキモノ……レイ……ダ……」

『イルファータ』から光る物が飛び出し、私の手にそれが落ちる。

「石……いや、宝石？」

青い握れるくらいの小さな石。私にも何の石かはわからない。
だが、考えている暇はなかった。

「ちよつと……『イルファータ』……？」

アルカイン山脈の目に見える周辺一帯の雪を全て集めて形どった
『イルファータ』が精霊の住む世界に帰ってしまえば、残された雪
はどうなるか。

『イルファータ』の見た目以上に雪は集められている。

精霊の気配が消えると、地鳴りと共に本来あるべき雪の質量へと
戻ろうとするように、巨大な狼の身体がゆっくりと膨らんでいく。
凄まじい勢いで。

私は残された左耳のイヤリングを取り外し、最後の力を振り絞っ
て中位精霊を呼び出すと、叫ぶように命令した。

「『ヘルムート』……私を雪崩から守りなさいっ！」

荷物を抱え、疲労しきった身体に鞭打ち、痛む足を我慢して私は走り出した。

生き延びるために……ちょっと涙目になりながら。

外伝 七話 その後

大量に襲いかかってくる雪は濁流のような勢いで、氷の中位精霊である『ヘルムート』でもその勢いを押し留めることは無理かもしれないと、私は逃げながら考えていた。

魔力も最早無く、動くことは出来るものの傷は痛むし疲労も濃い。まずいとは思いつつも、私は諦めることなく必死に山を駆け下りる。

結局、私は何とか雪崩からは逃げ延びた。

それが可能だったのは、周囲の雪が『イルファータ』に集められたため、逃げる場所には雪が無くて走りやすかったこと、そして『イルファータ』が私にくれた青い石の力のお陰である。

上位精霊のくれた青い石は私が危険に陥ると急に輝きだした。

すると目的地に到着するまで私達を襲っていた、狂った下級精霊達の様子が変化し、私を助ける為に集まり、雪崩の勢いを削いでくれたのである。

そして、雪崩からなんとか生き延びた私を待っていたのは……。

「まずいわね……ここは何処なのかしら」

半分以上の荷物を雪崩を失い、雪山の中、帰り道もわからないという現実であった。

私は困惑して思わず空を見る。透き通るような青空……天気だけは良かった……。

「ま、まあなんとかなるわよね。登ってきたんだし、真っ直ぐ降りればいいのよ！」

無理をしたせいか魔力は三日間回復せず、迷いに迷い……私が山を降り、来た時とは違う獣人達の集落に付いたのは二週間後のことであつた。

集落が見えたとき私はふらふらになりながら、次はちゃんと帰り道のことも考えよう……そう心に誓っていた。

何とか無事に城塞都市カイルルに戻り荷物を置いて身体を清めると、私はすぐに仕事の報酬を受け取るため、冒険者ギルドへと向かった。

喧騒に溢れていた施設が一瞬で静まり、私に視線が集中する……が、何時ものことなので気にせずカウンターに向かう。

そこには、依頼を受ける前にいた若い役人ではなく、何度かやり取りをしたことがある中年の役人が書類の処理を行いながら、依頼の受付も行っていた。

中年の役人は私に気付くと驚きで目を見開く。

「うええっ！ やつとくたばった……いや、お亡くなりになられたと……」

「危なかったけど生き延びたわ。ということは、報告は受けているわね？」

「は、はい。それで『イルファータ』は？」

愛想笑いを浮かべ、揉み手しながら中年の男は私を見上げてくる。難しい依頼だ。失敗していたら聞きにくいとでも思っているのかもしれない。

失敗だなんて……私がギルドの評判をしたことがあるだろうか。いやない。

私は余計な心配をしている職員に微笑み、報告をする。

「ちゃんと解放したわ。消滅しているし二度と暴れることはない」「本当だったのか……たまげたな。はあ……助かったぜ」

上位精霊の存在にギルドはそれほど困っていたのだろうか。何だか彼等を何時の間にか助けていたらしい。

私は護衛分の依頼と、シーリアの両親の依頼の報酬を分けて受け取り、鞆に直してカウンターを見ると、ふとあることに気が付いた。

「そっいえば、前にいた若い役人がいないわね」

そう、私に依頼を説明してくれた若い役人……彼の姿がギルドから消えていたのだ。

依頼の説明も丁寧でよかったし、これからも臍肩にしてあげようと思っていたのに。

それを聞いた中年の役人はふう……と、何故か大きな溜息を吐く。

「あいつは俺達のために……遠いところにいつちまったんだ……遠いところにな」

「……？」

そして、中年の役人は私から視線を外し、目頭をそっと抑えた後、遠い目で前に若い役人が座っていた椅子を眺めていた。

他の役人も仕事の手を止めて、似たような視線を向けている。

彼に何があつたのだろう。事情はわからないけれど……。

「そう。残念ね……また、来るわ」

ギルドに大きな関わりを持たない私に言えるのはそれだけだ。

踵を返すと私は冒険者ギルドを出た。私にはまだやることがある。

護衛の報酬だけでは税金に足りない。

シীরリアの両親のお金はシীরリアのために使うべきだろう。

「面倒だけど、ダンジョンに潜ろつかしらね」

報酬は少ないし、失った荷物のことを考えれば赤字だった。だけど、私は爽快な気分で家路に着いていた。

私の実力に相応しい、満足する仕事が出来たと思いながら。

依頼を終えて一ヶ月経った。

ダンジョンに籠ってお金を稼いだ私は無事に税金を納め、のんびりとベッドに寝転びながら本を読む生活を、久しぶりに満喫していた。

寝間着のまま寝転がって甘い果物を齧りながら流行りの恋愛小説を読む。

人間の恋愛は面白い。

私には感情のままに愛するとかはわからないけれど、人は様々な理由で恋愛し、結婚し、子供を産んでいく。人間だけではない、寿命の短い種族は皆そう。

憧れるというわけではないけれど、私も一度は経験してみたい。なんだか、幸せっぽいし……って……。

（あ、こら、何で主人公そっちの子に浮気するの！ ないない！

ありえない！)

思わず私は本を思いっきり投げ捨てる。本は壁に当たって、ばさつと落ちた。

そして、床に散らばった大量の本に紛れてしまう。

「しまった。どこ行っただかな……」

投げてしまったものの先が気になるため、渋々ベッドから立ち上がり、無数の本の海から引き上げようとする。

その時、家の扉を乱暴にノックをする音が響いた。

「ん……？」

私は自分の部屋で首を傾げる。家の扉を開ける音がしたからだ。勿論鍵は占めているし、私の家に盗みに入る命知らずがいるとも思えない。

私のいる二階へと軽快な音を立てて階段を登る音が聞こえる。

私はいつでも、戦えるようにベッドに座りながらも精神を集中させた。

そしてついに、部屋のドアがばしっ！ と開けられる。

「久しぶりね。ラキシス」

家の中に入ってきたのは知っている女性。彼女なら確かにこの家の鍵を持っている。何故なら、この家は彼女と二人で購入した家だから。

本来ならこの街にいるはずのない女性。長い髪を後ろに縛り、簡易な旅装に剣だけを腰に差している……穏やかそうな雰囲気の下三十代くらいの……久しぶりに会う人間唯一の私の友人。

「貴女、服は着替えなさいと……部屋は何時も片付けなさいと言わなかったかしら？」

「マリア……どうしてここに……」

マリアは微笑んでいた。だが、目は笑っていなかった。

私に説教するときの表情だ。寒くもないのに……身体が震える。

引退した今でも彼女の怒りに身体が反応するのは癖になっているからだろうか。

「貴女、シーリアにつて……高そうな宝石を送って着たわね？」

「は、はい……彼女の両親のお金だったので……そ、それが何かっ！」

彼女はにこやかに微笑みながら、本をかき分け、ゆっくりと私に近付く。

「そう……彼女の両親の……命懸けでシーリアを助けたのは褒めてあげましょう。私だってそう思うしね。そこは責めない……本当に偉いわ」

「うん、そ、そうよね？」

助けたことに怒っているわけではないらしい。

だけど、彼女の表情からは怒りが消えていない。一体何に怒っているのだろう。

「だけどね……貴女は自分は家族だとシーリアに言って置きながら、最初から最後まで私に育てさせようと思っていたわね？ 宝石だけ送って」

「あう……で、でもね！ 私ってほら、子育てなんて出来ないしっ！」

「そんなことは知っているわ……私が怒っているのは」

マリアの笑みが消え、無表情になる。

自分の血の気が引いて行くのが聞こえた気がした。

「自分の言葉の重さに気付かずに、子供を放置する馬鹿さ加減に怒っているの」

「うつうつう……でも……」

「シーリアはずっと不安そうに貴女を待っていたのよ」

私はマリアの家にいた方がシーリアも安心だと思っていたのだけれど、どうやら違っらしい。それだけ、私を慕ってくれているということ？

家族か……。

「う……それでシーリアは何処に？」

「連れてきているわ」

「ちゃんと会って話をするわ。それで私には無理って納得してもら
う」

「貴女ね……」

そのことで怒られるなら仕方無い。

ちゃんと話をして、私には育てられないから納得してもらって……。

マリアは何故か頭が痛んでいるように抑えながら話を続ける。

「まあいいわ。そのこともまとめて話せばいいし……それに、それだけじゃないのよ」

「え？」

まだあるらしい。他に彼女を怒らせるようなことを私はしただろうか。

全く覚えがないのだけれど……。

「貴女には本当に言いたいことが沢山あるのよ。隣国、エルクルスの事件で国際問題起こしそうになったのとか……他にも貴女が問題を起こすたびに私に連絡が……」

「え、え！ いや……私は真面目に働いているわ！ 誤解よ！」

必死に弁解する。私はちゃんと事件を解決しているし、何も問題を起こしていない。

多少の犠牲は難事件の解決には付き物だし、犠牲に身分は関係ないし……。

そ、そっだ！

「シリア連れて来ているんでしょう？ ここで私達の喧嘩を見せるのは良くないわ」

「信頼できる監視に預けているわ。今日は貴女と久しぶりにゆっくりと話したかったから」

お見通しらしい。私は逃げ道を探すか、入り口は塞がれている。マリアはベッドに座る私の肩に手を置いて微笑む。

「座りなさい」

「座ってますっ！ って痛い痛い！」

「ラキシス。人の話を聞くとときはどうしろって教えたかしら？」

肩にマリアの指が食い込む。どういう力をしているのだろう。肩が砕けそうだ。

結婚してから上品で穏やかになったと思っていたけど、私の勘違いだったらしい。

彼女の荒っぱさは何も変わっていない。目付きも迫力も……。

「誰がベッドに座って聞けって言った？ ……座るのは床だ」
「……はい」

表情を消し、現役時代の威圧するような柄の悪い口調でマリアは私に命令し、長い……長い説教を始めた。力いっぱい耳を引っ張らないあたり、ひょっとしたら丸くなったのかもしれない。

だけど、私はマリアの性格は理解している。この長い説教が終われば、

「それで、今回の冒険はどうだったの？」

と、いつものように楽しそうに話を聞いてくれるのだろう。

彼女もまた、胸の踊るような冒険が大好きなはずなのだから。

私はそんなことを考え、痺れる足に涙目になりながら、五年ぶりになる彼女の耳の痛くなる説教を聴き続けていた。

外伝 エピローグ

「ま……そういうことがあってね。クルス達が連れて来るまで心配していたの」

ちびちびと酒を飲みながら、マリアはシールリアがケイトの家にしばらく滞在していた理由を私に説明してくれた。あのエルフは私の想像を遥かに超えているようだ。

案外、冒険者としては彼女が普通なのかもしれないけれど。

しかし、いくらシールリアが望んだと言っても、あのエルフに任せるのはどうだろう。

「でも、マリア。シールリアが危ないと思わなかった？」

「思ったわ。だから手紙を何度も送ったし、子育ての相談には乗っていたの。だけど……クルス、貴女も知っているでしょ。あの子の手紙」

私は頷く。ラキシスの手紙は字が丸っこくて読みにくい上、内容は大袈裟かつ、普段の落ち着いているように見えるラキシスの印象とは全く違う大胆な内容で、初めて会ったときには手紙とのギャップに目を疑ったくらいに酷いものである。

ケイトに対する手紙だけは、真面目に書いていたようだけど……。

「何度も後悔したんだけど、明るい娘になってくれたみたいね」

「あいつ、嫌い」

お酒で少しだけ頬を赤くしたマリアが私の悪態を聞いてくすくすと笑う。

「クルスにもようやく同性の喧嘩友達が出来たみたいだし？」

「あんまり嬉しくない」

クルト村に来るまで何かと突っかかってきた狼娘を思い出し、果実水を飲む手を思わず止めて苦笑いする。それを見てマイルスは笑い、ケイトは困ったように仲裁に入るのだ。

まあ、シーリアはあれで細かいことを気にする方だから、本当に困ることはしないように気を配っているんだろうけど。

それでもケイトはあいつに甘いと思う。ずるい。

「好敵手がいるというのはいいものよ。それが戦いであれ、恋愛であれ」

「そうかな」

「そうよ。私の弟子とラキシスの娘、どちらが勝つのかしらね。あの子の手紙には、いつもの娘自慢と一緒にクルスよりうちの娘の方

が女らしいって書いてたけど」
「あの女……」

本当に大人げのないエルフだと思う。確かに胸とかは向こうの方があるけれど、戦闘に役立つわけではないし、年齢差もある。シーリアが年増なだけ。

きつと直ぐに追いつける……多分。

そんな風に悩んでいると、マリアは一度木製のコップをテーブルに置き、少しだけ真剣な表情を私に向けた。

「シーリアとラキシスはどんな感じだった？」

シーリアと話をしても、まだ、マリアは不安だったのかもしれない。

子供の育て親というのは大事なものだし……私もお義父さんとの関係があるから、そういうのはなんとなく、想像できる。

「母親かどうかはともかく、仲は良さそう……姉妹？ 違うかな。わからない」

「エルフはいつまでも若いし、感覚は違うのかもしれないわね」
「でも、ちゃんと家族だった……と思う」

私がシーリアやラキシスと過ごした期間は、ケイト達に比べれば短いけれど……一緒に何週間か暮らして、私はそう感じていた。

マリアは安心するようにそう……と、小さく呟いて微笑む。

「反面教師として優秀だったのかしらね」

「シーリアもケイトと同じでラキシスを尊敬してた。真似しようとしてる」

「きつと、シーリアの前では格好を付けていたのね。シーリアの保護者になってからは殆ど問題を起こさなくなっていたし。大人になったのかも」

瓶の酒をコップに注ぎ、マリアは楽しそうに笑う。
果たして本当にそうなんだろうか。

「絶対子供のまま。ケイトが何度かラキシスに襲われそうになってた」

「……もし、それが本当なら話が必要そうね」

真顔になったマリアに私は頷く。これで、あのエルフに関しては大丈夫だろう。

シーリアはともかく、ラキシスは年を考えて欲しい。

あ、ケイトの姉のエリーの例もあるからどうなんだろう。

しかし、冒険者としてのラキシスは……。

「でも、ラキシスは凄い。途中経過はともかく、結果は出している」
「そうね。彼女は直感で最善の結果を引き寄せるの。誰にも真似は

出来ないと思うし、周囲に迷惑はかけるけど、間違いなく超一流の冒険者よ」

マリアは残っているお酒を一気に飲み干すと、私を試すように見て問いかける。

「ケイトならどうするのかしらね？」

「ケイトなら……」

私はラキシスをケイトに置き換えて考える。

ケイトはきつと悩むはず。だけど、子供を生贄にすることとを許すことはない。

だけど、精霊を放っておくこともしないはず。ということは……。

「みんなの安全を確保して、誰も傷つかない方法を必死で考えそう」
「私もそう思う。だけど、それじゃ間に合わないこともある」

コップをくるくる廻して遊びながら、マリアは剣の修行をしている時のような真剣な表情を私に向ける。

「息子はラキシスから自分に無い部分を感じ取っているのかもしれないわね」

「考えなしなところ？」

マリアは微笑んで首を横に振る。

「割り切って決断できる勇気を持つているところ……かしら。ケイトは考えすぎるからね。ま、あの子の格好付けに騙されてるだけ……というのもありえるけれど」

「ありそう……よく、シーリアの胸に目がいつてるし……」

マリアは声を上げて笑っているけど、笑い事じゃない。

ケイトは頭いいけれど、絶対騙されやすいと思う。私が何とかしないと。だけど、とりあえずは……。

「さっき、マリアがケイトは考えすぎて、間に合わないかもしれないって言ったけど」

「うん？」

「ケイトの欠点は私が補えばいい。迷ったら私が助けるし、間に合わないなら私が間に合わせる。決断出来ない時は私が決断する。問題無い」

「なるほどね。うちの息子は……」

苦笑してマリアは気になるところで言葉を切る。そして、瓶の酒を最後の一滴までコップに注ぐとし、完全に無くなったことに残念そうな表情を見せ、

「まあいいわ。クルス。貴女も頑張りなさい」
「うん」

何処か諦めたような表情で、マリアはそう続けた。
そして、話を変えるように笑う。

「私も久しぶりに旅をする準備をしなきゃね」
「何処に行くの？」

私はちよつと驚いた。だけど、次男のカイルは旅に出てるし、ケイトも直ぐに村を旅立っていく。マリアも子育てが終わり、手持ち無沙汰なのかもしれない。

「カイルよ。娘が一人前になって、ラキシスも寂しがっているだろうから」
「マリアは……ラキシスをどう思っているの？」

余り良いように言っていないけれど、ラキシスの話をするマリアは何処か楽しそうだった。ちよつとわかりにくい。彼女ことをよく理解しているみたいだけど。

マリアは困ったように笑う。彼女の笑顔は親子だからかケイトにも似ていた。

「困ったところはあるけれど、多分、親友……なんでしょうね」

私はマリアがシーリアを預けられたのは、ちゃんとラキシスを信頼していたからなのか……彼女は首を横に振るだろうけど……私はそんな気がしていた。

外伝 おまけ ある騎士の受難

無駄に精緻な装飾が施された家具が置かれている広い執務室に、俺は報告書を提出するために訪れていた。塵一つ落ちておらず、部屋は清潔であるが、薄らとインクの匂いが染み付いている気がする。

俺はこの部屋の匂いとその主である中年の……眼光の鋭い細身の男、元カイル騎士団団長であり、領主カイルの懐刀と言われているグラス・ルーフェルが苦手だった。

この男は冗談の通じない堅物であり、騎士時代から苦手だった。事務職に移ったと聞いたときには小躍りしたものだ。最もすぐに俺の直接の上司になってしまい、肩を落とすことになったのだが……。

執務室の大きな机の向こう側に座っている堅物は報告書を一枚一枚読み進め、読み終わると眉間を抑えた。

「ジェイド・グlaus特務騎士。この報告書は間違いないか？」

「はっ！ 間違いありません！」

直立して敬礼する。冒険者出身であり、魔法が使えるばかりに特務騎士などというわけのわからない職務に付けられ、上司は苦手な相手。

騎士に憧れ、騎士になれたのはいいが、なかなか現実は厳しい。それ以上に厳しいのが俺の仕事だが……内偵に潜入に……今回は

特に酷い。

「ラキシス・ゲイルスタッドか……相変わらず迷惑な。だが、今回は感謝か……」

「はあ……」

俺はこの合理主義者で規則が服を着て歩いているような面白みの無い上司が、顔を歪め、『迷惑』などという感想を零したことに心底驚いていた。

感情のない魔法生物か何かだと思っていたのだ。

ラキシス・ゲイルスタッド。城塞都市カイラルでは一、二を争うほどの知名度を誇る、美貌のエルフ。『氷の魔女』の異名を持つ……最悪の精霊使い。

目の前の堅物、グラスのさらに上からの命令で俺が見張ることになった女。

正直、俺はこの任務を引き受ける時は無表情を貫きながらも、内心喜んだものだ。美貌のエルフを堂々と口説くチャンスがあるかもしれない。

男の悲しい性である。今はどう思っているか？ 決まっている！

二度とあの女と組んで旅に出たくないっ！

恐怖の記憶を思い出しそうになるのを、溜息を吐いて止めて顔を上げ、目の前の上司の言葉を覚悟しながら待つ。

なぜ覚悟しているかという……任務に失敗したからだ。

俺の任務は三つ、ラキシス・ゲイルスタッドの監視。アルカイン山脈で行われている儀式の遂行。儀式を行う少女に何かあった場合の儀式の代理。

結局、あのエルフの力業で後ろ二つの命令の遂行が困難になったのである。

「そう固くなるな。君を罰するつもりはない」

「よろしいのですか？」

「あの女がやることで部下を一々咎めていては部下がいなくなる。何を考えているのかわからないからな。あの女の行動にくらべれば一年後の天気の方が読みやすい」

珍しく饒舌だ。よく見るとペンを持つ手が震えている……何か嫌なことでもあったのだろうか。
ありそうだ。

あの女はエルフ。年を取らないのだから。

「それにすまないな。儀式が生贄のような代物だったとは。私の落ち度だ」

「これは本当のことなのですか？」

「恐らく本当だろう。上に確認はしない方がいいだろうが」

あのエルフは人を生贄にして稼働させる魔法装置と言っていたが……俺は妄想なのではないかと疑っていた。カイラルからの監視の

推理も確かに俺が付いていたが、彼女の予想は間違えていたし。装置に付いても、適当に言っているだけだろうと俺は思っていたのだ。

だが、事実だとすれば……それは……。
俺が生贄になっていたかもしれないという……。

血の気が引いていく音が聞こえる気がする。

「本当にご苦労だった。任務は失敗だが被害は最小限、特別手当は弾もつ」

「有難う御座います」

俺は任務の失敗を追求されないことにほっとしながら、恭しく頭を下げた。

これで減給になったら堪らない。生きているのが奇跡のような任務だったのだから。

あの女は生贄予定の子供を助ける為に一片の躊躇もなく、俺を殺そうとしたのだ。間違いない。もしも、俺が任務通りに子供を生贄にしようとしていれば、間違いない……。

あの時のあの女の冷たい視線は、一週間以上が過ぎた今でも夢に出る。

魔法が使える俺を警戒していたし、少しでも敵対行動を取ればまるで事務作業を行うような気軽さで俺の命を狩っていたに違いない。

俺はあの女の名声は美貌で得たものだと思っていた。剣の腕と魔

法の腕を認められ、騎士になった自分に適うわけがないと。
だが、あの女は『本物』。桁違いの化け物だ。

恐怖で動くことが出来なかった……そのおかげで今、ここに立っている。

そして、子供が事故が何かで死んでいた場合には、俺が魔法装置で……。

他にも冒険中は空気が悪くて胃が痛かったのに子供のお守りはしないといけないし、雪山は寒くてきついし、雪崩には巻き込まれそうになるし、最悪だった。

「ジェイド・グラウス特務騎士」

「はっ！」

そんな風に考えに耽っていた俺を不意に目の前の上司……グラスが口の端を釣り上げて……笑っているのか？ よくわからない表情でとにかく俺を呼んだ。

「ラキシス・ゲイルスタッドはどうだった？」

「……恐ろしい女です」

色んな表現が頭を過ぎったが、俺は無難にそう答える。
上司は大きく頷いた。そして、今度は明らかに笑っている。

「時にジェイド・グラウス特務騎士、君の趣味は女性を口説くことだそうだな」

「ひ、人並みであります」

俺は目の前の堅物……グラス・ルーフェルが笑ったところを初めて見た。

しかも、俺をからかうような……獲物を見つけた肉食獣のような……そんな笑みな気がする。なんだか嫌な予感が……。

「君に新しい任務を与える。喜べ、君好みの任務だ」

「はっ！」

「美しい女性を専任で監視する仕事だ」

「まさか……」

目の前の上司は清々しい笑みを浮かべ、俺に一枚の紙を差し出した。

任務の詳細が書かれている紙だ。俺は絶望するような気持ちで紙に書かれた文面を読み進めていく。

「ラキシス・ゲイルスタッドが冒険に出るとき、同じ依頼を引き受けて監視を行うように。国益に反する時は、なんとしてでも止めたまえ」

「無理に決まってるだろ！ あの女を止めようとしたら俺がやばいっ！ あ、いや、その……えー……私では力不足でありますっ！」

思わず地が出てしまったが、上司は少しだけ眉をひそめただけで咎めはしなかった。

だが、いつもの睨みつけるような威圧感のある表情で俺を見て一つ咳払いし、

「命令だ」

「……拒否権とかは……」

「そのようなものがあると思っているのかね？」

「思いません」

「よろしい」

そして上司は小さく頷き、椅子から立ち上がった。書類の仕事ばかり受け持っており、鍛えていないはずだが……それでも勝てる気がしない。

身体 of 所作には一分の無駄もなく、洗練されている。

彼は執務室にある棚の方に歩いていくと、引き出しから一本の瓶を取り出し、俺に向かって投げた。ラベルを見ると……高級なワインのようだ。

安酒しか飲まない俺には価値がよくわからないが。

彼は椅子に座り直してペンを持ち、次の仕事に取り掛かりながら呟く。

「若い頃は私もお前のように、女を口説いて廻ったものだ。当時は無名だったラキシス・ゲイルスタッドに出会うまでは……」

「はあ……」

「これからジェイド・ブラウス特務騎士は非常に苦労するだろう。その酒は私の秘蔵の酒だが……私からのせめてもの饞別だ。頑張るたまえ」

「余計に不安になるのですが……」

俺はこの日以降、ラキシス・ゲイルスタッドが依頼を引き受けたときには、一緒に組むことに決まった。彼女が受ける依頼は大事件しかなく、俺は数限りなく死線をさまようことになり、何度も転属を申し出ることになるのだが……。

初代のあのエルフ担当だった上司のグラス曰く、『あの女も丸くなつた』そうである。

俺は苦手だったこの堅物な上司といつしか愚痴を零し合う、飲み友達になっていた。

閑話 故郷にて

村に戻ってから数日が経ったある日、俺はマイスに誘われて、とりとめもない話をしながら村の中をゆっくりと歩いていた。天気は良く、初夏の静かな風が心地いい。

マイスが初めに俺を連れてきたのは、俺達も子供の頃よく遊んだ村外れの草むらだった。

背の低い草が一面に広がった草むらでは俺達がそこで遊び回っていたように、今は新しい世代の子供達が楽しそうに追いかけて回りして遊んでいる。

昔の俺達もきつと、こんな風は無邪気で楽しそうだったのだろう。そう思うと、自然に笑みが溢れる。

「おおーい！ ケイトを連れてきたぜ！」

「あ、マイス兄ちゃん。ほんとだ！」

「ケイト兄ちゃんだ！」

マイスが手を振って大きな声を上げると遊んでいた、子供達が俺達の立っている場所へと集まってきた。村中の子供が集まっているのでは……と思うほど今日は子供の人数は多い。

男の子が多いが女の子も混じっている。皆一様に好奇心を抑えき

れないといった感じのわくわくしているような表情で俺達に注目していた。

俺はどういうことかとマイルスに視線を向ける。

「こいつら俺の話じゃ信じねえんだよ」

「だって、マイルス兄ちゃんいちいち大袈裟なんだもん！」

「そーだそーだ！」

子供達の非難にマイルスは笑いながら肩を竦め、ばしっと俺の肩を叩く。

「お前らもこいつの話なら信じるだろう？」

大袈裟に胸を反らせてマイルスが子供達に向かって問いかける。周りに集まっている子供達は、そんなマイルスを見て楽しそうに声を上げて笑った。

「ケイト兄ちゃんならなあ」

「なんか嘘とか付けなさそうだしっ！」

「マイルス兄ちゃんと違って真面目だもんねっ」

「ひでーな、俺だって真面目だぜ？」

マイルスは草むらに座り込んでしょんぼりと肩を落とし、落ち込んでいる振りをする。すると、子供達の中でも若い少女が転びそうに

なりながら彼に近づき、ぽんぽんと背中を叩いた。

「わたし、まいすにーちゃ、しんじてる！」

「おう、ありがとな！」

笑顔でその子にマイスは礼を言って、膝の上に載せた。俺はそんな彼の隣に座り込む。

子供達も俺達に倣うように俺達の前に座った。

こうやって冒険のことを話すのは初めてではない。俺もマイスもクルスも……そして、シーリアも話をしている。だけど、子供達の好奇心はまだ満たされていないらしい。

子供達にシーリアは特に人気だった。耳と尻尾が好奇心の対象らしく、彼女は本気で逃げ回り、子供達は楽しそうにそれを追いかけていた。

今回はマイスをだしにして、俺から話を聞きたかったのだろう。マイスはおそらく俺よりも子供の信頼を掴んでいると思うし、子供達は彼の話もきつと信じていると俺は思っている。

俺はそこまで考え、わざとらしく大袈裟に咳払いして子供達に笑いかける。

「よし、じゃあ今日は俺がマイスの大袈裟な話とは違う、本当の冒険の話をしよう！」

「おいおい！ 酷いなケイト」

マイスは苦笑しながら頭を掻き、子供達はそんなマイスを見て楽しそうに笑っていた。

「それじゃまず何から話そうか……」

「迷宮！ 迷宮っ！」

「えーっ！ 城の話がいいー！」

「わたし、えるふさんききたい」

子供達のばらばらな要求に、俺はゆっくりと答えていく。

時には楽しく、時には子供達の好奇心をさらに煽るように、そして、迷宮や魔物など危険を伴う話では少し怖がらせることを意識しながら。

「こんなものかな？」

「なあケイト兄ちゃん。マイス兄ちゃんとどっちが強いのか？」

一通り話を終えた俺に、身体の小さな少年……確かカースという名の少年だ……が真っ直ぐ見つめて、唐突にそんなことを聞いてきた。

子供達を見回すと全員が気になっていたのか興味深そうに俺達を見つめている。

俺は内心とんでもないことを聞いてくるな……と苦笑しながらマイスに助けを求めた。

だが、マイルは何か企んでいるのか、にやつと俺に笑みを返してくる。

「馬鹿だな……お前らは。俺に決まってるじゃないか。身体のでかさが違うだろ」

「うーん確かに」ケイト兄ちゃんちっこいしなあ」

マイルは膝の上に座っている子供の頭を撫でながら笑って胸を反らし、子供達も首を傾げながらも納得するように頷いた。俺に聞いできたカースはしょんぼりしている。

（こいつは……）

俺は左手で頭を掻いた。確信犯だろう。

マイルは本気で言っているわけではない。誘っているのだ。

この説明では俺は子供達の教育のためにも逃げるわけにはいかない。

困ったやつだ……そう思いながらも、俺はマイルの誘いに乗る。

「カース。身体が大きさが強さではないよ。マイルより俺の方が強いんだから」

「え、ケイト兄ちゃん、本当？」

「ああ。身体が小さくても、戦い方が上手い方が勝つ。よく見ておくんだ」

疑っている小さな少年に俺は頷き、立ち上がって身体に付いた草を払う。

それを見たマイルスも幼い少女をゆつくりと降して立ち上がった。

「そうこなくっちゃな。ケイト」

「子供が真似したらどうするんだ。この馬鹿」

「ははっ！ 元気でいいじゃねえか」

全く悪びれずにマイルスは笑い、子供達を見回す。

「おい！ お前らはどっちが勝つと思う？」

「マイルス兄ちゃん！」

「うっー……ケイト兄ちゃん！」

子供達は真剣な表情でどちらが勝つかを考え、声を上げる。
どちらかというやはりマイルスが多いか。

「ケイトと組手をするのも久しぶりだな」

「後悔するぞ。マイルス」

俺達は昔の修行の時のように距離を空けて構え、笑いあう。
そして、マイルスはその辺に落ちていた小石を拾い、高々と空に向

かつて投げた。

それが地上に落ちた瞬間、俺達は距離を詰めてお互いの拳をかわす。

「すっげー！ ケイト兄ちゃん負けるなー！」

「マイルス兄ちゃん！ やっちゃえっ！」

急に始まった俺達の戦いに子供達が歓声を上げる。

俺達はそんな子供達の応援に答えるかのように本気で殴り合いを続け、気がつけばそんな声も気にならないほどに集中し、戦っていた。

夕方になると俺達は子供達を家に返し、修行をしていた頃によく五人で雑談をしていた傾斜のある場所に二人並んで寝転がり、空を見ていた。

久々の本気の組手に身体は痛んで火照っているため、涼やかな風が気持ちいい。

「引き分けか。あー痛てえ」

「子供の教育に悪そうなことさせるんじゃない」

「おっさん臭いこというなよ。お前が弱いもの虐めだけは絶対に駄目だ！ って言い聞かせてたから大丈夫だって」

マイスは寝転びながらぐつと身体を伸ばして笑う。

「面倒なことは俺に任せて楽しむだけ楽しんだだろ。マイス」

「まあ、そう言うな。お前も楽しんだろ。こつ、退屈というか、もやもやした気持ち溜まってると顔してたぜ。お前。溜め込むタイプだから。昔から」

マイスにそう指摘され、俺は自分の顔を触る。

確かに気分はすっきりしているだけに、マイスの言葉を否定しきれない。

そんな顔をしていたのかと左手で頭を掻いた。

「あいつらはお前のそういうところには気が付かないからな」

心配だぜ。と、呟き、マイスは上を向いたまま苦笑いする。

あいつらというのはクルスとシーリアだろう。

「そついや、カイルルに着いたばかりの時もそうだった」

「懐かしいな。もう何年も経ったみたいだぜ」

俺は街に着いたばかりの頃、緊張して、用心しすぎて、視野の狭い考えになっていたことを思い出す。

あの時もそれに気付く切欠を与えてくれたのはマイルスだった。

「俺は残るからな。ケイトも自分で気をつけるよ？」

「ああ、わかった。ありがとう」

寝転がっていたマイルスは身体を半分だけ起こし、夕日を見て目を細める。

微笑んでいるが寂しそうな、そんな表情に俺には見えた。

「あーくそ、俺も行ってえなあ。黙って行ってしまうか」

「おいおい。本気か？」

思わず慌てて俺は身体を起こす。マイルスはそんな俺を見て笑っていた。

そしてもう一度、頭の後ろで手を組んで草むらに寝転がる。

「冗談だって冗談。リイナも子供も放って行けねえよ」

「焦らすなよ」

俺は非難するようにマイルスを見たが、彼は俺を見ず、遠くを見るように空に視線を向けている。

しばらく何も話さず、空を見続けた。

何と無く俺も、もう一度寝転がって空を見る。やがて、マイルスは

ぽつりと言った。

「見知らぬ街に行き、不思議な物を見つけ、新しい出会いを楽しんで生きる」

「ジンさんの家にあつた『グルーク冒険譚』だな」

ああ。と短くマイルスは肯定する。子供の頃にジンさんの家で、俺がマイルスに勉学への興味を持ってもらうための教材に選んだ本だ。

「リイナは大事だ。ずっと一緒にいたい。だけど、お前と一緒に馬鹿をやりながら胸が踊るような冒険を続けていたって気持ちもあるんだ。俺は変か？」

物事は単純には割り切れないこともある。

一つの決断をしても、他の答えを完全に忘却することは出来ない。

「いや、変じゃない。俺もマイルスと旅できれば楽しいと思ってる」「そつか。へっ……ままならねえな。自分で選んだことだってのによ」

マイルスは答えを既に出していた。村に残るということ。

俺にとっても簡単に割り切れることではない。幼い頃から共に修行し、笑い合い、時には喧嘩をし、命懸けの冒険も共に乗り越えてきた親友と別れるのだ。

それを思い出すだけで、胸は締め付けられるように痛い。

「おい、ケイト」

「何？」

顔を少し横に向けてマリスを見ると表情を引き締め、真剣な表情をしていた。

「絶対に死ぬなよ。俺とリイナの子供、見せるからな」

「ああ、死なないよ。子供に自慢できる、最高の冒険者になってみせるさ」

それを聞くとマリスは大笑いして、からかうような顔でこちらを向いた。

「美女二人の尻に引かれていることで有名になってんじゃないか？」

「あーえー、そ、それはない……はず！」

「何でそんな自信ないんだよう！ 無いって断言しろよ！」

俺達は赤に染まった草むらで顔を合わせ、声を上げて笑いあう。思いの外長くなる親友との別れの時は間近に迫っていた。

プロローグ

昔の夢を見ていた。

俺よりもずっと大人で知性に溢れる美しい幼馴染は、夕日の差し込む古文部の部室の中で小さな机を挟み、顔を合わせて穏やかに微笑んでいる。

夢だ……そう、自分でも簡単に気付く。

俺はケイト・アルティアであり、日本の高校生——ではない。
しかし、この『悪夢』は夢と気付いていても、決して途中で終わることはない。

「——最近、後輩……あの子と仲が良いようね？」

時代遅れになりつつある高校指定のセーラー服も、まるで彼女のために作られたかのように似合っている。悪戯好きそうな明るい雰囲気の大和撫子……というのが当時の『俺』の感想。

そんな彼女は『俺』の受験勉強の答え合せをする手を止め、からかうように笑ってペンを向ける。

自分とは違う自分——『俺』は、苦笑いを返す。

「浮気の指摘みたいだぞ。部長殿」

「そうそう、浮気しちゃダメよ——は私のなんだから」
「ただの幼馴染なのにか」

惘然とした俺の切り返しに、ふふ……とおかしそうに幼馴染は声を漏らす。

俺は『俺』の中で第三者としての視点でその光景を見ながら思い出す。

この記憶は幼馴染と恋人として付き合う前だと。

珍しい。いつもは、殺される場面を思い出すのに。

「当然よ。私が誰かと付き合っても——がそうするのは許さない」
「横暴だな」

少女の表情から冗談だろうと『俺』は判断する。『俺』の中の俺も同じ判断をしていた。彼女自身も冗談のつもりだったのだろう。

「それで、あの子はどういう子なの？ 副部長」
「強くて真っ直ぐな子だよ。活動の無いうちの部には勿体無い」

『俺』は後輩に振り回された出来事を思い出しながら、そう説明する。

このときの自分には後輩に対する恋愛感情はなく、ただ、後輩に対する友情と彼女の強さへの尊敬だけがあった。

『俺』の返答を聞くと、幼馴染は目を細めた。

初めて見る表情だと思う。笑っているわけではない。責めているわけでもない。

ただ、『俺』を見ている。

幼馴染はしばらくそんな風に『俺』を静かに見つめていたが、ゆっくりと口を開く。

「好きになれそう？」

「友人にはなれそうだが恋愛対象としては見ていない」

嘘か本当か、付き合いの長い彼女であれば簡単に判断出来るだろう。

『俺』はそう考えていた。

俺は……改めてこの場面を思い出し、自分は間違っていたのではないかと思い返す。

今の俺が過去に思いを馳せて考えている間にも場面は進んでいく。

彼女は俺の言葉に反応を見せず、『俺』を見つめ続ける。

開いている窓から強い風が入り、彼女の長い黒髪を揺らす。

艶のある黒髪に夕日の光が反射し、目の前のセーラー服姿の美しい幼馴染を幻想的に見せていた。

どういふ思いを抱いているのか理解出来ない表情のまま、彼女は口を開く。

「それでいいのよ。——は私のものなんだから」

夕暮れの紅い部室の中で幼馴染は静かにそう呟いた。
冗談の時と同じ言葉なのに同じように感じない。

今の俺には薄ら寒さを感じさせる。

なのに、『俺』はその違いに気付いていない。

しかし……それは仕方がないことなのかもしれない。

この時『俺』は恋をしていた。

『俺』の前に座っている、美しく、賢く、俺を一番理解している
と思っていた幼馴染に。

どうしようもなく、盲目的になる程の深い片思いを。

一度は彼女に振られたにも関わらず、それでも想いは失うことな
く。

彼女と共にいるだけでも痛む心を抱えながら……それでも。

『俺』は彼女に片思いを……恋をし続けていた。

いつもと違う夢の再生が終わり、目を醒ますとまだ辺りは薄暗かった。

今、俺達が野営をしている周辺では朝日に照らされた朝靄が広がっており、寒くは無いが視界は悪い。

この時間の見張り役だったクルスは眠たそうで、こっくりこっくりと船を漕ぎ、時折、眠ってはいけないと首を横に振っている。

俺は身体を起こすと引いている布の上に座り、固くなった身体をぐっと身体を伸ばした。

そして、こちらを向いたクルスに声を掛ける。

「おはよう。クルス。少し寝ていいよ」

「……ううん。私の役目だから駄目」

一瞬だけ悩んだ様子を見せ、クルスは首を横に振る。

こういうところはクルスは真面目だ。これがマイルなら「ありがたい」とかいつて直ぐに横になっているのに。

「起きるの早い。また悪夢？」

昔のクルスではないが、俺も時折、過去の悪夢に悩まされている。頻度は少ないが……そういう日の俺は相当憂鬱そうな顔をしているらしい。

不思議な夢だ。最近では思い出すこともなかった悪夢にすら出ない昔の夢。

悪夢とは言えないが、嬉しい夢かと言われるとそうではない。

なんと説明すればいいのかわからず、俺は首を傾げた。

「悪夢じゃないけど、いい夢ではなかったよ」

「そう」

短く呟くと少し離れた所に座っていたクルスは俺の隣に座り直す。彼女は真っ直ぐ向いたまま、少しだけ微笑んだ。

「悪夢を見たときのコツを教える。悪夢には私は慣れている」
「どんなの」

自信ありげな彼女に思わず吹き出しそうになる。
そんなのに慣れていることを何故そんなに楽しそうに話すのか。

「夢は夢。ケイトはケイト。ケイトの人生はケイトのもの」

「なるほどね」

「忘れては駄目。大事」

クルスは小さく笑って空を見る。

また少し成長した彼女の横顔は表情は、まだ硬さが残るものの穏やかで優しいげだ。

俺もなんとなくクルスに釣られて空を見る。

「今日、エーリディ湖に……貿易都市エールに着くな」

「船、楽しみ」

「どんな街なんだろうな。俺も楽しみだ」

本当に楽しみだ。城塞都市カイラルとはまた違った雰囲気のある街なのだろう。

外国とも繋がりのある貿易の街でもあるし、きっと珍しいものがたくさんあるはず。

まだ見ぬ街の姿を俺は想像する。

俺の冒険記……日記帳は残りページで足りるだろうか。

「俺の人生は俺のもの……か」

懐かしい雰囲気を感じる言葉。その言葉には温かいものを感じる。街も楽しみだ。旅も順調で不安はない。

だが、何故か俺の心のざわめきは止まらなかった。

漠然とした不安……その正体は何なのか。

俺はこの時は理解していなかった。

そして、神ではない俺はこの時点では知る由もなかった。

俺の運命に関わる……幾つもの出会いと再会が待ち受けていることを。

第一話 貿易都市エール

貿易都市エールは、海と見間違ふほどの広さを持つエーリディ湖の北部に位置している、名前の通り、他国との貿易によって栄えている街である。

もちろん、この街の産業は貿易だけではない。

湖の豊富な水は漁業や農業にも大きな影響を与えている。

エールの低い城壁が見える付近では水路が整然と何本も引かれ、一面に農地が広がっていた。

城塞都市カイルもそうだが、ピアース王国では農業に力を入れているのかもしれない。

大きな荷物を荷車や馬車に積んだ商人、肌の色が違う旅人などとすれ違いながら俺達は貿易都市エールの城門を潜る。

「うーん、他国と接している割には城壁が低いな」

「それがどうしたの？」

俺は潜った城門を振り返る。クルスは俺の独り言を拾って、不思議そうに首を傾げた。

「この都市は重要な都市のはずなんだよ。戦争を想定してないのかなと思ってね」

「想定されているわよ？」

俺の疑問に自信あり気に微笑みながら答えたのはシリアだ。

シリアは腰に手を当てて割とある胸を反らせ、尻尾をゆっくり振りながら自慢げに説明する。

「軍港と貿易港を分けているの。エールを挟むように二つの軍港…要塞が作られているわ。この二つを無視して攻めることは難しいの。そして城壁が低いのは……」

「万一奇襲されて落とされた時に取り返しやすいうまいかな」

俺がそう推測し、答えるとシリアは「うっ」と少し呻いて耳を伏せ、拗ねたような、非難するような目で俺を見る。合つてたらしい。

街の成り立ち方はその時代時代の権力者達が、知恵を絞って考えているのだろう。

俺が考えていること、シリアが学んできた街の成り立ちの理由、それらが全て正しいとは思わないが、一つ一つの街に特徴があつて面白い。

「最後まで説明させてよ……」

「あ、ごめんごめん。流石、学院で学んでいるだけあるね」

「まあいいわ。守られているエールにそれでも城壁があるのは、治

安上の理由。ただでさえ色んな国の商人や旅人が集まる街だからね」

なるほどね。と、俺は呟いて街の方を見る。

カイラルも様々な人種が集まっていたがそれはあくまで少数派で、ピアース王国の出身者の特徴を持つ者が人口の大部分を占めていた。

この街は違う。明らかに外国の人間らしき肌の濃い商人や、俺達の国の服装とは全く違う肌の露出が多い服装をした者達と同じくらいの割合で歩いている。

人間だけでなく、ドワーフや獣人のように明らかに人間ではない者も多い。

「もっとも……ピアース王国、ディラス帝国、ヴェイス商国は三国協定を結んでいるから戦争なんて起こらないと思うけど」

「三国協定？」

クルスはシীরリアの態度にむっとしながらも、興味があったのか人通りの多い街の中を歩きながら彼女に質問する。

シীরリアは余裕そうな態度で人差し指を立てて振りながらクルスに答えた。

「簡単に説明すると三国の間で決めた、エーリディ湖の使用に関するルールね」
「なるほど」

「エーリディ湖にある島々に住んでいる『湖の民』が三国から中立の立場に立ってこの協定の証人になっているの。その協定のお陰で貿易が盛んになっているのね」

すらすらと説明するシーリアに、クルスは納得したように頷く。

出発が急だったこともありエーリディ湖に関してシーリアが調べる時間は無かったはず。

ということは、彼女は普段からしっかり学んでいたのだろう。

「ふふん。私が役に立つってわかったでしょ？」
「うざい」

悔しそうなクルスの捨て台詞を聞いたシーリアは楽しそうに笑う。
だが、貿易が盛んで発展している割には……。

「何だか活気がないね」

俺の呟きにクルスが頷いて同意する。
確かに色んな人が街を歩いているし、国際色豊かな色々な物を売り捌いている様子は見てとれるのだが、どこことなくピリピリしている気がするのだ。

シーリアが「あれえ？」と首を捻り、クルスは彼女に「適当なこ
と言った」とジト目で見つめている。

俺はシーリアの説明は正しいと思う。
前もつてある程度調べていた情報とも一致しているからだ。

そんな風に三人で雑談しながら宿を探すため、木材と土で作られた建物や屋台、布を引いて物を売っている商人達の隙間を縫うように歩いていると、目の前から怒鳴り合う声が聞こえてきた。

「ふざけんなっ！ この野郎！」

「な、な、言い掛かりだ！ 許可は取っている！ 俺に何の関係があるってんだ！」

どうやら喧嘩のようだ。状況がよくわからない俺達は立ち止まり、集まった野次馬達に混じって様子を窺う。何やら様子がおかしい。

「やっちまえ！ どうせディラス野郎のせいだ！」

「おーおー！ いいぞ！ ディラス野郎に商売させるなっ！」

ピアース王国の人間らしい筋骨隆々の大男が地面に荷物を並べている肌の色の濃い錆色の髪の毛の細身の青年を相手に言い争いをしている。ここまではまあ普通の光景だろう。

だが、野次馬達は大男に難癖を付けられている青年ではなく、全員が大男の味方をし、罵声を飛ばしている。これは異常だ。
このままいけば集団リンチになってしまつかもしれない。

「どうする？」

「状況が掴めない。ちょっと待って」

小声で俺に確認したクルスに俺は同じように小声で返し、罵声を飛ばしてない小太りの中年の男の肩を叩く。

彼も罵声は飛ばしていないものの青年を憎々しげに睨んでいる。

「おじさん、あれは何してるのかな？」

「見たらわかるだろ。ディラス野郎を締めたくもなるさ。ざまあねえぜ」

「俺達は今日街に来たばかりなんだ」

俺は銅貨を一枚取り出し、その男に握らせる。

小太りの中年の男は一瞬驚いた素振りを見せたが、にやりと笑う。

「礼儀を知ってる小僧だな。一ヶ月くらい前、ディラス帝国が三国協定を一方的に破棄したんだ。他二国は抗議しているらしいが一向に解決しねえ」

「え、そんなことなったら、貿易商は……」

荷が止まる。それは他国と商いを行う者にとっては致命的なことではないだろうか。

戦争が起こっていないことが不思議ですらある。

ディラス帝国は軍国主義で、軍事力は確かに高いが二国で当たれば湖の主導権を取ることは不可能ではないはず。

「廃業したやつもいるな。貿易商だけじゃねえ。この国と他の国の航路をディラス帝国が塞いでいるせいで、そっちにゃ船も出せない状況さ。みんなイライラしてんだよ」

国同士の関係は確かに重要だが、俺達にとって大きな問題はこちらだ。

当面の目的地はヴェイス商国。争ってはいない国だが、下手をすれば船が出せないかもしれない。どうしたものか……。

そんなことを考えている間にも、言い争いはヒートアップしていく。

青年は大男や野次馬達相手にも一步も引くことなく、言い返している。

このままではまずい。俺達は険悪になっていく空気を感じていた。危険だが助けるか？　だが、助ければ俺達も感情の赴くままの暴走に巻き込まれるかもしれない。

俺は迷いながらも前に出ようとして……後ろから来たがつちりした法衣姿の山のような大男にぶつかられ、横に押されてしまう。

「おっつとすまんね、はい通して通して」

背も高いが横にも大きい。ぶつかった俺に頭を下げた時に見えた表情は穏やかそうだった。そんな彼は野次馬を掻き分けながら、言い争いを続けている男達の所へと歩いていく。

「ありや、水の神の神官様か。解決解決」

俺に説明をしてくれた中年の男はそう言っ
て野次馬から離れていく。

どういうことだ？ と思いつつ、俺はクルスとシーリアと共に、最前列まで野次馬を掻き分けて移動した。

俺を押しのけた法衣姿の大男は言い争いをしている二人の中央に立ち、穏やかに微笑んでいる。当事者の二人は戸惑っているようだ。野次馬達の罵声も止み、全員が大男に注目する。

彼は落ち着いた様子で筋骨隆々な男と錆びた髪の色
の青年の肩に手を置いた。

「水の神はこのような争いを望んではない」

「カリフ様……」

錆びた髪
の青年は法衣の大男を知っているらしく、先程まで抱いていた怒りも忘れて呆然と呟いている。

「おい、水の神はディラス野郎の肩を持つってのか！」

しかし、もう一人の男の方はカリフというこの神官を知らないのか、突如自分の邪魔をした彼に対して激昂した。だが、法衣の神官カリフは錆色の髪の青年を自分の後ろに隠した上で首を横に振る。

「どちらの肩も持たん」

「それなら邪魔だ。引っ込んでろっ！」

周りの野次馬達が騒めく。先程のように喧嘩を望んでいる様子ではない。

戸惑うような、畏れるような……そんな感じが。

この街ではエーリディ湖があるために、水の神の信仰者が多い。書物から得た情報だが、本当なのだろう。

「湖の恩恵を受ける者は皆平等……だが、君達の怒りをわしは理解しているつもりだ」

カリフは激怒している男よりも一回りも二回りも大きな巨体を彼の方に向けると、どしりと座り込む。

「ディラス人の代わりにわしを殴るといい」

彼は緊張もせずゆったりとした雰囲気でじろりと男を見上げる。
男は呻いて迷っていた。だが、余程の怒りを抱えているのか暗い
笑みを浮かべる。

野次馬も止めたがつている雰囲気のため、今度こそ俺は止めよう
としたのだが、今度は勢い良く背中から誰かにぶつかられ、転けて
しまう。痛い。

「いい度胸だぜ」

「やめて、だめだめ、やめてくださーい！ カリス様何してんすか
っ！」

俺に勢い良くぶつかった華奢な法衣の女性……いや、男性か？
不思議な髪だ。カイルでも見たことがない不自然な程に……空
のような青。自然の色なのだろうか。

華奢で育ちが良さそうな、眼鏡を掛けた長くて青い髪の美しい青
年は、息を切らしながら走ってきて山のような大男に縋り付くよう
にしがみついていた。

「今日も交渉あるんすよー。立ってください！」
「む、しかしだな。大事なことなのだ」

なんだか、顔と口調にギャップがある気がするが……声を聞くと
男性であることがわかる。

座っている大男、カリフは青年を見て困ったように呟いていた。

一方、無視された筋骨隆々の男の顔は赤黒く染まり、足を踏み鳴らしている。

「てめえ、『湖の民』か！ お前等にも言いたいことがあるんだ！」
「え、え、えー！ なんすか？」

問答無用で事情がわかっていなさそうな青年を殴ろうとしていた男の腕を、俺は青年の前に出て受け流し、男の背中に腕を廻して傷つけない程度に締め上げた。

俺は怒声を上げ続けている筋骨隆々な男に背中から、ゆっくりと囁く。

「水の神の神官を殴るのはこの街では危ないのでは？ 周りを見てください」
「なんだと！ う……」

俺の声に促され、男は周りを見渡す。

初めは彼に味方していた野次馬達も困惑した表情をしていたり、神官達を助けようとしている。放置しては、先程のディラス帝国の青年と同じようになりそうだ。

俺は他からは見えないように背中で軽く締めている手に銅貨を握らせる。

「貴方の気持ちもわかります。これでお酒を飲んで憂さを晴らしてください」

「う……しょうがねえ。わかった。だが、俺だけじゃねえぞ」

手を離すと、男は「見世物じゃねえ」と野次馬に怒鳴りながら去っていった。

俺だけじゃない……か。

身の安全を考えればこの街には長居をしない方がいいのかもしれない。

クルスとシーリアとも話し合う必要がありそうだ。そう考え、落ち着ける場所を探そうと二人に声を掛けようとした俺の背中を、重い衝撃が走った。

「ごぼっ！ な、なんだ？」

咳き込みながら後ろを振り向くと、法衣姿の山のような大男、カリフが人の良さそうな笑顔を浮かべて立っていた。どうやら背中を叩いたのは彼らしい。

カリフは深く腰を曲げて、俺に頭を下げる。

「感謝する」

「大したことはしていません」

俺は小さく作り笑いを浮かべた。
早々に立ち去るべきだろう。水の神はこの街では一定の力を持
ていらしいし、現状がわからない今は何に巻き込まれるかわから
ない。

「中々の手際であつた。見たところ旅の者のようだが」
「はい。今日来たばかりです」
「ふむ……」

カリフは少し考える仕草を見せた後、青い髪 of 青年の腕を掴んで
俺達の前に出す。

「ウルクに街を案内をさせよう。本来ならわしがやりたいのだが、
用事がな」
「ええっ！ 何ですか！」
「なら、わしが案内しても良いか？」

若い華奢な青年は抗議の声を上げたが、落ち着いたカリフの楽し
んでいるような脅しに、屈するように肩を落とした。
俺としても彼の案内は出来れば遠慮したいのだが。

「お気遣いなく。俺達は大丈夫です」
「ほ、ほらカリフ様。彼等もこういつてますし！」

案内が面倒なのか、ウルクと呼ばれていた青年も俺に同調する。だが、カリフは重々しく大きく首を横に振った。

「いかにかん。今の情勢では何に巻き込まれるかわからんのだ。旅の者の安全を確保するのも我等、水の神の信徒としての仕事だ」

「命令ですか？」

「うむ」

諦めたウルクの問いに力強くカリフは頷く。

これはまずいと今度は拒否しようと思ったのだが、カリフは俺に向かつて笑みを浮かべると、俺ではなく、俺達の様子を見守っていたクルスとシーリアの方を向いた。

「どうだお嬢さん方。我らは湖のことならば何でも知っておる。安全な宿も美味しい店も……湖に接している外国のこと」

クルスとシーリアは顔を見合わせる。

そんな二人にカリフは茶目つ気のある笑顔を浮かべた。山のような大男なのに、そんな和ませるような笑顔が妙に板に付いている。

「そっちの少年が喜びそうな、お嬢さん方に似合う服やアクセサリの店もな」

「……私は別に構わない」

「服とかはともかく、宛てもなく宿を探し回るよりはいいかもしれないわね」

俺は左手で髪の毛をわしゃわしゃと掻いた。

水の神の神官達は悪そうには見えないが……宿を教えてもらい、早めに宿を変えられるようにすればいいかと、俺もカリフを見て頷く。

「ありがとうございます。お世話になります」

「うむ。これも水のお導きだ。ウルク、しっかりな」

「わかりました……カリフ様、交渉任せますよ。ほんと……」

泣きそうな顔でウルクはカリフに頼み、カリフも真剣な表情で頷いた。

「今の状況が続けば危ないからな。それでは、ああ、自己紹介を忘れていた」

立ち去ろうとして、カリフは振り向いて俺達の方を向く。

「わしはカリフ・ライグ。そっちの若いのはウルク・エルード。水の神『エルーシド』様に仕える神官だ。お前達は？」

俺はクルスとシーリアの前に立ち、少し考えて彼に名乗る。

「ケイト・アルティア。仲間の二人はクルスとシーリアです。よろしく願います」

「うむ、また機会があれば酒でも飲もう。では、またな」

俺はわざとクルスとシーリアを名前しか紹介しなかった。

クルスはともかくとして、シーリアは……ラキシスさんに迷惑を掛けてしまう可能性があったからだ。あの人……いや、エルフは色々と旅をしているらしいし、相手が知っていないとも限らない。

そして、彼はウルクを残し、今度こそ何らかの『交渉』を行うために去っていった。

「本当に申しわけない。ウルクさん、よろしく願います」

「あ、いや、いいんすよ。何時ものことだし、カリフ様の言ってることも正しいんで。あ、俺のことはウルクでいいんで。よろしく。ケイトさん」

「俺もケイトでいいですよ」

華奢な青くて長い髪的青年、ウルクはやれやれと肩を竦め、眼鏡を弄りながら気分を切り替えるように「よし」と小さく声を出すと俺達に人懐こい笑顔を見せる。

「ま、どうせなら楽しくいきやしょうや。まずは何処行きますかね

？」

「宿をお願いします。泊まる場所は確保しないと」

「了解了解……ん？ なんすか？ クルスさん……だっけ？」

明るそうな笑顔を見せたウルクを何故かクルスがじっと見つめる。
彼女が初対面の人間に対し、こんな反応をするのは珍しい。

シーリアも何だろうと不思議そうな顔でクルスを見ている。

クルスはウルクを見つめ、ぼそつと呟いた。

「男？」

「男っすよ！ 正真正銘！ ここで証明しようかつ！」

確かに彼は男にしては背も低めだし、女顔だが……流石にそれは
可哀想ではないだろうか。

余程間違われるのが嫌なのか、謝っているクルスの前で法衣を脱
ごうとしているウルクを必死に宥めながら俺は苦笑していた。

面倒なことには巻き込まれないようにしないと……と。

第二話 出せない船

俺達は水の神の若い神官、ウルクに紹介された『水龍亭』に宿を取った。

古いが掃除の行き届いたこの宿には、船が出せないことで母国に戻れない人達が溢れており、宿の部屋はほぼ埋まっている。

これは『水龍亭』だけでなく、どこの宿も似た状況のようだ。

顔の効く水の神官の仲介がなければ一見である自分達だけでは宿を取ることは難しかったかもしれない。

三国協定が破られて一ヶ月。

手持ちの金に不安があったり、足止めを受けたりしている者達の顔には焦りの色が濃い。何も出来ないことも彼等の苛立ちに拍車を掛けているようだ。

そんな怒声混じりの話し声の聞こえる『水龍亭』の食堂で、俺達は昼食を取りながらウルクから貿易都市エールの状況を聞こうということで、四角いテーブルを囲んでいた。

女性と間違えられて怒り狂っていた彼は、今は冷静に、時折眼鏡の位置を直しながら俺の対面に座っている。

「いや本当に見苦しいところを見せて申し訳ない。間違われること多

いんすよ」

「髪切ればいいんじゃない？」

しょんぼりと肩を落としているウルクにシーリアが頭の後ろに手を回し、ハサミで切る仕草をしながら不思議そうに聞く。

全体的に女性っぽい彼だが、確かに一番目を引くのはその長い髪だ。

ウルクは、はあ……と大きくため息を吐いて答える。

「結婚するまで切れないのが、うちの風習なんすよ」

「『湖の民』の？」

喧嘩をしていた男の言葉を思い出し、確認の意味を込めて横から口を出した。

そんな俺に対してウルクは気を悪くする様子もなく、こちらを向いて小さく頷く。

「そうそう。『湖の民』の風習なんすよ。若いもんはみんな切りたがってるんすけどね」

彼は苦笑いしていたが、切ろうとしないあたり風習は大事にしているのだろう。

『湖の民』は三国協定に大きく関わっているはずだから、その一

族である彼から正確な情報を聞くことが出来るのは有り難いことなのかもしれない。

これからの行動の指針が立てれそうだ。

「それじゃ……貿易都市エールの状況を聞かせてもらっていいかな」「あ、すんません。本題からずれてたすね。ケイト達はこのエールについてどのくらい知ってるんすか？」

彼からの質問に、俺は一ヶ月前の貿易都市エールの情報、元々は三国で湖に関する協定を結び、それを『湖の民』が中立の立場で証人になっていること等を説明した。

俺からの説明を聞くと、ウルクはむむむ……と下を向いて唸り、顔を上げる。

「よく調べてるなあ。一ヶ月前までなら完璧すよ。だけど、何を血迷ったのかディラス帝国が協定を破棄しやがったもんで、大混乱状態ってところなんすよね」

「しかし、協定を破るにしても理由が……」

「それなんすよっ！ やつら言うにことかいて……」

ウルクは怒りに身体を震わせ、だんっ！ とテーブルを叩いた。いきなりのウルクの激昂に、シーリアはびくつと飛び上がったが、クルスは反応せずに落ち着いて水を飲んでいる。

「俺達『湖の民』に湖賊の疑いがあるから信用出来ないって言いやがったんすよ！」

余程腹に据え兼ねているのか、ウルクは声を震わせながら現在起こっていることを口早に説明していく。彼にとって『湖賊』という言葉は侮蔑の言葉らしい。

主観も混ざっていそだなと俺は思いつつも、現在、この貿易都市エール……いや、エーリディ湖に起こっている問題を彼の話から把握していた。

ウルクの説明を簡単にまとめると、ディラス帝国が『湖の民』を『湖賊』……すなわち、湖で盗賊を行う者であると決めつけることにより、協定を破棄。

貿易都市エールが所属するピアース王国や湖を物流の要として利用しているヴェイス商国は抗議を行うも、実力でディラス帝国を排除しようとすれば、湖だけでなく、陸においても全面戦争に繋がってしまうために、『湖の民』を二国の合同艦隊が守るに留まっている。

協定の証人である『湖の民』が害されれば、完全に協定は破棄されてしまう。

そうなれば三国を中心として戦乱が始まる。両国の首脳達はそれだけは避けたいと考えているらしい。

だが、一触即発の状況のようだ。不満は抑えきれなくなっている。

エーリディ湖周辺で最も信仰されている水の神『エルーシド』の幹部が間に入って交渉を重ねているが、ディラス帝国の姿勢は強硬で協定破棄を撤回する様子は無いらしい。

「ディラス帝国の言い掛かりを何とかするために『リブレイス』……俺達のような少数部族を支援してくれてる互助組織も動いてくれるんですけど、どうなるやらで」

心底困ったという様子でウルクは苦笑する。

『リブレイス』……俺達と戦ったゼムドやサイラル達の所属する組織の名前だ。

この名前を聞くだけで胡散臭いと思う俺は疑いすぎなのだろうか。それとも、今回のように彼等を助けようとしている姿こそが本当の姿なのか……。

「それで、ヴェイス商国に船は出そう？」

「軍隊がディラス帝国に釘付けすからね。湖賊がやりたい放題なんすよ。みんな怖がって船なんてとてもとても。その結果がこの宿の状況。見てくださいよ」

ウルクは昼間から不満そうな顔をしながら酒を飲んでいる男達でひしめく店内を見渡して肩を竦める。

「陸路はどうか？ 湖に沿って歩くとか」

船には問題なく乗っついていけるだろうと思っていた。
だが、そうでないならば多少時間が掛かるうとも他の道を選ぶ必要がある。

湖に沿って歩いて向こう側まで行くことは出来ないのだろうか。
俺は知ってそうなシーリアの方を見たが、彼女は首を横に振る。

「自殺行為よ。湖沿いの道は魔物と盗賊の無法地帯になっているわ。
陸路の安全な道を選ぶならかなりの大回りが必要になる。大河も何
本も超えなくちゃいけない。何ヶ月掛かるか……」
「でも、ここで待ってもいつになるかわからない」

クルスもシーリアも難しい顔をしながら考え込む。
そんな重い雰囲気吹き飛ばしたのはウルクだった。彼は眼鏡を
一度触り、不安を吹き飛ばすように明るく笑う。

「ま、明るい話もあるんすよ。『リブレイス』の人達がディラス帝
国の水の神官を通じて交渉してくれて、ディラス帝国が妥協案出し
てくれたらしいんで、今日の交渉次第では解決なんす」
「その組織は信用できるの？」

クルスは不思議そうにウルクに訊ねる。
俺達にとってはあまりいい思いのない……というか、完全に敵だ
と思っている組織だが、彼の口振りではその組織を疑っている様子

はない。

「そりゃそうすよ。うちら少数部族は立場弱いすからね。助け合いは大事なんすよ」
「なるほど」

何を当たり前のことをといった雰囲気でウルクが答えたため、俺はクルスに目配せし、追求しないよう合図する。

俺達に害を為す相手が彼等に害を為すとは限らない。

『リブレイス』の話題になったため、何かを思い出したのかウルクがあ……そうだ！と声を上げて、俺の方を見る。

「そっぴや今日来る『リブレイス』の人達の代表の名前、ケイトに似てるんすよね」

「へー……何て名前？」

何だか嫌な予感がした。いや、確信というべきか。

「カイル・アルティアって人なんす」

クルスがコップを落としそうになり、シーリアは驚きで目を見開いでいた。俺は動揺する心を何とか表に出さないようにしながら深呼吸をする。

「兄だよ」

「まじすか！ ケイトも獣人に偏見ないし、もしかしたらって思ってたんすよね！」

ウルクは、がたっ！ と椅子を倒しながら立ち上がり、俺の手を取ると「あー嬉しいなあ」と満面の笑顔で喜びの声を上げていた。

俺は苦笑いを返すのが精一杯だったが。

現状の説明を終えるとウルクは仕事があるらしく、明日また、様子を見に来ますと言いついて残して楽しそうに去っていった。

人と話すのが好きな青年なのだろう。水の神の信徒として、人々の不満を聞く、不安を出来る限り取り除いていくのだと彼は言っていた。

良い神官なのかもしれない。

彼が去った後、俺達は宿の周辺を探索し、ある程度、道を把握すると港の方まで歩いていく。日は傾き始めているが『水龍亭』は湖の近くにあるため、まだ時間は大丈夫だと思う。

「広いね」

「魚の生臭い匂いがする。きついなあ」

クルスが楽しそうに眩き、鼻が効くらしいシーリアは顔をしかめている。

魚の臭いも俺には微かしか感じられないが……遠くに漁場が見えるため、そこから匂いがこちらまで届いているのかもしれない。

目を細めて水平線を見ながら、本当にエーリディ湖は海ではないのだと感ずる。

懐かしい記憶……海の……潮の香りが一切しないからだ。

船を出せないため、人通りのまばらな港で俺達はエーリディ湖を眺める。

動揺が過ぎ去ると俺達は落ち着いて、新しい街に来たことを楽しめる気分になっていた。色々なことに巻き込まれ、良くも悪くも図太くなったのかもしれない。

サイラルを斬ったことへの後悔は今でもあるが、切り替えは出来ている。

城塞都市カイラルの学院で前もってヘインから仄めかされていたこともある。ゼムドやサイラルとの事件を通じて、俺はある程度覚悟をしていた。

カイル兄さんや俺達よりも先に村を出た幼馴染のホルスが……俺達が敵対した組織に所属していることを。あの時一緒にヘインから話を聞き、ヘインが二人を疑っていることを怒っていたマイルスがここにいたら、どんな顔をしただろうか。

兄さん達がどんなことを考えて、そこに所属しているのかはわからない。

数年の間に何があったのか。
もしかしたら、会う機会もあるかもしれない。その時には、確認しなければならぬ。

彼等の考えを知ってどうなるのか……そんな思いはあるが。
もし、二人と闘うことになればどうか。

完全に敵意を持っていたサイラルですら躊躇し、後悔が残っている俺に二人と闘うことは出来るのだろうか。無理かもしれないと苦笑いする。

そんなことにだけはなつて欲しくない。

クルスやシーリアには話していなかったのだが、彼女達も落ち込んでいる様子はない。

付き合いの少ないシーリアはともかく、クルスの強さは凄いと思う。

「船ってこんななんだね」

クルスが無邪気に杭に触りながら興味深そうに船を観察している。そんな姿がクルスにしては珍しく歳相応に思えて、俺は穏やかな気分でそんな彼女を見ていた。

繋がれている船……それは俺の知っている船に似ているようで随分違う。

大きな船になると、小さめの家くらいの大きさがあるが帆はない

し、漕ぐためのオールも見当たらない。どうやって動かすのか検討も付かない。

「どうやって動かすんだろうね」

「それはね……むぐぐっ！　ぷはっ！　何するのよ。クルス！」

待つてましたとばかりにシーリアは説明しようとしたのだが、クルスがシーリアの背後から口を抑えて黙らせてしまう。

シーリアは尻尾を逆立てて怒っているがクルスは悪びれる風もなく、船の方に向きなおして小さく呟く。

「乗る時の楽しみ」

「ぷっ……そうだな。シーリア。知らない方が面白いこともあるよ」

俺も笑ってクルスに同意する。シーリアは拗ねたようにそつぽを向いてしまったが、こればかりは俺もクルスの味方だ。出来れば自分で調べてみたい。

クルスはしばらく船を見て廻り、俺達はそれに付いて歩く。
一段落調べ終えたのだろう。クルスは振り返り、俺を見た。

「ケイト。カイルがいるということは……ホルスがいる」

「誰それ」

「俺達の親友だよ」

俺はシーリアにそう、短く答える。

「クルス。ホルスを見つけたらどうする？」

「締める。カイル共々」

クルスは無表情のまま宙に両手を伸ばし、きゅっと締める真似をする。

彼女の仕草がなんだか可愛くておかしくて、俺は笑いながら頷いた。

第三話 デイラス帝国の妥協案

翌日、床の上で俺は目を覚ました。

痛む体を伸ばして欠伸をし、寝ぼけながらも天井を見て、現状を思い出す。

身体を起こして床に座り、頭をがしがしと掻いて二つあるベッドを見ると、まだクルスとシーリアが小さな寝息を立てていた。

一緒に部屋に泊まっていたのは二人部屋しか『水龍亭』には空きがなかったのもあるが、他の客の不満がどう働くかを予測出来なかったためでもある。

そうでなくとも、冒険中は俺達はどうして宿を取るときには三人一緒に泊まるか、クルスとシーリアが二人で一部屋を取るように前もって相談して決めていた。

クルスもシーリアも俺と一緒に寝ることは気にしていないが、女性の旅というのは大変なものだと思う。

そんな彼女達が平気なのだ。俺も慣れなければならぬのだろう。身体と一緒に心も思春期になっているようで、少々辛くはあるが……。

ちらつと彼女達の寝顔を覗くと、クルスは本当に静かに眠っており、シーリアは毛布を跳ね飛ばし何かいい夢を見ているのか寝言を言いながら幸せそうな顔をしていた。

二人ともよく眠れているようだ。

クルスはともかく、シーリアは旅慣れていない。

……はずだが、慣れない野宿でも気持ちよさそうにしっかりと眠っていた。

彼女の図太さ……いや、強さは誰に似たのだろうか。

まあ、しかし疲れは残っているはずだ。

久々のベッドだし、ゆっくり休んだほうがいいだろう。

「ほんと、目のやり場に困るなあ」

寝相が悪いせいであんなに薄い寝間着が乱れていた。スタイルが良かったため、直視するだけで気恥しくなってしまう。俺はなるべく彼女から視線を離して毛布を掛け直した。

俺達はある程度の日数、滞在することに必要な古着や日用品を購入入っていた。

その数日の間に大回りの陸路を使うか、湖の交通再開を待つかを判断する。

出来れば兄やホルスとも会い、話を聞きたいが……。

とりあえずは二人が起きる前に……と俺は立ち上がって身体を伸ばし、身嗜みを整えるために髭を剃る小さなナイフを服のポケットに入れて部屋を出た。

楽しそうに去っていった昨日とは正反対の、どんよりとした表情のウルクがふらふらと『水龍亭』に現れたのはクルスとシーリアも目を醒まし、遅い朝食を終えた頃だった。

どこことなく手入れされている様子だった長い髪もあちこち跳ねており、肩もがっくりと落としているため、五年は老けて見える。実年齢は知らないが。

わかりやすい青年だ。恐らく昨日の交渉は不調に終わったに違いない。

「あ、いたっすね……皆さんおはようございます」

「おはよう。大丈夫？」

俺は苦笑いしながら心配しつつ、ウルクに椅子を勧める。

彼は「ども……」と、小さく礼を良い、俺達のテーブルの席に着いた。

「あまりいい結果じゃなかった……かな？」

「いや、進展はあったんす」

クルスが立ち上がって宿の主人から水を貰ってウルクの前に置き、静かに席に座る。

昨日のことをどう説明しようかウルクは悩んでいるようだったが、木製のコップの水で口を濡らすと、ゆっくりと語りだした。

「ディラス帝国は『湖の民』の真珠を全て帝国に納品しろって言うてきたらしいんすよ」

「真珠……って何？」

「宝石すね。うちの特産品で、税金差し引いても結構いい値で売れるんす」

不思議そうに聞いたクルスにウルクが答える。

城塞都市カイルルでも真珠は売られてはいたが、かなりの高級品だった。

俺の知識では真珠は海で取れる物……という常識があつたのだが、淡水である湖でも取ることは出来るらしい。元の時代でも知らないだけであつたのかもしれないが……。

宝石の売買が行われているなら、動く金は大きそうだ。
ディラス帝国の目的はそこにあるのだろうか。

それにしても、やり方がまずい気がするのだが……もし、真珠が『湖の民』だけの技術だとしても、俺のように現代から流れてきた、『呪い付き』が何人かいれば真珠の製法の想像が付くものもいるだろう。

実際に採算に載せるには時間は掛かるだろうが今回のようなディラス帝国にこのような博打を打つ必要性があるとは思えない。むしろ、物流が止まることによる自国への打撃を考えれば……。

国は俺達のような『呪い付き』を把握していないのだろうか。

「ケイト？」

不思議そうな表情のシーリアが声を掛けてくれたお陰で、はっ…と、俺は思考を現実に戻す。

国同士の関わりの中は後回しだ。

「ごめんごめん。ウルク、続きを」

「はい。で、昨日言ってたケイトのお兄さんすね。彼等が何とか他の条件を取ってくれたんすけど、それがまた、不可能な案って奴で」「不可能？」

ウルクは涙目で頷く。女性より女性っぽい気がして、俺は眉をひそめる。

彼はいろんな意味で大丈夫なんだろうか……いや、今はどうでもいいことが。

重要なのは、その不可能な案の内容だ。

「うちの住んでいる島は中央付近にあるんすけど、湖のほとんど央じゃないかなってところに何かの遺跡があるらしいんす」

「なんで疑問形なの？」

シーリアの疑問に対して、ウルクは苦笑いしながら答える。

「『湖の民』でも、その島に入れないからっすよ。船は問答無用で沈められるし……建物らしきものは見えるんすけどね」

「何かいるのね？」

「そう。エーリディ湖の悪魔……水魔『クラストディール』ってのが。俺は見たことないんすけど……というか、見た奴はみんな死んでると思うんすけど……相当でかい上、水の中だと無敵らしいんすよ」

俺はシーリアの方を向いて知っているか聞いてみたが、彼女も知らないらしい。

ウルクはそんなやり取りをみて、「仕方ないすよ」とシーリアを弁護する。

「近づかなきゃ襲って来ませんしね。一年に被害は数件っていったところっす」

「じゃあ、今回カイル兄さんが持ってきた案って……」

ウルクは俺の考えを肯定するように悲痛な表情で頷く。

「カイルさんが持ってきたのは、『クラストディール』の討伐す。『湖賊』の正体をそこそ有名なそいつに押し付けて……ディラス帝国の言い分を無くそうって話なんすよ」

「ディラス帝国は納得するのかな。それは」

はつきり言って疑わしい。

そもそもが、難癖を付けるような言い分だったのだから。

「何故か納得したらしいんすよ……いや、そんなのはどうでもいいんすよっ！」

どんっ！ とウルクは立ち上がってテーブルを叩く。

流石に二回目だからか、シーリアも驚いてはいなかった。

納得したということは遺跡に価値があるとの考えからだろうか。それとも、不可能だと考えているからか……。

また思考の海に潜りそうになったが、慌てて振り払う。

そして、ウルクの激怒（？）の理由を聞こうと思ったのだが、俺より先にクルスがウルクを無表情のまま見つめて、ぼそつと呟いた。

「煩い。興奮しすぎ」

「う……だって……だって……」

立ち上がったままウルクは眼鏡を外して目元を拭い、力無く席に座る。

そして、テーブルに突っ伏すと、声を上げて泣き始めた。

「『湖の民』代表として討伐隊に付いて行くことになったんすよ」

っ！ まだ死にたくないんす……まだ、恋人も出来たことないのにいゝ！ あそこの生存者0すよ。0っ！」

「……ご愁傷さま？」

「哀れに思っなら恋人になつて欲しいす！ クルスさんは是非！」
「嫌」

クルスも流石に気の利いたことを言えないらしく、苦笑している。まあ、ウルクには「冗談を言う余裕もあるようだし、心配はいらないだろう。」

「ケイト、眉間にしわが寄つてゐるわよ」

じと目のシーリアに指摘され……「冗談だと思うが……何と無く眉間に触れる。」

「討伐隊つてことは他にも行く人がいるんだろうけど、勝算はあるのかな」

「それが……カイルさん達が行くつて言つてゐるんすよ。自信満々だったすけど……湖の怖さを知らなさそうな人だし……」

「兄さんが討伐を？」

何と無く、カイル兄さんの様子は想像が出来る。
きつと何の迷いもなく、危険を承知で笑いながら引き受けたのだろつ。

カイル兄さんだけなら心配だが……。

「カイル兄さんの側にホルスって男はいた？」

「ホルス……あ、あのお人好しそうな系目の人っすかね？ 知り合
いなんすか？」

俺はクルスと顔を見合わせる。どうやら、本当にホルスも来てい
るらしい。

カイル兄さんだけならノリで引き受けそうだが、ホルスも付いて
いるなら確実に勝算があつての行動に違いない。

城塞都市カイラルにいた頃、俺はカイル兄さんやホルスの話も聞
いていた。

カイル兄さんに対しての印象は好意的なものが多かったが……。

ホルスは違う。あいつは他の冒険者から嫌われていた……『狐』

……そう呼ばれて。

成人もしていなかったのに……だ。

別れる時に言っていたように『大人の思惑』を喰い破った結果な
のかもしれない。

数年経った今、どんな風に成長しているのだろうか。

「心配ないよ。ホルスもいるなら勝つ方法は考えているはず」

「ま、まじっすかっ！ はあ……ちょっとだけ、気が楽になったっ
す……」

顔色はまだ悪いが、ウルクはなんとか微笑む。

「カイル兄さんは俺の事は何か言ってた？」

「あ、すみません。命の危険で伝言忘れてた……そいや、カイルさんが会いたいつて言ってたすよ。一応本人に確認するって言っていたんすけど……どうします？」

同姓同名の別人……ではないらしい。

向こうが会っても大丈夫と判断しているなら断る理由はない。

忙しいのは確実にカイル兄さん達の方だと思っし。

「会っよ。伝言をよろしく」

「何で伝えたらいいすか？」

「そっだな……」

俺は少しだけ考え、答える。

「『頼れそう？』……と。それで通じるはず」

「わかったっす。早速行ってきますね！」

元気が出たのかウルクは明るい表情で水を飲み干し、びしっと立

ち上がると法衣を翻し、走るような早足で『水龍亭』から出て行った。

忙しい人だ。ほんと。

「頼れそうってどういう意味？」

俺はウルクを見送っていたが、クルスはこちらをじっと見ていたようだ。

言葉の意味に疑問に思ったのだろう。

シリアもわけがわからないといったように首を傾げている。二人にはわかるわけがない。俺とカイル兄さんにしかわからない。

子供の頃の兄との会話……思い出だから。

この言葉には色々な想いがあるが……俺は苦笑して答える。

「そうだね。皮肉……かな？」

あの明るい兄に会うことには懐かしさもある。嬉しさも……。ホルスに会うことにも。

だけど、一言文句を言わずにはいられない。

何故、故郷を襲った組織にいるのか。

俺達と命懸けで戦った敵のいる組織にいるのか。

裏では何をやっているのかわからない組織にいるのか……。

「会って判断しよう。とりあえず一発殴りたいけど」

「私は締める」

「……私も殴りたいかも」

こんな国が関わる大事件に携わる地位にいるらしい兄やホルスが、俺達が襲われたことを知らないとは思えない。

特に故郷での襲撃では俺が狙われていたことも考えると……考えたくはないが兄かホルスから情報が流れた可能性すらある。

直接カイル兄さん達が関係しているわけではない。だが、簡単に納得は出来ない。

俺達三人は納得出来る説明がなければ殴ることを誓い合いながら頷きあっていた。

第四話 複雑な再会 前編

その日の夕方、俺達はウルクの案内を受けて、兄の指定した町外れにある一件の古ぼけた酒場に足を運んでいた。

貸切っているのか、酒場の中に客はいない。

薄暗い店のカウンターの奥には、ぽつんと酒場のマスターが……。

「カイル兄さん……何してるの？」

「おう、来たか。ケイト！ でかくなつたなっ！」

数年経つても一目で判る。

身長が伸び、体付きは一回り大きくなっているが、何をやっていても楽しそう……周りに巻き込んで明るい雰囲気にしてしまうような印象は変わってはいない。

俺達より数年長い冒険者としての生活で迫力も身に付いている気がする。

そんな兄は何故か酒場の制服を着て、カウンターの向こう側で全員分の飲み物を用意していた。

「マスターには外してもらおうように頼んじまったからな。運ぶの手伝ってくれ」

何を言ってやろうか……そう思っていたのだが……。
泡を零さないよう不器用に麦酒を入れている兄に毒気を抜かれて
しまう。

クルスも同じ気分なのか小さく溜息を吐いて、飲み物を明かりの
置かれている席に運んでいた。

「俺とクルスは酒は無理だよ」

「ここはクルト村じゃないんだ。堅いこと言うなって」

兄はそう言って笑いながら次々に酒を注いでいく。
木製の大きなコップの数は……6。

ウルクは帰ったから、もう一人、俺の知らない人がいるわけか……。
…。

「それにな……ホルスが言ってたんだ」

全員分酒を入れた兄は、更に酒瓶を何本か取り出してカウンター
の前に立っている俺に渡し、愉快そうに笑う。

「カウンターの奥にいないと問答無用でお前らに殴られるってな」

驚いて一瞬、酒瓶を落としそうになる。

どうやらこちらの行動をホルスには読まれていたらしい。

だが、俺はすぐに平静を取り戻すと兄を見て、溜息を吐いた。

「このまま、酒瓶でカイル兄さんを殴りたい気分だよ」

「おいおい、そんなことされたら可愛い弟との感動の再会が台無しじゃないか」

悪びれる様子がまるでない兄に苦笑いを返しつつ、俺は言われたとおりに何種類かの酒の入った瓶を運んでいく。

俺達の隣の席におかわり用の酒瓶を何本も置いて準備を終えると、兄はカウンターに手をついて飛び超え、目の前に立ち、肩を両手でばしばし叩いた。

「いやほんと、会えて嬉しいぜ！ あんなちっこかったのになあ。驚いた驚いた」

「俺も嬉しいよ。カイル兄さん、活躍しているみたいだね」

「ま、当然だな」

自信あり気に不敵に笑って兄は胸を張る。

それと同時に酒場の扉が開く音が響き、誰かが店の中に入ってきた。

逆光で顔は見え辛いが見間違うはずはない。

そばかすが無くなり、身長も伸び、身体も細いがかっしりとして大人っぽくなっているが……特徴的な温厚そうに見える糸目、落ちていた物腰は変わっていなかった。

「カイルは面倒くさいこと……全部、僕に丸投げだけだね」

「ホルス……」

「久しぶりだね。ケイト……それにクルス。マイルがいないのは残念だけど」

両手に料理を持ったホルスがそこには立っていた。

数年ぶりに俺達は視線を合わせる。

彼を見ているとクルト村でガイさんやジンさんに鍛えてもらっていた頃の記憶が、鮮明に蘇っていく。共に鍛え、共に学び、時には殴り合いの喧嘩もした相手が目の前に立っていた。

好意もある、敵意もある……過去の友情と現在の関係と……全てが合わさり、俺は未消化複雑な心情を抱えたままホルスを見つめる。

だが、ホルスはわからない。

少なくとも外観は平然としたもので、動揺している様子は微塵もなかった。

「積もる話は食べながらにしよう」

「何故、私がお前達の茶番に付き合わなければならない」

彼の後ろにはもう一人……俺やクルスと同年代の少女が料理を持つて立っていた。

夕暮れの紅い光を反射して輝いている長い金色の髪を無造作に後ろで括り、右側で一本だけ別に括っている。背は低く、顔立ちはまるで人形のように整っているが……。

「……何か？」

「いえ……何でも。兄の仲間の方ですか？」

両手に持っていた料理を受け取り、俺は彼女に問いかける。

「まさか。今回だけの協力……ただそれだけ」

間髪入れずに否定する。

感情をまるで感じない暗い瞳。奥底が見えない海の底のような深い蒼……。

その瞳が自分が死んだ時の出来事を想起させ、意識が一瞬ふらつきそうになる。

そんな俺の背中から肩に手を回し、支えたのは兄だった。

「酷いなーアリスちゃん。これから数々の困難を乗り越える仲間じゃないか」

「知らないわね」

話は終わったとばかりに少女……兄にアリスと呼ばれていた彼女は、俺達の横を通り過ぎ、空いている席へと座る。兄はそれを見届けると、呆れるように肩を竦めた。

「ま、悪い子じゃないんだ。かわいいし、美人になりそうだしな」
「性格と容姿は関係ないよ」

俺の指摘に兄は細かいことは気にするな、と笑ってテーブルの方に向い、アリスの隣に座る。アリスは兄をちらりと見たが、何だか嫌がっているようだ。

苦手なのかもしれない。

俺も料理を持ってテーブルに向う……と、何故かテーブルの下でホルスが膝を付いて呻いていた。先程、俺と顔を合わせた時の余裕はまるでなく、大きく咳込んでいる。

「ホルス……何やってるの？」
「昔も……今も……僕はやっぱり、ホルスが一番苦手……話聞かないし……」

料理を置き、クルスを見ると興奮したように少しだけ頬を染め、ちらり……ちらり……と、こちらを見ている。これは褒めて欲しい時の顔だ。

「何をしたの？」

「料理を置いた瞬間不意打ちした。料理に罪はない」

ふふ……と、クルスは小さく声を上げて笑う。

シーリアもクルスを咎めることなく、苦しそうなホルスにいい笑顔を見せていた。

「ホルスは屁理屈を言う前に倒すのがコツ」

「な、なるほど……」

思考が麻痺して、つい昔の癖でクルスの頭を撫でてしまう。

クルスも気持ちよさそうに目を細めていたが、直ぐに子供扱いは駄目と手を跳ね除ける。

「君達は相変わらず仲がいいね。変わってない」

痛みが引いたのか、何とかといった様子でよろとホルスは立ち上がり、クルスとはなるべく離れた席について苦笑する。

笑い方だけは時が経った今も変わっていないようだ。

「そういうホルスは大分変わったみたいだな」

「成長したと言って欲しいね」

「まあ、成長といっても色々だから」

不自然に空けられたクルスとシーリアの間の席に腰を降し、皮肉を言った俺に対し、ホルスは小さい笑みを返したただだった。何を考えているのか……まるで読めない。

「『リブレイス』がどんな組織かわかっているのか？」
「当然、君よりも理解しているよ」

ホルスは薄く微笑む。
このやり取りで確信した。確実に、ホルスは俺達に起こったことを知っている……と。

「まあまあ、折角の再会なんだ。ぎすぎすせずに楽しく飲もうぜ」

静かに牽制し合う俺達を見て、兄が酒の入ったコップを無理矢理、俺とホルスに持たせる。俺達はそれを仕方なく受け取り、視線をお互いに逸らせた。

だが、一人……そんな兄をクルスは不機嫌そうに見つめている。

「人事じゃない。カイルも後で覚悟」
「カイルは何もしてないよ。僕も何もしてないけどね」

クルスに何かを言い返そうとした兄を手で制し、ホルスが代わりに口を開く。

「僕達も気付くのが遅れたんだ。僕達とサイラル達は命令系統……上司が違うからね。言い訳になるけど、すぐにサイラルとゼムドには帰還命令を出してもらったんだよ」
「知っているのなら……」

俺はテーブルの下で拳を握り締め、ホルスを睨みつける。
サイラル達がやろうとしていたことを思い出し……俺は自分の頭に血が上るのを感じていた。

「何故まだ、そんな組織にいるんだ。ホルスっ！」
「ケイト。『リブレイス』は必要なんだよ。善悪で割り切れるような問題じゃないんだ」

だが、ホルスの方は静かに俺の激情を受け流すように細い目でこちらを見つめ返していた。

冷静なホルスを見て俺も我に帰り、自分も冷静さを取り戻すために深呼吸をする。

ただ、心の奥から沸き上がる敵意は隠しようが無かった。

兄は俺とホルスのやり取りを真剣な表情で見守っていたが、陰湿な雰囲気になりつつあるのを見て、ホルスの腕を退かせ、首を横に

振った。

「ホルス。いい。ケイトが怒るのは当たり前だ。俺だって奴は気に入らん」

「やれやれ、僕だけ嫌われればいい話なのに」

ホルスは兄の方を向き、右手で頭を抑えて苦笑する。

「俺達が『リブレイス』に協力しているのは、小難しい理由じゃない。俺があんたの組織の姫さんに惚れたからだ。惚れた女を守るのは当然だろう」

「……は？」

呆然としている俺に、兄は真剣な表情のまま言い切った。
その顔には一分の後悔も見えない。

「今抜ければ見捨てることになる。利用されるだけの駒にするわけにはいかん」

兄の言葉を解釈すれば、その女性には実権が無い……もしくは、無くなりそうということだろうか。

どうやら、兄の方も色々な面倒に巻き込まれているらしい。
大きい組織のようだし、何らかの思惑が絡み合っているのだろうか。

俺は溜息を吐いて頷いていた。

認められない……認めたくはない……だが、兄は綺麗事だけでは
すまないことを決意を持って成し遂げようと考えているのだろう。

冗談ではない……決意のようなものを俺は兄から感じ取っていた。

「はぁ……その人……人なのかな？ とにかくその女性は美人なん
だね？」

「ああ。よくわかったな。とびっきりの美人だ」

俺が苦笑しながらそう聞き返すと、兄はほっとしたような表情を
一瞬だけ見せて、普段通りの自信に溢れた明るい笑みを浮かべた。
呆れたが、この兄を嫌うことは出来なさそうだ。

「浮気は程々にしなよ」

「それはそれ、これはこれだ。な、アリスちゃん」
「うざい」

蒼い瞳の少女は肩に手を置こうとした兄の手を小さい手で払いの
け、全く感情を感じさせない冷たい瞳でこちらを真っ直ぐに見つめ
ていた。

彼女の瞳を見ると身体には怖気が走ったが、何とか我慢する。

「お前がケイト・アルティアか」
「そうだけど」

そして、俺の名前を確認すると、彼女は一房だけ分けて括った髪を片手で弄りながら小馬鹿にするように微笑んだ。
初めて見せる表情らしい表情……好意的というには程遠いが。

何だろう……何があるのか。
不思議と背中伝う冷汗を感じながら、俺は彼女の次の言葉を待っていた。

彼女は小さな口を開く。

「何故、お前は茶番を続けている」

第五話 複雑な再会 後編

茶番……彼女はそう言った。

俺は質問の意味が理解できず、困惑して金色の長い髪を持つ小柄な少女……アリスを見つめる。だが、彼女は押し黙ったまま何も答えない。

助けを求めるように他の面々の方を向いたが、クルスは興味が無さそうにしているし、シーリアは意味がわからないのか首を傾げている。

ホルスも首を横に振って苦笑しているし、兄もよくわからないらしく、ぽかんとしていた。

仕方がないので、彼女に発言の意図を聞いてみることにする。

「ごめん、茶番って何のことかな？」

苦笑いしながら、なるべく丁寧に聞き返すとアリスはしばらく考えのような仕草を見せ、ふむ……と、感心するように呟いて、答えた。

「お前とカイルは兄弟ではない」

「普通に血の繋がった兄弟だけど？」

容姿もそっくり……とは言わないまでも似ているはずだ。
髪の色、瞳の色、顔立ち……明らかな血の繋がりを感ずる。

「そういう意味ではない」

だが、彼女は静かな……それでいて、多少苛立ちを感じさせる口調で否定した。

「お前は『呪い付き』だろう？」

「俺が『呪い付き』だから兄弟じゃないと？」

アリスは小さく頷く。どうやらそういうことらしい。
なるほど……と、思う。確かにその問題は昔、考えたことはあった。

この発想は……兄とホルスが湖の怪物を倒せると考えていることを併せると……。

「君も俺と同じ『呪い付き』なんだね」

「……半端者ではない……か。信じ難い」

「おいおい、頭が悪い俺にもわかるように説明しろよ」

兄が呆れるような表情で俺の方を向く。

俺は一度アリスの方を見てから、小さく笑って兄に答える。

「彼女の勘違いだよ。カイル兄さんと兄弟じゃないわけがない」
「そうだね。女好きなところもそっくりだし」

タイミングよく茶化してきたのはホルスだ。
こいつはアリスの言いたいことがわかっていて言っているのだろう。

だが、今は有り難い。

「それもそうだな。女二人と冒険なんて……流石は俺の弟だぜ」

兄もそう言っただけで笑う。

俺も確かに昔は悩んだ。だけど、今はもう悩んでいない。

クルト村での穏やかな生活……助け合い、色々なものを乗り越えていく中で、そのことについては俺の中で答えは出ている。

「俺は『ケイト・アルティア』だよ。他の何でもない」

「そう、お前は捨てたのね」

「どうだろう。俺はただ、正面を向いて歩いているつもりだけど」

軽蔑するような彼女の言葉を否定はしなかった。

この問題に関してはどちらが正しいというのもないだろう。

アリスにもかつての記憶が残っているとすれば……その過去が大事であれば大事であるほど、今を認めることは出来ないのかもしれない。

思えばあのサイラルも……か。

元の世界に戻るのだと……そう叫んでいた。

「それにしても『呪い付き』ってお互いわかるものなんだね」

「さてね」

ホルスの探るような問い掛けにはそう短く答える。

今回のように向こうがヒントを出して来れば、わかるかもしれないが……隠す気が相手にあれば普通は気が付くことはないだろう。

俺の場合は名前さえわかれば『ステータス閲覧』があるが、それを話す気はない。

「もう、用は済んだ」

アリスはそう呟き、立ち上がろうとしたが兄が腕を掴んで引き止める。

「待った。まだだ。座れ」

「お前の命令を聞く謂われはない」

小柄な彼女は立ち上がりつても座っている兄と背丈が変わらないが、強く命令するように声を掛けた兄にまるで怯むことなく、睨みつけていた。

兄は怖い怖いとおどけながらも彼女を強引に座らせる。

「短気だな。アリスちゃんは……まったく。仕事の話終わってないぜ？」

「こいつは必要ない」

「君がそう思っても僕達には必要なんだよ」

仕事の話……それをするためにアリスを残さなければならぬ……と、いうことは……兄とホルスの言っている仕事の話というのは……。

「ごたごたして悪いな。実はお前らに頼みたいことがあるんだ」

「湖の魔物……『ラストデイル』討伐に俺達も協力しろと？」

「はは、話が早いな。そうだ」

すぐには応えず、俺は兄をじっと見つめる。「冗談を言っている様

子はない。

ウルクの話によると相当危険な相手のはず……。

「カイル兄さん、断ると言ったら？」

クルスやシリアの安全にも関わる。

いくら勝機があろうと、会って生還した者がいないような魔物の相手をするなどという無謀な行為に、安易に付き合うわけにはいかない。

「困る……が、俺達だけでも行く」

「強制じゃないんだね」

「当たり前だろ。俺を何だと思ってんだ」

兄は呆れるように笑う。嘘ではない……嘘を付けばすぐに顔に出るから。

ちらりとホルスの様子を伺うと、落ち着いた様子で座っている。

もう一つ確認しなければいけないことがある。

「僕達は冒険者としては駆け出し。役に立つとは思えないけど」

この街だけに限定しても、俺達より強い冒険者はいるだろう。迷宮に潜ることで腕をかなり上げてはいるが……戦い慣れない湖

の上で、戦ったこともない強敵を相手にまともに戦えると思うほど、俺は自惚れていない。

「あーそれはな。アリスちゃん的能力と関わってるんだ」

上手く説明しようと暫く兄は呻いていたが、ホルスが助け舟を出し、代わりに説明を始める。

「僕から説明するよ。『クラストデール』は湖の中で自由自在に動き回る魔物。まず、普通に戦えば勝負にもならない。それはわかるね？」

「相手の大きさにもよるだろうけど……話を聞く限りそうだね」

ホルスは頷いて続ける。

「倒すにはまず、動きを封じないといけない。そのための能力をアリスが持っているんだ」

彼の説明を聞き、アリスの能力を初めて確認する。

一般技能は理論魔術特化……そして、特殊技能『心の蔓』。

名前からはどのような能力なのか想像もできないが……。

しばらく、アリスの方を不自然に見てしまったからか、不思議そうに彼女が俺を見た。

俺は慌てて自分の不躰さを誤魔化すのも兼ねて、彼女に能力のことを訊ねる。

アリスは嫌そうに口を引き結んでいたが、仕方なさそうに答えた。

「……能力のことは話たくないのだけど……仕方無いか……お前は目がいいらしいわね。度量衡は通じるはずね？ 何mくらい見えるの？」

「大体100m。視界の善し悪しは関係ない」

「なるほど。確かに使えるわね……」

そう言って彼女は考え込む。

「私の能力は30m。視線を相手のいる方向に向け続けなくてはいいけない」

「それって、厳しくない？」

視界の良くない水中の敵に使うにはあまりにも発動条件が厳しく、リスクが高い気がする。

だが、彼女は薄らと笑みを浮かべていた。先程のような小馬鹿にする笑みではない。

自分に自嘲しているようなそんな雰囲気があった。

「リスクは承知。いつ死んでもいいから構わないわ」

「おいおい、やめてくれよアリスちゃん。美少女が美女になる前に……とか世界の損失だぜ。ま、そういうわけだ。今のままだと、かなりの博打になってしまう」

兄もホルスもアリスの能力を知った上で……博打と知っていてもなお、それでも行こうとしているということか……何故そこまで……。

「カイル兄さんは、何故そこまで危険なのに戦うの？」

俺の心からの疑問に、兄は朗らかに笑う。

自分の正しさを少しも疑っていないやんちゃんな悪餓鬼のような顔。無謀で何も考えてなくて、とんでもないことを言っているのに何故か憎めない……そんな表情で。

「決まったら。俺が頑張れば困ってる奴が助かる。冒険者が命を賭けるには十分な理由だろ！ 助けられる方法があるのに怖いからやんねーってのは格好悪いからな」

リスクを常に考え、慎重に生きている俺には持てない笑顔だと思っただ。

悔しさもあるが、仕方がない気もする。

俺と兄では生き方の根底が違うのかもしれない。

「カイルは運を持っているんだ」

「……ホルスの口から運なんて言葉が聞けるなんてね」

「理解不能なんだ。でも、生き延びている僕が言っから間違いないよ」

そう言っホルスは肩を竦める。

兄はずっこんな風に命を賭けながら生きてきたのかもしれない。

まるで、物語の中の冒険者達のように。

俺は覚悟を決めて、顔を上げる。

「アリスさん。相手の方向がわかれば、見えなくても大丈夫なんだよね？」

「そうよ……まさか、命を捨てに来る気？」

俺は首を横に振る。命を捨てるわけじゃない。

「『クラストデイル』を倒すよ。ホルス……どうせ考えてあるんだろ？」

「ああ。君が来た場合の勝ち方は考えているよ。心配はいらない」

ホルスが口の端を持ち上げて笑みを浮かべて頷く。
クルスやシーリアを危険に巻き込むことになるが……俺は溜息を

吐く。

「二人とも、協力してもらおうよ」

俺はシリアとクルスに来るかどうかの確認はしなかった。
答えはわかりきっているからだ。

「ケイトの選択は正しい。カイルより私の方が強いし」

「当たり前よ。相手が強いから逃げるなんて……私には無いわ」

二人とも驚くこともなく、彼らへの協力を当たり前のように受け入れた。

クルスもシリアも他人を見捨てて逃げるなど、考えもしていないだろう。

彼女達は先程の話で、俺がいなければ失敗の可能性が高いということは判断出来たはずだ。

もし、兄の申し出を俺が断れば、クルスとシリアのために断ったということは直ぐに二人にはばれるに違いない。彼女達にとってそれは間違いなく、侮辱だ。

だから、俺は彼女達の好意に甘え、危険な戦いを選ぶ。
そして、誰も欠けずに勝利できるように考え、全力を尽くす。

「……意外ね。別に死にたがってるわけでもなさそうなのに」

アリスは不思議そうに俺の方を見る。

彼女の瞳には少しだけ興味の光が見えた。

「僕はカイル兄さんと違って、堅実に生きたいと思っているんだけどね」

苦笑しながら俺はアリスに答える。

だが、城塞都市カイルといい、この貿易都市エールといい……
どうもトラブルに好かれてしまっているようだ。

「堅実、堅実か……」

その言葉を聞いて、懐かしいものを思い出すような遠い目をしながら、続ける。

「そういう生き方も悪くはない」

「……そうかな」

穏やかな微笑みと共に呟かれた意外な答えに、俺は頭を掻いて生返事を返した。

第六話 一時の休息

兄からの依頼を引き受けた後、結局俺達は酒場で一晚泊まることになった。

割れた酒瓶と薙ぎ倒されたテーブルと椅子、そんな荒れた店内で起きた俺は頭を掻きながら、この酷い状況を作り上げて元凶の穏やかな寝顔を確認する。

「クルスに酒は二度と飲ませない」

自分に言い聞かせるように俺は呟く。

俺は酒を最後まで拒否したのだが、クルスはホルスの挑発を受けて酒を口にしてしまい……その後に待ち受けていたのは、酒瓶と料理が飛び交う惨劇であった。

挑発した本人は一番被害を受け、改めて苦手意識を強くしているそうだが……。

兄は嬉々として、酔っ払って暴れているクルスとの戦いに参加したため、俺はテーブルを盾にしながら、早々に酔い潰れたアリスやシーリアを一人で安全そうなカウンターの奥に運ぶ羽目になった。

そして、全員が酔い潰れ……一人だけ素面の俺は、割れた瓶の破

片で怪我をすることがないように一人で掃除し、全員に毛布を用意し……。

「何でもみんな平気で眠れるんだろう。この状況で」

気持ちよさげな寝息を立て続けている図太い面々を起こさないように、後片付けを再開しながら、俺は心の中で店を貸してくれた人に苦笑しながら謝っていた。

全員が起き出す頃には太陽は真上に近くになっていた。

酒を飲んだ面々はクルス以外は顔色が悪く、足取りは重い。

シリアは弱い癖に酒が好きなので何時ものことと言えば何時ものことだが、アリスは『今の身体』では、初めて酒を飲んだらしく、二度と飲みたくないと言っていた。

今後の予定は、決まっている。

今日中に魔物と闘うための準備を行い、明日には情報収集も兼ねて、ウルク達『湖の民』が住む、中央付近の島に向う。

そして、その島で一週間ほど船の上での戦い方を『湖の民』から学んで訓練する。

実際に『クラストデイル』と戦うのは船上の戦いに慣れてからだ。

俺達は一旦兄達と別れ、港へと向う。

討伐に必要なものはホルスが大体考えて用意してくれているらしいが、準備はし過ぎるに越したことはない。最も何が使えるかはわからないが……。

「魚の匂いも何とか慣れたわね」

今回向かったのは漁港だ。

湖の沿岸部はまだ安全な方らしく、遠方には船を出せないがなんとか魚の供給を行うことは出来ているようで、魚の市が幾つも立っており、辺りには漁師らしい筋肉質な男達が暗い雰囲気吹き飛ばすような威勢のいい声を上げている。

「焼き魚も美味しいし」

昼食変わりの串に刺した焼き魚を齧りながら、シーリアは尻尾をぱたぱた振っていた。

湖の魚は大振りのものが多く、頭と内臓を落として、何のタレかはわからないが、濃い味のタレに漬けられたものを焼いているようだ。

これはこれで美味しいが、俺の好みからは少し濃い。

自分で釣った魚を俺が教えた味付けで食べ慣れているクルスも、魚を齧って微妙な表情をしている。魚の種類一つ、調理一つでも、全然違う。

こういうのも旅の醍醐味なのかもしれない。

「味が大雑把」

「いつもの味付けは俺が考えたものだから、一般的じゃなさそうだね」

クルト村では山に生えている唐辛子のような実を粉末状にしたもので味付けをしていた。釣りをする者が少なかったこともあり、当然、俺達以外にその味付けを知っている者はいない。

だが、食べ慣れている者にとっては珍しかろうがそちらが普通なのだ。

「そういえば、ケイトとクルスは釣りが好きなんだってね。次に村寄ったら教えて！」

「やだ」

「じゃ、ケイトに教えてもらっわ」

「駄目」

クルスはそれぞれ一言ずつで否定し、シリアも彼女の反応を予想していたのか、あまり気にした風もなく、笑っている。

「で、ケイト。何で漁港の市に？ 昼食のためだけじゃないんですよ？」

気楽な様子で魚をちまちま齧っているシーリアの言葉に俺は頷く。役に立つ……漁師が用意出来るものなら、ホルスは気づくだろう。

俺としてはそれ以外の役に立ちそうな物、俺の元いた時代にはあったがこの世界にはない、大型の魔物が相手でも通用しそうな道具……そういうものが見つからないかと考えていた。

この漁港にある漁の道具を確認し、逆に無いものを考える……難しいかもしれないし、無いかもしれないが何もしないよりはいいだろう。

『クラストデイル』がどんな姿かはわからないけど……水の中を移動するわけだから、何か役に立ちそうなものはないかなと思っ
てね」

「うーん、どんなのなら役に立つのかなあ？」

シーリアは首を捻り、クルスもうーん……と唸って下を向いて考え込んだ後、こちらを自信なさげにこちらに向く。

「釣竿で……釣る？」

「釣竿ごと持っていけるよ。多分。ま、何も思いつかなければ觀光でいいんじゃないかな。見たことがないものばかりだし」

俺は笑って、うねうねしている触手を持った青い軟体の生き物の入った箱を指差す。

蛸かナマコか……形容に困るが、どうやら買っているお客がいるところを見ると、ちゃんと食べられるものらしい。

「面白い」

「食べられるのかしら」

興味深そうに二人は不思議な生き物を眺めている。

この謎の生き物だけでなく、漁港の市では様々な種類の見たことのない魚以外の何か得体のしれない生き物も売られていた。

俺達は商売の邪魔をしないように注意しながら、それらの生き物の話を聞いたり、現在の漁港の様子を確認したり、『クラストデイル』について知っていることを聞いたりしていく。

漁港に置かれている魚を取るための網や仕掛けも一つ一つ使い方を考え、シーリアやクルスと話をしながら魔物との戦い方を考えていた。

色々と話を聞いてわかったこともある。

『クラストデイル』は、漁師の間でも有名で畏敬の念をもたれているようだ。

それも恐怖によるものだけではなく、尊敬している節すら感じるものだ。

遠出をしない漁師にとっては魔物の存在は、自らの漁場を守る存在であり、水の神の使いであるとすら考えているようだ。

決まった範囲しか現れないので自分達に被害をもたらさないというのも大きいのだろうが……遺跡らしき建物についても神の住処か何かと漁師達は考えているようで大体が、

「水の神さんの住処を荒らすとする罰当たりを退治してるのさ」

と、概ね漁師達はこのような反応だった。

『クラストデイル』に関わっている昔話や詩などもこの街には豊富に伝わっているらしく、陽気な湖の男達は何曲も披露してくれた。

俺にではなく、主にクルスやシーリアの方を見ながらだった。

結局、漁港では何も思いつかず、俺達は他の市場を廻ることにした。

俺が元の世界の漁の道具に詳しくなかったこともあるが、有効に使えそうなものは網や銚くらいしか思い浮かばなかったのである。

自分の想像力のなさには苦笑いするしかないが、本職の漁師達の知恵の強さを信じるしかない。

『湖の民』の支援を受けることもできるし、そこで思いつくかもしれない。

「あ、これが真珠かな？」

「おーよくわかったな、獣人のお嬢さん、お一つどうだい？」
「うーん」

アクセサリーを売っている露店などを、シールリアは消極的なクルスを引つ張って色々と見て回っている。クルスも迷惑そうな顔をしているが、楽しんでいるようだ。

染料の店やピアース王国にはない服の店、武器屋や書物……珍しいものばかりだ。

俺達は大きなヤシのような果実を一つだけ購入し、三つに分けて貰って中の甘い果実を齧りながら街を見て回っていく。

「何かお土産が欲しいわね。ラキシス様に贈りたい」
「仕事が終わったら、手紙と一緒に送ればいいよ」

木彫りの小物を触りながら呟いたシールリアの言葉に俺はそう返す。

「そうね。さつさと片付けて……雰囲気明るくなった街をゆっくり回って選びたいわ。品物の種類も増えるかもしれないし」
「怖くないの？」

俺は苦笑いしながら彼女に問いかける。

本当は俺だけが兄達に協力すれば済むことなのだ。

「怖いけど……ケイトもいるしね。役に立たなそうだけど、クルスもいるし」

シーリアは木彫りの小物を置いて静かに笑い、クルスをからかうように見る。

「シーリアよりは役に立つ」

「湖の魔物よ。剣より遠距離攻撃出来る魔法の方が役に立つに決まってるじゃない」

「弓使うし」

「水の中の敵にどうやって矢を当てるのよ」

俺を蚊帳の外にして、彼女達は二人でわいわいと騒ぎ出す。

相性が悪いのではないかと心配していたが、二人は意外と仲良くやっている。

自分にも関わりのあることなので人事ではないのだが、どうするべきなのか答えは出ない。

シーリアは俺がクルスを選んでも同じ調子で、態度を変えないだろう。

現に一度そう伝えているにも関わらず、今の調子なのだ。

シーリアに余裕があるのは大人だからだろうか……俺と出会った頃はもっと短気だった気がするのだが。それとも、他に何か理由があるのだろうか。

なににせよ俺達は湖に出るまでの短い休息の時を、楽しんでいた。
俺達それぞれが答えをきちんと出すまでは、このままでいいのか
もしれない。

第七話 出港

翌日、準備を整えて待ち合わせ場所に指定されていた港へ到着すると、ウルクと兄達は一隻の船の前で既に待っていた。

俺達が近づくと、ウルクは駆け寄ってきて泣きそうな顔で俺の手を両手で掴む。

涙目で上目遣いされると妙に女っぽくみえるため、俺は全力で身体を後ろに引いた。

何だかこの人は嫌いじゃないけど苦手だ。

「ケイトさん達も来てくれるんすね！」

「ま、まあ、成り行きで。よろしく」

「心強いっす！ カリフ様も若いのにいい腕だって言ってたし！」

カリフ……確か、ウルクの上司らしい身体のがっしりした水の神の神官か。

買い被られてるな……と思う。確かに年の割にはいいのだろうが。

「それで、私達が乗る船はこれ？」

好奇心を抑えきれないといった表情のシーリアが、兄達の傍の船へと近づいていく。

港には大小様々な船が停泊している。

小さな船は2、3人乗りだろうかと思えるボートのような船で、大きなものでも俺の記憶にある客船のような巨大なものではなく、精々遊覧船といった感じだろうか。

シーリアが興味深そうに見ている俺達が乗り込む予定の船は、クルーザーくらいの大きさだろうか。十人も乗れば窮屈になりそうな広さしかない。

「思ったより小さい」

「湖は浅いところが多いから、あんまり大きな船は無理なんすよ」

呟いたクルスにウルクは笑顔を見せながら答え、全員に船に乗るように声を掛ける。

用意は既に出来ており、いつでも出発できるようだ。

「見た目以上にしっかりした船だね」

「そりゃそうっすよ。これでも一応、軍船すからね」

繋がれている船に飛び乗ると、木製で軽そうに見えて意外と安定していることがわかり、内心驚く。俺の体重程度では揺れが殆どない。

慣れてないお陰で、それでも立つとふらついてしまうが……そんな

な俺を見て、ウルクはしっかりと立ちながら、余裕そうに笑顔を見せていた。

話を聞くと『湖の民』である彼は船と共に生きてきたような人間らしい。お陰で今回の任務を命令されてしまったのだと苦笑いをしていたが……。

船の内部には荷物を収納するスペースがあり、船尾に当たる部分には何だかよくわからない機械らしきものも設置されている。

オールらしき棒は収納庫に何本か置かれていたが、ウルクはそれを外に出す気配はない。あくまで予備的な物なのかもしれない。

収納庫には網等の漁のための道具や何本もの銚等も無造作に置かれていた。

他にもロープに鍵爪の付いた道具や、長い木の板などがあり、軍船として海賊の船に乗り込むことも念頭に置いていることを考えさせられる。

使用用途不明の道具などもあり、この辺りの使い方は後で確認する必要があるだろう。

食料や何かの餌らしき団子状のもの、釣竿、水の入った樽など、戦闘以外で使いそうな物も多めに準備されているようだ。

「ケイト。船楽しい？」

「クルスも楽しそうだね」

「うん。船はどうして浮くのかな。不思議」

ウルクが船を出す準備をしている間、好奇心の赴くままに船を調べていた俺にクルスが声を掛ける。彼女も船については楽しみにしていたのか、歩き回ったり、色々と触ったりしていた。

船に乗った経験のある兄達や船について知っているらしいシーリアはそんな俺達を呆れるように見ていたが……元々知らないことを知ることを楽しみに冒険をしているのだ。

今回のような体験は俺にとっては旅の一番の目的なのである。まあ、単純にこう……冒険心がくすぐられるとかそんな感じなのだが。

「どうやって動かすのかわからないなあ」

「うん」

俺はクルスと顔を見合わせて首を傾げ合う。暫く二人でそうやって首を捻っていたのだが、やがてクルスはくすりと小さく笑った。

「ケイトは何でも知ってると思ってた」

「そんなことないよ。知らないことだらけだ」

わからないのに明るい表情の俺を見てクルスは俺を探るように見つめ……そして、答えを見つけたのか小さく自分の手を叩く。

「だから楽しい？」

「そうそう、世の中楽しいことだらけだよ。一緒に色々見て回ろうな」

「……うん！」

他の人には見せない歳相応の輝くような笑顔でクルスは頷く。

探索を切り上げて甲板に上がる前に、俺も彼女に笑顔を返した。

甲板に上がると船首でウルクが四本の丈夫そうな紐を金具に括っ
ているところだった。その四本の紐は中間の金具を通して前と左右
の湖の中に消えているようだ。

そんな彼の作業を兄達やシーリアはただ眺めている。手伝わな
いというよりは、ウルクの手際があまりにいいので任せているとい
った感じか。

「終わったっす！ アリスさん……見てくれたっすか！」

「お疲れ」

最後の紐を括り終わるとウルクは飛び上がって、近くにいたアリ
スの方に走って手を取ろうとして……自分の手が汚れていることに
気づいたらしく、引っ込める。

背の低いアリスはそんな彼を見上げながら、面倒臭そうに呟いて
いた。

それでもウルクはめげることなく、今度はこちらに走ってくる。

足取りは安定していて、彼にとっては陸にいるのと変わらないようだ。

「お疲れ。船、結局どうやって動くのかわからなかったよ」

「あーふふふ。そりゃわかんないっすよ！　ちよっと呼びますね？」

ウルクは自信あり気に笑うと、船首に立ち胸を反らせて口を開く。

「……痛っ」

俺には何も聞こえないが、シーリアは片目を瞑って耳を抑えている。

他の皆は俺と同じように何も聞こえていないようだ。

「僕達の仲間っす。人間は道具使っすけど、『湖の民』は彼等と会話できるんすよ」

ウルクが指を指したその先には、魚……いや、大きなイルカのよ
うな生き物が前方に二匹、湖面から顔を出して俺達の方を向き、ヒ
レを振っていた。

「可愛い」

「これが、『レイクホエール』……初めて見たわね」

「この船には四匹いて、後の二匹は左右にいるっす」

レイクホエールの身体は黒と白の二色で構成されていて、一匹一匹適当に黒白でわけているかのように模様が全然違う。かなり大型で力は強そうだ。

顔を出した前に二匹にウルクは団子を投げ、船首から顔を近づけて労う。

オールも帆も必要ないわけだ……彼等が引つ張ってくれるのだから。

「その紐の先にレイクホエールはずっと繋いだまま？」

「仲間なんだからそんなわけじゃないさ。船動かすときだけっすよ。その時だけ、彼等と呼ぶんす。で、この紐で細かい指示を出して、湖を自在に駆けるんすよ」

レイクホエールについて語る彼は誇らしそうだ。

船に乗るまでは暗い顔をしていた彼も、船に乗った後は明るい表情を見せ、俺との会話も程々に、きびきびと船上を動き回っている。船が好きなのだろう。

「予想外だったなあ。これは」

「楽しそうね」

一人でぼやいていると、全然楽しそうではない口調でアリスが声

を掛けてきた。

俺は苦笑して頭を掻きながらも彼女に頷く。

「楽しいよ。この世界は何もかもが珍しいし」

「まやかしょ」

つまらなさそうにアリスは俺を否定する。

俺は彼女を少し見つめた後、ゆっくりと首を横に振った。

「現実だよ」

「現実なのに楽しいの？」

不思議そうにこちらを見つめてきたアリスに俺は頷く。

「現実だから楽しいんだよ。頑張れば一歩ずつでも進めるから」
「そう……？」

納得したのかそうでないのか、わからない疑問のような声でアリスは呟くと、彼女は興味がなくなったかのように後ろを向いて船尾の方に歩いていった。

アリスの小さな背中を見つめながら、『呪い付き』について、俺はどうしても考えてしまう。何故、彼女やサイラルのようにこの世界を否定するのかを。

彼等が特別なのか、俺が変なのか……どちらなのだろうか。
どちらにしろ、俺は変わらないけど……。

「おおー船が動いたわね！　どれくらいの速さなのかしら」

「うちのレイクホエールは超優秀っすよ！」

「偉いのはレイクホエール。ウルクが自慢することじゃない」

「クルスさん、酷いっすよ！　僕はちゃんと彼等に指示してるんすよ！」

楽しそうな彼等を見ながら俺は、否定しながら暗く生きるより、
現実を受け止めながらも明るく生きよう……そう考えていた。

船が疾走することで出来る、正面からの湖の風を感じながら。

第八話 湖の民

丸一日の船旅を経て、俺達は『湖の民』が住処としている群島に到着した。

ウルクの話ではこの辺りはそれぞれ手漕ぎの小舟で移動できる程度の距離に幾つもの島が密集しており、それぞれの島に『湖の民』が住んでいるそうだ。

エーリディ湖の中でもこの一帯は一風変わっており、この島周辺の湖の底にしか生えない青い草が群生している。

そのお陰で群島周辺の湖は青く染め上げられており、湖の他の場所とは一風変わった雰囲気醸し出していた。

「僕達『湖の民』の髪の色が青いのは、エーリディ湖に祝福されたからって言われてるんすよ。神様が湖の中央であるこの周辺の湖の色と同じにしてくれたんす」

少し照れたようにはにかみながら彼は説明し、笑う。
不思議な光景だった。

この島に来るまで、エーリディ湖は透明度は高いが普通の水草しか生えていない様子だったのに、ある場所を境に急に光景が変わったのだ。

「湖にも空があるみたい」

「本当ね。どうやったらこんなことになるのかしら」

クルスやシーリアも船から身を乗り出して、不思議そうに湖面を眺めている。

「ふふふーそれだけじゃないんすよ！」

「春になると、桃色の花も咲くそうだよ。さぞかし幻想的だろうね」

彼女達と並んで湖を見ていた俺の肩をホルスが説明を入れながら叩く。

一番の自慢を邪魔されたウルクは涙目でホルスを睨んでいたが、彼は気にする様子もなく、何時ものように微笑んでいた。

「『湖の民』の島に行く前にもう一度訓練をするよ。昼過ぎには上陸する予定だけど」

「了解。大分慣れたけど、ホルスを叩きのめすにはもう少し時間が掛かりそうだよ」

「折角優位に立ってるんだ。ケイトにはもう永遠に負ける気はないね」

そう言って俺とホルスは子供の頃のように軽口を叩き合う。

俺達は船に乗ってる間、練習用の剣を使って船上での戦いの訓練

を積んでいた。

船上では陸と異なり、狭い場所かつ不安定な足場でどう戦うかが重要となる。

兄ともホルスとも俺は練習で剣を合わせたが、現時点でホルスは俺を上回っていきそうだったし、兄には勝てる気がしなかった。

クルスの方もホルスにはかろうじて勝っていたが、兄には負けていた。

冒険者としての年月と潜った修羅場の数の差だろうか。

俺達の間には技術の差は無かったが大きなレベルの差が存在していた。

「湖賊でも襲いかかってくれりゃ、ケイト達のいい訓練になんのなあ」

練習用の木刀を用意してくれていた兄がそう言って豪快に笑う。
そんな兄から木刀を受取りながらホルスは苦笑いして肩を竦めた。

「カイル。湖賊相手だと魔法と遠距離攻撃で一方的に叩いて終わるから同じだよ」

「湖の掃除くらいにしかなんねーか」

物騒な会話をしているが二人とも気負った様子はない。日常のことなのだろう。

人であろうと敵対すれば倒すことは彼等にとって当たり前なのか

もしれない。

訓練で流した汗を湖の水を利用して洗い流して小ざっぱりした後、俺達は予定通りに昼過ぎに群島の中でも一番大きな島へと上陸した。

この島に寄ったのは、当面の拠点をこの島で用意するのと、この島に住む『湖の民』の族長から『クラストデール』に関する情報を得るためだ。

姿を見たものは全て湖の底に沈めていると言われているが、生存者が全くいないとも思えない。旧くからここを拠点としている『湖の民』なら何かを知っているかもしれないと思つてのことである。

それなりに整備された小さな港に船を係留し、道伝いにゆるやかな丘を登って行くと、そこは小さな畑や何軒もの家が立っている集落になっており、一番高い場所に他の家よりも一回り大きな屋敷が立っていた。

先に屋敷に入って族長との面会の許可を取つてきてくれたウルクのご案内を受け、屋敷の中を俺達は歩いていく。

内装は石と土、そして木材で作られており、ピアース王国の建築様式に近い。最も、他の国の建物はまだ見たことがないのだが。調度品は見たことのない芸術品も多く、三国入り混じっているような感じが。

そんなことを考えながらウルクの後ろを歩いていると、彼は大きな扉の前で立ち止まり、ノックをした。どうやらここで待っているようだ。

『湖の民』の族長は中から太く低い、だが大きな声で俺達に入るように指示した。

どうやらこの部屋は応接用の部屋らしく、繊細な細工が施されたテーブルとそれを囲むように椅子が置かれている。

『湖の民』の族長であるくすんだ青い髪の筋肉質な初老の男は俺達を見ると椅子から立ちあがり、席を進めてくれた。

「よく来られた。『リブレイス』の方。儂が『湖の民』の族長、ハーグ・エルドリアだ」

族長の印象は鋭い眼を持った戦士……というところだろうか。頭は下げているがそれでも威圧感を感じる。歓迎しているように見えて、どこか警戒している……一筋縄ではいかない喰えなさを持っているように俺には思えた。

席に着くと、こちら側の代表として、ホルスが自己紹介し彼がデイルラス帝国と交渉した内容を一つ一つ説明していく。

要約すると、デイルラス帝国に湖賊行為を働いていたのは『湖の民』ではなく、湖の遺跡を守る魔物『クラストデイル』であり、身の潔白を証明するためにこれを討伐するということだ。

この説明を聞いた、族長のハーグは顔をしかめる。

「デイルラス帝国は儂達を信じるか？」

「帝国も一枚岩ではありません。ご存知の通り主要二港のうち一港は『リブレイス』に賛同する貴族ですし、さらに高位の貴族にも仲裁に動いて頂いております」

ホルスは自信に満ちた表情で、ハーグに説明していく。

俺はホルスの説明に明確には説明できない小さな違和感を感じていた。

「ディラス帝国とて二正面作戦を行う国力は無く、経済上もこの問題の早期解決を望んでいます。こちらの提案を断ることはないでしょう」

「果たしてそう上手くいくかな」

ハーグは難しい表情を崩さずに、真っ直ぐホルスを見据える。

「『クラストデイル』を仮に倒せたでしょう。その後はどうなる。遺跡を巡って、新たな争いが引き起こされるのではないか？」

「それなら心配はいりません。『クラストデイル』討伐の功績はディラス帝国にくれてやることにはなりますが……」

落ち着いた様子でホルスはその質問を受け、用意していたらしい資料を彼に渡す。

そこには、何故か書類の他に白黒の写真のような物も混ざっていた。

「古文書等、長寿の種族の記憶、『呪い付き』による遠方からの調査により、あの建築物は遺跡ではなく、ただの墓所であると推測されています。ディラス帝国としては、この建築物を遺跡と主張し、協定の再締結の帝国側の譲歩としてこの遺跡の共同調査を提案する予定です」

「ふむ……だが、実際はどうかわかるまい」

資料に眼を通しながら、ハーグは疑いの視線をホルスに向け続けている。

だが、威圧感の込もったその視線をホルスは軽く受け流し、右手の指を擦り合わせ、にいつと口の端を歪めるような笑みを浮かべた。

「はい。ですからこの件に関する情報をピアース、ヴェイス両国の水の神の神官に伝えたのです」

「どういうことだ？」

彼はテーブルに指を置き、三角形を描く。三国を示しているのだろう。

そして、ディラス王国の方角に×印を作った。

「約束を反故にした場合、二国を焚きつけてディラス帝国の水軍を潰す……もしくは威圧します。簡単です。魔力石の取れる可能性がある重要な遺跡なのだと説明すればいいのですから」

「なっ……それでは三国協定がつ！」

「我々が守るのは協定ではありません。『湖の民』です。勿論現在

の形を維持するために全力は尽くします……が、一時耐え忍ぶことも必要になるかもしれません」

表情を引き締めて、ホルスは情勢は厳しいと……そう告げる。

『リブレイス』はディラス帝国の貴族と深く結びついているようだが、どういう立ち位置にあるのだろうか。何にせよホルスの言葉は額面通りに受け取らない方が良さそうだ。

俺達としての身の置き方を考えておかなければ、抜け出せなくなるかもしれない。

「それで……『クラストデイル』は倒しても問題ないですか？」

船での移動中にウルクに確認したところ、沿岸部では信仰のようなものは見られるものの長距離の移動を行う者達に取っては明確な敵であり、倒す事そのものには問題は無いそうだった。

ホルスが聞いているのは、彼の案通りに進めても大丈夫か……と
いうことだろう。

「一日考えさせてもらおう」

「……わかりました。それでは、『クラストデイル』の姿を目撃した者がいましたら教えてください。それと、この『湖の民』に伝わる口伝に詳しい者も出来れば」

「そちらに関しては直ぐに準備しよう」

ホルスは立ち上がって神妙な表情で頭を下げ、同じく人を呼ぶために立ち上がったハーグに付いていき、俺達もホルスの後ろを付いて歩く。

「ホルスは何か企んでる。あの癖。間違いない」

他の者に聞こえないよう、耳元でクルスが囁き俺も同意するように小さく頷いた。

あいつにはあいつの立場があるのだろうが……俺は俺の仲間を守るために行動する。ホルスの背中を見つめながら、俺は改めてそう決意した。

第九話 嘘と真

『クラストディール』……誰もが畏れる湖の魔物。

口伝によると、その名前は番人を意味しているという。

その姿が初めて確認されたのは七百年前。

今もなお生き延びているこの魔物は突如姿を現した。

「七百年前……『混乱期』の初期くらいね」

口伝を教えてもらいながら、シリアが俺達に時代背景の解説を入れる。

師匠であるジンさんの講義や読んだ本の内容から俺もそういうものがあつたということは知っているが、具体的な内容までは知らない。

シリアは学院でこのような歴史も学んでおり、俺よりも遥かに詳細な知識を持っていた。

「ああ、ごめん、『混乱期』っていうのはね……」

そんな彼女の説明によると七百年前辺りは、その前に起こった『

全滅戦争』と呼ばれる世界規模の大戦争が終わり、殆どの国が崩壊した暗黒の時代であるそうだ。

『全滅戦争』の原因は様々な議論が為されているが、戦争とその後の混乱のせいで資料が散逸し、何故このようなことが起こったのか原因はわかっていない。

その戦争自体は何十年かで収束したがその後百年以上の間、小勢力が血で血を争う『混乱期』へと突入することになる。

『クラストデイル』が姿を現したのはそんな時代らしい。口伝によると旅の者が、当時は『湖の民』が住んでいた島の一つを貰い受け、『クラストデイル』を放ち、その代償として真珠の知識を伝えたそうだ。

旅の者の目的は伝えられていない。恐ろしい魔法の研究を行っていたとも、大事な宝を隠したとも、誰も寄せ付けずに隠棲するため、そうしたのだとも言われている。

その『クラストデイル』の姿だが、目撃者の話を聞いても想像は難しい。

目撃者は他の船が襲われているのを偶然見てしまったらしい。湖中央部への深入りに気付いたその『湖の民』の漁師は当然逃げたそうだが、その時の恐怖を震えながら説明してくれた。

『クラストデイル』は大きめの船と同じくらいの甲羅を持つ生き物で、尖った頭で船を串刺しにした後、触手の様な手で船を解体しながら船上の人間を貪っていたそうだ。

彼等が見たのもその船が捕まったところからで、どの程度の速度

で捕まったのかわからないと言っていた。

「最悪のパターンは免れた」

その話を聞いた後、アリスは顔色一つ変えずにそう呟く。
彼女の能力は一体が対象であるらしく、『クラストデイル』が
単体ではなく、群れの総称であった場合には彼女は無力となるから
だろう。

「魚ではない。亀……でもなさそう」

「ま、当日になれば嫌でもわかるって」

眉を寄せながら悩んでいるクルスに、軽い調子で兄が笑いかける。
確かに目撃者が他にいない以上は後は実際に自分の目で確かめる
しかない。近付いて様子だけ見て逃げるという手もあるが、リスク
が高い。

相手の姿を一度よく確認するにしても、闘う、逃げる、どちらも
選べるよう訓練を積んでおかなければならなそうだ。

俺は漁師に描いてもらった絵を見ながら、そんな風に考えていた。

その日の夜、俺はホルスに声を掛け、二人で館の外を歩いていた。
クルスとシーリアには今回はついて来ないように頼んでいる。二
人でなければ話しにくいこともあるからだ。

淡い月の光が丘の下に広がる湖を微かに青く染めている。
岩に座り、眺めるその光景は美しいのだが……。

「こつという場所にはクルスやシーリアさんと呼ぶべきじゃないかい？」

「……俺もそう思う」

隣に座ったホルスがからかうように笑い、俺も苦笑いを返す。
だが、すぐに気を引き締める。

「ホルス。お前何を考えてる……いや、違うな……何故嘘を吐く？」
「遺跡の話かい？」

遺跡が『ただの墓』というのは明確に嘘だ。これについては『湖の民』の族長も気付いているのは間違いない。ホルスとてそれはわかつている。

恐らくあれは『対外的にはそうする』という意思表示だ。

まあ、その辺りはいい。おかしいのはそこじゃない。
俺にとってはもっと深刻な嘘だ。

「カイル兄さんに……だよ」

「僕はカイルに何も嘘は吐いていないよ」

ホルスは平然とそう言い切る。
にやついた顔を殴りたくなる衝動に駆られるが、大きく深呼吸して俺は気を沈めた。

「カイル兄さんは俺達のことは知っていても、クルト村の襲撃は知らない」

「どうしてそう思うんだい？」

「俺がカイル兄さんと何年一緒に住んでいたと思う？ カイル兄さんは過保護なんだよ。無事がわかっていてもエリー姉さんの心配をしないわけがないんだ」

つまりはそういうことだ。再会してから兄は自然だった。
自然過ぎたと言ってもいい。

「それなのに、あれから一度もカイル兄さんが村の話に触れることがない。俺の怪我の心配は何度もしてきたのに」

あの時、俺の言葉も兄の言葉も遮り、ホルスはサイラルの話を出した。
恐らく、クルト村の襲撃について話をさせないためだったと見当を付けたのだ。

俺の推測を聞いたホルスはなるほど、と一つ頷いて答える。

「嘘は吐いてないよ。今は伝えるべきではないと判断したんだ」

「何故？」

「カイルが危ないから。その判断は正解だったよ」

ホルスは頭を掻いて溜息を吐き、夜空を見る。

「カイルは君のことを信じていたから、俺の説得で平静な振りをすることが出来たけど、村の事を知っていたら、あいつを殺そうとしただろうからね」

「……あいつ？」

「アリスやサイラルの上司……ジューダス・レイト。とんでもない化物だよ」

忌々しそうにホルスは言い捨てる。

どうも本心から嫌っているように俺には見えた。

彼の口振りから、返り討ちに遭うから……ということだろうか。サイラルの能力、アリスの能力を考えれば……『呪い付き』達をもし、まとめているのだとすれば確かに勝ち目はないかもしれない。

「『リブレイス』も一枚岩じゃない。と、いうことか」

「否定はしないよ。ただ、カイルを僕が裏切ることではない。カイルは……」

ホルスは言葉を切り、正面を向いて笑みを作る。

「カイルは今のままでいい。彼には明るいところを歩いてもらう。それでいい」

「そんなことが出来ると思っているのか？」

純粋な疑問だった。ホルスは俺よりは年上だが、まだ若い。

色んな利害、悪意の満ちた場所で果たしてそんなことが可能なのだろうか。

しかし、ホルスは表情を変えずに頷く。

「やるさ。それが僕の役割だからね…… ケイトにも手伝って欲しいんだけど」

「俺にとってはどんな理由があるにしろ、『リブレイス』は敵だよ」

だろうね…… と、ホルスは小さく呟く。

彼の横顔は少しだけ寂しそうにも見えた。

カイル兄さんは心配だが、どうしようもない。ままならないものだと思う。

俺は冷たいのだろうか。

「ま、とりあえずは目先の『クラストデイル』か…… 勝てるのかよ。本当に」

「ケイト…… 怖いのかい？」

俺は話を変えようとして……嘘や真実などよりも、余程危険な相手がいることを思い出し力無く笑う。そんな俺にホルスは落ち着いた表情で問い掛けた。

からかっている様子はない……だから、正直に言った。

「怖いな。一昨日も昨日も震えて眠れなかった」

「奇遇だね……僕もさ。女の子達は平然としているのにね」

そう言っただけホルスは笑う。邪気のない、そんな笑いだった。笑いが吹き出しそうになるのを俺も噛み殺す。

「俺をそんな博打みたいな作戦に巻き込んだのか」

「君は巻き込まないと後で怒るだろう」

思いもしないことを言われ、思わずホルスをまじまじと見る。彼はわかってないのか……と呟き、両手の平を上に向けた。

「今度クルスに聞いてみなよ。絶対僕が正しいって言うよ」

そうだろうか。俺は理解できずに首を傾げる。

自分のことを俺は理解しているつもりだったが、他人からしかわからないこともあるということだろうか。困惑し、なんとなく左手で頭を掻いた。

話は終わったと判断したのだろう。ホルスは立ち上がって屋敷に帰ろうとして……ふと、思い出したようにこちらを向く。

彼の表情には……複雑なものが混ざり合っているように俺には思える。

彼は言いにくいことを言うべきかどうか迷っている風だったが、しばらくして口を開いた。

「ケイト。もし、僕がカイルを道具として扱い……利用し、私欲に狂ってしまったら……誰でもない、君が僕を止めて欲しい」

冗談めいた口調だった。だが、何故かそうは聞こえない。
俺はしばらく彼を見つめ……頷いた。

「……わかった。昔みたいに殴って正気に戻すよ」

ホルスは何も答えずに小さく笑い、手を上げて屋敷へと戻って行く。

俺は何故かすぐに帰る気にはなれず、月に照らされる湖を眺めながら、夜遅くまで考えに耽っていた。

第十話 戦闘準備

それから三日間、俺達は船上で闘えるように訓練し、船に備え付けられている武器の扱いを習熟させていく。

『湖の民』の族長、ハーグはホルスの提案を内心はどうあれ受け入れる判断を下していた。

但し、『リブレイス』の予想通りに事が運ばない場合には、自らの判断で行動を起こすことをホルスに説明している。ディラス帝国の工作は失敗の確率が高いと踏んでいるのかもしれない。

どう情勢が転ぶにしろ、『クラストデイル』は倒さねばならない。

そう、動きを止めることに成功しても、倒さなくては意味がないのだ。

話を聞く限り剣や鎧だけで倒せる相手ではない。

そこで出番となるのが船に固定された巨大な弩……バリスタだ。

本来、これは専用の銃の先に油を浸した燃えやすい布を巻きつけ、敵の船を燃やすことを目的とした軍船の基本装備である。

今回はこれを主武器にすることに決めていた。

弦を貼るために巨大なハンドルを回さなくてはならないため、かなりの労力を必要とするが、威力の方は期待が出来る。

「さて……どうだ？ ケイト」

「まだだよ。カイル兄さん。ウルク、そのまま危険水域に入らずにゆっくり廻って」

俺はウルクに指示を続けながら、バリスタのハンドルの近くにどかつと座っている兄に、探知の能力で湖の様子を確認しながら答える。

射手として兄の側にいるクルスの表情も心無しか硬い。

他の仲間達の表情も緊張で強ばっている。いつもと変わらないのは俺の隣に普段通りの無表情で立っているアリスくらいか。

ホルスとシーリアは網と魔力石を準備して船尾に座っている。

彼等の役目は『クラストデイル』を発見した際に、先日俺とクルスが何に使うか理解できなかった装置に魔力石を設置するのと、俺達を追う相手に網を投げつけることだ。

船尾の装置は動力の補助のための魔法装置らしく、これを動かすことにより船自体に推進力を持たせることが出来るらしい。

ただ、それだけで船を動かすには推進力が足りない上に燃費が最悪なため、あくまで船を引っ張るレイクホエール達の補助に利用されているようだ。

計画では『クラストデイル』の縄張りのギリギリの水域をゆっくり周回し、俺の探知範囲に入ったら、相手の速度を確認しながら徐々に距離を詰めさせ、アリスの能力の範囲内まで誘き寄せることになっていた。

そこからは俺もアリスも船尾に移動し、『クラストデイル』の方向を俺が指差すことで、アリスの能力の発動を助け、相手の動きが止まり、可能であれば俺も弓で攻撃に参加する。

問題は色々と山積みだが……うまくいくことを信じるしかない。

しばらく無言の時間が続き、風を切る音と船が作る湖の波の音だけが辺りには響く。

三十分程、そうして周辺を回り……。

俺は湖の中に見たこともないくらい巨大な生物の姿を捉えていた。こちらには気付いているのか気付いていないのか……危険水域の中を悠然と泳いでいる。

目撃証言は大袈裟ではなかった。まるで小さな山。

……倒せるのか？ いや、ここまで来れば出来ることをやるしかない。

「見つけた。『クラストデイル』！ 左……距離80！」

俺の大声で全員がびくりと身体を震わす。

敵のいる方角を指差している俺をウルクはちらりと確認し、相手との距離に注意しながら危険水域にゆっくりと移動していく。

俺は必死になって距離と位置を知らせていたが、何度も訓練をしてきたにも関わらず、心は重圧で押し潰されそうになっていた。

そして……湖の巨大な魔物は俺達の存在に気が付いた。

水面から俺達を確認するように頭を出す。遠く離れていてもその姿は容易に確認できる。

硬そうな尖った頭、左右歪んだ位置に付いた黒々とした大きな目、サメのように尖った歯……とてもこの世の生物とは思えない。

恐怖で引き攣りそうになったとき、兄は立ち上がり声を上げて明るく笑いだした。

「うはははっ！ でけえっ！ おいっ……でかすぎだろ！」

「カイル兄さん……？」

兄はそんな巨大で醜悪な魔物を見ても楽しそうな声を上げ、恐怖など微塵も感じていない様子で立ち上がる。目には茶目っ気に溢れた力強い光が点っていた。

「よっしゃ！ 今日は晩飯は『クラストデイル』の丸焼きだっ！」

「あんなの食べたくないよ」

全員が苦笑しながら頷く。だが、緊張は少しそれで解れる。

俺は『クラストデイル』の手の内を調べるために眼を凝らした。

相手の使う技能を俺は知ることが出来る。これは兄達には話してないが使っしかないだろう。俺も死にたくはない。バレなければ

一番だが。

『クラストデイル』が使っている技能で特殊そうなのは、『音波』と『ウォーターブレス』。ウォーターブレスは何と無く想像できるが音波……？

一瞬考えたが、相手との距離を把握し続けることにより、俺は直ぐにその正体に気付く。

相手の速度の割に、予定より相手が近付き過ぎている！

「ウルクっ！ 船のスピード落ちてる！ 『声』だ！」

「え……、そうか！ ——っ！ これが逃げられない正体つか……」

ウルクが何事かを四匹のレイクホエール達に語りかけると、相手との距離が残り50mのところまで近付くのが止まり、一定の距離を保つようになった。

彼は紐の操作を真剣な表情で行いながら呟く。額には青い髪がべったりと張り付いていた。

「声に惑わされず、紐の命令だけを信じるように指示したっす。『クラストデイル』は音で彼等を惑わしていたらしいっす……他の人は気付かなかったんすね」

近付いた獲物を捕まえるために、まず、レイクホエールを混乱さ

せ、動きを止めたところで止めを指す。それが『クラストデイル』の狩りなのだろう。

だから、出会ってから逃げ切った……という事例が存在しないのだ。

船はレイクホエール無しでは動くことすら出来ないのだから。

こめかみに汗が流れるのを感じ、腕で拭う。

そんな俺達のやり取りを俺の隣に立っているアリスは興味無さ気に聞いていたが、光のない蒼い瞳を俺に向け、船尾の方を指差した。

「そろそろ行くわ」

「俺も手伝うけど……気を付けて」

頷いてアリスに答えると、彼女は少しだけ眉を寄せて俺を見上げる。

「お前は馬鹿だろう。敵相手に」

「今は仲間だよ」

「偽善者が。まあいい。能力使用中の身体は頼む」

彼女はそう言い捨てて、身軽な動作で船尾に向かって駆けていく。俺も彼女の後ろを追いかけて、クルスとシーリアが網を投げるために待機している船尾へと向かった。

網をつかんで座っているホルスは微笑んでいるが……これは強が

りだろう。シーリアの方は気負ってはいるが怯えている様子はない。耳をピンと立てて、湖を凝視している。

狩りの本能が疼いているのだろうか。

「ケイト。作戦開始？」

「余裕そうだね。シーリアは」

「当然！ ゲイルスタッドの名を持つ者は、どんなに強い相手でも華麗に倒すのよ」

にいつと、悪戯好きな少年のように彼女は笑う。

今日の戦いは華麗とは程遠い物にはなりそう……だけど、少し元気は出た。

俺はウルクに指示を飛ばす。同時にホルスとシーリアにも網を用意するように声を掛け、俺は相手との距離を真剣に計り続ける。

「徐々に減速！ 45!……40!……35!……30!……25! 網投下！」

「私の出番ね。これほどの巨体に効くのかしら」

俺が指し示す方向にアリスは視線を向けながら、怖いことをさらにと呟く。

彼女の能力は速攻で動きを止めるものではなく、徐々に相手の自由を奪っていくものであるらしい。能力は……発動しているようだ。

能力が発動すると動けない彼女の身体を俺は後ろから抱えるように支える。

「嫌な奴ね。男相手なのに嫌悪感が湧かない」

かろうじて動かせる頭で『クラストデイル』を視線で追いながら、彼女は聞こえるか聞こえないかわからないくらいの苛立つような声を上げる。

意味を聞き返す余裕はない。俺は油断せずに相手の位置を示し、ウルクに声を掛けるために叫び続ける。

『クラストデイル』の速度が落ちてきているために、その都度修正が必要になるのだ。

「捕まえた。抑え込む……行ける……持たせる……」

「速度を上げながら旋回！ 『クラストデイル』への反撃を開始する！」

全員が飛ばされないようにしっかりと船に捕まる。

俺もアリスを抱える手に力を込めながら、船に付けておいた縄を腕に巻き身体を固定させ、もう片方の手で敵の位置を示し続けた。

「私も今度そうやって支えてもらいたいわね」

杖を持ち、片膝について体が慣れるまで屈みながらシーリアが不敵に笑う。

軽口に俺とホルスが苦笑いし、アリスが小声で「馬鹿」と呟く。

「距離20！」

「顔を出させる……やはり……手強い……」

「バリスタ構え！」

能力使用の負担か、彼女の表情には早くも疲労が見える。

彼女の能力が使えなくなった時には、倒しておきたいところだ。

「やあつと出番か。クルス！　しっかり狙えよ？」

「言われるまでもない」

兄の元気な声と、クルスの面倒そうな声が聞こえ……ガアアン！と重いものを叩きつけるような音と共に矢が放たれ……湖面から顔を出した『クラストデイル』に命中する。

湖を震わせる、声無き絶叫と共に……俺達と湖の番人『クラストデイル』の戦いは幕を開けた。

だが、相手の身体の巨大さに比して、バリスタの鋸は余りにも小さい。

絶望に飲まれそうになりながらも、俺は最善の行動を取り続けるために、相手の動きを知らせ、作戦を遂行するための指示を出し続けていた。

第十一話 湖上の戦い 前編

『クラストディール』を中心に、一定の距離を保ちながら船を動かす、アリスの能力で相手が湖面から出た瞬間を狙い、クルスがバリスタを打ち込む。

何度もそれを繰り返し続けているが、一向に倒せる気配はない。だが、湖面を染めている赤い血液が攻撃は無駄ではなく、有効に効いているのだということを俺達に教えてくれた。

ただ、その山のような巨体にどれほどのダメージがあるかはわからなかったが。

それに完全に動きを止めきれているわけではなく、相手は無数の触手を振り回し続けており、それを避けるために思い切って近づくことは出来ていない。

あれに一度つかまれば転覆は避けられないだろう。
それくらいに一本一本が太い。

「アリス、大丈夫？」

「心配ない。抵抗は激しいが……捕まえている」

彼女の身体も熱がこもり、じつとりと汗が服を濡らし始めている。体力の消費はかなり大きそうだ。

『捕まえている』というのは、彼女の能力の性質に関わっているのだろうか。

当初の説明である『動きを止める』だけでなく、ある程度思惑通りに動かすこともできるようだ。

彼女の能力である『心の蔓』……サイラスの能力がそうであったように、強力な能力なのかもしれない。山のような大きさを誇る『クラストデイル』ですら捕まえるのだから。

人間であればどうなるのだろうか。

「準備完了！」

兄の声が響き、それに併せてアリスがグツと身体に力を入れて能力を強める。

一方の『クラストデイル』の方も無抵抗ではない。

動きを殆ど止められながらも巨大な甲羅の下にある無数の触手のような腕をこちらに向け、圧縮された水をまるでホースのように連続で飛ばし続けている。

幸い狙いは悪く、船には命中はしていないが水を叩く音の大きさと水飛沫から考えて、直撃すればただではすまないだろう。運悪く船に命中しそうなものは、ホルスが精霊魔法で水の精霊を呼び出して、なんとか逸らし続けていた。

決め手がない。確実に仕留めるための決め手が……。

「くうー！ 私の魔法じゃ表面を焦がすだけね」

「威力のある魔法は？」

「倒れるくらい魔力を込めてもあれ相手には微妙ね」

悔しそうにシーリアは膝を付き、杖を持っていない手で船の取っ手を掴みながら『クラストデイル』の方を睨みつける。自分の不甲斐なさ責めるように唇を噛みながら。

「獣人。役に立たないなら後ろの変態と変わりなさい。ダメージは蓄積して、もう甲羅は湖面から出ている。後はこいつに弓で狙わせたほうがいい……目を」

アリスから役立たず呼ばわりされたシーリアは一瞬、怒りで眼を見開いたが、不機嫌そうにだが頷いて、俺の矢筒を手を取った。

何故矢筒を？ と疑問に思ったが、理由をアリスはわかっているのか、それとも交代をしないのが嫌なのか「ちっ……」と舌打ちを鳴らす。

「待ちなさい。矢じりに命中した後、爆発するように細工をするから」

「なんか、危なそうな魔法だなあ」

「使わないのは湖に捨ててよ？ 矢筒にも入れたら駄目よ？」

苦笑しながらシーリアは杖を振り、一本一本に魔力を込めていく。残っている魔力を全て使おうとしているのか、矢じりから漏れた魔力が淡く光るほどに込められていた。

彼女が魔法を使い終わると、俺はシーリアにアリスの小さな身体を託し、位置を変わって立ち上がり弓を構える。腕には飛ばされないうように縄を巻いており、足元は大きく揺れている上に狭く、不安定だ。

だが、相手の距離は近い上に大きい。目を狙うのは不可能じゃない。

森では似たような条件で小動物の狩りもしていたのだ。

相手は動くが俊敏という程ではない。

「ケイトの弓って実際どんなものなの？」

自分の役目は終わったとばかりに、シーリアは気楽な様子で俺に問いかける。

俺は矢を放つ機を伺いながら、後ろは振り返らずに答えた。自信を持って。

「弓なら……ここにいる誰よりも上だよ」

「クルスが聞いてたら怒りそうだね。僕は否定しないけど」

「負けず嫌いだからね。クルスは」

「君もね」

ホルスは相手の方を向いて複数の水の精霊に細かく操り続け、命中しそうな相手の攻撃だけを、最小の動きで逸らしながら笑う。彼の魔法の技術は相当訓練したのか俺よりも上だが、それでもこの数を集中しながら操作するのは大変なのか表情は硬い。だが、どこか楽しげだった。

俺は頷いて、弦を引き絞り『クラストデイル』の顔が湖面から上がり、眼を狙うことが出来る瞬間を待ち続ける。

『クラストデイル』の悲鳴のような絶叫も、波の音も、風を切る音も……全ての音が消えていく。顔の近くにウォータープレスが飛んできたが、ホルスが守ってくれる。

冷たい大量の水飛沫が顔に掛かる。だが、俺は気にせず狙い続ける。

師匠のガイさんはよく言っていた。

狙撃に必要なのは才能ではなく、集中力と機を待ち続ける忍耐だと。

そして、相手を絶対に仕留めるという鉄の意思。

それを支える無限とも思える幼少からの練習。

バシャアア！ と大きく水飛沫を上げて尖った頭を水面から出した瞬間、一射目を射る。

矢は相手の右目の少し上に命中し、数秒を置いて爆発を起こした。

「あ……惜しいっ！」

「違うよ。今は次の狙いのための試し撃ち」

悔しげな声を上げたシーリアに答えながら、俺は二射目を番える。予想以上に狙いに近い場所に飛んだ。これなら行ける。

今ので大体の感覚は掴んだ。

……次は外さない。

狙いを定めている間にも激しい攻防が繰り返されているが、気にしない。

それは風景のようなものだ。

弦を引く。

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ！」

甲高い叫び声。音域が高いのだろう。

耳が痛む……。

⌈
⋮
⌋

『クラストデイル』と目が合った気がした。その瞬間、全力で引き絞った矢を放つ。

「……よし」

狙い違わず一射目よりも僅かに下、右目の中央を打ち抜き、爆散させた。

右目があった場所は決れ、完全に失われている。

どの程度、相手が目に頼っているかはわからないが、使い物にはならないだろう。

シーリアとホルスの歓声を聞きながら、俺は小さく息を吐いた。
だが、まだだ。

「左目が残っている」

アリスの冷静な声に俺は気を抜かないよう、齒を食いしばって頷く。

左目は右目よりも齒に近く、湖面に隠れやすいため更に狙いが難しい。

それに……これも決め手にはならなそうだ。

『ラストデイル』の攻撃は適当に放ったとしても、運が悪ければ俺達に致命傷を与えるだろう。それを止めるには、倒すしかない。その方法が思いつかない。

「この魔法をバリスタに使っておけば……」

矢を持って少しだけ考えていた俺に、アリスは小馬鹿にするような笑みを向けた。

「頭が固い男ね。さっさと左目を潰しなさい」

「……何か手が？」

「お前本当に『呪い付き』？ 頭の中までアナログになっているのね」

低く喉を鳴らして暗い笑みを浮かべるアリスは、心の底から軽蔑するようにそう吐き捨てる。しかし、何故か表情には余裕が無いように俺には思えた。

恐怖ではない……何か。焦り？

「ケイト！ 残る左目も頼んだわよ！」

「そうだね」

何にせよ、自分に今出来ることは一つだけだ。
残る左目を潰す。

俺は再び無心になり、弦を引き絞った。

第十二話 湖上の戦い 後編

時折飛んでくる水飛沫で目を痛めながらも俺は必死で狙いを付ける。

俺には目の前で痛みに狂って大暴れしている山のような化け物をどうこうする方法などとは思いつかばないが、アリスには考えがあるらしい。

彼女は魔術の習熟度も魔力もシーリアより上だが、絶対的な差とまでは言えない。

どんな方法なのか検討も付かない。

だが……。

どちらにしろ左目を潰すことには意義がありそうだ。

右目を失ってから、触手は大きく振り回しているが狙いは出鱈目になっている。

ある程度の効果はあるようだ。

「くっ……」

尖った頭を振り回し、何かから逃げるようにもがく『クラストデイル』は大きな水音を立てながら暴れているため、狙いが上手く

定まらない。

一度弓を引くのを止め、口で矢の羽根をくわえて両手の汗を拭き、弓を構え直す。

「ふう……」

息を吐いて、息を止める。

狙うのは顔を上げようとする瞬間だ。

『クラストデイル』の頭は大きい。一度顔を上げれば水に落ちるまで、二、三秒はある。後は動きを予測すればいい。

慌てない。まだだ……。

小さく顔を上げ、直ぐに潜る。

「行く」

囁くようなアリスの声。能力を強めて確実に相手の頭を出してくれるということだろう。

見ていた限り、その能力を使う瞬間は彼女の表情は苦しくなる。

恐らく身体への負担は大きい。

……一発で決める！

相手が暴れて出来た波で大きく船は揺れる。だが、問題はない。
水面から尖った頭が見え……。

「……ふっ！」

息を吐き出し、指を放す。

「いい腕ね」

「……それほどでも」

はあああ……と大きく息を吐いて脱力する。

俺が放った矢は狙いを違わず、『クラストデイル』の歪んだ左
目に命中し、爆散させた。

「それで、この後はどうするのかな？」

そんな俺の問いかけに、金色の濡れた髪が目に入らないよう、シリ
リアに髪に手を入れてもらいながらアリスは薄らと笑う。

「あいつは今暗闇の中にいる」

「え……？」

「耳は退化している。鼻は効かない。身体も動かない。音は私に封

じられている」

に……と、口の端を持ち上げてアリスは笑みを浮かべた。
ネズミをいたぶる猫のような嗜虐的な表情……俺はそんな風に思う。

ネズミにしてはサイズが大きすぎるが。

「心は生まれて初めて感じる狩られる恐怖で染まっている。まるで子犬ね」

嬉しそうにアリスは声を上げて笑い……昏い瞳で俺の方を見た。
一向に慣れない……寒気が走る。

「ウルクに能力を解くから用心するように伝えなさい」
「能力を解いて大丈夫？」
「音波は完全に封じた。身体は封じきれなかったけど、視界に変わるものはない」

彼女の『心の蔓』というのは、持続の効くものなのか……わからない。

サイラルの『結界』より、謎が多い。敵になったら……。

畏れを感じるのを隠すように俺は齒を食いしばってから、叫ぶ。

「ウルク！ 能力を解く！ 相手は動くがこちらは見えない！ まぐれ当りに注意しろ！」

「了解すす！」

アリスが何をする気かはわからないが、何かあれば言うだろう。
俺はシーリアが魔力を込めた残りの矢を手に取り、再び『クラス
トデイル』を狙う。

今度の狙いは馬鹿でかい口の中だ。狙いやすい。

「さて……と。杖、借りるわね」

少しふらつきながら落ちているシーリアの杖を拾い、両手で持つ。
息も少し乱れ、倒れないようシーリアが後ろに控えていた。

「大丈夫？」

「魔力は消費していないわ」

微妙にずれた返事を返しつつ、アリスは一度深呼吸し、杖に意識を集中する。

「全員、私が魔法を使うときは伏せなさい……死にたくなければね」

それだけ警告すると、彼女は静かに魔法を行使するための詠唱を始める。

普段聞き慣れているシーリアのものとは少々異なるようだ。

「ディラス式ね。詠唱を聞く限り、攻撃するようなのに思えないけど……」

「どんな意味があるの？」

相手の口の中に矢を放り込んでから一度下がり、シーリアに訊ねる。

アリスはその魔法に自分の魔力を全て注ぎ込むつもりらしく、かなり集中しており、頭の上で話す俺達を気にする素振りもない。

身体の自由を取り戻し、混乱し、狂ったように動き回る『クラストデイル』を冷めた目で見つめている。

「複雑でわからない……けど、何かを細かく振動させてる……っばい？」

「大人しく警告を聞いたほうがよさそうだね」

魔法への知識が深いシーリアですら理解できないらしい。

だが、彼女の口振りでは俺ならわかってもおかしくなさそうだった。

繊細な硝子のような透き通る詠唱はまだ続いている。

大規模な魔法であることは間違いない。

「『正と負を……生み出せ』」

「ちょ……ケイトこの子、標的指定してない！ 全部威力に！」

「全員伏せろっ！」

杖に魔力を込めてアリスが杖を振り下ろし、そのまま杖を捨てて床に伏せた。

同時に何度もの爆音と悲鳴が上がり、視界が真っ白に染まる。

音が止むと辺りは静寂に支配されていた。

全員が声を失い、呆然としながら頭を振り、何とか立ち上がる。ウルクも自分を取り戻したのか操船に戻っていた。

『クラストデイル』を見ると白煙を上げており、ぴくりとも動かずに浮いている。

「まさか……雷？」

「似たようなものよ。あいつの近くに高電圧を生み出して流してやれば、鉄製の銚から体内に流れてくれるかもと思ってね。どうかしら」

電気の存在、原理を知るものはこの世界では少ないだろう。彼女は魔法でそれを実現した……ということか。

「ちっ……しぶとい。まだ生きているわね」

能力を使ったのだろう。死んでいれば心もない……というところか。

悔しそうにアリスは舌打ちをしている。

だが、相手も明らかに虫の息だ。

巨体の殆どの部分は無傷なものの、頭は焼け焦げ、眼は潰れ、口の中も挟れている。

白煙が身体の至るところから、上がっていたことを考えると内部のダメージも大きそうだ。

「ウルク……止めだ！ あいつのすれすれを通れ！」

楽しそうに兄が声を上げる。

ふとそちらを見ると、バリスタの巻き上げを終え、兄は両手剣を構えていた。

すれ違いざまの一瞬で斬る気か！

「カイル兄さん、無茶な！」

「俺を信じる！ ケイト！」

「もっ……！ どうなっても知らないっすよっ！」

ウルクは左舷と相手の頭がすれ違うように迂回して位置取りし、場所が決まると全速力で船を走らせる。

俺も慌てて矢を番え、相手の接近に備えた。

なるようになるしかない。覚悟を決める。

ずっと離れて攻撃していたが、近付くと『クラストデイル』の大きさは圧倒的だ。

大きな船の先端のような頭が迫って来て……。

「うおおおおおおおおお！」

兄が吠える。

身体を回転させて遠心力を付け、すれ違いながら尖った頭の下に潜り込み、斜め下から力無く浮いている『クラストデイル』を切り上げた。

クルスも至近から銛を撃ち、俺も続くように弓を放つ。

ガシイイッ！

『クラストデイル』の巨大な頭が通りすぎるのと同時に鈍い音が響いた。

俺は慌てて兄の無事を確認する。

「こ、怖ええええ……」

「無茶すぎだよ。カイル兄さん」

手には剣が無かったし、吹っ飛ばされて大の字になって倒れていたが怪我はないようだった。

ふう……と安堵の息を漏らす。

先ほどまでビクビクと震えていた『クラストディール』はぴくりとも動かない。

出来すぎの結果だった。

初めに作った優位を生かしきり、そのまま封殺することが出来たようだ。

「死んだわ」

アリスが冷たく呟く。今度こそ死んだらしい。

結局、一番活躍したのは彼女だったと思う。

彼女の力がなければ、どうすることも出来なかっただろう。

……だが、まだ終わっていないかった。

それは最後の意地だったのかもしれない。

心を掴まれた事への怒りだったのかもしれない。

もて遊ばれたことへの恨みだったのかもしれない。

触手の一本が水の中から飛び出し、背を向けているアリスを狙っ

ていた。

出鱈目に振ったものだろう。偶然のはず。

死んでいるし見えていない……最後のひと振り。本能だろうか。

戦闘を終え、油断していた俺達を嘲笑うかのような触手を高々と上げる。

油断なく、じっと死体を見ていて一番初めに気付いたはずのホルスはアリスの方をちらりと見たが動かない……嗤っている……？

気付いたとき俺は走っていた。

俺は勢いのまま彼女を抱えると、床に転がる。

僅かの差で俺の胴体くらいはありそうな触手が、アリスの身体があった場所を通り過ぎて船に激突し、轟音を鳴らし、大きく船を揺らした。

「ぐほっ！　せ、背中……痛た……あ、危ない……」

船の角で強かに背中を打って息も出ない。

いや、湖に落ちなかっただけ、運がよかったのだろうか。

死んでいなかったのだろうか……いや、俺にも生死を確認する手段がないわけではない。

痛みが引くのを待ちながら全員のレベルを確認する……上がっていた。

最後まで気は抜いてはいけない。

当たり前のことだが、忘れないようにしなければと思いながら安堵の息を吐く。

「馬鹿ね。敵を助けてどうする」

「しょうがない。俺は馬鹿だから」

「え……？」

立ち上がって俺を見下ろしているアリスに、痛みを必死で堪えつつも俺は笑いながらそう答える。

彼女は暫く驚いた様子で黙って俺を見ていたが。

「そう……」

それだけ呟いて彼女は俺の側から去っていった。
何故か……これまで見たことのない程の憎悪に表情を歪めながら。

第十三話 忘れられた遺跡

『クラストディール』の死体は湖に浮かんで悪臭を放ち、『湖の民』であるウルクを涙目にさせていたが、しばらく時間が経つと、まるで迷宮の魔物のように発光し、塵になって空气中に拡散していった。

元から存在しなかったかのように何の痕跡も残さず。

「あちゃー。消えちまった。俺の剣、湖の底かよ」

「曲がってたし、どうせ買い直しだよ。しばらく僕のを使うといいよ」

あぐらをかいて座りながら兄はぼやき、ホルスが兄の肩を叩いて苦笑いしている。

そんな風に二人は平然としているが、俺は左舷に背を預けて座りながら、呆然と巨大な魔物が消え去った後を眺めていた。

「……ケイト？」

余った銚を船内の倉庫に片付けたクルスが俺の隣にちょこんと座り、不思議そうにこちらを見る。心配させてしまったらしい。

他の仲間は、ホルスからの要請を受けて、ウルクは魔物のせいで近付けなかった建物のある島への移動を始め、シériaはアリスに先程の魔法について質問責めをして、鬱陶しがられている。

「ああ、倒した証拠が綺麗さっぱり消えてしまったなと」
「ん、カイルが別の証拠を探すため、島に上陸するって」

膝を抱えながら座っているクルスに、俺は頷く。
幸い『クラストデイル』以外、島に近づくのを邪魔する魔物は
いない。

ホルスならともかく、兄はいい探索の理由が出来たとばかりに喜んで
いるだろう。

それをホルスもアリスも止めないところから考えると予定通りと
いったところか。

俺にも好奇心はないわけではないし、証拠の必要性はわかるが、
後の厄介事を考えると放置するのが間違いなく正解だと思う。

証拠というならこうして船でここまで来れるということを見せれ
ばいいのだから。

俺は止めたのだが、多数決に負けてしまっていた。

「ケイト」

「うん？」

「勝てたね。あんなに大きい魔物に。大冒険」

クルスは大きさを表現するように両手を広げ、無邪気に笑う。
俺は苦笑いを返しながらも、その笑顔でようやく強敵に勝利し、
生き残ったのだという安堵と嬉しさが湧き上がった。

「魔物退治は……一応冒険のかな。それにしても……」

心地良い疲労を感じ、漏れでそんな笑いを我慢するように、大きく後ろにもたれて腕の上に挙げて身体をぐっと伸ばす。

「なんとかなるものだね。クルス、いい腕だったよ」

「ケイトはまあまあ」

「まあまあか……厳しいな」

「うん。ずっとまだまだ」

やれやれと俺は左手で頭を掻く。

本気で言っているわけではなさそうだ。

負けず嫌いなのか、それとも他に何か意味があるのか。
何にせよ言葉遊びを楽しんでいるようにも見える。

「疲れた。肩借りる」

そして突然、抱えていた足を伸ばし、頭を肩に乗せた。
クルト村にいた頃から気まぐれで自由な性格だったが、再会して
から更にその傾向が強まった気がする。そういうところも嫌いでは
ないが。

本当に疲れていたのかクルスは直ぐに寝息を立て始める。
神経を張り詰めていたのかもしれない。

そう思うと俺も急に目蓋が重くなり、目を瞑る。

島に着くまで十五分くらいしか掛からないが少しは休めるだろう
……と考えながら。

何百年もの間『クラストデール』のせいで、誰も入ることの出
来なかったその小さな島に足を踏み入れると、遠目からでも見える
立方体の石のような材質の建物を除き、全く人工物らしきものは見
当たらなかった。

湖岸にうち寄せられている船の残骸らしき木材の破片が、かろう
じであるくらいか。

当然、島に生えている木々は全く手入れされておらず、鬱蒼と茂
り、建物に通じる道も無く、虫に刺されながら歩かなければならな
かった。

時折、石で出来た釜戸のようなものが土の中に埋まり、その上に
木が生えているなど、時間の経過を感じさせるものも存在している。

言い伝えのように、この島にも本来は『湖の民』の祖先が住んで
いたのかもしれない。

「うう、やっぱり帰ってベッドで寝れば良かった」

「魔物はいないようだけど……建物の中にもいないことを祈ろう」

泣き言を言いながら草をかき分け、たまに尻尾を引つ掛けながら歩いているシーリアに少し同情しながら答える。

こういう植物が多い場所は彼女には向いていないようだ。

俺やクルスは森に慣れているが、シーリアは街暮らしだから仕方無いのかもしれない。

そんな小さなトラブルはあったものの島の中央に建っている大きな建物には、それ程時間は掛からず到着した。

『クラストデイル』との戦いの時のアリスの憎悪の表情は氣になっていたが、その時だけで、あ後はまた無表情……いや、無関心といった感じか。

特に変わったことはなかった。見間違えたのだろうか。

気にしないことにして、俺は目の前の建物を見上げる。

建物というよりは遺跡というべきかもしれない。

数百年経っても崩れることなく存在している、何か石のような素材で出来た建物。

ツタカズラが表面を這うように生い茂り、周囲は木々で囲まれているが、遺跡そのものは城塞都市カイラルの迷宮と異なり多少風化しているものの、傷は少なく、崩れる心配等はなさそうだ。

取り敢えず危険も無さそうのため、手分けして入口を探すことに決まり、入口を探しがてら、落ちている遺跡の破片らしきものを拾ってまじまじと見る。

「石じゃないな。何で出来ているんだろう」

「ケイトはそんな気になるのか？」

後で調べてみようと思ふと小さな袋に石を直した俺に兄は何故か呆れるような表情を向けたが、その理由が理解出来ず、俺は兄に問い返した。

「え、面白くない？ 凄い不思議だよ。数百年も崩れず残ってるなんて」

「俺はそんなことより、お宝が気になるぜ。お宝！ クルスもそう思うだろ？」

全く疲れを見せない兄はそう言って明るく笑い、話を振られたクルスの方は考えるような仕草を見せた後、首を横に振る。

「ケイトの話は面白い」

「いやいや、年寄り臭いところは駄目だー！ って、クルスも弟の駄目なところは駄目って、きちつと言わなきゃいけないぜ？」

「今回は必要ない。ケイトの古い物の考察の話は楽しいから。世界が見える」

「世界ねえ。そっぴやケイトはそれが旅の目的だったか。学者みだいな」

感心するように腰に手をあてて背中を反らせ、ううむと唸る。

兄の場合は本気で英雄物語みたいな冒険者になるつもりで旅に出て、今も同じ気持ちでいるらしいから、俺と全然違うのは当然だろう。

「入口見つけたよ！」

別れて探していたホルス達から声が上がリ、「おおっ！」と嬉しそうな声を上げて兄は楽しそうに走っていく。

「おい！ お前らも急げ急げ！ お宝が待ってるぜ」
「カイル兄さん、落ち着きなよ」

振り返らずに走り去っていった元気な兄の姿に、俺は変わってないな……と、思いながら、クルスと顔を見合わせて笑った。

遺跡の入口は半分程土に埋もれ、更には草が生い茂ることで隠されていた。

注意して見なければ見つからなかっただろう。

論理魔術を得意としている二人は魔力を使い果たしていたため、

用意していた松明に火を灯し、俺が先頭になって入っていく。

入口の向こう側は下り階段になっており、土で足を滑らせないように全員に注意し、慎重に奥へと進んでいった。

外観から空気の換気は出来ていない気がしたため、気分が悪くなれば即脱出と思っていたが、空気穴がどこかに存在しているのか、苦しくなったりすることは無く、順調だ。

魔物も能力で確認する限り存在していないようで、罾だけを警戒しながら進んでいくと遺跡内部を大きくくり抜いたような大きな広間へと出た。

何故広間ということがわかったかというと、松明が必要無い程の明るい光源があったからだ。
建物の殆どの部分がこの空洞が占めているらしく、かなりの広さで天井も高い

「中央で何か光っているね」

広間には配線のような太いチューブ状のものが無数に張り巡らされており、まるで生物の身体の中のような印象を受ける。

その中央に人が一人眠れるくらいの大きさの台座が設置されており、光源らしき子供でも握り締められそうな小さい珠……球体が強く青白い光を放っていた。

台座の周囲には砂のようなものが散らばっているが、それだけで

外には何もないようだ。

「魔法装置」

「こんな大きな初めてみたわね。冒険者になって良かった……つて……これ……！」

驚きの声を上げたシーリアは輝いている球体に近付き、屈んでそれを確認する。

やがて彼女は立ち上がり、俺達に呆然とした表情を向けた。

「間違いない。これ……見たことある……」

第十四話 賢の魔法装置

呆然と呟いた後、シーリアは真剣な表情で魔法装置の構造の確認を始めていた。

同じ魔術師であるはずのアリスは興味なさそうに、そんなシーリアへ冷めた視線を向けながら黙って様子を見守っている。

あの球体……石を見たことがある……シーリアはそう言った。彼女は魔法装置そのものにも見覚えがあるように見える。何故だろうか。

声を掛けても気付かないくらいに集中しているため、一段落付くまで待つしかない。

その間、他に何かないかを探してみたが、この巨大な魔法装置しかこの広間にはなかったため、床に腰を下ろして大人しく結論を待つ。

「シーリア……魔法装置……精霊石？」

「クルス、何か知ってるの？」

隣でシーリアの様子と一緒に眺めていたクルスが腑に落ちないといった表情で呟いた。

精霊石……聞いたことがない言葉だが……。

首を傾げつつも、能力で石を確認する……表示は？？？のままだ。
恐らくこの石は別の……何か特別な名前を持っている。

「マリアの昔話。あのエルフとシーリアが出会った時の話を聞いた」
「母さんとそんな話を……いつの間に」

俺に対して母さんは昔の話を一切しなかった。
理由はわからない。旅に出ることを望んでいなかったのだと俺は
考えている。

しかし、クルスに対しては色々と話をしているようだ。

「ラキシスが大事件を起こしたらしい」

「大事件？」

「ん……お陰でシーリアは生きてる」

「ええっと……その話の中に『精霊石』って石が出てきたってこと
？」

要点しか話さないクルスに確認を取ると、こくりと頷く。

「上位精霊から預かったからそうラキシスが名付けた」
「想像も付かないな……」

一体あの人は何をしたのだろう。

学んだ知識が正しければ上位精霊というのは自然災害クラスのはずだが……。

頭を悩ませながらシーリアの様子を見てみると、何かアリスに確認を取っている。

アリスの方はそれに対して、きちんと答えているようだ。

それで一通り調べ終えたのだろう。

シーリアが俺達の休んでいる場所へと戻ってきた。

表情は冴えない。落ち込んでいるわけではなさそうだが。

何か悩んでいるような……やるせないような……そんな雰囲気があった。

「魔法装置……どうだった？」

「ああ、うん。ピアース式でもディラス式でもない。七百年近く前って言うのは眉唾じゃないわね。とんでもない魔法装置よ……知っているのとは少し違うけど、似ている」

シーリアの話に興味があるのか兄とホルス、ウルクも彼女の周囲に集まる。

好奇心に胸を踊らされていそうな三人とは異なり、シーリアは厳しい表情を魔法装置の方に向けていた。

「これは『クラストディール』を召喚し、維持し続けるための魔法装置なの」

「おいおい、そんじゃあの化け物はその装置がある限り復活するっ

てことか？」

嫌そうに頭を掻いて顔をしかめている兄に、シーリアは首を横に振る。

これにはアリスを除いて全員がホツとしたような表情を見せた。

さすがにあんな化物がぼんぼん復活したら敵わない。

「そもそも、理論魔術の召喚魔法は自然をねじ曲げるから、効率が悪くて膨大な魔力を必要とするの。それでも召喚出来るのは小さな魔物……悪魔……というべきかしら……それしか呼べない」

「これは『クラストデイル』のような大物を可能にするための装置ってこと？」

「ええ。この装置は術者の魔力を力量以上に増幅させ、維持し、肉体を仮死状態にして保存する機能を持っている。その間の魔力は術者から……ええと、つまり……」

説明を続けていたシーリアがそこで言葉を途切れさせる。

言おうか言うまいか迷っている……そんな雰囲気。

だが、先を続けたのはアリスだった。
昏い瞳で、淡々と。

「この装置を利用して、自分自身を生贄に『クラストデイル』を召喚した。自分の身体を数百年間アレの養分とすることで……これまで維持をしてきたということ」

話された内容のあまりのおぞましさに全員が表情を変えて押し黙った。

想像すると、無機質な蠢いているようにみえる広間に張り巡らされた太い配線のような管が、何か悪意を持っているように見え、不気味に見える。

シリアの表情が優れなかったのも当然だ。

「その砂が術者の慣れの果て」

アリスは台座の上に散らばっている白い砂を指す。

「ようするに……だ」

兄はすぐに立ち直ったのか薄らと笑いながら台座の方にゆっくりと近づいていき、転がっている『精霊石』とクルスが呼んでいた青白い光を放っている石を手にとった。

「こいつはそこまでして、守らなければいけないお宝だったわけだ」

「カイル兄さん、手に持って大丈夫？」

「熱くないぜ。冷たくもないな。不思議な石だ……それ」

兄は俺に向かってその石を投げる。
急なことで慌てたが、何度かお手玉しつつも俺はなんとか落とさず
に受け取った。

本当に熱くない……不思議な石だ。
両手で包むと辺りは闇で染まり、指の間から溢れる光だけが薄ら
と辺りを照らす。

綺麗だ……そう素直に思った。
これは……この光は……魔力？

「その石は精霊石……お母様……ラキシス様がそう仰っていたのだ
けど」
「よっぽど重要な物のようだね。ラキシスさんならきっちり管理し
ているんだろうけど」
「……………も、もちろんよ」

シーリアの義理の母である落ち着いた大人のエルフの姿を思い出
し、安心する。
何故かクルスが嫌そうな顔をしているが……。

『湖の民』の口伝が正しいとして、『混乱期』の初期に文字通り
命を賭けて封印されたことを考えると、とんでもない物である可能
性もある。

そう、可能性として少ないが……いや……。

「飛躍しすぎか。シーリア、これ自体に危険は？」

「大丈夫よ。何に使うのかはラキシス様にもわからないそうだけど……雪山で急に光り出して、それ以来そのままらしくって……ただ、問題は他にあるわ」

だから、危険なものではない……彼女はそう言いながらも続ける。

「その石……『精霊石』……どうするの？」

「あー、それなんだがケイト。お前にやるよ」

兄は俺の肩を叩いて笑う。ホルスの方を確認したが、彼もこの石への興味はないのか……それとも俺に渡すことに意味があるのか平然と立っていた。

微かにアリスの表情が変わった……気がしたが、気のせいだろうか。

俺が顔を向けたのを察したのか、彼女はすぐに表情を消す。

「正直、厄介そうだから拒否したいんだけど。カイル兄さん」

相手が兄なので裏はないのかもしれない。

だが、俺は遠慮なくストレートに本心を兄に告げる。家族だから。

しかし、兄はアリスに背中を向けるように立ち、厳しい表情で小

さく首を横に振り、小声で囁いた。

「俺の勘だ。信じる……すまん」

「どうして……」

「なあ、ホルスもアリスちゃんもいいだろ？」

俺の問い掛けを無視して、いつもの笑顔で兄は『リブレイス』のメンバーである二人に確認をする。先程の様子だと、アリスへの問い掛けだろう。

「構わないよ。僕達の仕事は『湖の民』を守ることだしね。命懸けの仕事なのに少ない報酬しか渡せなかったし丁度いいよ」

ホルスは白々しい笑顔を浮かべながら、黙っているアリスの方を向く。

「……………まあ、いいわ。私にはもう必要ない」

黙って考え込んでいる様子だったアリスは口の端を少しだけ歪めて笑った。

ゾツとするような憎悪の込もった冷たい笑顔だと思う。

アリスは小柄だが流れるような金色の美しい髪を持つ美しい少女だ。

だが、俺には嫌悪感しか感じることが出来ない。

あまり話をしたこともないのに、偏見だと思う。

だが、彼女の笑みを見るたびに俺は心を驚掴みにされるような感触に陥ってしまう。

もうここに用事はないと、背を向けて入口に歩いていく彼女の背中を見つめながら、何か心の中に釈然としない……もやもやとした名状しがたい気持ち湧き上がっていた。

第十五話 終わらぬ緊張

あれから数日が流れた。

俺達は遺跡を出ると『湖の民』の族長に討伐に成功したことを報告し、ピアース王国の貿易都市エールへと戻っていた。

『クラストデイル』の討伐の成功を、エールの神官に伝えた兄とホルスは忙しそうにディラス帝国へと戻って行き、俺達が寝泊りしている宿には久々の静けさが戻っている。

アリスも一緒に戻るのかと考えていたが、彼女は水の神官や組織との関係で、しばらくこちらに残らなければならなかったらしく、兄達に頼まれ、未だに行動を共にし続けていた。

三国間の緊張状態は数日経った今でも変わっていない。

「うーん、そんな感じで動きはないっすね」

「そう簡単にはいかないか。やはり」

何故か夕食時に俺達が泊まる宿に顔を見せに来るウルクは現在の状況を説明する。

当人は、

「えーずるいつすよ。自分も美人に囲まれて食事したいっす」

と、本当か嘘かわからないことを言っていた。

普段の言動が言動なだけに、誰も疑ってはいないが……どうにも俺は落ち着かない。

ここ数日、エールに戻ってからは夕暮れ時までアリスは『リブレイス』の拠点を回り、俺達も彼女の護衛として付いていつている。現在の状況で近接戦闘の苦手な彼女が街を一人で歩くことは難しかったからだ。

報酬的に随分と割に合わないことになってしまったものだと思うが、シーリアの姿を見ると警戒している異種族の者達は友好的になるので、色んな立場の者の話を聞くことが出来るのは有難い。

俺の書いている日記……冒険記も徐々に書き進んでいた。

読み返すと一日一日のこと、情景、風景、その時に感じたことを思い返すことが出来る。

一冊書き上げるとクルスが持つていき、一つ一つ質問してくる……

まあ、前回書き上げた分はクルスが居なかった頃の分の記述が殆どだったからかもしれないが。

これは意外と楽しかったりする。

「ケイトさん、ヴェイス商国への入国の件っすけど、カリフ様が明日神殿に来て欲しいそうっす。手続きについて説明するらしいんで」
「わかったよ。ありがとう」

カリフは目の前で美味しそうに魚料理を平らげているウルクの上司で、がっしりした大男だ。水の神官の中でもかなりの上位者らしい。

実直な人柄であることが広く知られており、温厚そうで街の者からの評判もいい。

俺は『クラストデイル』討伐の協力への報酬として、金の代わりに三人分のヴェイス商国への入国許可証を要求していた。

貿易など商売でヴェイス商国の街を訪れるだけなら、身元がはっきりしていることもあり、簡単な登録だけで入国が可能なのだが、冒険者として港街から出て、ヴェイス商国で仕事も受けるとなると、相応の面倒な手続きと手数料を必要としたのである。

「水の神官達の様子はどうか？」

「いやいやー『クラストデイル』を倒したんで、英雄つすよ。英雄！ でかい顔出来るしモテモテっす。生きててよかったっす！」

そういうこと聞いている訳じゃないんだけど……と思うが、本当に嬉しそうに笑い、泣き真似をしているため、どうしようか悩んでしまう。

「使えないわね。そういうことを聞いているのではないわ」
「うっ……相変わらず酷いっすね。アリスさん」

俺の代わりに言ってくれたのはアリスだ。

彼女は遺跡の後には必要なこと以外、口を開かなくなった。

こちらを伺うような視線を感じることはあるが……そのたびにクルスがそれを遮り、何も話すことなく彼女と見つめ合っていることが多い。

何にせよ、俺達と打ち解けるとかそういう気はないということだけは、間違いなくはっきりしている。

「カリフ様が慌ただしく領主の館に何度も入ってるんですけど、それくらいですよ」

「なるほどね」

その返事だけを聞くと、再び彼女は食事を再開する。

彼女にとって聞きたいことはそれだけだったのだろう。

ウルクは涙目になりながらも、そこから会話を広げようとしてアリスを口説こうと頑張っているが、彼女はその全てを無視していた。

高位の水の神官が何度も権力者の下へと足を運ぶ。

つまり、難航していて全てがホルス達の思惑通りに進んでいるわけではない……と言った所か。

それともただ単に、条件を受け入れるための打ち合わせをしているのだろうか。

ある程度は明日聞くことが出来るかもしれない。判断はそれから

だ。

「さて……明日か。アリスさんはどうする？」

「クルスを貸して欲しい」

明日も『リブレイス』の関係者に会う……ということか。
クルスの方を見ると彼女は大丈夫と少し微笑んで頷いた。

「構わない」

「そう、助かるわ」

二人とも話をしながらも目を合わさない。

シーリアとクルスは性格は合わなさそうに見えて、上手くやって
いたが……クルスとアリスは合う合わない以前……完全に敵同士……
……そんな印象を俺は感じていた。

翌日、クルスは完全に武装してアリスと共に出掛けていった。

俺とシーリアも準備を整えてウルク達、水の神官の神殿へと向う。

水の神官の神殿は普通の家のような雰囲気建物だ。

貿易都市エールは温暖……というよりは、暑いくらいの気候である
ため、風を取り入れるための窓が多い……もっとも、これはこの
街の全ての家において共通ではあるが。

ただ、この周辺の街ではかなりの力を持っていることもあって神

殿の規模は大きく、小さな城……とまでは言わないが、大きな館く
らいの大きさはあった。

壁にはロープを身に纏い、掌から水を流している女性の姿の装飾
が施されている。

恐らくこれは想像上の水の神の姿なのだろう。

壁以外にも屋根に大きな物が飾られていたり、玄関に同じ装飾を
施した青銅製の看板が掛かっていた。

この街には敬虔な信者も多く、住んでいる者は毎週の祈りを欠か
さないそうだし、湖で貿易を行う者は訪れた街の水の神の神殿に一
番初めに祈りに来るのだそうだ。

「ようこそ。ケイト・アルティア君。君を待っていた」

「入国手続きの手配、有難う御座います」

「何、構わんよ。君なら本来、正規の手段でも問題ないのだから」

大きな両開きの扉を開き、中を進むとゆったりとした法衣を着た
筋骨隆々の巨漢、カリフが和かな笑みを浮かべ、手を広げて俺達を
出迎えてくれた。

その姿は慈愛に満ち、大らかで包容力を感じさせる。

宗教者として高位に立つ者の風格を彼は持ち合わせていた。

だからこそ、俺は逆に警戒してしまう。

別世界での話にはなるが、多くの過去を学んできた自分にとって、
宗教というのは最も恐ろしく、力を持つ可能性のあるものだと考え
ているからだ。

この世界での事情を完全に知っているわけではないが、頼りすぎることは間違いなく危険ではあるだろう。逆に敵対もしたくはない。

俺の心情を知ってか知らずか、カリフは静かに微笑み、俺達に付いてくるように促す。

歩きながらも彼はまるで親しい者へと向ける笑みを俺達に向けていた。

「君達の活躍はウルクから聞いたよ。腕のいい少年だとは思っていたが、まさかあのカイル・アルティアの弟だったとはね。賢兄賢弟とは素晴らしいことだ」

「それほどは」

「いやいや。数百年誰も倒せなかった『クラストデイル』を倒したのだ。誇ってもいい」

手放しでカリフは褒めるが、素直には喜べない。
いや、喜んでいるふりをするべきか？

きつとばれるだろう。俺の下手な演技が通じる相手にはとても見えない。

「今回お呼びになられたのは？」

「く……ははっ！　そう固くならなくてもよい。ウルクに対して取っている態度と同じでいいのだよ。君は我が神の信者ではないのだから」

「そういうわけには」

短くそう答えると、カリフは機嫌良さげに声を上げて笑った。

「若いのにしっかりしている。ウルクにも見習って欲しいものだ」
「彼は優秀です。彼がいなければあれを倒すことは無理でした」

なるほどなるほど、と彼は頻りに頷く。

話を続けながら、俺は自分の失敗に気付いていた。

彼への対応はシーリアに任せ、黙っている方がましだったかもしれないと。

「わしが十五歳の頃はただの荒くれ者でな。見てのとりのデカい身体を活かして暴れまわっていた無学者だった。ケイト君は冒険者であるのにしっかりと学んでいる」

「はあ……」

「ウルクが羨ましがるのも無理はない。強く、賢く、若い……それに……」

圧迫感のある目の前の大男は、にいつとからかうような笑みを浮かべながら大きく頷く。これまでの宗教家としての笑みとは異なる、人を食った男らしい笑みだった。

「あのラキシス殿の愛娘にも気に入られているようだからな」

客間についたのだろう。カリフは一つの部屋の前に立ち止まる。そうでなくても俺は足を止めただろう。俺はシーリアに名乗らせていないからだ。

彼は豪快に笑いながら背中を叩く。友人にそうするように。

「ははは！ 女性にモテるといふのは実に羨ましい。それが美人なら尚更だな！」

笑顔をなんとか返しながらも握っている拳には汗が流れる。交渉を俺に仕掛けるつもりが相手にあるなら、先手を取られたのは間違いない。

何らかの意図を持って、カリフは俺に知らせているのだろう。急に話に母親の名前を出されたシーリアは高位の神官が母親を知っていたことに驚き、何度も瞬きを繰り返していた。

第十六話 エルーシドの神官

木材を中心とした暖かな雰囲気客間に通された俺達はカリフに椅子を勧められ、対面の席に座る。同時に若い女性の神官が飲み物を用意し、頭を下げて部屋から出て行った。

部屋の内装は華美ではないものの、職人が手間暇を掛けた家具が置かれている。

念のため飲み物を探知してみたが、大丈夫のようだ。穿ちすぎか。

「遠慮せずに飲んでくれ」

「有難う御座います」

少しだけ飲むと柑橘系の甘さが口に広がっていく。ウルクから俺の好みまで話を聞いたのだとすると、彼はよく見ているのかもしれない。

「さて、先程説明したとおり、君達の手続きの件は特に問題はない。だが、君達の出国はもう少し先になる。何故かわかるかね？」

「何故でしょうか」

答えずに聞き返した俺にカリフは、まるで出来の悪い生徒に対す

るような穏やかな表情で首を横に振る。

「いかん、いかな。何事も聞けばいいというものではない。間違ってもいい。考えなければ。周囲で何が起きているのかを」

「三国の問題が解決していない……ということでしょうか」

楽しそうな表情のカリフに悪意の色は見えない。どちらかという
と困っている生徒を肴に楽しむ意地悪な教師……そんな雰囲気だ。
彼はシリアの方にも顔を向ける。

「え、私？ ケイトの答え以外に何かあるの？」

「それ以外に考えてみなさい」

「うーん……湖族のせいで通行出来ない……とか？ ああでも、それならば飛ばせばいいか……悪人だし。なんだろ」

質問の意図がわからないのか、シリアは首を傾げる。
相当悩んだのか困惑の色が濃い。

「まあ、君達の答えも一つだ。だがそれだけではない」

カリフは巨体に見合った大きなコップに入れられた自分の飲み物をぐつと飲む。

彼の飲み物は酒のようだ。強いアルコールの匂いが漂ってくる。

「それを理解していないと考えたから今日は来てもらったのだ。若人を正しい道に導くのは聖職者の仕事だからな……ま、わしも朝から酒を飲んでおる不良坊主だが」

他にも理由がある。しかも、俺が気付いていない理由が。

豪快に笑う彼の口振りから、それに気付かなくてはおかしいというところか。

遺跡のことか……？

あれのことで命の危険があるなら、シリアを守らなければならぬ。

動揺を表情に出さないよう注意しながら、カリフが話すのを待ち続ける。

「ケイト君。君は鋭いし、知識も知性も年の割には素晴らしいものがある。それでいて自分の力に驕らず、功を誇ることもない。『他人』に対する警戒心も持っている。だが……」

静かに飲み物を置き、カリフは微笑む。

「身内への信頼と己への過小評価が過ぎるようだ。それは時として欠点となる」

「過小評価……？」

思わず聞き返すと、カリフは鷹揚に頷く。

「水魔『クラストデイル』。この地方の伝説に残るような魔物を退治した弱冠十五歳の若い冒険者。ウルクは君が偉業を成し遂げても変わらないと手放しで褒めていたが、それは違う……わかったようだね」

「俺の行動は国から警戒されている……ということですか」

「君は若く、喜び勇んでも不思議ではないのに普段通りだから、さぞかし不気味に見えているだろう。人は自分の信じる物差しでみるからな。わしも話したことがなければ、警戒したはずだ」

つまりはそういうことだ。

城塞都市カイラルで警戒されたのと同じように、俺はこの街でも警戒され始めた……そして、それに気付くのに遅れた。致命的な程に。

今、目の前の聖職者は俺にその事実を突きつけている。

難しい表情で見つめ合う俺達の空気を崩すかのようにシーリアは不思議そうに口を開く。

「え、ああいうの倒すのが冒険者じゃないの？」

「……………君はラキシス殿に似過ぎているな」

「ええー、本当っ？」

顔を真っ赤にしてシーリアは照れているが……カリフの表情は今までに無いほど苦悩に満ちている気がする。本当に褒めているのだ

ろうか。

「まあ、彼女の話は置いておこう。重大な問題はそこではない。何者かが君の性格をよく理解した上で利用している。恐らくは君の兄かホルス・アーネルスだろうが」

「利用……？」

「偶然かもしれないがね。『クラストデイル』を仕留めた一人であり、カイル・アルティアの弟である君が『リブレイス』の拠点に行き来している。これを他人はどう見るかね？」

つまり、俺達にその気は無くとも周りからは『リブレイス』の一員として見られている……ということか。そして、あの組織はカイル周辺で問題を起こしている。

根の深い厄介な組織……そこに現れた、実際の实力はさておき、事実として『クラストデイル』を倒している若い冒険者。国からは歓迎されるわけがない。

「俺は『リブレイス』とは無関係です……が、理解はしました」
「やはりな……説教臭くてすまん。わしの唯一の楽しみなんだ」

声を上げて笑うカリフに俺は頭を下げ、同時に自分の考えの足らなさに齒軋りする。

兄ではない……この考え方はホルスだ。

あいつは倒すだけでなく、後のことも考えていたのだろう。

如何に『リブレイス』の名声を上げるか……この件がどういう顛末を辿るにしろ、あの組織が一番得をしているのは間違いない。

国には組織とは無関係である俺達を警戒させ、ホルスは裏で悠々と自由に行動する。

頼み事自体はホルスでは無く、兄にさせることにより、単に女性を守るため……といった単純なことしか俺に考えさせずに引き受けさせた。

言い訳のしようもない。俺が甘かったのだ。

「君の目的は何なのかね。無目的で旅をしているわけではあるまい」「世界を回り、見聞を広げることです」

ふむふむ……と、カリフは大きく頷く。

「それは『呪い付き』と関係していることを調べているのかね？」
「……ウルクは口が軽すぎるようですね」

これは『精霊石』の話も伝わっていると考えた方がいいだろう。神殿の立場としてどうなのか……カリフは追求してこないが……。

「はっはっは！　そう言わないでやってくれ。あいつも仕事だ。わしが命令した」

「俺を『呪い付き』と知って、貴方はどうされますか？」

「どうもせんよ。君達をどうこうすると、後が怖いからな」

苦笑いしながらカリフは立ち上がると、ノックをして入室してきた神官から数枚の書類を受け取り、俺の前に置く。

その書類には細かい字で色々と書かれており、最後にサインで締めくくられていた。

「正式なヴェイス商国入国許可証だ。だが、出国はピアース王国側から許可が降りるまでは自重して欲しい。わしもなるべく尽力しよう」

「ありがとうございます」

「命懸けの仕事の正当な報酬だ。気にすることではない」

立ち上がって頭を下げる俺に、カリフは穏やかな笑みを浮かべて何度も頷く。

彼の目的は見えないが……敵対的ではなさそうだ。内心の考えまではわからないが。

話もこれで終わりなのだろう。書類を受け取ると俺達も謝辞を述べ、退出しようとして……呼び止められる。

「我が神の神殿に伝わる大昔のある聖人の口伝の一節だ。『異能者が呪われたのは、神の御心を全ての者が等しく理解出来なかったからである』……解釈は様々だが、君の旅の目的から考えれば、いいエール土産になるだろう」

「何よりの土産です」

どういう意味かはわからない。だが、このような口伝を集めることで、『呪い付き』に対する真実も見えてくるかもしれない。俺は素直な気持ちでカリフに感謝の言葉を告げた。

「難航はするだろうが三国の問題は解決させる。だが、目的のわからないきな臭い動きも見え隠れしている。わしも君達も否応なしに巻き込まれるだろう。注意することだ」

別れ際にカリフは厳しい表情でそう俺に告げた。

どのような情報を持っているのかはわからないが想像以上に状況はよくないのかもしれない。それとも『精霊石』を持つ、俺に対する警告なのだろうか。

自分と仲間の身の安全を守るために、どう対処していくか。
今、一人でアリスの護衛をしているクルスも心配だ。まずは合流しなければならぬ。

新しい情報を下に、取ることが出来る方法を考えていく必要がある……俺はそう考えながら、水の神官の神殿を後にしていた。

第十七話 操り系の切斷

女性二人ということで鬱屈の溜まった男に絡まれることはあったものの、クルスの方は大きな事件は特には無かったらしく、探知を利用して無事に合流することが出来た。

結果的には何も無く、普段と変わらないクルスの様子にほっとさせられたが、無用心が過ぎていたことに内心反省する。

水の神、エルーシドの神官であるカリフの言葉を鵜呑みにしたわけではない。

だが、彼がラキシスさんのおかげか他に理由があるのかはわからないが、比較的俺達に好意的であることは、彼の話と行動から伝わっていた。

「変な話ねー入国許可証は出してくれたのに、出国はしないでくれるって」

「それがあれば入れるのに？」

夕食を終え、アリスが別室に戻ってからクルスとシーリアと今後の方針を話し合う。勿論、探知の能力を利用してアリスを警戒しながらだ。

カリフの話を黙って聞いていたシーリアが首を傾げ、クルスも不思議そうに呟く。

出てはいけないと言って置きながら入国許可証を渡したのが不思議なのだろう。

本当に出国させなくては渡さなければいいのだから。

「あの人からすれば、円満に解決するから待つて欲しい……. ところか。それと、多分だけど……. いざというときは、『逃げる』そういう意味じゃないかな」

入国許可証がある以上、出国は犯罪にはならない。

疑いを残したままであればピアース王国に戻る時は、大変かもしれないが『リブレイス』と国、教会、湖の民に命を狙われるという最悪の事態が起こったときの保険にはなる。

好意的であると考えたのはこの辺りに理由があった。

カリフの立場であれば、俺を嵌める気なら他にいくらでも方法があったろうし、あそこで俺の警戒心を呼び起こす必要もない。

他に何かある可能性は無いが。

「回りくどい」

「まあ、俺の思い込みかもしれないけどね。事実として手元にこれがあるわけだ」

俺は床に座りながら許可証を指し示し、行儀悪く背もたれを前にして、だらんと椅子に座っているシーリアとベッドに座るクルスを見て苦笑する。

「クルス。今日の様子はどだった？」

「何時も通り挨拶だけ。後、ウルクもなんか『リブレイス』の拠点にいた」

今日の夕食でも大袈裟に騒ぎながら楽しそうに話していたウルクの姿を思い出す。

彼の立場も微妙だ。普段見せている軽い雰囲気は真実のものがどうか……。

ウルクの実力の方は確かで、操船技術、神術だけでなく、徒手格闘、槍の扱いに優れている。近接戦闘の習熟度は俺達よりは低いレベルは同程度と、中々のものだ。

『クラストデイル』討伐に参加させられたのは実力故だろう。異種族は見た目と年が一致しないため、案外、大分年上だったりするのかもしれない。

遺跡についてはカリフは一切触れなかった。

それがウルクが話した結果のことであるならば、彼は口は軽いが心配はないだろう。

だが、俺の能力について話しながら遺跡の事を話していないのであれば変わってくる。

「ケイト……何かあった？」

事情を知らないクルスが心配するようにこちらを見つめ……俺はそれに対して、少しだけ考え、彼女に頭を下げる。

「ごめん、少し失敗した……だから、挽回のために協力して欲しい」
「ん……任せて」

今回の件に関してはどう考えても俺が悪い。危険を気付く要素は幾つもあったのに全て見過ごしていたのだから。

そんな俺の謝罪に対して、クルスは誇らしげに笑う。

しかし、シーリアは不満そうに椅子を前後にがたがた動かし、口を尖らせる。

「お人好しね。別にケイトは悪くないでしょ。悪いのはあの糸目野郎なんだから」

「だけど、あいつも積極的にやってるわけじゃないからね」

「関係ないわ。悪いのはあいつ。嵌められて、やられて黙って耐える気？ そんなの情けなさ過ぎるわよ！ 許せないわ！」

毛を逆立てながらシーリアは不機嫌そうな口調でそう憤慨した。彼女の言葉は感情的だが簡明で、暗さがない。

そして間違っていると思えば俺に対しても容赦がない。
意識的か無意識的かはわからないが、何と無く、クルト村に残った友人、マイスの雰囲気似ているな……と感じていた。

暗く沈みがちな俺の思考を明るくしようとしているところが。
あいつなら今の俺に何と言って怒るだろうか。

そんなことを考えていると思わず笑ってしまう。

「……何笑ってるのよ」

「いや、今のシーリアがちょっとマイルスに似てたなって思っ

「何も考えてなさそうなところ似てる」

「似てないわよ。あんな頭の中まで筋肉っぽいやつ」

笑う俺にクルスが同意し、シーリアが拗ねてそっぽを向く。
だが、彼女のお陰で気持ちの切り替えは出来た。

「よし。機会があればホルスに意趣返しをしてやろう」
「そうこなくっちゃ」

ばちばちとシーリアが笑顔で拍手する。
俺とて腹が立っていないわけではない。売られた喧嘩だ。

精々安く買い叩き、不良品だと逆に損害賠償を請求するくらいに
やり返さなければ気持ちは収まらない。あいつが、にやつきながら
俺の様子を伺っていると思うと尚更だ。

問題は……。

「その機会と手段……か」

まず、明確な目標として安全にヴェイス商国に入国することがある。

これを何の問題も無く達成し、さらには人死の出ない範囲でホルスに対して、精神的な意味での嫌がらせが出来るのが望ましい。

子供っぽい考えだが知っていて俺達を危険に巻き込んだのだ。それくらいは構うまい。

「しかし、どうしたものか」

腕を組んで考える。安全確保の方法は歩きながら既に幾つか考えてある。

だが、ホルスに対して……となると難しい。

「ホルスに対する嫌がらせは得意。大丈夫」

「そういえば前は殴って黙らせてたわね。なんでそんな目の敵にしているの？」

自信満々のクルスにシーリアが眉を寄せて聞くと彼女は無然とした表情で呟く。

「昔、あいつケイト殴った」

「……………知ってたのか」

「顔見たらわかる。みんなわかってた」

左手で頭を掻く。それもそうだ。

俺とホルスが殴り合いをした時、お互いボロボロになるまで殴り合ったのだ。

当時の友人達にはばれないはずがない。

あの後、誰も何も言わないから気にしていなかったが……。

「じゃ、そちらは任せるか」

「うん」

「私も面白そうだし、何か考えてみよつと」

楽しそうにクルスとシーリアが相談を始めたのを苦笑いして眺めながら、俺はアリスへの対処を考える。

こちらに関しては対応は一つだ。

護衛を辞める。これは元々、正式な契約の範囲外の話。

辞める理由も今日カリフが作ってくれたものがある。

彼女には悪いが『リブレイス』の拠点にでも送れば危険は特にないだろう。女性の構成員も多いようだし。

兄やホルスがいつエールに戻るかわからない。放置しておけば既成事実として定着してしまうだろう。そうなれば余計な身の危険を招くことになる。

正直、感情的にも、あの組織の一員と思われるのは真つ平だ。

また、現状貼られている『リブレイス』の一員というレッテルも剥がさなければならぬ。

これには選択肢が幾つかある。
最も効果的なのは『リブレイス』を快く思っていない組織を利用することだろう。

国、教会がそれに当たる。彼等は喜々として宣伝してくれるに違いない。

その場合、彼等の目的に利用され、彼等のための偶像とされてしまう危険があるが。

「ケイト、実際、明日からどうするの？」

話し合いが一段落したらしく、シーリアが微笑みながら此方に水を向ける。

「複数の選択肢があるからね……ただ、きなくさい動きとやらには気を付けないと」

目を瞑り、頭の中を整理する。

何か一つに絞らなければならない……ということはない。

沢山の方策を考え、準備し、どれかが成功すれば安全に目標を達成できる。

そういう状況を作ればいい。

きな臭い動きがある。カリフはそう言った。
動きがあるならその目的は絞れるし、それぞれに対する対応策は
考えられる。

まずは……。

「逃げ道の確保と身の安全の確保から始めよう。その後……」

「反撃ね！」

「ああ。火の粉が降り掛かるなら、徹底して振り払おう。安全優先
だけだ」

手を上げてぶんぶん振って好戦的に笑うシーリアに笑みを返しながら、俺は頭の中で明日からの予定を組み立て始めていた。

もし、貼り巡らされた思惑に悪意があるならば、相応の対応を行うことを心に誓いながら。

第十八話 狂った提案

翌朝、他の二人よりも先に目を覚ました俺は、宿の主人から貰った冷たい水で顔を洗い、身嗜みを整えて、宿の外で少しだけ体を動かす。

故郷であるクルト村よりも温暖なエールは、冬以外は常に湿気の混じった生温い風が吹いているらしく、今日も爽やかとは言いがた、すっきりしない感じである。

だが、漁師の街でもあるエールの朝は早く、漁師達による適度な賑わいが始まっている。

あまり静かでも落ち着かない俺としては、昨日の夜に考えたことを冷静に整理するには十分な環境だった。

「兄さん若いのに大したもんだな。『クラストデイル』を倒しただけはある」

「ありがとうございます。それからすみません、無茶を言って」

「いいよいいよ。お前さん達のお陰で客には困らん」

人の良さそうな初老の主人が、宿の前を掃除しながら穏やかな表情で笑う。

『クラストデイル』を俺達が倒したことで、彼の経営する食堂は連日連夜、大勢の客で賑わっていた。

単純に客が増えることを喜ぶわけにはいかないはずだ。

彼の身体は一つしかなく、いつまで現在の状態が続くかわからないのだから。

普段と違う料理の材料の仕入れ、大量の注文による重労働……それをチャンスと取るには宿の主人は年を重ねすぎているだろう。

そんな無茶をさせた上で、すぐにでも宿を発つと彼に告げたのだ。

「まあだが、複雑な気分ではあるな。実は『水龍亭』の水龍というのは、クラストデイルのことなのだよ。まさかうちの客が倒すとはなあ」

初老の主人は、箒を持ちながら腕を組み、感慨深そうに頷く。

さすがに何と返せばいいのか困り、俺は苦笑して左手で髪を弄った。

「ああ、責めてるわけじゃないんだ。君で良かったとすら思ってるくらいなんだ。他の者であれば、大喜びであの魔物を貶しただろうからな」

「そっいう気にはなれませんでしたね。とても」

あの召喚装置を見れば……とてもそんな気にはならない。

それは命懸けで何かを守ろうとした者を冒瀆する行為だろうから。

「宿を長年続けておるが、あんたは始めてみる客だよ。英雄の若い頃ってのはこんなのかなねと思ったんだ。同時にちよいと危ないなとも思ったが……あ、いや悪い」

「構いません。続けてください」

「変わつとるなあ。そう……流れる水に逆らうように生きておるなと思つたんじゃない……爺の戯言とでも思つてくれればいい」

敬虔な水の神の信者らしい言葉だが、意味はなんとなく理解できる。

色々と解釈出来る言葉ではあるが、それだけ俺が危なっかしかったのだろう。

俺は頭を下げて礼を言った。

初老の主人はそんな俺の肩を軽く叩き、にやりと笑う。

「で、実際、どんな魔物だったんだ？　ずっと聞きたかったんだ」

「水龍の名前に恥じない、巨大で格好いい魔物でしたよ。二度と会いたくはないですが」

「そうかそうか……！　お、そうだ。絵で書いてくれんかね！」

「いいですよ。時間が無いので簡単にでよければ」

無邪気な子供のように喜ぶ初老の主人のために、他の者が起きるまで俺は主人の質問を受けながら、あまりうまくもない絵を書いた。

現実には戦った気味の悪い悪魔のようなものではなく、遙か昔に楽しんだゲームに出てくるような幻想的な水龍の絵を。

三人が起きて朝食を食べ終わると、普段と変わらず静かに椅子に座っているアリスに対して、予定通りに話を切り出す。

彼女は感情を感じない瞳を俺に向けていたが、一度ずつクルスとシーリアに顔を向け、納得したように小さく頷いた。

「護衛の仕事は打ち切りたい」
「理由は？」

金色の流れるような髪、整った顔立ち。

まだ少女と呼べるような歳にも関わらず、掛け値なしに美しいとは思うがその表情は冷たく、どうしても好意は持てない。

『クラストデイル』を退治することを通じてそれに慣れはしたが、仲間と呼べるかというところは違う。敵とは言わないが味方とも言えない。

組織を考え、その上司を考えれば敵に近いと考えるべきだろう。彼女の発言で気になることはあるが……。

「入国許可証が出たんだ。ヴェイス商国に向う」
「なるほど。しかし、船は？」

「ウルクは『湖の民』の島まで行けたんだ。探せば無茶をしてでもって人はいるよ」

恐らくはいるだろう。金は掛かるだろうが……それなりに蓄えはある。

ディラス帝国とは問題が起こっているがヴェイス商国とはそこま
で問題にはなっていない。湖賊の問題は残るが、安全な船頭を選ぶ
方法はある。

「唐突ね」

「遅すぎたくらいだよ」

俺の言葉にアリスは薄らと微笑んで、小さく頷く。

「構わないわ。元々正式な契約ではないのだし」

「悪いな」

彼女は考える素振りもなく、あっさりと了承する。
まるで、予想していたというように。

そして、少し考えるように俯き、顔を上げて続ける。

「ただし、条件……いえ、これは変ね。お願いがあるわ」

「聞けるものなら」

「簡単なことよ」

アリスは右側だけ別に括った髪に軽く触れながら、真っ直ぐに俺

を見つめる。

その瞳には初めて見る感情の色があった。

前に見た憎悪のようなものではない。

明るい雰囲気のか……そんな風に俺には思えた。

貿易都市エールの街中を、アリスと並んで歩く。

何を考えているのかはわからないが、彼女は別段楽しそうでもなく、ただゆっくりと街の中を観光するように歩いていた。

彼女の頼み……それは『二人』でエールの街中を歩いて欲しいというものだ。

何の意図があるのかはわからない。

ただ、護衛の拒否の意味はわかっているからか『リブレイス』の拠点や、人気のないところには近付かないという条件を向こうから切り出してきたため、頼みを引き受けたのである。

探知をすると、クルスとシーリアは少しだけ離れて護衛してくれていることがわかる。

俺達は昨日の話し合いで護衛を断った後は絶対に二人きりにはならないと決めていた。

だから二人に確かめるまでもなく、しっかりと付いてきてくれている。

「それで話は何かな」

「無粋ね。デートを楽しみなさい」

露店の小さなアクセサリーを触りながら、アリスはこちらを向く。とても楽しめる気持ちにはなれないが……冗談を言う彼女は今までにない楽し気な表情を浮かべていた。何時もの無表情に比較してだが。

今になってどうして……そう思わないでもない。
ただただ、そんな彼女を見て苦笑する。

「悪いけど恋人以外とのデートを楽しめるような甲斐性はないんだ」
「わかってはいたけど、本当に無粋な男ね」

まるで俺の答えがわかっていたかのように、くすりとアリスは笑う。

「話は難しいものではないわ。『リブレイス』に入りなさい」
「正気で言ってるのか？」

彼女は知っているはずだ。
サイラルの上司……ジューダス・レイトという男の部下なのだから。

『呪い付き』であるサイラルを俺は殺している。組織は俺の故郷を襲っている。

彼女個人がどうあれ、確実に敵だ。お互いに。

「上司からの命令なの。同士を仲間に引き入れろってね」

「ふざけてるとしか思えないね」

「私もそう思っていたけど、会って考えが少しだけ変わったわ」

歩みを止めて、アリスは不思議な光彩を放つ深い蒼の瞳でじっと俺を見た。

落ち着いていて静かで……どこか懐かしさと追い詰められるような圧迫感を感じる。

「改めて言うわ。『リブレイス』に入りなさい」

背の低い彼女は一步近付いて俺を見上げる。

辺りは人通りが多く、喧騒も激しいのだが彼女の小さな声は、まるで遮る物が無いかのように耳に響いた……なんだ……この不安は……。

「お金では貴方は受けない。身の安全を口で約束しても信じないに違いない」

アリスは両手で俺の首に優しく触れる。

全身に鳥肌が立ち、思わず俺は後ずさった。

「代償として私が貴方の物になる。どんな命令でも聞く。死ねと言われれば死んでもいい。私の人生を差し出しましょう……どうかしら」

冗談であれば、どれ程いいだろうか。

彼女は間違いなく本気だ。冷や汗が流れ、俺は更に後ろに下がる。

「悪くは無と思うのだけど。今は貧相だけど、数年すれば身体もましになる。それに自分で言うのも何だけど、私は役に立つわよ？」
「そういう問題じゃない……嫌っている相手に……何を考えている」

だが、アリスは普通の少女のようにきょとんとした表情を見せ、静かにくすくすと笑う。

「嫌ってはいないわ。嫌うわけがないわ。さっき歩いていて確信した」

「そんなこと……」

「残念ね。人通りが少なければ、身体で証明するのだけれど」

『ラストデイル』やサイラル……強敵を前にした時とは違う恐怖が心に沸き上がる。彼女の瞳には……狂気の色は無い。だから余計に怖い。

あの時の憎悪は本物だった。

だが、今、彼女はおそらく本心から嫌っていないと言っている。
見間違いとは思えない。あれは何だったのか。

俺は気圧されないように歯を食いしばり、アリスを真っ直ぐに見る。

「どんな条件を出されても断る」

「そう……残念ね。ま、今はいいわ。今は断ると思っていたし」

断ったことに対して、彼女はさして残念そうな表情はしなかった。
この一連の会話することが目的だったのだろう。

「あ、ついでだけど、もう一つ上司の命令があったわ」

「何？」

「『精霊石』……いえ、『聖輝石』を私に渡して欲しいの」

カイル兄さんが直感で俺に預けたあの石は、常に身に付けている。
探知の能力を用いると、先ほどまで???としか表示されていなかった、石が『聖輝石』と、表示されていた。これが意味をするところ……。

俺はすぐには応えず、興味がなさそうなアリスの意図を図っていた。

第十九話 決別と対策

シリアが精霊石と呼んでいた石……『聖輝石』。

それを渡せと言われていることには俺は驚いていない。兄やホルスの態度からその手の交渉が来ることは考えていた。

理解できないのは正式名称を出してきた理由。

これでは初めからわかっていてやりましたと言っているようなものだ。

そして、用途も理解している可能性が高いと……。

訝しむ俺を見て、アリスは蛇がまわりつくような悪意の込められた笑みを浮かべる。

「あら、すっかり名前を言ってしまったわ。失言ね」

「何故、この石を集めている？」

アリスはこれを見つけたとき『もう必要ない』……そう言っていた。

つまりは、彼女は以前は探していたのだと思われる……が、現在は必要としていない……だから、彼女にとってはこの命令はついでなのだろう。

だが、俺の追求に対して、アリスは顔を背ける。

「知らないわ。想像は付くけど」
「想像でいい」

知っていて答える気が無いのか。それとも、知らないのか。
彼女の感情を感じさせない静かな表情からは想像が付かない。

「ジューダス・レイトは本物の狂人。あいつに比べればサイラルは常識人」
「なるほどね」

頷きながら死の間際のサイラルの必死な様子を思い出す。

（世界を滅ぼして絶対に元の世界に戻ってやる……か）

もしそれが、ジューダスからの『呪い付き』への誘惑の言葉であるとするなら。

そして、それを利用して何かを成そうとしているのなら。

兄が素直にそれを渡すことが危険だと判断したのだとすれば。

「迷惑極まりないな……ろくでもない」

俺は思わず顔を右手で覆って失笑した。

地道にこつこつと。冒険者というよりも探検家として生きていくと考えていたのに、変な組織に絡まれ、今度は胡散臭い陰謀に巻き込まれている。

どうやら自分の望む平穏な暮らしとは無縁の人生になりそうだと。

「それで、渡してもらえるのかしら」
「断る」

迷いはしなかった。

この手の問い掛けへの対応策は以前の事件の際に既に取っている。

情報さえ送っておけばラキシスさんや故郷の心配はいらないはずだ。というより、そんな心配をしたら逆に怒られるだろう。

後は俺達の気持ち一つである。

無謀かもしれない。世界の平和に対して使命感があるわけでもない。

今度こそ後悔しないように生きる。二度目の生を受け、決意したことだ。

クルスもシーリアもそれぞれの理由で賛成している。

ならば、問題はない。相手が狂人であろうと売られた喧嘩は買うだけだ。

少しだけアリスは驚いたように俺を見ていたが、小さく微笑む。

馬鹿にしている感じではなく、感心しているように。

「身の程を知らないのね」

「そちらこそ、情報をそこまで出しているのか？」

「出したら駄目とは言われていない。仕事もしたし……面倒なのよ。真実と嘘を判別する『呪い付き』がいるから」

心底鬱陶しそうにアリスは呟く。

『呪い付き』にはどんな能力の者がいるのかわからない。

「真実じゃないけど嘘じゃないことは言えるってことかな」

だが、彼等に対しては俺は比較的に優位に立つことは可能だ。名前がわかりさえすれば、相手の能力がある程度はわかるのだから。

怖いのは完全な未知だ。相手の名前を知ること……それが、『呪い付き』に対する対策になるだろう。限定的でも相手のことがわかれば対策は出来る。

能力の情報は『呪い付き』にとっては致命的なものになるはずだ。

『呪い付き』は、サイラルがそうだったように、能力が全くわからないからこそ恐ろしいのだから。

俺の能力を完全に把握されない限り、勝算は……ある。

「聖輝石を精々大事にしなさい。私からはそれだけ」
「敵として会わない事を祈るよ」

アリスの話は終わったのか、彼女は身を翻して俺に背中を向ける。

「死んでも治らなさそうな甘さね……ああ、そうそう。ホルスの予想より二週間気付くのが早かったわよ。随分いい友達を持っているわね」

こちらを一度だけ振り向いて彼女は皮肉を言い捨て、その場から去っていった。

不思議と普段の冷たさを感じさせない、穏やかな口調で。

出会った相手で人の考え方は変わる。
シーリアがラキシスさんの影響を受けているように、俺やクルスがクルト村のいろんな人に影響を受けていたように。

アリスはどう生きてきたのだろうか。
これから何をする気なのか……目的はあるようだが考えてもわかりそうにない。

出来ればその目的が俺達とは交わらなければいい……そう思うが……恐らくそれは無理な願いなのだろう。どうしてか、そんな気がしていた。

完全に彼女の姿が消えると、クルスとシーリアが心配そうに駆け寄って来た。

二人と顔を合わすと緊張と警戒がようやく解けて一息が付け、自然に笑顔が出る。

「疲れたよ。本当に」

「あの女は何言ってた？」

「歩きながら話そう。少し長くなる」

次の目的地へと歩きながら俺は掻い摘んで二人に先程の内容を説明する。

リブレイスに誘われたこと、『聖輝石』のこと、『呪い付き』を纏めている男がそれが必要としていること……。

「面倒くさい」

「面白くなってきたわね」

反応はそれぞれだったが、事の重大さは認識できているらしく、難しい表情をしている。だが、話の内容そのものは可能性として検討していた範囲だったので、慌てたりはしていなかった。

度胸があるのかどうか。

ただ単に無鉄砲なだけかもしれないが……シーリアはともかくクルスに関しては子供の頃から不条理に対抗することを教え続けたので、自分の責任も少しはありそうだ。

この世界では果たしてそれは正しかったのか。
正しいと胸を張って彼女が言って行けるように頑張りたいところ
ではある。

「カイル兄さん達とは命令系統が違うらしいから、組織が一致団結
して……ということはなさそうなのが救いかな」

「ん……でも、あの女は間違いなく敵。悪意と殺意しか感じない」

クルスは不快そうに呟く。何時からかアリスは敵意の視線を彼女
に対して向けていたらしい。先日の二人の時は、それを今までで一
番感じたのだそうだ。

そこから考えると、アリスは軟化しているわけではないと取るの
が妥当だろう。

「『聖輝石』だっけ。名前がわかったなら伝承も調べないとね」

「文献とかはカイルルにいるラキシスさんに任せるしかないかな。
俺達は俺達で探したほうがいいだろうけど……頼むよ。シéria」
「任せという」

自信あり気に腕を挙げてシériaは元気に応えた。

『呪い付き』達をまとめているジューダスが正式な名前を知って
いる以上、文献や伝承で言い伝え等が残っている代物である可能性
は高い。

それを見つけることができれば、相手が何を企んでいるかも見え
てくる。

「冒険者って感じね。ラキシス様が言っていたように、正義の味方になれそうだし退屈とは無縁そう。迷宮潜っていたときは、大したこと起きないしおかしいと思っていたのよ」

「今の方が異常だと思うけどね」

楽しそうに尻尾を振っているシーリアに苦笑いし、改めて彼女は
大物だと感じた。

俺としてはカイルルにいた頃も十分過ぎるほど色々起こっていた
と思うのだが。

そんな彼女にクルスは呆れるような視線を向けている。

「馬鹿」

……まあ、どんな事に巻き込まれても、明るい発想が出来るのは
いいことではないだろうか。少なくとも俺には出来ないことだ。

クルスの嫌味も受け流し、シーリアは笑顔で俺を見る。

「まずは出来ることからやりましょ」

「そうだな。とりあえずは水の神殿の世話になろう。準備は？」

「ちゃんとケイトの護衛をしながら進めてるわ。糸目への仕返しも
一緒に」

水の神官はこの周辺の都市ではおそらく領主以上の人脈を誇っている。

そして、高位の地位にあるカリフは『リブレイス』との関係を懸念していた。

そこから組織としては『リブレイス』に好意的であるわけではないことが伺える。

頼りきる事は出来ないが、現状では一番利用しやすい力のある組織だ。

向こうも利用することを考えるだろうが、利益が相反しなければそれでいい。

シーリアに頼んでいたのは謀殺の予防線だ。

水の神殿を頼ると堂々と触れ回り、元々目的は『クラストディール』退治ではなく、ヴェイス商国に向かうことであつたという事実を流す。

目的は冒険記を作るため……とか、適当に事実っぽいのを伝えてもらっている。

湖で圧倒的な支持を持つ、水の神に対して敬虔な気持ちを持っていることを示せば、街の人の多くは好意的な感情を向けてくれるようだ。

『クラストディール』を倒したという名声もある。『リブレイス』が俺達を利用するために既に俺達の顔と名前は街の人に覚えられていた。それを逆用するのだ。

噂はすぐに流れてくれるだろう。

真摯に頼る俺達を水の神の神殿は無碍には出来ない。俺達がおか

しな消え方をすれば水の神の神殿に対する疑惑になるだろう。
貴族やリブレイスはその失敗を見逃さないに違いない。

「水の神殿への嫌がらせだな。これは」

「ま、いいんじゃない？ 私達は迷惑を掛け合って生きているのよ」
「問題は神殿がどう動くかね。最悪、船頭だけでも確保したいところだけど」

組織を頼らないのは危険すぎる。ベストではなく、現実的に目的を達成する。

受動的に流されるのではなく、自分から能動的に動くことで。

再び訪れた水の神殿を俺達は複雑な気持ちを抱えながらも、真剣な表情で眺めていた。

第二十話 聖職者としての青年

夕刻の水の神殿は炊き出しのスープの匂いと、焼き魚の匂いが漂っていた。

敷地の庭では神官達が食事を作り、子供達が明るい笑顔を浮かべながら、汚れた服を着た老人や疲れた表情を浮かべている旅人達に食事を配っている。

テキパキと指示を出している神官の中には蒼い髪の一見女性に見える男……ウルクの姿もあった。子供に対しては邪気の無い笑顔を浮かべて冗談を言いながら働いてもらっており、子供達の方からも慕われているように見える。

「あ、ケイトさんじゃないすか。どうしたんです？」

「邪魔してごめん。ちょっと事情があってね。カリフさんはいる？」

ゆつたりとした神官服の上からエプロンを付けたウルクはうーんと唸り、腕を組む。

「まだっすね。もう少し遅くなるかも」

「待たせてもらっても？」

「あっ！ じゃ手伝ってもらってもいいすかね。いやー船出せないせいで忙しくて忙しくて。神の子達にも手伝って貰ってるんす

けど手が足りないんすよ」

疑問形の割にウルクは笑顔で逃がさないとばかりに、俺の肩を掴んでいた。

カリフがないなら、どちらにしろ話は進まない。

子供達も周囲の人々も何事かと俺達を見ている。逃げられそうにはない。

俺は溜息を吐いてクルスとシーリアの方を向くと、彼女達は構わないと頷いた。

「わかったよ。俺達も手伝おう」

「ほんとっすか！ おおーい！ 水魔『クラストデイル』と一緒に倒した勇者が手伝ってくれるっすよー！」

「あ、馬鹿！」

ウルクは満面の笑顔で一緒に働いている神官や子供の所へと戻っていく。

すると、その場にいる老若男女全ての者達の視線が此方に向いた。一瞬の静けさの後、

「本当！ ええー！」

「嘘だろう……まだ子供じゃないか……」

「尻尾！ 尻尾のねーちゃん！」

爆発するように辺りに喧騒が巻き起こった。

興味津々の子供達、感心の声を上げる大人達に頭を下げながら、ウルクを手伝うために付いていく。正直、かなり恥ずかしい。

クルスとシーリアも居心地が悪そうにしているが、ウルクは上機嫌だ。

「みんな暗くなってるすからねー。盛り上げるのも仕事っすよ」

「有効活用ってことか」

「なんたつて美少女二人いるっすからね。大盛り上がりっすよ！」

にししっ！ と企み事が成功したと言わんがばかりにエプロン姿のウルクは笑い、待っている人達に配るためのシチューを次々と腕に入れる。

それを受取りながら、こういう発言が若いし明るいし実績も実力もあるのに、本人曰く、「女性から避けられている」原因なんだろうな……と、俺は思った。

案外、本人が知らないところでは好かれていたりする可能性もありそうだが。

「はい、どうぞ」

「お、兄さんありがとよ」

俺達は神官達や子供達と混ざって、食事を配り続け、食事を終えた人達から食器を回収していく。食器を持ち逃げしようとする人からはクルスが鮮やかに回収し、見ている人達からその手際への賞賛

の拍手を受けていた。

運動神経のよくないシーリアは胸や尻尾を触られたりと散々だったようだが。

「ごちそうさま。ウルク様もそうだけど、貴方も若いのに全然偉ぶらないねえ」

「そうでもないですよ。浮かれてます」

質素な服を着た白髪の老女は俺にお椀を渡し、子供と楽しそうに話しながら回収したお椀を整理しているウルクの方を見て、柔和に微笑む。

「あの方が水魔の討伐に志願された時、我々には顔色を悪くしながらでも、大丈夫と笑顔しか見せずにいて……そんなウルク様を皆、痛々しく思っていたのですが……本当に無事でよかった。若い人……ありがとう……ありがとう……」

「いえ……」

曲がった腰をさらに深々と曲げ、涙を滲ませながら老女は俺に対して頭を下げた。礼を言ったのは彼女だけではない。大人も子供も色々な人がお礼の言葉を俺に告げた。

酒場では泣きわめいていたが、聖職者としてはしっかりと役目を果たしているのだろう。そのことが様々な人達から伝わってきていた。

不思議なものだと思う。立場が人を変えるのか。それとも、あの酒場での様子が擬態なのか。

『リブレイス』と関わりを持つウルク……どの姿が本当の彼なのか。

俺は食事を食べ終えて帰って行く人々を笑顔で手を振り、見送っているウルクを見つめながら頭を悩ませていた。

炊き出しの後片付けが終わり、日が完全に落ちてモカリフが帰って来なかったこともあり、ウルクは仕事の礼として、食堂に案内してくれた。

今回は神殿の内部を詳しく案内してもらわなかったために気付かなかったが、神殿の内部の約三分の一くらいは本来の神殿とは異なる施設になっているらしい。

ウルクが言っていた神の子……即ち孤児達が暮らす、孤児院だ。

施設は清潔で神官達によって食事を与えられるだけでなく、基本的な教育も施されている。

裕福な街である上、神殿の力が強いこともあるが、上層部がしっかりしているのだろう。

尊敬を受けているのは水の神の信徒である以上に、相応の行いを続けているのかもしれない。

孤児達の表情は明るく、大きな人間の子供が小さな異種族の子供の世話をしっかりとしていたり、彼等は種族を超えて助け合いな

がら働いている。

ウルクが俺達を案内したのは、そんな子供達用の食堂だった。交代で子供達を指導しているそうだが、ウルクの担当が今日はここだったらしい。

「いやー手伝ってもらって本当に悪かったすね」
「構わないよ。神殿の様子も見ることが出来たし」

本当にすまなさそうに声を掛けてきたウルクに、俺は素直にそう応える。

「そう言ってもらえると助かるっすよ。子供も喜んでるっすからね」
「そうなのかな。珍しがってるだけだと思うけど」

普段と違う人がいる……だからはしゃいでいる。
そうではないかと言う俺に、ウルクは苦笑いしながら首を横に振った。

「子供達も明るく見えて、内に籠もりがちすからね。夢とか希望とか、そういうのを体言してくれる人に飢えてるんすよ。自分等じゃ近すぎるんで中々」
「ちゃんとウルクさんのことも子供は見ていると思うけどね」
「いやー、自分はなめられっぱなしすからねー」

話し中に背中から「ごはーんはやくー」とウルクは獣人の小さな女の子にしがみつかれ、恥ずかしそうに笑いながら、パンやシチュウ等の料理を運び席に着く。

そして、全員が席に付くと神への祝詞を唱え、子供達もそれを唱和した。

「いただきます」

「いただきますっ！」

元気な声が食堂に響き、騒がしい食事が始まる。

ウルクは子供達の様子を見て行儀の悪い子供には注意したりしつつ、食事を取っていた。

子供の方はちらりとクルスやシールリアの方を確認してから、わざとらしく大きな返事をして彼の言うことを聞いている辺り、やはり遠慮をしているのかもしれない。

食事を終え、食器を片付けるために立ち上がった俺に、数人の少年、少女が付いてきた。どちらかというと、年長の子供達だ。

何事かと思つて振り向くと、彼等のはにかむように笑う。

「兄ちゃん、片付ける場所に案内するよ！」

「ありがと。よろしく頼むよ」

彼等に先導されて食器を洗い、片付けると、子供達はそのま腕を引っ張って俺を人気のないところへと連れて行く。

彼等の表情から真剣なものを感じたため、黙ってついて行ったのだが……。

「えっと、何か用かな？」

「ケイト……だっけ？ 兄ちゃん、ウルク兄ちゃんの友達なんだよな？」

そばかすのある金髪の少年の問いかけに俺は考えず、すぐに頷いた。

他の子供達にも何か切羽詰ったような雰囲気があるからだ。

きつと『クラストデイル』を倒した話をするときに、友達だと説明したのだろう。そして、彼のことで何か相談したいことがある……そう判断をしていた。

「そうだよ。何かあったのかい？ ゆっくりでいいから説明をして欲しい」

「あ……うん」

子供達はお互い顔を見合わせ、頷き合つと皆しっかりとこちらを見る。

金髪の子供が彼等の代表なのだろうか。他の三人の少年少女は彼を頼るように見ている。

「最近、ウルクの兄ちゃんが変なんだ」

「変？」

「うん。普段は変わらないんだけど……うーん……何だかたまに、物凄く怖い顔になって仕事中でも急に部屋に戻ったりするんだ。『ラストデイル』討伐前にはそんなことなかったから……もしかしたら、水魔の呪いなんじゃってみんな……」

不安げに俺を連れ出した四人が俯く。

呪いというのは無い。もし呪われるなら、それは俺がクルスカ兄、もしくはアリスだ。

と、なるとウルクの身边に何かが起きている……そう考えるべきか。

俺は内心で色々思いを巡らせながら、少年達の視線の高さに併せて笑顔を見せる。

「最近忙しいから疲れているのかもね。実は、俺達は教会にしばらくお世話になろうと考えているんだ。もし、ウルクに何かがあったら教えてくれないか？ 何か悩んでいるなら友人の力になりたいからね」

我ながら適当なことを言っている……とは、思うが現在の状況で変わったということであれば放置できない。『リブレイス』が関わっている可能性が高いからだ。

彼等は信じてくれたらしく、笑顔で力強く頷いてくれた。

結局、子供達が寝静まった真夜中にカリフは疲れた様子で、だが精力を感じさせる表情で戻ってきた。

しかし、戻つてすぐに神官達の間での緊急の会議を行わなくてはいけなかったらしく、この日は神殿に泊めてもらい、翌日に改めて彼と話し合いをさせてもらうことになった。

第二十一話 二度目の対面

翌朝、俺達は子供達と朝食を共にした後、ウルクから呼び出されてカリフの執務室へと足を運んだ。前回はシーリアと二人だったが、今回はクルスもいる。

部屋に入った俺達を穏やかな雰囲気の大漢は笑顔で出迎えてくれた。

「先日はすまないな。ま、座ってくれ」

「こちらこそ、急に押しかけて申し訳ありません」

「ははっ！ 気にすることはない。実はわしの方でも会いたいと思っておったのだ。それに奉仕活動もしてくれたらしいしな」

一礼し、用意された椅子に座ると、カリフの方から話を切り出す。彼は前に会った時よりも、老けて見えた。隈が目元に出来ているからだろうか。

現在の状況は彼に激務を強いているようだ。

「我等が神の子達も、身近な年齢の英雄に会えて喜んだことだろう。感謝する」

「故郷の子供達を思い出せて楽しかったですよ。礼は不要です」

食事の後、少年や少女達と話して打ち解けると、まるでクルト村の子供達のように周りに集まって話をせがんできた。冒険心は子供に共通しているのだろうか。

この神殿の子供達が未来に希望を持っているからかもしれない。これが城塞都市カイルルであればどうか。

向こうではこういう施設は見えないが、ここ程整っていることはないだろう。

良くも悪くも実力次第。あそこはそんな街だ。

それは弱者にとっては残酷であることを意味している。

「そちらの女の子は確か、始めて会った時にいた……確かクルスと言ったか」

「ん……よろしく」

「大人しそうに見えて一番勇敢らしいな。大したものだ」

朗らかにカリフは笑い、クルスは小さくぺこりと頭を下げた。

「それで……我ら水の神の神殿に何か用かな？」

「信用できる船頭の紹介を頼みたいのです」

長々と説明する必要はないだろう。彼の意図を考えれば。その証拠に、カリフは愉快そうに頷いている。

「なるほど。確かにそういうことならば我々が適任だ。だが、三国の關係が元に戻れば必要のないことでもある……何故そこまで急ぐ？」

「本当に戻るのでしょうか」

「どうのことだ？」

「戦争が起きる可能性が高いと考えています」

半分はハツタリだが、全くの適当と言うわけではない。

『リブレイス』の考えは理解できないし、ディラス帝国の案を他の二国が素直に飲むとも思えない。今は何が起ころうとも不思議ではないのだ。

もし、戦争になれば『クラストディル』を倒した俺達の立場は悪くなる。

これで解決すると『リブレイス』が触れ回っているだけに余計に。

だが、カリフは苦笑いして首を横に振った。

「やれやれ、若者は極端から極端に走るな。困ったものだ」

「先日アドバイスを受けたので、冷静に考えての結果です」

「わしも一応仕事をしているのだ。少しは信じて待って欲しいな」

カリフは椅子から立ち上がり、落ち着く木の香りが微かに漂う部屋の中をゆっくりと歩く。

そんな彼の背中にシーリアは声を掛けた。

「その仕事はどうなっているか……聞いてもいいの？」

「順調だ。これ以上無いくらいにな」

しかし、カリフの表情は厳しい。

本当に順調であれば、もう少し明るい表情をしてもおかしくないはずなのに。

クルスも不思議そうに彼に問いかける。

「何かある？」

「何もない……だからこそおかしい。わしの思い過ごしであればいいが」

三国の情勢に詳しいカリフが悩んでいる。

本来は何もないはずがない……というところか。

昨日の緊急会議もだからこそ開かれたのかもしれない。

「わしは、緊急会議である案を出した」

「それは私に話しても良い事柄なのですか？」

ほんの少しだけカリフは苦悩の色を顔に浮かべつつも、微笑んで頷く。

「三国の間での話し合いは実は纏まっている。不思議とディラス帝国はかなりの譲歩を見せてな。もっと強硬姿勢に出るとわしは踏んでいたのだが……まあ、それはいい」

落ち着かない様子で歩いていたカリフは、息を吐くともう一度席に着いた。

彼の不安はあれだけ強硬な姿勢を見せていたディラス帝国が、かなりの譲歩を行う程、軟化していることにあるのかもしれない。

それは不自然なことだ。国益を損ねるだけ損ね、得るもの無く引こうというのだから。

だが、背後に『リブレイス』が絡んでいる事を考えれば、ある意味で目的はもう果たしているのではないか。国としてどう考えているのかは不可解だが……。

「問題は最後に大昔に調印を行った島で話し合いを行い、調印しなければならぬということだ」

「調印しなければ話し合いは無効ですか？」

俺の疑問にカリフは頷く。

「各国の軍隊が周囲を固める。護衛も各国、五名まで認められている。ディラス帝国の代表は小心。約束を反故にはすまい。だが、デ

イラス帝国の代表の護衛にお前達の良く知る者が混じっている」

「カイル兄さんとホルス……」

「そうだ。『リブレイス』である彼等が余計な事をして、三国の平和が破られれば、罪もない住民が更に苦しむことになる。わしはそれだけは絶対に防がねばならん」

力強く拳を握り締め、齒を食いしばるよう顔をしめながらカリフは重々しく言い切り、怒りを堪えるような表情で俺達を見つめる。

「わしの提案というのは、『リブレイス』の介入に対抗するためのものだ」

カリフはもう一度立ち上がると、俺達に対して深々と頭を下げた。

「すまん。ピアース王国の代表、エール伯の護衛を引き受けてはもらえないか？」

「……最悪の場合、兄と友人を相手に戦えと？」

「ケイト……」

不安げに二人が俺を見る。思わず感情的な低い声を出してしまっただ……大きく深呼吸して冷静さを取り戻すと、俺は悔やんでいるような表情のカリフに謝罪する。

「すみません」

「いや、怒りは当然だ。だが、君に望むことは戦うことではない。伯爵を守ること、そして、何かを相手がしようとした場合に、牽制して欲しいのだ。そして……」

落ち着いた様子で彼は堂々と背筋を伸ばし、俺を見下ろしてはつきりと告げる。

「戦いになるならば……もし、悪意を持って平和を乱そうとするのならば……若い君達の手を汚させはしない。わしが刺し違えてでも、二人を倒す」

巨体のカリフは、身体を震わせながらも内容にそぐわない静かな声でそう言った。

間違いなく本気だろう。そして、実力的にも不可能ではない。

文字通り命を懸ける事になるに違いないが。

三国に住む全ての住民のことをカリフは考えているのかもしれない。

俺はどうか。国に対しても街に対しても深い想いはない。

彼の真剣さに比べ、俺は戦争の危険という間近に迫る街の危機を目の前にしつつも、自分の身の安全と比べている。兄や友人の身を案じている。

だが、それが何だ。俺にとっては……大事なのは……。

「ケイト」

ふと気がつくと、クルスが俺をじつと見ていた。
何かを期待するように。

それは、不条理に立ち向かった子供の頃の俺を見る目に似ていて……。

昔のように何も言わずとも彼女の想いが理解出来て、俺は左手で頭を掻き、小さく笑った。

「そうだな。悪い奴には立ち向かわないと」

「うん。たくさんの人困るのは駄目。可哀想」

クルスの言っているのは子供っぽい正義感だと思う。
だけど、それでいいのかもしれないと不思議とそう思えた。

理由はなんでもいい。間違っても愚かでもいい。

困難から、そして相手が強いからといって態度を変えて逃げない
こと。

不器用でも正々堂々正面から、一歩ずつでも問題に取り組んでい
く。

それが俺に向いている生き方なのだろう。

その上で危険を可能なだけ排することが出来るよう考えていけば
いい。

「怪しいことしたら、見破ってぎゃふんて言わせてやればいいのよ」

殴る真似をしたシーリアに俺は笑って頷き、立ち上がって背の高いカリフを見上げる。

「護衛の件、お引き受けします。家族を止める必要があるなら、俺の仕事です」

「そうか……頼む。出発は二日後だ」

「しかし、実力の考慮は必要ないのですか？」

そんな俺の疑問に、カリフは何故か爆笑で答えた。

シーリアは理由がわかっているのかこめかみを抑えている。

「『クラストデイル』を倒した。これ以上の実力者を探す方が難しいわ」

「あ……」

当然である。赤面ものだ。

俺と違い、他の者はステータスを見ることが出来ない。

客観的な数値として能力を知ることが不可能なのだから。

あまりの恥ずかしさに頭を掻いていると、法衣を着た巨漢の神官は穏やかに微笑み、俺の肩を両手でゆっくり掴んだ。

そしてにいつと笑って小声で囁く。

「どちらの女が本命だ？」

「な……！」

「はははっ！ ま、出発まで神殿に泊まるといい。こちらの情報は随時、全て君に伝えよう。それでいいかね？」

笑いを納め、真っ直ぐにこちらを見て問い掛けたカリフに俺は頷く。

兄とホルスが何を企んでいようと何もさせない。絶対に平和の内に調印を終わらせる。

そして、二人を守りきる。そう決意を込めて。

第二十二話 エールの領主

高級そうな赤い絨毯を引いている応接室で、質の良さそうな木製の椅子に座ったシーリアが居心地悪そうに身をよじる。

「居心地悪い……貴族やだなあ。あいつら偉そうなんだもん」
「気にしなければいい」

学生の頃の苦手意識をシーリアは未だに引きずっている。
しかし、クルスはそんな彼女の泣き言を一言で切り捨てた。

そんなクルスは自分の言葉通りで、羨ましくなるくらいに普段通りだ。

護衛任務を引き受けた翌日、俺達はカリフに連れられてエール伯の館に訪れていた。

目的は依頼人との顔合わせである。

「もうすぐだ。静かに」

一緒に待っているカリフが神殿にいるときとは別人のような、岩のような硬い表情で注意する。これが貴族達と相對する時の彼なの

だろう。

質のいい服を持っていなかった俺達はカリフのつてで服を大急ぎで調達してもらい、今は下級貴族出身の騎士が着る軍服に近い服を来ている。

この服は女性用も男性用に近く、ボタンの位置が違ってくるくらいに差異しかない。

機能性はそれなりにありそうだ。シーリアは魔術師ということもあり、無理矢理着ている感があるが、クルスは体格もすらすらとしており、男装の騎士でも通じるかもしれない。

護衛の際には普段の装備になるのだから、着飾る必要はなさそうだが貴族と会うときにはそれ相応の服装をしないと失礼にあたるのだそうだ。

それだけではなく、俺達はどうしても強そうには見えないため、荒っぽい冒険者として紹介するよりはこういった礼儀を守ることですぐ雰囲気を出していく狙いもあるのかもしれない。

「ようこそ、カリフ殿。そちらが先日話していた者かね」

現れたのは日に焼けた小麦色の肌を持つ、髪の短い精悍な中年の男だった。

小柄だが弱々しさは全くなく、体付きは引き締まっている。

能力を確認する限り、それなりの戦闘経験を持っているようだ。

穏やかそうに笑っているが眼光が鋭すぎるため、その笑顔は逆に相手の警戒を誘うのではないかと俺は思っていた。

「はい。帝国のカイル・アルティアの弟とその仲間です。腕は保証します」

「ははっ！ 『クラストデイル』を倒しているのだ。腕はわかっておる」

俺達は立ち上がって彼に頭を下げながら、二人のやり取りを伺う。カリフは重々しく頷き、エール伯はこちらを見て機嫌良さに笑っていた。

「儂がレンドール・キルト・エール伯爵だ」

「ケイト・アルティアです。仲間の二人はクルス・ライエル、シーリア・ゲイルスタッド」

「座ってくれ。しかし、話には聞いていたが本当に若いな。それにいい面構えだ。うちの騎士にも見習って欲しいものだな」

俺はそれには応えず一礼して着席する。

不容易なことは話さない方がいいだろう。何が礼儀に触れるかわからない。

「君達に頼みたいのは私の護衛だ……ということになっている」

「兄への牽制ですね」

「ああ。向こうが何もしないならそれでもいい。念の為だな」

俺は無言で頷く。

「最近、あの組織の発言力が異常なほど高まりつつある。ピアース王国では、君達に関わった事件のお陰で影響力を薄めることに成功したかね。儂等は感謝しているのだ」
「恐縮です」

情報が早い。もう貴族の間では知れ渡っているようだ。
兄が向こう側の人間であるのに、カリフの提案を受け入れたのはこの情報を既に入手していたからなのだろう。

やはり権力者は侮れない。
ピアース王国の貴族が優秀なだけかもしれないが。

「残る二人は当日に紹介しよう。報酬に関してはカリフ殿から説明をすることになっている。そうだな……これくらいか。しかし、カリフ殿。もう少しいい服はなかったのか？ 英雄に対して失礼だろう……のう？」

「は……申し訳ありません」

深々と巨体を屈めてカリフは固い表情のまま頭を下げた。

エール伯の言葉は本気で言っているわけではない。小柄な中年の男は愉快そうな視線を俺に向けている。試しているのかも知らないが、正直に答えるだけだ。

「根無し草の冒険者には過分の服装です」

「くくつ……子供らしくない面白みのない答えだな。仲間のお嬢さん方の服は明らかに無粋だろう。彼女達にはドレスの方が似合う。それくらいは言ってやれ」

「旅にドレスは不要」

それまで黙っていたクルスが小さく呟く。一瞬冷や汗を感じたが、エール伯が特に気分を害した様子はなかった。寧ろ興味深そうにクルスを眺めている。

「そちらのお嬢さんは人形のようなと思ったが違うな。まあいい。君達は僮等の会談が終わればヴェイス商国に向かうそうだな」

「はい。そのつもりです」

「注意することだ。この国の有力者には自ら『天災』を招き入れるような愚者はいないだろうが、他国は違う。君達は目立ちすぎるかな」

天災……比喻表現か。実力のある者の報復……と考えるとラキシスさんを示しているのかもしれない。エールでは彼女から見えない形で庇護を受けていたということだ。

さらに頭が上がりなくなりそうである。

「わかりました。ピース王国の利益を損ねないように注意します」

俺は顔を伏せて礼をした。

色々思うところはあるが、ここは受け流しておけばいい。

「ふふ。それでよい。よろしい、それでは明日はよろしく頼む」

エール伯は立ち上がり、俺達も立ち上がって頭を深く下げる。
彼は満足そうに頷くと、応接室から立ち去っていった。

エール伯が立ち去ると俺達は長居をせずに直ぐに彼の館から神殿
へと戻る。

帰り道ではシーリアはかなり不機嫌だった。

「あいつ、私を完全にいないものとして扱ってたわ」
「この国の貴族は多かれ少なかれそういうものだ。『リブレイス』
の力が弱まりすぎれば、人間だけを優先して扱う者が増える。難し
いところだ……」

そんな彼女にカリフは顎をさすりながら説明する。

彼女が怒っているのは、彼女には一度も視線を向けなかったから
だろう。

それでも、話をするときにはシーリアも含めていたのだから、ま
し……といったところか。

そついう意味では俺も異種族の扱いが悪くなる責任の一端を担っ

ているのだ。

もちろん、彼等が事件を引き起こすならば、それを止めることに躊躇はしないが。

「ラキシス様も人間ではないわ」

「彼女は圧倒的だからな。色んな意味で。わしも一時期、行動を共にしたが……あの頃は若かったな。うん。いや、若かった」

何があつたのかはわからないが、カリフは苦笑しながら何度も頷く。

なるほど……と、思う。彼がシリアに付いて知っていたのは、あらかじめラキシスさんから聞いていたからなのかも知れない。

「マリアもいた？」

「マリア……マリア……剣鬼か。懐かしい……何故知っている？」

「俺の母親です」

一瞬、カリフはぽかんとした表情をしていたが、こちらを見て、弾けるように笑いだした。しばらく彼は笑い続けた後、何度も咳き込み、息を整えている。

「いや、まさかな。これも神の導きか。厄介事を引き起こすのは血筋かね？」

「偶然だと思いますが」

「君の村の出身者が色んな場所で活躍している理由がはっきりした

な。だが、これは黙っておこう。その方が面白そうだ」

悪巧みするような、にやつく笑みを彼は見せ、俺達にそのことは話さないようにと釘を刺した。予想以上に母さんも有名人なのかもしれない。

「ところで、カリフさん。ウルクの件ですが」

「ああ、わかつている。君達が護衛を行うことは、『リブレイス』に関わりを持つ神官には話していない」

「ありがとうございます」

俺は今回の護衛を引き受ける際に、カリフに情報を拡散しないように頼んでいた。

特に『リブレイス』には情報を渡したくはない。彼等は俺の能力をある程度把握しているだろうから。

逆に触れ回することで、相手の行動を踏み留まらせることも考えたのだが、今度は『聖輝石』を狙ってくる可能性もある。

その時、能力を警戒されて対応策を練られるのも面倒だ。

完璧な対策を取るには時間が足りなさすぎた。

そんな風に雑談をしながら神殿に戻ると、前に話をしたそばかすのある金髪の少年が深刻そうな表情で俺達を待っていた。

俺はそれだけで状況を悟り、能力を使ってウルクの状態を確認す

る。

「ケイトの兄ちゃん。今……」

「うん、わかっている。ありがとう……なるほどね」

彼の身に何が起こっているのか。能力を見た瞬間俺は全てを理解した。

そして、今回の交渉でも『リブレイス』が何かを企んでいる……そのことを、俺は確信していた。

第二十三話 湖上の会議場

三国の間での新しい協定の調印は『湖の民』達の島の一つで行われる。

これには過去に行われた三国協定を踏襲してのことで、三国間の友好を示す意味もあるらしい。今更な様な気はするが。

当然ながら、周囲は三国の軍隊で護衛しているが気になるのは数だ。

協定により、『湖の民』の領域には決まった数の軍船しか立ち入ることができないということがあり、各国それぞれ、少数の軍艦しか配置をしていない。

島の近くを巡回はしているが、目を行き届かせることは出来るのだろうか。

何百年ぶりというのもあるだろうが、杜撰に思えてしまう。

まあ、俺達はそのための護衛でもあるのだろうが。

「ケイト。どう?」

「『呪い付き』は護衛の中にはいない」

会議が行われる島までの移動中には妨害は無く、クルスが高圧的にナンパしてきたエール伯の護衛の騎士を二人とも訓練の名目で叩きのめしたくらいで、大した問題は無かった。

しかし、仮にも騎士がこれ程弱くていいのだろうか。

エール伯はその洗練された戦い振りを見て戦女神と賞賛し、正式な護衛として雇いたがったが、クルスは不興を買わないように考え、返事に舌を噛みそうになりながらも断っていた。

そして今、俺達は会議を行うための別荘のような建物の中で、会議が始まるまで控え室で他国の使者達やその護衛達的能力を確認していた。

名前は先に水の神の神官であるカリフから入手済みだ。

彼の手元にある情報は正しく、名前の異なる護衛はいなかった。

「それでこれからどうするの？」

会議のための打ち合わせを行っているエール伯と会議の参加者達の様子を見ながら、邪魔をしないように小声でシーリアは囁く。

「会議に参加出来る護衛は一名。それには俺が参加することが決まっている」

「うん」

「二人は『リブレイス』に接触している者達の警戒を」

船中で幾つものパターンを話し合い、行動も決めているが彼女も流石に緊張しているのか、頷いている表情が固い。

「大丈夫だよ」

気持ちが落ち着くように、ゆっくりとした口調を意識して俺は彼女に笑い掛ける。

『リブレイス』が何かを計画しているとして、その狙いは俺の持つ『聖輝石』か、会議を失敗させることにより、状況を混乱させること。即ちテロしかない。

だが、『聖輝石』に関しては兄やホルスは狙わないだろう。

兄達の目的は恐らくは自分達の名声と『湖の民』の支持。と、すればここでテロなどを起こされれば完全に意味が無くなってしまう。

ということは、今、ディラス帝国から参加している護衛は警戒する必要は薄い。ヴェイス商国からの者は注意が必要だが。

兄が護衛として会議に参加することに関しては意味があるとは思えない。

なぜなら、事前に今回の調印の内容は殆ど決まっているからだ。

事前に何かを吹き込んでいる可能性はあるが、その場合、俺達に対処することは不可能だし、カリフもそこまでは要求していないだろう。

大体そんなことをするなら、事前の会議でやっているはずだ。

兄達が会議の護衛に参加したことに意味があるとするならば……『リブレイス』内部でも方針がまとまっておらず、主導権争いを続けているためではないか。

少なくともアリス達、ジューダスの派閥と兄は争っているように思える。

兄とホルスの目的が彼等の邪魔である可能性も高いと俺は考えていた。

この仮定の問題はテロが成功し、三国間で戦争が勃発したときにジューダス派に何か得るものがあるのかだが……狙いはわからない。力尽くでも『聖輝石』を奪う必要がある可能性はあるが……。

「今回はカイル兄さんと殺し合わずに済みそうだしね。他の人への注意は頼むよ」
「ん。任せて」

クルスもしつかりと頷く。

もしも、何かが起こった場合は俺達で事態を沈静化させなければならぬ。

何も起こらないことを祈りたいが。

その日の夕食は、別荘の広間にて立食形式で行われた。

先日にカリフから借り受けた服を着て俺達は警護を行い、食事は後ほど交代で取ることになる。

質のいい服を着た三国の高官達が、内心はどうあれ食事をしながら談笑をしている様子を見ながら、俺は警戒を続けていた。

（食事に毒はないか……）

運ばれてくる料理には、欠かさず目を通す。

神経を張り詰めているため疲れるが油断は出来ない。

ふと、糸目の友人と目が会う。

ホルスはエール伯と話しているディラス帝国の代表、ライル
ト伯の側で薄らと微笑んでいた。

「なるほど、それは面白そうだ」

「そうだろう。どうかね。エール伯」

「余興としては悪くはないな。皆も彼等に興味があるだろう」

聞こえてくる内容に俺は顔をしかめる。

（正気か？ この情勢で何を考えている）

それを画策したであろうホルスに対して若干の怒りが沸き上がる。

この会議が不調に終われば、大惨事が起きるというのに。

だが、エール伯はライルト伯の馬鹿げた提案を引き受けていた。
小柄な彼は全員を見渡すと広間に響く力強い大声で宣言する。

「諸君！ 今回の会議には協定再開の立役者たる水魔『クラストデ

イール』の討伐者が多く参加している。彼等の戦いぶりを見たくはないか！」

食事を取りながら、談笑している者達の間でざわめきが広がっていく。

困惑する者、歓声を上げる者、様々だ。

「彼らのうち二人は別々の国に所属しているが、なんと兄弟だ！代表して賢兄、賢弟たる彼等に実力を見せてもらおうではないか」

ただ、おかしいと感じている者も三国の内、二国の代表の提案に逆らうわけにもいかない様子で、困惑した表情を浮かべながらも拍手を始めてしまう。

エール伯はその様子を確認し、満足そうに頷くと、にこやかに笑いながら俺に近付いて肩に手を置き、小声で呟く。

「やってくれるな？」

「剣では兄に勝てませんよ」

「負けても構わん。むしろ負けた方がいい。奴の自尊心の問題だ。交渉が楽になる」

奴……とは、ライル―ト伯のことだろう。

気が弱い人物というのがカリフの評だが、確かに大柄な身体を持ちながら、視線は落ち着かずにあちこちさまよっているように見え

る。

「そうだな。負けたらクルス嬢をもらおうか」

「それはお断りします」

「ふふっ、礼儀正しいが言いなりではないな。儂への士官、お前も考えておいてくれ」

彼は口の端を持ち上げ、不敵な笑みを浮かべると俺の横を通り過ぎ、自分の部下にテーブルを移動させてスペースを作るよう命じていった。

その準備が行われている間に俺はクルスとシリアに近付く。

「クルス、シリア、料理や他の護衛の行動に注意をしておいてくれ」

「ん……カイルしめといて」

「安心して、ぼこぼこにしてきなさい」

「まあ、頑張るよ」

好戦的な二人に俺は苦笑を返し、話をしている兄とホルスを確認する。

兄は何だか楽しそうだ。

「やれやれ。これも兄弟喧嘩になるのかな」

やる気満々な兄の様子をしばらく眺めてから、俺は周囲に視線を走らせる。

考えているのは、どこまで本気でやるべきか……ということだ。

ある程度の実力を見せなければ、エール伯の信用を失うだろう。だが、敵がいるかもしれない現状で手の内を晒したくはない。

奇策というのは、急に使うからこそ効果があるのだ。

俺は内心でこの試合で利用する手札を決め、急造の闘技場へと赴き、俺と同じような騎士の服を慣れた様子で着こなしている兄と対峙する。

「いやーまさか、お前が護衛に来るなんてな。ホルスの予測の外だぜ。さすが俺の弟」

何の気負いもなく誇らしそうに兄は笑う。

「どうしてこんな無意味なことを……」

「まあ、そう言うなって。こっちも大変なんだぜ?」

一定の間合いを取り、兄は剣を抜く。
クラストデイルの時のような両手剣ではなく、俺が愛用している母親の剣と似たようなタイプのロングソードだった。

片手剣の扱いにも慣れていらしく、その構えに隙はない。
俺と……そしてクルスとも同じ構えだ。

教えた者が同じだから当然だが。

俺は大きく息を吐き、自分の剣を抜き放って半身に構えた。

「お、やる気だな。弟の成長が見れそうで嬉しいぜ」

「ろくでもない見世物けど、俺も嬉しいよ。公然と仕返しができる」

開始の合図を待ちながら、俺は自分に有利な間合いを確保するため、位置を調整する。

「馬鹿なことを仕出かした代償に少し痛い目にあってもらうよ。カイル兄さん」

「おいおい、ケイト……目が怖いぞ」

俺は冷静さを心掛けながらも兄を睨みつける。

会場が静まり返り……そして、開始を告げるライル―ト伯の声が響きわたった。

第二十四話 晩餐の余興

開始の声と同時に剣を激しく打ち合わせる音が広間に響きわたる。兄は速攻を行うことで俺の思考を走らせる余裕を無くすつもりだろう。

俺と兄の間に技術の差は実のところあまりない。

あるのは年齢とレベルの差による身体能力の差だ。もっともこの差のせいで狭く、足場の悪い船上での戦闘練習ではあっさりと押し切られてしまったのだが……。

「流石に上手いな」

気迫の籠もった視線を俺に向け、兄は獰猛な笑みを浮かべる。

俺は兄の連続攻撃を最小の動きで受け流していた。

一撃一撃が重く、剣を握る手に衝撃が伝わるが防げない程ではない。兄の臂力に比して剣が軽すぎるのだ。

「カイル兄さんこそ、どこでそんな強くなったのさ」

時折牽制を入れて距離を取り、相手からの攻撃を誘って回避し続ける。

技は俺と同じものであるはずなのに、兄の剣はまるで野獣のように荒く、力強い。周りで見ている者は師匠が同じ人物だとは思わないだろう。

大型の魔物を命懸けで狩り続けることで身に付けた動き。実戦向きの強さ。

だからこそ、付け入る隙はある。

それまでは無理な攻撃は出来ない。

容易な攻撃を加えれば即座に負けるだろう。俺以上の剣の使い手であるクルスの攻撃すら反射的に防ぐのだから。

「エール伯、どうですか。一方的ではありませんか」

「さてどうかね。弟も良く防いでおるが」

ワインを片手に観戦している者の無責任な話が聞こえてくる。見世物にしてくれた文句の一つも言いたいところだが……。

「よそ見か？　隙だらけだぜ！」

気を一瞬逸らした隙に兄が声と共に距離を詰め、剣を上段から振るう。

空気を裂き、高速で迫ってくる斬撃を防げないと判断した俺は思い切って後ろに飛んだ。

切れた髪の毛が何本か宙を舞い、周囲からどよめき上がる。
兄は何故か追撃を掛けずに舌打ちして距離を取った。

（まだだ……もう少し。まだ警戒をしている）

全く勘のいい兄だ。野生の勘だろうか。
俺も欲しいものである。クルスは持っていそうだが……いや、怒られそうだ。

「……なあに狙ってやがる？」

「さてね」

「これだからケイトは……出来が良すぎる弟も考え物だな」

照れくさそうに笑う兄の後ろでホルスが呆れるように右手を頭に載せている。

きっと兄馬鹿とでも言いたいのだろう。

警戒を始め、不用意に動かなくなった兄に今度は俺の方から切り込んでいく。

中段から隙を作らないよう注意しながら、横に薙ぎ、突きを入れ、腕を狙う。

防御は攻撃ほど修練を積んでいないのか、やりにくそうに兄はそれを防ぐ。

兄にとって俺は苦手なタイプのはずだ。

防御が主体の俺と攻撃が主体な兄。
訓練を共にしているであろうホルスも防御が主体だが、俺のものは性格が違う。

相手が焦れるまで我慢して耐え続け、相手のミスを誘う。
それが俺の戦い方だった。

「はあああつ！」

「ちいつ！ 埒がいかないな」

攻めに転じた俺は、小さく細かい攻撃を繰り返す。
必死だ。僅かのミスも許されない。

俺の攻撃は防ぐことは出来るが、反撃はやりにくい。
攻撃はそう組み立てている。

兄の焦りを感じる。俺が積極的攻勢に出るとは予想外だったのだ
ろう。

だが、これも……。

「いいぜ。乗ってやる」

自信に満ちた言葉にざわっと肌が粟立つ。

俺の突きに併せて、兄は全力で剣を打ち付ける。

有り余る臂力で俺の剣を跳ね除けるのがその狙い。
剣を落とすことは無かったが僅かに俺の態勢が揺らいだ。

「甘いなっ！ 何度も見せられれば！」

兄が勝ち誇るように叫ぶが、それは俺の狙い通り！
瞬間、俺は剣を弾かれた力をそのまま受け流して左足を前に出し、
剣を振り上げようとした兄の懷に流れるように入る。

「なっ！」

肘鉄は相手を押す程度。今の態勢ではそれが限界。
追撃の右ハイキックも兄は背中を反らせて回避した。俺は齒を食
いしる。

反射神経が良すぎる。あと一撃……本命！

「これで終わりっ！」

前に置いた右足を送って勢いを付け、全力の横蹴りを放つ。
最後の一撃はさすがの兄も回避しきれずに、後方に吹き飛ばされ
た。

辺りが、し……ん……と静まり返る。

俺は左手で頭を搔いて、溜息を吐いた。

「効いてないでしょ。起きなよ。カイル兄さん」

「やれやれ、あんな隠し球があるとはなあ。かつけー」

「打ち止めだよ」

埃を叩いて兄はゆつくりと立ち上がる。

蹴ったときの感触が軽すぎた。

恐らくはあの崩れた態勢から後ろに飛んで勢いを殺したのだ。

常軌を逸している。どんな経験を積みば完全に不意を付いた連続攻撃を受けられるのか。

俺が兄に対して遥かに勝っている技術……徒手格闘術。

不意を付くために使ったが、二度は使わせてくれそうにない。

「今はカイル兄さんの方が強そうだね」

「今は……か、負けず嫌いは相変わらずだな」

後の二つの手札は切ることとは出来ない……詰んだか……そう俺が考えた時、兄の背後で異変が起こっていた。距離にして100m……これは……。

「どうした？ ケイト」

訝しげな兄を無視し、俺はホルスの方を見る。彼は不思議そうに俺を見返してきた。

彼ではないのか……となれば。

「カイル兄さん。遊びは終わりだよ」

「ん、これからが本気か？」

「いや、言い方を間違えた。仕事」

楽しくてたまらないのか満面の笑顔の兄に俺は苦笑を向けて剣を納め、放置してエール伯に近付き、膝を付く。

「顔に似合わず荒っぽい戦いだっとな。どうした？」

「南に配置していた精霊に反応がありました。もしも三国の打ち合わせにないことであれば……敵襲かもしれません。集団のようです」
「何っ！」

精霊の配置……これは俺の能力の不自然さを感じ取られないよう考えた嘘だった。

精霊魔法の特異性……アバウトさがなせる苦しい言い訳である。

俺の言葉に半信半疑のエール伯は慌ててディラス帝国の代表であるライル―ト伯に視線を向けた。

「……？ ど、どうしたエール伯」

ライル―ト伯は急に向けられた怒りの籠もった視線に驚きながらも、その理由がわからないといった風にエール伯に言葉を返す。

ヴェイス商国の代表も同じだ。急に止まった戦いと、エール伯の様子に困惑している。

その間にも襲撃者は集まり、こちらの様子を伺いながら待機していた。

数にして20人程。装備を確認する限り、軍人ではなさそうだ。仲間が集まるのを待っているのだろう……人数は増えてきている。

日は既に落ちているが、どうやって侵入したのか。

警備の軍を掻い潜ったか、そもそも仕事をしていないのか……いや、それは後だ。

「エール伯。迷っている時間はありません」

「そうだな。ライル―ト伯、エルドス評議員、敵襲らしい」

広間に集まっている者達の表情が引き攣る。無理もない。この島の正確な場所を知っている者は少ない。

ヴェイス商国の代表である三十代くらいの細身の男、エルドスと呼ばれた男は薄ら笑いを浮かべる余裕があるようだったが、ライル―ト伯は震えながら憤りの声を上げていた。

今のタイミングの敵襲……真っ先に思い浮かぶのは、不利なデラス帝国による襲撃だ。

「な、なな！　なぜ私だけがこんな目に……くそっ！　軍は何をしておるかっ！　このままでは私はっ！」

だが、そのライル―ト伯は明らかに関与していないように見える。と、なれば……。

「ライル―ト伯、ご安心を。調印は必ず成功します。我等に迎撃のご命令を」

静かにゆっくりと……微笑みながらライル―ト伯に膝を付いたのはホルスだった。

彼の表情からは動揺は伺えない。

そんなホルスに疑いの視線を向けていた俺の背中を兄が思い切り叩いた。

「ま、要するに倒してしまえば逃げないでも良いし、調印も問題ないわけだ」

「カイル兄さん……」

敵襲があったと知っても兄は軽い調子で笑っている。

この程度は何でもないことだと言っかのように。

そして、耳元で小声で囁く。

「言つとくが俺達じゃないぞ……で、どっちだ」

俺は頷いて、敵のいる正確な方向を指差す。

「よしっ！ 各国の護衛達も手伝ってくれ！ 腕を披露するチャンスだぜ！」

豪快に兄は各国の代表もいる中で宣言し……さすがにまずいと思ったのか「いけねえ」と呟いて、ライル―ト伯に深々と頭を下げた。

「う、うむ。お前達の強さ、他の国にも見せてやれ」
「お任せを」

兄とホルスは一礼し、他の国の代表者の方を見る。

安全を考えれば代表を護衛し、船のあるところまで逃げるのが正しいと思うのだが……軍人が近くにいるのだから、それが確実のはずなのだ。

兄達やライル―ト伯が迎撃を主張しているのは調印が失敗すれば困る事情があるための行動だろう。だが、調印出来ずに困るのは他

の二国も同じではないだろうか。

ここで調印出来なければこの襲撃の理由を巡って三国は疑心暗鬼となり、協定を結ぶことはもはや不可能になるのではないか。

命の危険と国としての危険……それをどう考えるのか。

俺は自分達の国の代表である、エール伯の方に確認を取る。

彼はじつと悩むように顔を俯けていたが、顔を上げ、苦渋の表情で俺達に命じた。

「仕方がない。迎撃だ。ケイト・アルティア。お前が我が国の護衛全員の指示を出せ」

「……了解です。よろしいのですか？」

「構わん」

命令を受け、俺は深々とエール伯に一礼する。

襲撃者は30名程まで増え、此方に向かって近付き始めていた。

第二十五話 混乱を誘う者

動揺し取り乱す者、呆然と立ち尽くす者、苦々しい表情をしている者……冷静さを保つことが出来ていない殆どの国の代表達と異なり、各国の護衛達は至極落ち着いている。

国の要人の護衛を担っているだけあって、相応の実力を彼等は持っていた。

ピアース王国の二人は微妙だが。

「おいガキ。お前さんに人を使うなんて無理だろ。お前らの国のも俺にやらせろよ」

声を掛けて来たのはヴェイス商国の護衛のリーダー……傭兵だろうか。

錆色の髪を立てた傷だらけで大柄な男が親指で自分を指差ながら、人を食った笑みを浮かべている。

男の名はハルト。能力を見る限り腕のいい剣士だ。

剣の腕だけでなく、意表を付く技を幾つも持っているようだが。

明白に無礼な彼の発言をヴェイス商国の若い評議員、エルドスが止める気配はない。

興味深そうに見守っているだけ。これも駆け引きか……政治家と

は面倒な人種だ。

「自国の者が頼りにならないのですか？ よろしければ私がそちらの指揮も取っても構いませんが……上手く使いますよ。如何でしょうか」

慇懃無礼な俺の切り返しにハルトは目尻を釣り上げる。

感情が顔に出やすい人物なのかもしれない。ちらりとエルドスを確認すると、小さく肩を震わせていた。

彼等と遊んでいる暇はない。

「クルス、シールリア、ゲインさんは他国の護衛と連携して迎撃を。俺とダリルさんはここで待機。状況を見ます。クルス、弓は？」

「ここに置いてる」

「腕見せてきて。後、『呪い付き』がいたら俺に報告すること」

「ん……ケイトは？」

「後で行く。心配ないよ。無理はしない」

クルスはしばらく黙って俺の目をじっと探るようにつめてから頷き、部屋の隅に置いていた弓を小走りで取りに行く。

そんな彼女を見ながらシールリアはこちらに期待するような視線を向けていた。

「ケイト、私は？」

「お客さんは大人数。護衛は近接戦闘の人が多いから責任重大だよ。いける？」

「当たり前でしょう」

自信に満ちた笑みを浮かべ、尻尾をゆっくり振りながらシーリアはクルスを追い掛けていく。クルスに破れた騎士ゲインも神妙な表情で頷き、二人の後に付いて行った。

ディラス帝国やヴェイス商国の護衛達も、襲撃者を撃退するため広間から退出していくと、ざわめきは次第に止み、広間は静まり返る。

「本当に襲撃はあるのか？」

三人が去った後、エール伯は自分の騎士であるダリルを自分用の剣を用意させる名目で追い払い、多少固い調子で俺に問い掛ける。確かに魔法だから……では、説得力が無かったのかもしれない。

「ディラス帝国は全員が信じています」

「……考えてみればおかしい話だ。しかし、ライル―ト伯は何も企んでいない」

「『クラストデイル』の探査にも使ったので、同行していた兄の信頼があるのです」

なるほどな、とエール伯は渋々といった雰囲気で頷く。

まだ疑っているのかもしれない……当たり前か。

確認はそれだけだったようで、戻ってきた騎士のダリルから剣を受け取るとエール伯も広間にいる各国の代表者達と同じように押し黙った。

凍り付くような緊張感の漂うそんな広間でただ一人、余裕の表情を浮かべている者がいる。肩までの波打った黒髪に褐色の肌を持つ異国の服を着た細身の三十代くらいの若い男。

「ケイト・アルティア殿でしたか。先程の戦いは見事でした」
「恐縮です」

話しかけてきたヴェイス商国の評議員、エルドスに俺は短く答える。物腰は丁寧だが、油断出来ない。確実に善人からは程遠い人物だと、目と歪む口元から見た瞬間に理解できた。

偏見かもしれないが。

ヴェイス商国は有力商人と少数の高級軍人からなる議会により統治されている国家で、128人からなる評議員が国内に置ける全ての決断を下している。

即ち財力が物を言う国家であり、エルドスは若いながらもそんな国の代表なのだ。

しかも、カリフの説明で事前に聞いていたヴェイス商国の主張は、そんな国にしてはあまりにも緩すぎる。相応の事情があるのだろうが……警戒するに越したことはない。

「先程の美しい少女達は貴方の恋人でしょう。よろしいのですか？」
「危険な場所を自分が受け持っているのです」

底冷えのする青い瞳を細め、エルドスは愉快そうに口を歪める。

「……ほう……そういうことか……有り得ますね」

正確に今置かれている状況を彼は把握している。俺はそう思った。

ある種の卑怯な方法で把握している俺とは違い、純粹に現在の状況と情勢から推理を行っているのだろう。若さに見合わぬ重要な地位にあるのは伊達ではなさそうだ。

それとも初めから事情を全て把握しているのか。

俺が残った理由はただ一つ。

大人数での襲撃が陽動である可能性が高いと考えたから。

襲撃者の中に俺が知る名前はない。

全員が人間であることもわかる。

つまり、彼等は『リブレイス』ではない可能性が高い。

そして何より……。

「ケイト殿、何処へ？」

「侵入者が来ましたので迎撃してきます。他の方は護衛を続けてください」

訝しげな顔で惚けているエルドスに一礼し、俺は広間の出口に向けて歩きだす。

俺の予測は外れている。

僅かに良い方に。これならばなんとかなるかもしれない。

「わしも行こう」

「カリフ様。侵入者は一名……お力を借りずとも」

正直に言えば彼には来て欲しくはない。

他の者が居ては困る。助けられなくなる。

だが、巨漢の神官は俺を見下ろしたまま動かない。

「お主はあの二人を大事にしている。ならば、その一名……外の者より危険なのだろう」

他にも理由がある。彼が来てはいけない理由が。悩む時間も惜しい。俺は正直に彼に告げた。

「敵の目的はカリフ様です。敵の思い通りになります」

「わしを見くびるな。それだけではないのだろう」

まだまだ役者が違う。俺は溜息を吐いた。

「戦いは俺が受け持ちます。援護だけをお願いします。護衛が仕事なんですから」

「わかった。任せよう」

穏やかな笑みをカリフは浮かべ、俺の後ろを歩く。

武器は持っていない。鈍器が彼の得意武器ではあるが、ここには持つて来ていなかった。

しかし、徒手格闘術と神術も十分に心強いレベルにあるため、単に戦闘をする上では一人で戦うよりも遥かに心強い。

「しかし、どうしてわしが狙われていると？」

薄暗いランプの明かりに照らされた通路を並んで歩いていると、カリフが不思議そうに尋ねてきた。俺はカリフに全てを知るわけではないがと前置きしてから答える。

「ディラス帝国の横暴から始まる一連の流れで、最も活躍した組織

は何処でしょうか。三国の何処でもない……『リブレイス』と水の神殿です。当初の思惑が何処にあるのかは知りませんが、結果的にそうになりました」

「ふむ……」

「知つてのとおり『リブレイス』は、『ラストデイル』という伝説の魔物を倒すことで、この騒乱を治めて名声を得ています。ですが、これは兄達の派閥……表側の話です」

話しながら俺は自分の頭を整理していく。

能力を使つて得た情報から逆算していけば真実らしきモノも見えてくる。

理解すれば理解するほど、頭が痛くなる話だ。迷惑過ぎる。

「別の派閥には別の思惑があるようです。おそらくは……」

別の派閥……『呪い付き』の長、ジューダス・レイトの派閥。今回の狙いが『聖輝石』だけでなく他のことも同時に考えていたとするならば。

納得が行く。

ホルスによる嫌がらせの本当の目的は……アリスの監視。あいつは裏の動きも察していたのかもしれない。

「三国協定の徹底的な破壊。それによる混乱」

「それでわしの暗殺か……いや、だが、そんなことでは我が神殿は崩れんぞ」

「ただ暗殺するだけならばそうかもしれない」

残り20m……そろそろ姿も見える。

「だけど『彼』がカリフ様を殺すならば話は別です。全ては確実に崩壊します」

「馬鹿な……何故……」

襲撃者達の反対側から悠然と歩いてこちらに向かってきたのは見知った男だった。

晴天の空のような青い長い髪を持つ法衣を着こなした、まるで女性のような青年……。

協定を司る『湖の民』であり、水の神殿の神官である優しげな面持ちの青年……ウルクが少しだけ驚いた表情で目の前に立っていた。

第二十六話 操り人形

通路に等間隔に置かれているランプの灯りだけが頼りな薄暗い闇の中、静かに佇むウルクを問い詰めようとするカリフを制し、俺は油断なく剣を構えて距離を取る。

ウルクから滲み出る強烈な違和感。

能力を把握することで彼の身に降りかかっている異変は理解しているつもりだったが、こうして対峙すると考えていた以上に不自然であることがわかる。

「誰だ……これは……」

背後でカリフが困惑するように呻く。

彼がそう思うのも当然だろう。

普段の彼は底抜けに明るく、嘆くときも全力で嘆く、無邪気で性格に裏を感じさせない青年だ。だが、今の彼は冷ややかな笑みを浮かべ、瞳には光がない。

同一人物にはとても思えない。

兄弟とでも説明された方がまだ納得が行くほどに。

俺以上に付き合いの長いカリフは俺が感じている以上の違和感を

覚えているはずだ。

「何でケイトさん、ここにいるんすか？」

抑揚がなく、ぎこちない口調。

同じ喋り方のようで違う。わざとらしい。

そんな彼に俺は油断なく構えながら笑みを向ける。

「エール伯に依頼されてね。いやー偶然だよな」

「そんな物騒なの向けてないで退いて下さいよ。僕はカリフ様に報告しなきゃいけないんす」

彼はこの後に及んでまだ演技を続ける。

俺の能力を未だに目が良いだけだと誤解しているのかもしれない。好都合だ。

俺が護衛していることを知らなかったのは先程の発言からわかった。それは『聖輝石』が目的ではないことを示している。と、なれば彼等の目的は俺の予想に近いはず。

俺の能力の範囲が広いことを彼は知っている。

護衛していることを知っていれば、また違った方法を取ったに違いない。

だが、今、陽動に対しては迅速に対応し、本命であると思われる

ウルクも俺が足止め出来ている。

エールに来てからというものの流されるままだったが、ようやく先手が取れたようだ。

「物騒なのはお互い様だろ。その服に隠している二本の短槍は何？」
「……そこまでわかるのか」

静かに近付いていたウルクの歩みが剣の直前で止まる。
動揺はない。考えてみれば当然だ。

彼は覚悟をする必要はないのだから。

別人のような彼に平静を取り戻したカリフは、重さを感じる低い声で問い掛ける。

「ウルク……何のつもりだ。お前は平和を誰より願っていたはず……何故だ」

「世の中、何にでも答えがあると思うのは間違い……すよ。カリフ様」

答えを言う気は無い……か。

物語の悪役のように、ぺらぺら悪事を話してくれたら俺としては楽だったのだが。

「答えは簡単です。カリフ様」

揺らめくランプの炎が、女性のように整ったウルクの姿を淡く照らす。

俺の言葉に彼は興味深そうにこちらを見た。

覚悟をする必要がない……何故なら命の危険はないから。

『彼』が死んでも痛くも痒くもないのだ。

それでも目的は達成出来る。やり方次第で。
むしろ派手に死ぬことを狙っている可能性すらある。

「彼がウルクではないからです。身体は彼の物ですが」

「ははっ！ 何言ってるんですか。頭は大丈夫ですか？ 僕じゃないなら誰だって言うんですか」

挑発するように口の端を上げてウルクは笑う。

間違っているなら確かにどうかしていると言われてもおかしくはない。

だが、この点に関しては確信がある。

能力表示に映る名前は確かにウルクだが……特殊技能名が表示され、薄い光の紐が彼の全身を絡めているように俺には見えていた。

特殊技能『心の蔓』……その持ち主は誰か。

「茶番はそろそろいいんじゃないか？ アリス」

「……」

一時の沈黙……これが俺の答えの正しさを証明していた。

間違っていれば即座に反応しただろう。

彼が自身が言ったように明らかにおかしい指摘なのだから。

「どうしてわかった？」

「さてね。世の中、何にでも答えがあるわけじゃないから」

苦々しげな彼の疑問に俺は彼自身の言葉を引用して答えると、彼から張り付くような薄笑いが消え、どこことなくアリスを想像させる沈んだ無表情に変わる。

そして、鬱陶しそうに長い前髪を払うと服の中から二本の短槍を取り出した。

「あの女二人も来ているわけね。本当に惜しいことをしたわ……」
「惜しい？」

ウルク……いや、アリスは俯き、くぐもった笑い声を上げる。

短槍を両手に構え、隙を見せないように遠目の距離を取りながら。

「折角、貴方が私を見つけてくれたのだもの。余計なものは消さないと」

深い闇……心の底から笑っているように感じるのに、その笑顔は歪み、狂気を孕んでいるように見える。『呪い付き』とはこういう存在になっってしまうのだろうか。

かつて俺が殺したサイラルもどこか狂っていた。

俺と同じような過去を持っていれば、倫理的に犯すことはないであろう罪を平気で犯している。今、目の前にいる彼女もそうだ。

クルスも昔、苦しんだ。

俺は……？

『呪い付き』とは本当に何なんだろう。

そんな俺の苦悩に構わず、アリスは淡々と続ける。

「今回は貴方に用はないの。退いて欲しいのだけど」

見た目だけでなく声もウルクそのものなのだが、元々声が高いこともあり、女言葉でも違和感はない。彼には悪いが……少しだけ俺は苦笑する。

「こんなことはやめてウルクを返してくれないか？」

「どうして？」

「君がテロを起こせば、戦争が起きる。大勢が命を落とすことになる」

恐らくは無益な説得になる。

そのことを理解しつつも言わずにはいられない。

だが、彼女は意外にも肯定するように頷いた。

「いいわ。条件があるけど」

「聞こう」

光明が少しだけ見える……もしかすれば……。

「貴方の手でクルスとシーリアを殺しなさい……あら、どうしたの？」

「正気でそれは言っているのか？」

「たった二人の犠牲で戦争は起こらず、大勢が助かる。合理的ね」

彼女の言葉が脳裏に浸透するまでは、時間を必要とした。
理解を拒否したのかもしれない。

同時に湧き上がったのは、激しい怒りの感情だった。
俺は齒を食いしばって必死でそれを抑える。

「嫌なの？ 貴方の望み通り、人はあまり死なないわよ？」

不思議そうな表情で彼女は首を傾げている。心底理解出来ないというように。

綺麗事を理由とした俺への彼女なりの答え。

彼女としては俺の言葉を素直に受け取り、返したのかもしれない。

「ケイト・アルティア！　しっかりしろ。悪魔に耳を貸すな！」

「悪魔とは随分な話ね。いい取引だと思うのだけど」

「そんなやり方が助かっても協定の精神は死ぬ。意味がない！」

背後から背中を押すようなカリフの力強い叱咤が聞こえる。

どんな時でも彼は人を教え、諭す聖職者なのだろう。

結局のところ、他人を理由にした俺が間違っていたのだ。

俺は目を瞑って苦笑いすると、アリスを真っ直ぐに睨む。

「悪いな。俺にとってクルスとシーリアは戦争より優先順位は上なんだ」

「……そう。残念ね」

「誰も死なずに済む方法もあるしね」

交渉は決裂だ。もう少し上手い方法もあったのかもしれない。

しかし、ここまで来てしまえば後は実力行使する他ない。

彼女は他人の命を賭け、俺は自分の命を賭けて闘う。

不公平この上ないが……覚悟を決める。

「俺がウルクの身体を殺さずに抑えればいい」

「……出来るのかしら？ それに抑えてどうするの？」

「さあ、その時考えるさ」

「行き当たりばったりね。まあいいわ。貴方が死んでも『聖輝石』がある」

会話での説得を諦め、俺達はお互いに有利な間合いを取り合う。

三国の護衛達と力を併せ、華々しく闘う兄達の裏で、決して表に出来ない『呪い付き』同士の死闘が始まろうとしていた。

第二十七話 狂気の人形遣い

アリスの能力の詳細はわからない。

ただ、無駄のない間合いの取り方をしていることから、彼女自身は所持していないはずの槍の扱いは可能なようだ。ウルクの技術を利用できるということか。

しかも、ウルク自身の能力も全体的な身体能力の数字が上昇している。

これは……。

「よそ見なんて余裕ね」

空を斬る音と共に連続で放たれた鋭い突きを、俺は小さく払いながら対応を考える。

彼女の槍は普通の長い槍ではなく、剣より少し長い程度の短い槍。

こちらよりも長さはあるが、そこまでの差はない。

集中し、致命傷を受けないように防御に専念する。

だが、それは容易ではない。

「くっ！　なんだ？」

完全に払った……そう思った瞬間、槍の軌道がぐっと伸びるように変化し、脇腹を掠めていく。

何とか身体を横に捻って回避したが、掠り傷で済んだのは幸運の要素が大きい。

槍の相手は慣れていないが技術的には此方が勝っている。

だが、変則的な技術、意表を付くような技は数字には現れない。

これは……大きな落とし穴だ。

普通の突きの中に特殊な突きが混ざっている……のか。
汗を背中に感じながら下唇を軽く舐める。

「情けない癖に意外と使えるのよ。この男。降伏したら？」

一旦距離を取ったアリスは俺の血が流れる脇腹に熱い視線を向け、熱っぽい嗜虐的な笑みを浮かべながら呟く。

借り物の力を使い、まるで戦いが他人事であるかのような口振りで。

「断るよ。それと、男からそんな視線向けられると寒気がするんだけど」

「冗談を言う余裕はあるのね」

苦笑しながら相手の右の突きを防ぎ、左手を狙う。
そこへの攻撃は相手の左の槍に上手く防がれた。

深入りはせずに落ち着いて防御と一撃離脱を繰り返していく。
ウルクは体力も中々持つているようで、激しいぶつかり合いを繰り返しても攻撃の鋭さは衰えない。

普段の様子からは想像できない程に強い……予想以上に……出来る。

だが、命の危険がある……しかも、戦況は不利で押されているにも関わらず、彼女の言うとおり緊張はしていない。

人との戦いに慣れたのか。それとも、命を奪う必要がないからか。

「わかつてはいたけど、しぶとい。嫌な男ね」

「褒め言葉と受け取ろう」

激しい剣戟の音を打ち鳴らしながら、俺達は剣と槍で応酬を行う。
しかし、時間が経つに連れ、徐々に俺からの攻撃回数が増えていく。

相手の型を見抜いたのだ。

彼女は両手に短槍を持っているが、主に右で攻撃を行い、左は牽制と防御に用いている。

そして、牽制を入れる際に、僅かに右腕を下げる癖がある。

自身の技術ではないから、彼女にはそこまでは理解出来ないのだ。

はないか？

徐々に不利になっているにも関わらず一向に変える様子はない。

そして……脇腹を抉ってくれた不可解な動きを見せ、ぐっと伸びる突き。

「え……」

しばらくは手間取らされたそれも俺は簡単に横に逸らし、反撃する。

反撃こそ左の槍で受け止められたものの、心理的效果はあったようだ。

距離を取り、アリスは小さく息を整えながら眉をひそめている。種が理解出来ればなんてことはない。

「何故……」

「さて、どうしてだろうね」

額を流れる汗をそのままに、俺は余裕を装うために笑う。

伸びる槍……その正体がわかったのは偶然だ。

子供の頃の経験があったからこそ見抜けた。

あの突きは魚を取るための銚の使い方なのだ。

腕を曲げ、目標の魚に向けて狙った場所に放つ高度で洗練された

技。

それは殆ど我流の俺とは違い、狙いも正確だ。
同じことを俺がやれば、先端がぶれてまともに魚に当たらないだろう。

湖の民であるウルクが大人から教えを受けて身に付けたものなのかもしれない。

だが、手元に注意すれば違いは簡単にわかる。そして、速いが軽い。

焦れている……優勢だったはずが、不利になってきているからだろう。

流石に咄嗟の応用までは出来ないらしい。

技術を地道に積み上げてきた者にしかわからないことがある。
努力は嘘を吐かないものだ。

もしこれが、本物のウルクが相手であればもっと苦戦しただろうが、所詮は借り物。

このまま彼女に手札が無ければ詰みだが……。

「しょうがないわね。綺麗に殺したかったのだけれど」

彼女は呟き、後ろに飛び下がる。

俺もその隙に左手を懷に忍ばせ、切り札を二つ手に取った。

相手のやろうとしていることはわかっている。

彼女の全身が淡く輝く……魔法だ。

ウルクの魔力を用い、扱う論理魔術。

理論が正しければ魔法は使える……そういつことなのだろう。

だがっ！

「『心の枷を外す。戒めを解き放ち……』」

「させないっ！」

左手から放たれた一つ目の石が高速で彼女の喉に命中する。

普通なら詠唱など出来るはずもない。下手をすれば死ぬ可能性すらあるはずだ。

二つ目は一つ目に合わせて床に捨てておく。

「くくっ……『力を……得よ……』」

「なっ！」

声が潰れ、掠れておかしな声になりながらも彼女は詠唱を完成させた。

効いていないわけではない。喉は青黒く染まっており、内出血していることは明らか。

それでも、欠片も動ぜず笑みすら浮かべられるということは……。

「痛み感じていないな」

「そんなもの、玩具……には必要ない」

魔法は攻撃のものではないらしい。

どんな効果なのか……それは直ぐに理解できた。

先程までとは明らかに違う速度で彼女は距離を詰め、無造作に右手の槍を振るう。

一瞬後、俺は轟音と共に通路の壁に叩きつけられ床に転がっていた。

咄嗟に剣の平で受け止め、左腕も剣に添え、全力で力を込めたにも関わらず堪えきれずに、俺は吹き飛ばされたのだ。頭をなんとか庇えたのは日頃の訓練の成果か。

「じほっ……なんだ……」

混乱しながらもすぐに立ち上がる。

一方の彼女も肩が外れたらしく、左手で治していた。

「ふん、脆いわね……さあ、続けましょう。ああ……いいわ……その顔」

蛇に舐められるかのような視線を感じ、鳥肌が立つ。

アリスの魔法の効果は身体能力の向上……いや、能力そのものの

数字に変わりはない。

この数字でこんな強引な力業は出来る訳がない。
痛覚を消している……痛覚というものは人の身体にとって、ブレ
ーキの役目を果たしている。それが無い。これが意味していること
は。

「アリス！ ウルクを殺す気かつ！」

「あら、殺そうとしているのはそっちじゃない？」

限界を超えた力の使用。

共通の過去の世界での知識……脳のリミッターを……。

そんな無茶な身体の使用は、どんな影響をもたらすかわからない。

だが、彼女は全ての意味で痛くも痒くもないのだ。

迷う……果たして殺さずにこれを取り押さえられるのか。

「ケイト！ ウルクを助けようとしてくれたこと……感謝する！」

俺達の戦いを見守っていたカリフが声を上げる。

重い……だが、悲痛な叫び。

「だが、これはわしらの落ち度だ。お主の命には代えられん！」

殺せ……ということだろう。
闘いの熱が急速に冷めていく。

入れかわるように心の底から爆発するような怒りの感情が湧き上がった。

無数の言葉が思い浮かんだが、俺の口から零れたのは短い言葉。

全ての激情をその短い言葉に乗せる。

「静かに見ていてください。絶対に助けます」

全身の痛みを堪えるために歯を食いしばる。
明らかに不利。相手は自身を人質に取っているようなものなのだ。
しかも、圧倒的な力を持っている。

「本当に……頑固ね。相変わらず」

今までとは違う穏やかな表情を浮かべ、アリスは俺に止めを刺すべく武器を向けた。

「カリフ様。神の力で相手の洗脳は溶けませんか？」

それに対峙している俺の後ろで、一時の間を空けて彼は口を開く。

「……相手の術の正体がわからぬ。呪いであれば『核』さえわかれば解けるのだが」

「『核』……ですか」

痛覚が無い相手、倒すにはどうすればいいか。
方法は思い浮かばない。

だが、希望は幾つかある。

絶対にアリスの思い通りにだけはさせない。
俺は大きく息を吸い込むと、覚悟を決めて相手へと踏み込んだ。

第二十八話 力の源泉

相手の突きをかい潜り、槍を持つ右腕を集中的に狙う。

どれほどの力があるうと、痛みがなかるうと、右腕そのものを動かす機能が無くなればどうしようもないはずだ。最悪切り飛ばせば……。

俺が負った重症の火傷を短時間で癒したゼムドよりもカリフは実力がある。

多少深く斬ったところで、治療は可能……だと信じたい。

相手の攻撃は一撃が致命的な重さを持つ。

集中しなくては反応できないスピードも相手は持っている。

受け止める事は難しい。

無理に前に出れば力任せに吹き飛ばされ、今度こそ殺される。

まずはこれを何とかしなければ、彼女の能力に『核』がもし、あったとしても探す余裕がない。『相手を殺さない』というのはそれだけでも大きなハンデなのだ。

そこからさらに、相手の弱点を見つけるのは無茶と断言していい。

いや、余裕があったとしても……彼女の動きが止まっても俺の能力では、蔓の『核』を探すのは不可能かもしれない。

それ程に光の蔓は複雑に絡まり合っている。
焦燥感が心に広がりそうになるのを、必死に抑えながら彼女を睨む。

「甘いわね。上司が殺せって言っているのに」

「何と言われようが俺は自分の意思を貫く」

「責任もないのに……馬鹿な男」

俺を殺さんと槍を振るいながらアリスは饒舌に話し続ける。

これまでに必要な事しか話そうとしなかったにも関わらず、今、殺しあっているこの時に。

「妥協も覚えなさい。生きてたら」

「事によつては妥協もするさ」

出来の悪い生徒を言い聞かせるように優しくな声で俺を諭し、苦笑を浮かべながらアリスは攻撃し、それを回避し、受け流しながら俺は彼女に応える。

彼女の言うように危険な事に対して妥協をすれば楽なのかもしれない。
ない。

だが、それには後悔や罪悪感が伴うのではないか。

ならば、大変でも誰かに力を借りても地道に道を切り開き、真っ直ぐに進みたい。

不器用だし、賢くないということは自分でもわかるが……既に考

えて決断したことだ。

「ぐっ……！ まだまだ！」

「よく防ぐわね」

真横に振るわれた槍を同じ方向に軽く飛びながら受け、着地した瞬間に再び切りかかる。攻撃を先読みすることで、俺は相手の力を受け流し、攻撃を防いでいた。

だが、相手は反射速度も速い。

こちらの選択肢は狭いこともあり、俺もアリスに上手く防がれてしまっている。

持久戦に持ち込まれる……それは半分負けを意味している。

ウルクの肉体が何処まで無茶な利用に耐えうるかわからないのだ。打つ手は無い？ いや……状況打開の鍵はある。

俺の能力を利用して、『核』を見つける。
戦いながらも見つけられほどの短時間で。

今の俺にはそれは出来ない……だが……。

俺はまだカイルにいた頃に、クルスと交わした会話を思い出す。
かつてクルスが強敵を相手に危機に陥ったとき、『もう一人の自分』が力を貸してくれたという。だけど、クルスはそれを危険で駄目な力だったとも言っている。

彼女は口下手だから言葉は少ないが、余程まずいものであることは端々から伝わっていた。

そして、彼女はその結果『狂化』という用途不明の能力を習得している。

話の流れから、まず、確実に『呪い付き』と関係がある能力だろう。

他の技能と同じように『呪い付き』の特殊技能も上手く使うことで、もしかすれば成長……もしくは進化するのではないか。

問題はそれを試すための時間を稼げるか……！

「掠ったわね。次は串刺し……寂しいけど」

俺は彼女の言葉を無視し、意識を集中させる。

能力でウルクを見ると、身体に光の蔓が複雑に巻きついているのがわかる。

それをもっと『深く』視る事は出来ないか？

物と動物を切り替えるように。

今見える物と違う物を見たい……そう、心で念じる。

よく考えれば俺は自分の能力を知っているようで、何処まで出来るのか限界を試したことはない。必要な時以外、この能力を使うことをなるべく避けていた。

努力で得たものではない。
生まれがたまたま特殊だっただけだ。

目に見えては何もないが能力には『代償』があることも考えられる。

それ故、便利だが人には過ぎたこの能力に俺は忌避感を覚えていた。

だが、これを利用することで人は助かることもあるのだ。

子供の頃のクルス然り、城塞都市でのシーリア然り……そして、
今、ウルクも。

能力に善悪はない。使い方だ。

躊躇をするな。

自分の正しさを主張するなら、全力で示せ。

出来ることは全てやり尽せ。

出来ないならば……身に付ければいい。

失敗しても何も不都合はないのだから。
やるだけやればいい。

「……っ！」

何かが頭に引っ掛かる。

それを意識した瞬間に鋭い頭痛が走り、槍の横殴りに対する回避のタイミングが狂う。

俺の体は軽々と吹き飛ばされ、地面を転がった。

「くっ……っ！　まず……！」

「残念ね。ケイト」

ようやく重い一撃を当てたアリスが、愉悦に顔を歪める。
かろうじて剣を楯にしたものに、肋骨が……恐らく折れた。

目が眩むような激痛で一瞬判断が遅れる。

流石に今の態勢ではかわしきれない。もう一つの切り札も間に合わない。

「いかんっ！」

武器を持たないカリフがアリスを止めるべく動き、俺が致命傷だけは避けるべく、身体を動かそうとしたその時、

ヒュッ！

空を切る軽い音と共に、アリスの足を矢が貫抜いた。
信じられない物を見るように彼女は足を見て、それが飛んできた方に向く。

俺もその隙に痛みを堪えて立ち上がり、薄暗い通路を不機嫌そうに歩いてきた頼りになる少女を、苦笑いしながら見つめていた。

「ケイト。後で説教」

「うっ……はい」

「シーリアからもね」

空の矢筒と弓を無造作に床に捨て、クルスは剣を抜いて俺の前に出る。

ウルクを前にしても全く戸惑う様子はない。

「どうして此处に……」

「五人射抜いた。余裕出来たからシーリアが行けって」

俺達を見つけるまでは余程慌てて走ったのだろう。

クルスは小さく短い呼吸を繰り返していたし、髪は汗で肌に張り付いている。

俺は左手で髪の毛を掻き乱す。二人に俺の考えていることは筒抜けだったようだ。

アリスは刺さった矢の羽を折り、突き抜けた矢を強引に引き抜くと静かに剣を構えるクルスに微笑み掛ける。

俺に向けるものとは違う、心の奥底からの激しい憎悪をそこには感じた。

「運が良いわね。獲物が自分から来るなんて」

「……ウルクじゃない。この気持ち悪い感じ……知ってる」

油断なく対峙しながら、クルスは顔をしかめる。
勘がいい。だが、伝えなくては……。

「クルス、それはアリスだ。巨人並の力を持つてるぞ！ 気をつけろ！」

「了解。私はどうすればいい？」

「すまん、時間を稼いでくれ。相手は右手の短槍がメインだ」

無言で頷くとクルスは間合いに注意しながら斬り掛かる。
危なげの無い様子に、俺は安堵の息を吐き、能力の集中を再開した。

「……くう……っ！」

引っ掛かりを辿ると頭が……眼が万力で締め付けられるように痛む。

だが、それは俺のやり方が間違っているからだろう……そして、何かを掴んだ。

これがクルスの言っていた『危険な何か』か？
不思議な感覚……半分意識が暗転し、宙を漂っているような……。

微かに舞う雪が意識の隅を通り過ぎていく。

この世界では聞くはずのない車のエンジンの音が耳元で聞こえる。

俺は横たわっている。

土ではない……ごつごつしたアスファルトだ。

家族の事、後輩のこと……走馬灯のように巡っていく。

大事な物、焼き尽くすような怒り、友情、冷たい感情、愛情……。様々な思い出から強い感情が沸き上がり、走馬灯が過ぎていくた
びに消えていく。

紅く染まる地面に横たわりながら最後に強く……強く想う。

何を？

『知りたい』

こんなことになった原因を『知りたい』と。ただそれだけを強く……強く……それだけが心に残る。

全てを呑み込む闇……そして……消えて……。

「ケイト殿っ！　しっかりしろ！」

荒々しくカリフに背中を叩かれ、俺は正気に帰る。
あのままだとどうなっていたのか……冷や汗が止まらない。

「カリフ様、有難う御座います。わかりました」

「……ケイト殿……眼が……」

「呪いの『核』を見つけました」

眼がおかしくなっているらしい。
だが、考え事は後だ。全ては終わってから考えればいい。

「クルス！　一瞬でいい。隙を作れ！」

「了解」

俺の声を受けたクルスはこれまで以上に鋭い斬撃を加えて行く。
その間、俺は左手に魔力を込めた。

「なぜ私が押されるっ！」

「借物で私に勝とうなんて……無様」

信じられない事にクルスが強引な攻めを行い、力でもアリスと五分に戦っている。

何が起きているのか……だが、十分の時間は得た。

予め落としておいた石を狙う場所に蹴り、俺はアリスの側面に位置取り、解放する。

「石の精霊、ストラスよ。足を掴め！」

「こんなもの！」

膝くらいの小さな石の人形が落としておいた石を基点にして現れ、一番近くにいるアリスの足を掴もうと後ろから迫り、蹴り潰される。

それでも構わない。意識を一瞬逸すのが目的。

正面からクルスは右の短槍を剣で跳ね上げて手放させ、

「終わりだ！ アリスっ！」

折れた骨から走る激痛を歯を食いしばって耐えながら、大きく踏み込んで低い姿勢から左手首を切り飛ばす。

彼女が左の槍を牽制と防御にしか使わず、それがバレても同じように戦い続けた理由。

使いこなせていないのもあるが、彼女の能力に深く関係している

からのだろう。

自然と槍を手放して落ちてくるそれを、俺はカリフに向かって蹴り飛ばす。

「カリフ様！ 神術を！ もしかすればそれで！」

「わかった。エルーシド様の力をお借りしよう」

俺の能力がどう変わっているのか、今はまだわからない。

だが、今の俺には光の蔓は複雑に絡み合い、左の人差し指にその全ての根が集まり、強い光を放っているように見えていた。明らかに前とは見え方が違うのは確かだ。

カリフが左手を掴んで目を閉じ、集中するとアリスの身体が大きく震えて止まり、錆び付いた人形のようにぎこちない動きで床に座り込んだ。

「抵抗が強くなったか。その女だけは仕留めたかったのだけど、無理そうね」

「何故それほど……」

「ふふ……おかしい話ね。貴方は私以上に彼女を憎まなければならない筈なのに」

感情の抜け落ちた虚ろな笑みに見えるのは、アリスがウルクの身体が支配出来なくなっているからだだろうか。

しかし、何故俺がクルスを憎む必要があるのか。

「どういつことだ？」

俺の疑問に答える間も無く、アリスは目を閉じる。

光の蔓が消え、後に残されたのは苦悶の表情を浮かべながら眠っているウルクだった。

第二十九話 事後処理

血を流して倒れているウルクをカリフに任せ、俺は外で戦っている護衛達の戦況も確認する。どうやら向こうもそろそろ終わりそうだ。援護に向かう必要は無いだろう。

俺は安堵の息を漏らして、静かに立っているクルスに近づく。危険な時に駆けつけてくれた彼女には感謝してもし足りない。

すっかり助ける方と助けられる方が逆になったなあ……と、内心苦笑する。

「助かったよ。ありがとう、クルス」
「ん……良かった」

クルスは微かに微笑む……が、その笑みに俺は違和感を覚える。何か無理をしているような。

はっ……と、すぐに気が付き、俺は慌ててクルスの腕を掴み、服の袖を捲る。

彼女はばつが悪そうに明後日の方を向いていたが、観念したように呟いた。

「ばれた？」

「無茶したね。俺のせいだから怒りにくいなあ」

「加減したから、すぐに治る。問題無い」

腕を掴んだ瞬間、クルスは顔をしかめていた。

相当痛んでいるはずだ。白い肌が真っ赤に腫れ上がり、熱を持っている。

恐らく制御を外したウルクと同じくらいの力を出したせいだろう。彼女の剣はそのせいで大きく歪み、鞘に引っかって上手く中に入らないようだ。

これが彼女が得た力だというなら、『駄目な力』と言ったのも頷ける。

「私よりケイトは大丈夫？」

「肋骨が折れてる。身体をあんまり動かしたくないね」

「治療しないと。後、眼は？」

そういえば戦闘中にカリフも何か言っていた。

眼がどうのこうの……特に痛みとかはないのだが。

「痛みは無いけど、どうなってる？」

「今は戻ってるけど、さっき銀色になってた」

「……」

黙って能力を発動させる。

「あ、また銀色になった……あ、戻った。格好いい。面白い」
「これは嬉しくないね」

新しい玩具を見つけたみたいなお好奇心に溢れた様子のクルスに苦笑を返す。

これも代償なんだろうが。目立つことこの上ない。

正直、邪魔な変化だ。

能力を発動させるときは目を瞑った方が無難そうか。
性能に関しては、ゆっくり調べることにしよう。

それより、ウルクだ。

「カリフ様。治りそうですか？」
「うむ。切口が鋭かったお陰で腕は繋ぐことが出来た。身体の方も数日は苦しむだろうが……死ぬことはないだろう。完全には癒し切れなかった」

目を閉じ、祝詞を捧げていたカリフが顔を上げるのを見計らって俺は声を掛ける。

少しだけしか限界以上の力を使っていないクルスですら、あの腕の酷い状態だ。

長い時間酷使していたウルクは相当だったのだろう。

しかし、治療が上手くいったからか脂汗も浮かんでいた彼の寝顔は少し穏やかなものに変わっている。

だが、問題はまだ残っている。

「ウルクは……誤魔化しますか？」

正直に苦しい。弁護のしようがない。

ここに襲撃者が現れたのも、ウルクが操られて情報を奪われたからだろう。

カリフは俺の質問にウルクを担いで苦笑しながら答える。

「いや、誤魔化さない」

「ではどうしますか？」

俺には彼を助ける方法がそれ以外に思い浮かばない。

だが、カリフは重々しく首を横に振った。

「隠しても漏れるものだ。今回は三国に借りを作ることと解決を図る」

「そんなことが出来るのですか？」

「不可能ではない。わしらは協定を巡って三国に貸しを作り過ぎている。立場の調整を行う丁度いい機会かもしれない。彼等貴族には一

人の命など軽いものだからな……案外、嬉々として乗っってくれるかもな」

具体的には……と、彼は考えるように時間を置いてゆつくりと続ける。

「何処からか情報が漏れたが、それを察した若い神官が危機を知らせるために来た。まあ、そんなとこだな……お主等の手柄には出来んが……すまない」

「俺は構いません。しかし、納得しますかね？」

さてな。と、カリフは肩を竦める。

「元々わしらが政治に関わるのは好ましくない。出来れば今回の事件を利用して、水の神殿の政治的な力を削げれば最善だな。逆に三国は陰謀に負けず、協定を結んだと国内に宣伝することが出来る」

協定を結び、かつ、ウルクは助けることは彼の利益に沿う……ということだろうか。

カリフは落ち着いた様子で続ける。

「恐らくは大丈夫だ。向こうにも痛い腹はある……任せておけ」

「水の神殿としてはそれで良いのですか？」

「まあ、間違いなくわしは降格だな。だが、それでいい」

部屋にウルクを運ぶために通路を歩きながら、カリフは穏やかな微笑みを浮かべる。

落ち着いた、安心するような笑みを。

「聖職者の仕事は政治ではなく、人を導くことだ。非常の時が終われば本来の役目へと戻る……それで良い。いや、そうなるべきだ」

本当に大丈夫なのだろうか……そして、彼の説明は何処までが本音なのか……そう考えていた俺に、カリフは笑い声を上げる。

「はっはっは。ま、人生なるようにしかならん」

「気楽ですね。失敗したら水の泡なのに」

「お主の母親や、シーリア殿の母親に鍛えられたからな」

にやりとカリフは人を食うような笑みを浮かべ、背中を叩く。それが折れた肋骨に思い切り響き、俺は蹲りそうになった。

「おお、すまんすまん。お主の治療はウルクが起きたらやらせよう」「ごほっ……ほんと、痛いんですから、勘弁してください……」

涙目になりながら睨むと、カリフは小さく頭を下げる。そして、部屋の前に付くと表情を引き締めた。

「ケイト殿、クルス殿。本当に……わしの弟子、ウルクを助けてくれて有難う。この恩は必ず何時か返させてもらう。感謝するっ!」

今度は深々とカリフは俺達に頭を下げる。

そんな彼に俺はどう返せばいいかわからず、左手で頭を掻き、クルスは「問題無い」と薄い胸を張って頷いていた。

ウルクを休めた後、俺達は広間へと戻り、エール伯にはカリフから説明を受けてもらえるように頼んだ。とてもではないが俺が報告できるような内容ではない。

エール伯はカリフから説明を受けると、苦々しい表情で頷く。カリフの表情を見る限り、説得は上手くいっているようだ。

どんな痛い腹なのかは、聞かないほうがいいのだろう。

しばらくすると、話合いを終えたエール伯がこちらへと歩いてくる。

カリフはそのままディラス帝国のライルード伯の方へと向かって行った。

「迎撃、ご苦労だったな。よくやった」
「恐縮です」

脇が痛むのを我慢し、軽く頭を下げる。
そんな俺に倣うように隣にいるクルスも小さくぺこりと頭を下げた。

「お前達の働きは表には出来ない」

「承知しております」

「どうでもいい」

「しかし、約束の褒賞の方は払おう。外の戦況はどうだ？」

エール伯からそう尋ねられた俺はクルスの方を見る。

ここに来る前に彼女に状況は説明してある。俺が答えるよりは外で戦っていた彼女が説明するのが自然だろう。

「私が弓で五人仕留め、シーリアとホルスの援護を受けながらカイルを先頭に他の護衛が突撃。相手が弱いから私はケイトの援護に。多分、向こうもそろそろ終わってる」

無表情なクルスの平坦な口調の説明に、エール伯はほっとしたように頷く。

今頃、兄は明るく元気に勝鬨を上げているだろう。

なんだか容易に想像が付いて笑いそうになる。

「優秀な働きをしているのにお前達には名誉を与えられん。本当にすまぬな」

エール伯は軍人のように姿勢よく直立しながら、すまなそうに言う。

もしかすると、名誉とは貴族にとって至上の物なのかもしれない。そうでもなければ彼のような上位の貴族が俺のような冒険者に謝罪することなどないのではないか。俺とは違う価値観を持っていると考えた方がいいだろう。

彼に対して失礼にならないよう、俺は考えながら返答する。

「有難う御座います。ですが、このような重大な会議の護衛をさせて頂けるだけでも、私には余りある名誉です」

「ふふ……本当に歳に似合わぬな」

半分呆れるようにエール伯は笑い声を上げた。

それから半時間も立たないうちに外に戦いに出ていた兄達は、得意満面の笑顔をしながら広間に戻り、それぞれの代表に戦果を報告する。

緊迫した空気は事態の劇的な解決を経て、和やかなものへと戻り、協定のための会議は明日の形式的な会議と調印を残すだけとなった。

この日の夜、俺はシériaと二人でクルスの腕を冷やすために、寝ずに水に浸けた布を変え続け、見張りの時間も彼女と同じ時間帯にしてもらい冷やし続けた。

燃えるように熱を持っている腕は相当痛むはずなのに、クルスは力になれたと幸せそうに笑う。

可愛いし、頼りになるけど危なかった。

本当に困ったものだと思いながら、俺は激しい戦いのせいで乱れたままになっていたクルスの髪を、綺麗に直して上げた。

第三十話 アリコルドの協定

大昔に結ばれた三国協定をなぞるための会議……形式的な会議ではあるが、正式に調印を行う場でもあるため、最後まで護衛である俺達は気を抜くことは出来ない。

会議中は俺だけが護衛に付き、代表であるエール伯と随員の役人の側に控えている。

ディラス帝国は兄が護衛に付いていた。この場合、外のクルスとシーリアにはホルスを監視するように頼んである……が、恐らくは何もする気はないだろう。

ヴェイス商国は俺に絡んできた傭兵、ハルトを会議中の護衛に選んだらしく、似合わない豪華な服を着て退屈そうに立っていた。

会議には緊迫した雰囲気はない。

三国の協定書を各国の代表と専門の随員が淡々と確認し、署名するだけだ。

一時間もしないうちに、代表三名による署名が行われ、エーリデイ湖使用に関する協定は再締結された。

内容は話を聞く限りピアース王国、ヴェイス商国にやや有利……と言ったところだ。

三国の間に住む『湖の民』はどさくさに紛れて權益を縮小されているが、はたして彼等は納得をしているのだろうか。

新たな火種にならないことを祈りたい。

「水神エルーシドの名の下に、新たな三国協定を承認する。平和を望む三国の英断は長く称えられることになるだろう」

司会を務めていたカリフは重々しく、宣言を行う。

旧い三国協定の中心に立っていたのは『湖の民』だった。その代わりを中立である水の神の神殿が務めることで、新しい三国協定は守られていくことになる。

カリフは政治に関わるべきではない。そう言っていたが、立場は変わらざるを得ないのではないか……そう思う。俺にはどんな影響をもたらすのか想像も付かないが。

だが、今は平時の状態が戻ったことを素直に喜んでおきたいところだ。

宣言と共に代表と随員達にグラスが配られる。

この世界では珍しいガラス製だ。高価な物なのかもしれない。

最後に全員で乾杯を行うことで、会議は終了する。

護衛である俺の側を給仕が通った瞬間、濃厚なワインの匂いに混じって嗅いだことのある……僅かながらの違和感を覚え、俺は念のため目を瞑って能力を発動させた。

油断していた。最初の襲撃は囧……ウルクも囧だったのかもしれない。

「カリフ様。少々宜しいでしょうか」

護衛である俺にこの場での発言権はない。
だが、それでも敢えて声を掛けた俺を訝しげにカリフは見る。

「なんだ？」

「私は薬師としての訓練を受けております」

「それで？」

「匂いから毒薬、アリコルドの癖のある香りを僅かに感じました。
調べさせて頂きたい」

いつのまに毒を持ち込んでいたのか。少なくとも襲撃の前まではなかったのに。

襲撃を凌ぎきって安心したところを毒殺……企んだ相手は性格が悪すぎる。

ふむ……と、カリフは困惑したように俺を見た。
彼の立場としては当然だろう。

俺自身も予想外だった。たまたま匂いに気付き、念の為に能力で確認を取らなければ……油断の代償を支払うことになったに違いない。

珍しい薬だが以前、村を干ばつが襲った際に異常繁殖したため、幼馴染のヘインを中心に調べたことがある。おそらくホルスもクルスも覚えているだろう。

特にホルスにとつては村にいた最後の年だ。

考え込み、黙ったカリフに変わってエール伯が俺の方を向く。

「どんな毒だ？」

「ある薬草から作られる神経毒です。時間を空けて症状が現れ、量によつては……死に至ります。毒見役の者も急ぎ、解毒しなくては危険です」

「本当に混ざっているのか？」

疑わしげなエール伯に、俺は慌てずに答える。

「匂いだけでは確実に……とは。ですが、護衛としてはエール伯をあらゆる危険から、お守りする義務があります。確かめるのは簡単です」

「わかった。やれ」

俺は随員のグラスを受け取り、持っていた白いハンカチの上に掛ける。

赤いワインなのに、ハンカチは鮮やかな水色に染まっていた。

アリコルドの特徴だ。液体に混ざると刺激臭を放ち、見た目の色に左右されず、白い物を青く染める。ここまで鮮やかに染まるとい

うことは、致死量は軽く超えているはず。

適量であれば……もしくは、調合をきちんと行えば薬にもなるのだが……。

「なるほどな……こうなるわけか……良くわかったな」

「恐縮です。師の教えが良かったのだと思います」

周囲を見回すと、殆どの者が顔を青醒めさせていた。

平静を保っているのはヴェイス商国の代表、エルドスくらいだ。

「カリフ殿っ！ これはどういうことだ！」

神経質そうなディラス帝国のライル―ト伯が席を立ち、怒りで顔を歪め唾を飛ばしながらカリフに詰め寄る。先日のあるため、カリフを疑っているのだろう。

だが、彼にはこんなことをするメリットはない。

最悪のタイミングと言える。三段構えの手口からはどんな手段を用いてでも三国の関係を叩き壊す……そんな執念を俺は感じていた。

流石にカリフも予想外だったのか、表情は暗い。

しかし、意外なことにカリフに助け舟を出したのはエルドスだった。

異国の服を着た、まだ青年と呼べる歳の男は、落ち着いた様子で

ライル―ト伯に声を掛ける。

「食事や酒の準備は我が国の管轄。我が国の落ち度です。和平を崩そうとする者は三国それぞれに潜んでいた……そういうことでしょ。まずは、犯人を。ハルト」

「了解したぜ」

「ライル―ト伯。ここは陰謀に屈さず、我々が協力することが各国の国益となるのでは？」

「む……むう、そうだな」

落ち度は自分にあるといいながらも、悪びれている様子はまるでない。

自信に満ち溢れた笑みを浮かべている。

激昂していたライル―ト伯も冷静に戻ったのか、忌々しそうに頷いて席へと戻った。

「調査結果は後程お伝えします。では、カリフ殿。残念ながら飲めませんがグラスはあります。気にせず掲げましょう」

「む……」

「毒杯でも平和を望む我等を止められなかった。美談ではありませんか」

愉快そうに口を歪めているエルドスの真意は見えない。単純ではないのだろう。

あまり知りたくも無かった。

「三国の恒久的な平和を祈って！」

大声でカリフは宣言する。

そして、各国の者達も立ち上がり、毒杯を掲げて唱和した。

今回の騒動を思えば、恒久的な平和など誰もが茶番だと考えているだろう。

俺には毒杯によるこの乾杯は、三国の未来を暗示しているように思えて仕方がなかった。

会議が終わるとエール伯は一時もこの島にはいたくないと、帰り支度を指示した。

俺も全く同感である。

ヴェイス商国が雇っていた酒の準備を行った者は既に毒殺されていたらしい。

国が準備した物資以外の代物だったらしく、事件は単独犯とされ、うやむやにされた。

当然に他の者も取り調べられるだろうが……後はヴェイス商国内の問題という立場を残る二国は取っている。

大事にするのはまずいというのが三国の共通認識だったからだろう。

戦争になれば、一領主、一評議員である彼等の立場は極めて悪くなるはずだからだ。

直接エール伯の所へ説明のために訪れた褐色の肌の若い評議員、エルドスは自国の船に戻る前に、何故か俺に握手を求めた。

完璧な作り笑顔だ……顔は笑っているのに眼はぎらついて見える。まるで野心の炎が燃え盛っているように。

関われば面倒な相手な気がする。

「ケイト殿は命の恩人です。ヴェイス商国に來られた時には是非恩を返したい」

「仕事ですから、お気にせずに」

「はは、そういうわけにはいきませんよ。美しい二人と共に私を訪ねてください」

それでは。と、身を翻して護衛達と共に去っていくエルドスの背中を眺めながら、俺は本当に気にせずに忘れてくれたら嬉しいのかな……と、考えていた。

エルドスと別れた後、荷物を簡単にまとめて船倉に放り込んで出航を待っていると、エール伯が自分の護衛を他の者に任せ、兄に挨拶をしてくるように命令した。

お互い仕事で来ているため、そのまま別れようと考えていたのだが、配慮してくれたらしい。目付のエール伯の随員付きだが。

帰り支度を進めているライル―ト伯の船の近くに立っていた兄は

俺に気が付くと、光が差すように嬉しそうな表情に変わり、走り寄ってくる。

人を殺し、命の危険を乗り越えたのに、全く暗さはない……相変わらずだ。

「別れを言いに来たよ。カイル兄さん」

「そうか、残念だな。だがよ……本当……本当っ、立派になりやがつてっ！」

兄は笑いながら俺の頭に片腕を回すと、もう片方の手で頭をぐりと擦った。

頭だけでなく、折れている肋骨に激痛が……っ！

「痛い痛いっ！」

「はははっ！ もう一人前だな。手助けする必要なんてありやしねえ」

「カイル兄さん……」

明るく……でも、どこか寂しそうに兄は笑う。

俺も少しだけ寂しさを感じていた。

次はいつ会えるかわからない。

今生の別れにならないとも限らない。

兄は俺以上に危険な道を歩いているだろうから。

「死んだら絶交だよ」

「……そうだったな。よく、覚えてるぜ。お前も元気だな」

俺は側にいるエールの役人に、もう構わないと告げる。

「カイルさんも元気で。心配なさそうだけど」

「くくっ！ よくわかってるじゃないか」

「ホルスにもよろしく」

「おう！ お前もクルスとシーリアによろしくな」

こうして俺は兄に別れを告げた。

次は敵に…… そうならないことを祈りながら。

第三十一話 戻った平穩

護衛を何とか終えた俺達は、約束より多めの報酬をエール伯から受け取り、正式に三国の関係が正常化するまでの数日を水の神の神殿で過ごすことになった。

結果的にエール伯を守りきった俺達が、水の神の神殿からの紹介で護衛に付いていたこともあり、エール伯が水の神殿に対して影響が出るほど悪印象を持つことはなかったようだ。

エール伯は俺達に好意的で世話になることも考えないではなかったが、あまり息が詰まりそうな貴族の館では生活したくなかったのと、何だかんだで熱心な勧誘を延々と断り続ける羽目になりそうだったため、意外と重かった怪我の治療を理由に辞退させてもらっている。

もう一つ理由があるが、そちらもエール伯は察してくれているようだった。

「調子はどう？」

「うっうっう、最悪ですよー！」

水色の髪の少女……のように見えるパジャマ姿の青年、ウルクの狭い部屋には子供達が持ってきたお見舞の品が所狭しと置かれてい

る。

長い髪を適当な三つ編みにされていたり、可愛らしい人形とか花とかリボンとかを多く飾られている辺り、子供達の嫌がらせなのでは……とも思わなくはないが。

彼は神殿に戻った後、当然ながらエール伯と水の神殿から尋問を受けた。

しかしながら、わかったことと言えば既に把握している情報だった上、犯行の前日からの記憶が全くなかったため、釈放されることになったのである。

水の神殿への伯爵側の配慮の意味もあるだろう。

彼の犯行それ自体がなかったことにされたのだから。

神殿としては大きな借りとなるに違いない。

俺を紹介したことによる貸しでは足りないのではないだろうか。

その辺りは彼等が考えることだ。

だが、その間、ウルクは独房で寝かされ、俺も治療にあたることが出来なかった。

昨日ようやくそんな状況から解放され、彼は柔らかいベッドで横になっている。

まあ、彼からすれば気を失って、気が付いたら重犯罪人になった挙句、全身バラバラになるくらいの怪我を負い、数日経った今も痛みに苦しむ羽目になったのだ。

最悪と言つ気持ちは理解できる。

「で、結局アリスに何をされたの？」

「う……いや、それがすね」

ウルクは言い淀むがこれはどうしても聞かねばならない。

『クラストデイル』と戦ったときは有効範囲が20mしかないと
言っていたし、事実それ以上離れた時には効果は失われていた。

だが、今回の件が始まる前に既に彼女はピアース王国を脱出して
おり、姿を晦ませているらしい。あの島にいるということもなかつ
た。

どれほどの距離があつても遠隔で人が操られるとか、幾らなんでも
やばすぎる。

ウルクは意を決したように顔を上げると、身体が痛いはずなのに
小さく身振り手振りを入れながら、重々しい面持ちで状況を語る。

「あのクラストデイルを倒した後、アリスさんに一人で会いに来
るように耳打ちされたんすよ。これは、愛の告白っ！ あの冷たい
態度も照れ隠しだったんだ！ と、思った僕が馬鹿だったんす……」

「馬鹿」

「馬鹿ね」

「生まれて初めて美人にもてたと思つたんすよ！ うう、夢見たつ
ていいじゃないすか！ ケイトさんならっ……わからなさそうっす
ね……はははは……はあ……」

一緒に見舞いに来ているクルスとシリアの辛辣な一言に、ウルクは反発し、俺の方に同意を求めようとして……がつくりと頂垂れる。

どんな顔をすればいいのか、俺も困惑してしまった。
とりあえず、聞かなかったことにして話を続ける。

「そこでアリスに何かされた？」

「指出せて言われて、左手出したら噛み付かれたっす。いや、口に含んだだけ……舐めるような舌使いが、えろくて最高……あ、いや」

左の人差し指が能力発動の中心になっていた理由はわかった。
だが、この釈然としない気持ちは何だろうか。

シリアも複雑そうに顔をしかめながら、ベッドに横たわる彼を見下ろしている。

「処刑されれば良かったのに。運がいいわね」

「ちょ！ シーリアさん！ こ、怖いこと言わないで下さいっすよ！ まじ怖かったんすから！」

俺の骨折とクルスの腕の状態を知ったときには彼女は犬歯を見せて怒り狂っていた。

嫌味は冗談だろうが……理由が理由だけに少しは本音も混ざって
そうだ。

「うー……あれはどんな男でもやられるっすよ……美少女は罪なん
すよ……」

あんまり懲りてはいなさそうな様子のウルクには、まだ聞くこと
がある。

「もう一つ質問していいかな？」

「あ、はい。なんすか？」

「カリフさんにウルクは遺跡の探索の話、してないよね？ 何故？」

呼び捨てにしまつてるが……まあ、もういいだろう。

これはずっと不思議に思っていたことだ。

こんな事件が起こっても、カリフは俺に対して『聖輝石』の話を
持ち出さなかった。流石に知っていれば俺に確認を取るだろう。

俺からの質問にウルクはきょとんとして、不思議そうに俺の顔を
見る。

「え？ やだなあ。そんなことしたらケイトさん、困るじゃないっ
すか」

「……………は？」

「ははは、話したら駄目なことくらい、わきまえてるっすよ！」

明るく笑いながら手を振っているウルクの言葉の意味が中々、頭に入ってこない。

ようするに彼には何の企みも無く、複雑な意図もなく、話したら俺がまずい立場に陥る……それだけの理由で、こんな明白に重大なことを上司に隠したということか。

頭が軋むように痛い。

俺が彼の背後に何か大きいものを感じ、悩み、考えさせられた……その苦痛に満ちた思考時間を返して欲しい……額を抑えながら本気でそう思った。

まあ、此方が勝手に深読みしただけなのだが。

「……どうかしたっすか？ え、何かおかしかったっすか？」
「いや、何でもないよ」

少々、疑い深くなりすぎているのかもしれない。

俺は苦笑いしながらウルクの邪気のない、人の良さそうな顔を見る。

彼は根が善人で、他人に対して悪意を持ってない人物なのかもしれない。

こんな目にあっても、内心どうあれアリスを悪く言っていない……余り気にしていないと言うべきか……とんでもないお人好しである。

記憶がなかったせいという可能性も捨てきれないが。

「答えてくれてありがとう。じゃあ治療を始めよう。クルスとシーリアは席を外して」

「悪いすね。しかし、ケイトさんは薬師でもあるなんて、何でもありすね」

「ケイトでいいよ。覚えていると便利そうだったからね」

俺はシーリアとクルスを部屋から追い出し、事前に調査しておいた筋肉痛に効く薬剤を入れた小さな壺の蓋を開いた。

鼻をくすぐる、独特の冷たさを感じる匂いがそこからは漏れ出ている。

その薬剤に別の薬草の粉末を加えて適度にかき混ぜると、一度手を止めて、身体が固まって自分では脱ぐことが出来ないウルクのパジャマを脱がせていく。

外見は女性に見えるため、初めてのときは複雑な気分で脱がしていたのだが、きちんと男であることは確認している。よかった。

彼が異種族であることは、背中のヒレではつきりと確認できた。彼等『湖の民』は船を曳いているレイクホエールの遠い親戚にあたるらしい。

それで、直接彼等に命令出来たのか……と、初めて知ったときに俺は思った。

聞こえないくらいに高い音域を出せるのはそれ故なのだと。

「この世界では神の祈りがあるから、薬師は少ないみたいだね」

「神官の自分が言うのもなんすけど、何でも神様に頼っちゃ駄目なんすけどね」

「そうなんだ」

薬剤を清潔な布に付けながら俺が生返事すると、彼は微かに頷く。

「出来ることは自分でやらないと駄目すよ。知恵を出し切って手を尽くして、それでも駄目だった時に初めてお願いするんす。じゃないと神様も大変す」

「何だか聖職者みたいだね」

「聖職者そのものつすよ。自分を何だと思ってんすか！」

怒ったウルクに悪い悪いと笑いながら俺は謝り、彼に布を当てようとして……何と無く目を瞑り、能力を使う。そして、溜息を吐いて耳を澄ませた。

「クルス。ちゃんと見張るわよ」

「なんで？」

「それはその……ほら、ケイトが変な趣味に走ったら困るでしょ。あいつ女っぽいし」

「変な趣味？」

「私、あの島で治療してると思ったの。あれはいけないうて。ケイトが危ないの」

「でも、それは覗き……」

「しょうがないのよ。ケイトのためよ！ 男に取られてもいいの？」
「それは駄目。絶対」

俺が黙り込むと、ウルクもヒソヒソと話す扉の外の声に気付いたのか心の底から嫌そうな顔をした。俺も多分、彼と同じような顔をしているだろう。

「こらっ シーリア！ 聞こえているぞ！」

大きく息を吸い込んで怒鳴ると、扉の外で大きな物音が二つ響き、慌てた様子で走り去っていった。全く、困ったものだ。

「そんなに心配ならシーリアさんやクルスさんが塗ってくればいいのに。素手で優しくくまなくぬちよぬちよ……いや、じよ、冗談すよ？ ケイト……さん……怖いすよ？」

「元気そうだし、遠慮はいらなさそうだね」

「ちよ、て、手加減してっ！ 痛い痛い！ ぎゃあああああ！」

実際のところ、彼の身体の治りは予想以上に早い。

鍛えているからか、異種族故の回復力なのか判別は付かないが。

しかし、ようやく平穩に戻ったというのに何だか疲れてしまった。疲労が溜まっているのだろうか。

こういう時に、無条件に信頼できた無骨で陽気な親友と一緒に来てくれてたらな……と思う。

あいつならこういう時に鋭く察して、気分転換をしてくれるに違いない。

これは甘えか……俺は一抹の苦々しさを感じながら首を横に振ると、痛みで叫び続けるウルクを無視して薬剤での処置を施し続けた。

第三十二話 港街の復活

貿易都市エールは蘇った。

いや、本来の姿を取り戻したと言つべきだろうか。

「煩い」

「何だかお祭りみたいね」

人混みが苦手なクルスが苦々しく顔をしかめ、シーリアはあたりで賑やかに行われている取引を好奇心に溢れた表情で眺めている。

間近に近付いた協定の再開に向けて、貿易を生業としている商人達が失われた利益を取り戻すために、躍起になっているのかもしれない。

「おい、小銀貨2枚と銅貨25枚は高すぎるだろ！」

「底値に近いよ！ 相場くらい知つとけよ！」

子供と言つてもいいくらいの少年が出している露店ですら、眼がぎらついた男達が集まり、必死の形相で値段の交渉を行っている。

この時まで彼等は必死に我慢し、儲けるための準備をしていたの

かもしれない。

商人の中には、初日に喧嘩を売られていたディラス帝国出身の錆色の髪をした青年の姿もあった。何だか楽しそうに客と話込んでいる。

「その少年！ あんたもうちの商品見ていつてくれよ！」

俺の視線に気付いたのか、青年は自分の露店の方に全力で手招きしてきた。

エールの住人との問題も外交の正常化と同時に解消されたようだ。

「何を売っているの？」

「色々あるが、一番はこれだ！ ディラス帝国で大流行りのアライドの香水さ。ピアースじゃ作れない代物だから使ってよし、売ってよし！ 質もいいんだぜ？」

「アライド？」

どうやら彼は俺達のことを覚えている訳ではないらしい。

青年は精悍な顔立ちに満面の笑顔を作り、不思議そうな表情をしているクルスに元気に商品の説明をしている。

アライドは南方でしか生育しない実で柑橘系の香りがするらしい。都会で育ったからか割とお洒落なシーリアとは違い、クルスがこいうい物に自分から興味を持つのは珍しく、何だか微笑ましい感じがする。

彼女は小瓶を手に取らせて貰い、香りを確認した後、いかにもしぶしぶと言った感じで元の場所へとゆっくりとした仕草で置き直す。

「それ、貰うよ」

「本当かつ！ いやーありがとう！ そうこなくちゃね」

商人が指定してきた金額を言い値で支払う。

恐らくは割高なのだろうが、護衛の報酬のお陰で金には全く困っていない。

クルスの曲がった武器の代わりや三人分の防具や旅道具も新調したので、仲間の共同資金からは出せないが、俺個人として出すなら問題無いだろう。

「……いいの？」

商人から渡された可愛い装飾がされた小瓶を、クルスは大事そうに両手で持ち、少し顔を赤らめて上目遣いで俺を見る。

「今回は随分助けられたしね。それにクルスには似合うんじゃない？」

「ありがとう」

「あー、いいなあ。ケイト、私も頑張ったのよ？」

シリアはわざとらしく残念そうに肩を竦めた。
本気ではないのだろう。顔が笑っている。

「あ、クルス。後で香水の使い方教えてあげる！ あんたもこういうの気にするんだなあ……ふふっ、いいことね」

左手で頭を掻いて苦笑しながら、楽しそうに尻尾を振ってクルスに絡んでいるシリアを眺めていると、ディラス帝国出身の青年は、商人らしい愛想笑いを浮かべながら肩を叩いた。

「いやーやるねえ。少年、この革袋はおまけにしとくよ」
「有難う。随分売れているみたいだけど、ディラスの人だと大変だったんじゃない？」

初めて訪れた時の暗さなどまるで感じない街の様子を見回しながら、俺は緊迫した状況に追い込まれていた青年に敢えてそのことを聞いてみた。

だが、俺の質問に彼はに……と口の端を少しだけ歪めて不敵に笑う。

「確かに危なかったがお陰でディラス人は殆ど逃げたからな。商売敵のいない今が商売の大チャンス！ てなあ。いやあ、誰か知らないけど、本当やってくれたよ！ 手作りの細工も準備出来たし」
「商売人だね。お兄さんは」

集団で殺されるかもしれない。そんな中でも逆に商売に活かすことを考える。

印象が戻るまでは大変だったろうが、彼は根っからの商人だったらしい。

「最高の褒め言葉だな。ふふん、俺はエーリディ湖で一番の商人に絶対なるから覇貢にしてくれよな」

「それなら次に利用するときは安くしてね」

手を腰に当てて自慢げに胸を張る錆色の髪的青年に俺は苦笑を返す。

「少年も頑張つて儲けろよ。あ、心配ないか、美人の嫁さんが二人もいるくらいだし」

「冒険者としての仲間だよ」

ピアース王国は一夫一妻だが、ディラス帝国は違う。

この世界にもいろんな国があり、それぞれの国に異なる風俗がある。

言葉は同じなのに不思議なことだ。

そういつことを調べるのも旅の目的。きっと楽しいだろう。

少しクルスとシーリアが不満げだが、此处では許して欲しい。

俺達は目立つし、知っている者の目もあるはずだから。

「そうか、じゃ、お前さん達の旅の幸運を商売の神に祈ってるぜ。あ、タダでな」

「それは得したかな。ありがとう」

客が次々と来ていたので、俺達は青年と笑いあって手を振り、別れを告げた。

商人の青年と別れた後、俺達は港を歩くことにした。

今日は特に目的があるわけではない。

水の神の神官、カリフに本物のエールを是非見て欲しいと言われ、散策をすることにしたのだ。それを俺達に伝えたカリフは誇らしげで、街を愛していることがよくわかった。

確かに価値はあった。街は活気に満ち、商人達は唾を飛ばしながら熱気に溢れる取引を行い、そんな彼等を客にするべく、芸人や美味しい食べ物売り出す店が路地を埋め尽くす勢いで開かれている。

俺達が島から戻るまでのエールの姿とそれはあまりに掛け離れているものだった。

城塞都市カイラルとはまた違う、生きた街の姿がそこにはあった。

「うーん、ちゃんと冒険者したって感じよね」

岸辺に立ったシーリアは湖から吹き込む暖かい風を浴びながら腕を空に向けて身体を伸ばし、清々しいという形容がぴったり似合う表情で此方に振り向いた。

昼過ぎの太陽の光が彼女の銀色の髪に反射し、彼女を更に明るく見せている。

「さて、どうかな」

この街に来てからの激動の日々に思いを馳せ、色々と考えた上で短くそう答える。

貿易都市は蘇った……その達成感はある。

巻き込まれたことが切っ掛けだが、確かに俺達も少しは今のエールの姿に戻す貢献が出来たことは間違いない。伝説に残る魔物を倒し、協定の会議を護りきった。

胸から沸き上がる感動はあったが、素直に喜んでいいものを俺は悩んでいた。

今回の件の解決は、その殆どはカリフや貴族達、そして、それに関わる多くの平和を望む人々の努力の結果なのだ。

だが、シーリアはそんな俺を見て笑う。

「こつという気分も私達の報酬なんだから、喜ばないと」
「そういうものかな」

目を細めて、今いる場所から少し離れた港を眺める。

水夫達が声を掛け合いながら、大型の船に荷物を積み込み、詰め込む荷物を用意する積載物の置き場には次々と倉庫から荷物が運ばれていた。

船主と交渉している商人や、見物人などもいて、随分以前よりも騒がしい。

清掃している船も多く、準備は着々と進んでいるようである。

色々であったが最後は積極的に自分から行動したのだ。

ならばシーリアの言うとおり、現状のエールになったことが嬉しいのなら、相応に喜んでいいのかもしれない。

「シーリアの言う通りかもしれないね」

「たまにはいいこと言う」

幾分すっきりした気分ではシーリアに同意し、クルスも小さく頷く。

命の危険は数多く、謀略に晒され、本当に大変な目にあつたが、終わってみれば良い経験だったと素直に思うことが出来た。

『聖輝石』を持つ以上今後も間違いなく厄介事に巻き込まれるのだろう。

アリスはまだ生きているし、『呪い付き』の頭であるジューダス・レイトは全く懲りずに面倒なことを考えて蠢動するに違いない。

兄やホルスと争うこともあるかもしれない。

だが、生きている限り困難から無縁には生きられないのだ。
それなら、シーリアの言うように困難も楽しかったと思えるように、頑張った方がいいのかもしれない。当然危険は排除しなくてはならないが……。

後悔しないように生きる……子供の頃に決めた方針だが、存外に難しい。

「ま、これから大変なことばかりだと思うけど、二人とも頼むよ」
「任せて。ケイトは私が護る」
「望むところよ！」

クルスが静かに微笑み、シーリアは明るく笑う。

二人が居てくれれば困難に合っても、楽しく前向きに乗り越えて行けそうだ。

俺も二人を守りたい。

もっと色んな強さを身に付けなければ……俺はそう考えながら、二人に力強く頷いた。

エピローグ 未知への出航

新しい三国協定が正式に開始された日、俺達は大型商船に臨時の護衛として乗り込み、エールの南東に位置するヴェイス商国の港街、クラウリディを目指していた。

エーリディ湖周辺の港街は大体、湖の名前の一部を使用している。国は違っても湖への愛着は強く、これは三国共通らしい。先日話をしたディラス帝国の青年も湖に対して誇りを抱いているようであった。

そのような愛着が街の名前にまで顕れているのかもしれない。

「エールが見えない」
「そうだね」

弓を立て掛け、矢筒を背中に担ぎ、エールにいる間に探し出した新しい剣を腰に佩いたクルスが感慨深そうに目を細め小さく呟く。

エールの街も出航してしまうと直ぐに見えなくなった。
あっさりと。

あれ程厄介事に襲われ、様々な出来事を重ねた街が、一時にも満たない時間で形も見えなくなっていく。

故郷やカイラルを離れる時と同種の寂しさが心を過ぎった。

もつと複雑な気分になるかとも思ったが、不思議と秋風のように涼やかだ。

同行しているクルスやシーリアはどう考えているのかわからない。少なくとも表情から暗いものは読み取ることが出来ない。

「ケイト。船が出航したら読めって言ったカリフの手紙は？」

船員から椅子代わりに小さめの空の樽を借り、クルスと並んで座りながら湖を眺めていると、船員を相手に知的好奇心を満たしていたはずのシーリアに声を掛けられた。

気温が高い場所に行くため新しい生地 of 薄い冒険用の服を着た彼女は、獣人である不利をもつとせず、持ち前の明るさで色んな人に話し掛けている。

一緒に船に乗りこんでいる船員や商人は彼女の勢いに負けて、嵐のような質問攻めに仕方なさそうに……だが、笑顔で答えていたようだ。

まあ、獣人と言っても美女……と言っても間違いではないと思うから、普通の男では、笑顔で近寄られれば邪険にすることなど不可能なのかもしれないが。

つい最近まで人間嫌いで人見知りだったことを考えると、とんでもない成長だと思う。

本来はこういう性格だったのだろうか。それとも冒険が彼女を変

えたのか。

「湖賊とか魔物が出るまで暇だし、今読もうか」

俺は樽に座りながら彼女の方に身体を向けて頷く。

水の神の神官、カリフが俺達に好意的だったのは、かつて仲間であつたラキシスさんから前もって手紙で知らせを受けていたから……らしい。

人の繋がりというものは大事なものと、本当に痛感する。

熊のように大柄な彼は笑いながら過去の冒険話などを教えてくれたが、どうもマリア母さんはともかく、冷静なラキシスさんに似合わない話が多かった。

大袈裟に話をしているのかもしれないが。

もちろん、彼から聞いたのはそういう話ばかりではない。

俺達は別れる前にラキシスさん宛のお土産と手紙を託し、『呪い付き』の長、ジューダス・レイトに関することと、聖輝石に関する伝承が無いかも尋ねた。

ジューダス・レイトは表でも有名人らしいが、彼が『呪い付き』であるということはカリフも知らなかったようだった。

「ジューダスという男は十数年前に現れ、新しい手法を次々用いて押し上がったディラス帝国の大商人だ。裏の世界にも通じている……」

…というのは珍しくもないが、『呪い付き』を纏めているというのは……調べる価値はあるな」

自由な立場になれたのは丁度いい、そうカリフは穏やかな表情で頷いていた。

ピアース王国もこのことを知らないのであれば、情報を得ることで『リブレイス』に対する今後の対応も立てやすくなるだろう。

聖輝石に関しては彼も何も知らなかったが、俺が国家レベルの危険物であることを伝えると、水の神殿の伝承を調べ、何かがわかったら俺に知らせると約束してくれた。

彼には随分と世話になってしまったものだと思う。

いや、そこはお互い様というべきか。

湖の風でばらついていている髪の毛を左手で直しながら、俺は苦笑して樽から立ち上がり、近くに置いてある鞆から手紙を取り出す。

クルスも興味があるのか、樽をずるずると此方に近付け、一緒に手紙を囲んだ。

「ん……、普通のお礼？」

「土産を準備したから受け取るように……？」

「役に立たないかもしれないが、有効利用するように……？」

三人で顔を寄せ合って手紙を読み、その文面の意味がさっぱりわからず困惑する。

内容そのものはエールの危機を救ってくれたこと、そして、世話になったことに対する普通のお礼だった。

ただ、最後に土産を用意したから受け取るようにと書かれていたのである。

しかし、俺達はカリフからそのような物は受け取っていない。

「どういうことだろうね」

「いやー、本当にどういうことなんすかね？」

「おわあっ！」

急に背後から、耳元で声を掛けられ、思わず声を上げて俺は後ろを振り向いた。

クルスとシーリアも身体をビクツと震わせて、声の主を見る。

「何故いる」

「うう、クルスさん睨むと怖いっすよ。仕方がないんすよ」

一瞬で立ち直ったクルスから睨みつけられ、声の主……空のように澄んだ青い髪の旅装束の青年、ウルクは苦笑いを浮かべつつ、怯えたように後ろに下がった。

身体の方はすっかり治ったらしい。大した回復速度だ。

彼は大きめの袋に加え、俺達を苦しめた獲物の短槍も準備している。

「なんでか自分達が遺跡に潜ったのバレちゃったんすよ。お陰で降格された上、ほとぼりが冷めるまで修行の旅に出て来いってカリフ様が……うつ……」

「……それはご愁傷さま……いや、ほんとごめん」

ウルクは力尽きるようにがっくりと膝を付き、呻く。

もしかなくても俺が聖輝石の話をしたからだろう。カリフは鋭い。可能性に思いが至ればウルクに対してカマを掛けるに違いない。

結果は推して知るべしである。

ジューダス・レイトが国を揺さぶってでも手に入れたがった危険物だ。情報を伝えない訳にはいかなかったが、ウルクへの配慮まで頭が回っていなかった。

どう考えても俺の凡ミスである。

カリフは遺跡調査の時にばれた場合、ウルクが捕まらないよう配慮したのだろう。

この件に関して、ウルクは俺のために黙っていてくれたのだ。

申し訳なさで罪悪感が沸いた。

「いや、でも、いいんすよ……カリフ様はエルーシド様から神託を受けたそうなんす」

「はあ？」

困惑する俺を他所に、ウルクはしっかりと立ち上がると元気に拳

を振り上げる。

表情はやる気と生命力に満ちており、先程までの落ち込みの色はない。

「『聖輝石』を護る勇者を助けよ！ エルーシド様が仰るなら、それは運命……自分に与えられた聖なる大仕事なんすよ！ やるっきゃないっす！ 伝説を作るんす！」

声も出ない。クルスも小さく口を開けてばかんと彼を見つめており、シーリアは何故か嬉しそうな笑顔で納得するようにうんうんと頷いていた。

「まさか土産って……この商船の護衛をしているって何故わかったの？」

「え、カリフ様知ってたっすよ？」

「やっぱり」

頭痛がして額を押さえる。こちらの行動は筒抜けらしい。

「ウルクは……俺達に付いてくる気？」

「え、当然じゃないっすか。従者なんすから」

「え……」

嫌そうにシーリアとクルスが顔をしかめる。まあ、当然だろう。

「実力は確かだが、危なっかしすぎる……と、俺は考えていたのだが、

「別に構わないけど、ケイトを襲ったら承知しないわよ」

「それ絶対心配するところかしいっすよ！」

何時になく真剣な表情のシーリアにウルクは詰め寄って抗議の声を上げていた。

俺とは理由が違っただけらしい。頭痛が更に酷くなった気がする。

「ケイトが決めてくれたらいい。怪しければ今度こそ殺ればいいし」
「だからクルスさん、怖いっすよ！」

不機嫌そうにウルクの顔を見ず、クルスは言い捨てた。
強く反対する気はないらしい。彼女は嫌なら嫌と言っただろっし。

確かに彼は根本的な所で悪人ではないが……。

「ウルク、俺は『呪い付き』だ。それでもいいのか？」
「え、それがどうかしたんすか？」

きょとんとしてウルクは俺を見る。
彼は嘘を付けない。本気で言ってるのだ。

偏見が物凄いと聞いていたが、そうでもないのか……それともウルクが楽天的すぎるのかどちらだろうか。俺は判別できず、溜息を吐いた。

問題はそれだけではない。

「命に関わる事件に巻き込まれるかもしれない」

「それこそ今更っすよ。既に死に掛けたすからね」

ははは、と軽く彼は笑いそれに……と続ける。

「そついうのから護るのが従者の仕事じゃないっすか」

神から命を受けるというのは、彼等神官にとっては重いことなのかもしれない。

ウルクの表情は誇らしげで、迷いは一片もなさそうだ。

「旅は甘くはないよ。野宿もしないといけないし、魔物とも戦う」
「大丈夫っすよ。昔、冒険したことあるっすから。大人の自分にどんと任せるっすよ」

彼は得意げに胸を叩く……大人？

「そついえばウルク……何歳？」

「えっと、人間の年齢に直すと……41歳っすね」

41歳……41歳……。

「……………そっか……41歳か……………」

驚きを通り越して悟りを開いたような気分で俺は晴天の空を見た。
クルスとシーリアもウルクの二十歳前後にしか見えない姿を、居
た堪れないような表情で見つめながら黙り込んでいる。

彼は恋人が出来たことがないとか言っただけか？

きっと41歳でも焦る必要のないくらいに長寿なんだろう。多分、
きっと……。

「な、何すか。その反応……」

「いや、何でも。わかったよ。一緒に行こう」

「おお！ やった。大活躍するっすよ！」

明るく笑うウルクに、俺は但し……と、付け加える。

「付いて行けないと思ったら無理せず諦めて帰る事」

「神の仕事っすから、絶対目的果たすまで戻らないっすよ！」

「後、クルスとシーリアが駄目と判断したら……問答無用だから」

「う、努力するっす」

神妙な表情でこくこくと彼は頷き、彼は改めてと頭を下げた。

「エルーシドの神官、ウルク・エルード。これからよろしくつす」

こうして旅に新しい仲間を加え、俺達は次の目的地へと向かうことになった。

ウルクとは後でもう一度、きちんと話し合わなければならない。

だが、今は一度それを置き、湖の果てに視線を向けた。

問題は山積みで、危険も多い。

恐らく、面倒事にも巻き込まれるのだろう。

だが、それ以上に不思議な世界を見ることが出来る嬉しさ、楽しみが強い。

俺は次の街がどんなものなのかを聞いた話から想像しながら、胸を高鳴らせていた。

エピソード 彼女達の復讐

古めかしい酒場に特有の染み付くようなアルコールの匂いがしない、比較的新しい馴染みの酒場には、珍しい客が訪れていた。

僕の前に座って美味しそうに酒を飲んでいるカイルも、意外そうな表情で彼女を見詰めている。

他の客も何人かは驚いているようだ。

僕自身も此処に彼女が姿を表すとは思っていなかった。

カイルは直ぐに友好的そうな人懐っこい笑顔を浮かべ、彼女に手招きする。

「おー！ アリスちゃん。こっちこっち！ おい、ホルス。椅子一脚持って来いよ」

「はいはい」

僕は苦笑しながら、椅子を僕とカイルの間に椅子を用意する。

どうせ用事は僕達にあるんだろうから、彼の判断は間違いではない。

彼女……煌めくような金色の髪と氷のような美貌、それを台無しにする死んだ魚のような暗い目を持つ少女。

『呪い付き』のアリスは一人で僕達、リブレイスの中でも直接『

姫様』に仕える派閥の拠点である酒場に足を運んでいた。

「珍しいね。君がこちらに来るなんて」

「同じ組織なのだから、構わないでしょう」

「確かに同じ組織だけどね……」

僕はアリスに苦笑を向ける。彼女は全く動じている様子はない。派閥と言ってもジューダス・レイトの力は圧倒的だ。

他の全ての者を合わせても果たして勝てるのかどうか……。

むしろ、彼に『リブレイス』は必要なのか実際のところ僕には疑問だ。

圧倒的な経済力、人脈、呪い付きの不思議な力……。

だが、事実として奴は『姫様』に忠誠を誓い、組織の発展に力を尽くしている。

従順に。誠実に。それこそ手段を選ばずに。

まるで悪魔のように。

他の幹部達を相手にするときは小馬鹿にするように笑いながら、世間ずれしている『姫様』にだけは逆らわず、絶対の忠誠を誓っているのだ。僕には奴がさっぱり理解できない。

「僕達は君の上司の邪魔をしたから、殺されるかもと思っているのに」

「欠片も思っていない事を言うものじゃないわ」

わざとらしくおどけてみたが、アリスは興味なさそうに断定する。そう……彼は、自分の邪魔をされても、楽し気に薄く笑うだけなのだ。

おそらくは今回も。

僕は彼が何を狙っているのかは大体の検討が付いている。その結果、組織が巨大になることもわかっていた。

だが、邪魔をした。

『湖の民』の願いを利用し、『姫様』から命令を引き出して。

「まあまあ、細かいことはいいじゃないか。乾杯しようぜ」

「『クラストデイル』退治お疲れ様ってところかな」

「いやいや、ホルスとアリスちゃんの完全敗北、残念でしたってところじゃね？」

木製の大きなジョッキで既に二杯目に入っているカイルが大笑いし、アリスは彼の意外な発言に少しだけ身体を震わせて反応した。

「僕は負けてないよ。目的は達成したし」

「そうか？ まあ、流石は俺の弟だったな」

愉快そうに笑う兄馬鹿の方を向きながら僕は息を吐き、小さく首を横に振る。

カイルは単純だけど意外と鋭い。あの弟にして、この兄ありか。

性格は全然違うけど。

「何故私が負けたと？」

「俺の弟は真面目だからな。あいつがいるところは、一番危険な場所のはず」

「会議の情勢を知る者の中で一番邪魔しそうなのは君だったしね」

だが、彼女自身はあの島に現れなかった。

わかったのは、どんな手段を用いたのかはわからないが……湖の民、ウルクを利用したことだけだ。だが、カイルはそれを彼女の仕業だと断定している。

「その後の毒殺は完全に予想外だったがな。助けられちゃった」

「う……まあ、そこはね」

意地の悪い笑みを浮かべ、カイルは僕の方を見る。

ケイトは僕達が旅立った後も真面目に薬師から指導を受け続けたのだろう。

あの親友の恐ろしいところは、膨大な知識や知性ではない。

地道に一步步でも止まることなく確実に進んでいく、あの性格だと思う。

今回の毒を見抜いたのもそうした積み重ねの結果なのかもしれない。

「まあ、ジューダスはよくぞ『姫様』の命令をこなした。と、喜んでいたわ」

「お褒めに預かり光栄です。と伝えておいて」

僕が『リブレイス』の強化を防いだ理由がこれだ。

ジューダスにとって、僕達はまだ敵にすらなっていない。

目に止まっているのかすら怪しい。

彼の計画が今始まれば、僕達はただの有象無象で終わってしまう。それでは、僕とカイルの目的は達せられない。

僕達二人の立場が一定の所に這い上がるまで、彼の計画が実行されては困るのだ。

ジューダスが僕達を利用する気になるまでは。

「それでアリス。それを伝えに来た訳ではないんだろ？」
「……そうね」

アリスは頷いて、光のない目を僕へと向ける。

「私に協力して欲しい」
「内容によるね」

私に……か。これも珍しいことだ。

『呪い付き』が、ジューダスを通さずに自分達に助力を求めると
いうのは珍しい。

彼等は僕達を何処か下に見ているところがあるからだ。

「ケイト・アルティアの監視に私が選ばれるよう、『姫様』に口添
えして欲しい」

「それはまた、不思議な頼みだね」

「おいおいアリスちゃん。まだ弟の命を狙うなら夜道が危なくなる
ぜ？」

冗談めかしているが、カイルは本気で殺すつもりだろう。

アリスが弟と同年代なせいで妙な甘さを見せているが、それが無
ければ彼女の命は恐らく既に無い。カイルは敵に対しては、まるで
容赦がないのだ。意外な程に。

だが、アリスは少しも動ぜず、カイルに対して薄らと笑みを浮か
べる。

「彼の命を狙う気はないわ。むしろ、私以外が選ばれる方が危険」

「……どういうことだ？」

「貴方の『勘』は正しかったということよ」

遺跡の中の石は危険な代物だったらしい。

僕は別にあいつに渡して、貸しを作るのもいいかと思っていたのだが……。

もし、奴が本気で奪う気であれば、確かにケイトがまずい。

「あの石は『聖輝石』。奴はそれを集めている。碌なことは考えていないでしょう」

「石集めが趣味……なんてことはないだろうな。いいのか？ 俺達に情報を流して」

「いいのよ」

表情に出さないように注意しながら、僕は内心感嘆していた。

奴の近くにいればその恐ろしさは容易に理解できるはずなのに、彼女はそれを全く恐れていない。

勇気があるのか、恐れない何か理由があるのか……それとも狂っているのか。

「協力の見返りは？」

「私が貴方達に協力しましょう」

思いがけない提案だった。

彼女を味方に付けるメリットは確かに大きい。

『呪い付き』であれば、ケイトのように妙な知識を数多く持っている可能性も高いし、ジューダスに協力している者の情報も集めやすい。

彼女の裏切りというリスクはあるが……利用価値はある。

「だが、わからんな。石が欲しいという訳でもないんだろう」
「一目惚れしたの」

真顔でぼそつとそんなことをアリスが呟き、カイルが固まって黙り込む。

僕自身も何と返せばいいのかわからず、思考が止まった。

「……冗談よ」
「脅かせるなよ。信じそうになったじゃねえか」

苦笑しながらカイルは酒をあおる。

「私には私の目的がある。彼にはそのために生きていてもらう」
「弟に危害を加えるつもりはない……と？」
「ええ。ケイトにはね」

アリスは用意してもらった果実水を飲みながら、落ち着いた口調

でカイルに答える。

「僕は構わないと思うよ。困った時はお互い様だしね」
「物わかりがいいわね」

理解できないことは多いけれど、彼女を最大限に利用して、リスクより大きな物を得ればいい。彼女程度を扱えなくてどうしてジューダスに勝てるのか。

例え彼女がケイトを狙おうとも構わない。

ケイトの能力なら……僕の想像が正しければ、彼女はとうせ勝てないのだから。

「カイル。彼女の護衛を此方に見せさせてもらえば安心だよ」
「そうか……」

だが、カイルは余り納得していないようだ。
ケイトと同じ色の瞳に静かな怒りを浮かべ、彼女に視線を向け続けている。

「嫌な予感しかしねえんだよ。何を企んでいる？」
「何も」

静かに一言だけアリスは呟く。

「貴方の選ぶ護衛に裏切れば殺すよう、命じて置けばいいでしょう」
「……ホルス」

「わかってるよ。一人は考えてある。彼は『姫様』の命令を言葉通り受けてくれるし、絶対にケイトを襲わない。それどころか喜んで護ってくれるはずさ」

カイルは少しだけ悩んだようだが頷いた。
アリスも小さく頷き、席を立つ。用件はそれだけだったのだろう。

「帰るわ。私の力が必要ななら連絡すればいい」
「わかった。これからは仲間だね」

皮肉を込めて、僕は笑顔で彼女に手を差し出した。
当然のように彼女はそれを無視し……入口の前で足を止める。

「忘れていたわ。エールで面白い噂を聞いたの」
「何かな？」

此方を振り向いた彼女は小馬鹿にするような笑みを浮かべ、僕の方を見て嗤う。

「売名は悪いとは言わないけれど、内容は選ぶべきね」
「どういうことかな？」

確かにカイルの名を上げるために、僕は人を使っている。
あざといが名声を効率的に作るために。

「ホルス……貴方が男色だという噂が流れていたわ。協定が再開すれば、直ぐに三国の港街、全てに同じ内容が流れるでしょうね」
「……は？」

それだけを伝えると彼女は酒場からあっさりと出て行った。
呆氣にとられる僕達を残して。

「ぷっ……くくく……っ！」

どういふことなのかを察したらしいカイルが肩を震わせる。
冷静に考える……これが意図的に……悪意を持って流されたものだとするならば。

「こりゃ、クルスちゃんの仕返しだな。あの娘は昔からきついからなあ」

「僕は本当に苦手だよ。クルスが一番……全く読めない」

苦笑いするしかなかった。

ケイトにはこんな質の悪い嫌がらせは思いつかないはずだ。

恐らくクルスとあの獣人……シériaが考えたに違いない。

何という嫌がらせだろうか。

カイルは女好きで通っているから影響は少なく、僕だけが被害を受けることになる噂だ。

「本当にケイトは楽に勝たせてくれないね。というか、三対一はズルいよ」

「ま、頑張れホルス。俺は頼りにしてるぜ。あ、でもしばらく離れててくれよ」

「カイル……」

げらげら笑い続けているカイルを一度睨みつけると、諦観の念を込めた溜息を吐き、嫌なことを忘れるために、目の前の酒を飲むことにした。

自棄酒のツケは翌日、きちっと支払うことになったが。

閑話 『水龍亭』とクラストディール（第三十一話付近）

本当に清々しい程のいい天気だ。

早朝の仕入れを終え、宿の外の掃除をしていると久しぶりにそう感じる事が出来た。三国協定の再開が発表された御陰かもしれない。

わしの宿、『水龍亭』はあのクラストディールを退治した冒険者が泊まった宿ということで、売上が昔以上に上がるようになっていたが、客の雰囲気はどこか暗かった。

三国協定の再開で宿泊客の雰囲気が明るくなるのは全くもっていいことだ。

白くなりつつある自慢の髭を触りながら、わしは頷いた。

「サルードさん、食材の片付け終わりましたっ！」

「ああ。後で確認するから次は食堂の掃除だ」

「はいっ！」

新しい従業員、『エルーシドの子供』の赤毛の少女、アルが笑顔で元気に返事をする。

出自を気にしなければ、彼女達は学問が施されており、優秀だ。

計算も出来るし、文字も書ける。

それに彼女は動きが鳥のように軽やかで太陽のように明るく、客

から可愛がられていた。

アルはわしが忙しすぎて手が回らなくなっていた時、店の常連の神官、ウルクに働き手として紹介されたのだ。奴自身は何かで重症を負ったそうだが無事だろうか。

わしには子供がいなし、廃業を考えていたが歳を取ると面白いことも起こるものだ。

『水龍』……即ちクラストデイルを倒す者が客から出るとは。

店を続けるという水の神のお告げかもしれん。

料理を楽しみにしている者も多い。神の子が来たのも縁かもしれない。

全てを教えこんで、引き継いで貰ってからでも隠居は遅くないだろう。

そうして、掃除を続けていると見知った少女が二人、宿の前を通りがかった。

「お、嬢ちゃん達じゃないか。今日の昼はうちで食っていくかい？」

長い黒髪のすらっとした少女と、銀色の髪 of 獣人……クラストデイルを倒した冒険者達だ。彼女達は大抵三人で行動していたが、今日はリーダーらしい少年が見当たらない。

声を掛けると、黒髪の方が猫を思わせるような警戒した表情でわしをしばらく見つめ、少し時間を空けてから、こくりと小さく頷く。

「今日はケイト君はいないんだな」

「ケイトはウルクの治療。薬師だから」

「こりゃ驚いたな。薬師！あの兄さんは若いのに本当に凄いな」

あの少年は腕がいい戦士だと思っていたが、知識の方も豊富らしい。礼儀もしっかりしているし、貴族の出自なのかもしれない。いや、それにしても偉ぶらなさ過ぎる。

本当に不思議な少年だ。

「ん、ケイトは凄い」

わしが本気で驚いていると、目の前の表情の少ない少女は、自分が褒められたように少しだけ照れくさそうに頬を染めて、視線を外していた。

そんな少女を見ながら、ふと以前、早朝にその少年と話した時の事を思い出す。

「そう言えば、わしは前にケイト君にクラストデイルの話聞いて絵を描いてもらったんだが、嬢ちゃん達から見て、あの魔物はどうだったんだい？」

「悪趣味な化物」

黒髪の少女が嫌そうな顔で短く即答し、銀髪の獣人は難しい顔で腕を組んで唸りながら悩み込んでから口を開いた。

「うねうねぐちょぐちょガチガチ？」

わしにはさっぱりわからんが、黒髪の少女は獣人の言葉に同意するように頷く。

中で掃除をしているアルなら理解出来るのだろうか。

「ふむ……しかし、ケイト君の話と一致せんあ」

「ケイトは何て言ってたの？」

「確か。巨大で格好いい魔物だったと。二度と会いたくはないとは言ってたが」

不思議そうに聞いてきた銀髪の少女に、わしは先日の出来事を思い出しながら正確に答えた。それを聞いた二人は理解できないといった複雑な表情で顔を見合わせる。

そんな二人を見て、わしは名案を思い付いた。

「そうじゃ！二人にも絵を描いて貰えんかね。昼まで時間はまだまだある。嬢ちゃん達に時間があるならだが……食費はそれでタダにしようじゃないか。最高のを作らせて貰うよ」

手を一つ叩き、笑いながらわしがそう提案すると、二人は頷く。
やってくれるらしい。これで、わしの店の目玉が増える。食費な
どは安いものだ。

「おおっ！ やってくれるか。じゃあ、店の中で描いてくれ。画材
は用意する」

「ケイトは絵は下手。私の方が上手い」

「何だか面白そうね」

「さあさあ、中にどうぞ。飲み物も出そう」

すっかりやる気の二人の背中を押すように店の中に案内し、わし
は画材を用意するために自室へと戻った。年甲斐無く、胸を高鳴ら
せながら。

自室に戻るとわしは、使い込まれた自信の画材の準備をテキパキ
と進めていく。

若い頃には画家を目指したこともあるわしは、趣味で絵を書き続
けており、紙と絵の具は切らせたことがない。幸いピアース王国は
製紙技術が他国より多少進んでいるらしく、比較的安価に手に入
るのは有り難い。

画材を両手に持って出来上がる絵を楽しみにしながら食堂のテー
ブルへと戻ると、二人の少女は用意したケイト君の描いた絵を険し
い顔で見つめていた。

その鬼気迫る様子に軽い不安を覚え、眉をひそめて思わず問い掛
ける。

「む、どうかしたかな？」

「ん……変」

「下手じゃないんだけどなあ。ケイトはもしかして眼が悪いのかしら」

どうもケイト君とは話だけではなく、絵の方でも彼女達は意見が違うらしい。

「飲み物をお持ちしました」

「ああ、アル。彼女達に。料金はもらわなくて構わない」

アルは頷くと二人に果実水を配り、お盆を両手で胸に抱え、ケイト君の絵を見ながら楽しそうに微笑む。

「ラストデール、格好いいですよっ！　兄さんからお話、沢山聞きました」

「そうか。ウルクも戦ったんだっか」

「はいっ！」

短めの赤毛を揺らしながらアルは誇らしげに元気に頷く。

「ウルクの妹……髪の色が違っわね。私達がお世話になってるとこ

ろの人かな」

「私達もラストデイルと戦った」

「ええ！ そうなんですかつ！ 同じくらいの年に見えるのに。それで、兄さんは実際にちゃんと戦ってました……よね？」

感嘆の声を漏らし、縮こまってお盆で口元を隠し、聞きにくそうにアルは二人に質問した。

ウルクはお調子者で口数が多いから、信じていても何処まで事実なのかわからないのだろう。楽しませるという意味ではあいつの話はいいのだろうが。

「ウルクがいなければ無理だった」

「まあ、そうよね。船を手足のように動かしてたし」

「ですよね！ よかったあ。さすが、兄さん……」

嘘を吐いているようには見えない。

ただ、黒髪の方は少し嫌そうに見えるし、銀髪の方は仕方なさげに見えるが。

アルはそんな彼女達の答えに嬉しそうに、安心したように息を吐く。

そんな彼女に銀髪の方が、からかう様な笑みを向けた。

「あんた、もしかしてウルクが好きなの？」

「えっ！ そ、そ、そんなこと！ 兄ですしっ！ 頼りないし情けないから心配で！」

顔を真っ赤に染めているアルの肩を叩いて、仕事に戻るよう指示し、やれやれとわしは頭を掻く。死んだ女房もこういった話は好物だったな、と懐かしく思いながら苦笑して。

「画材は好きな物を使ってくれ」

「わかった」

「任せて。こういうの一度やってみたかったのよね」

二人は頷いてそれぞれ木炭を手取る。

銀髪の方は完全な素人だが、黒髪の方はいい手付きをしていた。期待は出来そうだ。

わしは出来上がりを楽しみにしながら、彼女達に最高の食事を振舞う為に厨房へと戻ることにした。

昼食前には彼女達の絵も出来上がり、わしはそれを受け取って、代わりにご馳走を振舞うと、彼女達は満足そうな表情で店を後にした。

性格は全然違うにも関わらず、二人の仲は良さそうで、どこなくその背中は楽しげだった気がする。

そして、目が回るほどに忙しい一日の仕事を終えると、わしは自室で三枚の絵を机に置き、細かい物を見る為の眼鏡を掛け、腕を組みながら頭を悩ましていた。

「これはどういうことだ」

少女達が考え込んでいたのも無理はない。

ウルクもケイト君の描いた水龍の絵を見て、クラストディールはこれだと言っていた。

だが彼女達の絵は全く異質な何かだ。

無数の蛸のような足と亀のような甲羅を持ち、歪んだ大きな顔を水面から出して湖面で暴れまわっている。凶悪で悪夢を具現化したような不気味な絵が描かれていた。

黒髪の方の絵は本人が上手いと言うのが頷ける程に正確で、湖面や水飛沫の精密さ、浮かび上がるような見事な彩色を見る限り、偽りを描いているとは思えない。

銀髪の絵ははっきり言えば子供の描く絵くらいの実力だが、黒髪の絵の魔物を描いているのだということはわかる絵だった。

彼女達が正しいということは、あの誠実そうな少年が嘘を言っている？

「いや……」

長い付き合いの人が良くてお調子者の神官を思い浮かべる。彼もケイト君の絵が正しいと言っていた。

それは同じ考えに基づくものなのかもしれない。

（クラストデイル、格好いいですよっ！）

うちに住み込みで働いている赤毛の少女の言葉。

「そうか。そういうことか」

不気味な魔物を精密に描いた絵を両手に持ち、思わず小さく笑って呟く。

夢に出そうな邪悪。恐らくはこれが『真実』なのだろう。

わしは大きな紙に『クラストデイル』と大きく描き、その紙で彼女達の描いた二枚の絵を大事に包み、絵を収納している箱の一番奥へと仕舞う。

この魔物……邪悪な怪物は確かに『真実』。

だが、果たして『真実』が明らかになったとして誰が得をするのだろうか。

子供達やクラストデイルを畏敬している船乗り……それらにとって楽しい話は邪悪で醜悪な魔物退治ではなく、幻想的だが恐ろしい魔物を相手に勇気を持って立ち向かう話だろう。

絵として飾るにも、ケイト君の絵の方が客も喜ぶに違いない。

あの少年はそこまで考えてくれていたのだ。

「年齢通りとは思えないな。年寄りに気を使いすぎだ」

苦笑いしながら眼鏡を外して一枚だけ残されたケイト君の絵を額へと入れ、蝋燭を持って明かりを消した食堂まで歩くと、その壁に彼の描いた水龍の絵を掛ける。

「よし……しかし、ウルクもアレと戦って笑いながら話が出来るとは……図太いな」

自慢げで楽しそうにアルに話していた青年の姿を思い出しながらわしは食堂を後にし、今日のところは寝ることにした。『真実』のクラストデールが夢に出ないことを祈りながら。

閑話 『水龍亭』と困った常連（第十五話付近、エピソード前）

忙しい昼食時が終わり、客も殆どが帰ってしまったが、店には一人だけ飲み物にちまちまと口に付け、書類を読みながら難しい表情をしている客が残っている。

わしの店の常連、女性と見間違う程の整った容姿と鮮やかな蒼色の髪を持つ『湖の民』の神官、ウルクだ。二十代前半にしか見えないうが、割と歳を食っているらしい。

中身は若いままなようだが。

「おい、ウルク。飲み物一杯で居座るんじゃない。仕事しろ」

「親父さんだつて暇そうじゃないっすか」

「わしは準備を終わらせたんだ」

節々が痛む身体を音を鳴らしてほぐしながら、ウルクの対面に座る。

本当にウルクが仕事をしていないと思っているわけではない。

十年以上の付き合いだ。恐らく面倒な案件を抱えているのだろう。次に忙しくなるまで時間はある。暇潰しに話を聞こうと考えただ。

「はは、なんすかさっきの音。親父さんも歳すね」

「歳は余計だ。馬鹿たれが。お前さん達の活躍のお陰で最近目は回るほど忙しいんだ。で、ウルクよ。何を悩んでんだ？ 今回は」

からかうようなウルクにそう聞くと、奴は書類をテーブルに置き、やれやれと頭を掻いて苦笑いする。

「うちの子の仕事探しつすよ」

「ああ『エルーシドの子供』な。ご苦労なことだ」

エルーシドの子供。

この街では誰も孤児とは呼ばない。

わしが子供の頃はこの街でも孤児と呼んでいた。孤児は徒党を組み、日々生き延びるために盗みに明け暮れ、街の住人からは忌み嫌われていたものだ。

「いやあ、ジュージ老の考えは神の意思に沿ってるすから、苦じゃないすよ」

昔からエルーシドの神殿では孤児をある程度受け入れていたが、死なない程度……と言ったところだったろう。それを変えたのは孤児出身の一人の男だったらしい。

孤児なのに不思議と学があったその男は、同じ孤児達に教育を施

した上で、神殿に対してそのことの大切さ、必要性を粘り強く情熱を持って交渉し、現在のように全面的に孤児を受け入れ、学問をしつかりと学ばせ、職業に付くための訓練を施していく制度を完成させたい。

長い年月を経て、孤児による犯罪は殆ど無くなった。

また、彼の施した教育のお陰で、出身者達は様々な場所で働き、そんな子供達の寄付で何とか施設の方もやりくり出来る程度にはなっているらしい。

エルーシドの評判も上がり、男が亡くなった後も神殿により運営されている。

但しこれが上手くいったのはピアース王国とディラス帝国だけでヴェイス商国では完全に失敗したらしい。詳しくはわからないが国柄だろうか。

「なら、何をそんな悩んでいるんだ？」

「来年、規程の年齢に行く子がいるんすけど、中々仕事がね」

なるほど、とわしは頷く。だが、腑に落ちないこともある。

読み書き、そして算術も出来るエルーシドの子供は働き手として様々な場所で重宝されているはず。それなら……。

「性格に問題でもあるのか？」

「明るいし真面目だし、いい子ですよ。ただ、女の子なんすよ」

「なるほどな」

体力のある男と違い、女の働く場所は少ない。

商人の手伝いなどはあるにはあるだろうが、色々と難しそうだ。

「異種族ならリブレイスに頼れば一発なんで楽なんすけどね。こないだも一人、いい働き場所を紹介してもらったし」

「皮肉だな。まあ、あっちは横の繋がりを大事にしているそうだからな」

「全くすね。さらに厄介なのが、出るとこ出て、しかも可愛いことなんすよね」

本当に心底困ったと言うようにウルクは首を横に振る。

「それは問題だな」

「信用できるところに紹介しないとまずいことになるんすよ」

「ちと過保護すぎやしないか？ いい歳頃だし、自分で何とかするだろ」

「娘みたいなんすから。絶対幸せになつて欲しいんすよ！」

拳を強く握り締めてテーブルを叩き、感情的にウルクは叫ぶ。

こんなので身が持つのかと初めは不安だったか、十年以上こいつはこの調子である。

いい奴なのだが暑苦しいことこの上ない。

「うーん、信用できて人手が足りなさそうで、必要な……あ……」
「どうした？」

「いい職場、一つ思い当たったんすよ」

腕を組み、目を瞑って苦悩の表情を浮かべていたウルクが、ぽんと手を叩き、明るい笑顔を浮かべてわしを見た。何か思い付いたようだ。

「どこだ？」

「『水龍亭』すよ。最近忙しいそうじゃないすか」

「はあ……わしは一人でも十分やって行けるぞ」

嫁が神に召されてから、わしはずっと一人で店を切り盛りしてきた。

人を雇ったこともなく、最近では店を締めることも考えていたのである。

身体が動かなくなったときが店も終わる時だと。

「しょうがない。会って気に入ればうちで雇ってやる。確かに忙しいしな」

「まじすか！ さすが親父さん！ 話がわかるっすね！」

だが、わしは苦笑いしながらウルクにそう答えていた。
若者に『クラストディール』が倒され、心境も変わったのかもしれない。

れない。

永遠に続くものはない。

数百年無敵を誇ったあの『水龍』ですらもついには敗れた。

だが、姿を見たものが殆どいない恐ろしい魔物は、新しい形で語り継がれていくのだろう。客の話を聞くうちにそんなことをわしは思うようになっていた。

それならば『水龍亭』もまた、新しい形で残るのもよからうと。伝説が語り継がれるように。

それから二週間近くの時が流れた。
ウルクが紹介してくれたアルは常連からも受け入れられ、しっかりと働いている。

女っ気が全くない店に若い女が来たと大はしゃぎだ。
若い男の客も増えた気がする。

彼女は物覚えも良く、お陰で少しは仕事が楽になった。
最近はウルクが重傷を負ったことに動揺して失敗も目立っていたが、気にするほどのミスでもない。

「親父さん。久しぶりっすね」

「おう、怪我はいいのか？」

「ええ、いい薬師が治療してくれたすからね」

いつものように明るい表情で、だが、重そうな旅支度を背中に持って、ウルクは昼過ぎの手空きの時間に『水龍亭』に顔を出していた。

休憩を取っていたアルも奴に気付き、嬉しそうに小走りで近付いて来る。

「どうしたウルク、その格好は」

「ちょっと旅に出ることになったんすよ」

儂は髭を思わず触り、首を傾げる。

「旅に出ていいのか？」

「命令すからね。一番心配だったアルも何とかなったし。『子供達』には別れを済ませたす」

落ち着いた様子のウルクに、わしは既に行くことを決めているのを感じていた。

ふらっとこの街に居着いたように、奴はふらっと出ていくつもりなのだろうと。

「兄さん……いつ帰ってくるの？」

「さてね。何時になるやら。神様にしかわからないかな」

「そんな……嘘……行かないでよ」

不安げに、泣きそうな顔でアルがウルクを見上げる。

「アル。君も大人だ。別れは僕も寂しいけど、しっかり頑張るんだよ」

だが、奴は微笑んで彼女の頭を子供にそうするように優しく撫でた。

物好きにもアルはウルクを気に入っているようだが、奴にとっては以前に話したとおり、娘としか……大勢いる子供達の内の一人としか見ていないのだろう。やれやれだ。

「ウルク、三年だ」

「三年？」

不思議そうにしている奴にわしは頷く。

「ああ、お前の事が好きだという変わり者がいてな。紹介したいのだ」

「ええっ！ まじっすか！ 苦節四十年、自分にもついに恋人が！」

「馬鹿、お前これから旅に出るんだろうが」

「あ、そうだったっす……親父さん……もっと早く言って欲しかったすよ……」

アルの前だというのに、子供のようにはしゃぎ、力無く頂垂れる。

わしには苦笑しかでない。

「当人の気持ちもあるだろうが、三年以内に帰ってきたら紹介してやる。美人でスタイルもいいし、真面目で働き者だし、頭も悪くない。楽しみにしておくといい」

「おおー！ さすが親父さんすね。旅にも張合いが出来るすよ」

にいつと悪ガキのような笑みをウルクは浮かべる。

「それでお前さん、これから何処に行くんだ？」

「ここに泊まっていたケイトさんに関する神託がカリフ様に降りたんす。水の神殿の代表として彼の従者となり、護るのが役目すね」

神の神託……時に高位の神官に対し、神が助言を与えることがあるらしい。

神に仕える者にとってはその言葉は絶対なのだそうだ。

「なんと……驚かされてばかりだな。しかし、カリフの法螺ではないのか？」

「神に関することそんなことするわけじゃないですか」

「それもそうか。それなら、確かに何時帰れるかわからないな」

従者が帰れるときは、仕える者が使命を果たした時なのだろう。ケイト君は若い。年長のウルクが支えになれば……。

「親父さん、どうかしたっすか？ 変な顔して」

「いや、何でもない。無事、帰って来いよ」

「わかってるっすよ！ それじゃあ行つて来るっす。アルも元気で」

そうしてウルクは朗らかに笑い、店から出て行つた。

後にはわしと泣きそうな顔のアルだけが残される。

「サルードさん、私……盗賊に襲われて危ないところを兄さんに拾われたんです」

「そうか。あいつはいい奴だからな」

涙が溢れているアルに胸を貸す。

別れは辛いものだ。それが……大事な存在であれば尚更。

死んだ者とは二度と会えないが、生きていればまた会える。

「三年経てばアルは17歳だろう。丁度いい」

「え……」

「あいつが帰るのを待つとしよう。それまでは、わしらも頑張ろう」

わしも歳だがまだまだ死ねないようだ。

いつになったら嫁のところに行けるのやら。

「三年越しの悪戯だな。面白そうだろう」

わしはウルクが去っていった扉の方を向き、大きな笑い声を上げる。

アルは何のことかわからず、きょんとしていたが、意味に気付くと、

「はいっ！」

満面の笑みで頷いた。

これからどうなるのか。それは誰にもわからない。

アルにも他に好きな男が出来るのかもしれない。それはそれでいい。

わしもまだまだアルの事は理解していないし、想いの深さはわからない。

今はただ、奴が新しい道を進んでいるように、わしらも新しい道を進んでいけるようにしておけばいいのだ。落ち着いてくれればきつと、先は見えてくる。

わしらは一頻り笑うと休憩を終え、夕方の準備をするために仕事を再開した。

ブローグ 国外の旅路

雨に濡れて黒く染まったアスファルト。

そして、砂地に作られた子供が遊ぶ小さな遊具。

等間隔に並んだ木々の向こうにはコンクリート製の建物が微かに見える。

見覚えのある懐かしい光景。

視点は自分なのに、まるで映画を見ているような感覚。

『過去』の夢だと、俺は直ぐに気付いていた。
何時もの事だから。

普段は殺される場面が夢に出る。だが、稀に他の場面が映されることもある。

今日はその稀な例のようだ。

自らは雨に濡れながら、背伸びをして『俺』を傘に入れようとしている、目の前の小柄で長い髪を変な場所で括った少女。彼女は悪夢の根源である幼馴染ではない。

俺にとって苦い記憶であることに違いはないが。

「——先輩。こんなの……本当に良いんですか？」

「仕方が無い。俺が何かを言うことじゃない」

彼女は懸命に雨を傘で防ごうとしてくれるが雨足は強く、用は為していない。

そんな夏の激しい雨の中、傘も持たずに立っていた『俺』が、長袖の服を着ている後輩に静かに言葉を返す。

幼馴染にはみつともなく縋ったが、後輩にはこうして強がれたのは『俺』の意地だったのだろうか。

「俺は大丈夫。だから風邪を引かない内に帰った方がいい」

「嘘。それ、嘘ですよ……そんなの！」

役に立たない傘を投げ捨て、後輩は服を掴んで頭を『俺』の胸に押し付けて泣き声をあげる。そして『俺』はそんな彼女に何も出来ず、ただ、齒を食いしばっている。

鮮明に覚えている。

最悪の形で幼馴染に振られた日の記憶だ。

「あの人は勝手です……昔も——先輩を散々振り回して」

「もう、過ぎた事だよ」

「色んな才能を持つてて、美人で家族もいて——先輩も……私が欲しいものを全て持っているのに……なんで……なんで……！」

振り絞るような後輩の叫び。

高校時代の部員三名による名目だけの部活動……それは『俺』にとっては大切な思い出だが、彼女にとっては果たしてどうだったのだろうか。

俺は今、冷静に過去の出来事について考えている。

それが出来るのは、心の傷も時の経過で完全に癒えており、苦い思い出も今の俺にとっては、ただの記憶でしかないからだろう。

「ただ、俺から心が離れたんだ。何か悪い所があったんだと思う」「そんなはず不是吗！」

思考を巡らせている間も夢の再生は続いていく。

俺の目の前では後輩が雨に濡れた顔で『俺』を見上げて、そう断言していた。

何故、彼女はそこまで確信を持っているのだろう。

表情から自信の色を見て取ることが出来、ふと疑問が沸き上がる。

確かに、『俺』は彼女の秘密を知っている上、付き合いも長く、信頼関係は出来上がっていたとは思うが、俺と幼馴染の関係まで正確に掴んでいるとは思えない。

これは、単に無条件の信用だったのだろうか。

「私は……私はあの人を許しません。——先輩がどう庇っても、私は絶対に——先輩の味方になります。だから……、もうそんな辛そ

うな顔をしないで下さい。お願いだから」

「自分の事で後輩を泣かせるなんて、俺は情けないな」

『俺』は後輩の濡れた頭に手を置き、苦笑している。

見上げる後輩の顔も強い雨で濡れており、涙なのか雨なのかわからない……だけど、表情から『俺』は泣いていると判断したようだ。

「でも、有難う」

だが、今の俺には違うのではないかと思えた。

『俺』は余裕が無いからか、気付いていないが……多分間違いない。

『俺』が目を逸らすその一瞬。刹那の時間。

彼女は寒気のするような歪んだ笑みを浮かべていたのだから。

夢の映像が揺らめいて、遠ざかっていく。

今日のところは終わりらしい。やれやれだ。

「ケイト。交代よ……早く起きて〜うつ、眠い〜」

「うつ……ん？ ああ……悪い。シーリア」

身体を強く揺すぶられ、目を開けると今にも眠りそうなシリアの顔が近くにあった。

野営の見張りの交代時間のようだ。

側ではクルスやウルク、そして護衛対象の若い商人が寝息を立てている。

俺はシリアに謝罪しながら立ち上がると、くるまっていたマントに付いた草を叩いて落とし、意識をはっきりさせるために頭を何度も振った。

立ち上がった俺と入れ替わるようにシリアは草むらの上にそのまま座り込む。

温暖なヴェイス商国……今いる港街、クラウリディ周辺では、夜でもそれほど気温が下がらないため、特別に防寒着が無くとも風邪を引く心配はなさそうなのは有り難い。

「ケイト、何だか難しい顔していたわね。悪夢でも見たの？」

「……寝顔見てたの？」

「え、あ、いや！　ちょ、ちょっとだけよ？　退屈で退屈で」

慌てたようにシリアはそっぽを向く。

その仕草がどうにも子供っぽくて彼女には似合わず、俺は少しだけ笑った。

「悪夢ではないよ。そうだなあ、悪夢と良い夢の間くらい？」

「ふふっ、何それ」

俺の中途半端な答えを聞き、シリアも無邪気にくすくすと笑う。
夢の事は気にしてはいない。

あれは遠い過去の出来事であり、真実は確かめようの無いことだ。
自分で都合良く記憶を改竄している可能性もありえる。

そして、事実がどうであれ結果は変わることはない。

大事なことはこれからどう生きるかだ。

多少冷えた身体をさすりながら、俺は夜空を見上げる。

乾燥している御陰か空気は澄んでおり、無数の星々が漆黒の空を
鮮やかに染めていた。

『過去』の生活では絶対に見ることが出来ない光景。
子供の頃からの俺のお気に入りだ。

「星は何時見ても綺麗ね。旅に出るまで気付かなかったわ」

俺がそうしていたようにマントにくるまり、横になって同じよう
に空を見ながら、シリアは羨むように呟き、俺もそれに同意する。

「シリアは旅、辛くないか？」
「さあ。どうかなあ」

全員が寝静まっていることを確認し、俺は彼女に訊ねる。

エールからヴェイス商国のクラウリディに入った時、シーリアはクラウリディの役人に取り囲まれた。ただ獣人であり、国民証を携帯していないというそれだけの理由で。

ピアース王国の許可証を見せたことで役人達は納得し、臨時の滞在証を発行してくれたが、首から常に掛けるようにと強制された。

シーリアは反論することなく、受け入れていたが……彼女が感じた屈辱はどれ程だろうか。

「いろんな国の知識はあるけれど、実際に足を運ぶとまた違うわね」

「幻滅したかな？」

「うん。お陰でケイトが庇ってくれたし？」

シーリアはマントで口元を隠し、からかうような笑い声を漏らす。平気そうだが……どうだろう。

考えすぎるのはあんな夢を見たせいか……と俺は頭を掻きながら苦笑する。

後輩も傷付いた時は、特にわざとらしく笑っていたから。

「ま、この国は特に……だしね。それでも、ヴェイス商国でお母様の故郷の詳しい場所を調べないと。私の力が必要でしょ」

「うん。頼りにしてるよ。シーリア」

「任せなさい……ふわぁ……」

大きな欠伸をして、シールリアは眠たそうに目をこする。

「ごめん。引き止めて。寝ていいよ」

「ううん、いいの……寝付くまで手を握って貰っていい？」

ほんの一瞬、不安げな表情を見せたシールリアに俺は小さく頷き、彼女の側に座って右手を差し出す。すると、彼女は大事そうに両手でその手を抱え、嬉しそうに笑って眼を閉じた。

「ありがとう……手、固い……ね」

「おやすみ。シールリア」

俺の能力なら座っていても、問題なく敵は捕捉できる。少しくらいは別に構わないはずだ。

それより……と、彼女の柔らかい手の感触を感じながら思う。これまでの旅で彼女がこんな事を頼んだのは、初めての事だと。

俺達はこれからヴェイス商国内を旅することになる。今までとは違い、完全に国外だ。

文化も違えば法律も違う。常識も違ってくるだろう。情報を集め、注意していかなければ足元をすくわれかねない。

ラキシスさんの故郷に関しては、それを調べるのも冒険の一環だと彼女は俺達に説明し、クラウリディからさらに南としか教えてくれなかった。

他にも調べるべきことはたくさんあるが、それをどうしていけばいいか……。

冒険者として生きるとは、自由だが何処か足が地に付かない怖さがあった。

「まずは身の安全と、拠点の確保か……」

俺は独り呟き、能力を発動させて周りを警戒しながら頭を整理する。

そしてまた、不安とは別にこうも思う。

今までと常識が違う街というのは危険である反面、新鮮さで満ちており、見るべきものもまた多いだろうと。そうした好奇心は当然に持ち合わせている。

クラウリディは港街であり、他国との交易が中心の都市であるためにエールに似た部分も多かったが、これから向かう場所は違う。

どんな街なのか想像も出来ない。

「新しい街か……楽しみだな」

安心したような表情で静かな寝息をたて始めたシリアの手をそっと離すと、俺は日記帳とペンを取り出し、今日の出来事の記載を始める。

残りが少なくなってきた日記帳には、これまでの冒険の思い出が詰まっていた。

そんな日記帳に記載を続けながら俺は思う。

願わくば、この国での思い出も後で見返せば楽しいものになるようにと。

しかし、そんなささやかな願いとは裏腹に、俺は後に日記帳にこう記載することになる。

『現状のままでは、この国は間違いなく滅ぶ』と。

第一話 商売の都

久しぶりに宿で眠った御陰が身体が軽い。

野宿を何日か続けると、ベッドの有難みが本当によく理解できる。

仲間の三人も多少は旅の疲れが抜けたのか、幾分さっぱりとした雰囲気で身体をほぐしていた。ただ、その表情は三人三様であまり明るいものではないが……。

まあ、それもこれも運命の様なものが原因だ。

俺はそんなやや機嫌が悪そうな仲間達と共に、ヴェイス商国特有の砂が混じった乾燥した早朝の風を浴びながら、この国の首都、ヴァルヌークの大通りを、重い旅の荷物を抱えて歩いていった。

調べものを行う為にも、この街には当分滞在することになる。それなのに長期の宿を取らず、今、こうして荷物を持って歩いている理由は……。

「いや、参ったつすね。まさか追い出されるとは」

「仕方が無いよ。一日泊めてもらっただけでも有り難い」

しょんぼりと肩を落とし、うつ……と、一見、儚げな女性にも見える空色の長い髪を持つ華奢な青年、ウルクが呻く。

そんな風にどんよりと爽やかな朝に似合わない空気を纏っていた

彼だったが、俺の言葉を聞くと、くわつと俺の胸倉を掴み、食ってかかった。

「何を他人事みたいに言ってるんすか！ ケイトさんのせいすよ」
「そ、そうだった？」

早朝にも関わらず、美味しそうな食べ物を威勢のいい掛け声で売り捌く声が轟いていたり、荷を運ぶ馬車が行き交っていたりと中々に騒々しい大通りで俺は思わず足を止める。

とぼけてみたが、忘れたわけではない。確かに自分にも責任はあるのだが……。

「ウルクも嬉しそうに加勢してた」
「うっ！ いや、三人の女とか、あいつらがほざいたんでつい……」

しなやかそうな身体に動きやすい革製の鎧を身に付けている、艶やかな黒髪の少女、クルスがじと目で俺を責めていたウルクにそう指摘する。

昨日、交易都市クラウリディで引き受けた、首都までの護衛の依頼を終えて宿を取り、一緒に経営している酒場で食事を取っていると、数人の柄の悪そうな男達に俺が絡まれてしまったのである。

どうも、三人も美人の女性を連れているのが気に入らなかったらしい。

まあ、一人は男なのだが。

それだけなら俺は放置しただろう。この時点でウルクは相手に殴りかかろうとしていたが、俺は彼の腕を掴んで止めていたのだ。

ただでさえ俺達の容貌は目立つのに、これ以上目立たなくても良いと。

「お！ 獣人か。高そうだな……坊やの筆下ろし用かよ。へへ、俺らにも使わせろよ」

しかし、問題はこの台詞だった。

この言葉を口にしながら下卑た笑みを浮かべた男が、シーリアの肩に触れようとした瞬間、俺は木製のコップで男を全力で殴りつけていたのである。

村に残った親友のミスと二人で組んでいた頃は、挑発を受けたミスが暴走し、それに巻き込まれるように良く喧嘩をしていたが、自分から能動的に喧嘩を吹っ掛けたのは初めてかもしれない。多分。

当然この時、ウルクも喜び勇んで喧嘩に参加し、他の男に鉄拳を叩き込んでいる。

確かに一番に手を出したのは俺だが、ウルクも間違いなく自分の意思で嬉々として参加したのであり、俺を非難する資格はないはずだ。

クルスはそう言いたいのだろうか……そんな彼女の頭をシーリアが背後から軽く叩く。

「クルス、あんたが一番悪いんでしようが。二人は他人を巻き込んでなかったわよ」

「ふん。あんなぬるいやり方じゃ倒した気がしないし」

「全く……」

拗ねているクルスにシーリアが呆れるように溜息を吐く。

そう、俺とウルクはそれでも他の客を巻き込まないよう、用心して相手を制圧していたのだ。

だが、クルスは違う。俺を後ろから殴ろうとした敵を問答無用で蹴り飛ばし……他の冒険者らしい客の席にまで吹き飛ばした。

その結果、怒り狂った第三者の集団により、店内では乱闘がほとんど他の者にも連鎖していき、酷い有様になってしまったのである。

「ちょっとは我慢なさい。来て早々これじゃ、先が思いやられるわよ?」

「面目ない」

「申し訳ないっす」

「ふん」

唯一、乱闘に参加していなかったシーリアが、殴られた跡が多少残っている俺達に対し、人差し指を揺らして説教し、俺とウルクは彼女に頭を下げる。

一番怒っていいであろう彼女が我慢しているのに確かに情けない。

「しかし、ケイトさんは意外と喧嘩早いっすね」
「昔から」

すぐにウルクは気を取り直すと、笑って殴る真似をし、クルスが頷く。

昔から……ってそんなことはないと思うのだが。

俺は頬を搔いて、少し困惑しながら話を変える。

「しかし、予想以上に異種族への差別が酷いな」

「そうすね。『湖の民』もこの国じゃ人間ってことにしてるっす」

外見での特徴は人間と大きく変わらないウルクは普段通りでも問題ないが、シリアはそうはいかない。そこで、彼女には裾の長いフード付きのローブを纏ってもらっている。

こうすることで、特徴的な耳と尻尾を隠しているのだ。

とはいえ、それでも目立つ事には変わりはない。どうやら、この国の異種族の者達は、皆、そうやって生活しているようだからだ。

ヴァルヌークはエールとの交流が深いクラウリディよりも、遥かに異種族に対する視線は厳しい。好奇というよりは、蔑みの視線とでも言うのだろうか。

「学院ではこれは評議会のせいって話だったけれど、実際はどうなの？」

「うーん、難しいですね。評議会に入れる異種族がないから、こんなことになっているのか、評議会が締め付けているから、異種族から評議会に入れる商人が出ないのか」

シリアの質問に、一応、ヴェイス商国にも詳しいウルクは腕を組んで俯いてそう答える。この国では政策は全て、一定以上の資産を持つ評議会によって決められていた。

北部に交易都市クラウリディを持ち、南部の山地の豊富な鉄や寶石などの鉱物資源、東部には魔力石を産出する迷宮都市シエルバと巨大な河川を利用した穀倉地帯。

そして、中央にそれらが全て集まる首都の『乾きの都市』ヴァルヌーク。

様々な資源の彩りを持つヴェイス商国は、それにより財を成した商人達が資金を出し合うことで、独立を護っている国だ。

そのため、上位の商人達からなる評議会の権力は他国の貴族に劣らずに強力なものであり、当然に政策も彼等に有利となるように、利害調整が行われている。

「奴隷か探索者が商人か……そんな感じに思えるね」

俺は苦笑混じりに呟く。探索者はこの国での冒険者の呼び名だ。

迷宮に潜る者という意味合いらしい。

ちなみにこの国では右側に行くほど立場が強くなる。

首都のヴァルヌークも、商人が多く暮らす大通りは清掃が行き届いているが、それ以外の場所は住んでいる者の財産で大きく状況が異なる。

奴隷など最下層の者が住む一帯は狭くて治安も悪く、酷い有様だ。

そう、この街では人も労働力として重要な取引の対象となっている。

現に数日の旅路でも数度、大きめの農場で奴隷が使われている光景を目撃している。

若い商人達の話では、商売に失敗すればそうなるのは当然らしく、だから伸し上がる努力を必死でやっているのだそうだ。

「もしくは野盗っすか」

うんざりとウルクはそう続ける。

今回の依頼では、俺達は数度の襲撃を受けていた。

「だろうね。でも、なろうと思ったた訳じゃないんだろ。幾らなんでも弱すぎる」

それらは全て、遠距離から二、三発、弓で威嚇すると逃げていくのだが、動きは素人そのもので、年齢も体格もばらばらだった。

商人達の話では最近になってから増えたらしく、間違いなく、三国協定破棄の影響で没落した商人達の成れの果てだろうとの事である。

若い商人達はそんな野盗達を負け犬だと嘲笑っていたが、現状、治安の悪化は護衛という形で商人達の財政を圧迫しているのは間違いない。

ある程度、集団を組む事で自衛していた資産の少ない商人達も、野盗の活発化により、護衛を雇わざるを得なくなったのだ。

それは物価の上昇という形で影響が現れ始めているらしい。

「まあ、言ってもすぐには変わらないわよ。それでこれからどうする？」

話を変えようとするように、シリアが明るいい口調で今後の事を俺に確認する。

確かに国の事は俺達にはどうすることも出来ない。

「宿を取ったら図書館に向かうよ。有料だけど、外国人でも大丈夫みたいだから」

俺はシリアに頷いて、そう答える。

まずはこの国の書物を調べ、伝承の中に『聖輝石』に関するものや、エルフの集落に関して記載があるものを探していく。

ある程度をこの国で調べ、エルフの集落の位置によってはヴェイス商国の南西にあり、学術国家と呼ばれるローファンを目指そうと俺は考えていた。

「なるほどね。じゃあ、さっさと宿を探しましょ！」
「そうだね」

そう彼女は笑うと、人通りの多い賑やかな雑踏の中、元気よく先頭を歩き始める。

俺はクルスと顔を見合わせ、苦笑いすると彼女の後ろを歩いていく。

しばらく歩いた頃、ふとクルスが顔をしかめた。

「どうした？」
「あれ」

小声で指したのは前から歩いて来る、ふらついた子供。

薄汚れたフード付きのローブを身に纏っており、往来の人々はそれを避けるように歩いている。クルスが渋い顔をしたのは、その動きがわざとらしいからだろう。

「きゃっ！」

「あ、お姉さん、ご、ごめんなさい！」

少し離れて前を歩いていたシーリアに子供はぶつかると、謝罪しながらも、それまでふらついていたのが嘘のように元気に走り出し…… あっさりとクルスに捕まった。

「こら、離せ馬鹿っ！ 変態！」

「はい」

「いや、渡されても…… 獣人？」

クルスが捕まえた子供の首根っこを猫のようにひょいっと掴んで、俺の方に押し付ける。

声からすると少女のようだ。

捕まえられた拍子にずれたフードからは、ふさふさな毛に覆われた丸い耳が見えている。

クルスはスリだと考えたようだが…… 俺は眼を閉じて能力を使用した。

それで彼女が何をしたのかを理解し、息を吐く。

「クルス。彼女は何も盗っていないよ」

「そう、ごめん」

「失礼だな！ 全く」

獣人らしい少女にクルスは素直に謝罪し、俺は財布の中からこの国の二種類ある銅貨の内、大きいものを一枚、クルスの手を振り払って不機嫌そうに怒っている少女の小さな手の平に置いた。

お金に魔力があるというのは本当かもしれない。

獣人の少女の表情が嬉しそうなものと、わかり易く変わっていったからだ。

まるで雲から太陽が顔を出したような、気持ちのいいくらいの変貌だった。

そんな彼女に俺は視線を合わせ、なるべく笑みを浮かべて頭を下げる。

「お詫びだよ。人にぶつからないように気を付けてね」

「お、すげー！ 兄ちゃん人間の癖に気前いいじゃん！ じゃなっ！」

そして今度こそ元気そうな足取りで、軽やかに走り去っていった。これら一連のやり取りを、他の三人は怪訝そうな表情で見守っていたが、俺はその場では応えず、ある程度その場所から距離を空けてから、何を意味しているのかを話す。

「スリじゃなくて、手紙の配達人みたいだよ。シリアのポケットに」

「うわ、本当っ！ いつのまに……」

「気付かない方がどん臭い」

シーリアがローブのポケットを確認して大袈裟に驚き、クルスはぼそつと毒を吐く。

十中八九、獣人であるシーリアへのリブレイスからのメッセージだろう。

こういう国だ。異種族の互助を行うあの組織が関わっていない筈がない。

出来れば関わりたくはないが……判断は手紙を読んでからでも遅くはないだろう。

俺は左手で頭を掻くと、頭を切り替え、手紙を両手で抱えて、難しい表情をしているシーリアに宿探しを再開しようと声を掛けた。

第二話 見知らぬ土地

荷物を置くことが出来る宿を見つけなくてはいけない。

その困難さに気付いたのは探し始めて直ぐだった。

この街に土地勘も伝手もない俺達にとっては、宿を探すというだけでも難しい。

獣人も泊まることが出来、信用も出来る宿……となれば尚更だ。

ヴェイス商国の首都であるこのヴァルヌークは、以前、半年程生
活した城塞都市カイル並の広さがあり、行政により区画を整備さ
れて発展している巨大な都市である。

訪れたばかりで、街がどう作られているかわからない今、闇雲に
は探せない。

一つ目の宿は護衛の商人達に紹介して貰ったが、その商人達は別
の場所に宿を取っているため、何処にいるかもわからない。

彼等の宿泊先は獣人が泊まれない宿であったため、宿を紹介して
もらったのである。

そこで、俺達は必要物を買ひ揃えるために、探せば安い物が手に
入る露店ではなく、店舗を経営している商人の店を利用し、そこか
ら宿の紹介を受けることに決めた。

この国で店を経営するには相応の資金と信用が必要なため、無策
で探すよりはそのような商人の紹介が無難と判断したのである。

そのために選んだ雑貨屋の店主である、目尻に深い皺を持つ老いた商人は、流石に利益を追求する者らしくシールアを見ても顔色一つ変えず、獣人でも泊まれる宿を快く紹介してくれたが、図書館へ向かうという事に関しては難色を示していた。

「ううむ、国立図書館は……獣人の利用は難しいかもしれん」
「外国人でも金を支払えば大丈夫とのことでしたが」

俺がそう確かめると、老店主は困ったように笑いながら首を横に振る。

「人間であればそうなのだが……獣人の場合は紹介状が必要になる」
「紹介状……ですか」
「ああ、責任を負うことが出来る身元の確かな者のな」

彼はシールアを申し訳なさそうに見て、頭を軽く下げた。

「こればかりは力になれん。すまん」
「教えてくれただけでも助かるわ。有難う」
「上も何を考えてるんだかね。金など誰が払おうが変わらんというのに」

老店主は苦笑いし、理解できないとばかりに右手で禿げ上がった

自分の頭を触る。

シーリアも普段通りの調子で彼に返しているが……。

ふと、大昔のことを思い出す。

最近に見た夢のせいだろうか。

実際にあった出来事なのかすら、あやふやになりつつある程に遠い記憶だが、ささやかな痛みと共に、鮮明に思い出せることもある。

どうにもならない事への諦めたかのような笑顔。

辛いことを誤魔化す時の落ち着かない瞳。

シーリアと後輩は全く似ていない。

だが、今の表情だけは彼女と重なる。

「ケイト、どうかした？」

「いや、何でもないよ。ここの武器は質が良いと思ってね」
「ふうん」

何時の間にか俺の顔を正面から覗き込んでいたクルスに、慌てて嘘を吐く。

どうやら、ぼんやりしていたらしい。

クルスはまだ疑わしそうにこちらを見ているが、すぐに気を取り直す。

今は気に掛けて置けばそれでいい。

他人の事例を当て嵌めるのはシーリアにも失礼だ。

気持ちを切り替えると俺は老店主に礼を告げ、買物を再開した。

古めかしい雑貨屋が紹介してくれたのは、同じように歴史があり
そんな宿だった。

壁は何度も補修したのか、色を塗り直した跡が残っており、痛み
も酷く、古い建物が多い周囲の店舗に比べても特別に古い。

「これは……驚いたわね。古い建物だとは聞いていたけれど」
「この辺の建物は百年、二百年はよくあるそうだね。気候の問題な
のかな」

シーリアが感心するように驚き、クルスとウルクも頷く。

ただ、石と煉瓦造りの宿の周囲は掃除が行き届き、扉や窓は新し
い木材を使っていたりと宿の主の気配りが感じられ、古さも味と思
わせるような清潔感があった。

そんな『砂風亭』で俺達は二人部屋を二つ借り、当面の計画を相
談するために一部屋に集まる。図書館にシーリアが入れなければ、
調べ物をするのが難しいからだ。

一応、俺は出来なくはないが……クルスは文字は読めるが、興味
の無い本を読むと一瞬で眠ってしまうし、ウルクもあまり得意では
ないらしく、効率が悪くなってしまっているからである。

一人でやるのは構わないが、読んだ本は家や師匠であるジンさん
の家にあった物だけで、この世界に付いて深く理解しているとは言

い切れない。

見落としや俺の発想では気付かないこともあるだろう。
最悪、それで済ませるしかないのだが。

俺達はそれぞれ、床や椅子やベッドに腰を掛けながら悩んでいた。

「しかし、ここまでとは困ったすね」

椅子を反対向きにして、背もたれに顎を載せながらウルクはぼやく。

彼も異種族として、あまりいい気分は抱いていないのだろう。声が少し暗い。

「仕方がない。出来る事をやるしかない」

対してベッドに腰掛けているクルスは普段通りだ。

退屈なのか無表情のまま、雑貨屋で売っていた髪を括る紐を使い、隣に座っているシーリアの長い髪を慣れた手付きで三つ編みにして遊んでいる。

なんだか口笛でも聞こえてきそうだ。

シーリアは気付かない程に悩んでいるのか反応がない。

「そうだね。一応コネが全くないわけではないけれど」

「それはあまり使いたくないわ」
「……まあ、そうなんだよね」

シーリアが俺の言葉に反応して顔を上げる。
ちゃんと話は耳に入っているし、クルスの悪戯にも気が付いていたらしい。

彼女は苦笑いをしながらクルスの頭に手を置き、ぐしゃぐしゃに髪を掻き混ぜている。

コネはある。しかも、この国では特大のものだ。
ヴェイス商国を治めている評議員の一人、エルドス・クレイトス。

エーリディ湖を巡る協定の会議で出会った、褐色の肌の若い大商人である。

「ああ、アリコルドの協定の時に何かあったんすか？」

一人だけ事情を知らないウルクが不思議そうにしていたが、シーリアとクルスは複雑そうだ。感じているのはもしかしたら、同じ気持ちかもしれない。

俺は少し考えてからウルクにその評議員の印象を答える。

「会ったよ。若くて野心があって、何かを企んでますって感じの人だったかな」

「自分に絶対の自信があるんでしょうね。あれは」
「腹黒」

「みんな言いたい放題っすね。そんな人なんすか」

評議員に関するの三人の評価を聞き、ウルクは嫌そうに顔をしかめる。

あの若さで評議員になっていることから、間違いなく能力はあるのだろう。

だが、その優秀さと下心を隠さない『分かり易い悪人』だというのが俺の印象だ。

外交の席で出会ったわけであるが、彼は本当に外交に向いているのだろうか。

何かを企んでいる……ということはあっても、内部もばらばらで、何をしてくるのか理解しようがない『リブレイス』のような怖さはない。

まあ、俺が感じた印象なだけなので、実際のところはもっと調べないとわからないが。

「多分、彼を頼みにすると、自分の利益になるように考えると思う。それ自体は悪くはないけれど、出来れば借りを作るのは避けたいね」
「なるほどっす。じゃ、リブレイスはどうなんすか？ 手紙手紙」

ウルクは納得したと笑いながら頷き、今度は手紙の内容をシーリアに促す。

彼女は呆れた笑みを少しだけ浮かべ、手紙に目を通してウルクの方を向いた。

「あんたはあれだけ酷い目にあっても懲りてないのね。手紙の内容は要約すると、手助けが必要であれば指定の酒場に来いとしか書かれていないわ」

「うーん、判断が難しいっすね」

旅を共にすることになった際に、ウルクにも俺達とリブレイスの因縁は話している。エーリディ湖で手に入れた『聖輝石』の事もあり、関わりは慎重にしたいところだった。

結局のところクルスの言うとおり、出来る事をするしかないのかもしれない。

この街で全てを調べる必要はないのだから。

「悪いわね」

少しだけ俯いて、似合わない暗い声でシーリアはぼそりと呟く。床に座っていた俺はその表情を見て、すぐに立ち上がって彼女の近くにしゃがむと、両手で彼女の頬を摘み、強く引っ張った。

「ひゃっ！ は、はにすふほよ」

「いや、シーリアがおかしな事を言うから寝ぼけてるのかなあと」

冗談めかして俺は笑い、手を放す。

シーリアは涙目になり、赤くなった頬を片手で触りながら、目の前にある俺の頭に拳骨を落とした。

「痛いわよっ！ それに寝ぼけてないわ！」

「あたっ！ い、いや、まあ、急ぎの旅じゃないんだし、気楽に行こうっ」

本気で殴られたせいで頭は痛むが、怒りながらも笑みが零れている。

俺も床に尻餅を付きながら、笑った。

「うん、シーリア生意気」

「あ、こら、クルス、やめなさいっ！」

何時の間にか、ごそごそとシーリアの背後に回っていたクルスが、シーリアの脇に手を入れてくすぐり始め、それに抗うように彼女も悲鳴を上げながら暴れる。

俺はその光景に安心し、頭を左手で掻きながら立ち上がった。まずは、やれること……可能な限りの情報集めからだ。

ふとウルクを見ると、彼は両手で背もたれを掴んで椅子を揺らし、絡み合って遊んでいる二人を見て、ニヤついていた。

「いやー、いい眺めっすね。ケイトさん」

「本当に懲りないな」

「え、えっちな意味じゃないすよ。ほ、ほら、楽しそうでいいじゃないすか」

慌てて誤魔化すようにウルクは笑う。

しかし、確かにじゃれ合っている二人は確かに楽しそうにも思える。

俺は大きく息を吐くとウルクに頷き、彼女達が遊んでいる間に出掛ける準備を済ませてしまおうと声を掛けた。

第三話 二つの接触

ヴェイス商国の政治の中心である評議会とその関連施設は、街の中央より少し南寄りの場所に作られており、この施設が北の城門から伸びている中央大通りの終着点となっている。

評議会の施設と広大な敷地の周囲は高い壁と無数の警備兵により守っており、一見するとカイルルにあるような領主の城を思わせるが、内部には高い建物がないのが特徴だ。

壁の内部には大昔に写真で見たアラビアのモスクを思わせる、丸い屋根を持ち、左右対称の荘厳な石造りの建物を中心に、種々の建物が建てられているらしい。

これらはあくまで会議を行う場所であり、防衛の為の施設ではない。だから、堅固な建物は必要がない……ウルクはそう説明していたし、シリアの知識でも同じだった。

国の防衛はこの都市の外にある砦等を中心に、郊外で戦うと権力者は国民に説明しているのである。それはそれでいい。

「どうしたの？」

「何でもないよ。今度話すから」

歩きながらクルスが不思議そうに小首を傾げる。
どうやら、俺が考え事をしていることに気付いたらしい。

俺達にとっては特段、重要な事ではない。

エールを巡る戦いで新しく能力が強化されたお陰で、俺は目には見えないはずの魔力の流れのようなものを『視る』ことが出来るようになった。いた。

その力を使用した所、広大な評議会の敷地の地下に、食料の保存庫や武器庫に加え、巨大で複雑な魔法式が組み込まれた何かがあることがわかったのである。

恐らく、この街が攻められた際に籠城するための備え……ではないだろうか。

「残念ながら日記には書けそうにないけどね。死にたくないし」
「ふーん」

苦笑いしながらクルスに答えると、彼女はちらつと此方を一瞥して、興味が無さそうに先々歩いていく……ように見える。

本当は聴きたくて好奇心でウズウズしているのだろう。

こういう時、彼女は左手の指を擦り合わせる癖があるのでまるわかりだ。

「さて、見えてきた」

「この国の図書館も大きいわね」

評議会の壁沿いを西に真っ直ぐに歩くと、目的地である図書館が見えてくる。

図書館はこのヴェイス商国の政治の中心である広大な施設の隣に建てられており、誰もが一定の金銭を支払うことで利用することが可能となっていた。

図書館の近辺には国立の大学などの学術施設、研究施設が併設されており、付近一帯がヴェイス商国における知識の集積地点となっている。

カイラルの施設を見慣れているシリアから見ても、この街の施設は中々のものらしい。

しかし、結局のところ、図書館の入口に辿り着いた俺達は警備兵に呼び止められ、雑貨屋の老店主が教えてくれた通りの対応をされることとなった。

中年の太った警備兵にシリアが学者であることを説明したが、規則であるとの一辺倒の回答しか引き出すことが出来なかったのである。

「融通利かないっすね」

「役人はしっかりしているみたいだね。少なくともあの人は」

袖の下を要求するような事も無く、規則に則り、真面目に仕事をしている……というのは評価すべきところなのだろうか……今回だけは恨めしい。

シリアに顔を向けると仕方無いと言った風に困った笑顔を浮かべ、肩を竦める。

「じゃ、予定通りに行きましょう。私はクルスと一緒に街を見てくるわ」

「ん、行ってくる」

「それじゃ夕刻にこの場所に」

一度、警備兵から距離を取って話し合っていた俺達は、宿での相談通りに二手に分かれ、俺達は本を探し、クルスとシリアには街を散策してもらう。

「それじゃ、ウルク。まずは中で優先順位を決めて、探していこうか」

「そうっすね」

街の方へと歩いていった二人を見送ると、俺とウルクは図書館の入口の警備兵を相手に所定の手続きを取り、腕のいい建築家を作ったらしい石造りの図書館の中へと入っていった。

図書館の内部は大理石の床に、刺繍の施された赤い絨毯が引かれており、学生以外が中に入る場合には、事前に専属の職人から靴磨きを受ける必要がある。

職人の話によると、建物には数百年前の技術と美術の粋を集めた

芸術品としての価値もあり、それを守るための配慮らしい。

掃除も行き届いており、柱も壁も年月による風化は感じられるものの、年月を考えれば信じられないほど丁寧に管理されている。

「しかし、シーリアさんは、かなり参ってるっすね」

そんな図書館で目当ての本を探しながら、ウルクは疲れたように溜息を吐く。

それは俺もわかっている……つもりだ。

昔の彼女は人間を遠ざけ、関わらないように気を付けていた。だけど、今は違う。人間を否定して自分を守っていた頃と違い、生来の明るさで積極的に自分から関わろうとしている。

だが、それは良いことばかりではない……ということかもしれない。人と多く関わればそれだけの問題が出るのだから。

この国のような場所では尚更に。

変わろうとしている彼女の力になりたい。心の底からそう思う。しかし……。

「わかっているんだけどね……どうしたものか」

「気が利かないですね。ここはクルスさんじゃなくて、ケイトがシーリアさんに付かないと！」

見つけた一冊の本を抱えたウルクが、腕を上げ、小さな声で力説する。

確かに俺は気が利かないのだろう。だが、対案が思い付かなかったのだ。

俺は考えがあつたらしいウルクに聞き返す。

客観的な他人の意見は大事だ。同性でもあるし。

「ふむ……それで？」

「こう、そつと抱きしめてっすね。他の奴など気にするな……俺だけを見ておけばいい！ とか男らしくやるんすよ。そしたら、ケイト、素敵っ、結婚して！ これで完璧っす」

真面目に聞いた俺が馬鹿だった。

俺は抱きしめる振りをして、俺とシーリアの声真似（？）をしているらしいウルクを放置して本探しを再開する。

「ちょ！ 無視は酷いっす。あ、でも、そしたらクルスさんは失恋しちゃうつすね。彼女は自分に任せ……いや、じよ、冗談っすよ。ケ、ケイト怖いんすけど」

「本、探そうな？」

「う、うす！」

ウルクはコクコクと何度も頷くと、本を探す作業へと戻って行った。

外見は女性のようなのに、中身はまるでおっさんである。

彼は慌てて後ずさりし、本を探しながら苦笑した。

「子供相手なら、自分が味方だってわかってもらえばいいんですけどね」

「味方か……その辺は言うまでもなくそうなんだけど」

「口に出すって大事っすよ？」

その言葉には俺も同意する。

話さなくても通じる……ということは、俺はあまり信じていない。

理解し合えるまで、じっくり話す……か。

「ウルク、参考になったよ」

「いえいえ、仲間っすからね」

ウルクはひひつと下品に笑う。

彼も一応ちゃんと考えてくれていたのかもしれない。

初めからそういうアドバイスをくれれば、もっと有難いのだが。

本を探す前に俺はウルクと打ち合わせを行っていた。
無作為に探すのは効率が悪いからだ。

まずはエルフの集落を探すため、地理に関する書籍を探していく。
目的地であるこの場所がはっきりすれば、この街にいる必要はない。

聖輝石やその他の情報は後回しだ。
見つけられれば、で構わない。

そうして、周辺の地理に関する数冊の本を見つけ、備え付けられている机でウルクと手分けしながら読み進めっていると、背後から声を掛けられた。

太い男の声と若い女性の声。

「確かに本人だ」

「失礼します。ケイト・アルティア様ですね？」

急に声を掛けられ、ウルクは何事かと顔を上げて困惑している。
丁寧に声を掛けた短い赤毛の若い女性は俺も知らないが、その後ろに立っている錆色の髪を真っ直ぐ立てた傷だらけの大男は顔見知りだ。

あまり見たくなかった顔だが。

「じゃあ、俺は行くぜ」

俺の顔を確認するために来たのだろう。

アリコルドの協定の際に出会った評議員のエルドスの護衛、ハルトは不愉快そうに去っていった。あの時に挑発した事を根に持って

いるのかもしれない。

残ったのは切れ長の瞳の、伶俐そうな雰囲気、背の高い二十代半ばの女性。

燃えるような赤毛ではあるが、知性が先立って冷やかな印象を受ける。

俺が頷くと彼女は一礼し、口を開く。

「私はクレイトス商会のリイザ・エルラインと申します」

「ケイト・アルティアです。何か御用ですか？」

クレイトス商会……例の評議員が経営している大商会だ。

接触してくるかもしれないとは考えていたが、たった一日で見付けられるとは流石に思っていなかった。

買い被られているのか、それとも俺達が目立っているのか。

「我が主人であるエルドス・クレイトス評議員が、命の恩人である貴方を館に招待したいと。直ぐに来て頂きたいのですが」

まるで来る事を拒むことは絶対に無い、と言わんがばかりの、丁寧だが有無を言わさぬ口調だ。それだけ、彼等が絶対的な権力を持っている……ということなのだろう。

「お断りします」

「えっ！」

声を上げたのはリイザと名乗った女性ではなく、ウルクだ。彼女の方は取り乱す事もなく、眉を少しだけ動かしただけ。

「と、言ったら？」

「困ります」

淡々と彼女はそう答える。

あまり困っているようには見えないが、意外な答えではあったようだ。

「エール伯を仕事で守ったのであって、エルドスさんを守った記憶は無いんだけどね」

「評議員は貴方に感謝をしております」

リイザは胸に手を当てて、深々と頭を下げた。

「明日なら。仲間が二人いないからね。後、幾つかの条件を飲んでもらえるなら」

「……わかりました。エルドス評議員にお伝え致します」

俺がリイザに条件を伝えると、彼女は意外そうな表情をしたが、

条件に関する返答は明日、宿に迎えに来た時に行うと俺に答え、図書館から退室していった。

ウルクはきびきびと歩く彼女の後ろ姿を見つめながらぼつりと呟く。

「さすがお膝元ってところっすかね？」

ウルクの苦々しい言葉に、俺も苦笑いしながら頷いた。

だが、付き合いたくない相手からの接触は俺達だけでなく、クルスとシーリアの方でも行われていたことを後で知ることになる。彼女達は別口の相手からであったが。

第四話 思いがけない手紙

図書館には透明とまでは言えないが、ガラス製の窓が張られており、光を内部に取り入れることが出来る構造になっている。

夕刻となり、厚い窓から差し込む紅い光が机に伸び始めると、何らかの仕掛けで温度を調整しているのかひんやりしていた図書館内部の室温も若干上がり始め、その暖かさに負けたウルクがうつらうつらし始めた。

「今日はここまでかな」

俺は隣で頭が机スレスレまで落ちてはハッとして真剣に本を読み直しているウルクに声を掛け、今日の調査を切り上げる。そろそろ時間もいい頃合だろう。

本を片付けて外に出ると、既にクルスとシーリアは待ち合わせ場所ですわいで待っていた。

「どうだった？」

「評議会からの嬉しくもない招待があったよ」

「そっちな……ご招待はこちらもよ。例の子供が手紙をね」

シーリアが封を開けた封筒を指で挟んでこちらに見せる。
中身の方はクルスが読んでいたようで、俺達が戻ってきたことに
気付くと、怒気を漂わせながら、読めとばかりに荒っぽく俺に押し
付けた。

「ふざけてるっ！」

俺は手紙に目を通しながら彼女の怒りの理由を理解する。
クルスが怒るのも無理はない。

彼女は俺とシーリアに比べれば『手紙の差出人』との付き合いは
浅く、それでいて悪い印象のみが鮮明に記憶に残っているのだろう。
二枚綴りの手紙の文末には、ある知り合いの名前が記載されてい
た。

『鍛冶の神』ガランに仕えるドワーフの神官。

「ゼムドか……」

苦い記憶からの胸の痛みを堪えながら思わず呟く。
彼に対して持っている想いは怒りだけの単純なものではない。

半年もの間、仲間として苦難を乗り越え、時には笑い合い、真剣
に相談し……そして、最後には組織を選び、俺達を敵として戦った
相手。

彼は俺達を裏切り、俺もまた仲間を守るために彼を罠に嵌めた。

「誰っすかそれ」

「昔の仲間だよ。ただ、ちょっと事情はあるんだけど」

首を傾げているウルクに、俺は複雑な感情を抑えながらそう答える。

今の自分の彼に対する思いを考えた時、他に表現が思い浮かばなかったのだ。

彼に対して俺は憎しみはない。

ただ立場が違っただけ……お互いの仲間を守ろうとした結果だ。

「ケイト違う。敵……敵より酷い。裏切り者」

「クルス……」

だが、クルスは俺の答えに納得がいかならしく、珍しく感情的に否定した。

夕暮れの日差しを受けて顔を少し赤く染めながら、彼女は上目遣いで俺を睨む。

「あいつのせいで、みんな危なかった。ケイトも大怪我した」

「事情があつてのことだよ。彼もやりたくてやったわけじゃない」

「理由なんか関係ない。絶対また裏切る」

ゼムドを庇ったことが気に入らないらしく、憎悪の込もった低い声で吐き捨てる。

彼女の怒りが裏切られたことへの怒りなのか、俺が怪我をしたことへの怒りなのか、彼女なりの正義感なのか、潔癖なところがあるのか……。

まだまだ、クルスのことを完全には理解出来ていないようだ。だが、これが彼女の素直な気持ちなのだろう。

彼女の心情はわからなくもない。

どんな理由があろうとも、確かに彼は俺達を裏切ったのだから。

「ケイトは退屈しなさそうな人生送ってそうっすね」

「平和が一番なんだけどね。シーリアはこの手紙、どう思う？」

俺に詰め寄るクルスの姿に苦笑しているウルクに答えながら、シーリアにも聞いてみる。

彼女はクルスほど憎悪しているわけではないらしく、不貞腐れているクルスの肩を叩いて宥めていたが、声を掛けると此方を向いた。

「何の意図があるのかわからないけど、注意はしなければいけないわね」

「そうだろうね」

ゼムドは義理堅いが、組織第一の男だ。

基本的には俺達に害を与えようとは考えないだろうが、命令次第では敵対するのは間違いない。

俺に敵対することで、城塞都市カイラルでの誓いを破ることになるって……。

『聖輝石』が絡んでいる現状、注意はしなければならない相手だ。

「だけど、手紙の内容がね」

シールリアが手紙を指して苦笑し、俺も頷く。

ゼムドからの手紙には、現在はカイル兄さんの命令で動いており、危害を加える必要性が無くなったこと。そして、この街に迫っている危機について説明したいと書かれていた。

同時に話を聞く気がなければ、一日も早く国を脱出するようにとの忠告付きで。

「気になる書き方だね。まあ、長居をする気はないけど」

「ええ。私達を狙っているなら、国を出ろというのはね」

ゼムドは俺の能力を知っている。

人気のない場所で俺に奇襲が通じないことは理解しているだろう。

かつて戦ったサイラルのようには、遠距離攻撃を防ぐ手段があるなら別だが。

俺達に警戒されていることも手紙の中身から自覚していることがわかる。

指定してきた酒場も、朝に渡された手紙と違う。

「合流する前に調べたけれど、西門に向う大通り……今歩いている大通り沿いの店よ。学院の学生や研究所の職員が利用する量が出るけど安い、そんな半分食堂みたいな酒場みたい」

「リブレイスは関わってない？」

「そこまでは。だけど、あそこで襲うのは無理そうね」

小さく溜息を吐き、シーリアは落ち着かなそうに頬を触っている。彼女もクルスのようにには割り切れていないのかもしれない。

「凄く悩んだけど……私は話を聞いてもいいと思う」

普段は齒切れ良く答えるシーリアも自信がなさそうで、口が重い。

顔を合わせたくはないが、逆に会いたい気もする。

彼女も俺と同じように、そう考えているのだろうか。

「私は反対。信じられない。帰る」

しかし、クルスは断固反対と言わんがばかりに俺の右腕を掴み、

泊まる予定の宿の方向へと引っ張ろうとする。

ウルクはその様子を黙ってしばらく見ていたが、首を傾げて俺に質問した。

「うーん、ケイトさんは話聞きたいんですか？」

「ああ、明日、エルドスさんに会って、役に立つ情報があれば判断材料になるかも」

何も知らずにこの街の権力者であるエルドスに利用される、という事態は可能な限り避けたいところだ。彼が何を考えているのかはわからないが、俺達を呼びつけるだけ……というのも考え難い。

若手の商人から話も聞いたが、エルドスは評議員に若くしてなっただけがあり、貪欲で、どんな手段を用いても儲ける手練の商人なのだそうだ。

ならば、無駄に時間を使うようなことは考えない可能性が高い。

リブレイスの一員であるゼムドなら、色々知っている可能性はなくもない。

手紙の内容にある危機も、呼びつけることに関係があるとするれば……。

事前に知っておくことで、無用の危険を避けることが出来るかもしれない。

「クルスさんがそのゼムドさんだっけ？ その人に会いたくないな

ら、ケイトとシーリアさんに行ってもらえばどうすかね」

「どうして？」

「いやー自分は知らないっすし、クルスさんが喧嘩腰じゃ話せないんじゃないすか？」

ウルクが此方をチラリと見てにいつと笑みを作る。

何かを企んでいそうなその笑みで、俺は図書館での彼の話を思い出した。

また余計なことを……そう思うが確かに喧嘩腰では話にならない。

「クルスはそれでもいい？」

「やだ」

俺の腕を掴んだまま、クルスは即答する。

気持ちのいい否定っぷりに、俺は左手で頭を掻いた。

「じゃあ、一緒に来る？」

「それもやだ。会う必要ない」

拗ねたように顔を逸らしながら彼女は不機嫌そうに、ぼそぼそと呟く。

余程腹を立てていたらしい。

やっていることは、わがままな子供のようだが……。

自分の意見をきちつと言えるようになったことは、少し嬉しいかもしれない。

確かに会わずに、忠告に従って街を去るのも構わない。
問題は結果的にどちらが安全かということだろう。

「ウルクはどう思う？」

「自分はよく知らないっすけど、身の危険が無いなら情報はあった方が良く思うんすけど。何だかんだでリブレイスの情報網は中々のもんっすからね」

ウルクはクルスに睨まれて怯みつつも、そう答える。

これで三対一。俺はクルスを宥めるように、落ち着いて声を掛ける。

「話を聞いた上で、みんなで考えればいい。駄目かな」

「ケイトの馬鹿。後で説教」

「ごめん」

気に入らないが、話を聞くことには納得してくれたいらしい。

結局、俺とシーリアがゼムドが待つ大衆酒場で話を聞き、ウルクとクルスは先に宿に戻ってお互いの情報を交換することとなった。

待ち合わせの酒場は大通り沿い、西門の側にあった。

ヴェイス商国の西部は重要産業が少ないため、西門は東門に比べて商人の出入りは少ないが、学問関係の施設が密集しているお陰で、そこで学ぶ者や研究者達の住宅地が多く、彼等を対象とした大衆酒場のようなものも多い。

広い店内は麦酒と食事を楽しんでいる客の賑やかで楽しそうな声が響いており、威勢のいい店員の注文を取る声も聞こえる。生演奏をしているのか、明るい音楽も流れていた。

その店のテーブルの一つに久しぶりに会う、背の低い、だが、筋骨隆々でがっちりした男。

そしてもう一人。

長い金色の髪を後ろで括り、右側だけ別に一本だけ括った昏い青い瞳の美しい少女が、酒の摘みのサラダを不味そうに小さな口で齧っていた。

第五話 心の壁

「……何か用？」

「それはこっちの台詞でしょ！」

長い髭を生やしたドワーフ、ゼムドの隣でごぼうに似た野菜を齧っていた金髪の少女……アリスは食事の手を止めて俺の顔を見ると少しの間だけ固まって、訝しげな表情でぼつりと言葉を零す。そんな彼女にシーリアが怒鳴り声を上げた。

アリスは煩そうに耳を抑え、嫌そうにシーリアの方を見ている。

「煩い犬ね」

どうやら、アリスも知らないことだったらしい。

先程の驚き方が演技なら、俺に彼女の嘘を見抜くのは無理だろう。

唐突な再会に思考が真っ白になって停止したが、素早く切り替えるとゼムド達が座っている席の対面に俺とシーリアも座った。

一瞬、帰ろうかとも思ったが、謀った訳ではなさそうだし、今後ともかく、こんなに人の多い場所で襲いかかってくることもないだろう。

「なんじゃ、知り合いか」

「俺の仲間を半殺ししてくれたよ。その娘は」

「人聞きが悪い。私は怪我をさせていないわ」

しれっとアリスは惚けて薄らと微笑み、サラダの皿を対面の席に座った俺の方に押し付ける。食べさしを食えということだろうか。

だが、ゼムドは黙ってその皿を再びアリスの方へと戻す。

そのサラダを見て、アリスは心底嫌そうにゼムドを睨んだが、彼はあまり気にしていない様子で、首を傾げている。

「偏食はいかん。成長しなくなるぞ？」

「放っておいて。それでどうしてケイトが此処に？」

アリスが俺とシーリアの聞きたいことを代弁し、ゼムドに問い掛けると彼は真剣な表情で重々しく頷き、深々と頭を下げた。

「久しぶりじゃな……二人とも。本来なら合わせる顔など無いのじやが」

「また会うとは俺も思わなかったよ」

「正直来てくれるとは思わなんだ」

ゼムドは髭を触りながら微笑み、俺も笑う。

会うまでは色々と考えたが、会ってみれば仲間だった時と大きく

は変わらない。

ただ、決定的な壁は間違いなく存在し、それだけが少し寂しい。

彼は店員に俺達の飲み物を注文すると、木製のジョッキに入った麦酒を大きく煽り、それを飲み干して、テーブルに置いてから話し始める。

頼んだのは柑橘系の果実水だ。

アルコールは今の状況では俺が飲まないとわかっているのだろう。

「お主らと呼び出した手紙の件なのじゃが……本題に入る前に、お主らは小人族を知っておるか?」

「小人族って、大人になっても背の低い……」

「まあ、そうじゃの。実はあれにも色々と種族があるのじゃが、その中の一つに『ブーク族』というのがおる。知っておるか?」

少なくとも俺は知らない。

シーリアの方を向くと彼女は自信なさげだが、一応は知っているらしく、記憶のそこから思い出そうと眉を寄せながらなんとか答えた。

「え……と、確か、小さな犬の獣人……じゃなかったっけ?」

「さよう。彼等はヴェイス商国の西端の草原に住む、半分精霊の様な獣人じゃ。彼等には、あまり知られてはいないが、特殊な性質がある」

店のウェ이터が追加の肉料理を置き、頭を下げて席から離れていく。

ゼムドは店員が完全に遠のいたことを確認してから、話を続けた。

「ある条件を満たしたとき、羽が生えるのじゃ」

「ある条件？」

「うむ。一つは彼等の人口が増え過ぎたとき、もう一つは、彼らの集落に危機が迫った時。それは天災、戦争、病気と様々だそうじゃが、危険度が高いほど羽の色は鮮やかになる」

一日も早く。ゼムドの手紙による警告の理由は、その獣人の羽を見たからということか。ちらりとアリスの方を向くと眼があつたが、彼女は無表情だ。

俺達としては、天災よりも彼女の方が身近に迫る危機なのだが……。

「原因は？」

「わしにはわからん。だが、相当まずい事が迫っているようじゃな」

次の目的地候補である学術都市『ローファン』に向う為には西方の草原を抜けて行くルートが最も安全だ。その外は砂丘地帯を抜けるルート、南の山脈を超えるルート等、険しい道しかない。

だが、『ブーク族』がその草原に住んでいるのなら、他のルートを考えるべきだろうか。天災は人の力ではどうにもならない。

いや、この世界であればそうでもないのか。

「アリス、あんたは何か知らないの？」

「話す義理はない」

シリアが苛立った様子でアリスに詰め寄ったが、彼女は一言で話すことを拒否し、静かに黙り込む。

「ゼムド。カイル兄さんから今は命令を受けているそうだけど、何故アリスが？」

「わしが受けた命令は彼女の護衛じゃ。そして、彼女はジューダスではなく、カイルを通してリブレイスの『姫』からお主の監視の仕事を受けておる。目的は神に誓って殺害ではない」

「信じ難い話だね」

命を本気で狙ってきた相手だ。

そして、『呪い付き』であり、戦争の引き金を引こうとしたジューダスの部下でもある。

おいそれと信用できる訳がない。

だが、アリスはからかうように微笑んで肩を竦めた。

「私はこれ以上無いくらいの好意で貴方に接したつもりだけど」

「本気で言ってるのか？」

「本気よ？」

おそらくは協定の前、俺をリブレイスに勧誘した時のことを言っているのだろうが……俺はアリスの表情や仕草に注意し、意図を探る。

「君は『呪い付き』の主、ジューダスの部下なんだろう？」

「あら、貴方は『私達』に忠誠心なんてあると思っているの？」

思い切ってアリスにそう問い掛けるが、彼女は平然と笑った。

「今までは利害関係が一致していただけ。今は違う」

「監視をする方がアリスの利益になると？」

彼女はその通りと頷き、一度、飲み物に口を付ける。

「ゼムドの話、私には心当たりがある」

「なんじゃ、お主知っておったのか」

「断片的な情報しか私にもない。だけど、推測は出来る」

全員の視線がアリスに集中し、彼女が続きを話すのを待つ。しかし、彼女は話すつもりがないらしく、黙り込んでいた。

そんなアリスにゼムドは言い難そうに髭を触りながら声を掛ける。

「お主も二人と敵対したのじゃろう。拙僧も殺されても仕方がないことをした。命令で敵対しないとしても、彼等に何かせんといかんのじゃないか？」

ゼムドに促されるとアリスは考え込んでいたが、やがてこくりと頷く。

「そうね。『監視』も貴方と敵対しては難しい。私も誠意を持って、現状は敵ではないことを証明しましょう。私の推測は貴方達の安全のためにも大事なはず」

「恩着せがましいわね」

両肘をテーブルに付いて手を組み、顎を乗せてアリスは小さく嗤った。

勿体ぶった言い方にシériaは不快そうに顔をしかめたが、アリスはシériaを無視し、此方を見て「どうする？」と言うかのよう
に小首を傾げる。

アリスの推測が正しいかどうかは、後で考えればいい。

「話して欲しい」

俺が首肯してそう答えると、アリスは愉快そうに口の端を歪める。

「そうね。まず、この国が滅ぶのは確定している」

「なっ……！」

ゼムドが驚きの声を上げ、アリスの方を向く。

あまりにも簡単に彼女が言ったため、俺の方は反対に冷静に聞くことが出来ていた。

「国は滅ぶ。だけど、人はあまり死なない。特殊なこの国の制度のお陰」

この国では多くの税金を納める商人が評議員として、国政を動かしている。

つまりはリブレイスに協力的な商人が評議員の席を占めれば。

「既にジューダスは動いている。表の顔、大商人として『呪い付き』の知識を最大限に活かして。仮に長期的に見ても、恐らく止める事は不可能」

「長期的な方が仮に？」

「狂人が普通の手段を用いると思う？ どうすれば、一気にこの国を追い込める？」

ゼムドの元にある、羽の色が鮮やかになることで、天災を予測し

て逃げる獣人。

そして、このアリスの話。これまでのリブレイスの動き……。

「天災か戦争を人為的に引き起こして物価を混乱させる……？」

「私の推測よ。あいつならもつと頭のおかしいことを考えていても驚かないけれど」

俺の出した結論をアリスは否定しなかった。

三国協定を巡る騒動も一連の流れの内とするならば、成功も失敗も全て計算通りなのだろうか。リブレイスに裏側にいるらしい、ジューダスという男のことを考えると不気味なものしか感じない。

彼等の事を考え、困惑している俺にアリスは淡々と告げる。

「早くこの国から離れなさい。貴方が死ぬと私が困る」

光の無い瞳で真っ直ぐに俺を見詰め、彼女は口を閉じた。
どうやら本気で言っているらしい。

彼女が何を考えているのかわからないが、俺は苦笑いしながら頷く。

「そうさせてもらつよ」

若干の疲労を感じながら、俺達は用意された肉料理に手を付けずに席を立つ。

ゼムドは何も言わなかった。

第六話 食事の相手

ゼムドと話した酒場から出ると、俺はシールアと夜のヴェイス商国の街並みを楽しみながら、ゆっくりと歩いていた。

美味しそうな匂いや威勢のいい掛け声は街中に響いており、何処にこれほどの人が暮らしているのかと思うほどに、人々が舗装された通りを歩いている。

日は完全に暮れているのに、商売はこれからだと言わんがばかりの熱気が溢れていた。

すれ違う人にぶつかりそうになるせいで、シールアが肩に触れるくらいの距離を歩いており、少々気恥ずかしい。

彼女は窮屈そうに歩いている割に、表情はこの街に来てから一番明るかった。

「ゼムド、元気そうだったわね」

「彼の話は嘘ではなさそうかな」

嬉しそうに微笑むシールアに俺は苦笑を向ける。

アリスへのゼムドの対応を思い出すと、とてもではないが俺達に対する刺客への対応とは思えない。

「お節介なのよ。あいつは」

「アリスも戸惑っているみたいだったね」

「あの嫌そうな顔、クルスにも見せてあげたかったわ」

くすくすとシーリアは口を抑え、笑い声を漏らす。

二人で歩いたときに余程嫌な事を言われたのか、クルスはアリスを嫌っている……話の内容は教えてくれなかったが。

そんな風に雑談をしながら宿を目指して歩いていると、シーリアが鳥肉を焼いている屋台の前で足を止める。

何事かと彼女を見ると、視線が完全に肉に釘付けになり、尻尾がゆらゆらと揺れていた。

そう言えば夕食を食べていなかった。

狼らしく肉が好物な彼女は、店を出るときもゼムドが注文した美味しそうな肉料理を、名残惜しそうに見詰めていたし、お腹が空いているのかもしれない。

「シーリア、食べる？」

「わきゃっ！ ああ、いやその、な、何でもないわよ？」

慌てて否定する彼女を気にせず、俺は屋台の青年にお金を支払い、四人分購入する。

「おう、ありがとっ！ 包むからちょっと待ってくんな」

随分久しぶりに嗅ぐ香り、味付けは胡椒に近い香辛料のようだ。
この地方では、どこかで生産されているのかもしれない。

シリアはばつがわるそうな表情で苦笑いしていた。
子供っぽいことをしてしまったと思っているのだろう。

「もう、私がねだつたみたいじゃない」

「俺もお腹空いていたしね。クルス達も食べてないだろうから」

「あ……そうだった。間違いないわね」

拗ねる彼女に俺がそう説明すると、彼女は得心したように頷き、
いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「それなら、美味しそうなのをいっぱい買って帰りましょ！」

「あまり遅くなると怖いから、手早くね」

「はいはい、わかってるわよ。あいつらもお腹を空かせているだろうし、早く買わないとね。あ、あれどうかなっ？」

人通りの多い街中でフードを被り、種族を隠して忍んでいても、
好奇心と生命力に溢れた元気さは隠しようがないなあとしーリアに
腕を引っ張られながら俺は思う。

勿論、それは俺も楽しいし、悪いことではない。

「ほら、ケイト、ぼーっとしないっ！」

「わかったよ。痛いって！ 腕がもげるっ！」

急に年上ぶって前を歩くシーリアに苦笑いしながら、俺は街の通りに所狭しと出されている屋台で今日の夕食を買っていった。

『砂風亭』に戻る頃には、俺の両手は様々な料理が入った紙包みで塞がっていた。

この宿では食事は朝食しかでない。勿論有料である。
そのため、外で食事を購入し、持ち込んでも文句は言われない。

宿に戻ると、俺達は宿の主人に挨拶し、部屋のある二階へと上る。すると、部屋の扉が勢い良く開き、中からウルクが涙目で飛び出してきた。

「やっと、やっと帰ってきてくれたんすかつ！ 遅いっ！ 遅すぎるっすよ！」

「ちよ、なんなんだ！」

そのまま抱きつこうとしてくるウルクを足で牽制し、両手の料理を守る。

そんなウルクの頭を彼の背後から出てきたクルスが叩く。

余程痛かったのか、ウルクは酷い、酷いと呟きながら頭を抑えて座り込んでいるが……何が何やら事情がわからない。

俺が事情を聞こうと、クルスの方を見ると不機嫌そうにそっぱを向いていた。

「ウルクがつまらないことを言うから」

「謝ったじゃないすか！ うっ……猛獣と一緒にいるような気分だったっす」

「人間きが悪い」

立ち上がってウルクは抗議するが、クルス是我関せずで部屋に戻っていく。

何となくは事情は掴めた。きっと、ウルクがからかったのだろう。

「ウルク、食事買ってきたから、宿の主人から皿を借りてきて」

「おっ！ 丁度お腹空いてたんすよ！ さすがケイト。直ぐ行ってくるっす」

頭を抑えていたウルクだったが、俺が料理を見せるとシャキッと直ぐに立ち上がって、調子のいい笑顔を見せる。

「やっぱり食べてなかったわね」

階段を勢い良く駆け下りていくウルクの背中を見つめながら、シリアはくすくすと笑う。この分だと、クルスも相当お腹を空かせ

ているに違いない。

部屋に入るとクルスはベッドに腰掛けており、俺達を睨みつけている。

「ご機嫌斜めだ。」

「ごめん、遅くなって。ただいま」

「……おかえり」

クルスには何か葛藤のようなものがあつたらしいが、暫く思案した後、小さな溜息を吐くと普段通りの気配に戻っていた。許してくれる気になつたらしい。

「ゼムドは？」

「元気そうだったよ。嘘は吐いていないと思う」
「そう」

付き合いが浅かったとはいえ、彼女にとっては初めての冒険仲間だ。

強硬に反対していたとは言え、複雑な想いを抱えているのかもしれない。

「後は何故かアリスがいたよ。向こうも知らなかったらしくて、驚いていたけど」

「あの女は次こそ仕留める」

「害意はない……らしいけどね」
「嘘」

クルスはそう断言し、両手の指を組み合わせ、膝の上に置く。
普通に考えてクルスの言う通り、アリスを信じることは有り得ない。

だが、ゼムドが嘘を吐いていないとするならば、彼女の目的は何なんだろう。

それが俺にはわからない。

聖輝石には興味が無いと言っていたし、俺を狙う気もないようだ。
積極的に俺達に協力する気も無さそうだが。

それきり会話も無く、黙っていると直ぐに階段を軽快に上る音が
聞こえてくる。

もう戻ってきたようだ。

「ケイト！ 皿持ってきたっすよ！ さあさあ難しい話は食べながらやるっすよ！」

「そうだね。ウルクはクルスにどれくらい説明した？」

両手に大きな皿を持ったウルクは、俺の質問を受けるとぼつが悪
そうに苦笑いし、耳元で小声で話し掛けてくる。

「あーいや、すまないっす。怖くて無理！ 部屋の空気が滅茶苦茶

重かったんす。ケイトは何で平気なんすか……」

どうもウルクはクルスと上手く打ち解けられなかったらしい。

「クルスは照れ屋だし、人見知りするからね」
「いやいやいや」

何故か慌てたように首を横に振るウルクの肩を、何時の間にかフ
ード付きのローブを脱いだシーリアが叩き、彼から皿を取り上げな
がら笑う。

「まあ、なんでもいいじゃない。早く食事にしましょ。クルスもお
腹が空いたって言うてるわよ」
「言ってるない」

屋台の料理は決して高いものではないし、どちらかといえば雑な
ものだ。

味だけで言えば、間違いなくゼムドの店の方が良いはずである。

「おお！ ダラス鳥の香草焼きっすか！ いやー酒が欲しいっすね
！」

「肉ばかり……シーリア太る」
「や、野菜も買ったわよ？ ほら、この串焼きとか」
「それも半分肉だけだね。この野菜は何だろ」

それでも、今一緒に食事を取りたいのは彼等ではない。

俺達は飲み物と数々のこの国の食事を楽しみながら、今日の出来事や図書館で得た話などを遅くまで話し込んでいた。

第七話 異変の端初

「水臭いですね。ヴァルヌークにお越しなら、私を訪ねてくれれば宜しいものを」

「申し訳ありません。この国は直ぐに抜ける予定ですので、ご迷惑を掛けるわけには」

「ははは、命の恩人相手に迷惑などありませんよ。ケイト・アルテ
イア殿」

褐色の肌、蒼い瞳、肩まである波打った黒髪を持つ三十代辺りの若い商人、128人いるヴェイス商国の評議員の一人、エルドス・クレイトスは商館の客室で俺達に席を勧めると、機嫌良さ気に笑う。細身で体格的には恵まれていないが、洗練された仕草と自信に溢れた表情が印象的な男だ。

前日に条件として、武器の携帯を認めさせており、剣を彼から見える場所に立て掛けているが気にしている風もない。この辺りは流石、大商会の会長と言ったところか。

彼の後ろに控えている巨漢の護衛、ハルトの方は口を引き結んで直立しているが、彼はこちらを警戒しているようだ。目を閉じて能力を使用すると、武器を持った男が複数人隣室で待機しているのもわかる。当然だろう。

ゼムド達と話した翌朝、俺達はエルドスの秘書、リイザの案内でヴァルヌークの東部にあるクレイトス商会の本部へと足を運んでい

た。

数代の間、このヴェイス商国で有数の商会として活動しているだけはある、商会の本部は大貴族の館を思わせる巨大さで、内部では大勢の従業員が働いているようだ。

「これだけの商会を経営されておられると、お忙しいのでは？」

「はは、商会を私は親からただ受け継いだけですからね。やることがないのです」

俺の言葉の意図は伝わっているだろうが、エルドスは余裕の笑みを崩さずに言葉を返す。

『ただ受け継いだけ』とは恐らく微塵も考えていないに違いない。

彼と彼の商会には黒い噂が付き纏っている。強引に商会の会長の座を奪い、彼の代で大きく勢力を拡大した。その背後では……と。

挨拶と簡単なやり取りの後、秘書のリイザが人数分の飲物を用意し、頭を下げて退室する。毒やそれに類する物は入っていないようだ。

俺は三人に目配せして頷き、飲んでも大丈夫だということを示すため、出された物に口を付ける。

「改めてケイト殿には協定を無事に結ばせて頂いた事に礼を言います」

「恐縮です。しかし、私も仕事で行なったことです」

「冒険者には無学な者も多いのですが、ケイト殿は違つそうですね。それに、あのラキシス・ゲイルスタッドの娘も仲間におられる」

感心したように、エルドスは頷いた。

隣に座るシーリアは一瞬だけ反応したが、小さく息を吐き、俺の太腿を軽く叩く。任せるとのことだろう。

『あの』というのは、どんな出来事を指しているのか。

この国でもシーリアの親でもあるラキシスさんの知名度は高いらしい。

「私の部下にも見習って欲しいものです。腕は良いのですが、不向きな仕事が多すぎる」

「私達も不慣れな仕事は出来ませんよ」

芝居が掛かったようにエルドスは大袈裟に嘆く。

大体の話の流れは理解出来た。露骨過ぎる。

しばらく、こうした探りあいの会話が続いていく。

彼の望みは二つ。俺達を部下に引き入れたいということ。

そしてもう一つは、何かの仕事をさせたいということのようだ。

「残念ですね。貴方が我が商会に参加して頂けるなら、相応の待遇をさせて頂くのですが」

「申し訳ありません」

「いえ、仕方がありません」

前者はどうやら強く望んでいるわけではないらしい。初めから難しいとの考えか。

エールの貴族からも誘いを受けている事を伝え、そちらも目的の為に断らせて貰ったことを伝えるとあっさりと引いてくれた。

しかし、エルドスは「ですが」と続ける。ここからが本題か。

「実はケイト殿にこうしたお誘いを掛けているのは、勿論、優秀であるからなのですが、もう一つ事情があるのです。ケイト殿は『ガラル火山』をご存知ですか？」

「ヴェイス商国東部の火山……でしたか？」

先日、図書館でヴェイス商国の地理を調べていた時に見た気がする。南部の山脈は火山などもなく、良質の鉱山があるらしいが、東部の山脈には火山がある。

但し、噴火した記録は無く、安定した休火山であると考えられているはずだ。

「よくご存知で。最近、その付近で異常が幾つも報告されています。ヴェイス商国としては対策を立てたいと考えているのですが、恥ずかしながら派閥争いが酷く、時間が掛かるのです」
「なるほど」

それで、解決して来いということだろうか。しかし、

「私達の手には余りますよ」

「解決は難しいでしょう。また、それはヴェイス商国の責任で行わねばなりません。お願いしたいのは今回の事態の正確な調査です」

テーブルの上で両手の指を握め、真剣な表情でエルドスは説明を続ける。

「評議会が纏まらない理由には、異変に対する危機感の薄さもあるでしょう。正しい情報があれば国益の為に手早く動けます。評議会は優秀ですから」

「国内の冒険者……この国では探索者でしたか。そちらに依頼すれば良いのでは。そうでなくとも、ヴェイス商国の学院の研究者を貴方の部下で護衛すればいい」

この国の探索者の中には俺達より優秀な者は山程いるだろう。研究者を護衛すれば知識面でも問題がなく、俺達が調査するより結果は遙かに勝っているはずだ。

わざわざ俺達に依頼する理由は無い。国益に関わる程のものなら尚更だ。

だがエルドスはその答えを聞いても動揺せず、予測していたかのように微笑む。

「国民に異変があることを今は伝えるわけにはいきません。国内の者に依頼すれば、何処から漏れるか……それは困るのです。ケイト殿の目的は政治と関わりがない。安心できます」
「気が変わるかもしれませんよ」

つまりは、国民に知られないよう原因を探り、その資料を持つて評議会で優位に立つ。と、言った所か。だが、それだけでは理由は薄い気がする。

そして、エルドスは俺の目的を知っているらしい。
情報源は何処か。

エールの役人から聞いたか、それともリブレイスか。

ふとエルドスを見ると、失敗するとは微塵も考えていない、自信に満ちた笑みを浮かべていた。その表情で俺は心を決める。

「まあ、いいでしょう。お引き受けします」
「おお！ ケイト殿、有難う御座います」

エルドスは一瞬、見下すように口の端を歪めた後、嬉しそうに笑った。

恐らく次は脅迫でもするつもりだったのだろう。

絶対に俺達にこの仕事をさせる。
彼にとっては初めから決定事項なのだ。

そして、俺達でなければ仕事を完遂出来ないと考えている。
もしくは、俺達が調査することで、何かしらの利益が存在しているところか。

「但し条件があります」

「報酬面でしたら可能な限り、支払わせて頂きますとも」

「それもあるのですが、私が仕事を引き受けるのはこの一度だけに
して頂きたい。旅の目的を完遂するために、本来は一日も早くこの
国を出たいのです」

これでどう相手が出るのか……俺はエルドスの表情を伺いながら、
金細工が施された硝子製のコップに入れられた水を飲み干す。

「なるほど……優秀な方とのお付き合いが出来なくなるのは残念で
すが、わかりました。その時には出入国証明書を用意しましょう。
役に立つはずです。他には何かありますか？」

特に未練はないと言った雰囲気。

要するに、この依頼だけに何かがある……そういうことが。
間違いなく面倒事だろうが。

俺は小さく溜息を吐きながら続ける。

「調査という条件では曖昧で達成の証明が難しいので、その辺りの
説明を」

「わかりました。詳しい資料は秘書に持たせます。質問もそちらに」
「最後に、私達はこの国にまだ不慣れ。下準備を図書館で行いたい。
だが、この手の作業を得意とするシーリアは図書館に入れません」
「確かに。私の名で立ち入らせるように命令をさせてもらいましょ
う」

エルドスと条件面に付いて話し合いを行い、秘書から詳細な説明を
受けると俺達はクレイトス商会の本部を後にした。
結局、数時間近くはあの本部にいた事になる。

昼食を取るために歩いていると、ウルクが腑に落ちないといった
様子で俺を見た。

「ケイトさん何で引き受けたんすか？」

「そうだね。脅迫されそうだったのもあるけど、それより大きい理
由はあるよ」

「ほーどんなの何すか？」

「エルドスは異変が起こっているのは東の火山って言ってたよね」

ここまで話すと、気付いたらしいクルスが頷く。

「昨日の話と違う」

褒めて褒めてと言わんがばかりに、こちらを見上げるクルスに笑
顔で「正解」と答え、俺は続きを説明する。

「ゼムドは危険を知らせてきたのは、西の草原に住む小人族だと言っていた。じゃあ、その中間であるこの街は？」

「あ、そかつ！ 実は結構まづかつたりする？」

「かもしれない。無茶をする気はないし、エルドスの思惑は知らないけれど」

シーリアも気付いたらしい。俺達にはこの街に義理はないが……。だけど、俺達の調査結果次第では被害を多少は抑えられるかもしれない。

杞憂ならばそれはそれで報酬を貰って終わりだ。

「ま、むかつく国だけど守ってやるのも悪くないわね」

「うん。見返す」

俄然やる気を見せている女性陣を見ながら、俺は苦笑する。

エルドスの思惑が見えそうで見えない、そんな不安が俺には残っていた。

確かに彼は優秀だろう。だが、国民の為、などと本当に考えているのだろうか。

「浮かない顔してるっすね」

「出来れば受けたくなかったからね。準備と下調べはしっかりしよ

う

「ま、世の中理不尽な事もあるっすよ。気にしない気にしない」

能天気になうウルクに、俺は左手で頭を掻きながら苦笑しつつも礼を言う。

だが、心は中々晴れない。

俺は漠然とした不安を抱えながら、歩き続けていた。

第八話 見えぬ異変

ヴェイス商国の評議員、エルドスに与えられた調査期間は二月。国としての依頼ではなく、彼個人からの依頼となる。

評議員からの紹介ということもあり、ヴァルヌークの図書館でもシーリアが止められることはなかった。彼女の入館を拒否した役人がそこにいなかったのは、エルドスの差し金だろうか。

（余計なことを）

そう思う。この件に関しては、エルドスの秘書であるリイザに、それとなく伝えておいた。ウルクもシーリアも気付いてはいなかったが、国の定めた職務を果たしたために仕事を失わせてしまったのは、寝つきが悪くなりそうだ。

結局、問題の火山周辺の情報だけでなく、ラキシスさんの故郷である『ザーンベルグ大森林』の場所を特定する必要があったため、俺達は図書館での調査に三日間掛けた。

この世界では情報を得るためには、人から話を聞くか書籍から調べなくてはならない。そのため、学院出身であり、書籍調査に慣れたシーリアの効率は俺とウルクの比ではなかった。

「クルス。これとこれ片付けて。場所は『地理　カー27689』

『歴史　ハー14784』ね」

「了解……眠い」

書籍調査では全く役に立たないクルスは、次から次へと本を調べていくシーリアの隣に座って熟睡し、彼女が読み終わると目を擦りながら片付けるといった風に手伝っていた。

初めのうちはクルスも適当な本を読んでいたのだが、飽きたらしい。

俺とウルクは逆にシーリアから必要な本を言われて探す役目だ。彼女のこうした学者としての姿を初めて見るウルクは、

「いやー、シーリアさんは凄い。普段からは想像できないすね」

と、褒めているのかどうなのかわからない口振りで感心していた。

一連の調査で判明したことは様々だ。書籍での調査も万能ではなく、得られる情報は玉石混交であり、そこからどう正しい情報を取捨していくかが問題となるのである。

「ラキシス様から私が聞いた思い出話なんかも含めて考えると、この国じゃないわね」

膨大な書籍数を誇る、ヴァルヌークの図書館でもラキシスさんの故郷に関する記述は全くなかったらしく、多少困惑を見せつつもシリアはそう断定した。

彼女がそう判断した最大の理由はこの国の気候。乾燥地域の多いこの国は森が少なめで、エルフが住むような大森林は存在していないと考えたらしい。

養女である彼女はラキシスさんとの付き合いは一番長いし、彼女の判断の方が正しい可能性が高いだろぅと考え、俺達は当面の目的である火山の調査に集中することにしたのである。

そして、ガラル火山の周辺地域一帯の情報を集めると、俺達は若い商人達の護衛にまぎれてヴァルヌークを発ち、東にあるヴェイス商国第二の都市である迷宮都市『シエルバ』へと向うことになった。

迷宮都市という名の通り、この街には以前いたカイルルと同じく迷宮がある。この国のものはカイルルで目立っていた神殿のような建物はなく、迷宮への入口だけが存在し、ヴェイス商国がそのうえに独自に建物を立てているそうだ。

当然、特産物は魔力石となるのだが、この街で取引されているのは魔力石だけではない。シエルバはこの国では最も大きいリダ川という河川と隣接しており、その恩恵を受けている対岸の穀倉地帯から穀物が、南側、上流に広がる森林からは木材が運ばれている。

「何だか若い人間ばかりな気がするわね」

「そうすね。男ばかりっす。女の子が……潤いが……商人も男ばっかだし。うっ……」

シエルバの混雑する通りを、人に当たらないように歩きながらシリアがこの街の感想を呟き、ウルクが嘆きながらそれに答える。彼女達の言葉通り、この街の大通りを歩く住人達は男性、しかも若い者が多い。荷を運ぶ商人となると、ある程度年配の者も歩いているが。

商人達の護衛に俺達は混ざったが、この国の若い商人達はそれなりに戦う事が出来た。その理由がこの街にある。

「あいつら、結構やる。鬱陶しいけど」
「たしかにね。あれは大変だったよ」

苦虫を噛み潰したような表情のクルスに俺は苦笑しながら同意した。

クルスのいう『あいつら』とは護衛した若い商人達のことだ。獣人であるシリアに絡む者は少なかったが、商人達より若いクルスにはナンパが絶えなかった。

彼女はそれに対し、自分に勝てればという条件を出し、全員を叩きのめしていたが。彼等も本気ではなく、若いなりの楽しみ方だったのだろう。

その後、俺に対して『女がいる奴を殴る祭』とか騒ぎ出して、楽しそうに挑んで来たのには辟易したが。周りも拍手喝采。ウルクが一番煽っていたのは気のせいではないだろう。

まあ、そのお陰で、俺達も彼等と仲良くなり様々な話を交わすことが出来た、

この国で自由に生きるには商人になるしかない。だが、誰しもが資産を生まれながら持っているわけではない。ならばどうするか。

何とか剣を一本買い、商売の元手を稼ぐために若者達は迷宮に潜るのだ。そして、様々な物が集積しているこの街で荷を買い、他の街で売り捌く。

そのためこの街は別名『始まりの街』とも呼ばれていた。

街に付くと、俺達はクレイトス商会の支部に挨拶し、仕事に関わる書類を手渡す。こうすることで、俺達が報告する場所はこの街となり、一々一週間以上時間の掛かるヴァルヌークまで戻らずに済むようになる。

物と情報が集まるこの街に拠点を置くことで、調査を行いやすくなったのだ。これもシーリアによる提案だった。

彼女は写真などない文章のみの地理の本から様々な情報を読み取り、メモ帳にヴェイス商国の大まかな地図を作成している。当たり前前の技術だというように楽しそうに彼女はそれを説明し、俺達を驚かしていた。

「この街に近付いてから鳴っている地鳴りは『火竜の唸り』といって、これそのものは昔からあるみたい。特に異常というわけではないの」

街で取った宿で、俺達はシーリアの作ったメモ帳を囲みながら彼女の説明を受ける。活躍の場を得て自信を完全に取り戻したのか、

ローブを脱ぎ、薄めの普段着姿に戻った彼女の表情は明るい。

俺自身これ程とは考えていなかったので、感心すること頻りだ。

逆にクルスは釈然といたかない表情で、俺の隣で服を指で摘みながら座っている。

「ただ、唸りの回数が増えているって感じなのよね？」

「みたいっす。でも住人は異変だと考えている様子は一切ないっすね」

腕を組んでウルクは唸る。彼は酒場などで話を聞き込んで回ってくれたのだが、不自然なくらい普段通りで、「火竜様の機嫌が悪いだけさ」と、笑われたらしい。

「おかしいすね。エルドス評議員の口振りだと、かなり危なそうな感じだったっす」

「ウルクもそう思うか」

辻褄があわない。普段通りであれば異変の報告などはしないだろう。挨拶に行ったクレイトス商会の支部ですら、「何故こんな調査を？」と納得いかない様子だったのだ。

「あいつ、嘘は言っていない」

こういつ話し合いだと、黙り込んでしまうことが多いクルスが口を開く。珍しい出来事にまじまじと、俺がクルスを見つめると彼女はそっぽを向いた。

「嘘でなければ、何だと思う？」
「本当？」

更にクルスに聞いてみると、彼女はちゃんと此方を向いて答え、自信無さ気に首を傾げる。俺達のやり取りを聞いていたウルクは、神妙な表情で「若しくは」と、人差し指を立てて続けた。

「全部を話している訳じゃないってところっすかね」
「なるほどね。そういうこともあるのか」

ウルクは神官としてだけでなく、孤児達の仕事の世話まで携わっていたらしく、世俗的な知識は豊富に持っている。若い商人達から護衛の仕事を上手く掴んでいるのも彼だ。

巫山戯ているばかりではなく、俺の得意ではない人付き合いに長けており、意外なほどに頼りになる面も持っている。

そんな彼も、今回の件に関しては胡散臭いと感じているようだった。

だが、考えても仮定の答えしか出ない問題でもある。俺はエルドスの思惑は一旦置き、シーリアの調べた結果を先に確認することにした。聞くべきことはまだまだ沢山あるのだ。

「それでシーリア、実際のところ『火竜の唸り』の正体は？」

「実際に火竜がいる、炎の上位精霊の声、いろんな説はあるんだけど……」

板張りの床に置かれているメモに書かれた地図のガラル火山を指で指し、ツーツと現在いるシエルバまで滑らせる。続けてヴァルヌークまで指を滑らせた。こちらは距離を俺達に理解しやすく認識させるためだろう。

「この距離。声を届かせるのは不可能ね」

ガラル火山から、現在俺達がいるシエルバまではかなりの距離が存在していた。

上位精霊はどれ程の能力を持つのかわからないため判断はできないが、火竜などの生物であれば声を届かせるのは難しいだろう。地響きを起こすほどであれば尚更。

「なんらかの自然現象だと私は思う」

膝を床に突いて身体を乗り出すように床に置いたメモ帳の地図を覗き込みながら、シーリアはそう結論づけた。俺は納得しながらも、ふとクルスとは反対側に座っているウルクの方を確認すると、彼の視線はシーリアの胸元に釘付けになっていた。

俺は頭を掻いて彼の背中を軽く叩く。

「ウルク」

「えっ！ あはは！ な、なんすかケイト」

「気持ちはいらないでもないけど」

小声で囁いて首を横に振る。ウルクはそれで姿勢を正し、座り直した。

よほど集中しているのか、シーリアが自分の体勢に気付く様子はない。食い入るようにメモ帳を捲り、ああでもない、こうでもない、と、納得する結論を探し続けている。

元々暑い地域である上に夏に近付いており、獣人であることを隠すローブを脱いで、薄着になっている今、スタイルのいい彼女がそんな姿勢を取ればどうなるかは自明である。

俺としても視線を外す他、方法がない。ウルクと二人して明後日の方向を向きながら、彼女の思考が纏まるのをまっていると、クルスに太腿を抓られた。

「ケイト、えっち」

「う……」

言い訳のしようもない。俺は苦笑いすると、不機嫌そうなクルスに謝罪した。だが、彼女は拗ねたままだ。これは、機嫌が治るまでは時間が掛かるかもしれない。

「なにになに、どうしたの？」

ようやく此方の様子に気が付いたシーリアが、きよんとして俺達を見渡す。

俺とウルクは慌てて首を横に振り、誤魔化した。

自分なりの答えが出たのか、彼女は身体を起こすと好奇心に溢れた笑みを浮かべながら力強く頷く。

「実際に行ってみるしかないわね。この火山、休火山と呼ばれているけど、実際そうじゃないみたいだし。変な火山なのよ」

「どういうこと？」

「調べている時にたった一冊だけど、700年以上前に噴火したという記述を見付けたの。この噴火は物凄いもので、『数年間もの間、青空を見ることが出来なかった』という程のものだったらしいわ。にも拘らず、それ以降は一切何も起こっていない」

それだけの噴火を起こしたにも関わらず、現在では休火山として扱われている。

一般的な伝承にも残っていない。確かに腑に落ちない話だ。

その本が間違っているのか……若しくは意図的に抹消されたのか。

「そういうことなら準備して、更に東へ……かな？」

「しっかり準備しないとね」

満足したようにシーリアは笑って同意する。ウルクとクルスも頷いた。

方針は決まれば、後は実際に何を必要かを検討していくだけだ。俺はそのための準備の話し合いに切り替えようと口を開こうとしたが、先に思い出したように声を上げたウルクに遮られた。

「そうだ！ 二日くらいはゆっくりするっすよね？ ね？」

「何かあるの？」

「実は行きたい場所があるんすよ。有名な場所なんすけど」

「あ、私も私も！」

にんまりと笑いながら得意げに人差し指を立てるウルクに、シーリアが元気に手を上げて同調する。シーリアはウルクの行きたい場所に心当たりがあるらしい。

「それは……カジノっす！ 世界的に有名なデカイのがあるんす！」

「一回は見てみたいわよねっ！ 一攫千金！」

楽しそうな二人に俺は言葉を失った。確かにカジノもこの街の特色を為すものであり、有名ではあるのだが、そこに行くことは初めから考慮していなかったのである。

「駄目。地道が一番」

俺に代わって、二人を止めたのはクルスだった。

彼女は武芸は天才だが、地道に積み上げるタイプで博打はしない。俺も賭事をしないので、無意識のうちに幼い彼女にそういう考え方を植えてしまったのだろうか。

「どうせ、無一文になって泣き付く」

薄らと馬鹿にするようにクルスは微笑み、そう続けた。

思わず頭を抱えそうになるが、確かにこの二人の性格だとありそうで怖い。

「やってみなきゃわかんないでしょ」

「そうっすよ！ 横暴っす！」

「やらなくてもわかる」

言い合いを始めてしまった三人を見て、俺は今すぐ話を続けることを諦めた。

時間にはまだ余裕がある。これも彼等なりの息抜きなのだろう。

俺はため息を吐くと、夢中になっている彼等を放置して、全員分の飲物を用意するために席を立った。

第九話 空飛ぶ何か

「いやー予想外だったすね」

「本当に不快な国ね。何よあの態度！」

「いや、今回ばかりは仕方が無いんじゃない？」

シエルバの東を流れるリダ川には橋がない。そのため、対岸に行く為には船の渡しを使うのだが、三十分近く掛かるその船上で、ウルクは神妙な顔で腕を組み、シーリアは怒っていた。

クルスはそんな二人を見て、呆れる様に溜息を吐いている。

「年齢制限じゃあ仕方がないよ」

結局、一度はカジノも見ていこうと、俺達はそこまで足を運んだのだが、黒服から年齢制限があることを告げられ、どう見ても若すぎる俺とクルスのせいで入れなかったのだ。

「本当に惜しいっす。ケイトの能力で荒稼ぎ出来ると思ってたのにっ！」

本気で残念そうに握った拳を震わせながら、力説するウルクには当然ながら誰も同調しない。そんなことを考えてたのか……と俺は呆

れ、長く息を吐いた。

「あんた何を考えているのよ」

「ウルク、沈む？」

「ふ、船の上で暴れちゃ駄目っすよ？ ああっ！ 首絞めないで！
冗談っうぐっ！」

彼女達が楽しそうに怒っている間も、船はゆったりと進んでいく。リダ川はエーリディ湖に注ぐ川で、どちらかというと流れが早い。そこで、船頭は下流に流されないように舳先を上流側に半分ほど向け、長い杖で底を突きながら進んでいるのである。周囲には似たような事をしている船も多い。

面白いものだと思う。エーリディ湖では、レイクホエールが船の足となっていたが、川では昔の日本を思わせる、帆のない小さな船で渡しが行われている。

たまに大きめの船が使われているが、それは様々な商会の船だそう。こちらは、川の流れを利用して、目的地より上流の場所から出発し、楷を漕いで移動しているようである。

「ケイト、何描いてるの？」

「日記に絵も付けようかと思ってね」

「代わりに描くっ」

胡座を掻いて絵を書いている俺を隣から覗き込んで来たクルスが、

嬉しそうに俺から日記とペンを奪っていった。絵は数段彼女の方が上手い為、俺は苦笑いしながらも任せる事にし、俺は帽子代わりに白い布を被り、クルスの隣で座ってゆっくりと行き来の多い川の様子を眺める。

受けたくなかった依頼ではあるが、世界を見てまわるという俺の元来の旅の目的としては、方向性を外れていない。皮肉なことだが。

対岸の渡し場に辿り着くと、周囲には倉庫らしき建物や商会の建物、賑やかな市が並んでおり、今までいたシエルバとはまた違った雰囲気の間が広がっていた。

「ととつ！ 危ない。それにしてもこっちは普通の田舎町みたいね」
「シーリア、大丈夫？」

船に酔ったのか顔が少し青ざめているシーリアは、船から降りようとしてふらついて転けかけ、慌てて体勢を整えながら、新しく着いた場所の感想をぼつりと漏らす。

確かに川を挟んでいるが、同じ名称を持つ街で、ここまで違うのは面白いことだと思う。

川を渡る前のシエルバは成功を目指すぎらつた若者が多く、落ち着かない印象だったがこちらはどちらかというと活気には溢れているが長閑だ。

広めの道を歩いている住人や商人達も穏やかで、伸び伸びとしている様子が伺えた。

穀物を扱えるということは一人前の商人となったということ在意

味している。案外命を賭けて原資を稼ぐ必要がなくなった者達が多いことが理由なのかもしれない。

船を待つための大雑把に作られた木製の長椅子に座り、シリアの体調が戻るまで待っている、その間に聞き込みをしてくれたウルクが苦笑いしながら戻ってきた。

「もう少し調べないとわかんないすけど、やっぱり反応は同じすね」「ご苦労様。異変とは感じていないか。ま、この様子じゃそうかもね」

「様子と言えば、穀物の買い手が多くて、値が上がってるのはわかったすよ」

「それでこの活気か」

ウルクが戻ると俺達は立ち上がり、市場に向う。その道すがら、俺は彼と並んで歩き、仕入れた商人達の話聞いていた。

穀物の集積地点でもあるこの場所では穀物商が多い。今年の作物の収穫はこれからだから、今売れているのは倉庫に保存されている昨年の収穫物だろう。

「穀物の買い手から話を聞けばいいんだけど、どうかな？」

「儲けの種を聞き出すのは骨が折れそうっすね」

両手を広げて肩を竦め、ウルクは首をやれやれと横に振った。推測だけで素直に考えるなら、ゼムド達と同じように危険を知らせる羽を持つ小人、『ブーク族』の話を知ったりブレイスに関わる商人だろう。

災害が起こり、不作になれば穀物の価格は跳ね上がるのだから。

だが、何事も確実とは言えないものである。

「なかなか難しいな。やはり火山の調査からかな。本来の仕事だし」
「そつすね。でも、チャンスがあれば聞き込みしてみるつすよ。あ、報酬はシーリアさんとデートで！ 全力で働くつすよお！」
「本人と交渉してくれ」

にししつとウルクは笑い、「了解」と調子よさそうに親指を立てるが、シーリアの「死んでも嫌」との即答に、彼はわざとらしくがつくりと肩を落とした。まあ、本気ではないんだろう。俺に小声で「高めの葡萄酒一杯で」と、耳打ちし、俺も笑って頷いた。
そんな俺達の様子を黙って見ていたクルスは、何かあるのか俺の服を引っ張っている。

「どうした？」

「ん……あ……う、うん、あいつらいる？」

不安気にクルスはぽつりと呟く。俺は首を傾げ、立ち止まってクルスを見たが、彼女はふいつとそっぽを向いた。何だろう。

『あいつら』という相手には一応心当たりがあったため、目を閉じて能力を使用する。

「能力の範囲内にはいないね。そのうち来るだろうけど」

「そう。ならいい」

クルスはそれを確認すると納得したのか服を離し、黙って歩きだした。

ゼムドとアリスはシエルバに来てから、川の反対側では確認している。俺達を見張るという役目らしいので、それもち当然かもしれないが、付かず離れず追い掛けているらしい。

「それじゃ買出しっすかね」

「うん。俺とクルスは山も慣れてるから、用意はこちらで揃えよう」
「ん」

どことなく嬉しそうにクルスが頷いたその時だった。

「おおおおいつ！ 誰か捕まえてくれっ！」

遠くから聞こえる野太い叫び声。声と同時に飛んでくる空を飛ぶ何やら黒い物体。

「ふはは！ 愚か者めっ……むぎゅー！」
「ん」

隣を歩いているクルスが高速で飛んでいるそれを無造作に掴み、

俺に渡す。

「服を着たヨークー？」

「ヨークーって何？」

俺の手の中で目を回す、ふわふわの毛むくじやらの黒い小型犬を見て、俺は思わず呟く。聞き慣れない単語にクルスは首を傾げ、ウルクとシーリアも何事かと周りに集まった。

逃げてきたのはこれだろうか。喋っていた気がするのだが。

呆然としていると、空飛ぶ犬(?)は正気に戻ったのか俺の腕の中で勢い良く顔を上げた。よく見ると背中には羽が付いている。だが羽は身体から離れていて、どういう構造なのかぱっと見ではよくわからない。

「貴様っ！ いきなり何するか！」

「申し訳ない」

怒っている様子だった為、何と無く俺は反射的に謝ってしまったが、クルスは先程と同じような無造作な手付きで、その犬(?)の頭を掴んだ。

「悪いのはそっち。ぶつかったら怪我する」

「むむ……あ、いや。はい……すみません。痛いです……」

「なにそれ。犬っすか？」

ぶるぶる震えている何かをウルクは犬と評した。やはり犬にしか見えないようだ。だが、犬と呼ばれた方の震えはその言葉で止まり、ウルクの方に怒りの表情を見せる。

「犬ではないっ！ 誇り高き狼であるっ！」

俺の腕の上に二本の足で器用に立ち、渋い声の彼（？）は胸を反らせてそう宣言した。シールアが微妙な表情な理由は俺にはなんとなくわかる。懐かしいやり取りだと、少し吹き出しそうになった。彼女は目を細めながら犬（？）を色んな角度から観察する。

「特徴から考えて多分……」

「見つけたぞっ！ はあっ、はあっ！ 素早しっこい犬だ」

シールアは狼（？）の正体に思い当たったらしく、説明しようとしたがそのまえに俺達の前まで三人組の男達が走ってきた。

先程の叫び声の男達だろう。一人は太り気味の商人。残り二人は若い、雇われた者達だろうか。三人は息を整えると、俺の腕の中にいる狼を奪おうとしたがクルスが邪魔をした。

「何？」

冷めた視線を向けるクルスに、お供の二人が腰を低くしながら愛想笑いを浮かべる。

「い、いやね。お嬢さん、そいつはうちの売り物でして」

「そうそう。手違いで逃げ出したんですよ。返してもらえませんかね？」

「胡散臭い。駄目」

「そんなことされちゃお嬢さんを衛視に突き出さなきゃいけない。困るだろ？」

若い二人は必死に頭を下げながらクルスに頼み込む。彼女は少しだけ困ったように此方を向いた。俺は頷いて前に出て、責任者らしい太り気味の男に笑い掛ける。

「売り物ということは、彼が貴方の物である証拠はあるのですか？ 契約書は？」

この国での契約書の重みは、ピアース王国の比ではない。商人が重きをする国だからだろうか。俺がそう男に問い掛けると彼は、温和に微笑んだ。

「ははあ。若いのにすっかりしてなさる。なるほど、しかし、それは魔物。つまりは無主物です。ならば、一番に取得した私に所有権はあるのです。ご理解頂けましたかな？」

「ふむ。彼が魔物であるから、所有権は貴方にある。そういうこと

ですか」

「その通り。こちらに引き渡して頂きたい。もちろんお礼はします」

腕の中の犬(?)は「誰が魔物だ!」と怒鳴り声を上げている。さて、どう答えるかと俺は悩んでいたが、代わりに答えてくれたのはシーリアだった。

「それは魔物じゃないわよ。『ブーク族』という立派な獣人。契約も無しに売り捌けば、法律上まずいんじゃないの?」

三人組の男は一瞬だけ苦い表情になる。彼等も知っていたのかもしれない。

そうなれば彼等も立派な『人攫い』だ。

「魔物でなければ所有権は貴方には無いですね」

「いや……そうだ! 魔物ではないという証拠はない! 早く引き渡せ。私は急いでいるんだ!」

「お断りします」

きつぱりと断ると、若い男二人は睨みながら近づいて来た為、腕が塞がっている俺は後ろへと飛び下がり、クルスに視線を送る。

彼女は俺を庇うように前に立とうとしたが、ウルクに止められた。

彼は太り気味の男に近付き、馴れ馴れしく肩を叩きながら二、三言話すと、太り気味の男の顔色が変わる。

「いやいや、街中で喧嘩は良くないですよ。ね？」

「むっ！ むむ、仕方がないな。お前達、引け。仕方がない」

そして三人は俺達の前から逃げるように去って行く。そんな彼らにウルクは満足そうな表情で手をひらひら振っていた。

「ウルク、何をしたの？」

「ちよこつとクレイトス商会の紋章を見せただけっすよ。どうせ利用されてるんだし、こつちもこれくらい利用してやらないと腹立っじゃないっすか」

明るく笑うウルクに、俺も笑いながら成る程、と頷く。しかし、クルスは何か納得がいかなかったらしく、恨めしそうな表情でウルクを睨んでいた。

「いやはや、助けられたか。少年、感謝するぞ」

「問題は君だね。何がなんだかわからないけど、説明して欲しい」

態度の大きな二足歩行の犬(?)を見て、俺は大きくため息を吐く。鮮やかな虹色の羽を持つ『ブーク族』の彼は腕の中で、ゆつたりと寛ぎながら笑っていた。

第十話 災厄を宿す者

商人を護衛しながら、整備された道を歩いてきたこれまでの旅路とは異なり、次の移動の際には相応の準備が必要となる。そのための準備、そしてウルクに聞き込みをしてもらうために、出発は明日にすることとし、俺達は昼食がてら『プーク族』の彼から事情を聞いた。

彼等は個人名を持たないらしく、彼もまた「只のプーク族」らしい。

「どんな事が起きるのか楽しそうではないか」

肉球の付いた手で、器用に縫い針を使って肉を美味しそうに頬張りながら、彼は笑った。

植物から生気を分けて貰う事が出来る彼等は、飢える事はない。また、危機に陥っても羽が生えるため、簡単に逃げる事が出来る。

虹色の羽は俺の能力で『視た』ところ、小さな風の精霊が集まって出来ているようだ。背中にはくつついておらず、宙を浮いている。彼曰く、この色合いは『最大の危険』を示しているらしい。

そのため、彼の一族の殆どは他の集落を目指して、この国から飛び去ったらしい。

しかし、何人かの変り者は残り、『リブレイス』に対する義理を

果たした後は天災の結果を見届けることにした、というのが彼の説明だった。

彼等にとつてはこの国も人間も、どうでもいいことなのだ。ただ、享樂の為にここにいる。

余りに考え方や倫理観が異なっているが、それは人間社会と殆ど関わない彼等なりの考え方なのだろう。非難する気にはあまりならなかった。

売られそうになっていた理由に関しては、

「恐ろしい罠であつた。皿の上に肉が置かれていたのだ。私がそれを食べようと近付いた瞬間、籠が落ちてきてな。隙を見て逃げ出したが、奴等の智謀は恐るべきものであつた」

と、偉そうに胸を反らしながら何度も深々と頷いていた。

あまり深い考えのある種族ではないのかもしれない。

「あのケダモノどうする？」

「さて。どうするかな」

隣を歩くクルスの問い掛けに、俺は同じように疑問で返す。

食事の後、俺はウルクとシーリアの二人と別行動を取り、クルスと山を調査するための準備を行うため、様々な店を巡っていた。

シーリアはどちらに同行しても良かったのだが、クルスをじっと見た後に少し考える素振りを見せて一つ頷くと、

「私はウルクのやり方を学ばせてもらうことにするわ」

と、暖かみのある笑みをクルスに向け、空飛ぶ犬を掴まえて一緒にウルクに付いて行っている。

「害はなさそうだけどね」

「あいつ、急に此方に曲がって飛んできた」

「本当に？」

クルスはこくりと頷く。

彼女の言葉が本当なら偶然此方に来た訳ではなく、『俺達』の方へと飛んできた……そういうことか。俺には全然軌道が見えなかったが、彼女の目は容易にそれを捉えていたのだろう。

「後で本人に聞いてみよう。良く見てたね」

「うん」

生返事を返し、クルスは足を止め、隣を歩く俺を見上げた。いつの間に身長に差が付いたのだろう。一年前は変わらなかった彼女との背丈の差は少し広がり、今では俺は彼女を見下ろしている。

そのことに軽い驚きを感じつつも、彼女の言葉を待つ。

「ケイト……ん……何でもない」

普段通りに見えるが少し元気がない。

長年の感覚でそれはわかるのだが、原因まではわからない。

再び歩きだしたクルスに歩調を併せながら思考を巡らせるが、理由には思い至らなかった。本人に直接的に聞いても教えてはくれないだろう。他の方法を考えるしかない。

「クルス。手、繋いでいい？」

「あ、うんっ！」

二人きりなのを思い出し、声を掛けるとクルスは嬉しそうに自分から俺の手を取ってくれた。

日、一日事に彼女は大人に近付き、美しく成長しているが、こういう時の表情はまだまだ子供っぽい。それも可愛いと思うのだけど。

彼女の手は柔らかくは無い。剣を振るため、皮も所々剥けていて女性らしいとは言えない手だ。戦いでは前衛に立つ為に小さな傷跡も多い。でも、とても暖かいと思う。

「この国、ピアース王国と全然違うね」

「うん。変な国」

外国の人間であり、肌の色が異なる俺達は目立つ。人通りも多い為、周囲から視線は受けるが俺はあまり気にしなかった。クルスも恥ずかしそうにはしていたが、それでも手を離す様子はない。

彼女の常識は長年過ごしてきたクルト村のものだ。
だから余りにそれとは異なるこの国は『変な国』に見えるのだろ
う。

「村に残ったマイルスにも見せたかったな」
「多分、怒り狂う。間違いなくケイトより早く喧嘩してる」

くすくすとクルスは小さく笑い、俺も同意するように頷いた。
村に残った親友の性格を考えると、間違いないと俺も思う。

「でも、絶対楽しかったと思う」

俺はそう続けた。きっと仕方なさそうに俺は彼を止め、クルスや
シリアは呆れ、マイルスは反省するように大きな体を縮めるのだろ
う。あいつならウルクとも気が合いそうだ。

「それは少し残念だけど、クルスが来てくれたのは本当に嬉しいん
だ」
「ほんとに？」

自信なさげな彼女に、俺は頷く。
同郷の友人達もバラバラになってしまった。村に残ったマイルスだけではない。

ヘインは学院に残って学び続けており、ホルスは……。彼は恐らく、俺達と道を違えてしまった。共闘することはあっても以前のように、信頼し合ってとはいかないだろう。

一抹の寂しさを感じながらも、俺は冗談めかして笑った。

「こつやつと一緒にいられるし、それにほら、クルスの方が俺より強いしな」

「ん、ケイトは絶対私が守る」

クルスもそれに応えるように、俺の腕を両手で包み込むように抱えて身体を密着させ、他の人には見せない満面の笑みを浮かべる。

悩んでいた部分に関わっている話も混ざっていたのかもしれない。何かに納得が行ったのか表情は明るくなった。

手を繋いだまま買出しを行い、空に朱みが差し始めると、俺達は待ち合わせのために取った宿へ戻った。部屋には既に他の三人も戻っており、床に座って楽しそうにカードで遊びながら談笑している。

「ただいま。それ買ったんだ」
「おかえりっす。いやー、カジノ駄目になっちゃったすからね。代わりっすよ」

荷物を置き、にししつと笑っているウルクは「これで勝ちっ！」とカードを捨て、同時にシーリアと黒い犬は悔しそうな声を上げてカードを宙に放り投げていた。

「あ、だけど例の賭けは私の勝ちね。付き合いの長さが違うわよ」
「えー本当っすか？ う、これは確かに負けっすね。もっと朴念仁と思ったんすけど」
「姐さんの勝ちだな」

クルスの顔を見ながらシーリアが胸を張り、ウルクは財布から銀貨を取り出して、彼女に投げる。シーリアは、にいつと悪そうに笑い、格好付けて片手で取ろうとしたが失敗し、わたわた慌てて拾っていた。

三人で何やら賭け事をしていたらしい。俺が何のことかわからず首を傾げていたが、彼等は教えてはくれなかった。

「それで何か新しいことはわかった？」
「クレイトス商会が穀物を買い込んでいるのはわかったわ」
「他の有力な商会は？」
「それはわかんなかったすね。口が固くて」

異変が起きると考えているクレイトス商会が、穀物を買い込んでいることは商人としてはおかしくはない。問題は他の評議員が経営している商会はどうかだ。

「しかし、支部でちらりと見ただけの人を覚えてるなんて、とんでもない記憶力っすね」

「一度見れば忘れないわ」

ウルクの呆れ混じりの賞賛に、シーリアは得意気に笑った。

クレイトス商会の取引がわかったのは、先日挨拶に行った支部で仕事をしていた職員の姿を、シーリアが穀物市場で数名見付けたかららしい。

「凄いいね。そんなことまで出来るなんて」

「惚れ直した？」

シーリアは得意気に笑い、クルスは「調子乗りすぎ」と、彼女に聞こえるように呟いていた。

「ブーク族の君も仲良くなったようだけど、これからどうするの？」

投げたカードをいそいそ拾い直している黒い犬に、俺は床に腰を下ろしてから問い掛けると、彼は「ふむ」と唸る。

「お主と一緒にいると、楽しいことが沢山起こりそうだからな。暫く世話になるつもりだ」

「楽しいことが沢山起こる？」

「どういうこと？」

クルスも俺の隣で屈んで、犬を覗き込んだ。

「人間はわからぬのか？ ああ、そうか。人間には羽が無いのであった。くくっ……お主は『災厄』なのだと言われてくれるのだ。

これは凄い事よ」

「俺が……災厄？」

「うむっ！ 面白そうではないか？ 今、東で起こっている七色の異変さえもお主に比べれば、ちっぽけな力しか感じない。不思議と近づくまで、私にもわからなかったがな」

彼は二本の足で立ち上がり、楽しそうに俺を指す。

「ただの人間。我らと同じくちっぽけなはずの存在が、どのように災いを引き起こすのか。私も初めての経験だ。いやいや、胸が高鳴るぞ？ 実に面白いではないか」

ブーク族の羽は彼等に天災などの大規模な危険が迫ったとき、鮮やかな色に染まるのだという。果たしてそれはどこまで事実なのか。彼の言葉通りだとすれば。

「俺が災いを引き起こす……?」

純粹で邪気のない目の前の小さな獣人の、楽しそうに瞳を輝かせながらの意外な言葉に、俺は立ち尽くすことしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322q/>

地味な青年の異世界転生記

2011年12月31日21時05分発行